北埋調報　61

伊達市

牛舎川右岸遺跡
稀府川遺跡

——北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書——

平成元年度

財団法人　北海道埋蔵文化財センター

有珠山頂から伊達市を遠望

例　言

1．本書は，北海道縦貫自動車道建設工事にともない，(財)北海道埋蔵文化財センターが平成元年度に実施した，伊達市牛舎川右岸遺跡及び稀府川遺跡（旧牛舎川左岸遺跡）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．調査は，調査部調査第1課が担当した。

3．本書の文責者は，それぞれ文末に記した。遺構図のトレースは和泉田毅，遺物の写真撮影は森岡健治が担当した。

4．遺物の実測・トレースは，木下昭仁，藤内まゆみ，高田京子が行った。

5．実測図の縮尺は，原則として次のとおりである。

遺構　1：40　縄文土器　1：4　擦文土器　1：2　拓本　1：3　剥片石器　1：2　礫石器　1：3

6．遺構等の表記については，次に示す記号を用いた。

竪穴住居跡－H，土壙－P，集石－S，焼土－F

7．出土種子の鑑定は，北海道古植物研究会に依頼した。

8．放射性炭素による年代測定は，京都産業大学山田治教授に依頼した。

9．獣魚骨片の同定は，早稲田大学金子浩昌氏の鑑定による。

10．出土資料は，一括して伊達市教育委員会に保管する。

11．調査にあたっては，伊達市教育委員会の協力を得た。また，次の機関及び人々の指導・助言をいただいた。(順不同・敬称略)

上ノ国町教育委員会，南茅部町教育委員会

仁木行彦，内山真澄，宮　宏明，加藤邦雄，上野秀一，羽賀憲二，高橋正勝，直井孝一
園部真幸，稲垣和幸，大谷敏三，田村俊之，古原敏弘，瀬川拓郎，大場靖友，古屋敷則雄
藤島一己，川内　基，西本豊弘，新美倫子，佐藤孝雄，深沢百合子，松田　功，大井晴男
林　謙作，菊地俊彦，天野哲也，吉崎昌一，横山英介，百々幸雄，大島直行，石田　肇
松村博文，鶴丸俊明，北沢　実，松崎水穂，斉藤邦典，小笠原忠久，阿部千春，鍋島直久
鈴木耕榮，矢野牧夫，山田悟郎，野村　崇，平川善祥，出利葉浩司，右代啓視，街道重昭
小笠原善範，宇部則保，村木　淳，三浦圭介，岡田康博，森田知忠，上屋真一，松谷純一
豊原熙司，上坂　勉，岩倉　繁，浅利友市，細川茂雄，斉藤清一，野田勝仁，阿部勝雄，
菅原政満，矢元保志，矢元　武

目　次

口絵
例言
I　調査の概要……1
1．調査要項……1
2．調査体制……1
3．調査に至る経緯……2
II　遺跡の位置と環境……4
1．地形・地質……4
2．歴史的環境……7
3．周辺の遺跡……9
III　調査の方法……17
1．調査の方法……17
(1) 牛舎川右岸遺跡……17
(2) 稀府川遺跡……19
2．土層……21
3．遺物の分類……23
(1) 土器……23
(2) 石器等……24
IV　牛舎川右岸遺跡……25
1．調査の概要……29
2．遺構……36
(1) 近世遺構……36
(2) 縄文時代の遺構……38
3．包含層出土の遺物……47
(1) 土器……47
(2) 石器・石製品……63
4．まとめ……77
(1) 土器……77
(2) 石器……81
写真図版……87
V　稀府川遺跡……107
1．調査の概要……111

2．遺構……121
(1) 住居跡……121
(2) 土壙……141
(3) 集石遺構……143
(4) 焼土……144
3．包含層出土の遺物……167
(1) 土器……167
(2) 石器等……189
(3) その他……207
4．まとめ……217
(1) 遺構……217
(2) 土器……218
(3) 石器・土製品……229
写真図版……233
VI 自然科学的分析……273
1．植物遺体の概況……273
2．液体シンチレーション炭素年代測定結果……275
3．牛舎川右岸遺跡・稀府川遺跡の火山灰……276
引用・参考文献……281

挿図目次

図Ⅰ－1 遺跡位置図……3
図Ⅱ－1 遺跡周辺の地形分類……5
図Ⅱ－2 新発見遺跡の位置……12
図Ⅱ－3 新発見遺跡採集遺物……13
図Ⅱ－4 稀府川遺跡野田地点の位置……14
図Ⅱ－5 野田地点採集遺物……14
図Ⅲ－1 グリッド設定図と調査地区（牛舎川右岸遺跡）……18
図Ⅲ－2 グリッド設定図と調査地区（稀府川遺跡）……20
図Ⅲ－3 土層模式柱状図……21
図Ⅳ－1 牛舎川右岸遺跡周辺の地形と道路工事予定地……27
図Ⅳ－2 土層図……31
図Ⅳ－3 遺構位置図……31
図Ⅳ－4 縄文時代の遺構位置図……35
図Ⅳ－5 近世遺構……37
図Ⅳ－6 Ｈ－１……38
図Ⅳ－7 Ｈ－１遺物出土位置・遺物……39
図Ⅳ－8 Ｐ－１・Ｐ－２……40
図Ⅳ－9 焼土(1)断面図……42
図Ⅳ－10 焼土(1)……43
図Ⅳ－11 焼土(2)……44
図Ⅳ－12 焼土分布図……45

図Ⅳ－13　土器分布図（個体別）……53
図Ⅳ－14　包含層出土の土器(1)……54
図Ⅳ－15　包含層出土の土器(2)……55
図Ⅳ－16　包含層出土の土器(3)……56
図Ⅳ－17　包含層出土の土器(4)……57
図Ⅳ－18　包含層出土の土器(5)……58
図Ⅳ－19　包含層出土の土器(6)……59
図Ⅳ－20　包含層出土の土器(7)……60
図Ⅳ－21　包含層出土の土器(8)……61
図Ⅳ－22　包含層出土の土器(9)……62
図Ⅳ－23　包含層出土の石器(1)……66
図Ⅳ－24　包含層出土の石器(2)……67
図Ⅳ－25　包含層出土の石器(3)……68
図Ⅳ－26　包含層出土の石器(4)……69
図Ⅳ－27　包含層出土の石器(5)……70
図Ⅳ－28　包含層出土の石器(6)……71
図Ⅳ－29　包含層出土の石器(7)……72
図Ⅳ－30　Ⅲ群土器分布図（個体別）……79
図Ⅳ－31　石器組成グラフ……82
図Ⅳ－32　石器分布図
（石鏃・石槍・石錐）……83
図Ⅳ－33　石器分布図
（スクレイパー）……84
図Ⅳ－34　石器分布図（石斧・敲石
・砥石・擦石・石製品）……85
図Ⅳ－35　石器分布図（剥片・チップ）‥86
図Ⅴ－1　稀府川遺跡周辺の地形と道路
工事予定地……109
図Ⅴ－2　白頭山－苫小牧火山灰層
模式図……113
図Ⅴ－3　第Ⅴ層上面（Us－b下面）
の地形と遺構位置図……115
図Ⅴ－4　第Ⅶ層上面の地形図……117
図Ⅴ－5　メインセクション図
（Nライン西面）……119
図Ⅴ－6　H－1実測図……123
図Ⅴ－7　H－1出土遺物（土器）‥‥125
図Ⅴ－8　H－1出土遺物
（石器・土製品）……126
図Ⅴ－9　H－2実測図……128
図Ⅴ－10　H－2出土遺物（土器）‥‥129
図Ⅴ－11　H－3実測図……130
図Ⅴ－12　H－4実測図……132
図Ⅴ－13　H－4出土遺物（土器）‥‥133
図Ⅴ－14　H－5実測図……135
図Ⅴ－15　H－5出土遺物
（土器・石器）……136
図Ⅴ－16　H－6出土遺物
（土器・石器）……138
図Ⅴ－17　H－6実測図……139
図Ⅴ－18　P－1実測図……141
図Ⅴ－19　P－2実測図……141
図Ⅴ－20　P－3実測図……141
図Ⅴ－21　P－4実測図……142
図Ⅴ－22　P－5実測図……142
図Ⅴ－23　P－6実測図……142
図Ⅴ－24　P－7実測図……143
図Ⅴ－25　P－8実測図……143
図Ⅴ－26　集石遺構実測図……145
図Ⅴ－27　集石遺構出土遺物（土器）・145
図Ⅴ－28　焼土の規模……146
図Ⅴ－29　焼土位置図……147
図Ⅴ－30　焼土実測図(1)……149
図Ⅴ－31　焼土実測図(2)……150
図Ⅴ－32　焼土実測図(3)……151
図Ⅴ－33　焼土実測図(4)……152
図Ⅴ－34　焼土実測図(5)……153
図Ⅴ－35　焼土実測図(6)……154
図Ⅴ－36　焼土実測図(7)……155
図Ⅴ－37　焼土実測図(8)……156

図Ⅴ－38　焼土実測図(9)……157
図Ⅴ－39　焼土出土遺物(1)……159
図Ⅴ－40　焼土出土遺物(2)……160
図Ⅴ－41　包含層出土の土器(1)……173
図Ⅴ－42　包含層出土の土器(2)……174
図Ⅴ－43　包含層出土の土器(3)……175
図Ⅴ－44　包含層出土の土器(4)……176
図Ⅴ－45　包含層出土の土器(5)……177
図Ⅴ－46　包含層出土の土器(6)……178
図Ⅴ－47　包含層出土の土器(7)……179
図Ⅴ－48　包含層出土の土器(8)……180
図Ⅴ－49　包含層出土の土器(9)……181
図Ⅴ－50　包含層出土の土器(10)……182
図Ⅴ－51　包含層出土の土器(11)……183
図Ⅴ－52　包含層出土の土器(12)……184
図Ⅴ－53　包含層出土の土器(13)……185
図Ⅴ－54　包含層出土の土器(14)……186
図Ⅴ－55　包含層出土の土器(15)……187
図Ⅴ－56　包含層出土の土器(16)……188
図Ⅴ－57　包含層出土の石器(1)……193
図Ⅴ－58　包含層出土の石器(2)……194
図Ⅴ－59　包含層出土の石器(3)……195
図Ⅴ－60　包含層出土の石器(4)……196
図Ⅴ－61　包含層出土の石器(5)……197
図Ⅴ－62　包含層出土の石器(6)……198
図Ⅴ－63　包含層出土の石器(7)……199
図Ⅴ－64　包含層出土の石器,
土・石製品(8)……200
図Ⅴ－65　包含層出土の石器(9)……201
図Ⅴ－66　一括出土剝片(1)……202
図Ⅴ－67　一括出土剝片(2)……203
図Ⅴ－68　一括出土剝片(3)……204
図Ⅴ－69　一括出土剝片(4)……205
図Ⅴ－70　一括出土剝片(5)……206
図Ⅴ－71　泥めんこ・銅銭……207
図Ⅴ－72　土器分類別分布図(1)……221
図Ⅴ－73　土器分類別分布図(2)……222
図Ⅴ－74　土器分類別分布図(3)……223
図Ⅴ－75　土器分類別分布図(4)……224
図Ⅴ－76　土器分類別分布図(5)……225
図Ⅴ－77　土器分類別分布図(6)……226
図Ⅴ－78　土器分類別分布図(7)……227
図Ⅴ－79　土器分類別分布図(8)……228
図Ⅴ－80　石鏃・石槍およびナイフの
三角図……229
図Ⅴ－81　石器分布図(1)……230
図Ⅴ－82　石器分布図(2)……231
図Ⅴ－83　構成比……232
図Ⅵ－1　牛舎川右岸遺跡の火山灰断面
と試料採取位置……279
図Ⅵ－2　火山灰の鉱物組成……280

Ⅰ　調査の概要

1　調査要項

事　業　名　北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査

事業委託者　日本道路公団札幌建設局

事業受託者　財団法人　北海道埋蔵文化財センター

調 査 期 間　平成元年4月1日～平成2年3月31日

（発掘　平成元年5月8日～10月31日）

（整理　平成元年11月7日～平成2年3月23日）

道教委登載番号	遺　跡　名	所　在　地	調査面積
J－04－66	牛舎川右岸遺跡	伊達市南稀府町307番地ほか	21,523m²
J－04－67	稀 府 川 遺 跡	伊達市北黄金町119-13番地ほか	8,977m²

2　調査体制

財団法人　北海道埋蔵文化財センター　理 事 長　澤　宣彦

専務理事　永田春男

常務理事　竹田輝雄

調査部長　中村福彦

牛舎川右岸遺跡

調査部調査第1課　課　長　鬼柳　彰（発掘担当者）

主　任　三浦正人（　〃　）

文化財保護主事　花岡正光

〃　工藤研治

嘱　託　藪中剛司

稀府川遺跡

調査部調査第1課　主　任　高橋和樹（発掘担当者）

〃　和泉田毅

文化財保護主事　野中一宏（発掘担当者）

〃　谷島由貴

〃　森岡健治

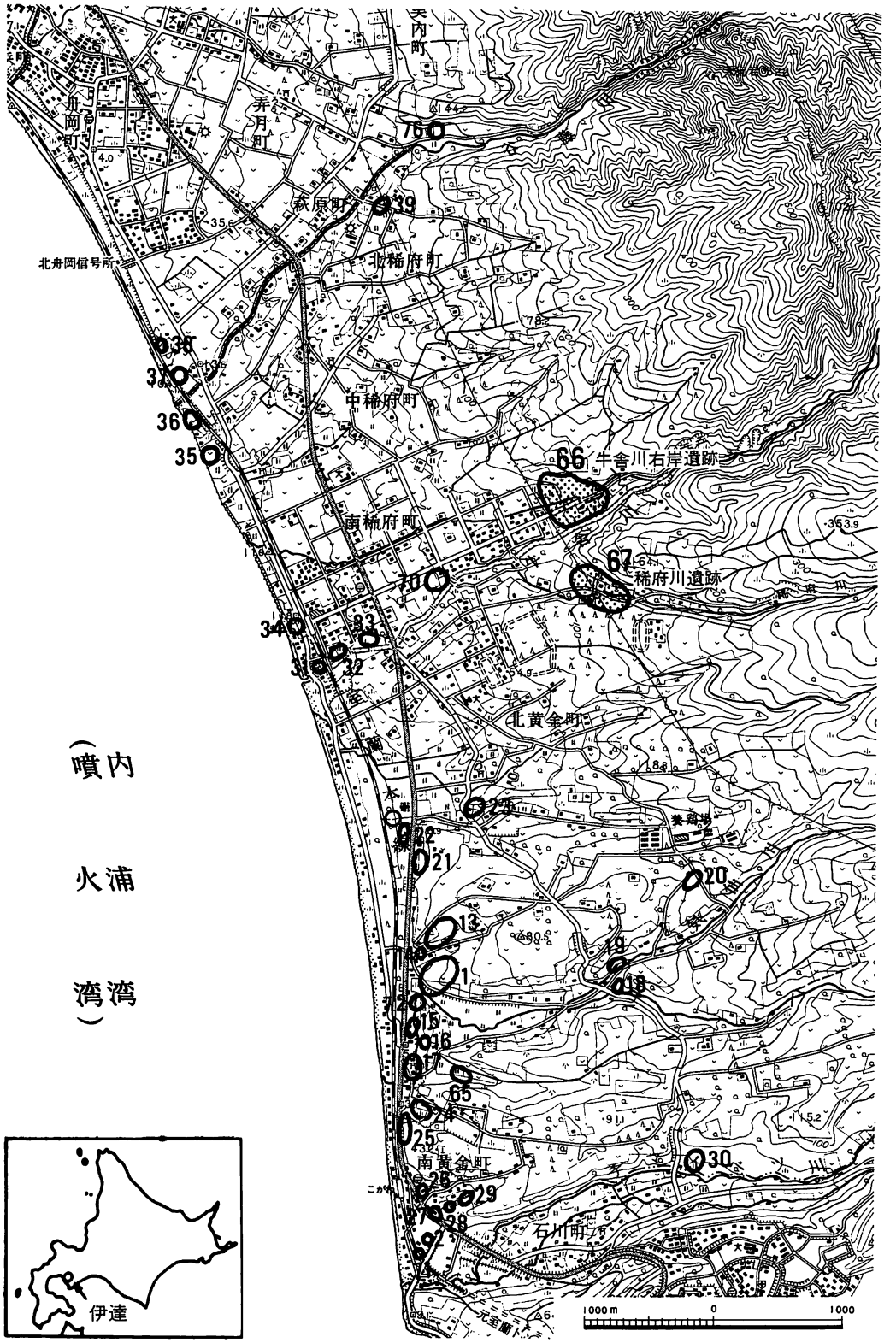
3　調査に至る経緯

北海道縦貫自動車道は，平成元年秋までに深川市から札幌市を経て，室蘭市までが開通しており，さらに，室蘭市から虻田町間の工事が現在，進められている。北海道縦貫自動車道建設用地内の埋蔵文化財発掘調査のうち，当センターが実施したものは，昭和54年度から今年度まで，29の遺跡に及んでいる。

室蘭市～虻田町間の工事予定路線内では，北海道教育委員会が昭和56年度に実施した埋蔵文化財所在確認調査によって，牛舎川左岸(本年度，稀府川遺跡と改称)，牛舎川右岸，谷藤川右岸，紋別川西の4遺跡がかかることが判明，このうち，紋別川西遺跡を除く3遺跡について，昭和62，63年度，当センターは日本道路公団札幌建設局の委託により，包蔵地の範囲及び，内容を把握するための事前発掘調査（試掘調査，対象面積の4％掘開）を実施した。この結果，これらの包蔵地は，縄文時代から擦文時代の遺跡であることが判明，今年度より本格的な発掘調査が始められた。この報告書は，牛舎川右岸遺跡及び稀府川遺跡について，調査の成果を明らかにするものである。

本年度の調査は，これまでの事前発掘調査で判明していた調査対象範囲のうち，牛舎川右岸遺跡では全域について，稀府川遺跡では工事を急ぐ部分の発掘を行った。さらに，両遺跡とも未確定範囲を残していたため，並行して第3次の事前発掘調査を実施した。この結果，牛舎川右岸遺跡では，北端の丘陵下の水田部分に縄文時代晩期から続縄文時代の遺物包含層が確認され，稀府川遺跡では，調査区中央部の住宅跡周辺も包蔵地であることが判明した。今後，さらに調査を必要とする面積は，牛舎川右岸遺跡が6280 m^2，稀府川遺跡が7740 m^2である。

なお，稀府川遺跡は昨年度まで，牛舎川左岸遺跡と称してきたが，支流の稀府川両岸にまたがって立地していることから，改称されたものである。（鬼柳　彰）



（図中の番号はⅡp表1の登載番号に対応する。）　この図は、国土地理院発行の5万分の1地形図「伊達」を複製したものである。

図Ⅰ－1　遺跡位置図

II　遺跡の位置と環境

1．地形・地質

図Ⅰ－2に遺跡周辺の地形分類を示す。山地斜面・火山麓丘陵地・山麓緩斜面・扇状地・沖積低地等が発達している。

山地斜面：標高200―800ｍに発達する急傾斜で谷密度の大きな斜面。紋鼈岳・稀府岳・室蘭岳の山体をなす。村山・上村（1955）によれば，これらの山体は室蘭岳火山群の安山岩質の集塊岩・熔岩から成り，紋鼈岳北東部から稀府岳東部へかけては中新世幌別層の凝灰岩・変朽安山岩から成る。山頂部には平坦面が認められることがある。

火山麓丘陵地：主に室蘭岳の南西から南へかけて分布する標高20―400ｍの緩傾斜の斜面。遠望すると段丘様にみえる。丘陵内ではやや幅の広い谷が発達し，丘陵全体は緩やかな波状起伏を呈する。山地斜面同様，安山岩質の集塊岩・熔岩から成る。丘陵地は，丘頂平坦面，丘腹緩斜面等の地形単位に細分することが可能であるが，縮尺が小さいため図上では一括している。

山麓緩斜面：紋鼈岳の西方で山地斜面に接して発達している。標高30―100ｍに分布する緩傾斜の平滑な斜面である。平均傾斜約5°，安山岩の亜角礫から成る斜面堆積物を載せている。礫層中には堆積ファブリックが認められることがある。この斜面は，周氷河環境下におけるソリフラクションによって形成された可能性がある。

軽石流台地：軽石流堆積物は洞爺カルデラの噴出物である。伊達市街の北から北東へかけて台地をなして広く分布している。火山灰と軽石から成る分級の悪い堆積物である。鈴木ほか（1970）は，洞爺カルデラ噴出物を，下位から上位へⅠ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ，Ⅴの五つに区分している。

扇状地：紋別川・谷藤川・牛舎川の中・下流に広く発達している。後背地に由来する安山岩の砂―円礫から成る。堆積物は分級が悪い。牛舎川の支流である稀府川の下流にも，小規模な扇状地が認められる。

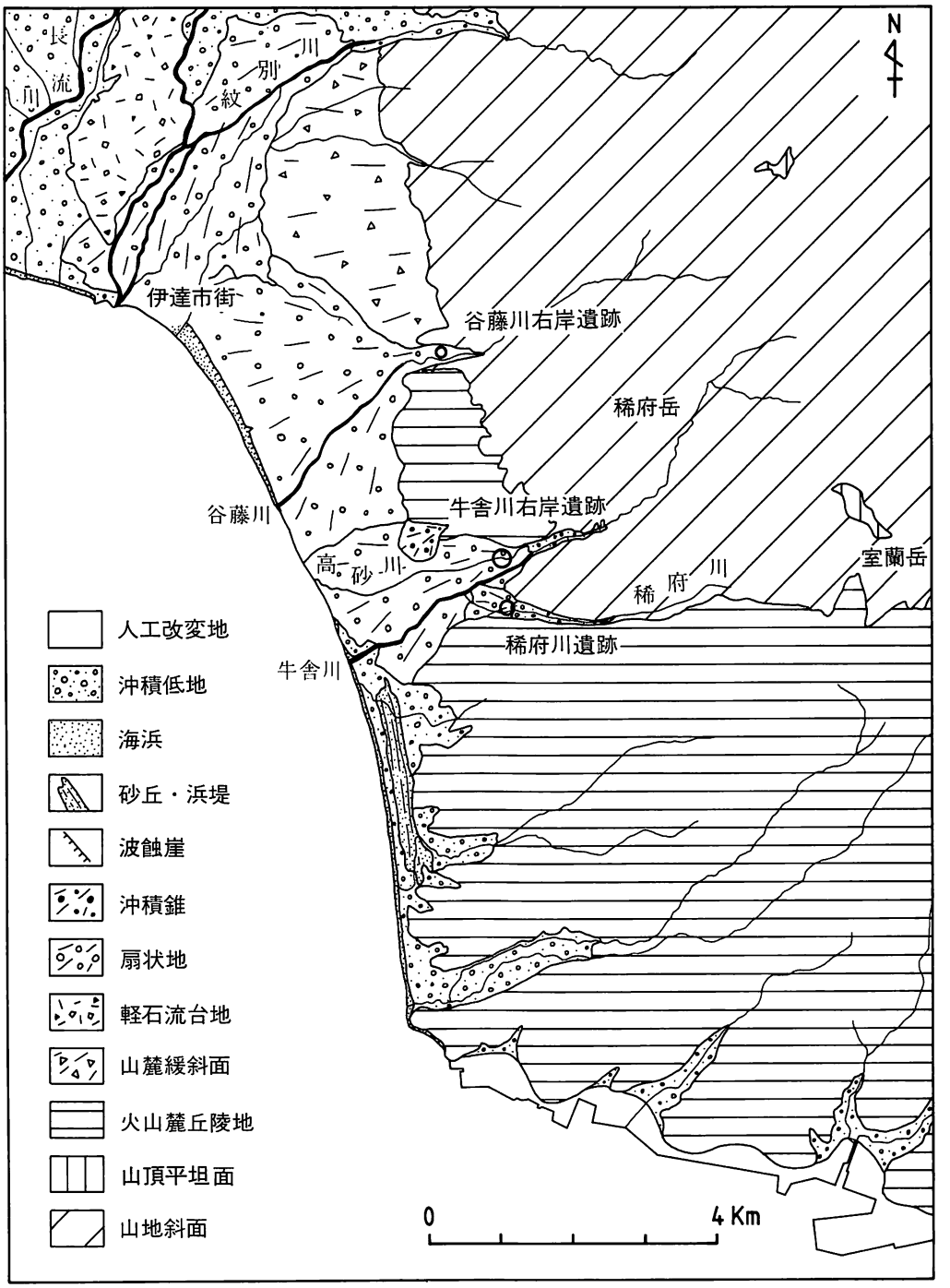
沖積錐：牛舎川右岸地域に認められる。火山麓丘陵地の谷部からの砂礫の押し出しにより形成された錐状地形。

波蝕崖：紋別川河口附近から谷藤川河口へかけて認められる。扇状地の扇端部が侵蝕されたものである。

砂丘・浜堤：牛舎川河口附近から南へ海岸線と平行に発達している。沖積低地との比高4―5ｍの砂層から成る高まりで，二・三列認められる。砂層中には，波浪で打ち上げられたと考えられる軽石円礫が挾在することがある。このような堆積物から成る高まりは浜堤であるが，砂丘砂と区別し難いことが多いので，図には砂丘と浜堤とを区別せず一括して示してある。

海浜：現汀線沿いに狭長に発達する未固結砂から成る地帯。

沖積低地：長流川沿いや牛舎川河口附近から南へかけて発達する低平な地形。一部谷底平野



図II－1 遺跡周辺の地形分類

も含めて図示してある。

人工改変地：海岸部の埋立地。採石・採砂地，鉄道・道路等は図示していない。

以上の地形（人工改変地を除く）を覆って，有珠山起源の降下火山が認められることが多い。扇状地地域では，特に有珠山 b_2火山灰（Us－b_2。横山ほか，1973。）が厚く堆積している。

牛舎川右岸遺跡・稀府川遺跡は，それぞれ牛舎川・稀府川がつくる扇状地の扇頂部に立地している。ともに谷の出口であり，山地斜面・丘陵地に囲まれた地域で，海岸線から約2・5 km内陸にある。

（花岡正光・野中一宏）

引用文献

村山正郎・上村不二雄（1955）：5万分の1地質図幅「西紋鼈」及び同説明書．北海道開発庁．

鈴木　守・松井公平・東　三郎・大場与志男（1970）：伊達町の地質．68 pp．伊達町．

横山　泉・勝井義雄・大場与志男・江原幸雄（1973）：有珠山―火山地質・噴火史・活動の現況および防災対策―．254 pp.，北海道防災会議．

2　歴史的環境

内浦湾（噴火湾）北東沿岸の伊達市付近は，雨量・積雪量ともに少なく，北海道内では比較的温暖な地域として知られている。古くから水産資源に恵まれた所で，江戸時代には現在の伊達市の市域，有珠から千舞別川までは，東蝦夷地有珠場所に属しており，アイヌの人たちによって捕獲されたニシン・タラ・コンブ・イリコなど豊富な海産物が，天然の良港有珠湾に集められたという。

有珠場所の開設は，慶長18年（1613）以前と推定されており，蝦夷三官寺の一つである有珠善光寺の建立時期は，これをさらに，さかのぼるものと考えられている。また，文化2年(1805)，馬匹の生産・改良のために開設された有珠虻田牧場は，北海道に於ける牧畜のさきがけとなった官営牧場である。

伊達市の前身は明治33年，それまでの有珠・長流・西紋鼈・東紋鼈・稀府・黄金蘂の各村[註1)]が合併して成立した伊達村（大正14年より昭和47年まで伊達町）で，村名は明治維新後，仙台藩支藩の亘理藩主伊達邦成主従の士族団体が，この地に移住，開墾にあたったことに由来している。以来，当市は農業，漁業を基幹産業として発展し，今では温暖な気候を生かした蔬菜栽培や養殖漁業も盛んになっている。

今回，発掘調査を実施した2カ所の遺跡の間を流れる牛舎川は，元の稀府村と黄金蘂村の境界にあたる。いずれも明治4年，開拓使の管轄下に発足した村で，稀府村は明治15年まで，今礼稀府村と呼ばれていた。牛舎川の名称は昭和20年ころまで，「オヒルネップ川」であった。

これらの地名の起源は，いずれもアイヌ語である。安政3年(1856)，この地を訪れた松浦竹四郎の『廻浦日記』に，今礼稀府が「イマリマリフ」，黄金蘂が「ヲコンホシベ」，牛舎川河口付近に「ヲヒル子ツフ」[註2)]と記されており，ほかにも，これらに対照できる名称が，川あるいは，河口付近の地名として表わされた同時代の史料[註3)]がある。

牛舎川の旧名について，永田方正著『北海道蝦夷語地名解』には，「O pi rŭn nep　オピルン子ヲ　渦流の川尻」と説明されている[註4)]。　牛舎川という新しい名称は，この川の下流左岸の牧場にあった牛舎に由来するらしい。明治8年，長流川下流域の開墾を進めた農業団体「有珠農社」が，開拓使より1,200円の資金を借り受け，南部地方と道南の大野村から，40頭の牛を購入，ここに黄金蘂牧場を開設した。しかし，営業不振のため，明治13年には旧亘理藩家老田村顕充の経営となった。さらに，明治42年には男爵高橋是清の所有となり今もその一族の人たちによって経営され，高橋牧場として知られている。この牧場には明治時代から，大きな牛舎があったといわれ，これが今の川名の起源となったものと考えられる。

一方，支流の稀府川は江戸時代の史料や，明治から昭和20年代の地図にも，名称が記されていない。土地の人たちの話によると，オヒルネップ川から牛舎川に名称が変ったころ，両者の名称は今と逆だったという。稀府川が流れる牛舎川の南側は，古くは黄金蘂村に，昭和5年以降は字北黄金町に属しており，稀府は本来，牛舎川以北から谷藤川までの地名であること。稀府川に沿って走る市道が，今も「牛舎通り」と呼ばれていること。高橋牧場の位置が牛舎川本

流より支流の稀府川に近いことなどから，本来は，今と反対に本流が稀府川，支流が牛舎川であったことは，ほぼまちがいないものと思われる。

牛舎川右岸遺跡の北西には，松浦竹四郎の『廻浦日記』の絵図に「フウレヒラクンナイ」，記事中に「フレヒラ」，明治31年発行の5万分の1図[註5)]に「フルヒラクシナイ」という地名[註6)]がみえる。この名称はＪＲ稀府駅から牛舎川に平行して走る市道「古平(ふるびら)通り線」にその名を残している。

稀府村は明治13年，伊達家家臣団最終の団体移住者が居を定めた所である。明治29年の5万分の1図[註7)]には，すでに現在と一致する方形に画された道路が示されており，旧紋鼈村を中心とする城下町風の区画とは異なる近代的な測量が行われたことがわかる。市道古平通り線の北側を流れる高砂川は，両岸に石を積み上げた疎水で，明治時代に掘削した灌漑用水である。

牛舎川は明治以来，大雨による被害が重なり，昭和36年の集中豪雨による増水氾濫を契機に国費による恒久的復旧工事が実施された。牛舎川右岸遺跡のあたりも，この時，護岸工事が行われ，砂防ダムがつくられている。

牛舎川をはさむ両遺跡付近は現在，緩やかな西向きの斜面を利用して，広く畑作が行われている。一部では用水や湧水を使用して，水田もつくられている。前述した高橋牧場のほかにも，いくつかの牧場があり，乳牛や競走馬の飼育も盛んである。調査区付近からは，南西に内浦湾をはさんで対岸の駒ケ岳，北方に今も噴煙を上げる有珠山，昭和新山や，遠く羊蹄山を望むことができる。（鬼柳　彰）

註１）西紋鼈村・東紋鼈村は明治15年，それまでの紋鼈村を分割したもの。稀府村は明治15年まで，今礼（禮）稀府村と呼称。黄金薬は昭和5年より黄金(こがね)（伊達町字南黄金と字北黄金）と改称。

註２）高倉新一郎解読（1978）『竹四郎廻浦日記』北海道出版企画センター

註３）寛政3年（1791）の『東蝦夷道中記』に「イマリマレ」，「ヲコンブシベ」，「ヲブルン子フ」とある。（『伊達町史』）
伊能忠敬の『大日本沿海輿地図』に「イマリマリ川」，「ヲヒルン子フ川」とある。
（山田秀三監修，佐々木利和編　1987『アイヌ語地名資料集成』　草風館）

註４）同書には，今礼稀府が「Emauri omarep　エマウリ　オマレプ　苺（イチゴ）アル處」，黄金薬が「O－komp ush be　オコンブシュベ　昆布場」と説明されている。

註５）「北海道假製五万分一図　紋鼈」参謀本部陸地測量部　明治31年

註６）永田方正著（1891）『北海道蝦夷語地名解』に「Hure pira　　夫（赤）崖」と説明されているが，どのあたりの地形を指すのか不明。

註７）「北海道假製五万分一図　紋鼈」陸地測量部　明治29年

3　周辺の遺跡（図Ⅰ－1，表Ⅱ－1）

伊達市では，現在76カ所の埋蔵文化財包蔵地が登載されている。そのうち有珠善光寺跡，有珠・虻田会所跡の2カ所は，先史時代の所産ではなく，これを除く残り74カ所の内訳は，貝塚29カ所，遺物包含地41カ所，チャシ跡4カ所となっている。J－04－10有珠遺跡はアイヌ期の墳墓として登載されているが，続縄文期の貝塚を伴っており，ここでは貝塚のうちに加えた。伊達市の遺跡の実に39%が貝塚ということになる。噴火湾一帯には貝塚が多く，特に湾岸東部に貝塚の集中がみられることは，既に大島直行氏よって指摘されている（大島1984，峰山編1984)。伊達市はこの貝塚密集地帯の中心的な位置を占めており，有珠・若生・北黄金の3地区に大規模な貝塚群を擁している。ここでは，牛舎川右岸・稀府川両遺跡に近接する伊達市南半部の遺跡（図Ⅰ－1，表Ⅱ－1）について概観するが，まず最初に貝塚の変遷がたどれるオコンシベ川下流域の遺跡群について，名取武光・峰山巌両氏の論究（名取・峰山1963，峰山1972）や，金子浩昌氏の説明（金子1986）に従って，簡単にトレースしてみたい。

オコンシベ川下流域は，縄文時代早期には古オコンシベ湾と称される内湾で，台地は直接海に面していた。貝殻文平底土器（上坂式）の段階ではまだ貝塚の形成はなく，縄文海進がピークに達した前期初頭縄文尖底土器（中野式）の段階に至って，北黄金貝塚の最奥部（B地点）にハマグリ，コタマガイ，アサリを主体とする大規模な貝塚がつくられた（第一期ハマグリ時代)。

縄文尖底土器から円筒下層a期にかけての所産とされる茶呑場遺跡（c地点）の貝層は，黒土層によって二分されており，下部貝層ではハマグリ，コタマガイが主体で，マガキの出現率が高まる。上部貝層ではマガキが主体となり，ハマグリ，コタマガイも多い。さらに，北黄金貝塚のA・A′・南斜面の3地点の貝塚（大島・百々ほか1986 a）は，ほぼ同時期の円筒下層b期につくられたと考えられているが，マガキとイガイが主体であり，ハマグリ，コタマガイは極めて稀となる。湾口部に第Ⅲ砂丘が形成され，マガキの絶好の繁殖地となった，高鹹水の潟が発達したのである（第二期カキ時代)。

縄文中期には第Ⅲ砂丘上での生活が開始され，後期初頭余市式土器の段階に至ると，第Ⅲ砂丘上の北黄金5遺跡（D地点）に貝塚がつくられる。貝はアサリとイガイが主で，ハマグリやカキの姿は全くみられない。寒海性のビノスガイが増加し，寒冷化の進行が窺える。後背地にあった入江は既に消滅し，食料資源を求める活動は，第Ⅲ砂丘の前面に開けた海洋に向けられた。第Ⅲ砂丘の外側には引き続き第Ⅱ砂丘が出現し，縄文晩期後半には第Ⅱ砂丘上に北黄金4遺跡（E・E′地点）が営まれる。そして南黄金2遺跡（H地点）などでは，続縄文期，擦文期の文化が繰り広げられた。砂丘の発達とともに貝類の棲息環境が大きく変っていったオコンシベ川下流域では，D地点の貝塚を最後に，貝塚の形成は途絶えた（第三期砂丘発達時代)。

第Ⅱ砂丘の外側には，さらに第Ⅰ砂丘が発達したが，ここでの遺跡の発見はまだない。なお，第三期以降の貝塚の形成は，特に有珠地区で顕著となり，その変遷が追究されている（峰山1972，福田1983)。古ウス湾は，海退と砂丘の発達によって面積を狭めながらも消滅せず，魚貝

類の棲息に恵まれて，貝塚の繁栄をみたのである。

このような大貝塚に代表される遺跡群の消長とはまた別に，谷藤川，牛舎川，北黄金川，チマイベツ川など，中小の河川沿いでは，大きな貝塚を伴わない遺跡群の分布がみられる。有珠山の火山灰に厚く覆われて，未だに発見されていない遺跡が少なからずあるにせよ，一般に，下流域から海岸部にかけては遺跡の数が多く，内陸の中流域から上流域に向うにつれ遺跡が稀薄となる傾向は，図Ⅰ－1，表Ⅱ－1によっても容易に看取される。

中小河川の流域における遺跡群の様相を知るために，本調査も含めて中流域の3カ所の遺跡が発掘されている牛舎川流域の例を，次に取り上げたい。

牛舎川下流域にある南稀府1～4遺跡は，いずれも発掘例がなく詳細は不明だが，分布調査の際に，縄文中期から後期の遺物が検出されている（峰山・大島 1979）。また，地元の人々の話では，稀府駅近傍の畑などから，これまでにかなりの量の遺物が採集されているらしく，下流域に遺物を豊富に包含する大規模な遺跡があることは想像に難くない。

中流域の南稀府5遺跡は，昭和57年度に高校建設に伴う発掘調査が実施された。その結果，縄文早期から続縄文期に至る比較的多量の遺物が得られたが，遺構としては石組炉1基，土壙23基，焼獣骨1カ所が見出されただけで，竪穴住居跡などの発見はなく（大沼ほか 1983），キャンプ・サイト的な性格が強い遺跡と考えられる。

今回，さらに上流の牛舎川右岸遺跡と支流稀府川沿いの稀府川遺跡とを調査した。後述するように，両遺跡に共通して縄文早期から擦文期に及ぶ遺物があり，牛舎川右岸遺跡では縄文中期後半の竪穴住居跡が1軒，稀府川遺跡からは縄文後期末や晩期末の6軒の竪穴住居跡が検出されている。それらの段階では，一定期間の居住があったことは確実であり，竪穴住居がつくられたという事実は，それなりに内陸部の資源の積極的な利用が図られたことを意味するに違いない。しかし，後章に報告するように，定住的な，長期間にわたる集落の存続があったとは想定できないのであり，牛舎川流域における遺跡群の在り方から敷衍して，現時点では，中小河川の中流域に所在する遺跡は，狩猟・採集などの場における季節的な活動の拠点であり，母村的な集落は，下流域から海岸部に営まれていた可能性が強いと考えたい。

牛舎川右岸遺跡および稀府川遺跡からは，縄文早期から続縄文期，擦文期に至るまでの遺物が検出されており，いつの時代にも内陸部における生業が，重要なウェイトを占めていたものと理解される。ところが，縄文前期に限っては，内陸部に活動の痕跡が乏しく，中小河川の下流域にもどの程度集落があったのか，情報が不足である。或は，古オコンシベ湾に入江が発達し，魚貝類の生産が豊かであった時代には，人々は湾岸部に群居し，内陸部に資源を求めて活動する必要など，あまりなかったのであろうかと疑われるほどである。

ところで，今年度の調査期間中に，新たに遺跡が1カ所発見された。図Ⅰ－1には＊印を付してその位置を示し，表Ⅱ－1には未命名の新発見遺跡として掲載したが，その概要について次に報告する。また，稀府川遺跡のうちに含まれるが，調査区外の縄文晩期初頭の資料を多出する地点についても，合わせて紹介しておきたい。（高橋　和樹）

表II－1　伊達市南東部（谷藤川～千舞鼈川）遺跡一覧

地区	立地			遺跡			時代				備考	文献
	位置	地形	標高m	登載番号	名称	種別	縄文	続縄文	擦文	中・近世		
谷藤川流域	下流域～海岸部	海岸段丘（砂丘？）	6	J-04-35	北稀府1遺跡	遺物包含地		続縄文				峰山・大島1979
			7	36	北稀府2 〃	〃	後期					〃
			10	37	萩原1 〃	〃					黒曜石製コア	〃
			10	38	萩原2 〃	貝塚	早・後期(余市式)	後北式			貝層15×20cm	〃
	中流域	丘陵緩斜面	70	39	北稀府3 〃	遺物包含地	縄文					〃
		河岸段丘	100	76	谷藤川右岸〃	〃	早・中期	後北式				（北埋調報64）
牛舎川流域	下流域～海岸部	海岸段丘	6	31	南稀府1 〃	〃	後期					峰山・大島1979
			15	32	南稀府2 〃	〃	後期					〃
			20	33	南稀府3 〃	〃	後期					〃
			10	34	南稀府4 〃	〃	中期					〃
	中流域	扇状地（扇央部）	40	70	南稀府5 〃		早・中・後・晩期	恵山・後北式			石組炉、土坑	大沼ほか1983
		扇状地（扇頂付近）	80	66	牛舎川右岸〃		早・中・晩期	後北式	擦文		竪穴住居跡・土坑	本報告書
			100	67	稀府川（旧称牛舎川左岸）		早・前・中・後・晩期	恵山・後北・北大	擦文		竪穴住居跡・土坑	〃
北黄金川流域	下流域	砂丘	10	（未登載）	（未命名）		晩期				新発見、図1＊印	〃
		海岸段丘	15	21	北黄金8遺跡	遺物包含地	後期（余市式）					峰山・大島1979
			15	22	北黄金9 〃	〃	後期（余市式）					〃
			15	23	北黄金10 〃	〃	縄文				土器片、黒曜石片	〃
気仙川（オコンシベ川）流域〔古オコンシベ湾〕	下流域（湾口部）	砂丘 第II砂丘	6	15	北黄金4 〃	〃	晩期				E・E′地点	名取・峰山1963
			10	17	南黄金2 〃	〃		恵山式	擦文・土師器		H地点	〃
		砂丘 第III砂丘	10	14	北黄金3 〃	〃	晩期					峰山・大島1979
			10	16	北黄金5 〃	貝塚	中・後期(余市式)				D・D′地点	名取・峰山1963
			12	72	南黄金13 〃	遺物包含地	晩期					
		海岸段丘（北岸）	10～25	1	北黄金貝塚	貝塚	早・前・中期				A・A′・B・南斜面貝塚	大島・百々ほか1986
			15～30	13	北黄金2（茶呑場遺跡）	貝塚	前・中期				C地点貝塚	名取・峰山1963
		海岸段丘（南岸）	10	24	南黄金4遺跡	遺物包含地	後期				G・G′地点	〃
			25	25	南黄金5 〃	〃	早・中期					峰山・大島1979
			15	65	南黄金11 〃	〃					黒曜石片	〃
	中流域	丘陵低位面	35	18	南黄金3 〃	〃	縄文				〃	〃
			40	19	北黄金6 〃	〃	〃				〃	〃
	上流域	丘陵緩斜面	80	20	北黄金7 〃	〃	〃				黒曜石製ポイント	〃
チマイベツ川流域	下流域～海岸部	砂丘	10	2	南黄金 〃	貝塚	後期	恵山式			大半が壊滅	〃
			10	71	南黄金12 〃	貝塚				アイヌ期		
		海岸段丘	12	26	南黄金6 〃	遺物包含地	後期					峰山・大島1979
			12	27	南黄金7 〃	〃	縄文				土器片・石冠	〃
			25	28	南黄金8 〃	〃	〃				土器片、黒曜石片	〃
			25	29	南黄金9 〃	貝塚		続縄文			小規模な貝塚	〃
	中流域	丘陵低位面	50	30	南黄金10 〃	遺物包含地	後期（余市式）					〃

新発見の遺跡について

遺跡の位置・現況（図II－2）

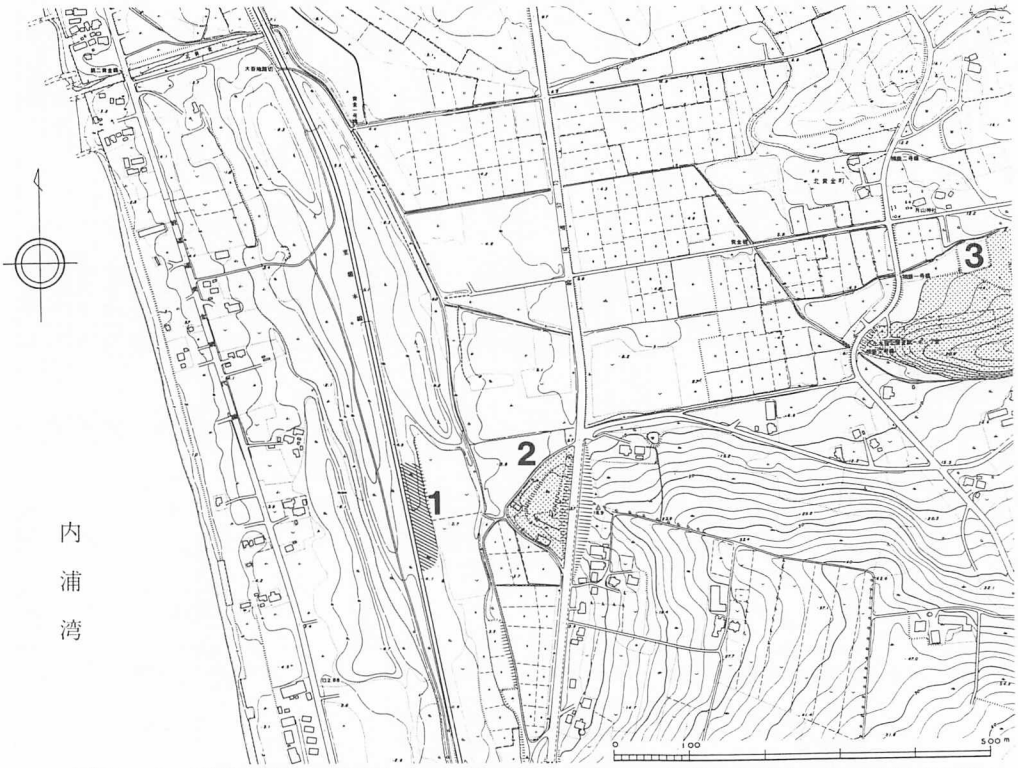
本遺跡は1989年10月，牛舎川周辺の地形調査中に新たに発見したものである。

伊達市南部，北黄金の茶呑場台地西端に位置する北黄金9遺跡（道教委　登載番号J－04－22）より北西約200mの海岸砂丘上に位置する。砂丘面東側の一部が畑地のためカッティングされており，その周辺約30mの範囲に遺物が散布していた。遺跡は砂丘上にも広がるものと予想される。現在，砂丘上は雑木林となっており，砂丘の西側には室蘭本線が敷設されている。

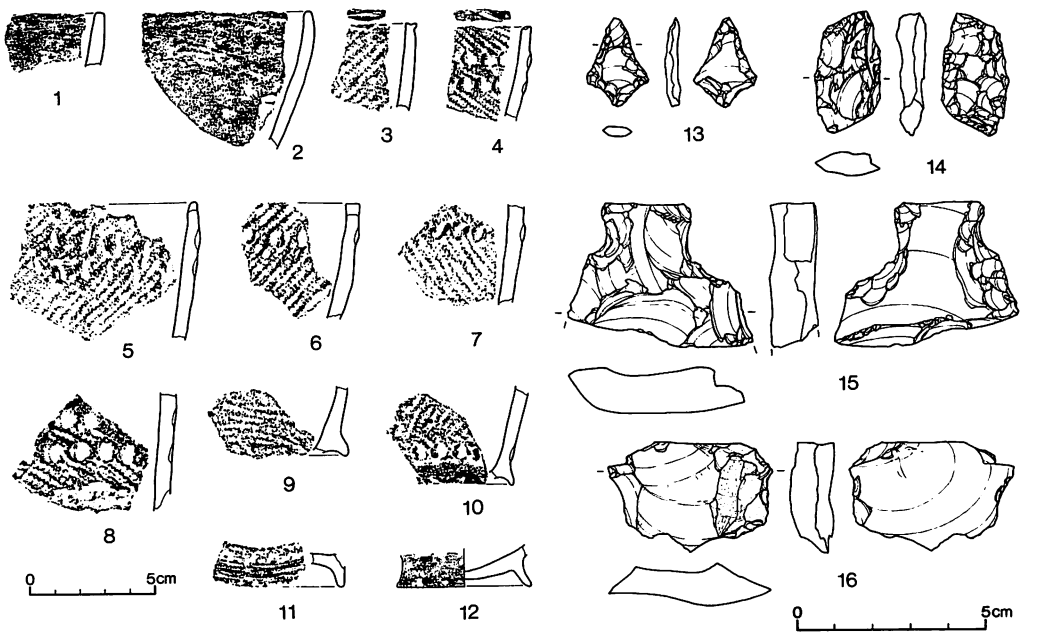
表面採集資料（図II－3）

採集した資料は土器105点，石器9点である。おもなものを図示した。1～12は縄文時代晩期初頭の土器で，採集して資料は全てこの時期のものである。1，2は無文，3～8は爪形文が施されている。5は口縁部が小波状を呈する。6も波状を呈するかもしれない。9～12は底部破片，いずれも上げ底状を呈し，10は爪形文が施される。13～16は石器で，いずれもこの土器群に共伴するものと考えられる。13は菱形の石鏃で両面ともに周縁部にのみ調整を加えている。14は削器で，両面に調整が加えられている。15は半分以上欠損しているが，石匙であろう。裏面には一次剥離面が残される。16は剥片で原石面を残す。石質はいずれも頁岩である。

（藪中　剛司）



図II－2　新発見遺跡の位置　（1　新発見の遺跡，2　北黄金9遺跡，3　北黄金10遺跡）



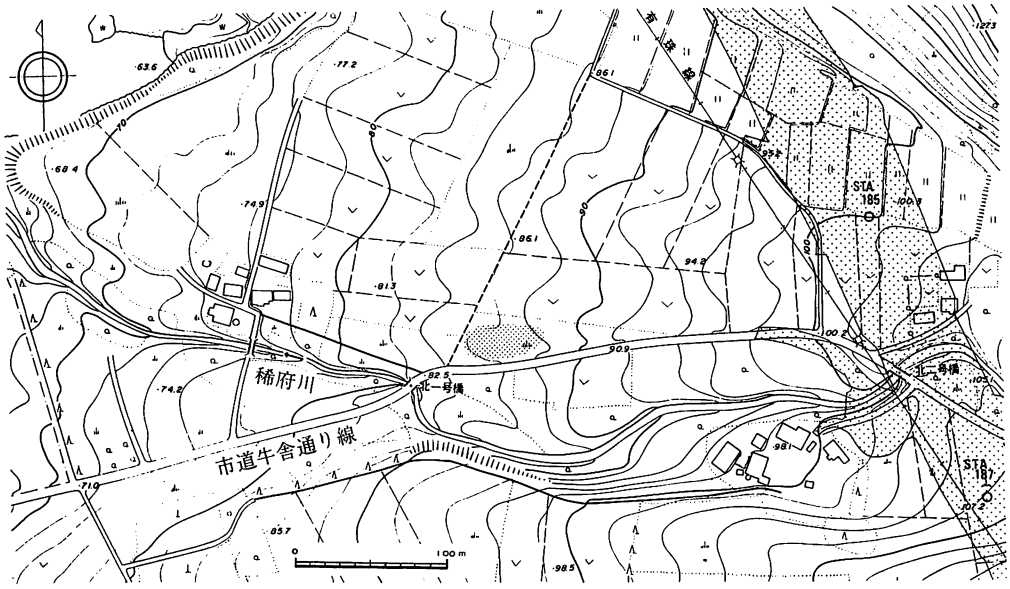
図II－3　新発見遺跡採集遺物

稀府川遺跡野田地点（図II－4・5）

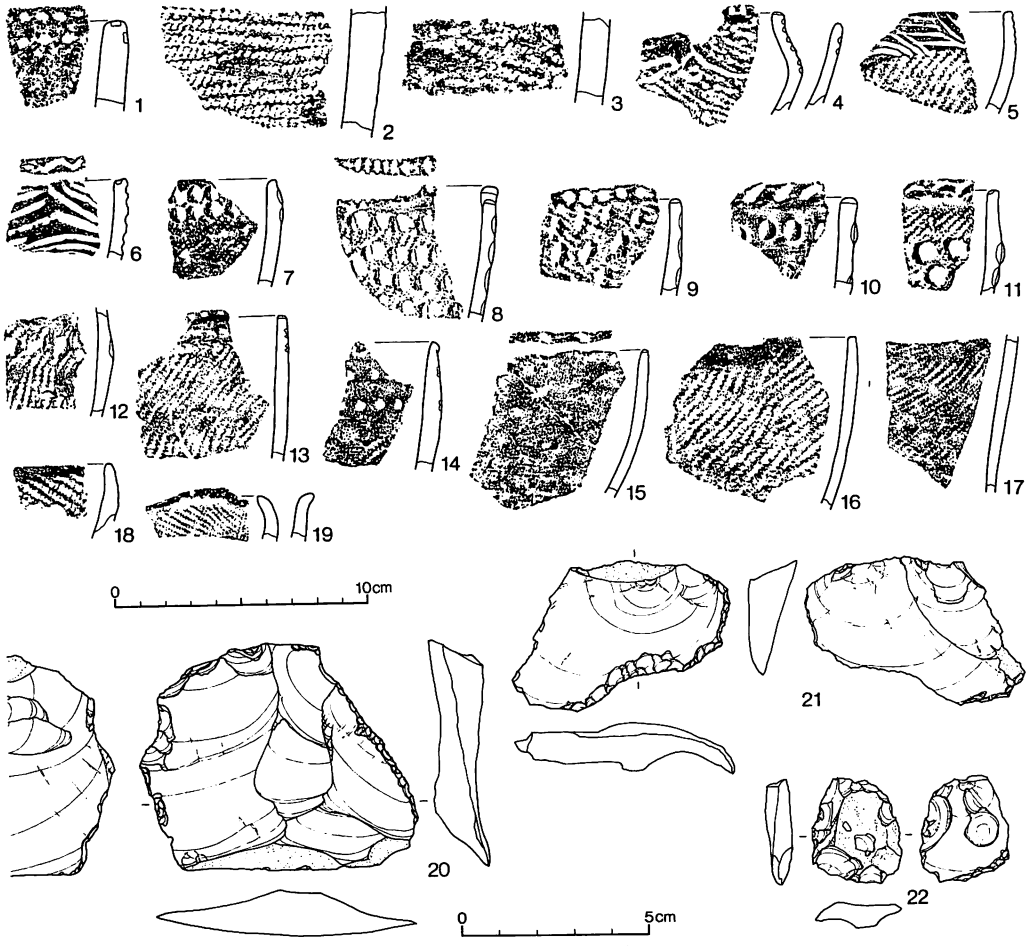
稀府川遺跡は，稀府川の両岸一帯に広く分布する包蔵地で，図II－2の標高80 mより上の扇状地部分は，ほぼ全域がその範囲に含まれるものと推定される。時期的には縄文早期から擦文期にまで及ぶが，今回の調査区内には類例が少なかった縄文晩期初頭の拠点の存在が知られたので，そこを土地所有者にちなんで野田地点と仮称し，ここに紹介する。

野田地点は，調査区の西方約250 m，北一号橋に近い，標高86～88 m程の，稀府川に並行する自然堤防上の微高地に位置し，地番は，伊達市北黄金町106－5，野田勝仁氏所有の畑地である。偶々，清子夫人が発掘作業員として手伝ってくれた関係で，野田地点の教示と採集遺物の提示が得られたものであり，以下に遺物の代表例を掲載する。

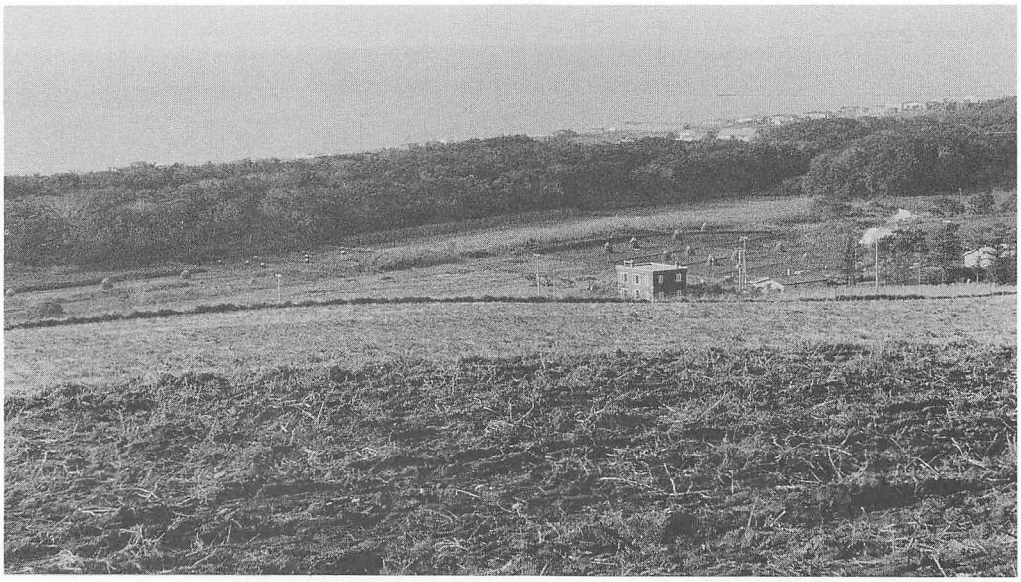
図II－5－1は，円形の刺突文列を有する縄文中期後半の土器片，2・3は，横走縄文が施されたやや厚手の破片で，後期初頭に位置づけられよう。4～19がほぼ縄文晩期初頭の野田地点を特徴づける資料である。4は口縁突起部が内屈し，入組状の曲線文と刺突文などがあるもの。5・6は，口縁部に地文がなく，沈線が連弧状や横位に重ねられたもの。7～12は，爪形文がある土器で，口唇上に刻みのみられる例が多い。13・14は，刺突文列が2段施された口縁片。15・16は鉢形土器で，15の口唇には刻みが加えられている。17は焼成堅緻な胴部片。18.19は縄文の施された口縁片で，19の口縁は指頭で押圧されており，細い縦の沈線もみられる。20～22は，いずれも裏面に一次剥離面を残す剥片を素材としたスクレイパーで，側縁の一部に調整剥離が加えられている。材質は珪質頁岩で，22は赤紫色を呈する。　　（高橋　和樹）

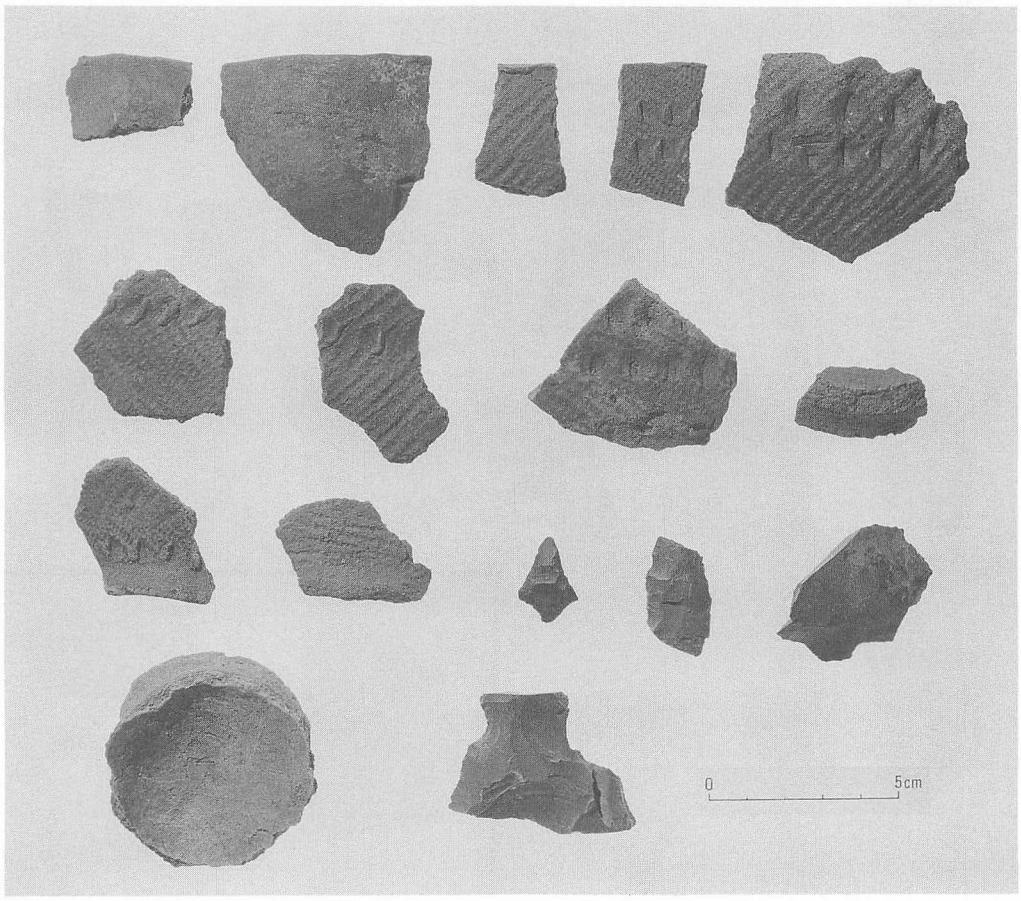


図II－4　稀府川遺跡野田地点の位置

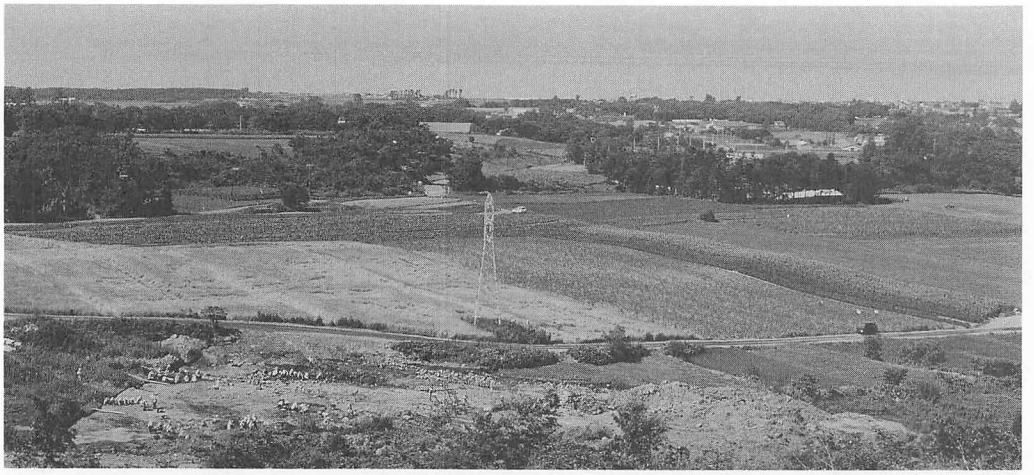


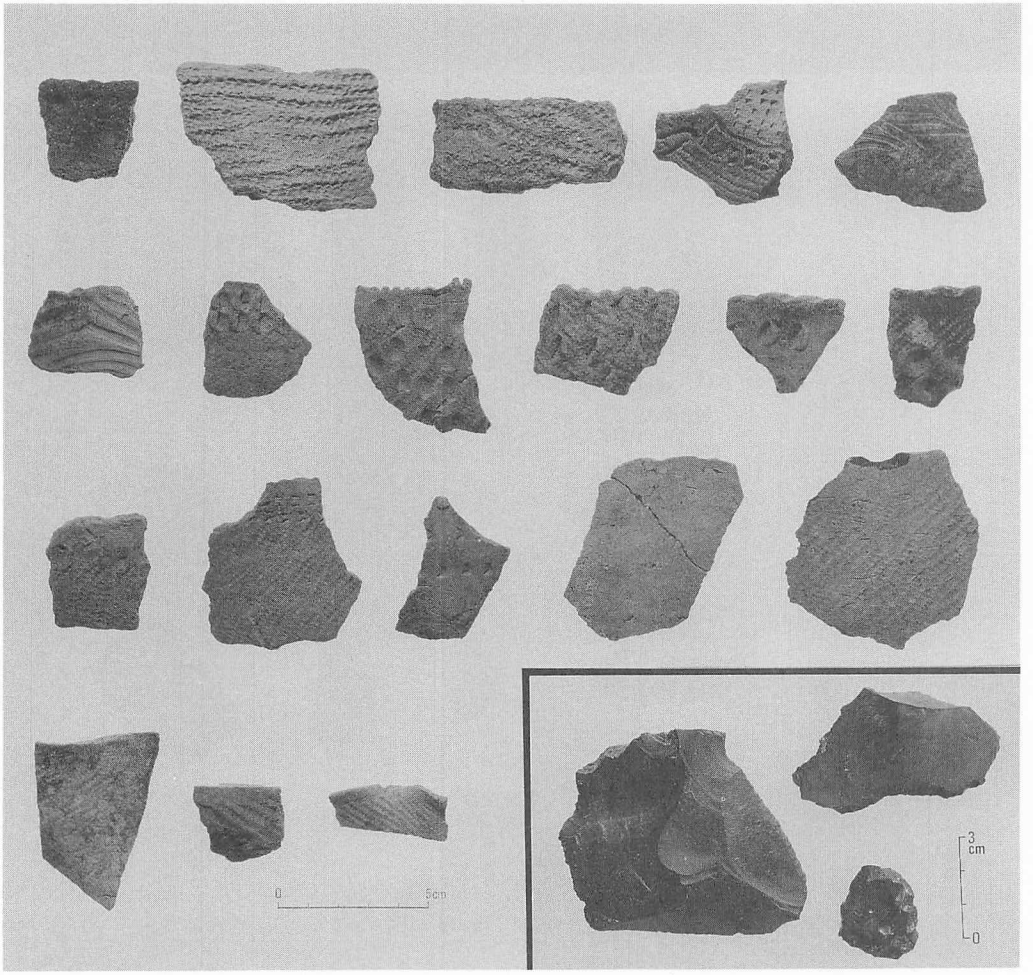
図II－5　野田地点採集遺物





新発見の遺跡と遺物





稀府川遺跡野田地点と遺物

III　調査の方法

1　調査の方法

(1)　牛舎川右岸遺跡

北海道縦貫自動車道建設用地のセンター杭，ＳＴＡ178とＳＴＡ180を通る線及び，ＳＴＡ180で，これに直交する線を基軸として，調査区全域に一辺10ｍのグリッドを設定した。各グリッドは，それぞれ北東角を通る線のアラビア数字とアルファベットの組み合せで呼称する。

遺物のとり上げ等にあたっては，この10ｍグリッドを，4分割して5mグリッドとし，北東からａ・ｂ・ｃ・ｄの記号を付した。（5ｍグリッドの呼称　例Ｍ－20－ａ）

発掘にあたっては，室蘭工事事務所と協議を行い，工事工程が優先される部分から，作業を進めた。

昭和62・63年度の事前発掘調査の結果から，遺構・遺物の密度が濃く，耕作土から近世のものが出土することが予想された調査区南西部の約3,000 m²については，表土から人力によって調査を進めたが，これ以外の範囲については，耕作土及び第2層の火山灰上半までを重機によって除去した。また牛舎川から市道古平通り線の間のうち，北東部の遺物包含層が削平されている部分，および南西部で出土遺物がきわめて少ない範囲については，第5層の掘り下げを対象面積の25%ないし50%に留めた。市道以北の調査区でも，出土遺物が極端に少ないものと判断された部分は，第5層の掘り下げを実施しなかった。

第3層以下には，こぶし大から人頭大を超える安山岩礫が大量に混入しており，発掘作業に困難を生じたため，調査区のほぼ全域において，調査終了グリッドに順次，礫を移動しながら調査を進めた。

遺物は一部を除いて，出土位置及びレベルを記録した。第6層上面のレベルは，調査区全域において，2.5ｍの間隔で記録した。

出土遺物の水洗及び注記は，現場で実施。また，焼土の一部と遺構覆土の一部について，植物種子，骨片等を検出する目的で，水洗及びフローテーションを行った。　　（鬼柳　彰）

(2) 稀府川遺跡

稀府川遺跡における調査方法は，牛舎川右岸遺跡のそれと基本的に同一である。発掘区には，STA185とSTA187とを結ぶ直線を基軸とし，これと直交する軸の起点をSTA187に置いた，10×10mメッシュを設定，基軸がMで，STA187が90となるよう，アルファベット，アラビア数字を付して，各グリッドを表示した。調査は，この基本グリッドをさらに4分割した，5×5mのサブ・グリッド単位で実施した。

工事計画とのかねあいで，発掘区は幾つかの地区に分割され，優先順位とそれぞれのタイムリミットが指定されたため，できる限りその要望をいれてスケジュールを立て，順次調査を進めた。ところが，9月中旬頃までには仮橋を架設して切廻す予定だった市道牛舎通り線の迂回路造成工事が大幅に遅れ，北二号橋から東の市道部分の調査は，10月中旬近くまで着手できなかった。ここが今回，最も遺構，遺物の集中がみられた地区であり，十分な時間がとれなかったことは，甚だ遺憾であった。

表層土の除去には重機を導入したが，分割された調査区に逐次重機を入れたため，導入回数は7回に及んだ。表層土は，Us−b火山灰層を目安に，Us−b層がない所は耕作土までをバックホーで除去，ダンプカーに積んで調査区外に搬出した。人力で掘開した包含層の排土も，調査区内には捨て場が殆どないため，場所を決めて仮置きし，重機を導入した際に一緒に運び出せるよう配慮した。

稀府川左岸の調査区では，頭上を有珠送電線が走っており，高圧線下での重機使用には，北電室蘭電力所送電課の許諾と，安全確認のための立会が必要とされた。

重機による表層土除去はUs−b火山灰を少し残す程度にとどめ，残りは人力で剝いで，V層の上面を出した。Us−b層やV層が耕作などによって失われた所については，耕作土を剝いだ面をV層上面と連絡させ，調査開始面の地形を把握した（図V−1）。

V層およびVI層については，層位的に順次掘り下げて遺構，遺物の検出に努め，VII層に達した段階で掘開を終了した。ここを一応の最終面とみなしてレベルを測定し，その数値に基づいて最終面の等高線を描いた（図V−4）。包含層には大礫，巨礫が点在し，旧河川の周辺には氾濫に伴う堅い砂礫層が介在するなど，ツルハシや金梃子（かなてこ）を用いてもそれらの除去は容易でなく，多大の労力が費消された。

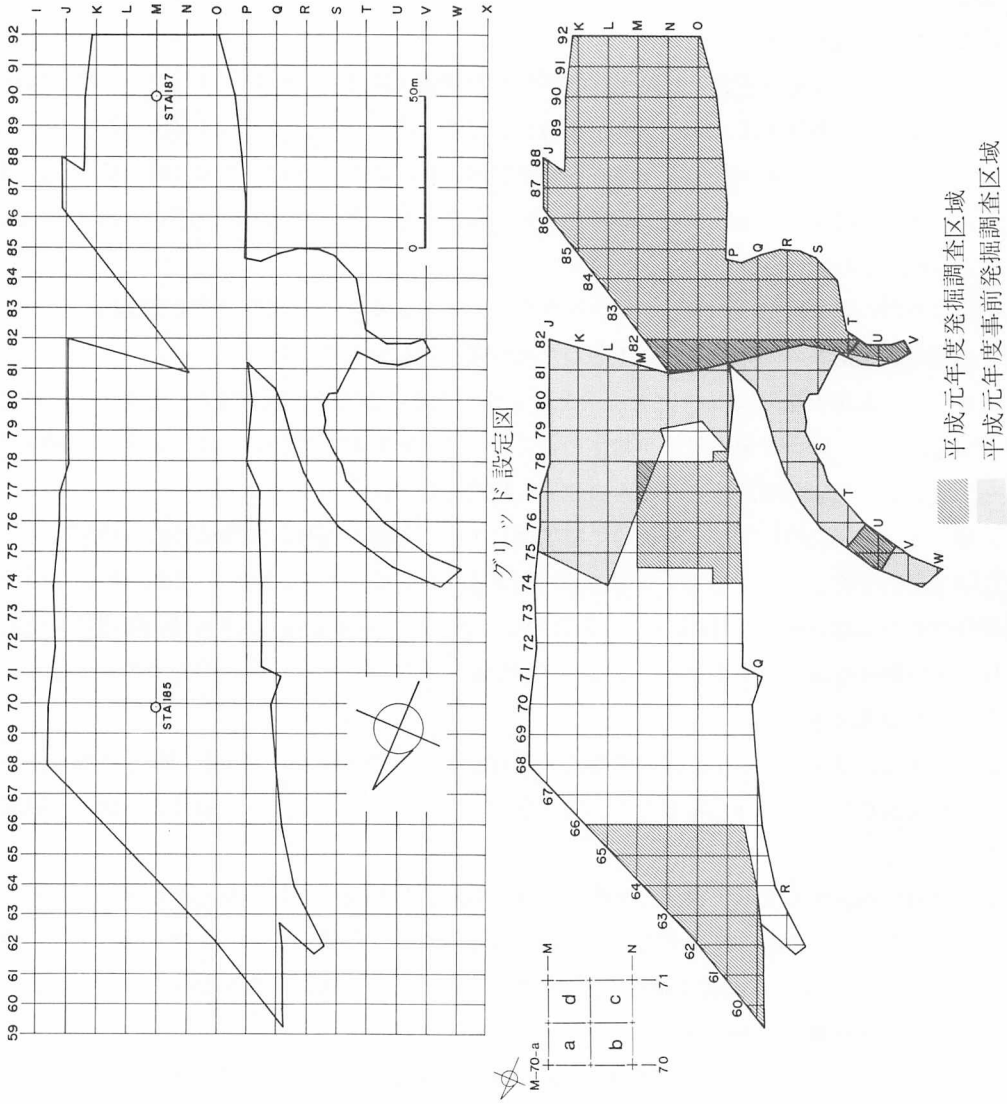
出土遺物は，基本的には1点ずつ遺物番号を付し，位置や層位，レベルを記録して取り上げたが，時間的な制約があった場合など，同一層位のものをサブ・グリッド単位で一括して収集した例もある。

焼土や炭化物を含有する土壌は，可能な限り採取し，炭化種子や骨片などを抽出するため，水洗選別を行った。サンプリングした土壌は，容積，重量を計量したのち乾燥させ，再び計量してから4mmメッシュの篩に通して，遺物などを摘出し，土壌試料の半分程度をフローテーション用に適宜計量して取り分けた。

フローテーションは，PS方式（椿坂1989）に準じて進めた。バケツやタライなどの容器に水

を入れ，土壌試料を加えて攪拌し，炭化物などを浮遊させた表層の水を，0.425 mm メッシュの上に 1.41 mm メッシュを重ね合わせた篩へと，徐々に注ぎ込む。こうして篩に残された浮遊物をペーパータオルに個別に包んで，乾燥させる。浮遊物には炭化種子や炭粒，昆虫の死骸や脱皮した殻，植物の毛根などが含まれており，拡大鏡や双眼実体顕微鏡を利用して選別し，抽出できた炭化種子については，北海道古植物研究会に同定を委嘱した。

沈降した土壌は，1.41 mm メッシュの篩を通して残渣をとり，さらに通過した砂泥を 0.5 mm メッシュの篩に入れて水洗し，その残渣も採集し，それぞれペーパータオルなどに包んで乾燥させた。沈降試料には小量ながら炭化物や炭化種子も含まれるが，主体は砂礫であり，骨片があれば，この中に混在している。骨片は焼けて白変し，小さく砕けたものばかりだが，選別できたものについては，早稲田大学金子浩昌先生にみていただいた。（高橋　和樹）



図Ⅲ－2　グリッド設定図と調査地区（稀府川遺跡）

2　土層

図III－3に総合的な模式柱状図を示す。堆積物と土壌の概要は以下の通りである。文末に付した〔　〕内のローマ数字は，事前発掘調査（北海道埋蔵文化財センター，1988）時の土層名であり，今回の報告でも遺物取り上げ土層名や遺構確認面の土層名としてこれを使用している[1]。火山灰についてはVI章でやや詳しく報告する。

1層：作土。火山岩片・軽石混じりの極暗褐色シルト質腐植土。層界平坦画然。層厚20 cm±。〔I層〕

2層：黒色シルト質－粘土質腐植土。層界平坦画然。層厚4 cm±。

3層：緑灰色降下火山灰。二枚のフォールユニットから成り，上部はシルト質，下部は軽石質砂質火山灰。層界平坦画然。全層厚3 cm±。有珠山III a火山灰(Us－III a。A．D．1853。以下，有珠山起源の火山灰名・年代は横山ほか（1973）による。）に対比した。

4層：黒褐色粘土質腐植土。層界平坦画然。層厚3 cm±。

5層：緑灰色降下火山灰と降下火山岩片・降下軽石との互層。少なくとも四枚のフォールユニットから成る。層界平坦画然。全層厚5－10 cm。有珠山IV a火山灰(Us－IV a。A．D．1822。)に対比した。

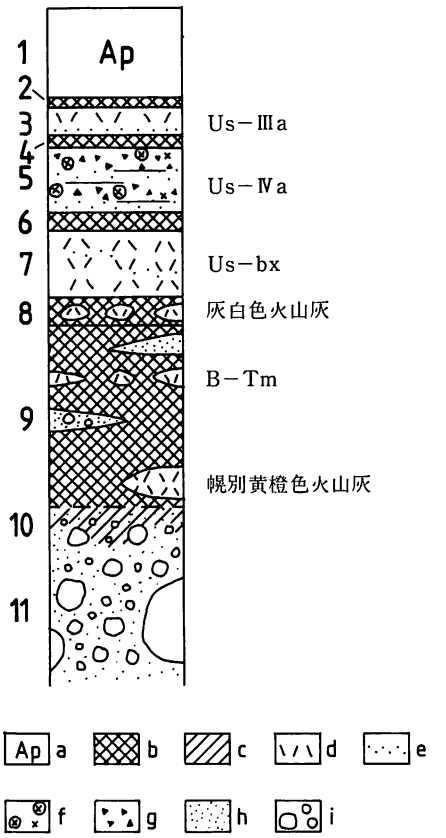
〔II層〕

6層：黒色粘土質腐植土。層界平坦明瞭。層厚5 cm±。〔III層〕

7層：にぶい褐色降下火山灰。シルト質であるが，砂質火山灰を不規則に挾むことがある。層界平坦画然。層厚10－20 cm。有珠山 b_2火山灰(Us－b_2。A．D．1663。)に対比した。本層上部に灰緑色のUs－b_1，基底部にUs－b_6が認められることがある。〔IV層〕

8層：黒色粘土質腐植土。層界平坦画然。層厚5 cm±。シルト質の灰白色降下火山が斑状に産出することがある。〔V層〕

9層：黒色粘土質腐植土。遺物包含層の主体。層界波状判然－漸変。層厚10－30 cm。上部にシルト質の黄褐色降下火山灰，下部にシルト質の黄橙色降下火山灰がレンズ



図III－3　土層模式柱状図

状に産出することがある。上部の火山灰は白頭山－苫小牧火山灰（B－Tm。町田ほか，1981・町田ほか 1984。）に対比される。下部の火山灰は二次堆積相を示すことも多い。この火山灰は，現在噴出源を明らかにし得ていないが，登別市幌別周辺で認められた縄文時代早期の住居跡を覆う火山灰（北海道埋蔵文化財センター，1983・1985・1987）に対比される。以下，この火山灰を「幌別黄橙色火山灰」と仮称する。

腐植土中には水成の砂層・砂礫層をレンズ状に挟むことがある。腐植土層の発達が悪く，Us－b_2の直下が10層であることも多い。腐植土自身が二次堆積を示すこともある。これらは，河川の氾濫や表面流水による河床・表層物質の移動・集積の結果と考えられる。本層は層相の変化が大きく，発掘区全域にわたって対比し得る層の細区分は困難であるので，8層と10層との間の層を一括して9層とする。

B－Tmの直上からⅦ群（擦文時代）の土器（V－3参照），幌別黄橙色火山灰の直上からⅠ群b類（縄文時代早期）の中茶路式土器が出土している（Ⅳ－4参照）。〔V層〕

10層：褐－暗褐色の礫混じり砂質腐植土。11層の土壌化層である。ほとんど発達しないこともある。層界波状漸変。層厚20 cm±。〔Ⅵ・Ⅶ層〕

11層：扇状地堆積物。roundedな安山岩の岩塊－礫と砂から成る分級の悪い堆積物である。岩塊の最大径は150 cmに達する。直上から縄文時代早期前葉の土器が出土している（Ⅳ－4参照）。〔Ⅷ・Ⅸ層〕

以上の堆積物と土壌の他に，焼土が産出することがある。産出層準は，Us－b_2直上，Us－b_2の下位からB－Tmの直上（B－Tmの上部が焼土化していることもある），B－Tmの下位（幌別黄橙色火山灰との関係は不明），及び10層上部である。焼土からは若干の炭化種子が確認された（Ⅵ参照）。6層以上は耕作により削剝されていることが多い。

Ⅳ－1・V－1にセクション図の数例を示す。（花岡　正光・和泉田　毅）

註1）厳密には，事前発掘調査では土層名の表記にアラビア数字を使用したが，今回の報告ではこれをローマ数字に置き換えたものである。

引用文献

北海道埋蔵文化財センター（1983）：川上B遺跡．303 pp.

北海道埋蔵文化財センター（1985）：登別市川上B遺跡．109 pp.

北海道埋蔵文化財センター（1987）：登別市亀田公園遺跡．67 pp.

北海道埋蔵文化財センター（1988）：北海道縦貫自動車道埋蔵文化財事前発掘調査報告書　伊達市牛舎川右岸遺跡・牛舎川左岸遺跡．88 pp.

町田　洋・新井房夫・森脇　広（1981）：日本海を渡ってきたテフラ．科学，Vol. 51，pp. 562－569.

町田　洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫（1984）：テフラと日本考古学－考古学研究と関係するテフラのカタログ－．古文化財編集委員会編「古文化財の自然科学的研究」，984 pp.，同朋舎：pp. 865－928.

横山　泉・勝井義雄・大場与志男・江原幸雄（1973）：有珠山－火山地質・噴火史・活動の現況および防災対策－．254 pp.

3　遺物の分類

(1)　土器

牛舎川右岸遺跡，稀府川遺跡の調査では縄文時代早期から擦文時代にかけての遺物が出土している。分類にあたっては大きく縄文早期，前期，中期，後期，晩期，続縄文時代，擦文時代の7群に分けた。このうち，前期に属するものを除き，これらをさらに2～3類に細分した。

I群　縄文時代早期の土器群

a類　貝殻腹縁圧痕文，条痕文，沈線文などのある土器群

本類には函館市中野B遺跡III群土器（千代ほか　1977）などに類する物見台系のものと登別市川上B遺跡I群a類土器（北埋文　1983）などに類する平底土器が出土している。

b類　縄文，撚糸文，絡条体圧痕文，組紐圧痕文，貼付文などのある土器群

本類に細分されるものは東釧路III式，コッタロ式，中茶路式に相当する土器で，前者は稀府川遺跡，後二者は牛舎川右岸遺跡から出土している。

II群　縄文時代前期の土器群

本群に属するものは稀府川遺跡から出土した1個体分の破片のみで，いわゆる「綱文式」に先行または共伴するとみなされる羽状縄文が施された資料である。

III群　縄文時代中期の土器群

本群は牛舎川右岸遺跡，稀府川遺跡ともに道央部の柏木川式，[注1]道南の大安在B式に相当する土器が主体をなしている。牛舎川右岸遺跡ではこれらを在地系，道南系に細分し，便宜的に前者をA類，後者をB類とした。また稀府川遺跡ではわずかながらこれらに後続するノダップII式に相当するものも出土している。

IV群　縄文時代後期の土器群

本群はいずれも稀府川遺跡から出土したものである。特に，c類は稀府川遺跡から出土した土器の中で，最も多い一群である。

a類　余市式，手稲砂山式に相当するもの

b類　手稲式，ホッケマ式に相当するもの

c類　堂林式，三ッ谷式に相当するもの

V群　縄文時代晩期の土器群

a類　大洞B，BC式に相当するもの

本類は牛舎川右岸遺跡でしか出土していないが，稀府川遺跡では調査区外の畑地から本類に属する資料が表採されている（II－3参照）。

b類　大洞C_1式に相当するもの

稀府川遺跡の調査区外野田地点から1点だけ表採されている（II－3参照）。

c－1類　大洞C_2～A式に相当するもの

c－2類　タンネトウL式に類するもの

VI群　続縄文時代の土器群

b類　恵山式に相当するもの

c類　後北式に相当するもの

VII群　擦文時代の土器群

a類　北大式土器

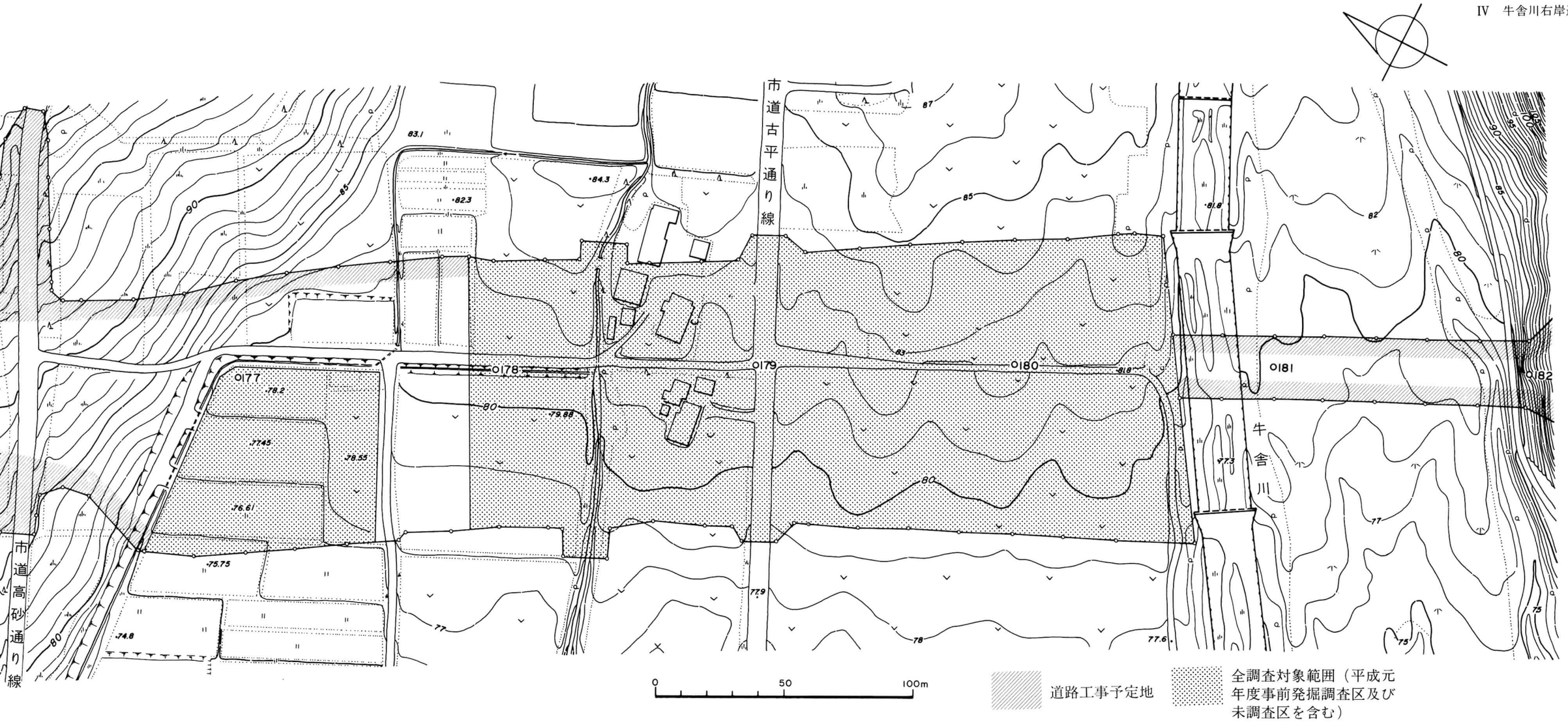
b類　擦文式土器

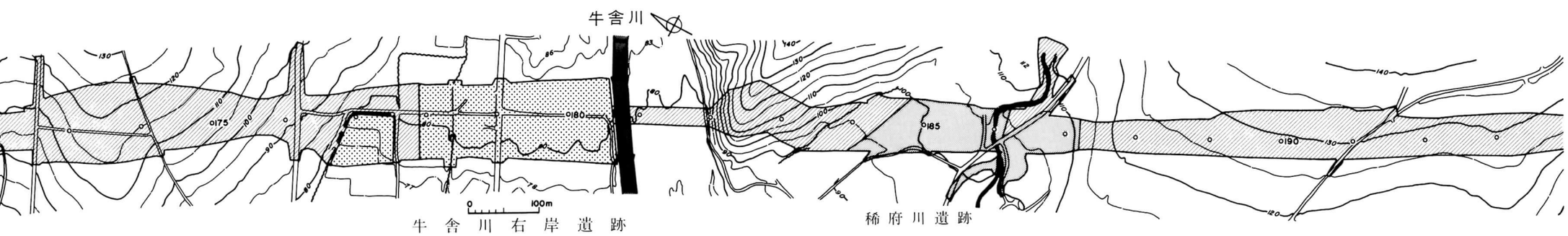
註1）柏木川式は，はじめ上野秀一氏により設定された型式（上野　1978）であるが，ここでは，大沼忠春氏による柏木川式の概念（大沼　1981）に従っている。

(2) 石器等

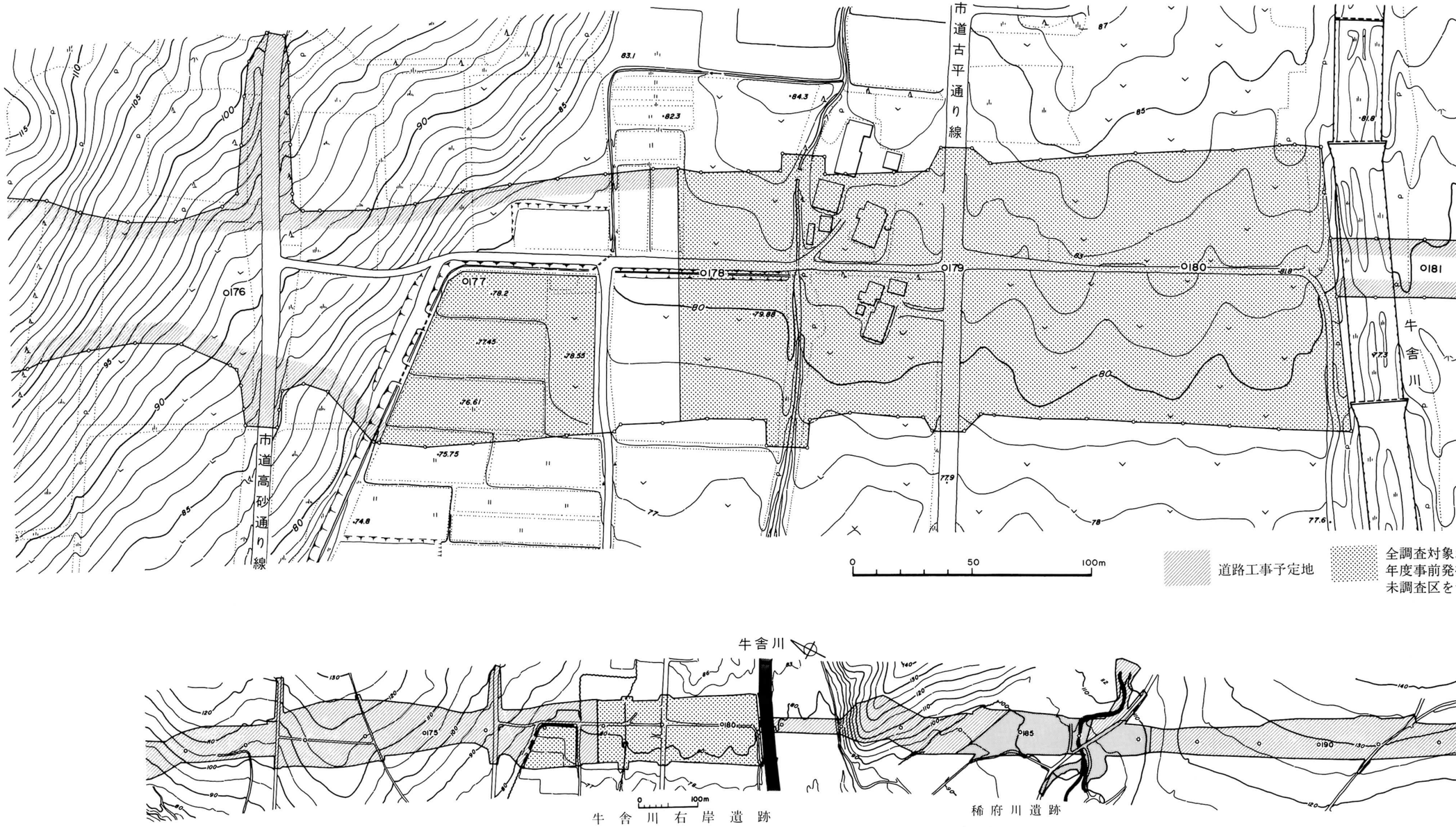
石器は牛舎川右岸遺跡，稀府川遺跡ともに器種別の分類をおこない，個々に記載をした。

出土した器種は，剥片石器では石鏃，石槍またはナイフ，石錐，ナイフ・スクレイパー類，楔形石器。礫石器では，石斧，擦石，敲石，　砥石がある。この他に，石製品，加工痕・使用痕のある剥片がある。さらに，稀府川遺跡では石核，土製品が出土している。





図Ⅳ－1　牛舎川右岸遺跡周辺の地形と道路工事予定地



図Ⅳ－1　牛舎川右岸遺跡周辺の地形と道路工事予定地

Ⅳ　牛舎川右岸遺跡

遺跡全景（東から）

1　調査の概要

調査区は，工事計画範囲のうち牛舎川の岸から，市道古平通り線までの全域と，市道以北の一部である。全域が畑として利用されていた所で，道路用地のセンターラインに沿って農道が走っている。今回の発掘前までは，おもにアスパラガスの栽培が行われていた。

調査区は，東から西へ緩やかに傾斜しており，両端では約4 mの高低がある。牛舎川の水面と調査区南端の比高は，約3 mである。

この畑地には，牛舎川に平行する幅10 mほどの浅いくぼみが3条みられ，全体に起伏のある地形となっている。このくぼみは，調査区外の東西に続いており，今回の調査によって，扇状地氾濫原の古い河道であることが判明した。

遺物包含層は，川に近い調査区南西部や，旧河道跡の部分では厚いが，これ以外では，うすく，削平されている所もあった。とくに，市道古平通り線と牛舎川間の北東部では，耕作土直下に扇状地基盤をなす礫層があらわれた部分もあった。この礫は，こぶし大から人頭大を超える安山岩で，遺物包含層中も大量に混入している。

牛舎川の川べりには，厚い盛土があった。これはおもに畑地造成で削平した土とみられる。昭和30年代の護岸工事の際にも盛土が行われたという。

昭和62，63年度の事前発掘調査の結果から，牛舎川に近い調査区南西部に，縄文時代中期及び擦文時代の集落跡が残されている可能性が考えられていたが，検出された遺構は，川べりで発見された縄文時代中期のものとみられる小規模な竪穴1基と土壙2基及び，第3層で検出された近世の土壙3基，焼土1ヵ所である。

出土遺物は約13,000点。大部分は土器片で，縄文時代早期，中期，後期，晩期，続縄文時代，擦文時代に及ぶ各時期のものがある。このうち主体を占めるのは，縄文時代中期の柏木川式，大安在B式に並行する資料である。石器は，石鏃，槍先，スクレイパー，石斧，砥石などが出土しており，総数は少ないが，石斧が他の器種に比べて多い。剥片類は100点以下で，遺物総点数に比較すると非常に少ない。これらの遺物の出土位置をみると，大部分を占める縄文時代中期の土器・石器は，調査区南西部の牛舎川寄りに，特に多い。他の時期のものは，これと重なる部分もあるが，調査区全域に散点的に分布している。

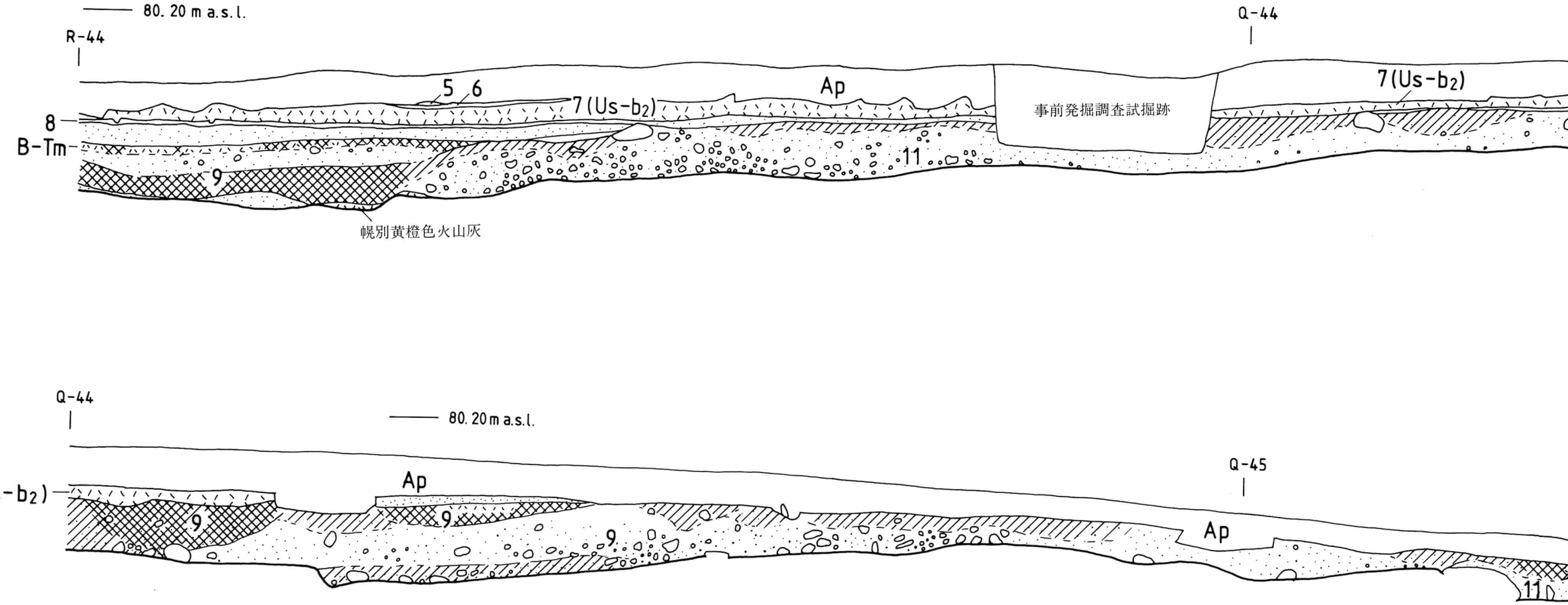
遺物包含層であるⅤ層の残存状態が，調査区内の各部分で大きく異なるにもかかわらず，遺物の分布傾向はこれと一致していない。とくに，数条みられる旧河道跡内には，Ⅴ層が厚く堆積しているが，平坦部に比べて出土点数が多いわけではない。

調査区は，明治以降の開墾や近年の機械農法によって，高い部分は削平され，低い所が埋められており，遺物が本来の位置から移動している個所もあるが，上記のことから本来，牛舎川岸寄りが，本来，本遺跡の主体（とくに縄文時代中期）であったことに，かわりはないものと考えられる。

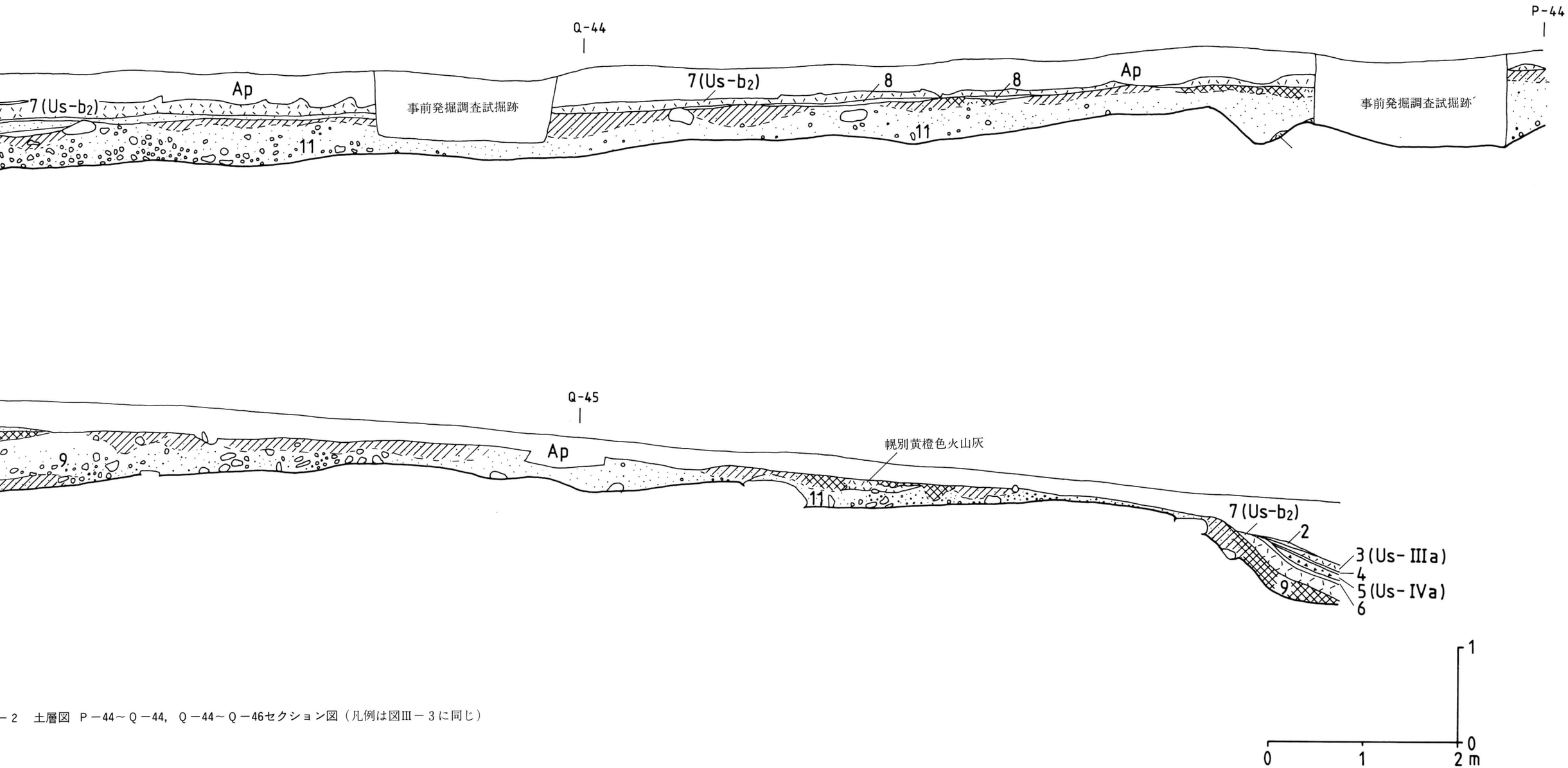
遺物包含層（第Ⅴ層）中には，調査区全域にわたって，レンズ状に堆積した焼土が分布していたが，遺物分布との相関性はみられない。（鬼柳　彰）

本遺跡は，稀府川遺跡と同様に扇状地上に立地している。現地表面は緩起伏の波状地形を呈し，扇状地堆積物の堆積面の形態を反映している。発掘区全域に Us－b_2が堆積し，これが表土（作土）除去の目安となっている。各土層の発達が比較的良いのは，牛舎川寄りの 44 ライン附近と高砂川左岸地域である。44 ライン附近では，Us－b_2下位の腐植土層中に砂層・砂礫層が挾まれることが多い。高砂川左岸地域では，Us－b_2と考えられる火山灰を挾んで水成礫や火山灰の二次堆積物が複雑な層相を呈している。メインセクション図として，K・Qのライン及び 37・40・44 のラインを記録した。このうち，遺物の出土量の多い牛舎川寄りのセクション図の例を図Ⅳ－2 に示した。高砂川左岸地域のセクションについては次年度に報告する。

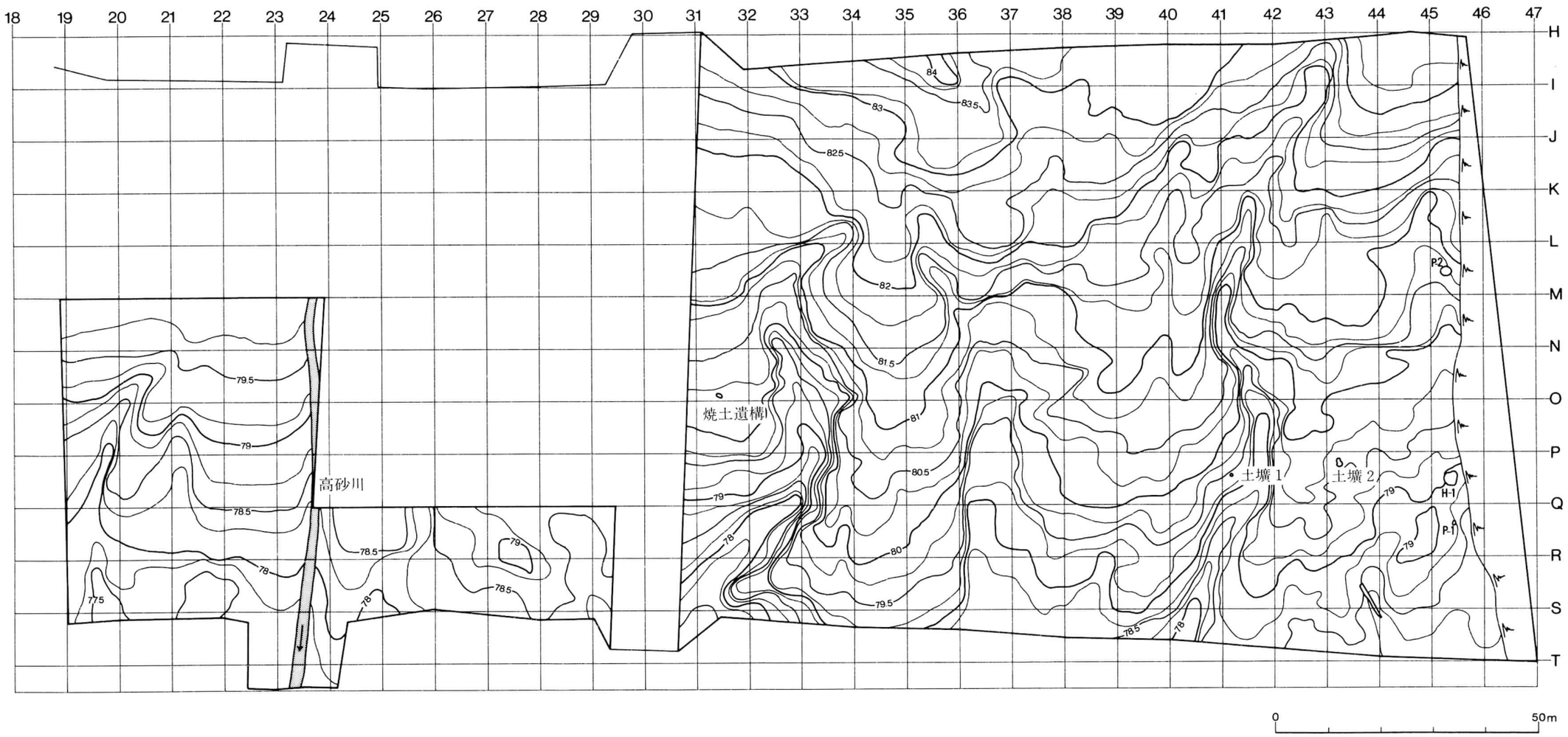
火山灰は遺物・遺構の編年にとって重要である。本遺跡において遺物と直接関係する火山灰は，本報告で「幌別黄橙色火山灰」と呼んだ降下堆積物である。この火山灰の直上から縄文時代早期の土器が出土している（Ⅲ－2・Ⅳ－4 参照）。この火山灰は，縄文時代の鍵層として，噴出源・分布を明らかにすることが必要である。（花岡　正光）



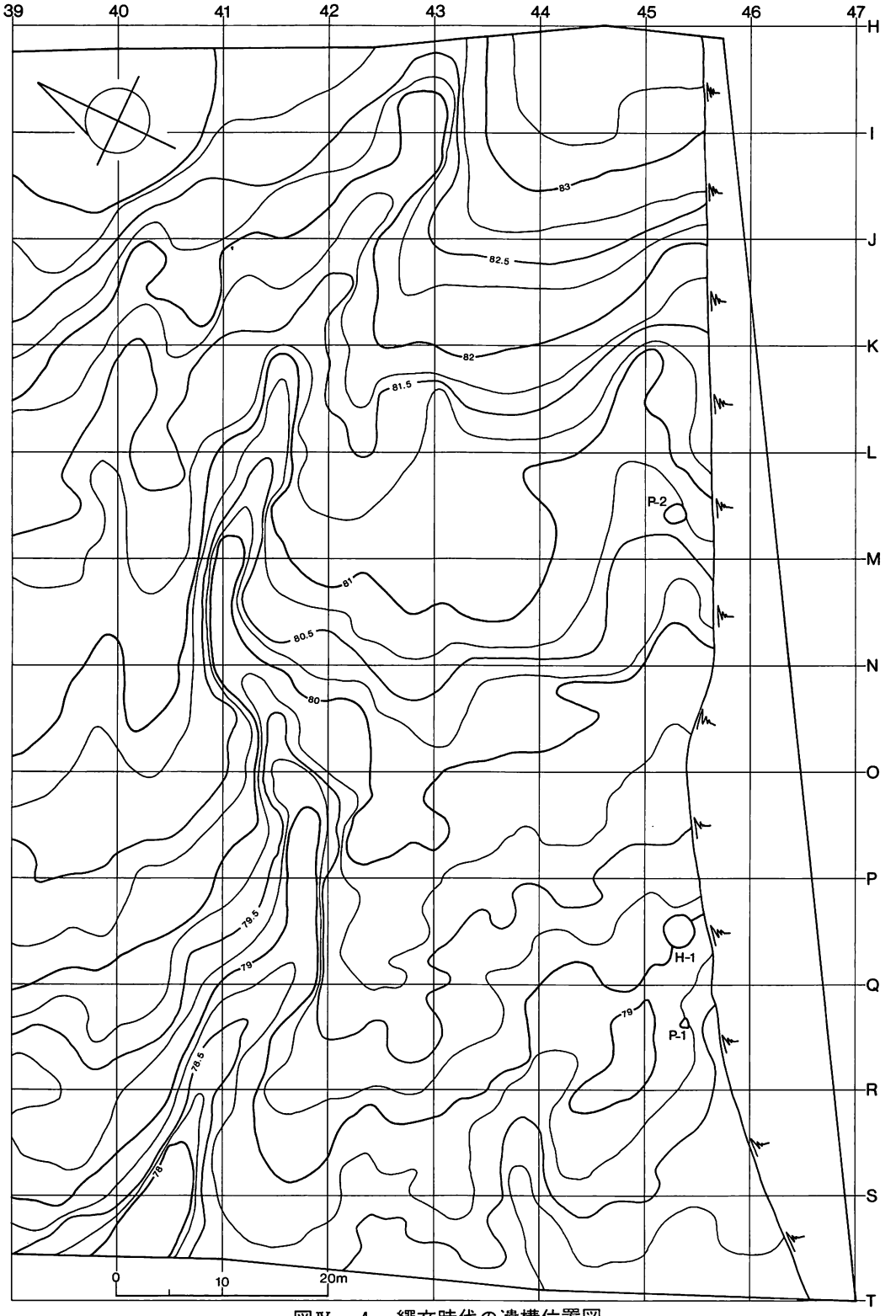
図Ⅳ－２　土層図　Ｐ－44～Ｑ－44，Ｑ－44～Ｑ－46セクション図（凡例は図Ⅲ－３に同じ）



－2　土層図　P－44～Q－44，Q－44～Q－46セクション図（凡例は図Ⅲ－3に同じ）


18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47
H I J K L M N O P Q R S T
84
83
83.5
82.5
82
81.5
81
80.5
80
79.5
79
78.5
78
77.5
焼土遺構
高砂川
土壙 1
土壙 2
P-2
H-1
P-1
0
50m

図Ⅳ－3　遺構位置図



図Ⅳ－4　縄文時代の遺構位置図

2 遺 構

近世遺構：白色火山灰(Us－b)層に掘り込まれた溝や土壙と，この層の凹みを利用した焼土の計4基を報告する。他に調査区全域に，単独あるいは不規則な位置の小ピットがみられたが，柱穴とは考えにくく，報告は省略する。位置図は，図Ⅳ－3である。

縄文時代の遺構：45ラインよりも牛舎川寄りの川岸地帯に，竪穴1基・土壙2基を確認した。基盤層が大小礫混りで掘りにくいためか，これ以外に遺構はつくられていないものと思われる。もしあったとすれば，川の氾濫や護岸工事で破壊されたさらに川寄りの地帯が可能性をもっている。

(1)近世遺構

溝状遺構（図Ⅳ－5）

位置：R－43－c・d，R－44－b　　**規模**：(5.56)×0.57×0.15 m

浅くゆるやかに掘られた直線状の溝である。軸をNEN－SWSに向け，NEN側に向かって傾斜をもっており，北端部はオーバーハングしている。SWS側へは徐々に浅くなり，溝の痕跡も消え，南端部は判然としない。あるいは延々と続いていたものかもしれない。セクション図にも現われているように，底面の一部には，炭化した樹皮が残存している。樹皮敷か，樋状の材が入れられていたものと思われるが，丸太か半割材を置いてあった可能性もあろう。

土壙－1（図Ⅳ－5）

位置：P－41－a　　**規模**：0.60×0.54×0.14 m

平面が円形の小型ピットである。底と壁の区別がない，浅い椀状を呈している。

土壙－2：（図Ⅳ－5）

位置：P－43－a　　**規模**：1.52×1.25×0.27 m

平面形は，長軸をNE－SWに向けたヒョウタン形である。壁の立ち上がりはやや急である。底面は，全体的に南西方に傾斜しており，中央くびれ部にゆるい段がある。

焼土遺構（図Ⅳ－5）

位置：N－32－C　　**規模**：0.68×0.52×0.05(厚) m

風倒木痕のような凹みが，有珠b火山灰降下後にもゆるやかに残り，その盆状部を利用して火が焚かれた痕跡である。盆状地の中央に，灰の広がりがあり，焼土と炭化物が点在している。一時的な焚火をした場所であろう。

他に覆土が耕作土である近代の土壙も確認した。R－44－dに位置し，径50 cmの円形で，円筒状を呈す。底に耕作土と有珠b火山灰の混合した土が5～6 cm入れられ，その上に桶か樽の底板と鉄製のタガが残存していた。タガの径43 cm，幅は2 cm，留釘も付属していた(写真図版Ⅴ－5)。

溝状遺構

a　79.20m　b

c　79.20m　d

土壙－1

1．淡灰色砂質火山灰(Us－Ⅲa？)
2．1より粒子が粗い
3．灰色砂質火山灰(Us－Ⅳa？)
4．Ⅲ層
5．白色火山灰(Us－Ⅳ層)

Ⅲ層

a　80.00m　b

焼土遺構

焼土

灰の範囲

80.212

80.407

a　80.30m　b

1．淡青灰色灰
2．白色火山灰(Us－b.Ⅳ層)
3．Ⅴ層

焼土

1．淡灰色灰質火山灰(Us－Ⅲa？)
2．黒色土
3．灰色砂質火山灰
4．淡灰色灰質火山灰
5．灰色砂質火山灰(3より粗い)
6．Ⅱ層と黒色土の混合層
7．Ⅲ層
8．白色火山灰(Us－b.Ⅳ層)

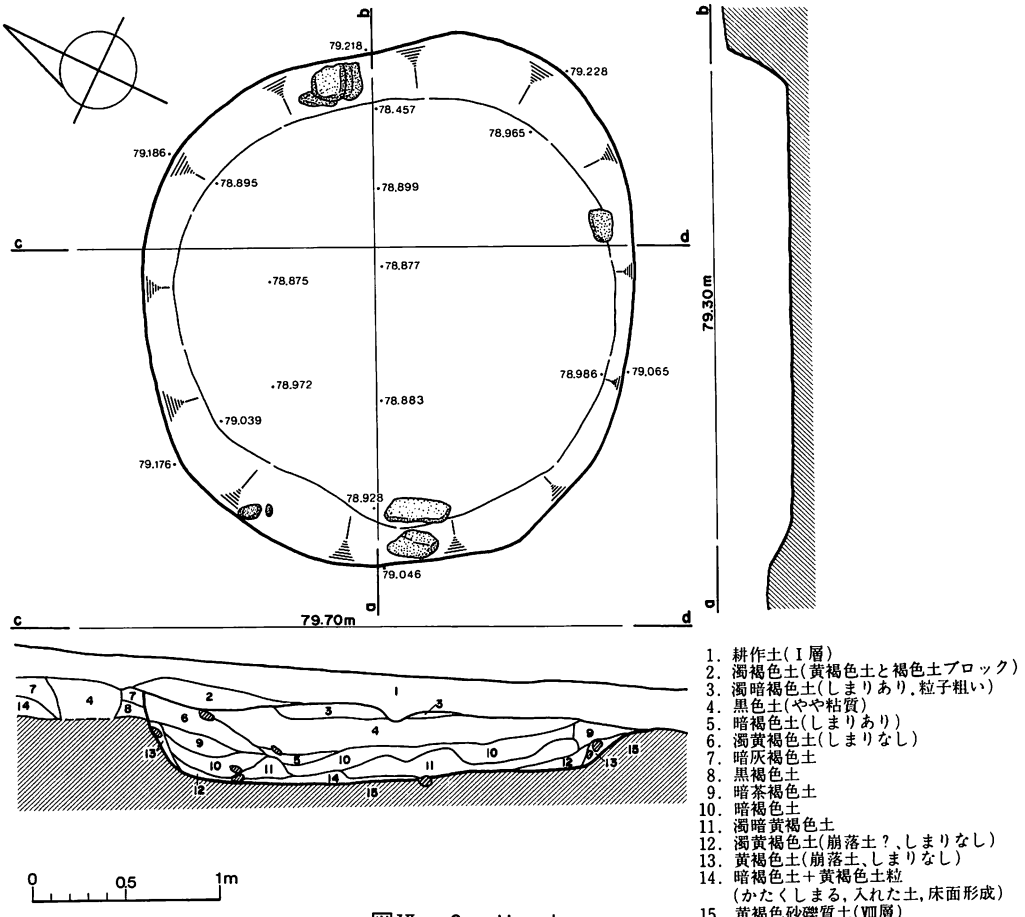
(Us－Ⅳa？)

Ⅱ層

a　80.10m　b

0　0.5　1m

図Ⅳ－5　近世遺構



図Ⅵ－6　H－1

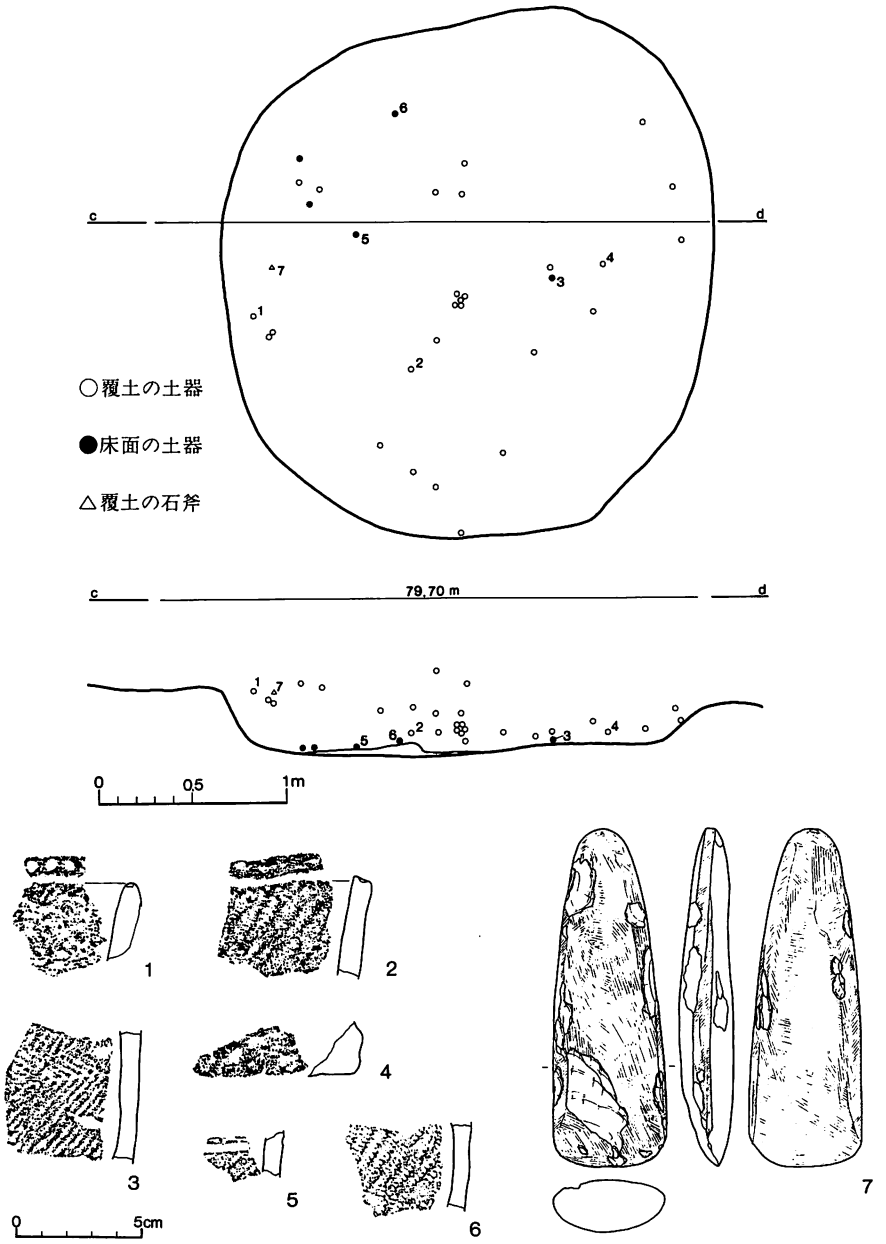
(2) 縄文時代の遺構

H－1（図Ⅳ－6・7）

位置：P－45－a・b　　**規模**：2.92×2.75×0.35 m

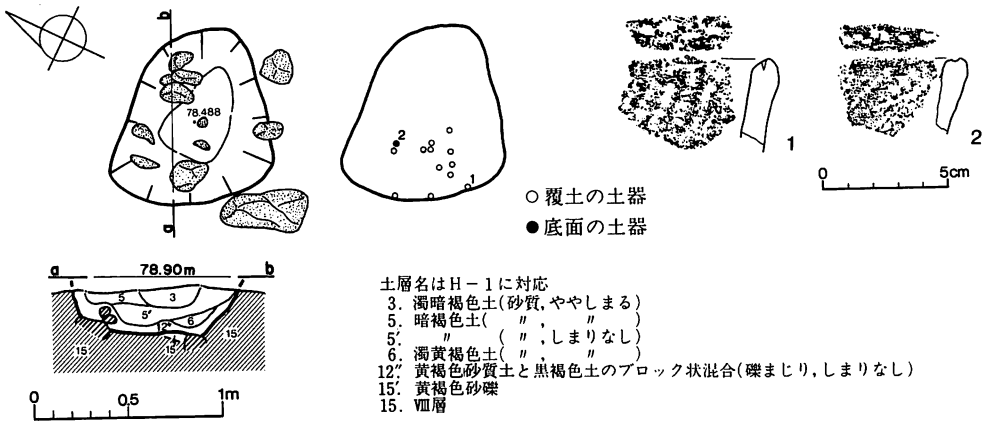
牛舎川に向かって極めてゆるく傾斜する，河岸斜面に位置する。平面形はほぼ円形で，有効面積は約4 m²である。掘り込まれた層は，大小の礫が多く，底面・壁面には礫の突出がみられる。そのためか，セクション図で14層とした，暗褐色土に黄褐色土を混合した土を，底面の4分の3ほどの面積に入れ，固くしめて床面としているようである。壁は，傾斜面高位部分でより垂直に近く立ち上がる。炉や柱穴は，竪穴外においても検出されなかった。夏の1～2人用のキャンプ小屋といったところだろうか。

遺物は，床面で縄文時代中期の土器片が5点，覆土全般で同土器片27点と覆土6層に石斧1点（7）が出土している。1～4は，胎土に砂粒が多く含まれたⅢ群A類の土器である。1は口唇に円形刺突文が施されている。表面が剝落しており文様構成は不明。2はLR斜行縄文を地文とし，口唇にも縄文が施された痕跡がある。Ⅲ群A5類cに分類される、3は地文に結節

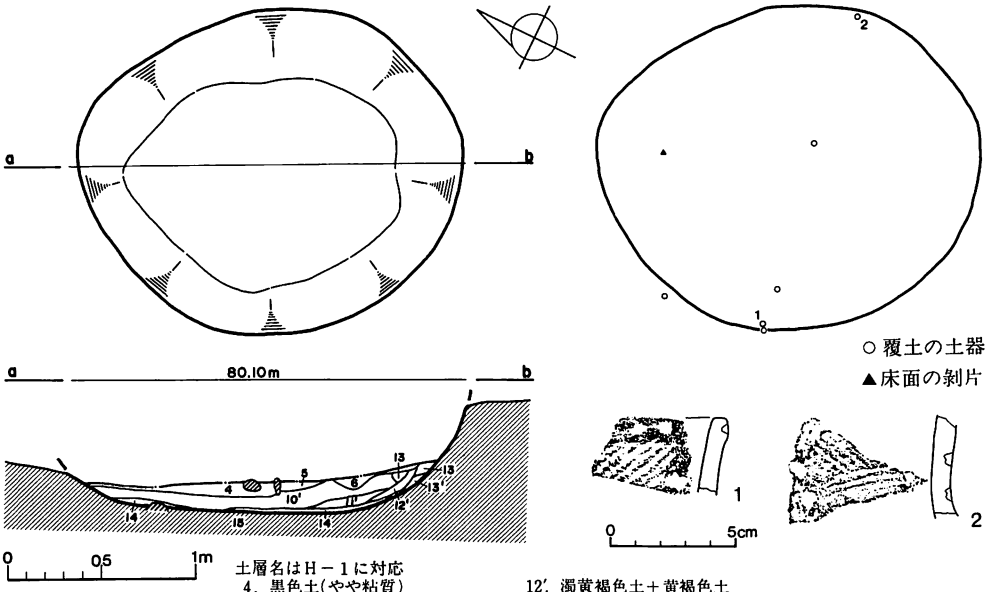


図Ⅳ－7　H－Ⅰ遺物出土位置・遺物

第1種の羽状縄文が認められる胴部，4は底部破片である。5と6は，1～4とは胎土や焼成が明らかに異なり，内面のみがきが丁寧な薄手の土器である。道南系のものと考えられる。5には沈線が入り，Ⅲ群B1類に分類できる。6はⅢ群B類の胴部破片である。7は緑色泥岩製の片刃の石斧である。両面，側面とも磨かれており，一部は敲打で調整されている。



土層名はH－1に対応
3. 濁暗褐色土(砂質,ややしまる)
5. 暗褐色土(〃 , 〃)
5′. 〃 (〃 ,しまりなし)
6. 濁黄褐色土(〃 , 〃)
12″. 黄褐色砂質土と黒褐色土のブロック状混合(礫まじり,しまりなし)
15′. 黄褐色砂礫
15. Ⅷ層



土層名はH－1に対応
4. 黒色土(やや粘質)
5. 暗褐色土(しまりあり)
6. 濁黄褐色土(しまりなし)
10′. 暗褐色土に黄褐色土が斑状混合
11′. 黒褐色土に黄褐色土が斑状混合
12′. 濁黄褐色土＋黄褐色土
13. 黄褐色土(崩落土,しまりなし)
13′. 濁黄褐色土(〃 , 〃)
14. 暗黄褐色土＋茶褐色土粒(かたくしまる,入れた土,床面を形成)
15. Ⅷ層

図Ⅳ－8　P－1・P－2

P－1（図Ⅳ－8）

位置：Q－45－a　　**規模**：1.01×0.72×0.29 m

H－1の南西　mに位置する。H－1の付属ピットと考えることができるかもしれない。

長軸方向はE－Wで，平面形は不整の卵形を呈す。壙容積は，約0.09 m^3である。壙底はやや西側に傾斜するが，ほぼ平坦で，壁の立ち上がりは急である。底や壁は，掘り込まれたⅧ層基盤自体に大小の礫が多く，崩落が著しい。大礫の突出も多い。

遺物は，壙底から1点，覆土から12点の縄文時代中期の土器片が出土している。1・2とも胎土に砂粒を多く含んでいる。地文はLR斜行縄文で，1は口唇に刺突文が施されⅢ群A5類

aに，2は口唇に縄線文が施されⅢ群A類5 bに分類される。

P－2（図Ⅳ－8）

位置：L－45－a・b　　**規模**：2.5×1.70×0.50 m

牛舎川本流と，1本北西側のゆるい枝沢にはさまれた面に位置する。どちらかというと，枝沢側の傾斜面にあり，長軸を沢と直交するNWN－SESに向けた，楕円形の土壙である。有効面積が1.2 m²の大型土壙である。底面は平坦で，壁は底に連続して変換点が不明瞭であるが，沢側へはゆるく，両サイドや牛舎川側へは急な立ち上がりを見せる。掘り込まれたⅧ層は，大小の礫が多く，特に底に礫の突出がみられる。そのためH－1と同様に，14層という土を入れて固くしめ，底の平坦面を形成している。

床面の形成や形状，覆土の状態から，H－1と同時期で，同じ性格を有する小型化したもの（一人用？）と考えることができよう。

遺物は，床土（14層）から黒曜石のフレイクが1点，覆土から縄文時代中期の土器片が6点出土している。1・2とも胎土に細砂粒を多く含む。1は口縁部に刺突文が施されおりⅣ群A2類cに，2は刺突文のある胴部でⅢ群A7類eに分類できる。（三浦　正人）

焼土

当遺跡では439か所の焼土が検出された。焼土が検出された層位は，①Ⅳ層(US－b)直下，(2)Ⅴ層上部（白頭山－苫小牧火山灰層直上），③Ⅴ層中・下部の3層に分けられ，これらの焼土は図Ⅳ－1に示したとおり調査区域のほぼ全域に分布している。以下，検出層位ごとに概要を述べる。なお，図Ⅳ－10・11 には層位ごとに代表的な焼土を図示した。

①Ⅳ層(Us－b)直下

27か所の焼土を確認した。Ⅳ層(Us－b)除去後にⅤ層上面で検出されたもので，Ⅳ層に直接覆われていた。焼土の多くには炭化物が伴っているが，遺物は検出されていない。また，Ⅴ層上面から出土した遺物もない。

表Ⅳ－1　焼土数

層　位	数
Ⅳ層直下	27
Ⅴ層上部	266
Ⅴ層中下	146
計	439

②Ⅴ層上部（白頭山－苫小牧火山灰層直上・直下）

Ⅴ層上部では266か所の焼土を確認した。図に示したとおり（図Ⅳ－10・11）、白頭山－苫小牧火山灰層の直上及び直下で検出されたものである。焼土と火山灰層との間には間層を挟まず，その境界は漸移的である。これらの焼土は調査区全域に分布し，特にQ－19区からQ－31区の間では面をなして広がっている。現地での肉眼観察の結果，焼土からは土器・石器等の人工遺物はもちろん，焼骨等の自然遺物も全く検出されなかった。

白頭山－苫小牧火山灰の降下年代は千歳市末広遺跡例（大谷・田村1982）等から擦文時代と推定されており，稀府川遺跡でも白頭山－苫小牧火山灰層の上下からⅦ群土器が出土している

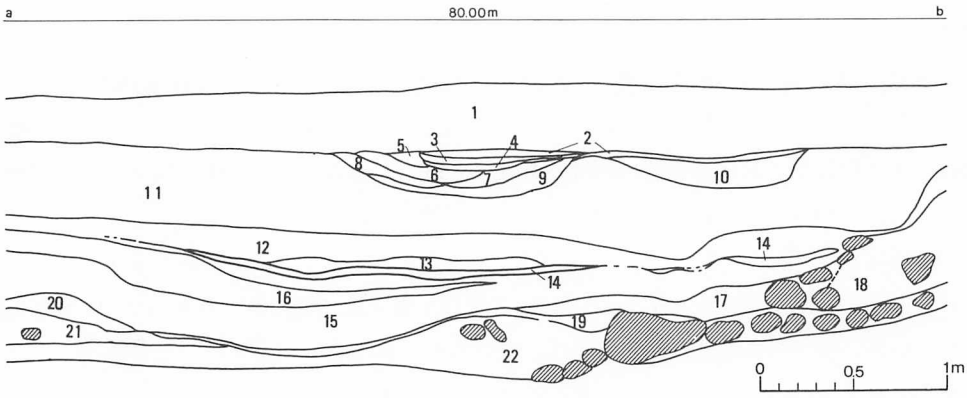
当遺跡の場合，Ⅶ群土器は白頭山－苫小牧火山灰層の下位から出土したものばかりで，しかも分布範囲は調査区南西隅のごく狭い範囲に限られている（図Ⅳ－３）ことから，Ⅶ群土器と焼土の関連は低いと考えられる。

③Ⅴ層中・下部

Ⅴ層中・下部では146か所の焼土を確認した。焼土が検出された層位はⅢ群・Ⅴ群・Ⅵ群土器と，それに伴う石器等の遺物包含層に相当するが，焼土に伴った遺物は図Ⅳ－11－8に示した焼土から出土した黒曜石の小片１点だけである。

また，焼土は遺物の集中範囲（図Ⅳ－13）以外にも広く分布していることから，各時期の遺物と焼土の関連を明らかにすることはできなかった。

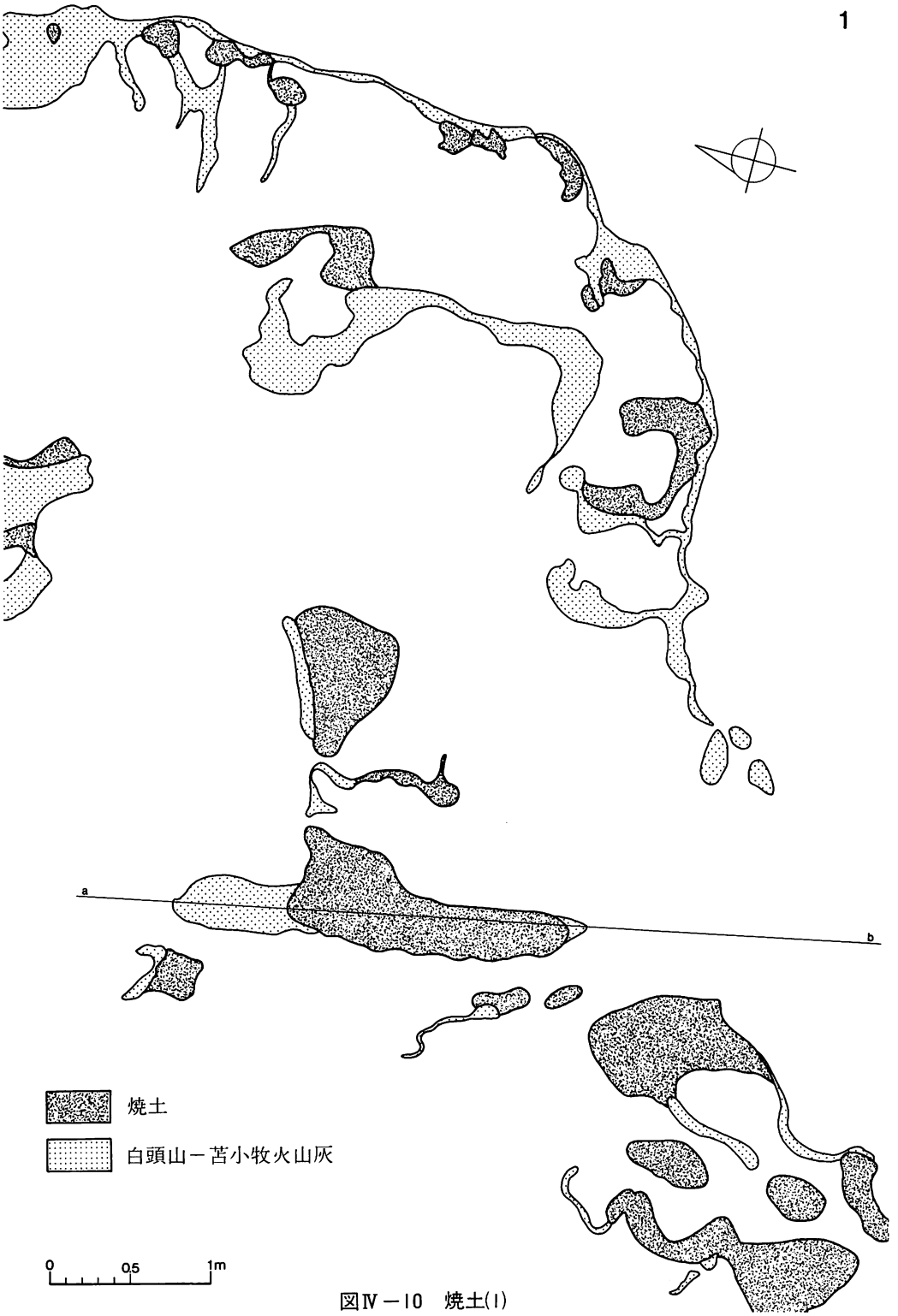
以上のように，当遺跡で検出された焼土の特徴としてⅤ層中・下部の一例を除き，他からは全く遺物が検出されていないこと，遺物の分布と焼土に有意な関連が認められないことがあげれる。（工藤　研治）



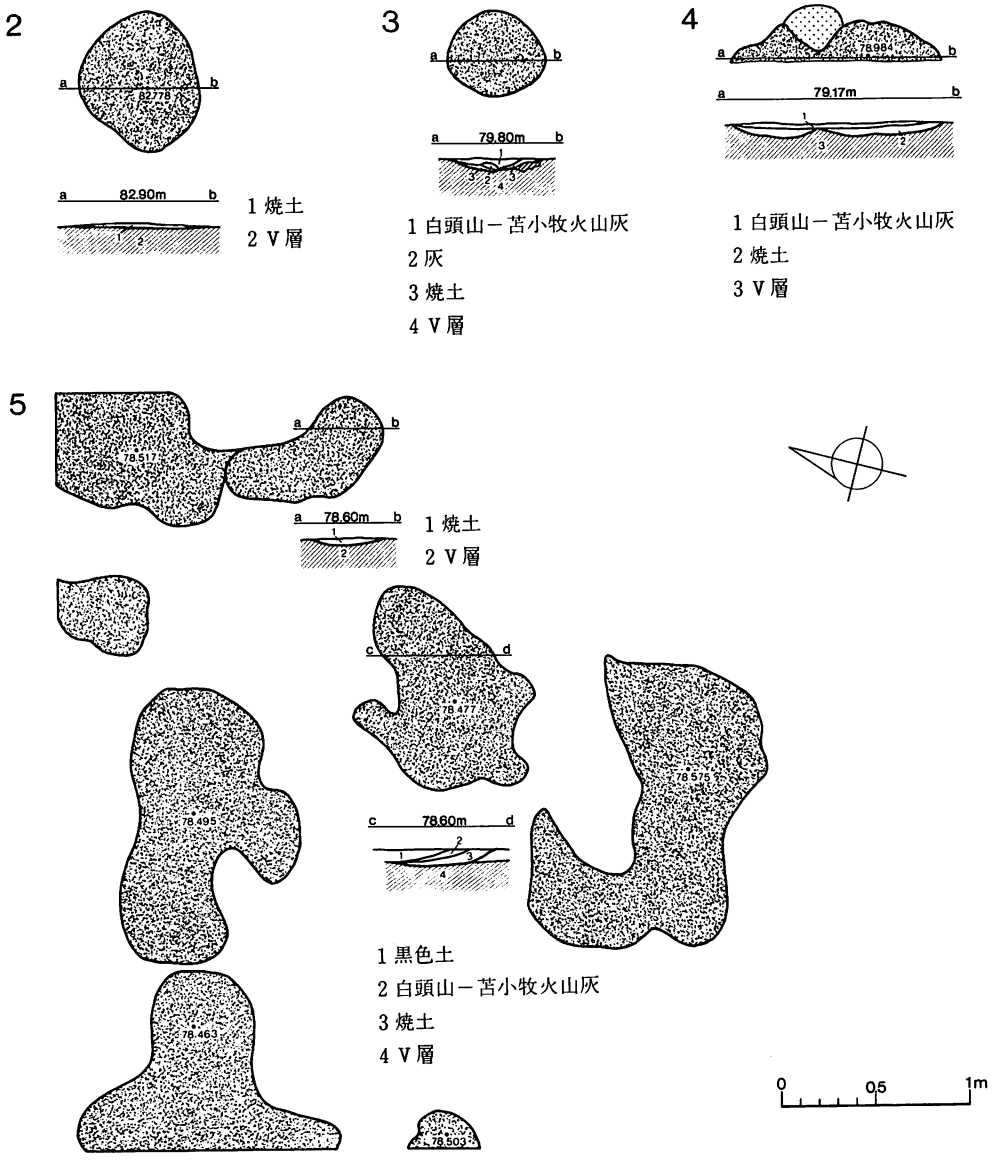
1 Ⅰ層(耕作工)
2 〃（黒褐色工)
3 Ⅱ層(Us－Ⅳa火山灰)灰合色火山灰
4 〃 〃
5 〃 〃 砂質の火山灰
6 〃 〃 小礫状の火山灰
7 〃 〃 〃
8 〃 〃 暗褐色シルト質土
9 Ⅱ層(U－Ⅳa火山灰)暗褐色シルト質土
10 〃 〃 濃いグレーの火山灰)
11 Ⅳ層(Os－b火山灰)
12 Ⅴ層(黒色土)
13 焼土
14 白頭山－苫小牧火山灰
15 黒褐色土
16 小礫層
17 黄褐色砂質土
18 黄褐色土
19 小礫層
20 黄褐色小礫層
21 礫層(小礫混り)
22 赤褐色砂質土

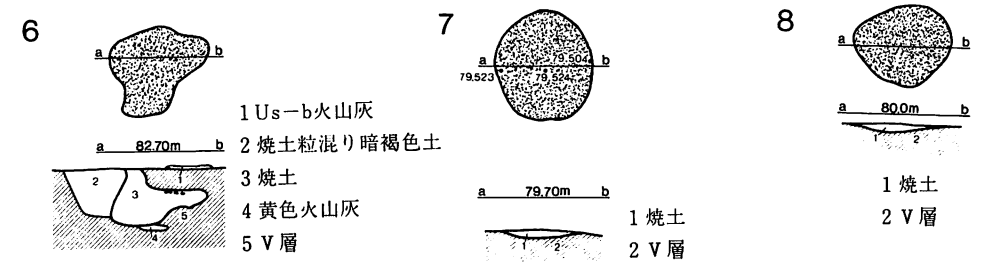
図Ⅳ－９　焼土(Ⅰ)断面図

この図はＱ－28区からのびる小沢(図Ⅳ－３参照)の土層断面である。13の焼土が14の苫小牧－白頭山火山灰層の直上に位置するのが観察できる。15以下は沢の堆積土であり基本層序とは異っている。16・20の小礫層にはⅤ群・Ⅵ群土器が含まれていることから、この小沢は続縄文時代以降、14の白頭山－苫小牧火山灰降下以前に形成されたものと考えられる。

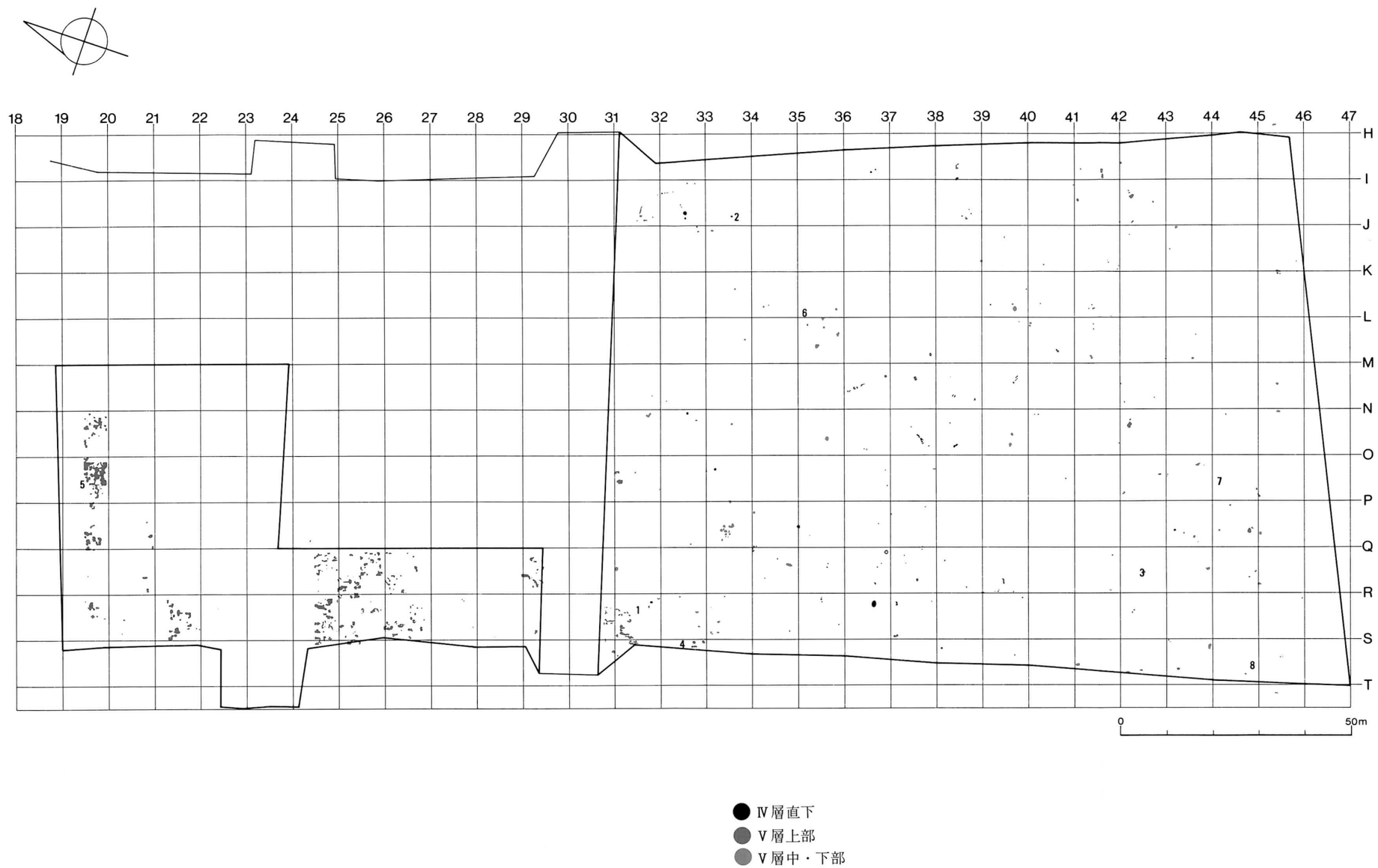


図Ⅳ－10　焼土(1)


2
a 82.90m b
1 焼土
2 V層
3
a 79.80m b
1 白頭山－苫小牧火山灰
2 灰
3 焼土
4 V層
4
a 79.17m b
1 白頭山－苫小牧火山灰
2 焼土
3 V層
5
a 78.60m b
1 焼土
2 V層
c 78.60m d
1 黒色土
2 白頭山－苫小牧火山灰
3 焼土
4 V層
0 0.5 1m


6
a 82.70m b
1 Us－b火山灰
2 焼土粒混り暗褐色土
3 焼土
4 黄色火山灰
5 V層
7
a 79.70m b
1 焼土
2 V層
8
a 80.0m b
1 焼土
2 V層

図Ⅳ－11　焼土(2)


18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47
H
I
J
K
L
M
N
O
P
Q
R
S
T
1
2
3
4
5
6
7
8
0
50m
Ⅳ層直下
Ⅴ層上部
Ⅴ層中・下部

図Ⅳ－12　焼土分布図

3　包含層出土の遺物

牛舎川右岸遺跡では，遺構出土分も含めて12,946点の遺物が出土した。その内訳は表Ⅳ－2に示したとおりである。

(1)　土器

土器については，遺構出土分も含めて口縁部破片を全点抽出し，文様，胎土，焼成等の異同から個体識別を行なった。表Ⅳ－3に示したとおり，Ⅲ群が大部分を占め，他にⅠ群・Ⅴ群・Ⅵ群・Ⅶ群が僅かながら出土している。

表Ⅳ－2　遺物点数

種別	点　数
土　器	12,620
石　器	128
剝　片	195
石製品	3
計	12,946

表Ⅳ－3　土器個体数

群	破片数	個体数
Ⅰ	144	8
Ⅲ	11,897	297
Ⅴ	227	10
Ⅵ	183	5
Ⅶ	169	5
計	12,620	325

Ⅰ群（図Ⅳ－14－1～10）

a類（1・2・4～8）

a類は5個体分出土している。4には波状の細い沈線が認められ，沈線の交点に刺突文が施されている。器面はよく磨かれ，裏面には条痕がみられる。5には貝殻腹縁圧痕文と沈線が認められる。4・5は物見台式に関連するものと考えられる。

1・2・6～8は無文あるいは条痕文が施されたものである。1は口縁部に直径2 mm程の外側から刺突された貫通孔がめぐり，底部が張り出す平底の土器で内面に条痕がある。比較的薄手の土器で，口唇断面はやや尖りぎみである。登別市川上B遺跡A地区出土資料（北埋文1983）の一部に類似する。2は1と同様，底部が張り出す平底の土器であるが，内外面共に無文である。内面には炭化物が付着している。6～8は同一個体と思われるもので，内外面共に条痕がみられる。

b類（3・9・10）

9はコッタロ式に相当するかと思われるもので，絡条体圧痕文と縄端の圧痕文が施されている。3・10は中茶路式に相当するものである。3は微隆起線文の間に縄文，短縄文が施されたものである。10には短縄文が密に施されている。

Ⅲ群（図Ⅳ－14－11～図Ⅳ－21－272）

当遺跡の主体をなす土器群である。道央部の柏木川式（大沼1981）に相当するものをA類，文様構成，出土状況からA類に伴うとみなされる道南系の土器をB類として区別した。B類は胎土・焼成から明らかにA類と区別できる。また，A類とは明らかに異なるが，B類に含めるには疑問の残るものをB′類とした。

本群には植物繊維を含むものが多くみられるが，それについては表Ⅳ－5に示している。

また，縄文原体については器面が摩滅して節の観察が困難なものが多く，これらについては原体最終段の右撚，左撚の区別のみに留まり，単にＬＲ・ＲＬと表記する。全体の傾向としてＬＲの原体を用いたものが多い。なかには0段多条のもの，無節のもの，複節のもの等も認め

られる。縄文については特に表記しない限りＬＲの原体を用いたものである。

Ａ類（11～222・246～270）

胎土に砂粒を多く含む厚手の土器である。厚さは１cm前後のものが多い。内面は比較的丁寧に処理されているが，砂粒を多く含むため全体に荒い印象を受ける。口唇の断面形は角形あるいは丸みを帯びたものが多いが，なかにはやや尖るものもある。

Ａ類は文様要素から７類に分類され，それぞれ細分される。

Ａ－１類（19～24）

口縁部に沈線文が施されたもので，ａ，ｂに細分される。

ａ（19～21）：比較的太い沈線文が施されたものである。19 abcは同一個体のもので，口縁部が外反し，胴が張る器形がうかがえる。口縁部の突起部分から貼付文が縦に下がり，胴部にも隆起帯がめぐる。隆起帯の上には縄線文が施されている。また，口唇上には縄文と刺突文がみられる。地文はＲＬの斜行縄文である。20は沈線と刺突が組み合されたもので，口唇上には縄文が施されている。21は胴部に一条の沈線がめぐり，口縁部には縄線文と浅い沈線文が斜めに施されている。口唇は尖りぎみで口唇上には刺突文がみられる。

ｂ（22～24）：細く浅い沈線文が施されたもので，いずれも比較的薄手の土器である。22は縦に２条の沈線がみられ，その間に縄線文が施されている。口唇上には刺突文がみられる。23には沈線文が縦に施されている。24は縦横に沈線が認められ，隆起帯が垂下する。

Ａ－２類（25～41）

口縁部に刺突文が施されたものである。27・28・33・40のように口唇の外側角に刺突されたものも便宜的に本類に含めた。本類は口唇上の文様，口唇形態からａ～ｃに細分される。

ａ（25～27）：口唇上にも刺突文が施されたものである。刺突文は25･27が器面に対してほぼ垂直に，26は斜め右から施されている。25は口縁部に直径４ mm程の円形の刺突が３列施されている。

ｂ（28～40）：口唇上に縄文が施されたものである。34・36・38・39は斜め右から刺突文が施されている。39･40には縦にも刺突文が施されている。39は下から上へ，40は上から下へ刺突されている。28・31・36・37には綾絡文が認められる。

ｃ（41）：口唇がやや尖るものである。刺突文は口唇直下に斜め右から施されている。地文はＲＬの斜行縄文である。

Ａ－３類（11～13・42～52）

隆起帯のみられるものである。本類は文様要素からａ～ｄの４種に細分される。口唇上には刺突文が施されるもの，縄文が施されるもの等がある。

ａ（42～47）：隆起帯上に刺突文が施されるものである。43～46には口唇上にも刺突文が施されている。47には縄線文が施され，口唇上にも縄線文が認められる。42には０段多条の縄文が施されている。

ｂ（11・13・48～51）：隆起帯上に縄線文が施されたものである。11は胴が張り，口縁部がや

や外反する深鉢である。口縁部には地文の縄文施文後，５条の縄線文が施され，口縁部の突起に対応して２条の縄線文が垂下する。13は口縁部が外反し，胴が張るもので，口縁部の突起下及び突起間に縄線文が垂下する。縄線文は口唇上にも施されている。48は口縁部に縄線文がめぐり，口唇上には刺突文が施されている。49～51の口唇上には縄文が施される。

ｃ（52）：隆起帯上に絡条体圧痕文が施されたものである。地文は無節の撚糸文であり，胴部の隆起帯上にはこの撚糸文の原体を押捺したとみられる絡条体圧痕文が施されている。

ｄ（12）：隆起帯上に撚糸文が施されたものである。口縁部の突起下にも馬蹄形の隆起帯がみられる。この土器には３種類の施文原体が用いられており，①馬蹄形の隆起帯に囲まれた部分に施された縄線文，②馬蹄形の隆起帯右側に施されている縄線文の原体を回転したと考えられる斜行縄文，③胴部，隆起帯上及び口唇上に施された１段の縄の撚糸文，④口縁部左側に施された細い２段の縄を使用したとみられる撚糸文，以上４種類の文様が認められる。

Ａ－４類（18，53～89）

口縁部に縄線文が施されたものである。本類は口唇上の文様及び口唇形態からａ～ｅの５種に細分される。

ａ(53～59)：口唇上に刺突文が施されたものである。口唇上の刺突は53～59いずれも器面に対してほぼ垂直に施されている。地文が58がＲＬ，他はＬＲである。

ｂ(18，60～66)：口唇上にも縄線文が施されたものである。18には一段Ｒの原体を押捺した縄線文と，同じ原体を回転した無節の縄文が施されている。65には綾絡文かみられる。

ｃ（67～77）：口唇上に縄文が施されたものである。71・75には綾絡文が施されている。

ｄ(78～86)：口唇上が無文あるいは磨かれたものである。83～86には綾絡文が施されている。78・80・81にはＲＬの縄文が施されている。80・81は同一個体である。

ｅ（87～89）：口唇断面がやや尖るものである。89は口唇上に縄文が施されている。

Ａ－５類（14～17・90～178）

口縁部に地文の縄文だけが認められるものである。本類も口唇上の文様と口唇形態からａ～ｅの６種に細分される。

ａ（14・15・90～113）：口唇上に刺突文が施されたものである。刺突文は111を除いて器面に対して垂直に施されている。14は口縁部が外反し，胴部が張る深鉢である。15には綾絡文が施されている。90の口唇上には縄文もみられる。

ｂ（114～125）：口唇上に縄線文が施されたものである。縄線文の原体と縄文の原体は同じもの，あるいは同じ段･撚りのものが多くみられるが，121は縄線文にはＲの原体，地文にはＬＲの原体を用いている。125には前々段反撚ＲＬＬの原体による縄文が施されている。

ｂ'(126)：口唇上に縄を押捺したものである。地文はＬＲＬの複節斜行縄文，口唇上にはＲＬの原体による刻み目様の文様が施されている。

ｃ（16.17.127～164）：口唇上にも縄文が施されたものである。16・17・127・128・145・146には綾絡文が認められる。163には結束第１種の羽状縄文，157には太さの異なるＲの縄を２本

撚り合わせたＬＲの縄文が施されている。127・138・142・148・151・160・161・164はＲＬの縄文が施されたものである。160・161は同一個体。

d(165～171)：口唇上が無文あるいは磨かれたものである。170にはＲＬの縄文，171には157と同様，太さが異なるＲの縄を２本撚り合わせたＬＲの縄文が施されている。

e(172～178)：口唇断面がやや尖るものである。172は口唇上に縄を押捺して刻み目を作り出している。173，174の口唇上には縄文が施されている。

Ａ－６類（179～182）

口縁部が無文のものである。口唇上の文様からａ，ｂの２種に分けられる。

ａ（179）：口唇上に竹管状の原体による刻み目が施されたものである。

ｂ（180～182）：口唇上が無文あるいは磨かれたものである。181・182の口唇断面は尖っている。

Ａ－７類（183～222）

装飾文様のある胴部破片を便宜的に一括した。本類は文様構成からａ～ｆの７種に細分される。

ａ(183・184)：沈線文と隆起帯が組み合されたものである。183は隆起帯の上下に沈線文が施され，隆起帯が強調されている。隆起帯上には斜め右から施した刺突文がみられる。地文の縄文は下半部では縦行ぎみとなる。184も隆起帯の上下が沈線文で区画されており，沈線文が弧をなす部分もある。隆起帯上には縄端による刺突が加えられている。

ｂ(185～201)：隆起帯上に刺突文が施されたものである。185は横方向に２条の隆起帯が認められるもので，隆起帯上には器面に対してほぼ垂直に刺突文が施されている。186は隆起帯の上下が縄線文で区画されている。187は隆起帯上に３列の円形刺突文が施されている。188・189は隆起帯の上下にも刺突列がみられる。190・196・198には半截竹管状の工具による押引風の刺突文が施されている。191，200は器面に対して斜め右から刺突文が施され，192～195・197・199・200は器面に対してほぼ垂直に円形の刺突文が施されている。195ａ・ｂは同一個体で，縦方向の刺突列が組み合されている。

ｂ'(202～212)：隆起帯が不明瞭で，その上に刺突文が施されたものである。202～212はいずれも器面に対して斜め右から刺突文が施されている。202には綾絡文がみられる。

ｃ(213～218)：隆起帯上に縄線文が施されたものである。213は隆起帯の上部が指でなでられている。215には綾絡文が施されている。216はＲＬの縄文が施されたものである。

ｄ（219)：隆起帯上に縄文が施されたものである。

ｅ(220)：刺突文が施されたものである。縦の刺突列がみられる。図示したものには隆起帯は認められないが，195のような文様構成のものと考えられる。

ｆ（221～222)：浅い沈線文が施されたものである。221・222は底部に近い部分の破片で，縄文施文後沈線文が施されている。23・24の口縁部と関連するものと考えられる。

底部（246～270）

A類に属する底部である。底径の推定できるものを図示した。平底で底が張り出すものが多い。255・258などのように上げ底ぎみになるものもある。266は42の底部の可能性がある。

B類（223～242・271・272）

内面調整が行き届いた薄手の土器である。胎土にはあまり砂を含まない。A類土器とは胎土色調，焼成から明瞭に区別できる。本類は文様要素からB1類からB4類の4類に分けられ，さらに細分される。229・232・241・242の胎土には海綿骨針（北埋文1988）が含まれている。

B－1類（224～226）

沈線文と刺突文が組み合されて施されたものである。

224は2本単位の細い沈線文の間に刺突文が施されたものである。225には太めの沈線文の下部に刺突文が施されている。226は沈線で区画された部分に刺突文がみられるものである。

B－2類（227～230）

隆起帯をもつものである。

227～230はいずれも隆起帯上に縄線文が施されている。227は口縁部に縄線文がめぐり，縄線文の間に縄端の刺突が施される。口唇上にも縄文が施されている。228は植物繊維を多量に含む非常に軽い土器である。227も他に比べると軽い。230は口縁部が外反する薄手の土器で，口縁部には1条の縄線文がめぐる。B類のなかでも胎土に含まれる砂の量が多い。

B－3類（231～236）

縄線文が施されたものである。本類は口唇上の文様からa・bの2種に細分される。

a（232～235）：口唇上に縄線文が施されたものである。口縁部の縄線文は233を除いて地文の縄文施文後に施されている。

b(231，236)：口唇が磨かれたものである。231は228と同じく胎土に植物繊維を含む軽い土器である。

B－4類（223・237～239）

口縁部に地文の縄文だけがみられるものである。本類はa～cの3種に細分される。

a(223)：口唇上に縄線文が施されたものである。223は口縁部が外反し，胴が張る深鉢である。全面に縄文が施されており，底部近くでは横走ぎみの縄文となる。

b(237～239)：口唇上に縄文が施されたものである。238には無節の縄文が施されている。239の縄文はLRの原体を縦方向に回転したものである。

c（240～242）：口唇上無文，あるいは磨かれたものである。241・242は同一個体の土器で，口縁部に無文部がみられる。

底部（271・272）

B類に属すると考えられる底部である。薄手で内面は丁寧に調整されている。271・272いずれも底がやや張り出している。

B′類（243～245）

内面調整が行き届いた薄手の土器である。A類とは明らかに区別できるが，内面調整の印象

がB類とやや異なるため便宜的に本類を設けた。B類に含まれるものがあるかもしれない。

243には口縁部に刺突文が施されている。244は口唇直下に隆起帯が認められ，その上に縄線文が施されている。綾絡文もみられる。245は無文の土器で，口唇上にはヘラ状工具による刺突文が施されている。

V群（図IV－22－273～282）

a類（274～279）

274は口縁部が外反する無文の土器で，頸の短い壺形を呈するとみられる。口唇断面はやや丸みを帯び，胎土には砂粒が多く含まれている。他群の可能性もあるが，一応ここに含める。

275・276は縄文の施されたもので，口唇の断面は角形である。276にはＬＲの原体による羽状縄文が施されている。277・278は爪形文が施されたものである。279には浅い沈線でＳ字状の文様が連続して描かれている。地文はＲＬの斜行縄文である。口唇上に刻み目がある。

C_2類（273，279～281）

273は口縁部がやや内傾する深鉢と考えられる。口縁部に２条の沈線文がめぐり，口唇上は刻まれている。地文は縦走するＲＬの縄文である。280には横走ぎみの縄文が認められ，口縁部に２条の沈線文が施されている。

C_3類（282）

282は鉢形を呈する土器と考えられる。口唇上には縄と棒状工具の側面圧痕がみられる。口縁部内面には浅い円形刺突文が認められる。

VI群（図IV－22－283～288）

b類（283～285）

283は口縁部に３条の沈線文が施され，口唇外側には刻み目がつけられている。口縁部内面にも１条の沈線文が施されている。アヨロ第２類（高橋他1980）に相当するものかと思われる。284・285はアヨロ第３類に相当すると思われるもので，細く浅い沈線文と刺突文により文様が構成されている。

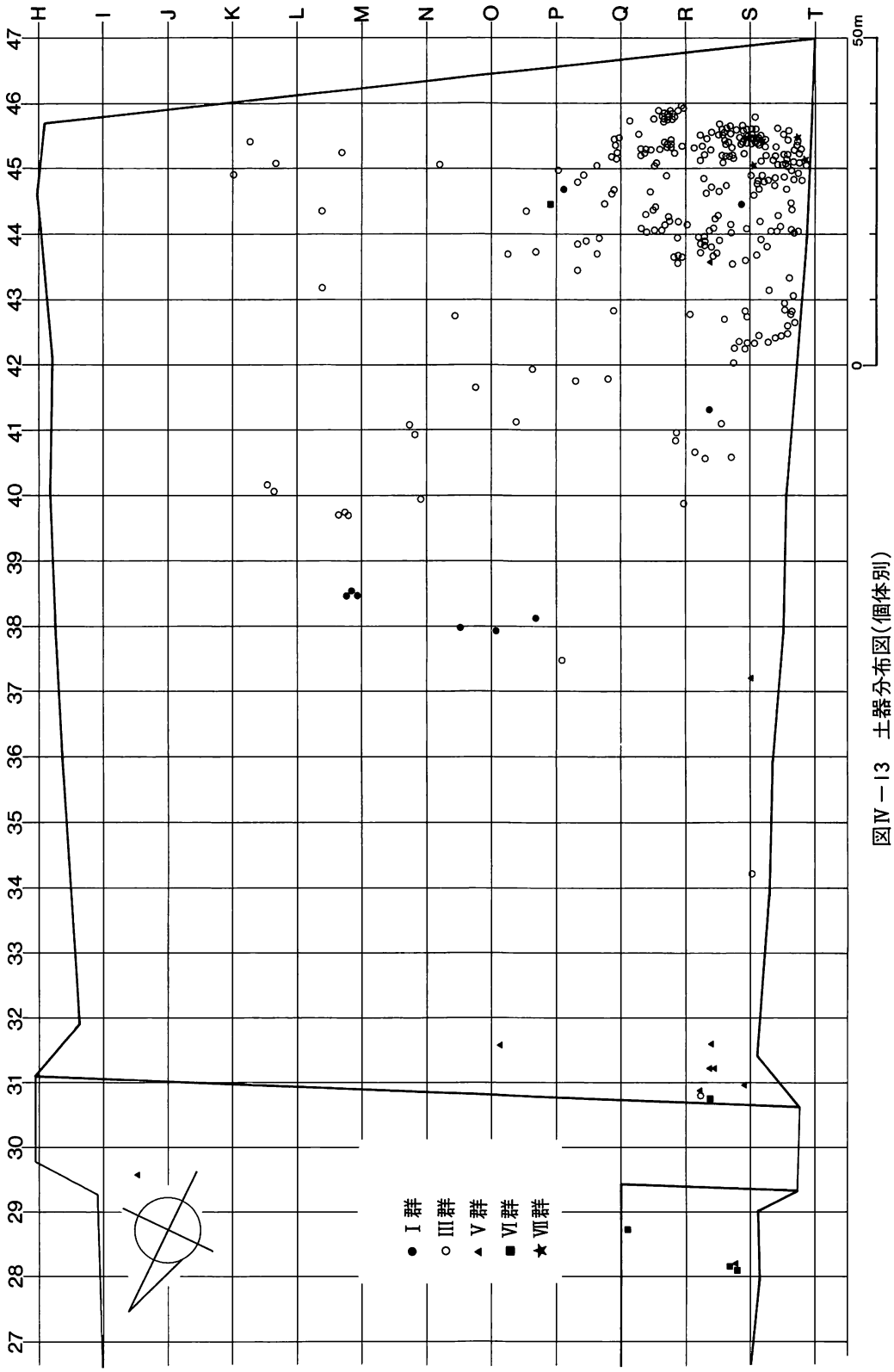
c類（286～288）

本類はいずれも後北C_2式に相当するものである。286は縞縄文と微隆起線で文様が構成されている。286・287は同一個体である。

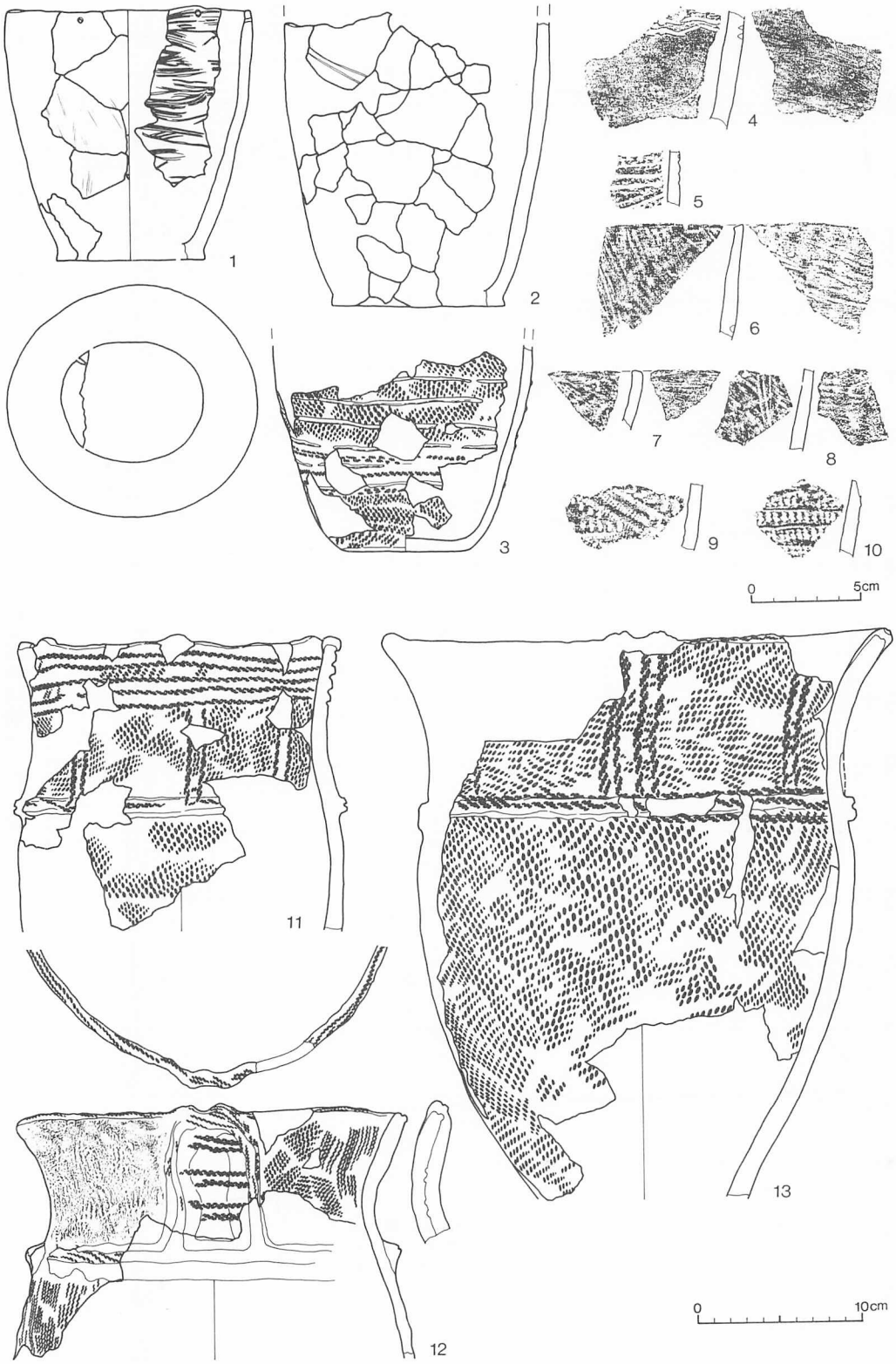
VII群（図IV－289～293）

坏（289～291）：289・291は体部の外面中位に段をもつ丸底の坏である。289は内外面共にヘラミガキされている。290にはナデの後，一部ヘラミガキが認められる。290は体部外側に段をもつ平底ぎみの坏である。口縁部はナデの後，一部ヘラミガキ，体部から底部にかけてはハケメが施されている。坏の内面はいずれも黒色処理されている。

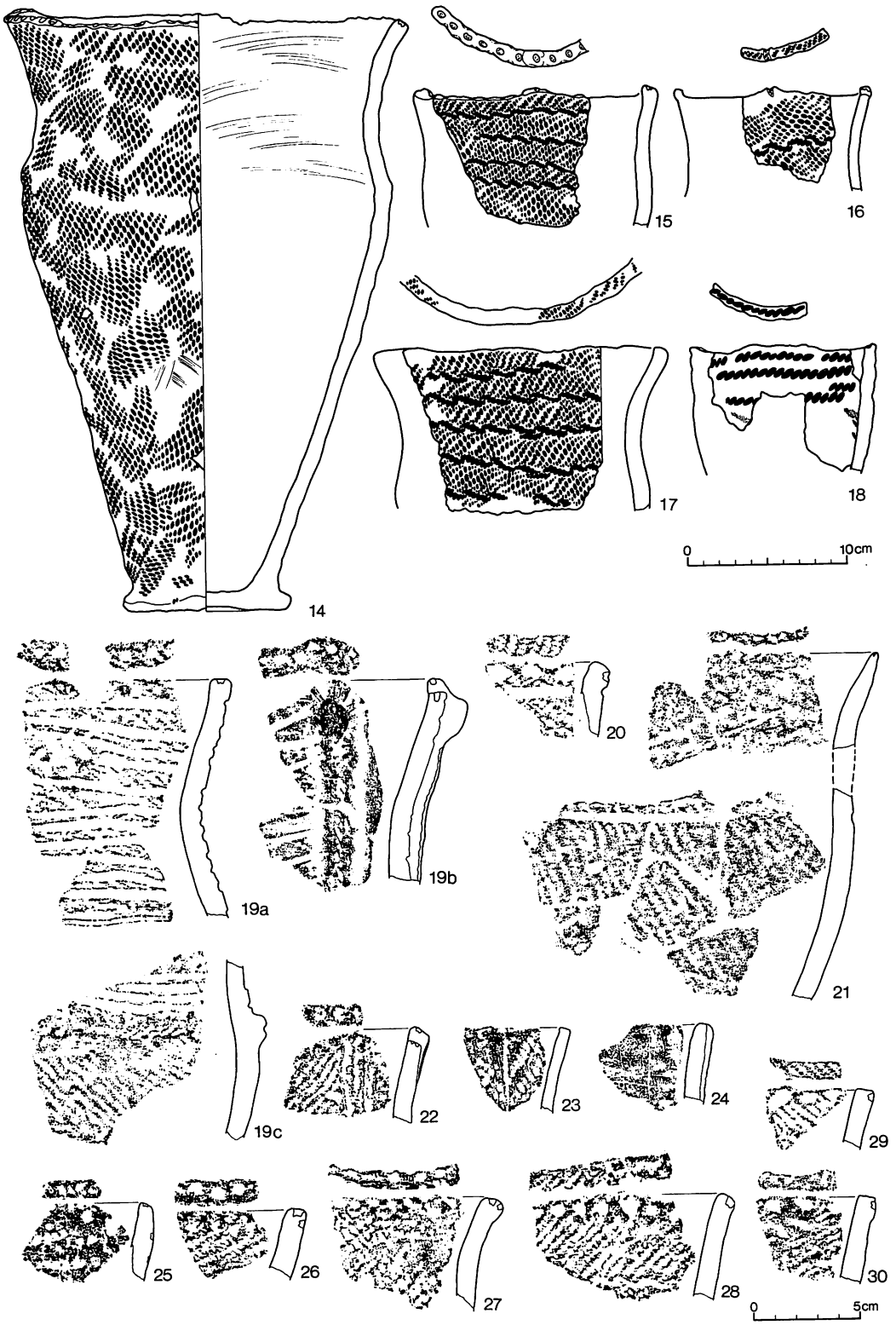
甕（292，293）：292は口縁部が外反して立ち上がるものである。口縁部はヘラナデによって段が形成されている。体部及び内面にはハケメが認められる。293は体部下半部のみで口縁部の形態・文様は不明である。器面はヘラナデされており，内面は黒色を呈する。（工藤研治）



図Ⅳ－13　土器分布図(個体別)

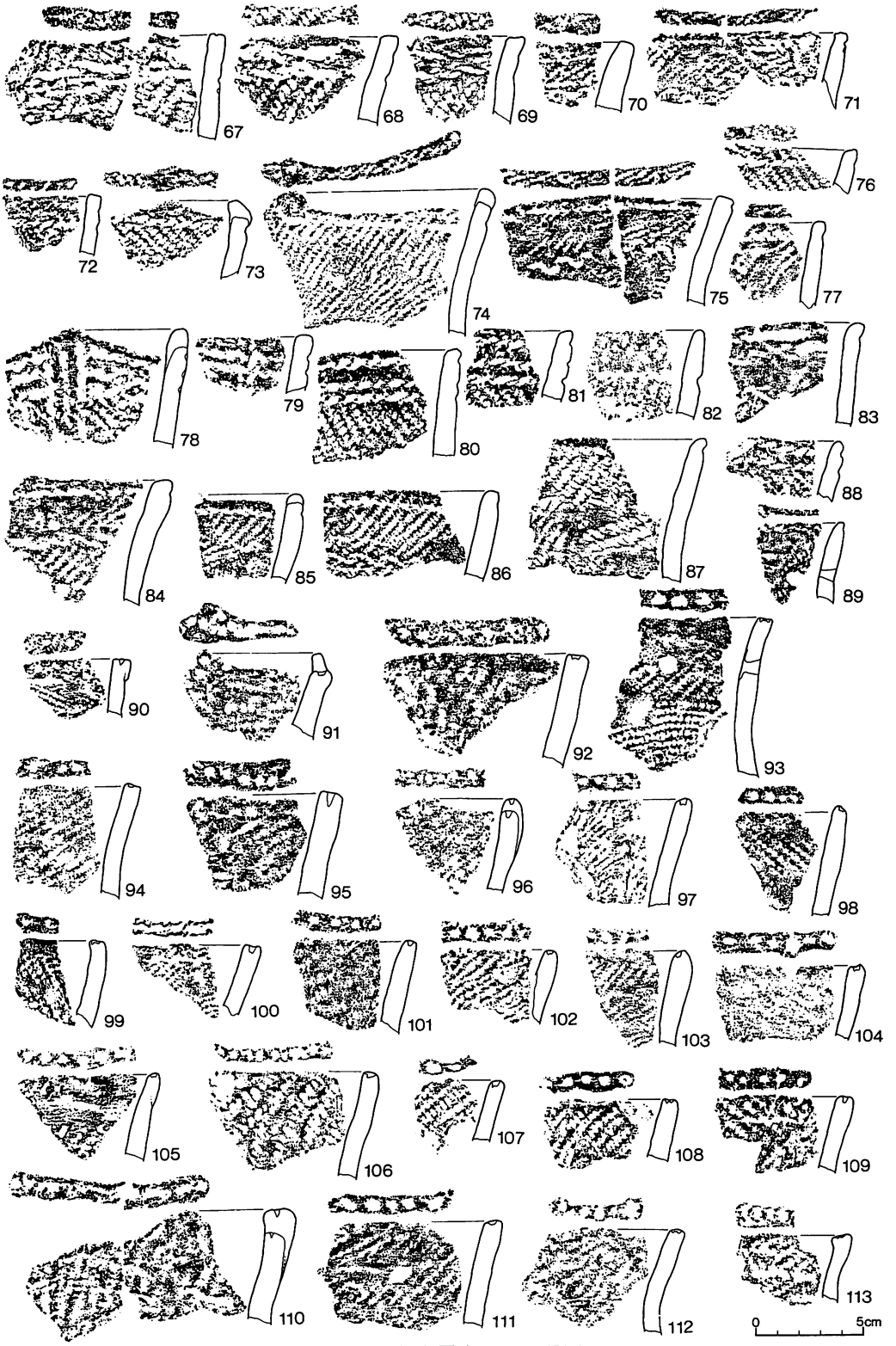


図Ⅳ－14　包含層出土の土器(1)

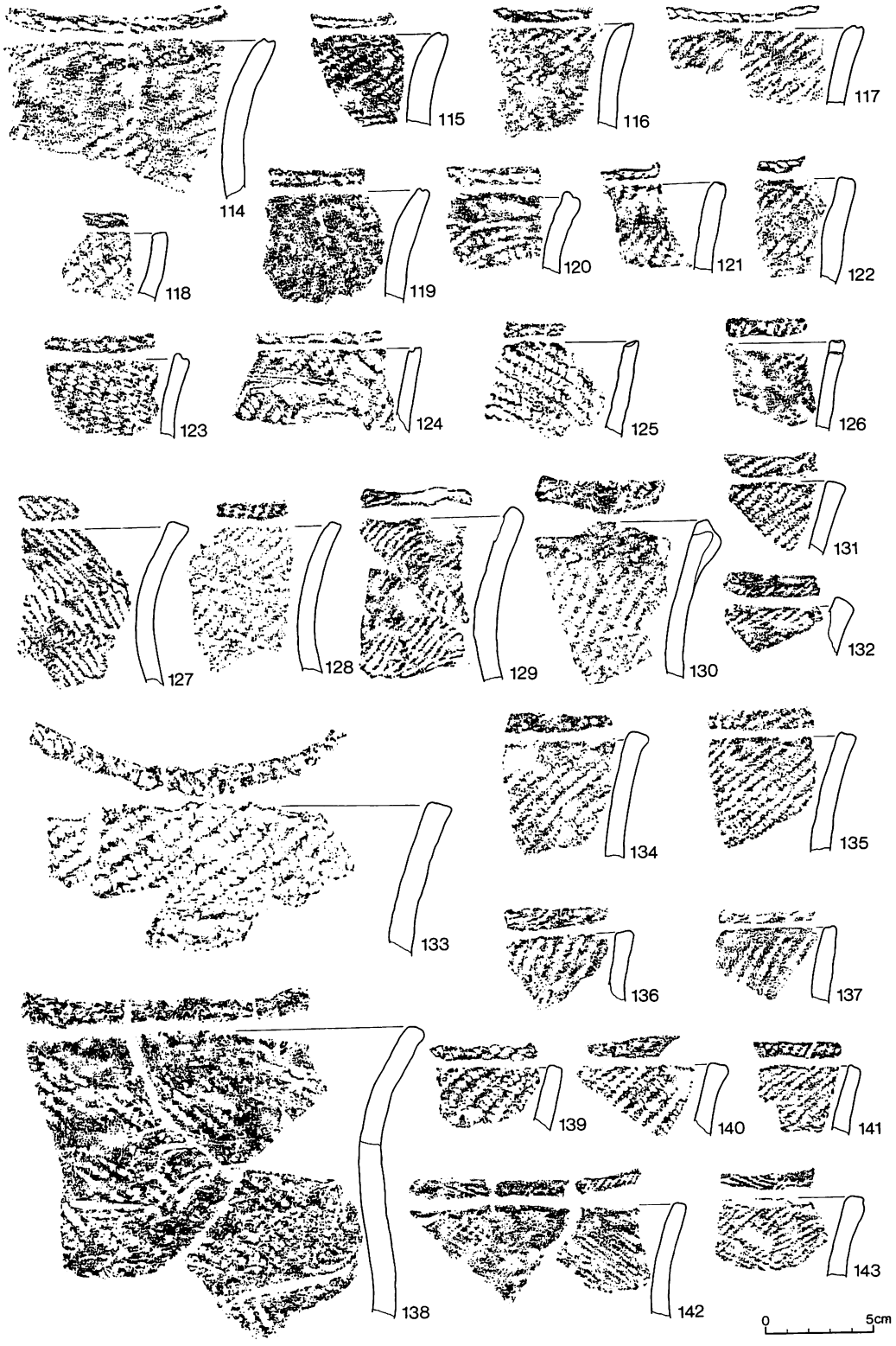


図Ⅳ－15　包含層出土の土器(2)

図Ⅳ－16　包含層出土の土器(3)

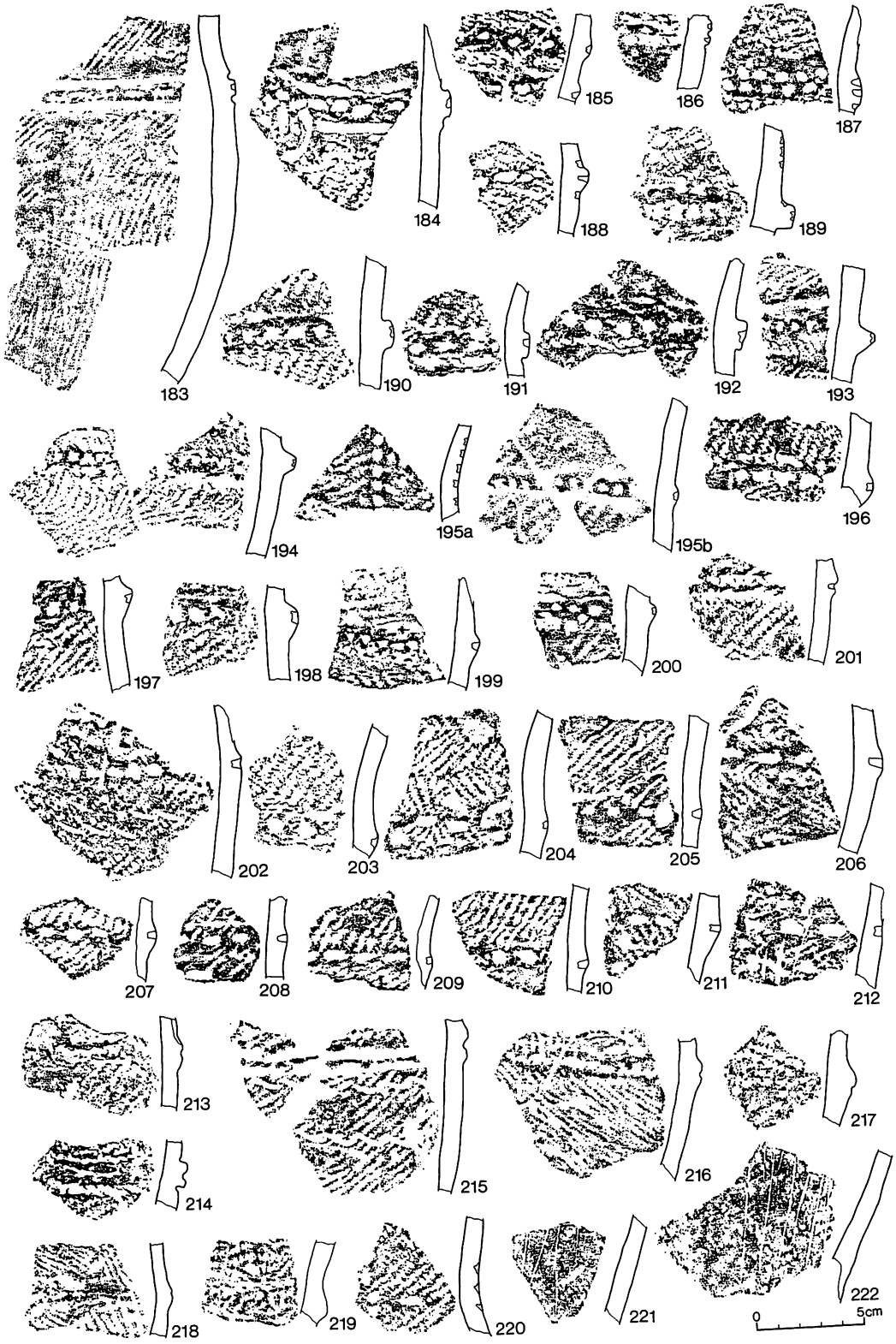


図Ⅳ－17　包含層出土の土器(4)

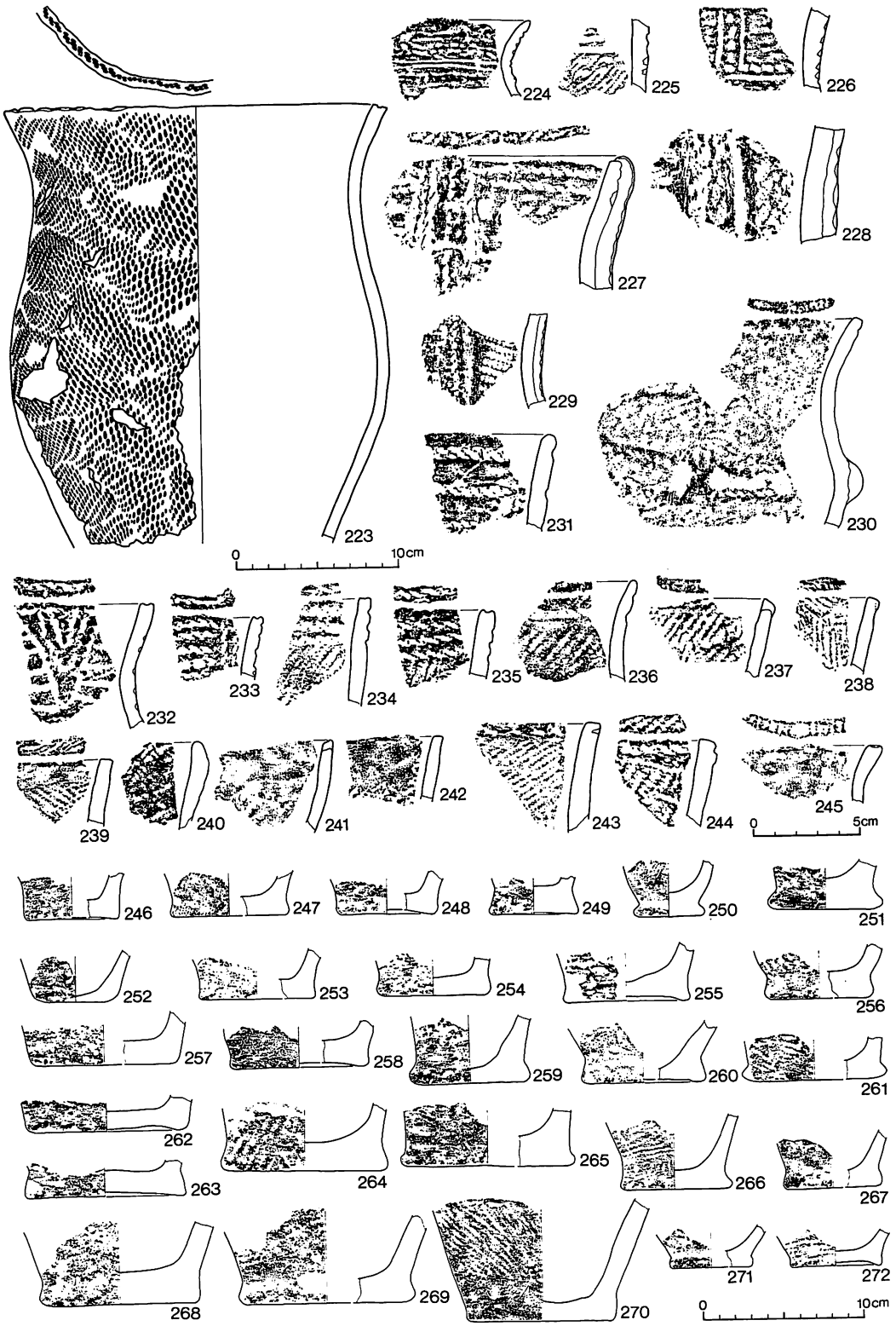


図Ⅳ－18　包含層出土の土器(5)

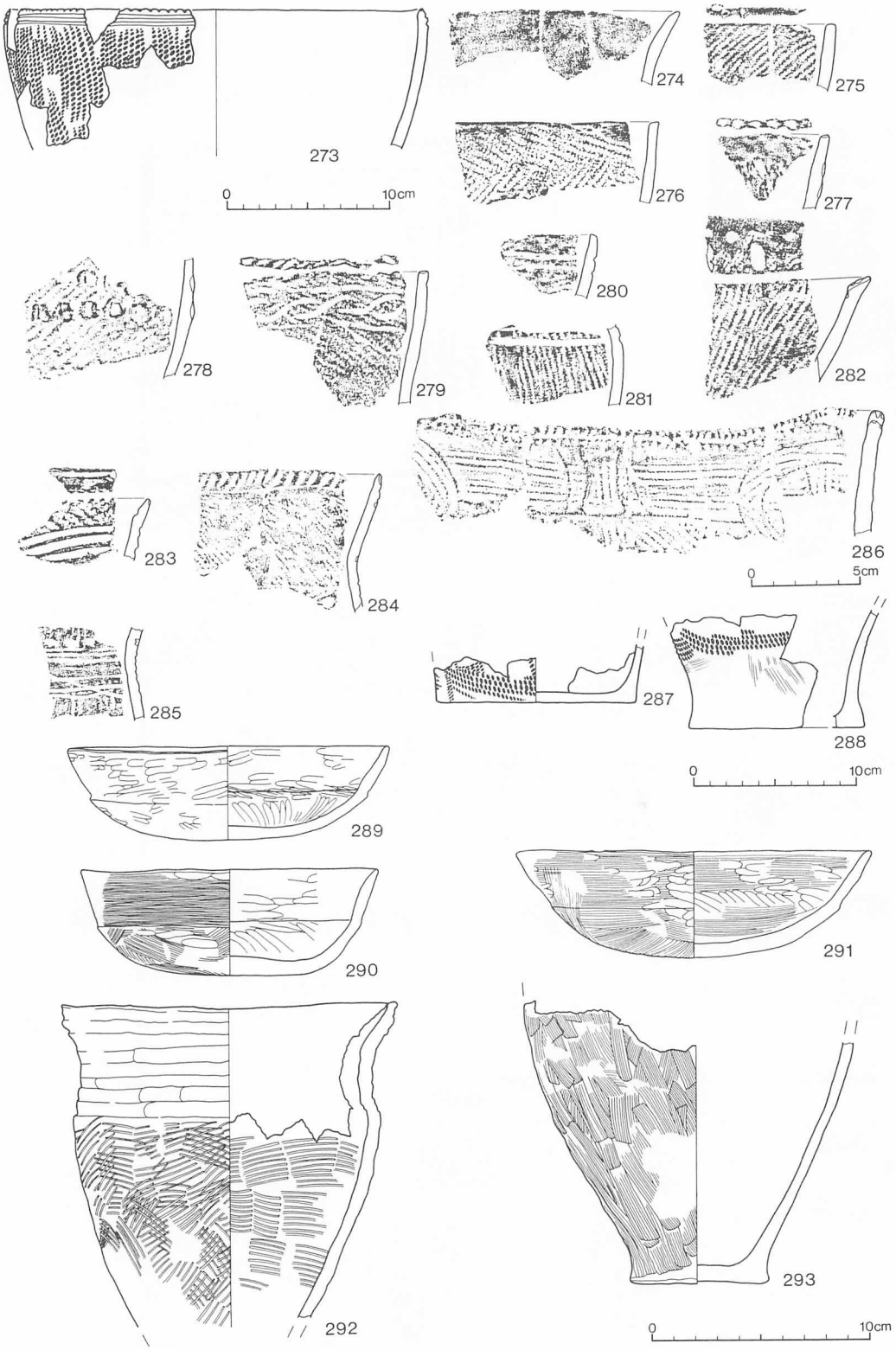
図Ⅳ－19　包含層出土の土器(6)



図Ⅳ－20　包含層出土の土器(7)



図Ⅳ－21　包含層出土の土器(8)



図Ⅳ－22　包含層出土の土器(9)

(2)　石器・石製品

本調査では，石器・剝片・石製品が計296点出土した。住居跡（H－1）覆土から検出した石斧1点を除き，他は全て遺構外から出土した。出土層位は表土（Ⅰ層）を除けば，ほとんどがⅤ層である。

石鏃（図Ⅳ－23－1～30）

石鏃は40点出土，このうち全体形のうかがえる30点を図示した。無柄，有柄のものがあり，有柄のものはさらに，菱形，柳葉形，かえしの明瞭なものにわかれる。

1～5は無柄で二等辺三角形状を呈し，基部が内湾し，4，5は尖頭部がわずかにふくらむ。3，4は一次剝離面を残す。2は片岩製で全体に粗く調整されている。

6～30は有柄のものである。6，7，11は菱形を呈する。7は片面のみ加工され，また厚いことから未成品の可能性がある。8～10，12～16は柳葉形を呈するものである。8は両面ともに周縁部のみの調整で，9，13は一次剝離面を残す。9は左右非対称形で厚く，未成品の可能性がある。14は尖頭部がふくらみ，先端が鈍角となる。17～30はかえしを有するもので，21～30は特に明瞭である。19，20は厚く，断面形がほぼ楕円形である。22は尖頭部がほぼ正三角形を呈する。24，30は一次剝離面を，29は礫皮面を広く残す。16は被熱している。石質は23，30は硬質頁岩である。これ以外は黒曜石である。

石槍またはナイフ（図Ⅳ－23－31・32）

石槍は7点出土，このうち2点を図示した。図示していないものは，いずれも小破片で，ナイフ・スクレイパーの可能性もある。31は全体に粗く調整され，不純物を多く含む。一次剝離面を残す。32は柄部であるが，石槍以外の可能性もある。石質はすべて黒曜石である。

石錐（図Ⅳ－23－33）

図示した1点が全てである。片面加工で刃部が長軸に対して屈折している。また刃部先端部には磨滅のあとがみられる。石質は黒曜石である。

ナイフ・スクレイパー類（図Ⅳ－24，25，26－64～67）

36点出土，このうち，34点を図示した。図示しなかった2点はいずれも小破片である。

34～36はいわゆる「石匙」で，いずれもつまみの作り出しは弱い。36はつまみというより柄といえる。34は片面外工で両側縁に刃部が作出されている。35は縦長剝片を素材とし，片面加工で全周に細かな調整が加えられ，礫皮を残す。36は縦長剝片を素材とし両面の片側縁に全体に粗い剝離で調整を加えている。34，35は珪質頁岩，36は流紋岩である。

37～45は縦長剝片を素材としたもので，すべて片面加工である。側縁または端部に刃部が作出されているもので，調整が全面に及ぶものはない。37は片側縁に湾入する刃部を作出し，他

の側縁は，わずかなはりだしをもち端部を尖頭状としている。38 は片側縁に外反する刃部をもち，端部を尖頭状としている。39 は両側縁に刃部をもつが，片側縁の刃部は純角に張りだす。また片面の端部には礫皮が残される。40 は片側縁にゆるくはりだす刃部が作出される。41 は両側縁に刃部をもつが，片側縁には直線的な，他の側縁には，わずかな張出しをもつ。被熱しており，とくに下半分は媒けて，ひび割れがはいっている。42 は両側縁に，ほぼ平行する刃部を作出している。43 は両側縁にわずかに調整を加え，また礫皮を広く残している。44 は一端部を欠損しているが，残りの全周に調整が加えられており，片側縁は外反する。45 は石刃状の剥片の片側縁にのみ調整が加えられている。37～45 の石質は全て珪質頁岩である。

46，47 は縦長剥片を素材とし，片面加工で周縁部に急斜度の調整によって刃部が作出されている。46 は，「石匙」の欠損したものかもしれない。47 は端部を尖頭状に作出している。石質は，ともに珪質頁岩である。

48～57 は片面加工で，円ないし不整形を呈するもの。48 は円礫を素材とし半球状で礫皮を半面に残す。49 はほぼ半周に刃部が作出され，端部に最大厚がある。50 は全周に急斜度の刃部が作出されている。51 はほぼ全周に急斜度の刃部が作出されている。52 は端部に，53 はほぼ周縁部に急斜度の刃部が作出され，刃部以外の大部分に礫皮を残す。一次剥離面が被熱している。54 は礫皮部を除く全周に急斜度の刃部が作出されている。55 は片側縁と端部に刃部が作出されている。56，57 は片側縁に刃部が作出され，56 は弧状となる。石質は，56 が珪質頁岩，57 はめのう，これ以外は黒曜石。

58～63，67 は両面加工で，側縁部ないし周縁部に刃部が作出されているもの。58 は周縁部に急斜度の刃部を作出し，礫皮を残す。59，60，61 は全体に粗い調整だが，59，60 は片側縁に，61 は端部に入念な調整が加えられている。62 は両面に入念な調整が加えられている。欠損しているため全体形は不明だが，柄部の可能性がある。63 は両側縁に刃部が作出されている。67 は周縁部に入念な剥離が加えられ，切り出し状となっている。柄部が半分欠損してる。続縄文土器に伴うものであろうか。石質は 62，63，67 は珪質頁岩，これ以外は黒曜石。

64～66 は両面加工のもので刃部の作出が明瞭ではなく，未成品あるいは欠損品の可能性がある。64 は片側縁に細かな調整が加えられている。66 は礫皮を残す。石質は，すべて黒曜石。

剥片（図Ⅳ－26－68～75）

剥片は 102 点出土し，このうち 8 点を図示した。70 を除いていずれも側縁部には使用痕と思われる微細な剥離が認められる。70 は，スクレイパーなどの欠損品かもしれない。石質は 74 が珪質頁岩で，他は黒曜石である。石核は出土していない。

石製品（図Ⅳ－26－76～78）

石製品は図示した 3 点である。76 は玉の欠損品である。表面には磨きの痕，また，割れ面には，すり鉢状をした孔がみられる。当初，玉状を呈していたと思われるが，欠損した後に，改

めて穿孔した途中のものと思われる。77は円盤状と思われる石製品の欠損品で孔などは認められないが，表面にはわずかに磨痕がみられる。78は珪岩の原石で表面は非常に滑らかである。割れているため全体形は不明だが，なんらかの目的で持ち込まれたものと思われる。76，77はかんらん岩の可能性がある。

石斧（図Ⅳ－27，28）

石斧は40点出土した。すべて磨製石斧である。このうち28点を図示した。図示しなかったものは，ほとんどが砕片で，同一個体とみられる砕片が4点あることから，個体数では35点ほどであろう。また，1点のみ擦切石斧（95）が出土している。96はH－1覆土（図Ⅳ－6参照）より出土した。完形品は，全長7 cmほど（79～81），8 cm前後（82～86，88，89），11 cm前後（90，91，92，95），およびそれ以上のもの（96～98）のおおよそ4種にわけられる。81は接合したものである。93，94を除いて，いずれもほぼ全面に磨きがかけられている。93，94のみは両側縁を敲打によって調整している。93，94，99～106はいずれも刃部が欠損しているが，刃部のみ出土した例はなかった。82，84，87，96は片刃で，80，86，92以外は刃部に最大幅がある。95は擦切石斧で両面にそれぞれ2条ずつ擦切痕がみられる。また刃部は長軸に対し斜めとなる。86，89，99，106は頭部に敲打痕がみられる。97は刃部が折損した後に刃部側より調整が加えられている。石質は，95が蛇紋岩であるほかは，泥岩である。

敲石（図Ⅳ－29－107，108）

図示した2点が出土した。107は溶結凝灰岩製。長方体状を呈し，一面を使用面としている。108は扁平な泥岩の長円礫を用いたもので，両側縁の一部を使用している。磨き痕もみられる。

砥石（図Ⅳ－29－109）

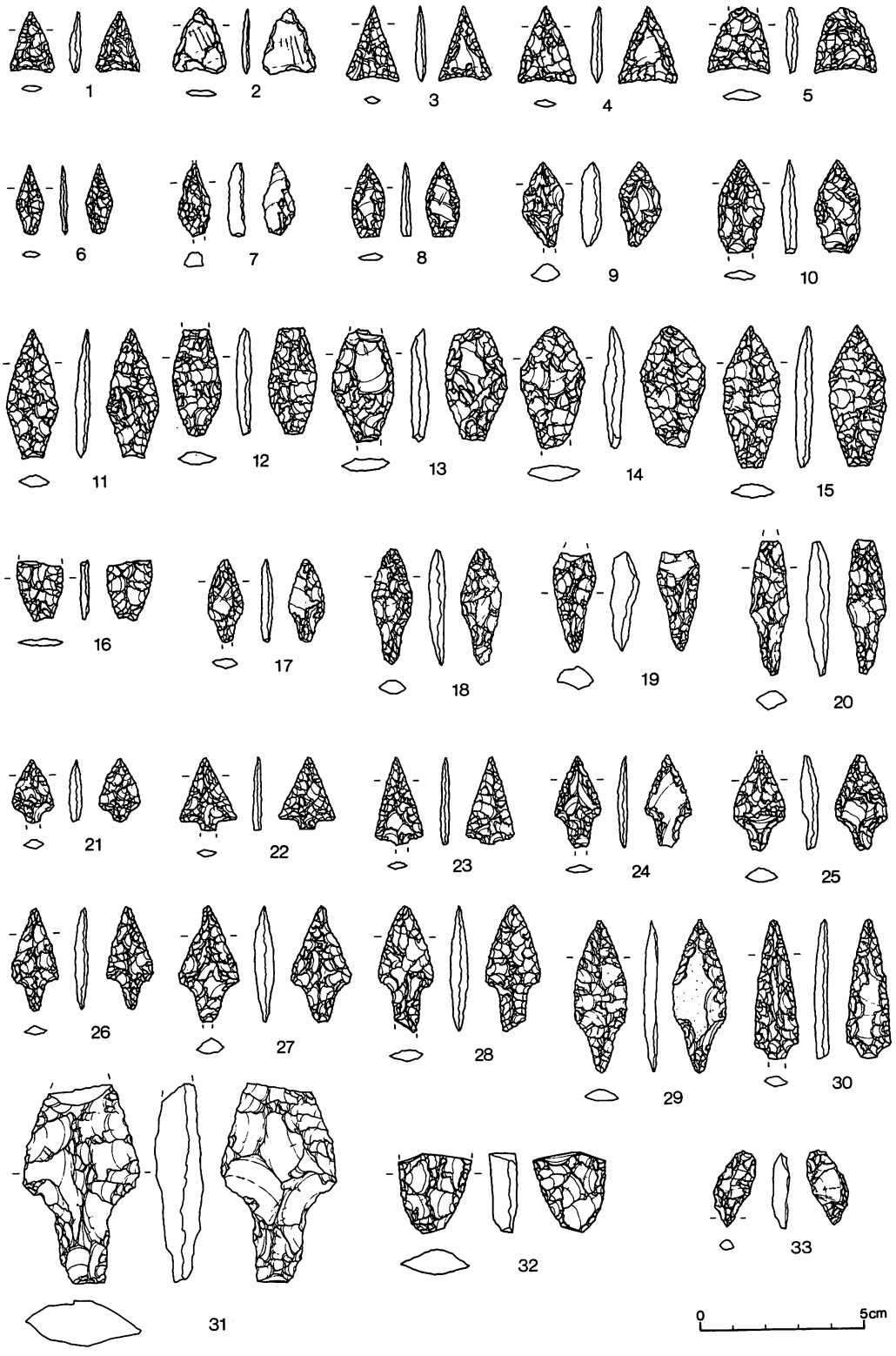
図示した1点が出土した。砂岩製。全体形は不明だが，残存部では三面を使用している。最も薄い部分では6 mmと非常に使いこんである。また，1部凹んでいる部分もあるが台石としても使用されたものであろうか。

擦石（図Ⅳ－29－110）

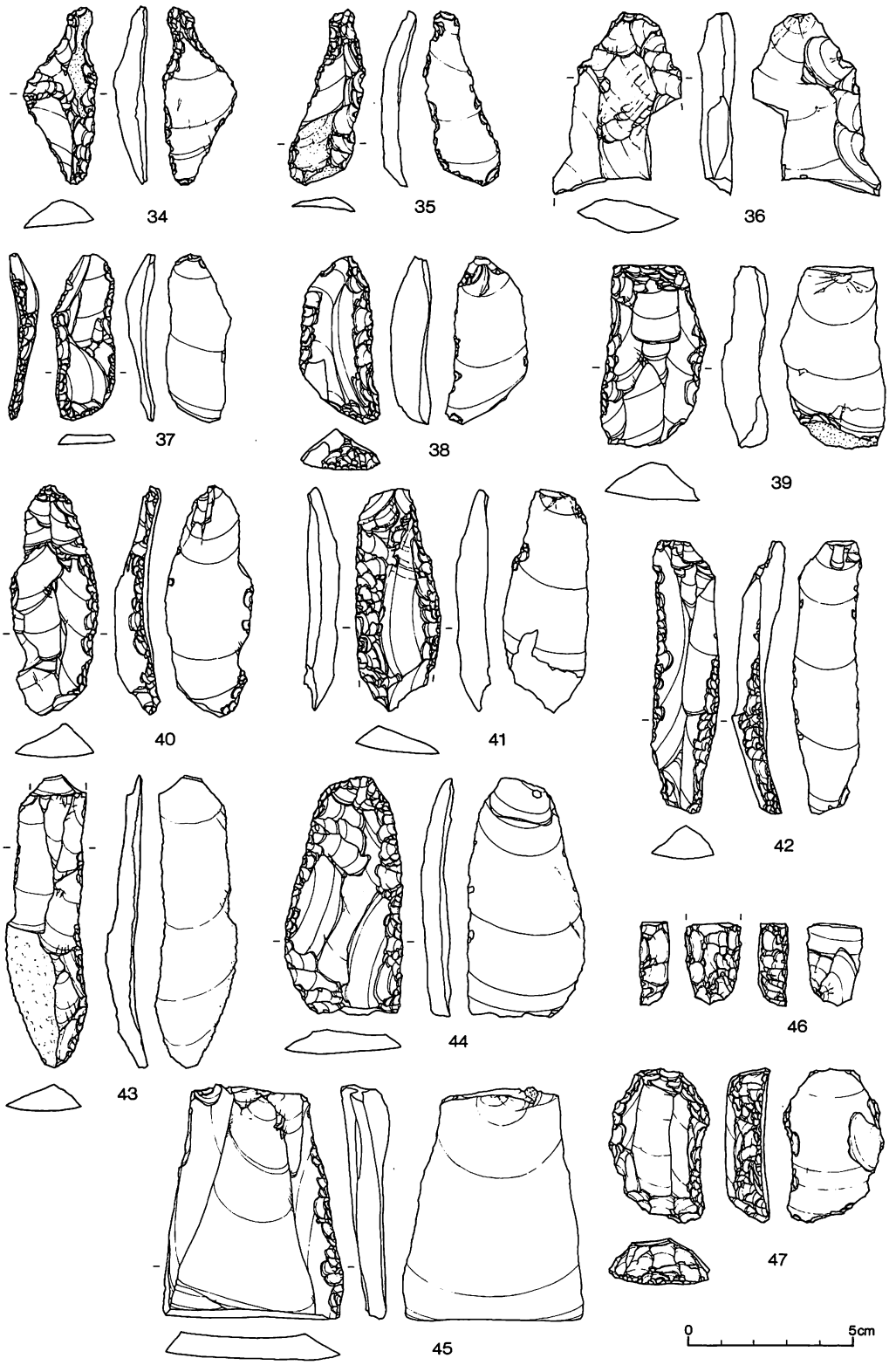
図示した1点が出土した。扁平な安山岩を使用している。擦面の両側縁には剥離痕がみられる。また，この長軸方向には打ち欠きがある。擦面の幅は1.5 cmである。

事前発掘調査の遺物（図Ⅳ－29－111）

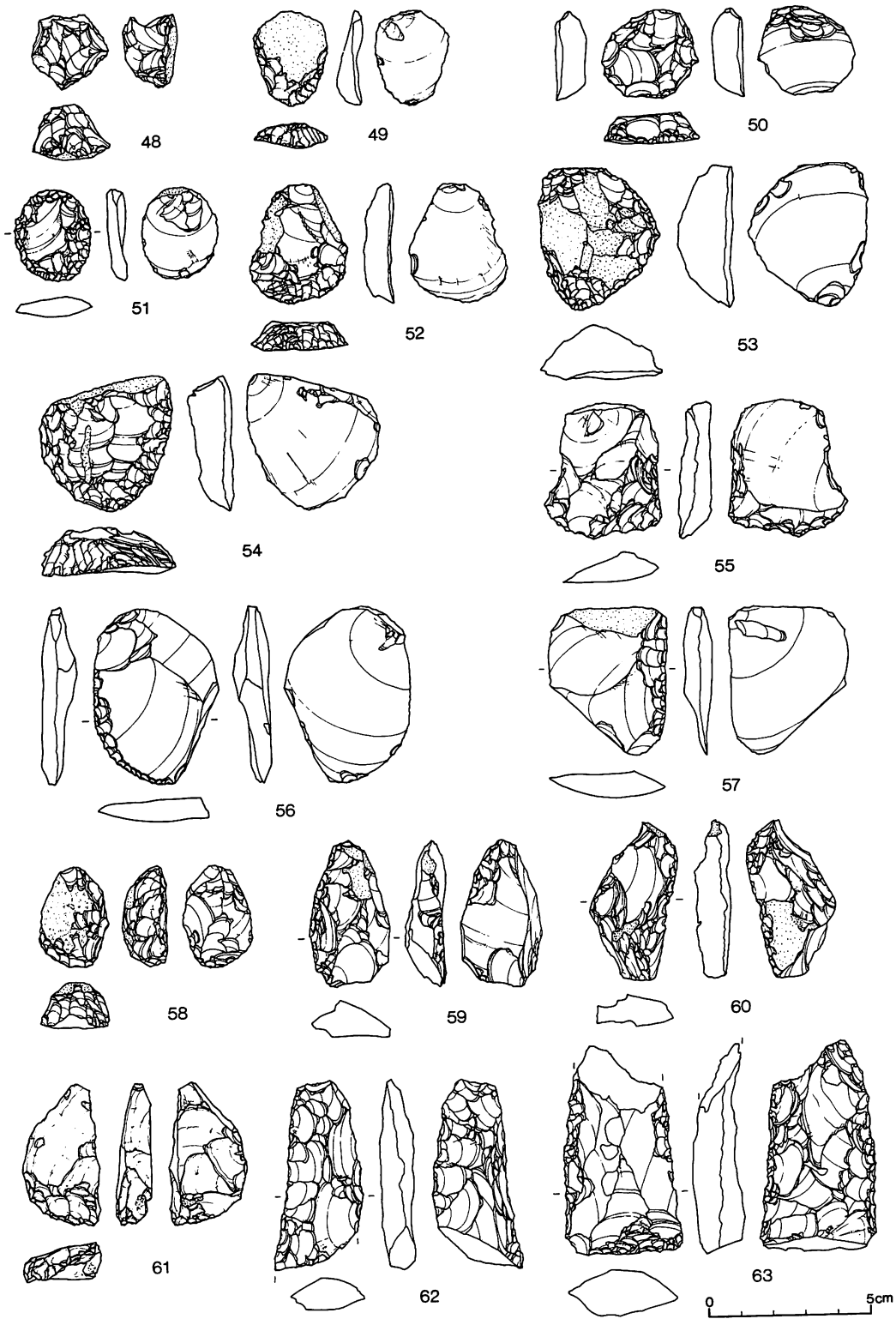
調査区北側の台地上より，昭和63年度の事前発掘調査によって出土したものである。先端部を欠損している有柄の石鏃である。石質は黒曜石である。（藪中　剛司）



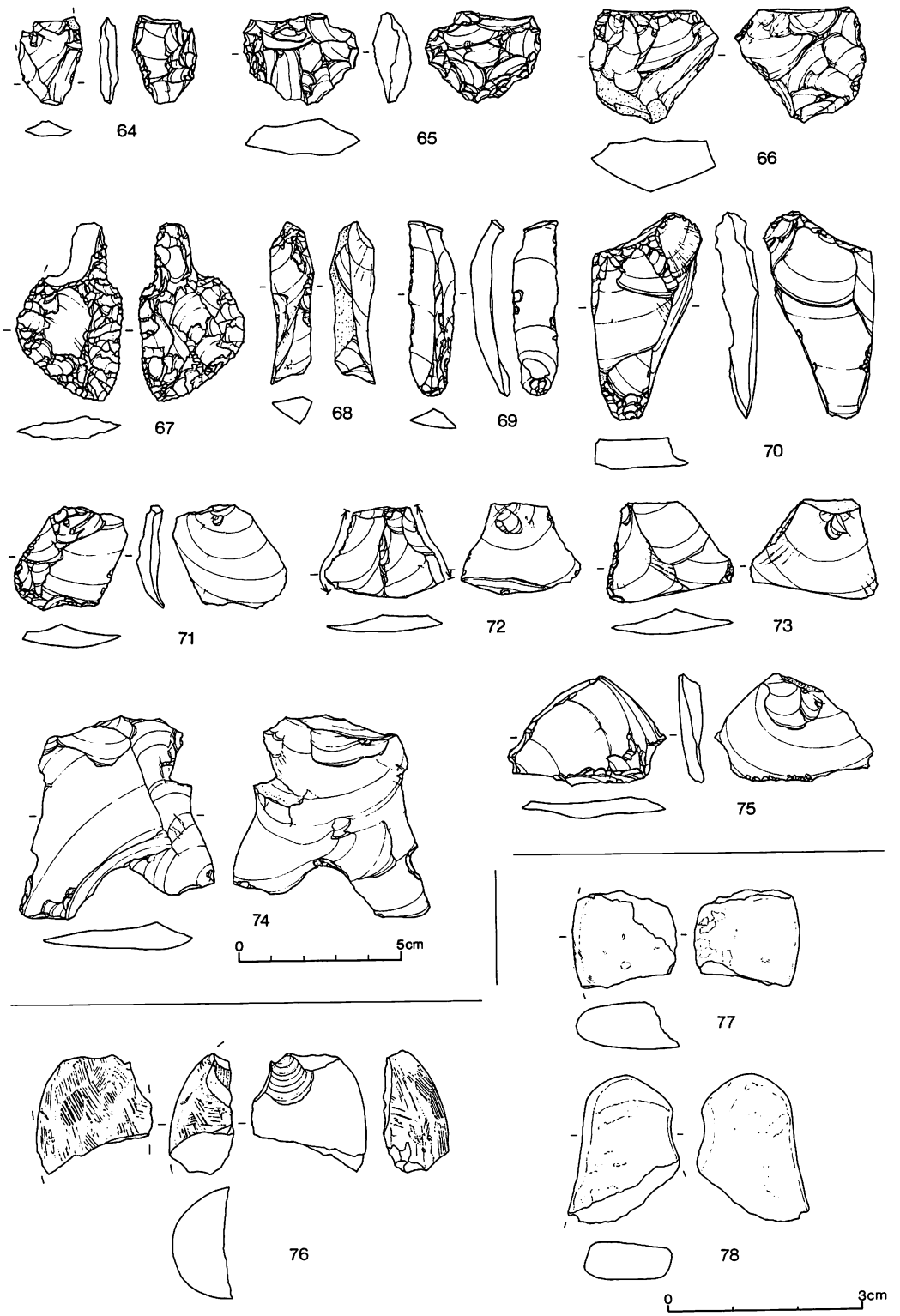
図Ⅳ－23　包含層出土の石器(1)



図Ⅳ－24　包含層出土の石器(2)

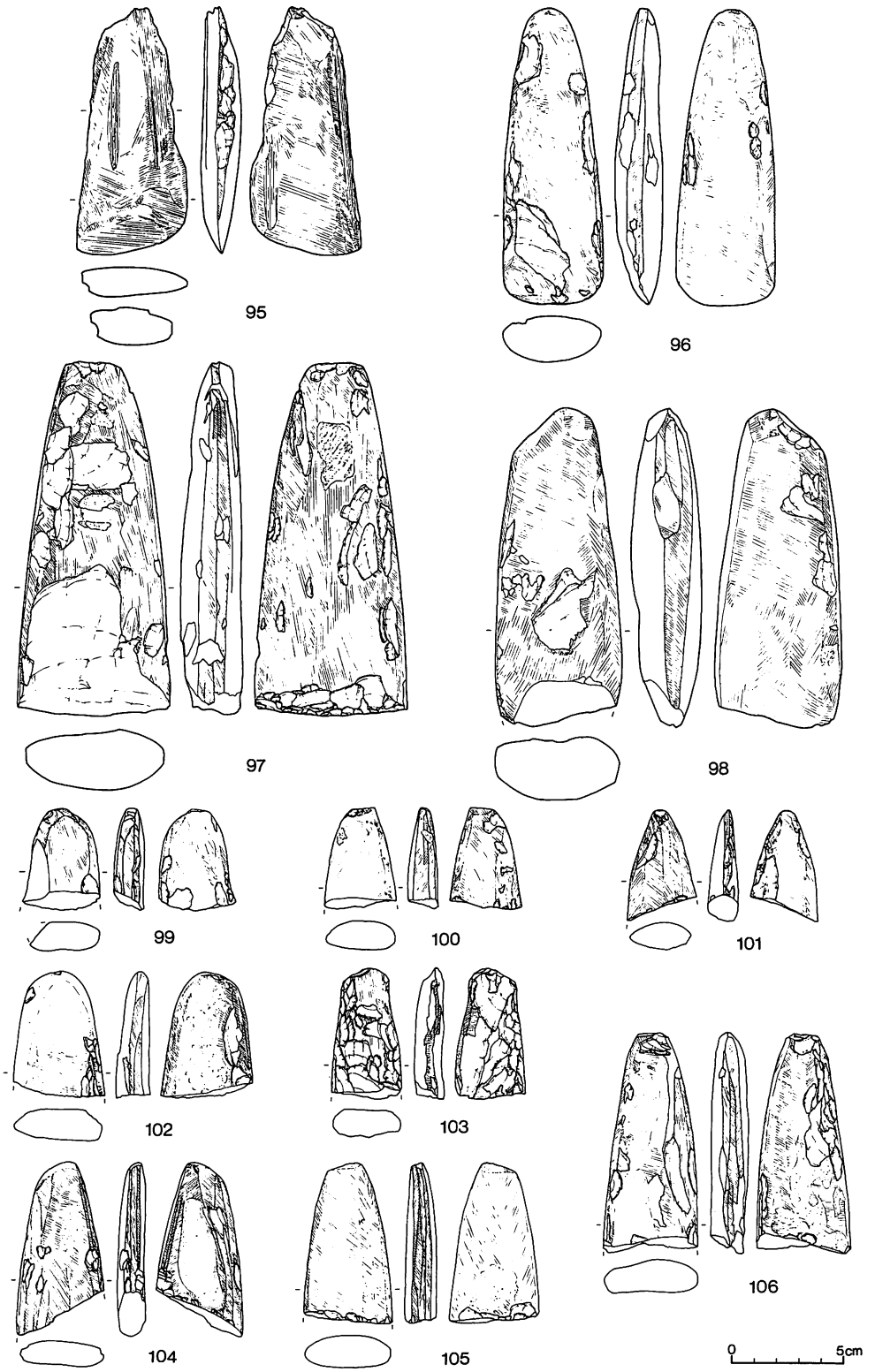


図Ⅳ－25　包含層出土の石器(3)

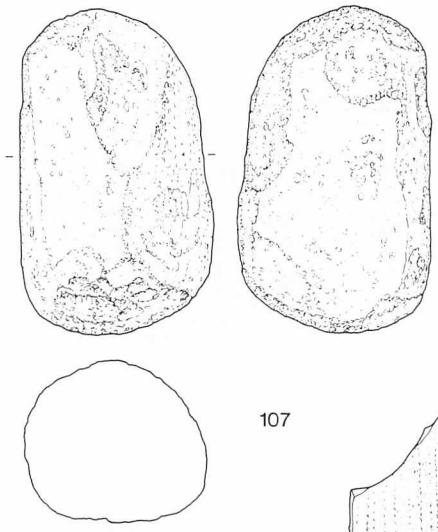


図Ⅳ－26　包含層出土の石器(4)

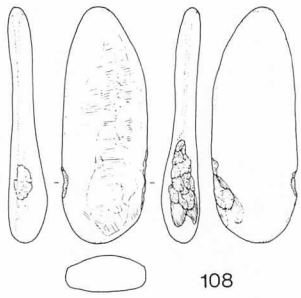
図Ⅳ－27　包含層出土の石器(5)



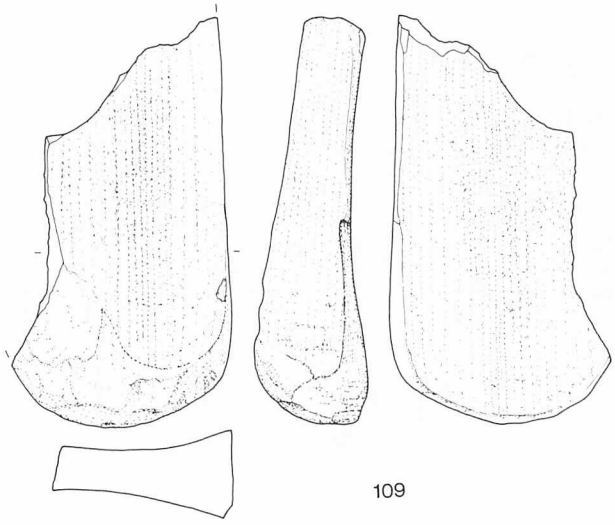
図Ⅳ－28　包含層出土の石器(6)



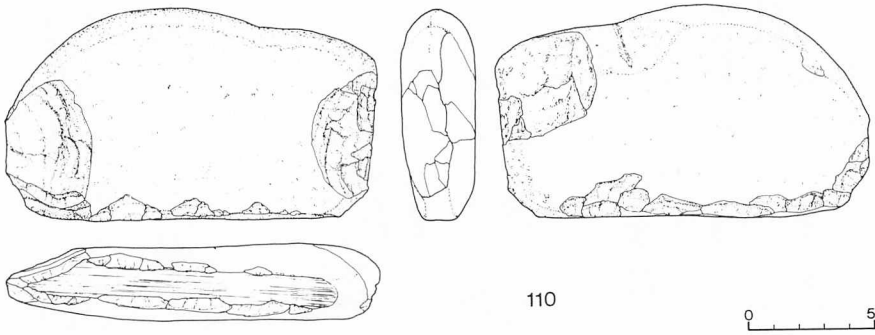
107



108

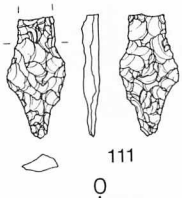


109



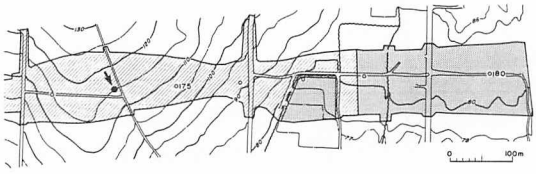
110

0　5cm



111

0　5cm



事前発掘調査出土の石器

図Ⅳ－29　包含層出土の石器(7)

表Ⅳ－4　遺構出土の掲載遺物一覧

遺構名	番号	層位	分類	遺構名	番号	層位	分類
H－1	1	覆土	ⅢA	H－1	7	覆土	石斧
〃	2	〃	ⅡA－5c				
〃	3	床面	ⅢA	P－1	1	覆土	ⅢA－5a
〃	4	覆土	〃	〃	2	底	ⅢA－5b
〃	5	床面	ⅢB	P－2	1	覆土	ⅢA－2c
〃	6	〃	〃	〃	2	〃	ⅢA－7e

表Ⅳ－5　包含層出土の掲載土器一覧

※胎土についてはⅢ群のみ記載

番号	発掘区	層位	分類	胎土※	番号	発掘区	層位	分類	胎土	番号	発掘区	層位	分類	胎土
1	O-37-d		Ⅰa		38	S-43-b	Ⅴ	ⅢA－2b	繊維	75	Q-44-b	Ⅴ	ⅢA－4c	繊維
2	L-38-b	Ⅴ	〃		39	Q-44-b	〃	〃	〃	76	Q-44-a	〃	〃	〃
3	N-37-c	〃	Ⅰb		40	S-45-c	〃	〃	〃	77	R-45-a	Ⅰ	〃	〃
4	P-44-d	〃	Ⅰa		41	R-45-c	〃	ⅢA－2c	〃	78	S-43-d	Ⅴ	ⅢA－4d	〃
5	R-44-b	〃	〃		42	S-45-a	〃	ⅢA－3a	〃	79	S-44-a	Ⅰ	〃	〃
6	L-38-b	〃	〃		43	Q-45-d	〃	〃	〃	80	R-40-d	Ⅴ	〃	〃
7	L-38-c	〃	〃		44	P-44-d	〃	〃	〃	81	R-44-b	〃	〃	〃
8	L-38-c	〃	〃		45	R-44-a	〃	〃	〃	82	Q-45-b	〃	〃	〃
9	R-41-a	Ⅶ	Ⅰb		46	Q-43-c	〃	〃	〃	83	S-43-d	〃	〃	〃
10	O-38-b	Ⅴ	〃		47	Q-44-a	〃	〃		84	R-45-c	〃	〃	〃
11	R-45-c	〃	ⅢA－3b		48	R-43-d	〃	ⅢA－3b	繊維	85	S-45-d	〃	〃	〃
12	O-43-d	〃	ⅢA－3d		49	S-45-c	Ⅰ	〃	〃	86	R-45-b	〃	〃	〃
13	S-44-a	〃	ⅢA－3b		50	N-41-c	Ⅴ	〃	〃	87	R-44-b	〃	ⅢA－4e	〃
14	M-40-c	〃	ⅢA－5a		51	S-42-c	〃	〃	〃	88	R-41-b	〃	〃	〃
15	S-43-c	〃	〃		52	R-44-b	〃	ⅢA－3c	〃	89	R-45-b	〃	〃	〃
16	R-43-c	〃	ⅢA－5c		53	Q-39-c	〃	ⅢA－4a		90	P-43-c	〃	ⅢA－5a	
17	S-42-a	〃	〃		54	R-45-c	〃	〃	繊維	91	R-43-d	〃	〃	
18	Q-45-b	〃	ⅢA－4b		55	S-42-a	〃	〃	〃	92	S-44-c	〃	〃	繊維
19	S-44-a	〃	ⅢA－1a		56	R-46-a	Ⅰ	〃	〃	93	S-43-d	〃	〃	〃
20	R-42-b	〃	〃	繊維	57	R-45-c	Ⅴ	〃	〃	94	S-45-b	〃	〃	
21	R-43-c	〃	〃	〃	58	R-45-c	〃	〃	〃	95	P-45-b	〃	〃	
22	Q-45-c	〃	ⅢA－1b		59	Q-45-a	〃	〃	〃	96	S-45-a	〃	〃	繊維
23	S-44-a	〃	〃		60	R-45-d	Ⅰ	ⅢA－4b	〃	97	S-45-a	〃	〃	〃
24	Q-44-b	〃	〃	繊維	61	R-46-a	〃	〃		98	P-44-d	〃	〃	〃
25	Q-45-c	Ⅰ	ⅢA－2a	〃	62	R-45-c	Ⅴ	〃	繊維	99	S-44-b	〃	〃	〃
26	R-45-c	Ⅴ	〃		63	R-45-d	〃	〃	〃	100	S-44-b	〃	〃	〃
27	Q-45-c	〃	〃	繊維	64	R-45-b	Ⅰ	〃	〃	101	P-43-c	〃	〃	〃
28	R-43-d	〃	ⅢA－2b	〃	65	Q-45-c	Ⅴ	〃	〃	102	Q-44-c	Ⅰ	〃	〃
29	S-45-c	Ⅰ	〃	〃	66	R-30-d	〃	〃		103	S-45-a	Ⅴ	〃	〃
30	R-44-c	Ⅴ	〃	〃	67	L-40-c	〃	ⅢA－4c		104	P-45-b	〃	〃	〃
31	S-42-c	〃	〃	〃	68	S-44-d	〃	〃	繊維	105	S-44-a	〃	〃	〃
32	S-42-b	〃	〃	〃	69	S-44-d	〃	〃		106	L-43-a	〃	〃	
33	R-45-c	〃	〃	〃	70	N-43-b	〃	〃		107	R-45-c	〃	〃	繊維
34	K-45-b	〃	〃	〃	71	S-43-d	〃	〃	繊維	108	Q-43-c	〃	〃	〃
35	Q-44-b	〃	〃	〃	72	S-43-a	〃	〃	〃	109	Q-44-a	〃	〃	〃
36	S-45-b	〃	〃	〃	73	R-44-d	〃	〃	〃	110	Q-45-a	〃	〃	
37	N-46-c	Ⅰ	〃	〃	74	R-45-b	〃	〃	〃	111	Q-44-b	〃	〃	繊維

番号	発掘区	層位	分類	胎土	番号	発掘区	層位	分類	胎土	番号	発掘区	層位	分類	胎土
112	L-45-b	V	ⅢA－5a		161	Q-41-a	V	ⅢA－5c	繊維	210	P-41-d	V	ⅢA－7b′	繊維
113	S-45-d	〃	〃	繊維	162	S-43-c	〃	〃	〃	211	S-46-b	I	〃	
114	R-45-a	〃	ⅢA－5b	〃	163	P-44-c	〃	〃	〃	212	L-44-a	V	〃	
115	S-43-d	〃	〃	〃	164	S-45-b	〃	〃	〃	213	S-45-a	〃	ⅢA－7c	
116	R-42-b	〃	〃	〃	165	S-45-b	〃	ⅢA－5d	〃	214	S-45-d	〃	〃	
117	R-45-d	〃	〃	〃	166	S-45-b	〃	〃	〃	215	S-43-d	〃	〃	
118	S-45-b	〃	〃	〃	167	Q-45-c	〃	〃	〃	216	O-41-a	〃	〃	
119	Q-45-a	〃	〃	〃	168	S-43-d	〃	〃	〃	217	R-42-b	〃	〃	
120	R-44-a	〃	〃	〃	169	S-42-b	〃	〃	〃	218	R-43-d	〃	〃	
121	R-45-c	〃	〃	〃	170	L-44-a	〃	〃	〃	219	S-44-b	〃	ⅢA－7d	
122	Q-44-b	〃	〃	〃	171	S-42-c	〃	〃		220	S-42-a	〃	ⅢA－7e	
123	Q-45-c	〃	〃	〃	172	R-43-b	〃	ⅢA－5e	繊維	221	S-44-c	〃	ⅢA－7f	
124	O-44-b	〃	〃	〃	173	Q-45-b	〃	〃	〃	222	Q-45-d	〃	〃	
125	Q-44-b	〃	〃	〃	174	S-45-c	〃	〃	〃	223	R-45-b	V	ⅢB－4a	繊維
126	S-45-b	〃	ⅢA－5b′	〃	175	S-44-b	〃	〃	〃	224	K-45-a	〃	ⅢB－1	
127	M-41-b	〃	ⅢA－5c	〃	176	Q-45-b	〃	〃	〃	225	S-45-a	〃	〃	繊維
128	Q-45-c	〃	〃	〃	177	R-45-b	〃	〃	〃	226	R-43-d	〃	〃	〃
129	R-40-c	〃	〃	〃	178	Q-45-a	〃	〃	〃	227	R-45-a	〃	ⅢB－2	〃
130	R-42-b	〃	〃	〃	179	R-32-c	〃	ⅢA－6a	〃	228	Q-45-b	〃	〃	〃
131	L-39-c	〃	〃	〃	180	S-42-c	〃	ⅢA－6b		229	P-44-b	〃	〃	海綿骨針
132	R-42-b	〃	〃	〃	181	S-45-b	〃	〃	繊維	230	S-45-a	〃	〃	繊維
133	P-44-c	〃	〃	〃	182	S-43-a	〃	〃	〃	231	S-45-b	〃	ⅢB－3a	〃
134	P-41-d	〃	〃	〃	183	S-45-c	〃	ⅢA－7a	〃	232	S-45-a	〃	〃	〃 海綿骨針
135	R-43-d	〃	〃	〃	184	L-39-d	〃	〃	〃	233	R-45-d	〃	〃	〃
136	Q-45-b	I	〃	〃	185	L-39-c	〃	ⅢA－7b	〃	234	R-43-c	〃	ⅢB－3b	〃
137	R-45-a	V	〃	〃	186	R-45-d	I	〃	〃	235	S-45-d	〃	ⅢB－3a	〃
138	R-42-d	〃	〃	〃	187	R-43-a	V	〃	〃	236	Q-45-c	I	ⅢB－3b	〃
139	R-45-b	〃	〃	〃	188	S-45-b	〃	〃	〃	237	R-45-c	V	ⅢB－4a	〃
140	S-42-a	〃	〃	〃	189	S-43-c	〃	〃	〃	238	Q-45-c	I	〃	〃
141	S-45-b	〃	〃	〃	190	Q-40-c	〃	〃	〃	239	S-45-d	V	〃	〃
142	Q-44-b	〃	〃	〃	191	L-41-a	〃	〃	〃	240	P-45-b	〃	ⅢB－4c	〃
143	Q-44-b	〃	〃	〃	192	Q-45-c	I	〃	〃	241	Q-45-c	〃	〃	〃 海綿骨針
144	Q-45-c	〃	〃	〃	193	O-41-d	V	〃	〃	242	Q-45-d	〃	〃	〃
145	R-45-b	〃	〃	〃	194	R-44-a	〃	〃	〃	243	Q-45-c	〃	ⅢB′	〃
146	Q-45-c	〃	〃	〃	195	S-45-c	〃	〃	〃	244	L-39-c	〃	ⅢB′	〃
147	Q-45-c	〃	〃	〃	196	S-43-d	〃	〃	〃	245	S-45-d	〃	ⅢB′	繊維
148	L-39-c	〃	〃	〃	197	S-45-b	〃	〃	〃	246	S-43-d	〃	ⅢA	
149	Q-45-c	I	〃	〃	198	R-45-c	〃	〃		247	S-45-d	〃	〃	
150	R-45-d	V	〃	〃	199	R-40-d	〃	〃	繊維	248	S-43-d	〃	〃	
151	S-45-a	〃	〃	〃	200	O-40-d	〃	〃	〃	249	Q-45-c	I	〃	
152	S-45-b	〃	〃	〃	201	L-41-c	〃	〃	〃	250	S-45-a	V	〃	
153	Q-41-a	〃	〃	〃	202	S-45-d	〃	ⅢA－7b′	〃	251	P-45-b	〃	〃	
154	Q-40-c	〃	〃	〃	203	K-42	I	〃	〃	252	S-34-d	〃	〃	
155	R-45-b	〃	〃		204	S-45-c	〃	〃	〃	253	Q-45-c	〃	〃	
156	Q-45-c	〃	〃	繊維	205	L-45-a	V	〃	〃	254	Q-43-c	〃	〃	
157	S-45-d	〃	〃	〃	206	R-43-d	〃	〃	〃	255	S-43-d	〃	〃	
158	P-44-d	〃	〃	〃	207	R-42-b	〃	〃	〃	256	Q-45-c	I	〃	
159	R-45-d	I	〃	〃	208	S-43-c	〃	〃	〃	257	R-45-c	V	〃	
160	R-43-d	V	〃	〃	209	Q-44-b	〃	〃	〃	258	R-45-c	〃	〃	

番号	発掘区	層位	分類	胎土	番号	発掘区	層位	分類	胎土	番号	発掘区	層位	分類	胎土
259	R-43-c	Ⅴ	ⅢA		271	S-45-c	Ⅴ	ⅢB		283	R-31-a		Ⅵb	
260	S-45-b	〃	〃		272	S-45-d	〃	〃		284	R-28-b		〃	
261	R-45-c	〃	〃		273	O-31-d		Ⅴc1		285	R-28-b		〃	
262	S-45-c	〃	〃		274	R-28-b		Ⅴa		286	O-44-b		Ⅵc	
263	S-40-a	〃	〃		275	R-31-a		〃		287	O-43-c		〃	
264	R-45-d	〃	〃		276	R-43-d		〃		288	Q-28-d		〃	
265	S-42-c	〃	〃		277	R-30-d		〃		289	S-45-a	Ⅴ	Ⅶb	
266	R-43-d	〃	〃		278	R-30-c		〃		290	R-45-b		〃	
267	S-44-c	〃	〃		279	S-37-a		Ⅴc1		291	S-45-b		〃	
268	S-44-a	〃	〃		280	R-31-d		〃		292	S-45-a		〃	
269	L-45-b	〃	〃		281	R-31-a		〃		293	S-45-a		〃	
270	L-45-c	〃	〃		282	I-29-c		Ⅴc2						

表Ⅳ－6　包含層出土の掲載石器等一覧

図No.	グリッド	層位	器種名	長さ(mm)×幅(mm)×厚さ(mm)	重量(g)	石質	図No.	グリッド	層位	器種名	長さ(mm)×幅(mm)×厚さ(mm)	重量(g)	石質
1	Q-38-c	Ⅴ	石鏃	17.9 × 13.0 × 3.7	0.6	黒曜石	34	S-31-a	小礫	スクレイパー	53.5 × 22.0 × 10.5	7.3	珪質頁岩
2	P-43-b	Ⅴ	石鏃	19.8 × 16.0 × 2.2	0.6	片岩	35	Q-45-b	Ⅴ	スクレイパー	52.9 × 19.3 × 6.2	5.9	珪質頁岩
3	P-43-a	Ⅴ	石鏃	22.9 × 16.0 × 3.2	0.6	黒曜石	36	Q-43-c	Ⅴ	スクレイパー	(49.8)×(32.1)×(12.9)	(18.3)	流紋岩
4	L-32-c	Ⅴ	石鏃	22.9 × 17.8 × 3.1	1.1	硅質頁岩	37	R-43-c	Ⅴ	スクレイパー	50.3 × 19.5 × 9.0	5.8	珪質頁岩
5	Q-25-b	Ⅴ	石鏃	(19.8)× 18.9 × 3.8	(1.2)	黒曜石	38	S-44-a	Ⅴ	スクレイパー	50.3 × 24.3 × 12.5	12.3	珪質頁岩
6	R-45-d	Ⅰ	石鏃	20.9 × 8.1 × 2.4	0.3	黒曜石	39	K-39-b	Ⅴ	スクレイパー	55.0 × 31.5 × 14.1	22.0	珪質頁岩
7	R-45-b	Ⅴ	石鏃	(22.0)× 10.0 × 5.1	(1.0)	黒曜石	40	K-39-a	Ⅴ	スクレイパー	69.5 × 26.5 × 13.5	15.7	珪質頁岩
8	Q-45-c	Ⅰ	石鏃	22.4 × 9.8 × 3.3	0.6	黒曜石	41	R-28-b	Ⅴ	スクレイパー	(67.2)× 26.0 × 10.5	(14.2)	珪質頁岩
9	S-43-d	Ⅴ	石鏃	(25.9)× 12.8 × 6.1	(1.6)	黒曜石	42	R-33-b	Ⅴ	スクレイパー	82.5 × 20.5 × 15.5	15.3	珪質頁岩
10	N-32-a	Ⅴ	石鏃	(28.0)× 14.1 × 4.9	(1.5)	黒曜石	43	K-38-d	Ⅴ	スクレイパー	(88.9)× 25.0 × 8.6	(13.7)	珪質頁岩
11	K-45-b	Ⅴ	石鏃	39.2 × 15.7 × 4.5	2.0	黒曜石	44	R-43-a	Ⅴ	スクレイパー	72.0 × 35.5 × 9.5	22.8	珪質頁岩
12	I-40-c	Ⅴ	石鏃	(32.4)× 14.9 × 4.8	(2.1)	黒曜石	45	P-30-c	Ⅴ	スクレイパー	(71.5)× 55.0 × 14.5	(48.7)	珪質頁岩
13	N-43-b	Ⅴ	石鏃	(34.1)× 18.5 × 5.2	(3.0)	黒曜石	46	R-45-a	Ⅰ	スクレイパー	(24.2)× 16.5 × 8.9	(5.0)	珪質頁岩
14	R-34-a	Ⅰ	石鏃	(37.0)× 19.7 × 6.3	(3.2)	黒曜石	47	R-44-c	Ⅴ	スクレイパー	47.0 × 30.5 × 14.0	24.8	珪質頁岩
15	Q-44-c	Ⅴ	石鏃	43.1 × 17.2 × 5.2	3.5	黒曜石	48	Q-45-c	Ⅴ	スクレイパー	22.5 × 23.2 × 17.0	7.7	黒曜石
16	O-38-a	Ⅴ	石鏃	(23.1)× 13.9 × 2.9	(0.6)	黒曜石	49	R-45-d	Ⅰ	スクレイパー	29.5 × 23.0 × 7.8	4.0	黒曜石
17	R-44-b	Ⅴ	石鏃	(24.9)× 10.8 × 3.7	(0.8)	黒曜石	50	O-44-b	Ⅴ	スクレイパー	27.0 × 29.5 × 9.5	8.9	黒曜石
18	Q-41-d	Ⅴ	石鏃	34.9 × 12.3 × 5.0	1.9	黒曜石	51	Q-45-a	Ⅴ	スクレイパー	28.0 × 23.5 × 6.0	4.3	黒曜石
19	M-40-c	Ⅴ	石鏃	(30.0)× 12.3 × 7.9	(2.5)	黒曜石	52	S-44-a	Ⅴ	スクレイパー	36.5 × 30.0 × 9.5	9.7	黒曜石
20	R-45-d	Ⅴ	石鏃	(40.5)× 12.0 × 7.6	(2.7)	黒曜石	53	S-43-d	Ⅴ	スクレイパー	43.3 × 37.5 × 17.0	23.6	黒曜石
21	R-26-d	Ⅴ	石鏃	(19.1)× 12.6 × 3.9	(0.7)	黒曜石	54	R-43-c	Ⅴ	スクレイパー	41.5 × 40.8 × 14.5	21.2	黒曜石
22	J-39-a	Ⅴ	石鏃	(22.0)× 17.1 × 2.8	(0.7)	黒曜石	55	Q-44-d	Ⅴ	スクレイパー	41.5 × 36.2 × 10.0	14.9	黒曜石
23	P-39-a	Ⅴ	石鏃	(26.5)× 14.7 × 3.0	(0.8)	硬質頁岩	56	L-38-d	Ⅴ	スクレイパー	53.2 × 38.7 × 11.0	20.2	珪質頁岩
24	L-43-b	Ⅴ	石鏃	(27.0)× 14.0 × 3.1	(0.8)	黒曜石	57	K-45-a	Ⅴ	スクレイパー	45.0 × 36.0 × 8.2	13.7	めのう
25	R-43-a	Ⅴ	石鏃	(28.8)× 15.6 × 5.5	(1.7)	黒曜石	58	Q-41-d	Ⅴ	スクレイパー	31.0 × 21.0 × 13.7	9.1	黒曜石
26	N-32-b	Ⅴ	石鏃	31.1 × 14.1 × 4.1	1.2)	黒曜石	59	R-43-a	Ⅴ	スクレイパー	45.0 × 24.5 × 12.5	11.0	黒曜石
27	Q-27-b	Ⅴ	石鏃	(34.4)× 18.5 × 6.0	(2.5)	黒曜石	60	R-43-b	Ⅴ	スクレイパー	(48.5)×(27.0)× 11.0	(10.4)	黒曜石
28	R-31-b	小礫	石鏃	(38.4)× 16.9 × 5.2	(2.2)	黒曜石	61	S-44-a	Ⅴ	スクレイパー	44.0 × 24.0 × 11.3	10.8	黒曜石
29	Q-24-c	Ⅴ	石鏃	46.0 × 15.7 × 4.4	2.5	黒曜石	62	K-39-a	Ⅴ	スクレイパー	(59.0)×(27.6)× 11.0	(17.0)	珪質頁岩
30	S-42-b	Ⅴ	石鏃	(42.1)× 13.5 × 4.5	(2.3)	硬質頁岩	63	S-43-c	Ⅴ	スクレイパー	(65.0)× 36.0 × 16.0	(36.4)	珪質頁岩
31	S-43-d	Ⅴ	石槍	(60.5)× 35.3 × 14.3	(21.8)	黒曜石	64	P-43-c	Ⅴ	両面加工	(27.3)× 19.1 × 5.6	(3.3)	黒曜石
32	R-43-b	Ⅴ	石槍	(24.3)×(22.1)× (8.7)	(4.4)	黒曜石	65	R-44-b	Ⅴ	両面加工	27.5 × 35.5 × 11.5	9.0	黒曜石
33	P-44-b	Ⅴ	石錐	23.4 × 10.9 × 5.1	1.2		66	R-43-b	Ⅴ	両面加工	34.0 × 40.0 × 20.0	19.9	黒曜石

図No.	グリッド	層位	器種名	長さ(mm)×幅(mm)×厚さ(mm)	重量(g)	石質	図No.	グリッド	層位	器種名	長さ(mm)×幅(mm)×厚さ(mm)	重量(g)	石質
67	Q-38-c	V	スクダイバー	(54.8)× 32.4 × 9.7	(11.4)	珪質頁岩	89	Q-44-b	V	石斧	92.0 × 38.5 × 16.0	(91.2)	黒色泥岩
68	R-44-b	V	剥片	50.0 × 13.7 × 7.0	5.2	黒曜石	90	Q-43-c	V	石斧	113.0 × 41.3 × 14.2	(119.3)	砂質泥岩
69	P-34-d	V	剥片	53.5 × 14.0 × 10.0	4.2	珪質頁岩	91	R-41-c	V	石斧	107.5 × 43.5 × 15.0	120.0	緑色泥岩
70	I-31-d	V	剥片	63.0 × 34.0 × 13.0	19.0	黒曜石	92	R-41-c	V	石斧	120.0 × 41.5 × 15.0	117.9	緑色泥岩
71	R-44-c	V	剥片	31.0 × 35.0 × 8.0	5.3	黒曜石	93	R-40-d	V	石斧	(68.0)×(42.5)×(14.5)	(74.7)	暗緑色泥岩
72	P-43-c	V	剥片	28.0 × 36.4 × 5.0	5.6	珪質頁岩	94	R-45-b	I	石斧	(71.5)×(42.5)×(14.5)	(76.2)	暗緑色泥岩
73	N-39-c	V	剥片	30.8 × 39.4 × 7.2	7.4	珪質頁岩	95	N-31-a	V	石斧	111.0 × 49.5 × 17.5	124.8	蛇紋岩
74	O-38-a	V	剥片	61.6 × 60.2 × 8.7	22.4	珪質頁岩	96	P-45-b	V	石斧	133.3 × 44.5 × 21.5	199.0	緑色泥岩
75	Q-45-a	V	剥片	33.5 × 49.0 × 7.0	8.7	黒曜石	97	S-44-c	V	石斧	(159.0)× 68.2 × 28.0	(455.0)	緑色泥岩
76	R-44-c	V	玉	(17.1)× (9.9)×(17.1)	(3.2)	橄欖岩？	98	R-45-a	V	石斧	(142.0)× 57.0 × 32.0	(424.3)	緑色泥岩
77	R-43-d	V	石製品？	(29.0)×(32.4)× 14.7	(22.4)	橄欖岩？	99	R-43-c	V	石斧	(45.5)×(35.5)×(13.5)	(33.2)	緑色泥岩
78	Q-44-b	V	石製品？	(45.8)×(34.2)× 13.4	(28.2)	珪岩？	100	S-43-d	V	石斧	44.5 × 32.5 × 13.5	27.3	緑色泥岩
79	R-45-d	I	石斧	73.0 × 25.5 × 7.5	(21.6)	緑色泥岩	101	R-43-b	V	石斧	(50.0)×(31.0)×(13.5)	(22.0)	緑色泥岩
80	R-43-d	V	石斧	(71.5)× 29.4 × 10.0	(37.8)	緑色泥岩	102	Q-39-b	V	石斧	(57.0)×(31.1)×(15.5)	(53.5)	緑色泥岩
81	Q-43-c	V	石斧	(73.4)× 29.5 × 7.9	(22.7)	緑色泥岩	103	R-44-d	V	石斧	(59.0)×(31.5)×(13.5)	(36.4)	緑色泥岩
82	S-43-b	V	石斧	(85.5)× 40.0 × 14.0	(87.5)	緑色泥岩	104	S-45-a	V	石斧	(78.5)×(39.5)×(13.0)	(58.0)	緑色泥岩
83	R-41-c	V	石斧	93.0 × 30.7 × 12.5	59.2	緑色泥岩	105	S-45-d	V	石斧	(73.0)×(40.0)×(14.5)	(70.2)	緑色泥岩
84	J-41-b	V	石斧	84.0 × 35.0 × 11.8	(62.9)	緑色泥岩	106	R-42-a	V	石斧	(95.4)×(42.4)×(17.0)	(102.1)	緑色泥岩
85	S-43-b	I	石斧	83.5 × 35.5 × 12.0	61.2	緑色泥岩	107	Q-44-c	V	敲石	129.0 × 77.0 × 63.5	441.2	溶結凝灰岩
86	R-43-d	V	石斧	93.5 × 31.3 × 14.0	(67.5)	緑色泥岩	108	S-43-d	V	敲石	93.4 × 34.5 × 15.0	65.6	砂質泥岩
87	S-43-c	V	石斧	(66.2)× 38.1 × 16.0	(61.4)	緑色泥岩	109	R-43-a	V	砥石	(162.0)×(88.0)×(45.0)	(46.0)	砂岩
88	R-43-d	V	石斧	87.0 × 39.0 × 11.5	(60.2)	緑色泥岩	110	S-45-a	V	擦石	83.0 ×149.0 × 30.0	62.0	安山岩

4　まとめ

(1)　土器

牛舎川右岸遺跡では既に述べたとおり，縄文時代早期（Ⅰ群），中期（Ⅲ群），晩期（Ⅴ群）続縄文時代（Ⅵ群），擦文時代（Ⅶ群）の各時代の土器が出土している。本項ではⅠ群，Ⅲ群，Ⅶ群について前項の補足を兼ね，問題点を整理してみたい。

Ⅰ群

Ⅰ群ａ類とした口縁部に貫通孔がめぐる平底土器（図Ⅳ－14－１）はＯ－37－ｄ区で地山の礫層上面からまとまって出土した。口縁部から底部まで破片がそろっているが，直接接合することができず，器形を推定し復元したものである。推定復元の結果，口縁及び底は円形ではなく，小判形に近い形を呈するものになった。この土器とⅠ群ｂ類とした中茶路式土器（図Ⅳ－14－３）は火山灰を挟んで層位的にとらえることができた。中茶路式土器は隣接するＮ－37－ｃ地区で，礫層より上位にある「幌別黄橙色火山灰」[註1)]層の上面から出土している。

口縁部に貫通孔をもつ平底土器は登別市川上Ｂ遺跡Ａ地区，Ｃ地区，Ｇ地区（北埋文 1983, 1985, 1986）でも数個体分出土しており，底面にホタテガイの圧痕をもつ暁式系統の土器に関連するものとみなされ，住吉町式よりも古いと報告されている。

当遺跡の資料をみると，図Ⅳ－14－２の土器は底が張り出し，同図１の貫通孔をもつ土器と器形のうえで密接な関係がうかがえる。また図Ⅳ－14－２の土器と同図６に示した内外面に条痕のある口唇が角形の土器とは出土位置が接近しており，同時期あるいは接近した時期である可能性が強い。このように，当遺跡で出土した無文・条痕文土器を１グループとしてとらえた場合，全体の印象は川上Ｂ遺跡例とはやや異なるが，地理的に最も近い類似例であることを勘案すれば同種のものとするのが妥当であろう。しかし，編年的位置づけについては縄文時代早期前半の種々の資料が知られてきた状況であり，今後検討して行きたい。

Ⅲ群

Ⅲ群土器は当遺跡から出土した遺物の主体をなすものである。既に述べたように道央部の柏木川式（大沼 1981）に相当するものをＡ類，道南系のものをＢ類とし，文様構成から各々細分した。また，Ｂ類に類似するがＢ類に含めるには疑問のあるものを便宜的にＢ'類とした。これらはさらに文様手法，口唇上の文様，口唇形態の異同により 34 種に細分した。口唇式の文様には刺突文，縄線文，縄文がある。なお，Ａ類とＢ類の個体数の比率は約８：２である。

Ａ類土器には口縁部に沈線文，刺突文，隆起帯，縄線文，縄文が施されたものがあるが，口唇上には刺突文，縄線文，縄文の施されたものがそれぞれに認められる。これらの土器は互いに関連するものとみなされ，Ａ類土器は比較的限定された時期の所産であると考えられる。

また，Ａ類土器とＢ類土器との間には沈線文，隆起帯，縄線文という文様要素が共通して認められ，Ｂ類土器にも口唇上に縄線文や縄文が施されたものがあることから，Ａ類土器とＢ類土器は密接に関連し，Ｂ類とした道南系の土器はＡ類土器に伴う可能性が非常に強いことが看取できる。

このことはIII群土器の分布(図IV－30)からも理解される。III群土器は発掘区南西隅の40 m×40 mの範囲に集中しており，A－1類からA－6類，B類・B'類は分類ごとに片寄ることなく，渾然一体となって分布している。この分布状況については，当遺跡が扇状地に立地することから河川の氾濫等により遺物が大幅に移動して低地にたまった可能性を考えることもできるが，土器の接合状況をみると多くは半径5 m～10 m以内でまとまっており，地形からみても必ずしも凹地に集中したものばかりでないことから，意味のある分布と考えている。

さて，比較的限定された時期の所産と考えられるに至ったIII群の編年的位置づけについては，道南系の土器であるIII群B類土器と道南地方の土器との対比から導かれるであろう。

隆起帯や縄線文に特徴づけられるIII群B類土器の組成をみると，道南地方の大安在B式（大沼 1981）からノダップII式（松下他 1974）にかけての資料に類例を見出すことができる。しかし，ノダップII式には口唇上を磨くものが圧倒的に多いこと，胴部に連続短刻線が施された土器の出現率が高いことなどから，III群B類土器とは製作手法，文様構成が異なっている。III群B類土器のなかには図IV－21－227・228・229・231のように函館市西股遺跡発掘調査報告書（松下他 1974）第30図4，第36図4に掲載されている資料と文様構成・胎土が類似するものがある[註2]が，III群B類土器の組成をみたとき，ノダップII式的な要素も認められるが大安在B式に相当すると考えるのが妥当と思われる。このことからIII群B類土器の大安在B式の後半期に相当する位置づけが考えられる。

III群B類土器をこのように位置づけた場合，III群A類土器もそれに対応する柏木川式のなかでの位置づけを考慮する必要があるが，III群A－7類のなかにはb'としたノダップII式から煉瓦台式に多くみられる短刻線文に類似する刺突文の施された土器があり，柏木川式のなかでは比較的新しい段階のものと考えられる。

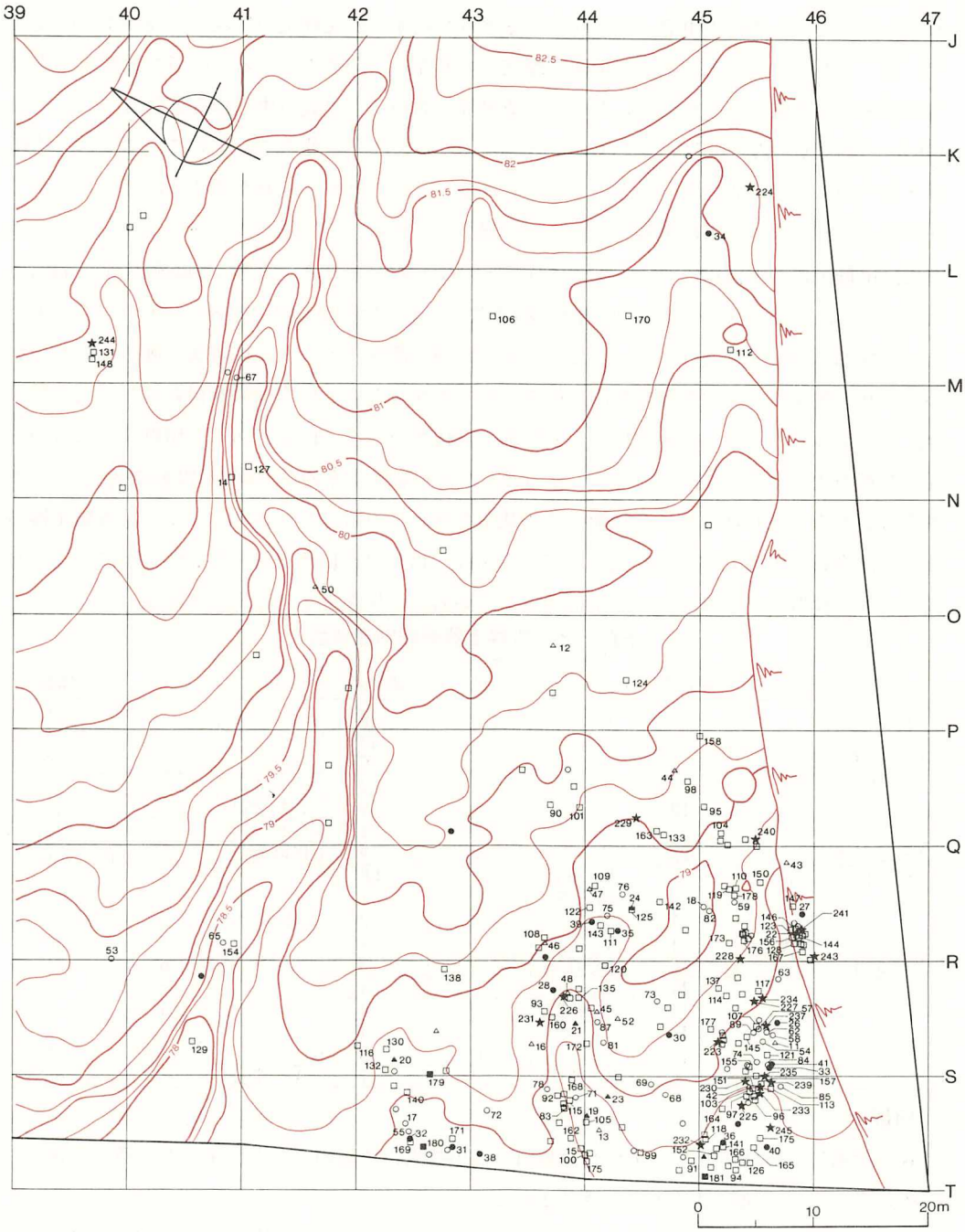
以上のことから，当遺跡では北筒式が全く発見されていないこともあり，III群土器は胆振地方西部において北筒式が出現する前段階の様相を示す一群の土器としてとらえることができる。

表IV－7　縄文時代中期の編年
（大沼1981から関係分抜粋）

	道南	道央	
中期	円筒上層→		
	見晴町	天神山	
	大安在B	柏木川	
	ノダップII	(＋)	北筒
	煉瓦台	(＋)	北筒

III群土器は，場合によっては柏木川式の新しい部分に相当するものとして一型式をなす可能性もあるが，これに相当する資料は伊達市南稀府5遺跡（大沼他 1983）でややまとまって出土している他は断片的なものしかなく，他の柏木川式に相当する資料も出土例は多いが，量的にまとまったものは限られていて比較材料に乏しく，型式として普遍性をもつものかどうか今のところ判断できない。

強いて他と比較するならば，江別市萩ケ岡遺跡出土資料によって設定された萩ケ岡4式（高橋他 1982）があげられる。萩ケ岡4式は隆起帯上の刻み，沈線文，半截竹管による刺突文で特色づけられるもので，道央部において円筒上層式，天神山式からスムーズに移行した型式と理



図Ⅳ－30　Ⅲ群土器分布図（個体別）

解されている。当遺跡のIII群土器と比較すると萩ケ岡4式は沈線文の出現率が高いように見受けられ，また，隆起帯上の刻みの手法と際立って異なった印象を受ける。両者を比較する場合当然地域差を考慮しなければならないが，道央部においても恵庭市中島松5遺跡A地点（松谷1989）では図IV－15－14に示したものと非常によく似た土器が報告されていて，中島松5遺跡例と萩ケ岡4式は時間差をもつものと考えられる。このことから，萩ケ岡4式に含まれるかなりの部分は、当遺跡のIII群土器よりも古く位置づけられるように思われる。

次にIII群土器の文様組成をみると，表IV－8に示したとおりA－5類が166個体（約55%）と最も多く，次いでA－4類が59個体（約20%），A－2類23個体（約8%）とつづく。すなわち口縁部に地文の縄文しか認められないものが過半数を占め，次に縄線文の施されたものが多くあり，刺突文や隆起帯等の装飾文様をもつものが少ないという結果が得られた。この結果は，A－7類に一括した装飾文様がある胴部の個体数をみても同様であり，III群全体に占めるA－7類の比率は約22%に過ぎない。このことが何を意味するのか，精製と粗製の区別等，種々考え方があると思われるが，今後他型式の比率を含めて検討して行きたい。また，A類土器のなかには隆起帯上にも縄線文が施されている図IV－14－11～13等のように，明らかに大安在B式の文様を模倣したとみなされる土器があり，両者の関係を考えるうえで興味深い。

表IV－8　III群土器分類別個体数

類	種	個体数	類	種	個体数	類	種	個体数
A－1	a	2	A－4計		59	B－4	a	1
	b	4	A－5	a	49		b	3
A－1計		6		b	26		c	2
A－2	a	3		b′	2	B－4計		6
	b	18		c	59	B類合計		21
	c	2		d	21	B′		3
A－2計		23		e	9	III群総計		297
A－3	a	7	A－5計		166			
	b	6	A－6	a	1			
	c	1		b	3	A－7	a	3
	d	1	A－6計		4		b	30
A－3計		15	A類合計		273		b′	21
A－4	a	11	B－1		4		c	6
	b	12	B－2		4		d	1
	c	19	B－3	a	4		e	3
	d	11		b	3		f	2
	e	6	B－3計		7	A－7計		66

VII群

VII群土器は5個体あり，いずれも白頭山－苫小牧火山灰層の下から出土した。遺構に伴ったものはなく，全て遺物包含層から発見された。

図IV－22－289～291の坏は器形・器面調整から宇部則保氏によるII群（宇部1989）の範疇でとらえられ，8世紀前半のものと考えられる。同図289はやや古くなる可能性もある[註3)]。図IV－22－292の甕は坏に伴うものか不明であるが，あまりかけ離れた年代のものとは考え難い。

註1）「幌別黄橙色火山灰」については本書II－1を参照されたい。　（工藤　研治）

註2）胎土に繊維を含む非常に軽い土器である。北海道開拓記念館収蔵資料を実見した。

註3）宇部則保氏のご教示による。

(2)　石器

今回の調査では総数296点の石器・剥片・石製品が出土した。器種別の石器の分布状況は図Ⅳ－31～34に示したとおりである。各器種ともに調査区南西隅に分布の集中域が見られる[註1)]。この傾向はⅢ群（柏木川式）土器の分布傾向（図Ⅳ－30）とも一致していることから，この集中区域内にある石器の大半はⅥ群土器（後北 C_2 式）に共伴した図Ⅳ－23－２・３を除いてⅢ群土器に伴うものであると考えられる。

ここでは特にⅢ群土器に共伴したと考えられる石器について，本遺跡とほぼ同時期とみられる[註2)]，道南の南茅部町臼尻Ｂ遺跡（小笠原 1985，86，87，88），道東の幕別町猿別Ｃ遺跡（石橋・宮他 1983）と，近在の登別市千歳６遺跡（大島・瀬川 1982）を比較して若干検討してみたい。

本遺跡の石器構成比の中で特徴的なことの一つとして，石斧の比率が高く，石斧を除く礫石器が少ないことがあげられる。石斧は剥片類を除くと石器の中では最も高い出現率（37.6%）である。臼尻Ｂ遺跡では6.1%，猿別Ｃ遺跡では1.9%である。しかし，石斧製作にかかわる剥片類も見当らないことから，石斧は他所よりもちこまれたものと考えられる。また千歳６遺跡においては25.3%で，石器全点数における石斧の占める割合が高いことが指摘されている。

石斧を除く礫石器は，それぞれ１～２点しか出土していない。調査全区域，全層（火山灰層を除く）にわたって安山岩の礫が多数混在していた状況のなかで，全く見落としがなかったとはいえないが，臼尻Ｂ遺跡では65.8%[註3)]を占めており，これに比して本遺跡では，僅かな量であるといえよう。一方，柏木川式土器の時期の遺構が検出された美沢10，11遺跡（北埋文 1986，87）においても同様の傾向が窺える。本来的に少ないのであろうか。猿別Ｃ遺跡では，１点も出土していない[註4)]。

また，本遺跡では，フレイク・チップ類の量が少ないが，主に他の場所において石器が製作されたことを意味するのであろうか[註5)]。

Ⅲ群土器の個体数が約300個体出土しているのに対して，石器は剥片類を除くと，131点で土器の個体数が約2/5の量でしかない。土器の破片数に対する剥片類を含めた石器の比率は2.5%である。臼尻Ｂ遺跡では10.8%，猿別Ｃ遺跡では44%に及ぶ。土器に対する石器の比率が低いのは，この時期の特徴か，または遺跡の性格をしめしているものか，周辺域の遺跡との詳細な比較検討がなされなければならないが，石材産地との距離も要因のひとつであろうと思われる。

石器組成からみた本遺跡Ⅲ群土器に伴う石器は，剥片石器の器種構成においては臼尻Ｂ遺跡，猿別Ｃ遺跡，千歳６遺跡出土の石器と基本的には変わらない。とくに器種構成比においては千歳６遺跡に近い。また剥片石器と礫石器の比率では臼尻Ｂ遺跡と猿別Ｃ遺跡の中間をしめしている。（藪中　剛司）

註１）Ⅲ群土器に共伴すると考えられる。図Ⅳ－31～34枠内の遺物を抽出したが，Ⅵ群土器に共伴した石鏃（図Ⅳ－23－２，３）は除いている。また，石斧の破片は同一個体のものは１個分として扱った。

註２）大沼 1981

註3）森町御幸町遺跡では石斧以外の礫石器が44.8%をしめる。

註4）千歳6遺跡では石斧以外の礫石器が14%（擦石のみでは10%）をしめている。また，断面三角形の擦石が短刻線文土器群に伴うものと報告されている。

註5）森町御幸町遺跡（藤田編1985）においても，松井氏によって指摘されている。

註6）千歳6遺跡の石器器種別構成グラフの項目にあわせた。また千歳6遺跡では百分率はしめされていないが，円グラフの角度より求めた。ただし，包含層の石器のみである。臼尻B遺跡では，1985～88年度の調査報告書に掲載された表より，表採，Ⅰ層の遺物，および石器以外の礫を除いて算出した。

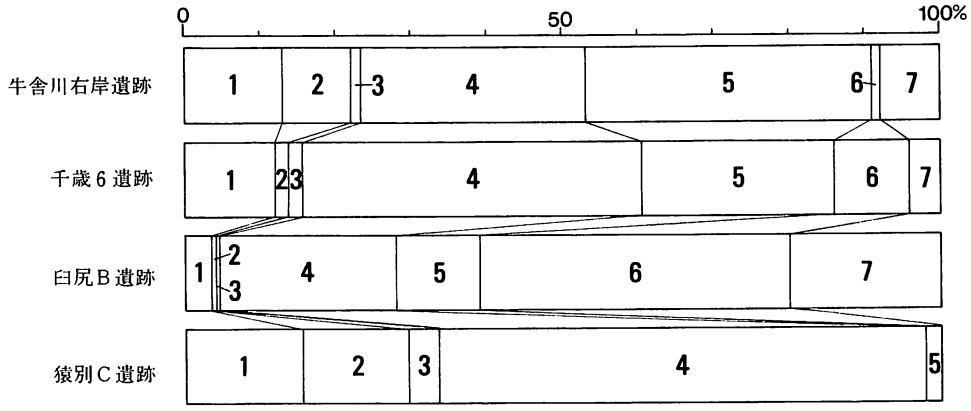
表Ⅳ－9　Ⅲ群土器集中区域内石器組成

	石鏃	石槍	石錐	刃器	石斧	砥石	敲石	擦石	石製品	剥片	細片	合計
点　数	10	7	1	23	29	1	2	1	3	62	37	176
構成比1	5.7	4.0	0.6	13.1	16.5	0.6	1.1	0.6	1.7	35.1	21.0	100
構成比2	13.0	9.1	1.3	29.9	37.6	1.3	2.6	1.3	3.9	－	－	100

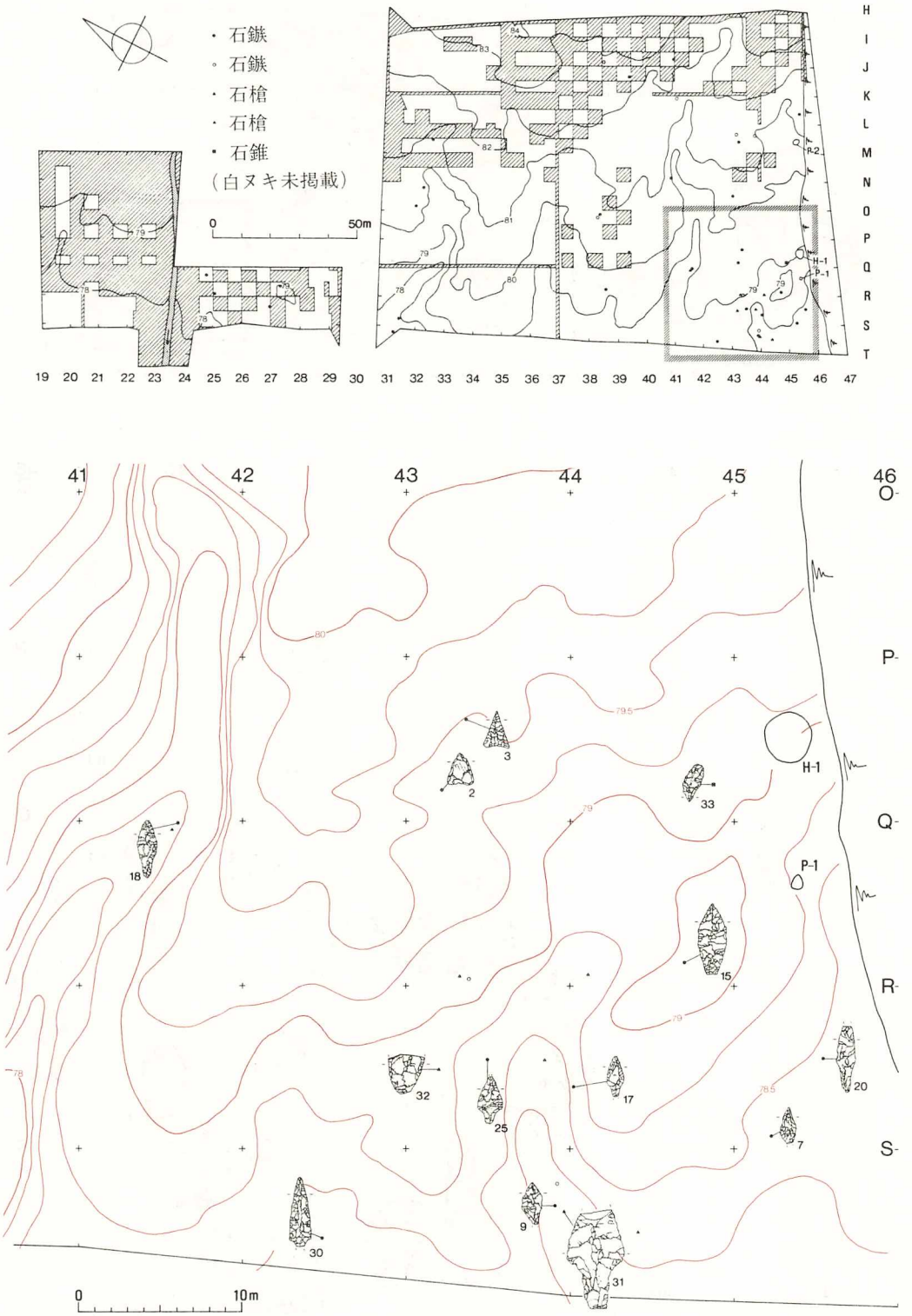
注　構成比1は剥片類を含む百分率。構成比2は剥片類を除いた百分率。

表Ⅳ－10　各遺跡の石器組成（註6）

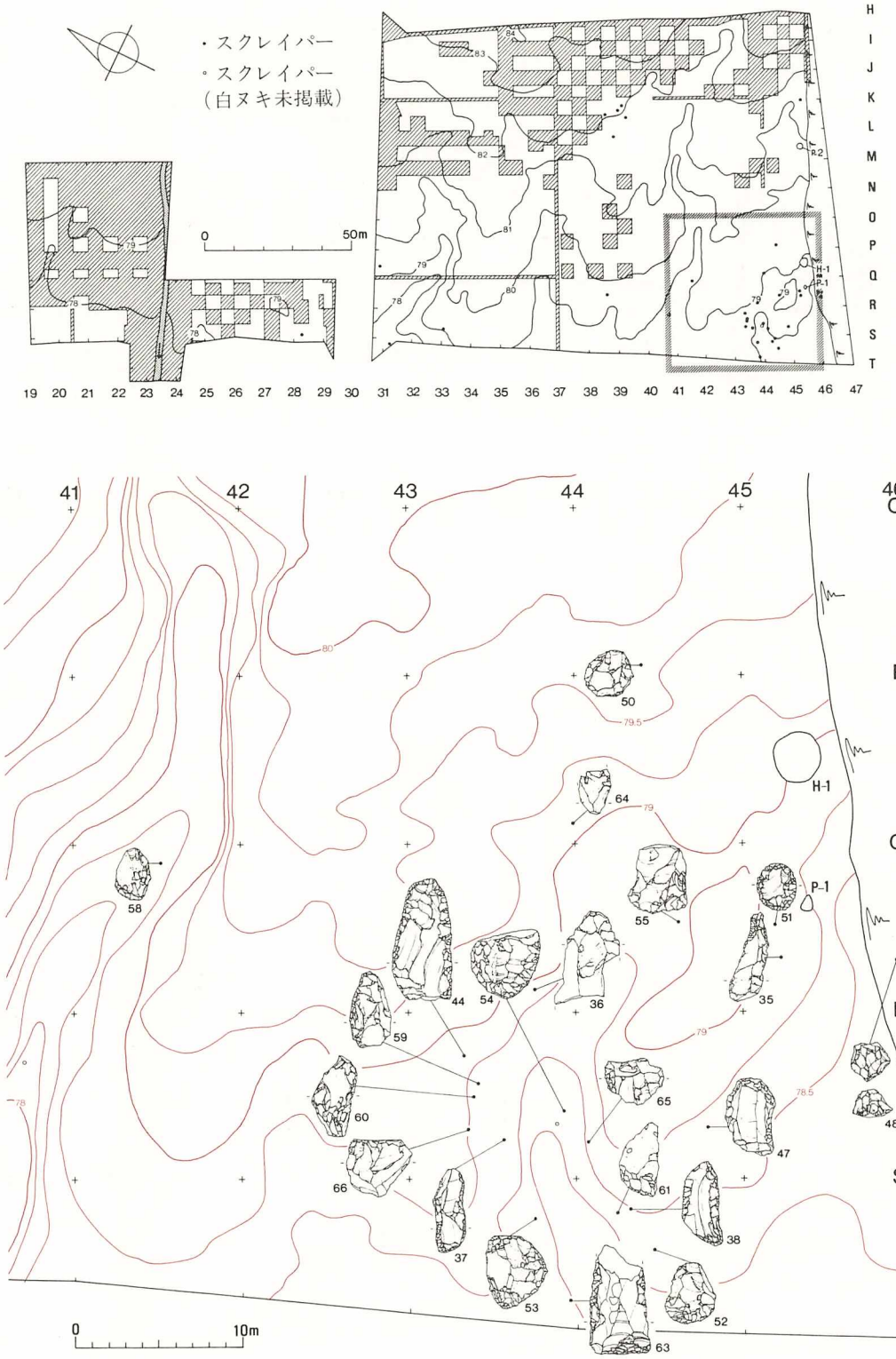
	石鏃(1)	石槍(2)	石錐(3)	刃器(4)	石斧(5)	擦石(6)	その他の礫器(7)	合　計	合計点数
牛舎川右岸遺跡	13.0	9.1	1.3	29.9	37.6	1.3	7.8	100	77
千歳6遺跡	11.9	1.9	1.9	45.0	25.3	10.0	4.0	100	不明
臼尻B遺跡	3.2	0.7	0.1	27.3	5.9	43.5	19.3	100	3856
猿別C遺跡	8.0	7.0	2.0	82.0	1.0	0	0	100	99



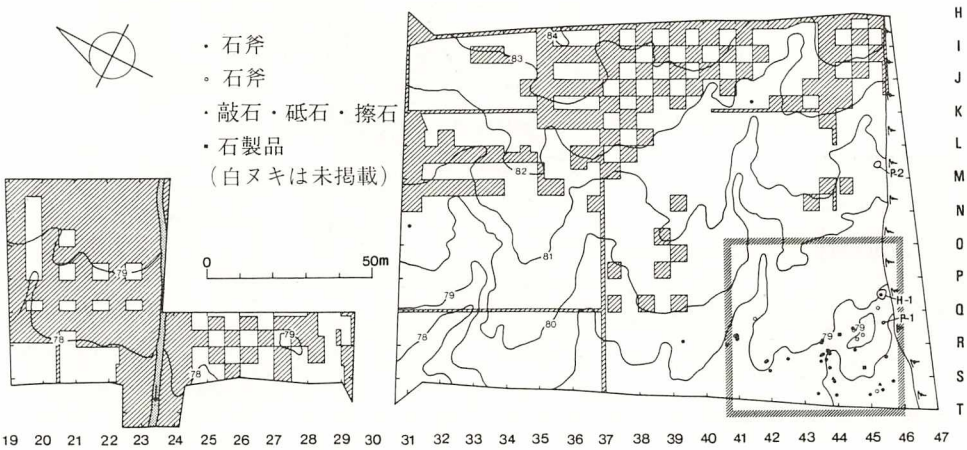
図Ⅳ－31　石器組成グラフ

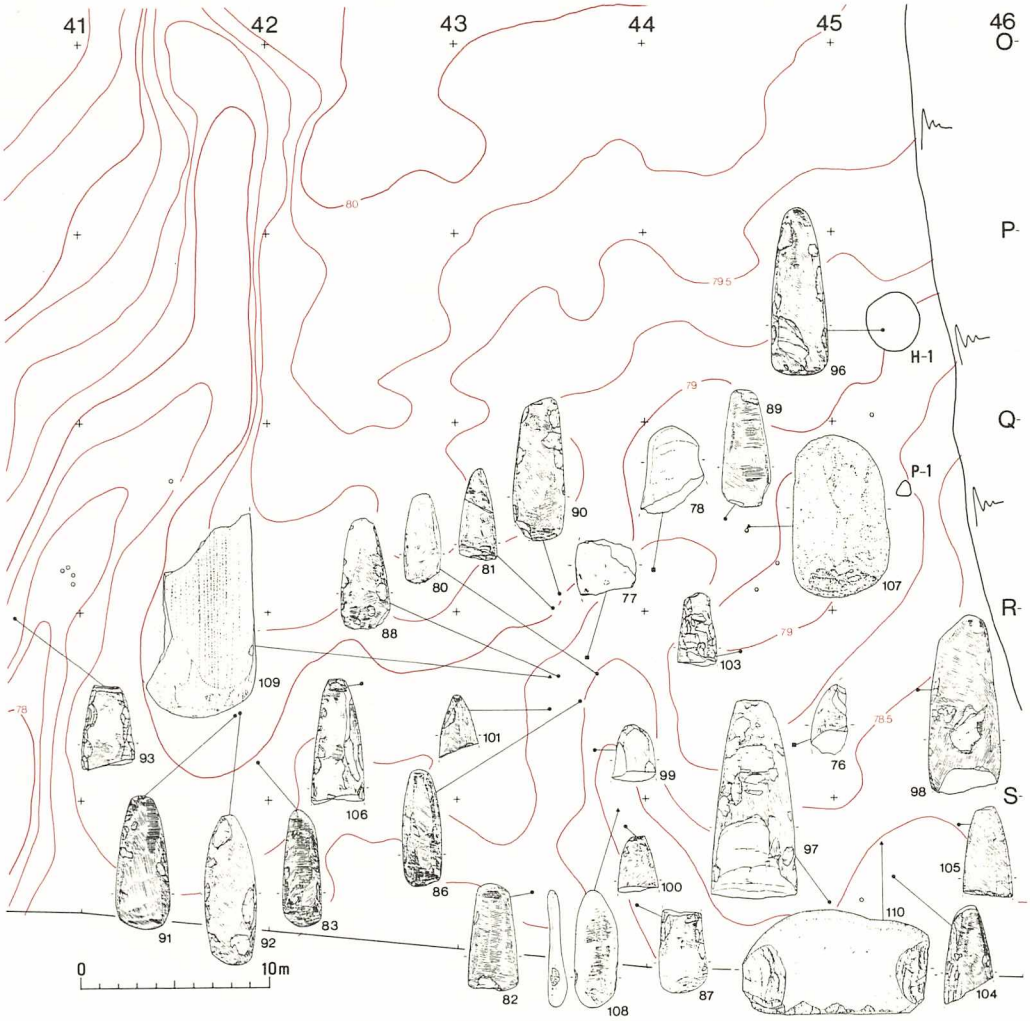


図Ⅳ－32　石器分布図(石鏃・石槍・石錐)

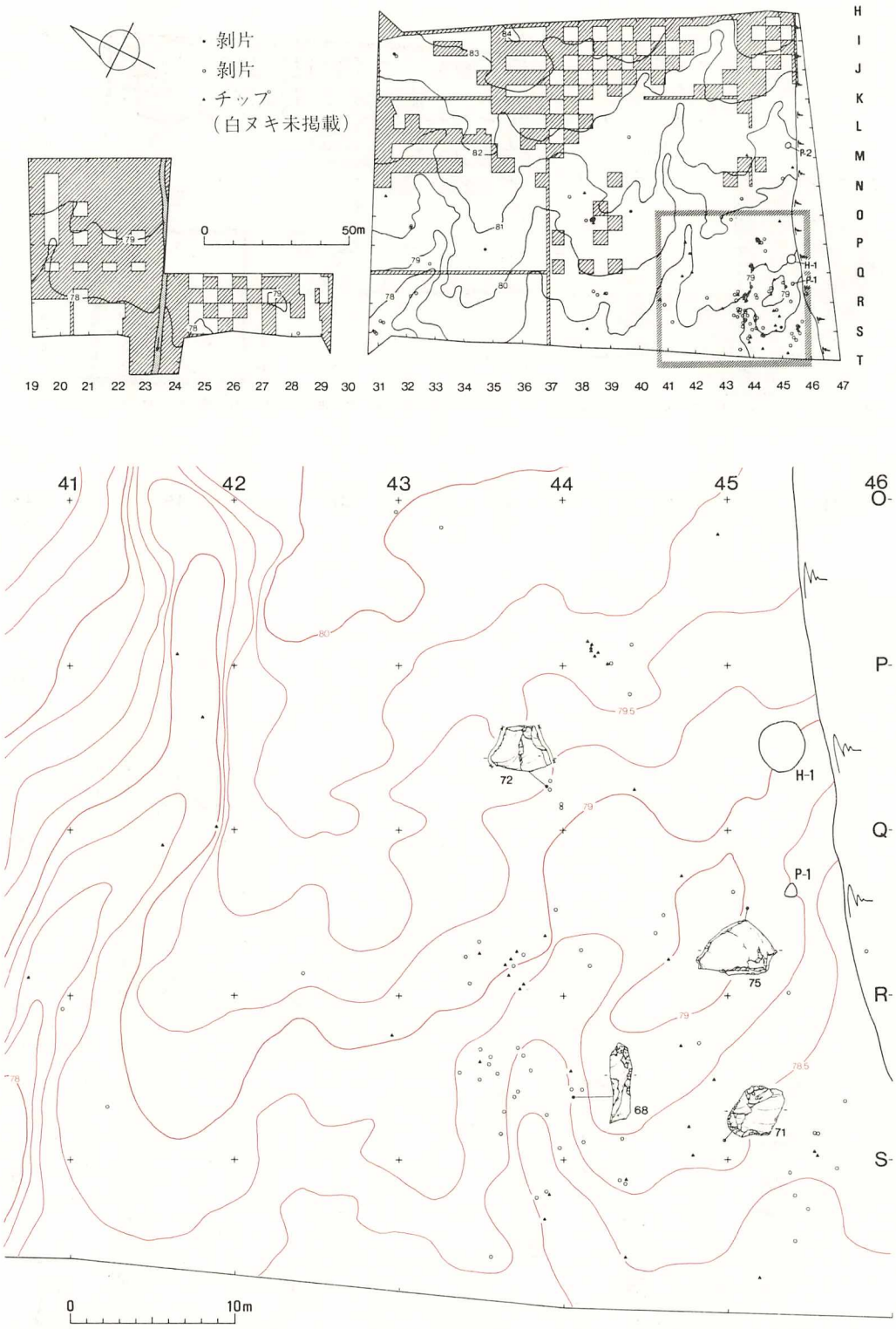


図Ⅳ－33　石器分布図（スクレイパー）





図Ⅳ－34　石器分布図(石斧・敲石・砥石・擦石・石製品)

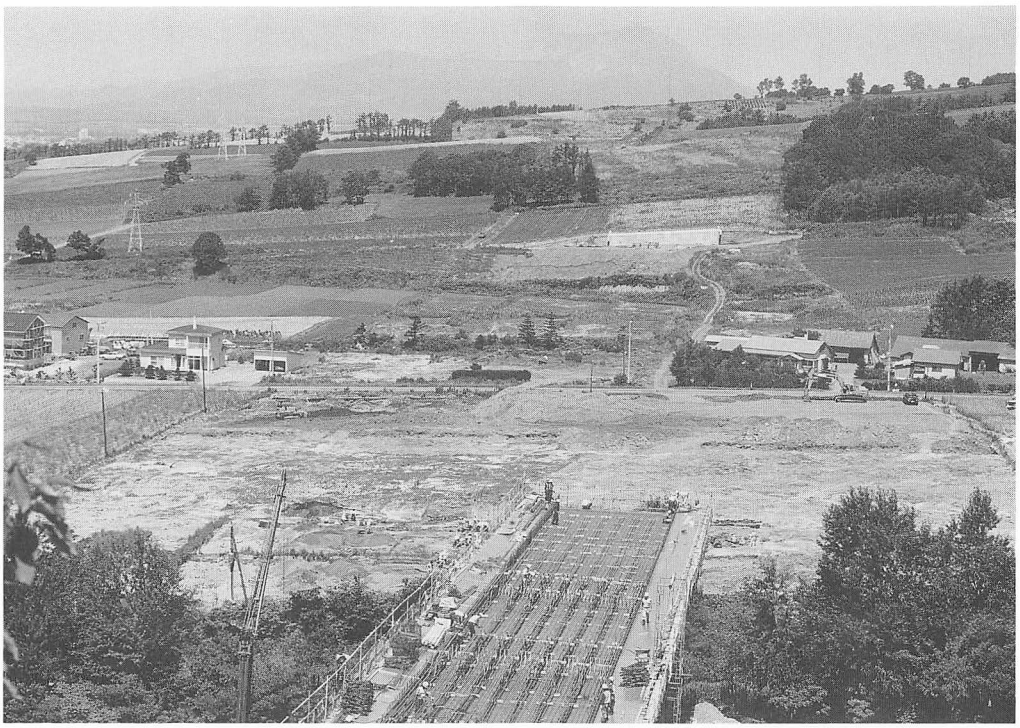


図Ⅳ－35　石器分布図(剥片・チップ)

写真図版

図版Ⅳ－１　遺跡全景…… 89
図版Ⅳ－２　調査風景(1)…… 90
図版Ⅳ－３　調査風景(2)…… 91
図版Ⅳ－４　土層セクション…… 92
図版Ⅳ－５　近世・近代遺構…… 93
図版Ⅳ－６　Ｈ－１…… 94
図版Ⅳ－７　Ｈ－１・Ｐ－１・Ｐ－２…… 95
図版Ⅳ－８　包含層出土の土器(1)…… 96
図版Ⅳ－９　包含層出土の土器(2)…… 97
図版Ⅳ－10　包含層出土の土器片(1)…… 98
図版Ⅳ－11　包含層出土の土器片(2)…… 99
図版Ⅳ－12　包含層出土の土器片(3)……100
図版Ⅳ－13　包含層出土の土器片(4)……101
図版Ⅳ－14　包含層出土の石器(1)……102
図版Ⅳ－15　包含層出土の石器(2)……103
図版Ⅳ－16　包含層出土の石器(3)……104
図版Ⅳ－17　包含層出土の石器(4)……105
図版Ⅳ－18　包含層出土の石器(5)……106

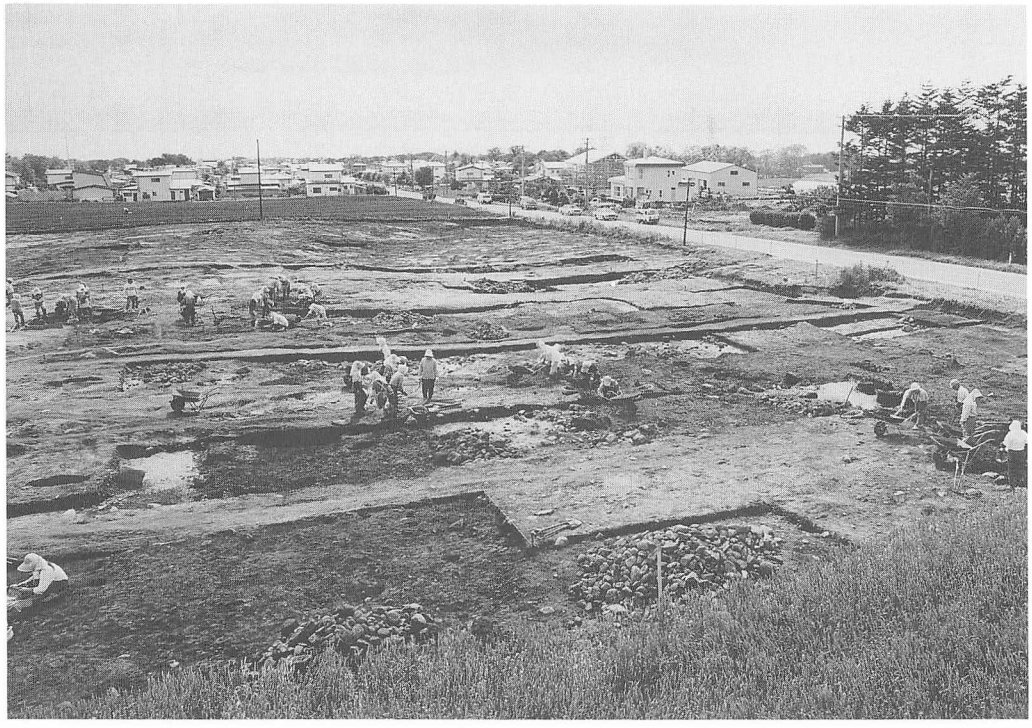
1　遺跡全景（調査前　南東から）



2　遺跡全景（南東から）

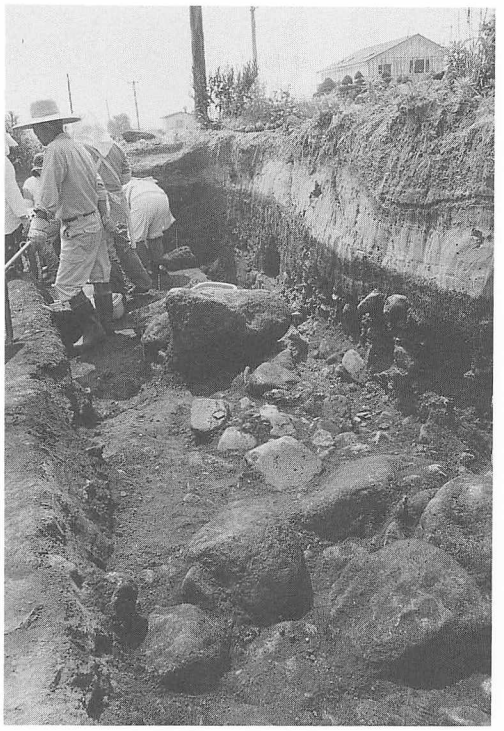
図版Ⅳ－2

1　調査風景（北から）



2　調査風景（東から）

1　調査風景（南から）



2　調査風景（東から）

3　調査風景（表土除去　南西から）

4　調査風景（西から）

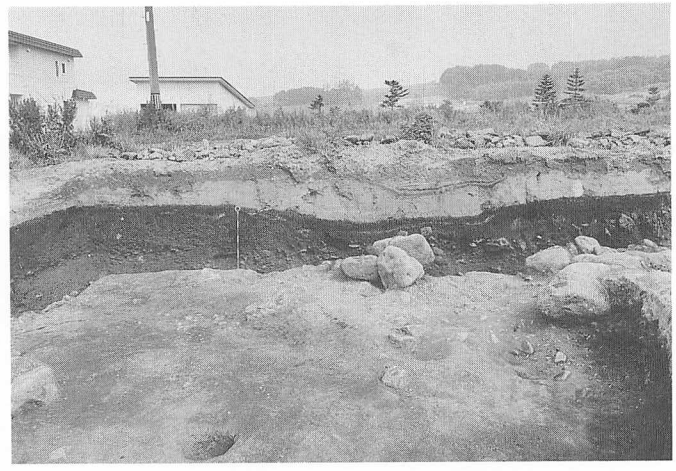
図版Ⅳ－4

1　H－42－b・c区　沢跡セクション（西から）

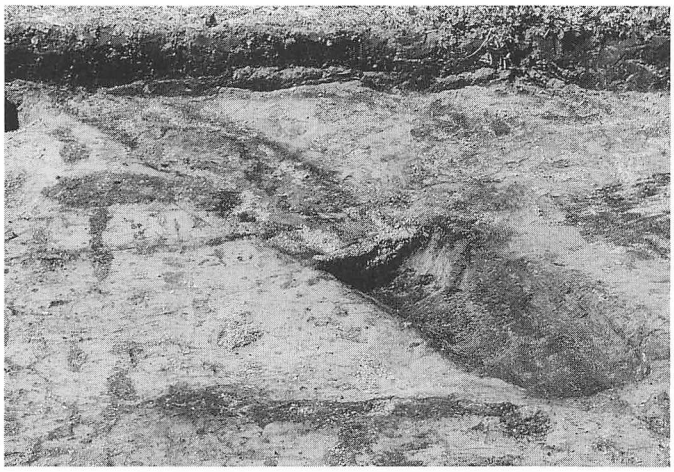
2　R－44－a区　セクション（南から）

3　O－32－c区沢跡セクション(北から)

4　S－43－d区セクション(南東から)



5　R－30－c・d区　沢跡セクション(南東から)



1　溝状遺構（近世　北東から）

2　土壙－1セクション（近世　南から）

4　土壙－2セクション（近世　南東から）

3　土壙－1完掘（南から）

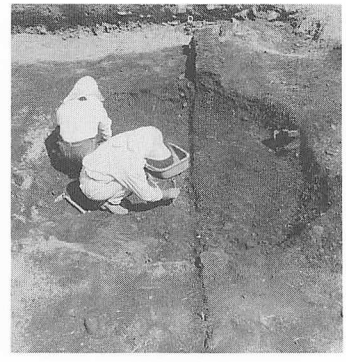
5　土壙－2完掘（南東から）

6　土壙（近代　北西から）

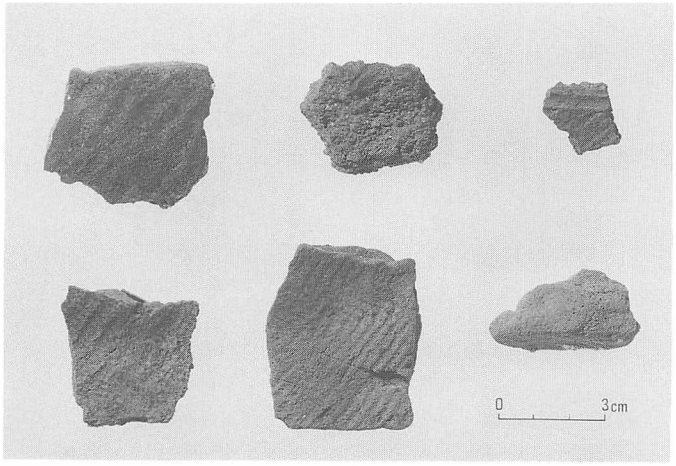
図版Ⅳ－6

1　H－I完掘（南から）

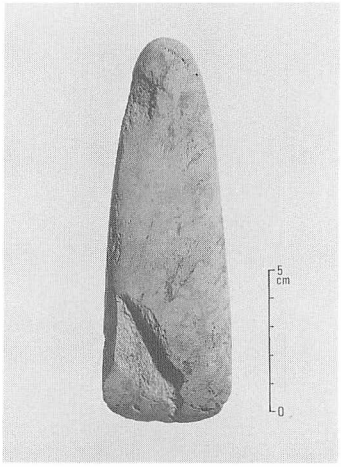
2　H－Iセクション（西から）



3　H－I調査風景（南から）

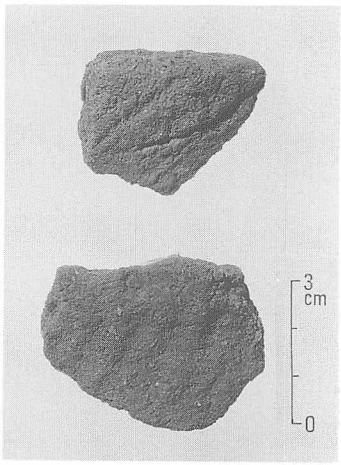


1　H－1出土の土器片

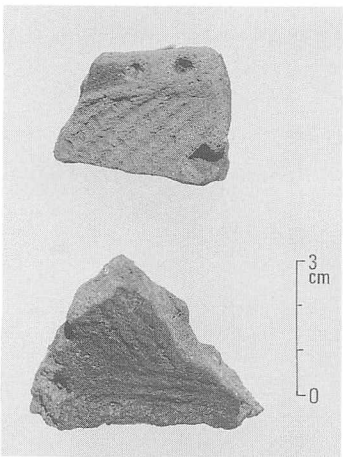


2　H－1出土の石斧

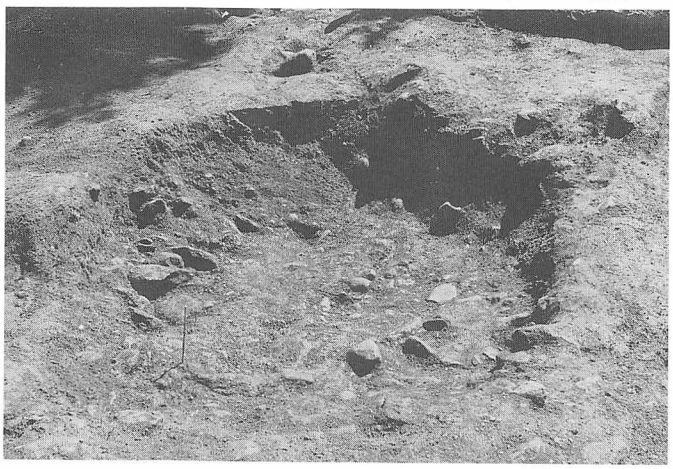
3　P－1完掘（南から）



4　P－1出土の土器片

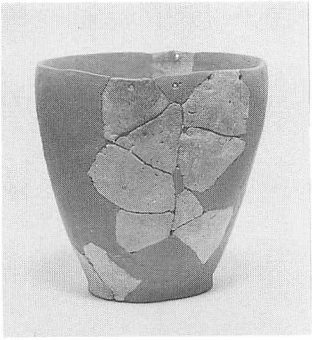


5　P－2出土の土器片

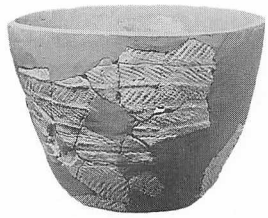


6　P－2完掘（西から）

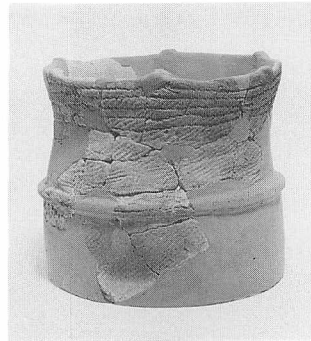
図版Ⅳ－8



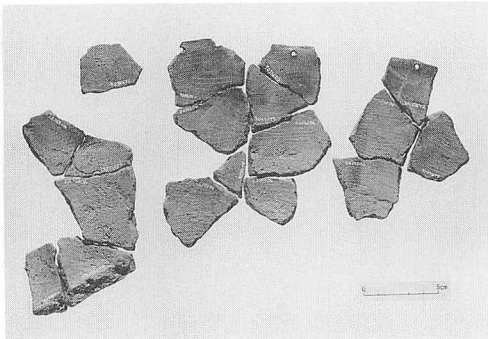
1　Ⅰ群ａ類土器



2　Ⅰ群ｂ類土器

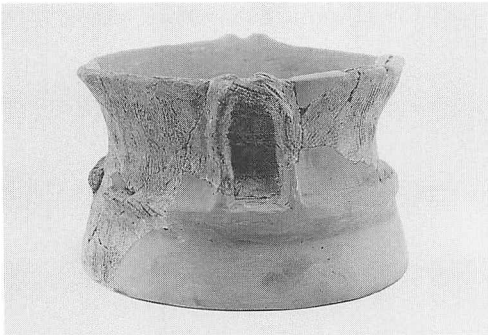


3　Ⅲ群Ａ－３類ｂ土器

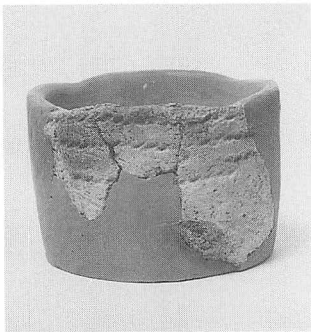


4　Ⅰ群ａ類土器（復元前　内面）

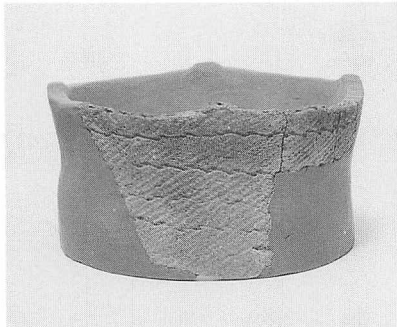
5　Ⅲ群Ａ－３類ｂ土器



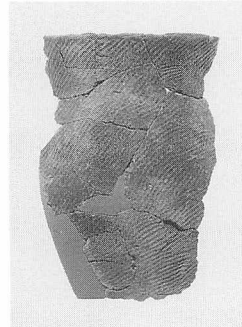
6　Ⅲ群Ａ－３類ｄ土器



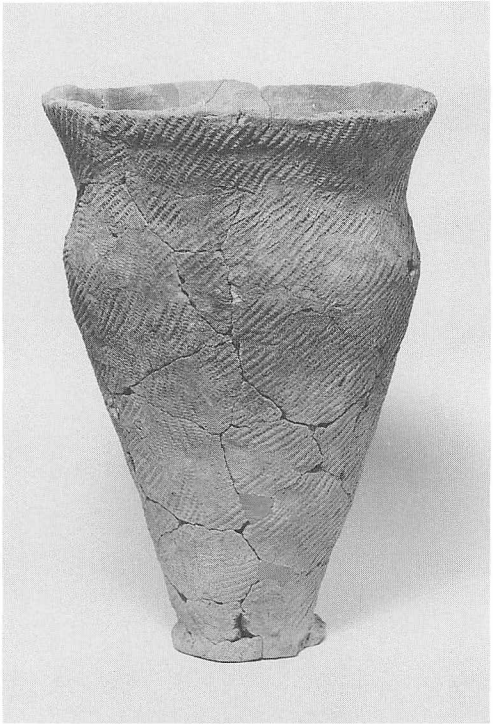
7　Ⅲ群Ａ－４類ｂ土器



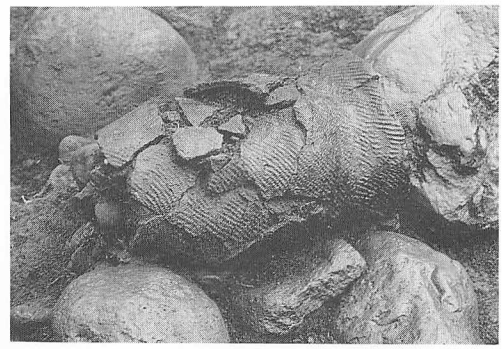
8　Ⅲ群Ａ－５類ａ土器



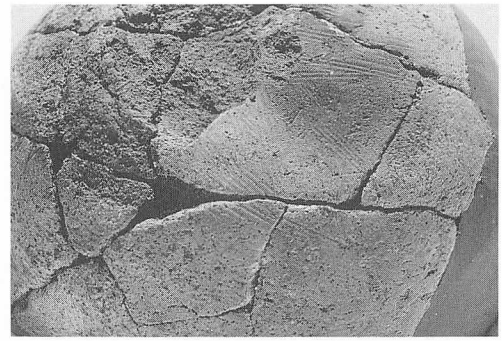
9　Ⅲ群Ｂ－４類ａ土器



1　Ⅲ群Ａ－５類ａ土器



2　Ⅲ群Ａ－５類ａ土器の出土状況（西から）

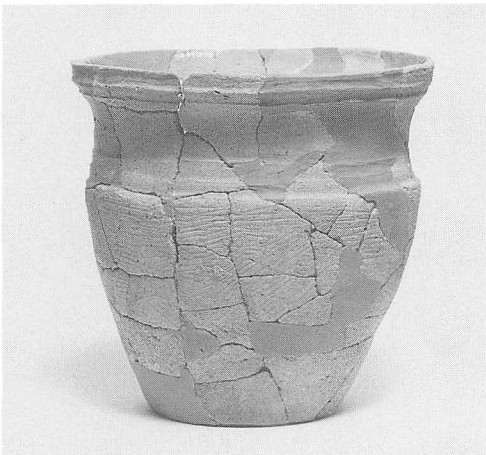


3　Ⅶ群ｂ類土器（６）の底部

4　Ⅶ群ｂ類土器

5　Ⅶ群ｂ類土器

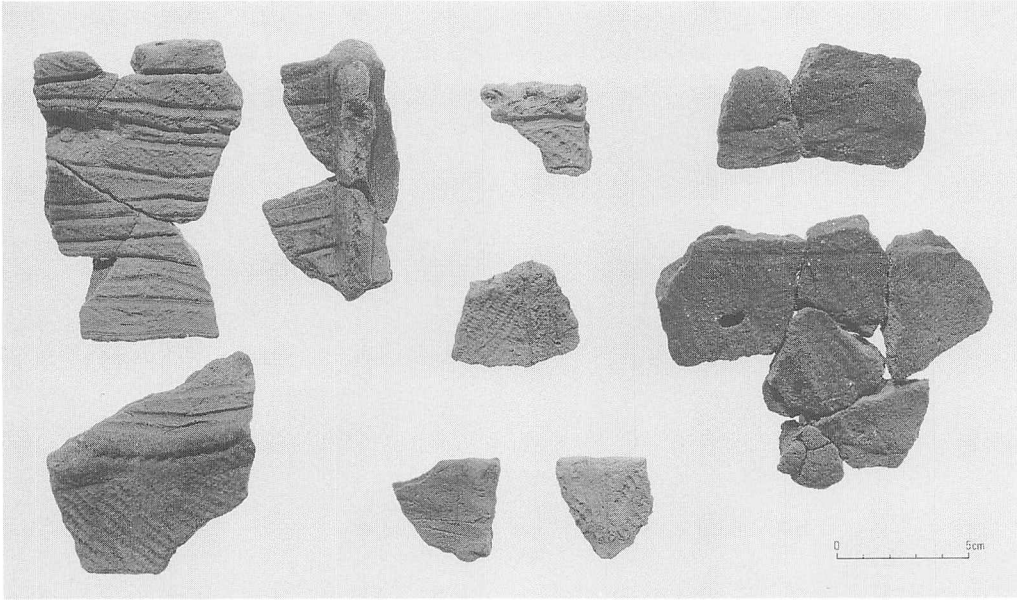
6　Ⅶ群ｂ類土器



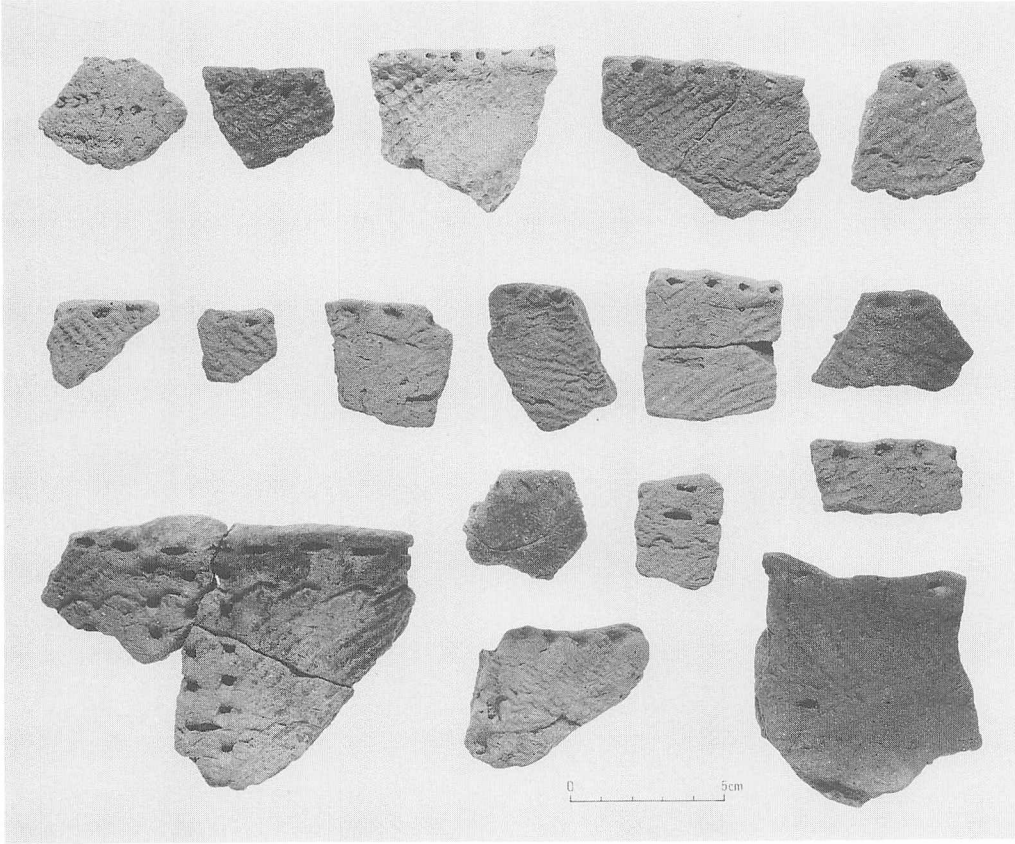
7　Ⅶ群ｂ類土器

8　Ⅶ群ｂ類土器

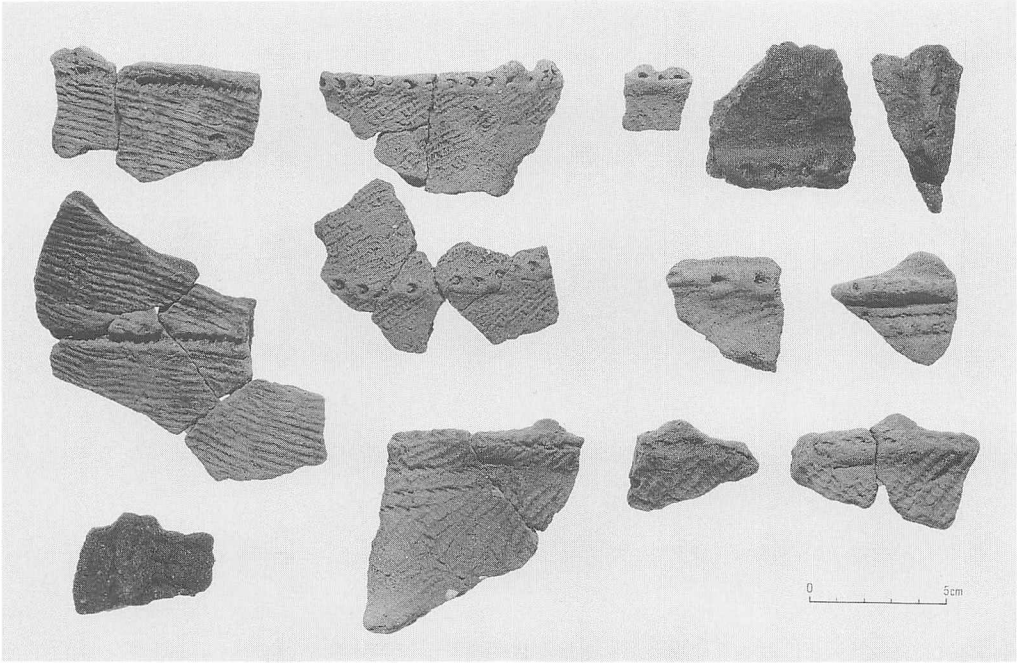
図版Ⅳ－10



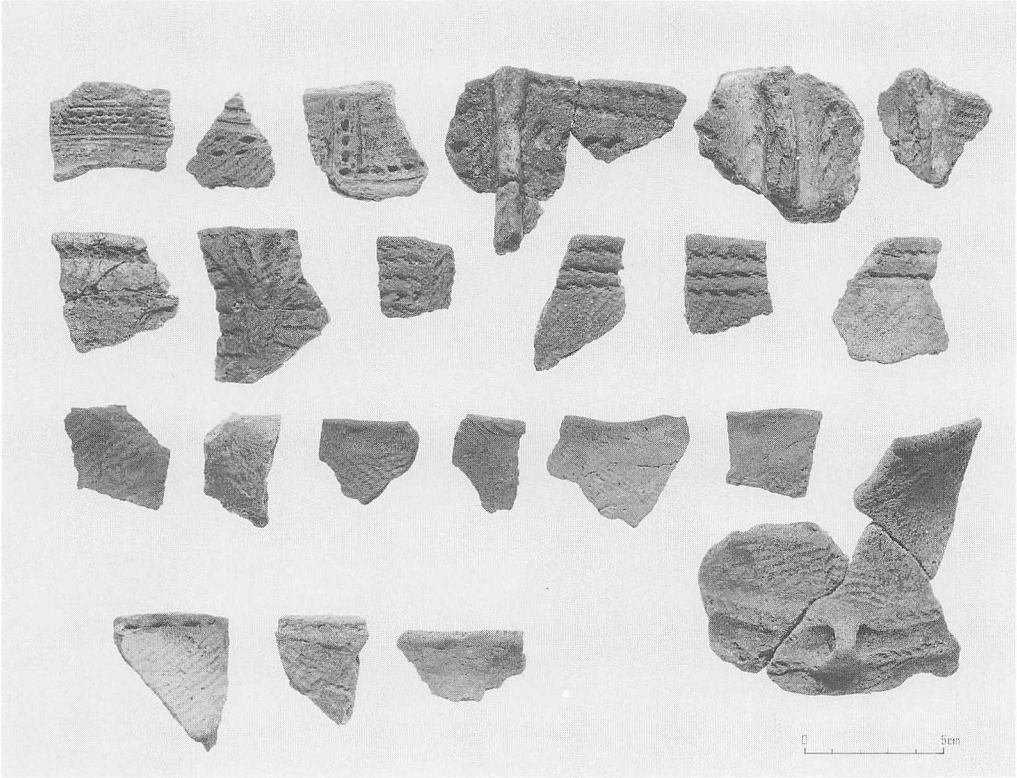
1　Ⅲ群Ａ－１類の土器片



2　Ⅲ群Ａ－２類の土器片

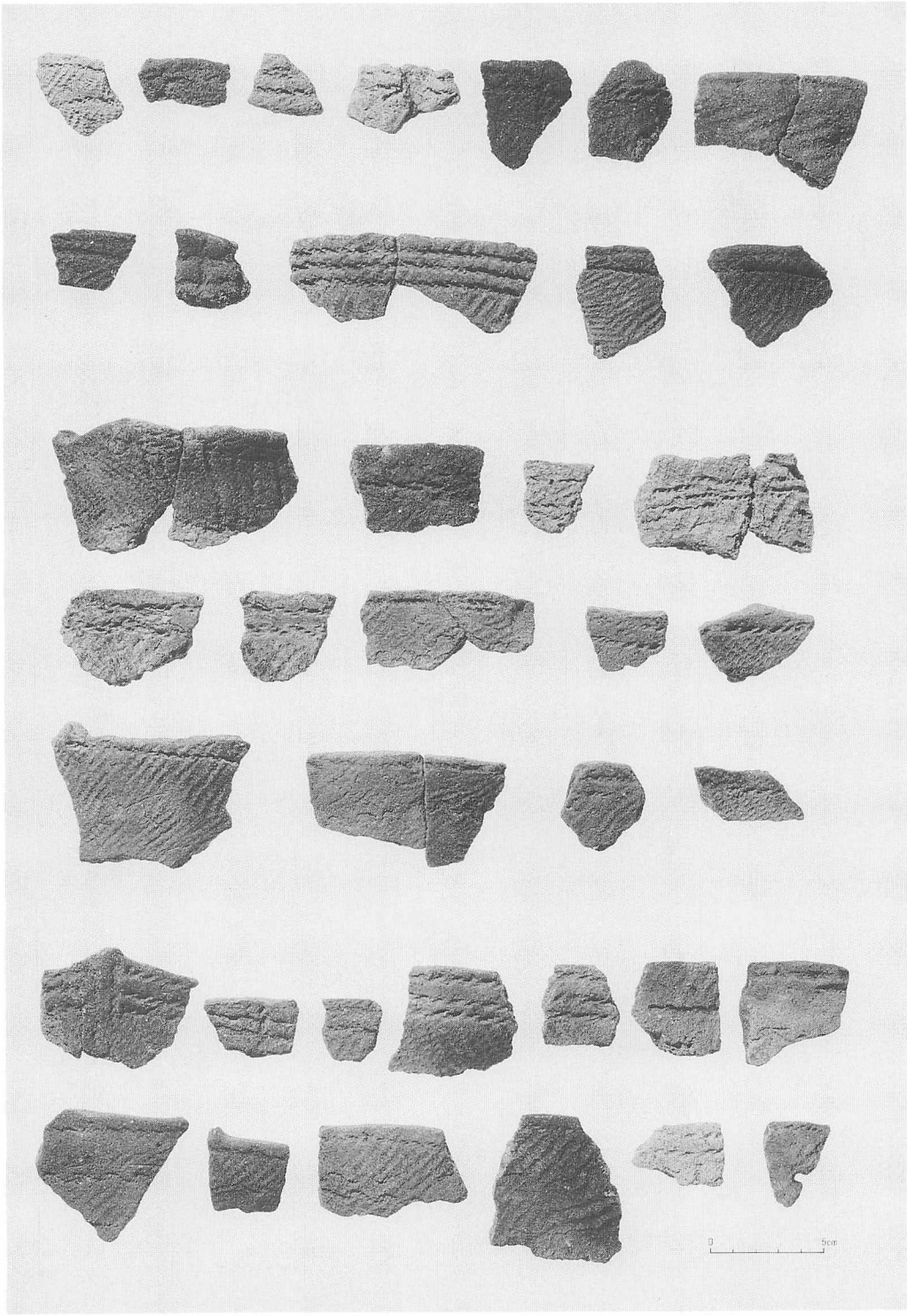


1　Ⅲ群A－3類の土器片

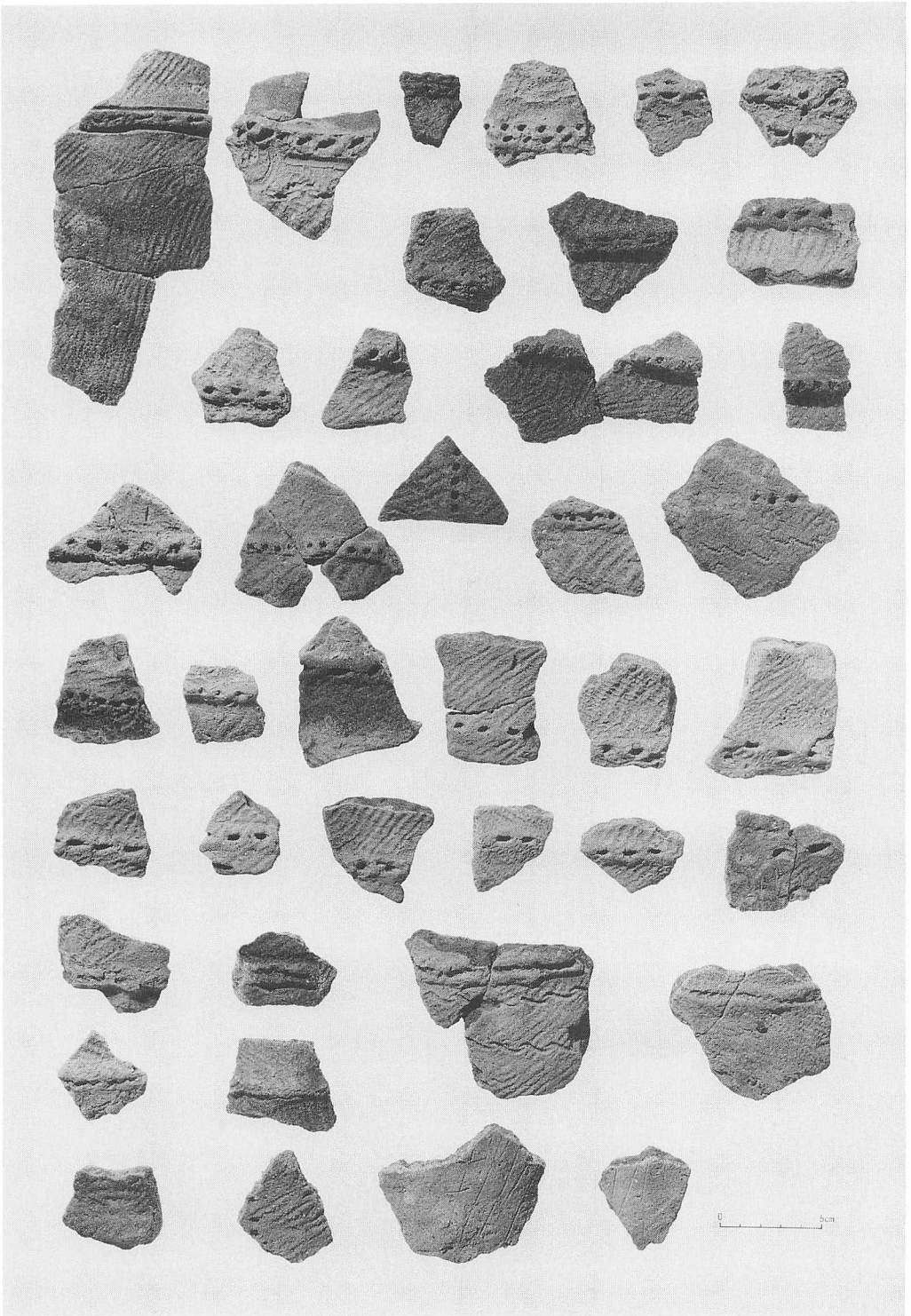


2　Ⅲ群B・B′類の土器片

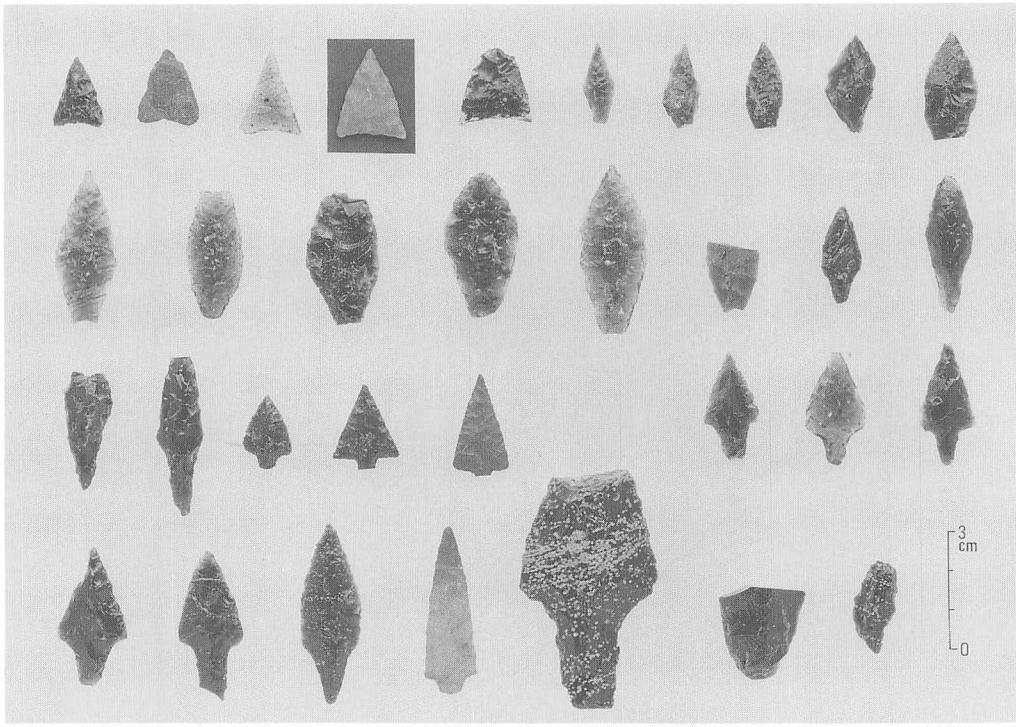
図版Ⅳ－12



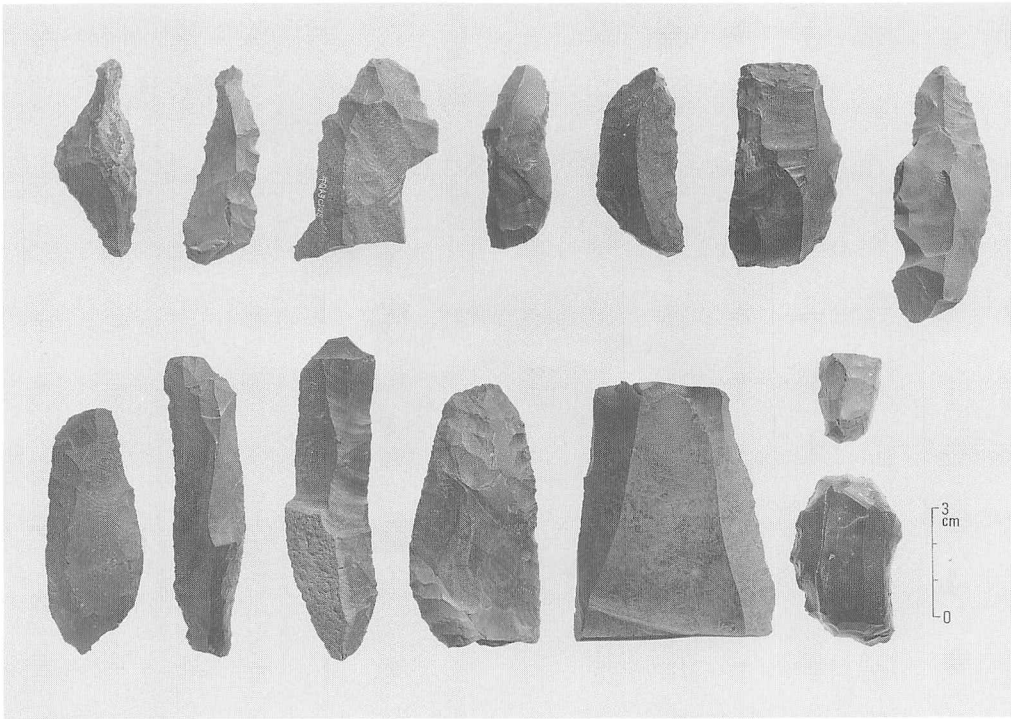
Ⅲ群Ａ－４類の土器片



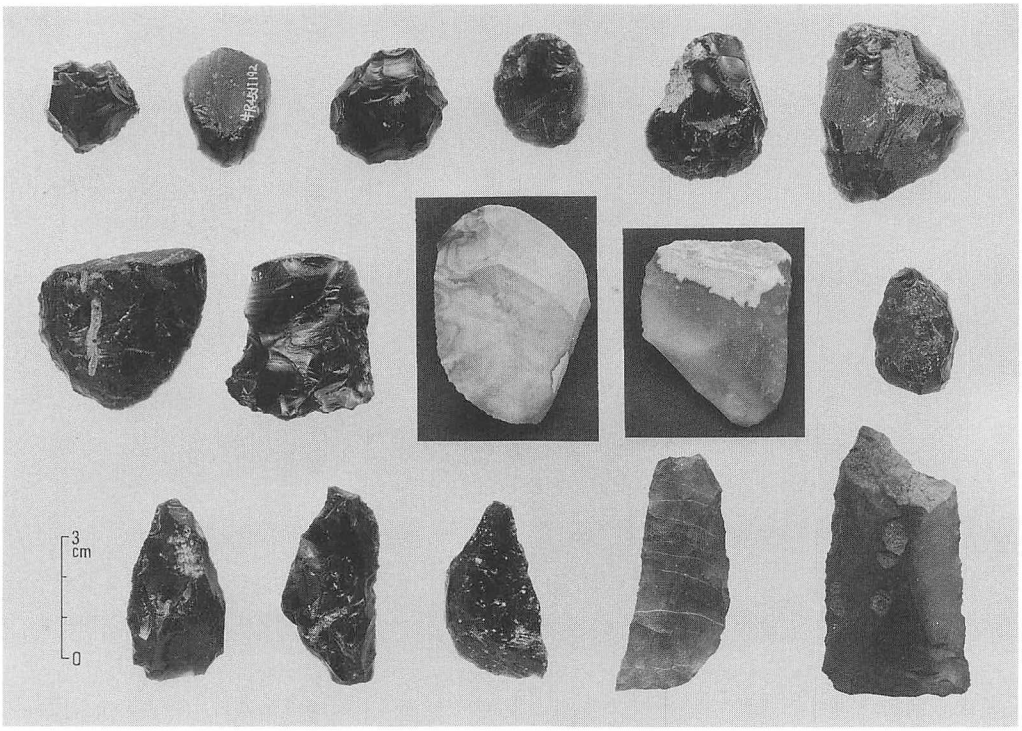
Ⅲ群Ａ－７類の土器片



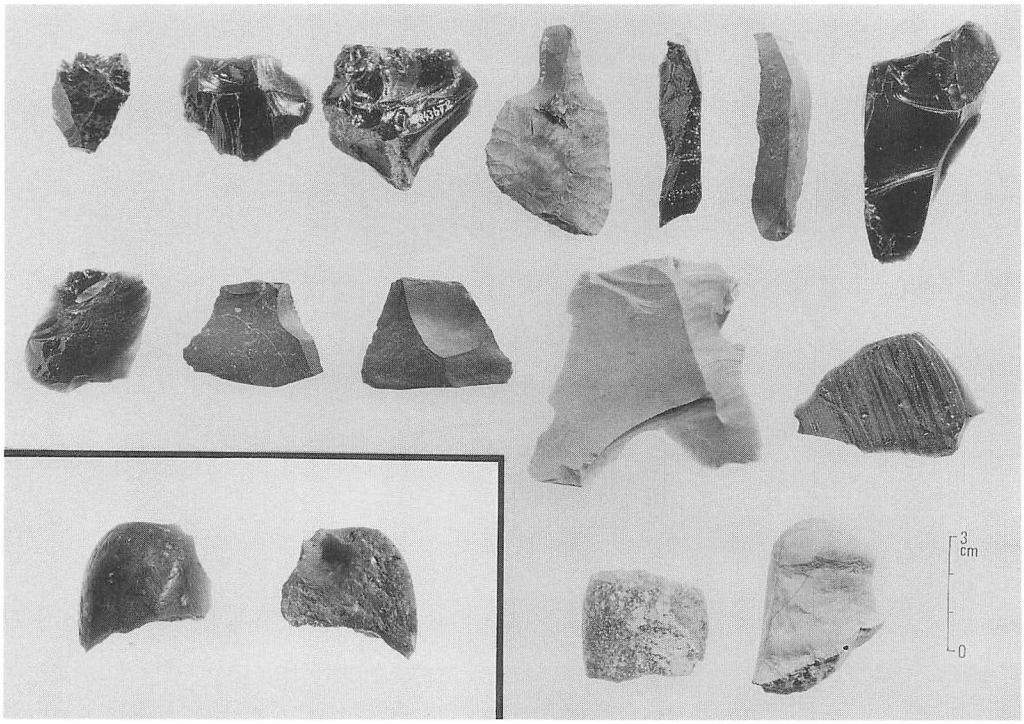
1　石器（石鏃・石槍・石錐）



2　石器（ナイフ・スクレイパー類）

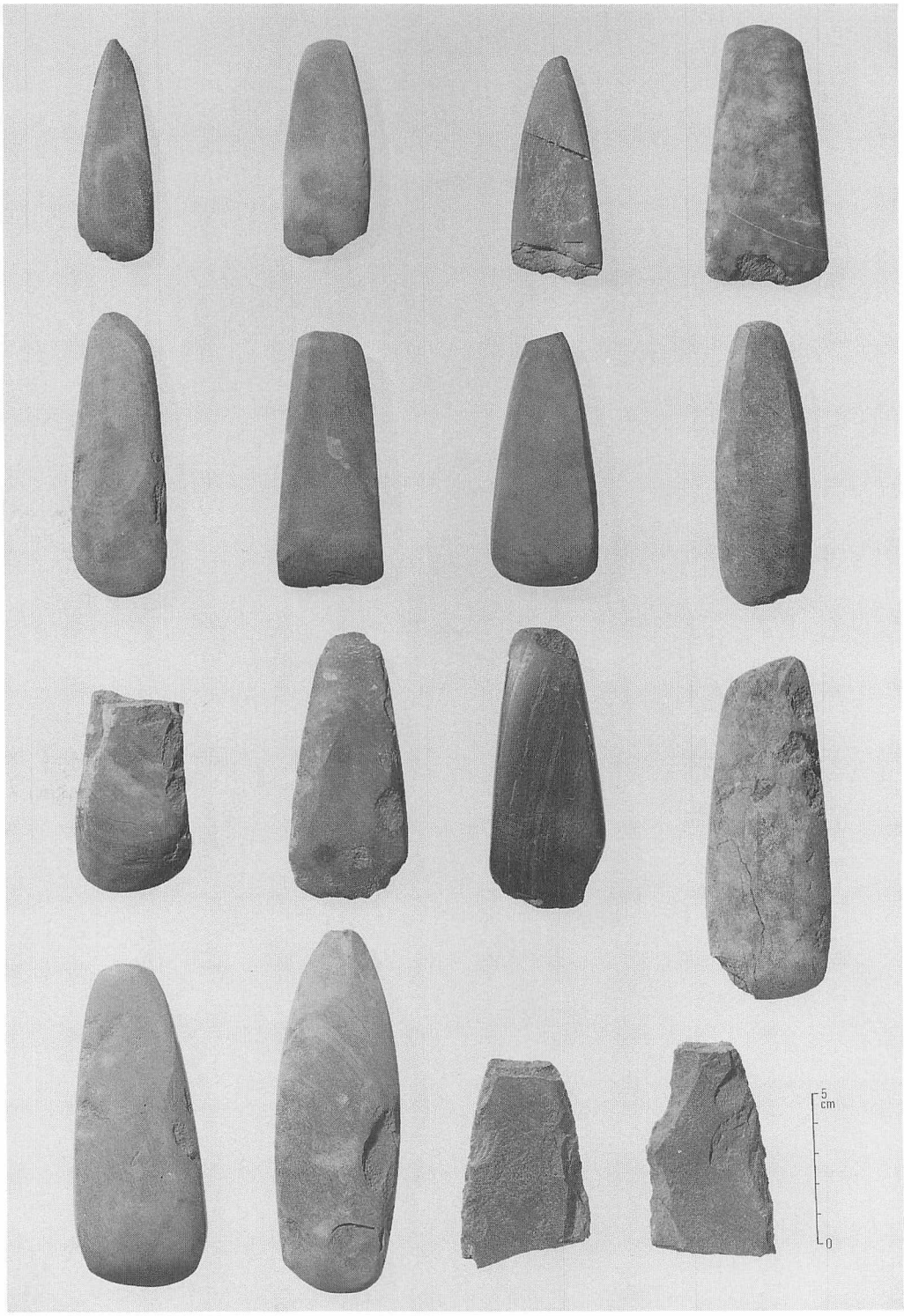


1　石器（ナイフ・スクレイパー類）

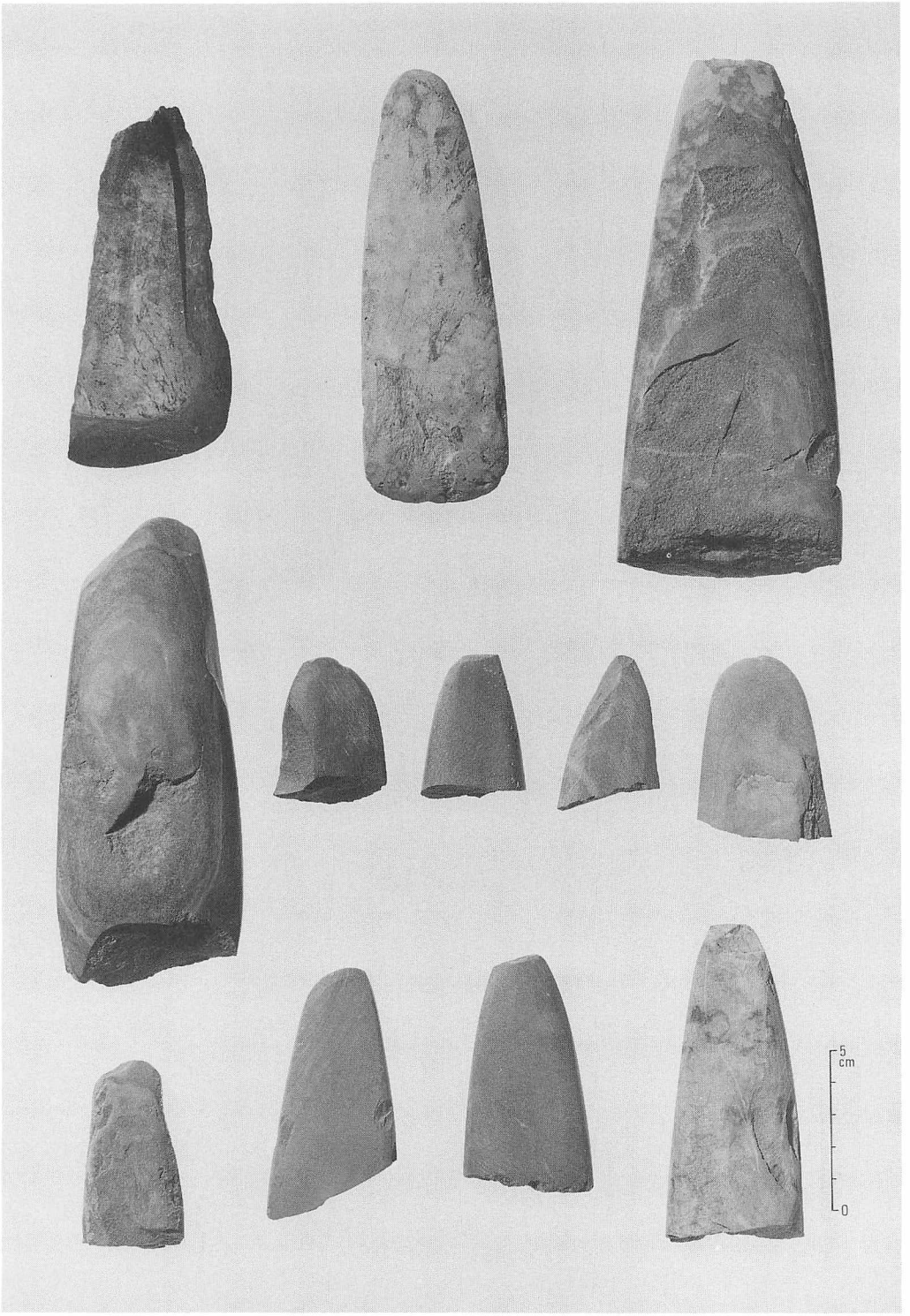


2　石器（ナイフ・スクレイパー類・剝片）・石製品

図版Ⅳ－16

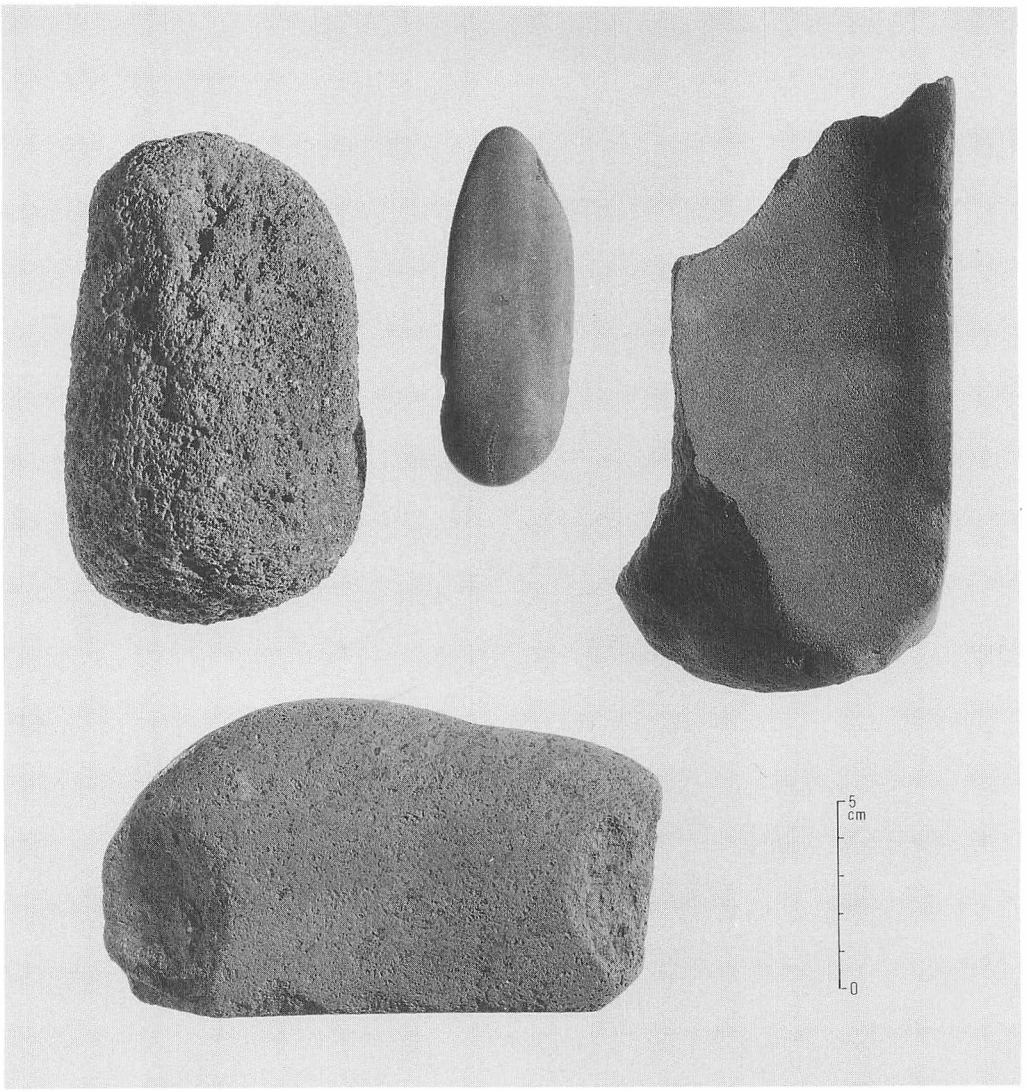


石器（石斧）



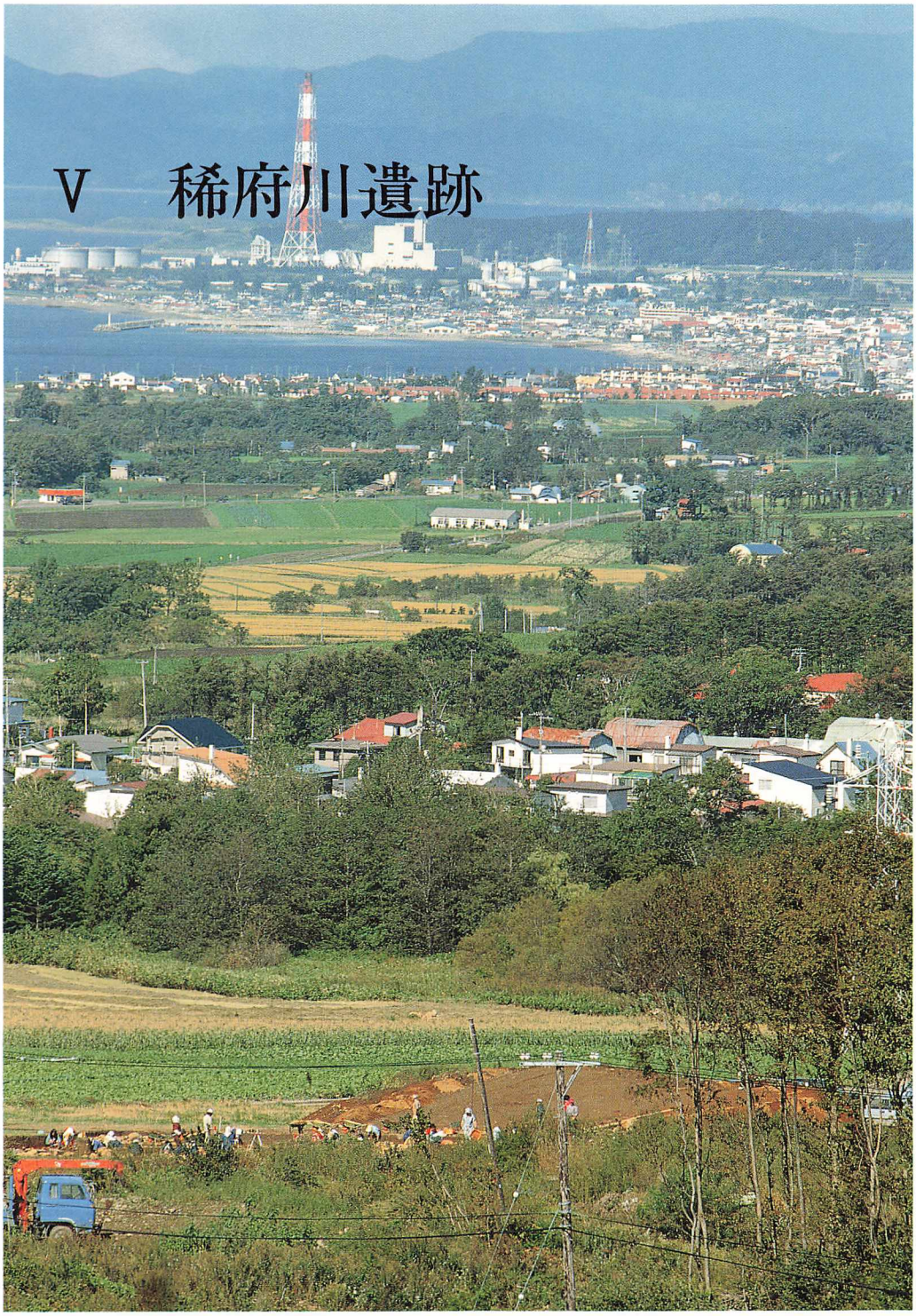
石器（石斧）

図版Ⅳ－18

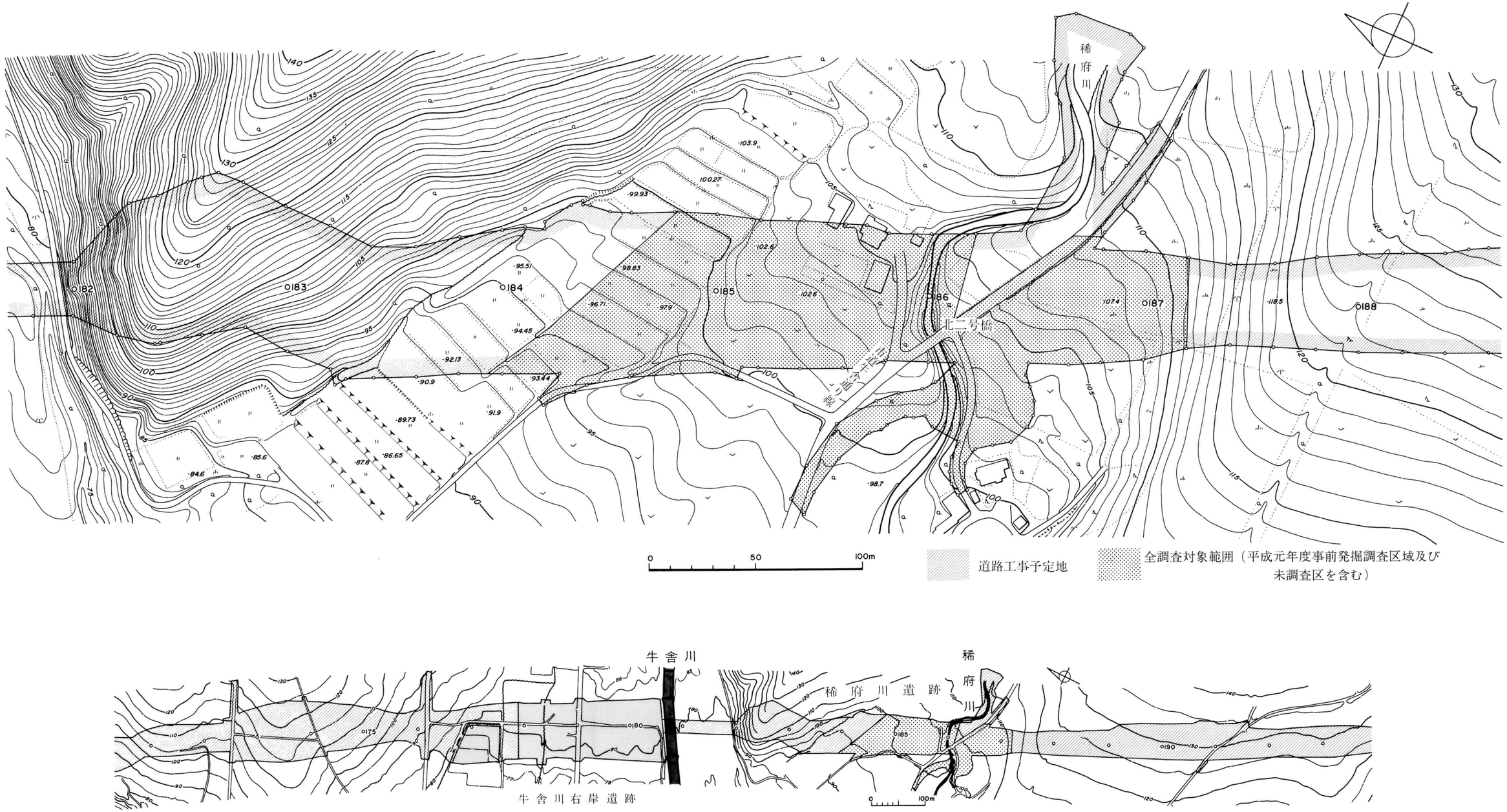


石器（敲石・砥石・擦石）

V　稀府川遺跡



遺跡と伊達市遠望（東から）



図Ⅴ－１　稀府川遺跡周辺の地形と道路工事予定地

1　調査の概要

稀府川遺跡(旧称牛舎川左岸遺跡)は，牛舎川の河口から2.4 km程入った，支流稀府川の流域に所在する。その範囲は広大で，標高80 mから110 mまでの，稀府川両岸の扇状地に及んでおり，第II章第3節に紹介した野田地点や，今回の調査によって判明した旧河川の両岸など，時期を異にする，いくつかの拠点の存在が認められる。

現況は大部分が畑で，北縁部の一段低い沢地には水田が造成されている。扇状地を挟む南北の丘陵上は，牧草地として利用されている所が多い。丘陵斜面の一部や，稀府川の河川敷には林地が残され，カシワやミズナラ，クリ，オニグルミなど堅果のなる樹木をはじめ，タラノキ，キハダ，サンショなどの有用種，ヤマブドウ，コクワ，マタタビといった蔓性植物などの繁茂がみられる。河岸のやや開けた部分には，カタクリやエゾエンゴサク，オオウバユリやイチゴ類，フキやゴボウといった植物が生育し，調査区北縁の放棄された水田跡には，セリやミゾソバの類が群生していた。このように遺跡付近には起伏に富んだ地形が展開しており，過去においても多種類の有用な草木に恵まれていたと思われる。地元の人の話では，稀府川にはかつてはマスが溯上したという。また，遺跡からは噴火湾が一望でき，海からもそう遠くはない。

縦貫道建設に伴う稀府川遺跡の発掘必要範囲は，北端の水田部分から稀府川の右岸一帯，さらに川を越えた左岸の丘陵裾まで，距離にして300 m以上に及んでいる(図V－1)。そのうち今年度は，60ラインから66ラインまでの水田部分と，74ラインから78ラインあたりの西側半分，そして81ラインから92ラインに至る左岸の全域を調査し，さらに，試掘調査の未了地区を対象に，包蔵地範囲確認のための事前発掘調査を実施した。

本調査の結果，遺構としては縄文後期末葉の竪穴住居跡が3軒(H－1，2，5)，晩期後半の竪穴住居跡が3軒（H－3，4，6）検出された。また，近代の所産と思われるP－1も含めて，8基の土壙(P－1～8)が見出され，集石遺構が1基発見された(図V－26)。さらに，128カ所に及ぶ焼土の分布も認められた（図V－29)。なお，事前発掘調査に際して検出された樋状遺構は，高圧鉄塔に連結するアースを這わせた，現代の設備であることが確認された。

遺構は稀府川の左岸に多く，右岸には少ない傾向がみられた。特に北端の水田部分では，包含層が殆ど川原と呼べそうな氾濫原に直接薄くのっており，遺構や遺物の検出は僅かであった。ここでは段々に，東側を削って西に盛るという，水田造成に伴う改変があり，削平部では包含層が破壊されていた。

稀府川の右岸では，86～87ラインあたりを東西に貫流する，旧河川の跡が発見された。縄文中期後葉から擦文時代には，この川が重要な役割を果たしていたらしく，この流路の両岸に竪穴住居跡などの遺構が集中し，遺物の分布もまた濃密だった。

耕作による包含量への影響は，有珠山の火山灰の被覆のおかげで，全般に少なかったが，北二号橋を渡って東へ延びる市道牛舎通り線の下では，道路造成に伴う破壊が認められた。N－81－d区からM－83－a区にかけては，道路下の包含層が削平されて殆ど壊滅しており，L－83－c区からK－85－d区にかけては，側溝などの掘削のため，包含量の一部やH－5などの

遺構にも攪乱が及んでいた。

出土遺物には，縄文早期中葉の貝殻文土器の段階から，縄文各期，続縄文期，擦文期のものがある。表V－1のように，土器の出土総点数は22,546点で，縄文後期末葉のIV群c類土器が最も多く，全体の過半を占める。次いで晩期後半のV群c－1類，中期のIII群，擦文期のVII群a類などの順となっている。石器，石片は全部で1,197点得られており，石鏃やスクレイパー，U・Rフレイクの類が圧倒的に多く，ナイフや石錐，石斧などが少々，擦石や敲石はごく僅かであった。土製品や石製品も少量あり，H－1からは耳栓が検出されている。また，開拓期以降に塵芥として捨てられた陶磁器片，農機具などの鉄製品，石墨，豚や馬の歯や骨，貝殻片なども，耕作土中から若干採集されている。製作年代が江戸時代に遡る銅銭と，その可能性が強い土面子については，第3節に報告したが，他は省略した。

稀府川遺跡の層序は，基本的には牛舎川右岸遺跡のそれと同一で，第III章に説明があるとおりである。IV層のUs－b火山灰までは重機を導入して除去，V・VI層が包含層で，VII層の上面をもって発掘を終了した。図V－5に，調査区のほぼ中央を貫くNラインの断面実測図を掲げたが，ここにみられるように，基本的な層序は同じだが，実際の層堆積はやや複雑で，V・VI層中には分布域の限られた幾つかの地層が介在している。

第一は，大礫を多量に混在させる，粘質の強い黒～黒褐色土層で，ほぼ88ラインから南の調査区に分布がみられた。これは丘陵斜面を流下した土石流と呼べそうな土層で，VI層上部からV層下部にかけての層準に認められ，H－1，2など縄文後期末の竪穴住居跡を覆っていた。層厚は30cm程で，礫の流下は旧河川の手前約10mでとまっている。土石流の規模はそう大きくはなかったと推測されるが，礫の集中域が幾つか波状に残されており，土石流は何回か繰り返されたものと思われる。

第二は，旧河川の内外に特有の堆積層で，氾濫に伴う砂礫層と，その間に挟まれた腐植質の砂泥層との互層によって構成される。旧河川の開析は縄文中期以前に遡る現象で，O－85区や

表V－1　出土遺物一覧

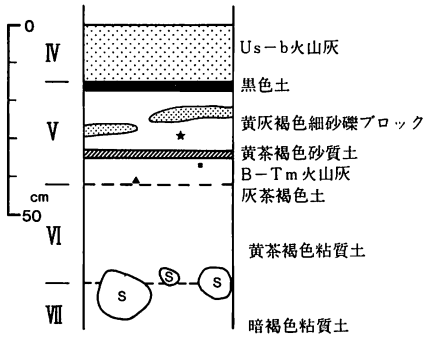
土器	I		II	III	IV			V		VI			VII			不明	計
	a	b			a	b	c	c－1	c－2		b	c		a	b		
遺構		4		6			842	332	40			2		5		10	1,241
包含層	36	54	12	1,554	205	864	11,523	5,045	519	7	29	531	56	474	343	53	21,305
計	36	58	12	1,560	205	864	12,365	5,377	559	7	29	533	56	479	343	63	22,546

器種	石鏃	石槍 又はナイフ	石錐	つまみ付ナイフ	スクレイパー	石斧	擦石	敲石	U.・R.フレイク	楔形石器	石核	土製品	石製品	フレイク	合計
遺構	1	1			1	1			10		1	3		69	89
包含層	95	10	11	6	102	11	1	4	56	1	3	8	1	799	1108
計	96	11	11	6	103	12	1	4	66	1	4	11	1	868	1197

P－84区などでは，旧河床近くの暗灰茶褐色からの薄い砂泥層に，断片的な資料だが，縄文中期後半と思われる土器片が包含されていた。その上には砂礫層がのって河床を上昇させ，川岸をのりこえた砂礫層は，自然堤防を発達させている。さらに，砂泥層と砂礫層の堆積が繰り返され，K－86区や対岸のL－87区，そしてO－85～86区にかけての数カ所で，川縁から続く黒褐色の砂泥層中に，縄文後期後半の土器片が遺存していた。また，P～Q－84区の埋積が進んだ僅かな凹みには，暗茶褐色の粘質土が薄く堆積し，縄文晩期末から続縄文期の遺物の点在がみられた。この上には次に述べるB－Tm火山灰が断続的にのり，さらに砂礫が被覆，流路はほぼ閉塞された。

第三は，考古学的な鍵層となる火山灰の存在で，特に白頭山－苫小牧火山灰（B－Tm）が重視される。B－Tmは，V層中に介在するもので，上述した旧河川上の凹みに残存したほか，M～N－81～83区の一帯，そしてO～P－81～82区あたりと，現河川へと地形が傾斜していく地区に，明瞭な分布がみられた。また，N－88区付近でも，V層上部の黒色土直下に，やや土壌化が進んだ状態で認められた。

B－Tm火山灰は擦文時代を新旧に分ける鍵層であり，伊達市有珠善光寺2遺跡（長谷川1986）や千歳市末広遺跡（田村ほか1981，1982，1985），ママチ遺跡（北埋文1987）厚真町共和遺跡（佐藤ほか1987），松前町札前遺跡（久保ほか1985，1989）などで，住居跡との関係が追究されている。末広遺跡の類例などを詳細に分析した根本直樹氏は，その降下が10世紀中頃であったと論証している（根本1985）。



★ Ⅶ群b類土器
■ Ⅶ群a類土器
▲ Ⅶ群c－1類土器

図V－2　白頭山－苫小牧火山灰層模式図

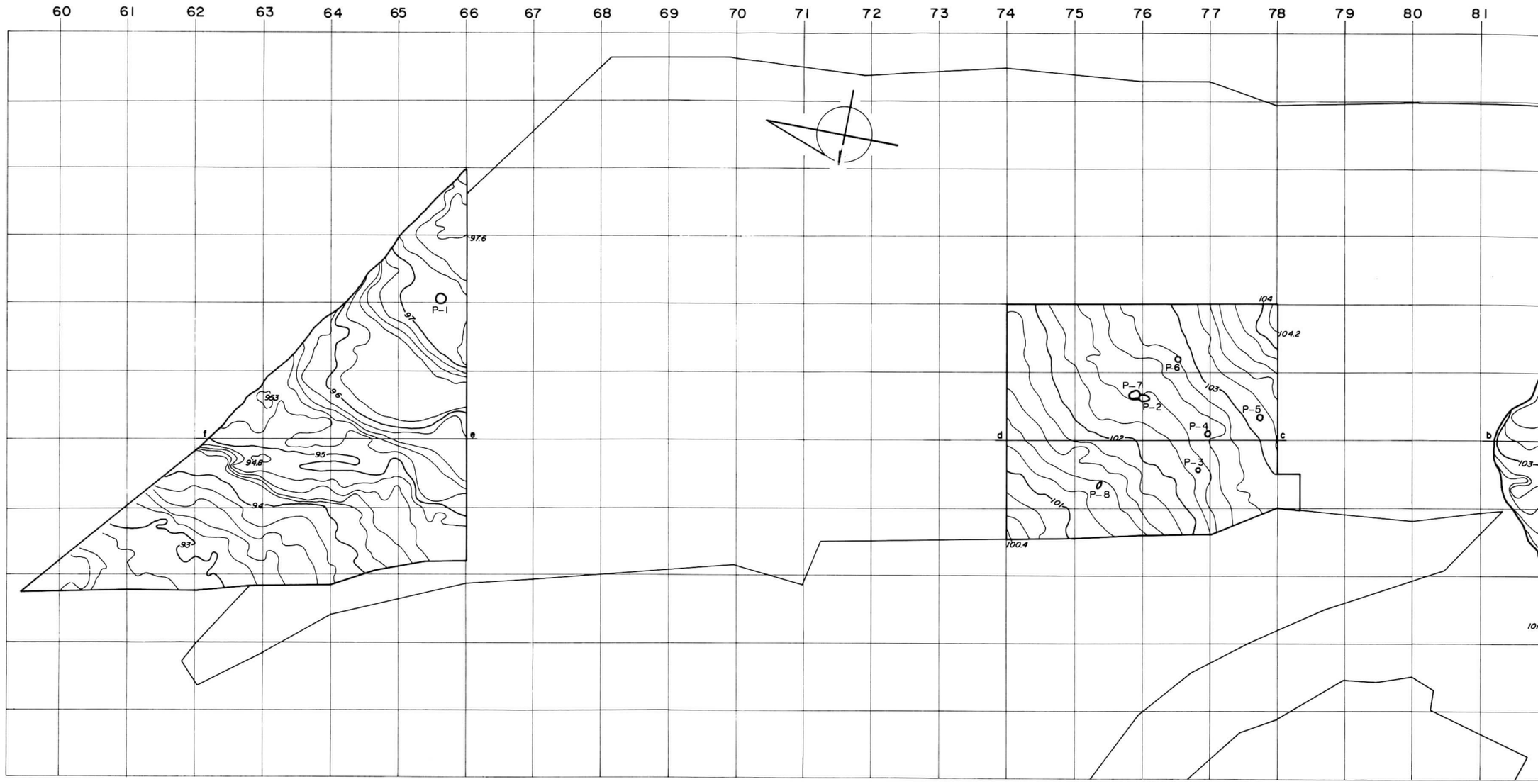
本遺跡でも，B－Tm火山灰を挟んだ上下から擦文土器が得られており，図V－2にその模式図を示す。図は，M－82－c区での土層観察に，周辺区での遺物の出土層位をも加味したもので，Ⅶ群a類土器は火山灰直下に，Ⅶ群b類土器は火山灰の上に見出されている。

また，伊達市内の遺跡では，縄文早期から前期にかけての鍵層となりうる火山灰の存在が知られている。上坂台地円筒貝塚（名取・峰山1954）や若生貝塚（名取・峰山1957）では，縄文前期の貝層中に，貝殻を紫に変色させる，2枚の赤褐色の火山灰があり，特に注目されている。赤褐色火山灰は萩原2遺跡（峰山・大島1979）にもみられ，また，北黄金貝塚の試掘区（峰山・大島1979）では，縄文早期の包含層を二分する，オレンジ色の火山灰が確認されている。早期の文化層を分ける火山灰は，第Ⅳ章第4節の説明のように，牛舎川右岸遺跡にも存在する。稀府川遺跡では，黄褐色や赤褐色の不整な火山灰ブロックが，Ⅵ層中に局所的に混在しており，P－3は黄褐色の火山灰を切って構築されていた。（高橋　和樹）

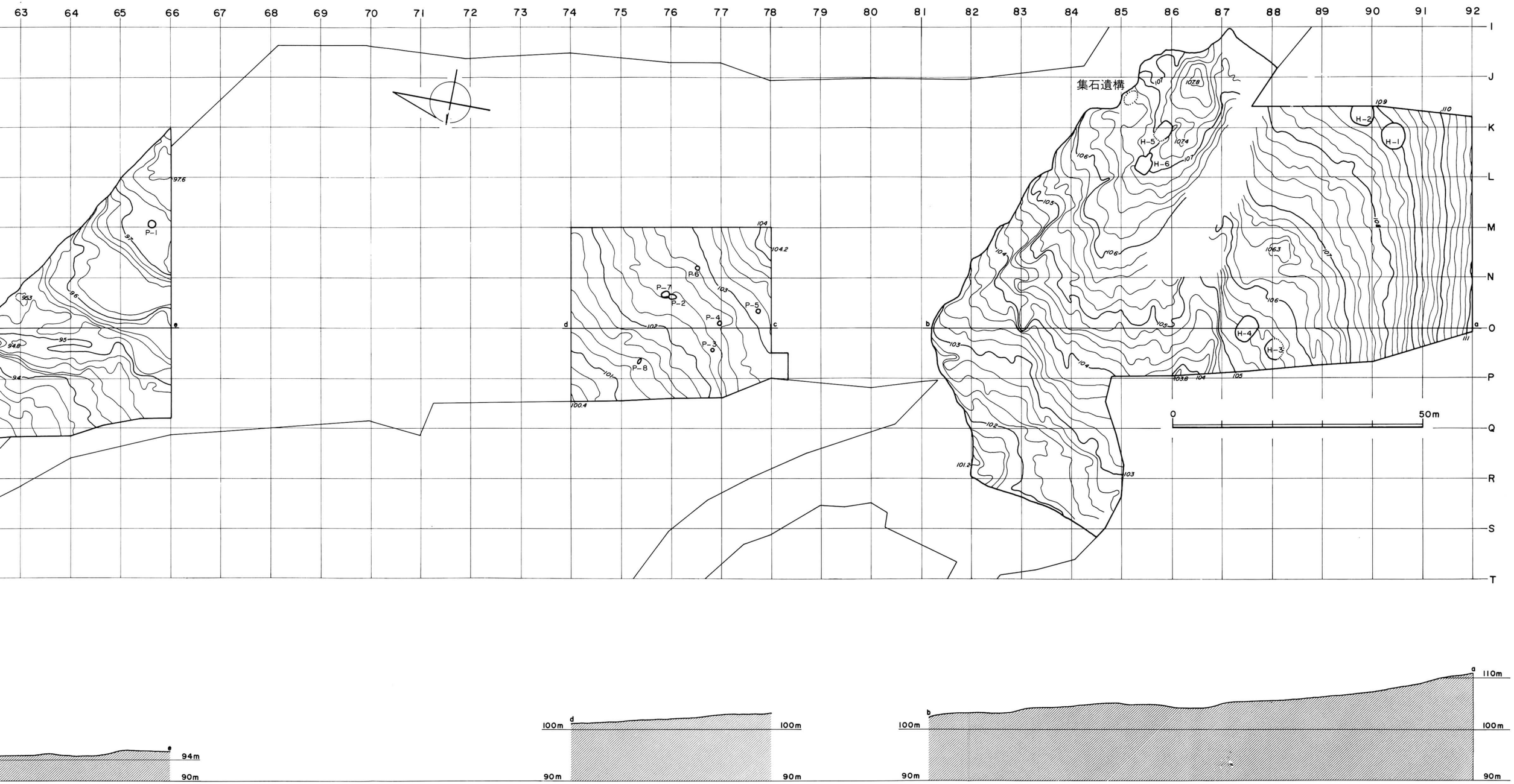
表Ⅴ－2　遺構別出土遺物一覧

遺構番号	土器															石器								合計
	Ⅰ		Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ			Ⅴ		Ⅵ			Ⅶ											
	a	b			a	b	c	c-1	c-2		b	c		a	b	不明	石鏃	石槍	scr.	石斧	U.R.	コア	土製品	フレイク	
H－1		1					401		14							9	1	1		1	2	1	3	17	1 451
H－2		3		3			60																		66
H－4								5																	5
H－5							157		3												2			8	170
H－6							64	46													1			2	113
F－1							3																		3
F－2																									51
F－10							3							1										2	6
F－11				1																					1
F－13							8																		8
F－14							10																		10
F－15							1	47																	48
F－20							35	32						1							2			9	79
F－23							2		23																25
F－26							30																	3	33
F－29														1											1
F－32																								1	1
F－35							1																		1
F－40							3																	2	5
F－41				1			42							2						1				23	69
F－45								5																	5
石組炉							3	84																	87
F－47				1								2									1			3	7
F－50																									1
F－110							2									1									2
F－111							5																		5
F－117							3																		3
F－118							4																		4 4
F－119							5																		5
F－124								9																	9
F－127								2																	2
計		4		6			842	281	40			2		5		10	1	1	1	1	8	1	3	7	1,241

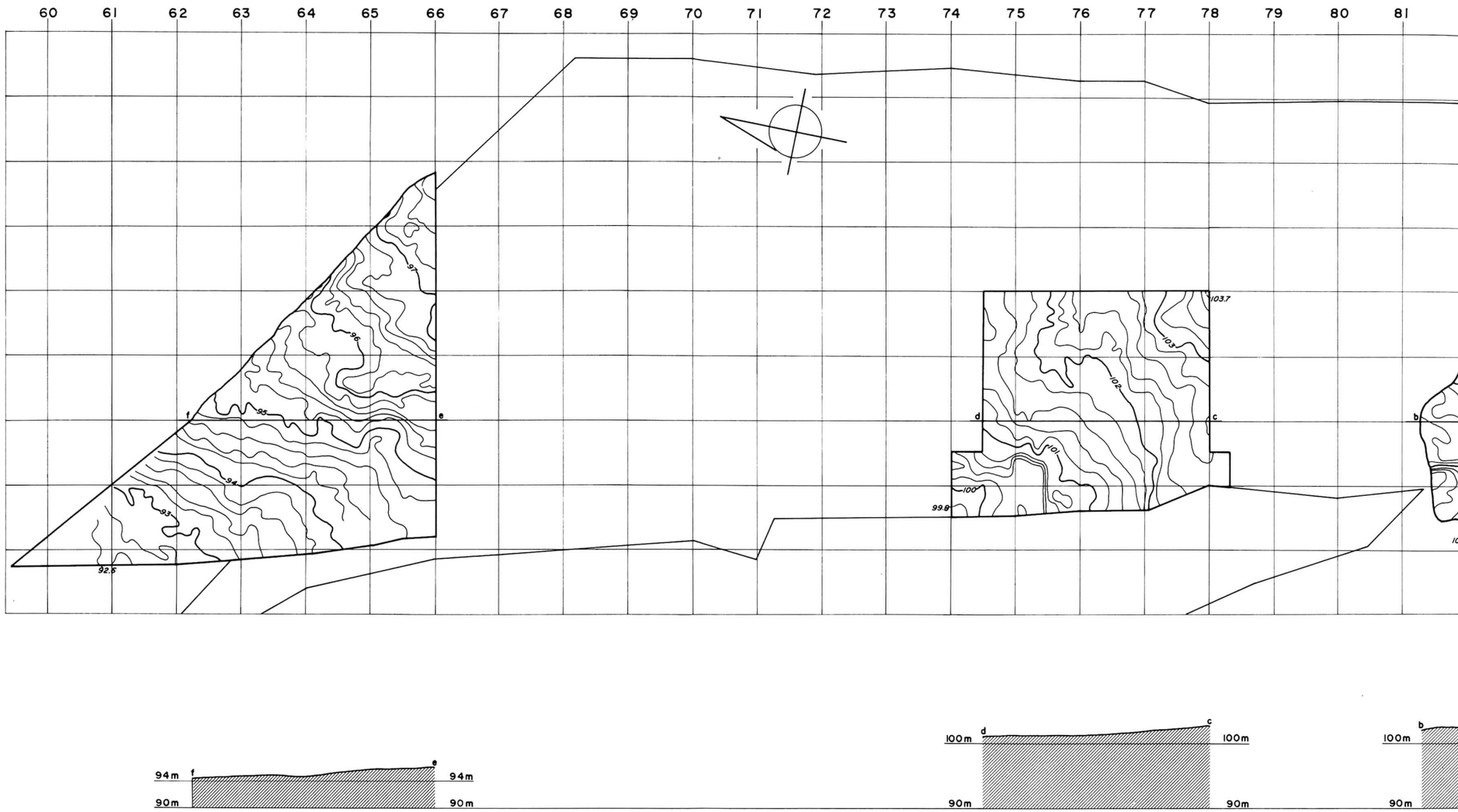
遺構名	挿図番号	層位	器種名	長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石質
H－1	V-8-15	床面	石　鏃	(18.5)	14.7	4.8	(0.8)	黒曜石
	16	床面	石槍又はナイフ	44.1	24.3	9.0	6.7	珪質頁岩
	17	床面	R・フレイク	19.2	18.0	3.8	1.0	黒曜石
	18	床面	R・フレイク	28.0	31.0	7.8	3.9	黒曜石
	19	床面	R・フレイク	45.0	28.0	11.5	9.9	黒曜石
	20	床面	石　核	52.0	34.5	23.0	38.6	珪質頁岩
	21	床面	石　斧	(35.6)	46.8	11.5	29.6	泥岩
	22	床面	耳　栓	29.3)	28.1	17.0	14.6	
	23	床面	土製品	(17.8)	(13.0)	8.0	(1.5)	
	24	床面	土製品	(25.2)	(14.0)	(9.5)	(1.6)	
	25	床面	土製品	(23.4)	(21.5)	(12.8)	(3.0)	
H－5	V-15-8	覆土	U・フレイク	43.5	42.0	5.6	7.0	黒曜岩
	9	床面	U・フレイク	32.5	52.5	9.4	15.0	珪質頁岩
H－6	V-40-20	覆土	U・フレイク	43.5	50.5	13.2	45.1	珪質頁岩
F－20	V-40-20	焼土	U・フレイク	70.0	22.0	5.0	2.7	めのう
	21	焼土	U・フレイク	32.0	39.5	12.0	20.8	珪質頁岩
	22	焼土	U・フレイク	51.0	46.0	12.5	20.3	珪質頁岩
F－41	V-40-23	焼土	スクレイパー	45.8	51.4	8.4	15.8	珪質頁岩
F－47	V-40-24	焼土	U・フレイク	33.5	40.0	8.2	6.9	黒曜石



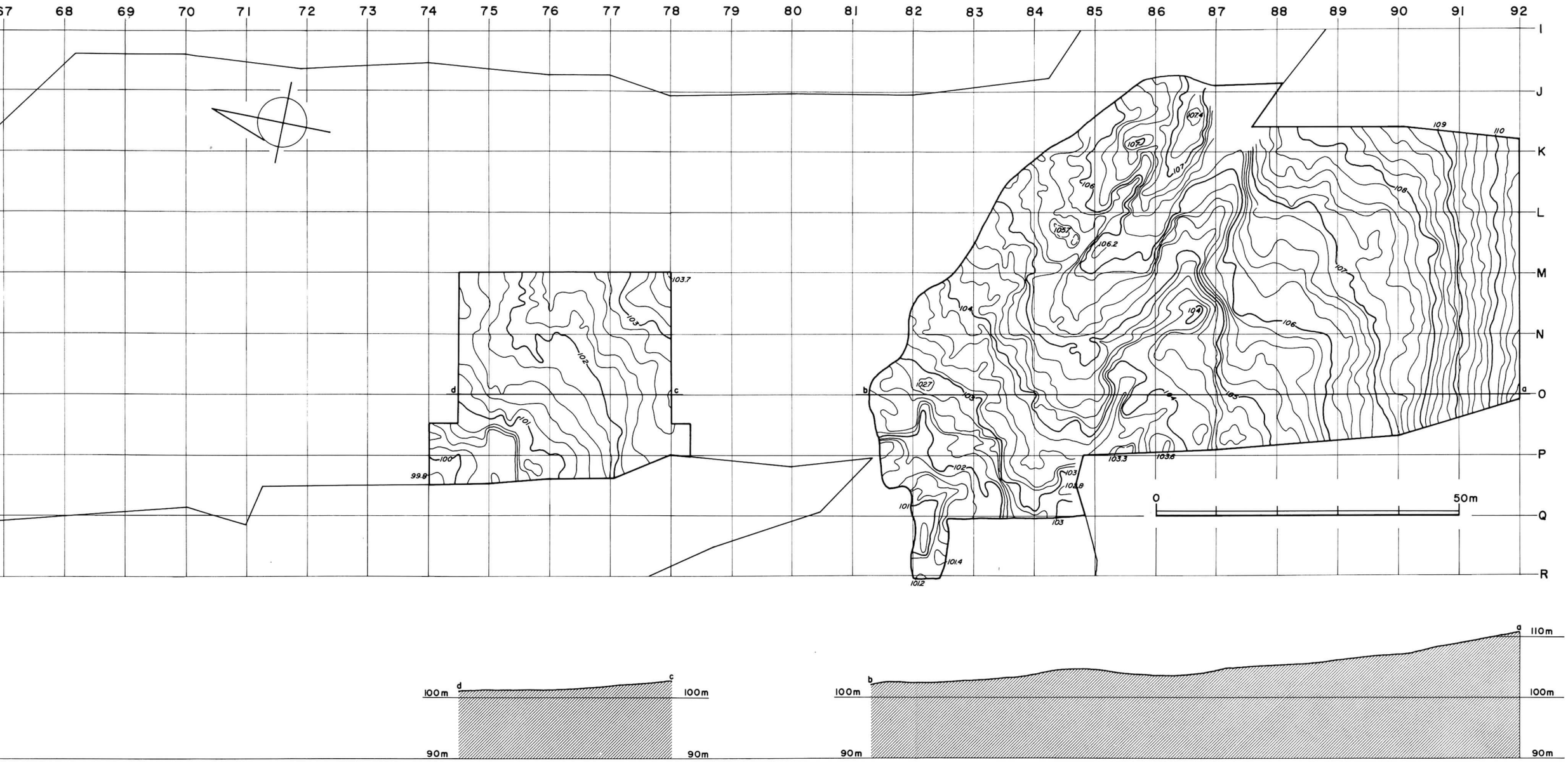
図Ⅴ－3　第Ⅴ層上面(Us－b下面)の地形と遺構位置図



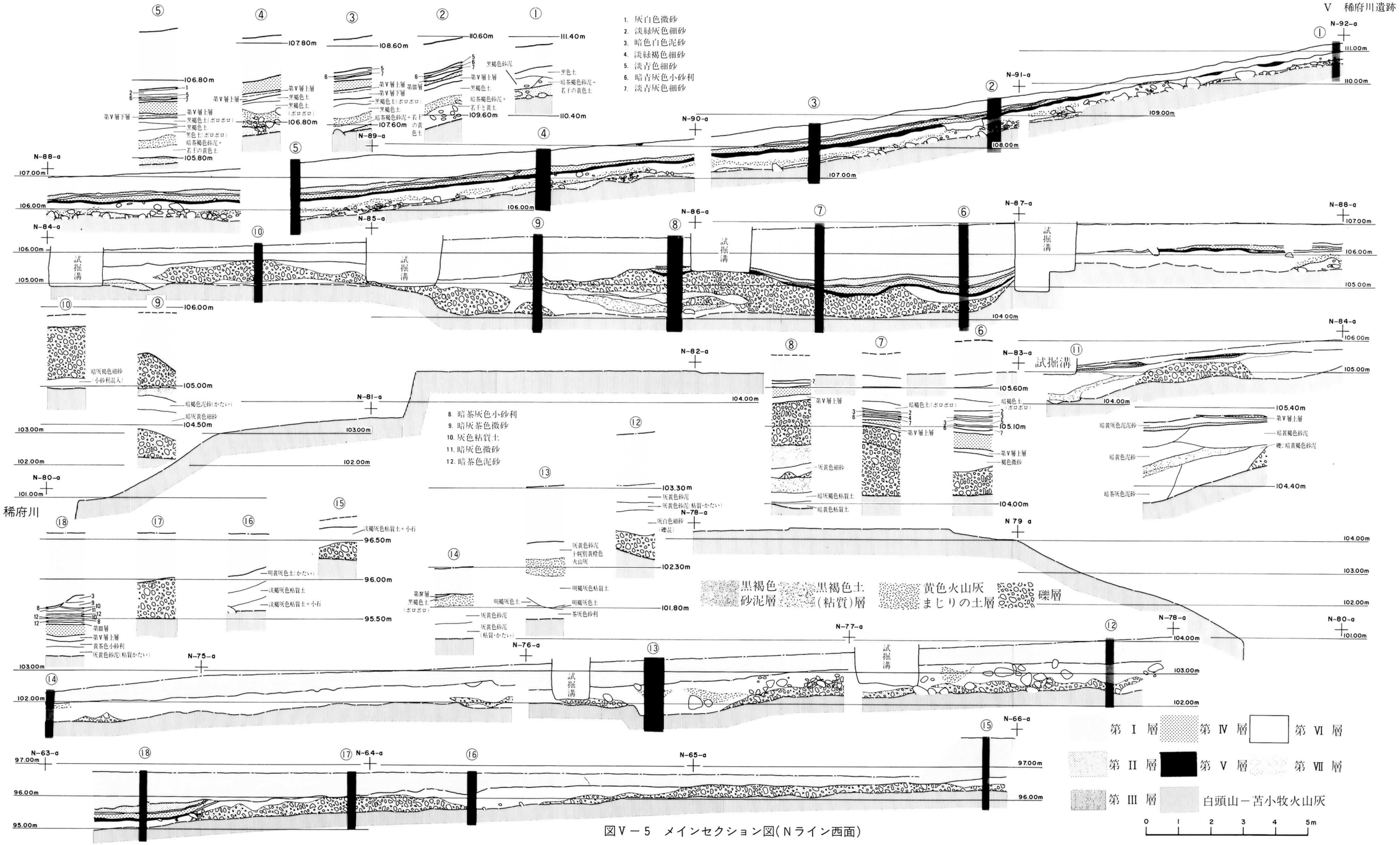
図Ⅴ－3　第Ⅴ層上面(Us－b下面)の地形と遺構位置図



図Ⅴ－4　第Ⅶ層上面の地形図



図Ⅴ－4　第Ⅶ層上面の地形図



図Ⅴ－5　メインセクション図(Nライン西面)

2　遺構

(1)　住居跡

H－1

位置　J－90－b・c　K－90－a・d　南から北へゆるやかに傾斜する地点に位置する。標高は108.70 m～109.10 mである。

規模　(5.58 m)×(4.73 m)　深さ（最大）0.12 m

平面形　ほぼ東西を長軸とする長円形

床面積　約19.47 m²

確認・調査　J－90－b・c，K－90－a・dの包含層調査中，第V層上面でほぼ長円形状（約4.0 m×1.2 m）の落ち込みを確認する。この落ち込みの周辺，特にJ－90－b・c，K－91－a・bの第V層中で土器片が多数出土しており，またK－90－a付近がやや平坦になっていることなどから，遺構の可能性を想定し，調査を行なう。第V層を全体に掘り下げ，J－90－c，K－90－dの第VI層上面付近で黄色土が少量混入した暗褐色土がほぼ半内状に，またJ－90－b，K－90－aの第VI層上面付近で礫の少ない範囲がほぼ半円状に認められた。これは東西を長軸とする約5.0 m×4.0 mの長円形状の輪郭である。東西・南北にそれぞれ小トレンチを設定し，壁の立ち上がりを確認する。中央部分の黒褐色土を10 cmほど掘り下げたところで焼土を検出する。この焼土検出面付近を床面と想定し，遺構調査を行なう。

覆土　南壁際には少量の黄色土が混入するボロボロした暗褐色土が堆積する。床面直上には焼土粒や炭化物の混在する粘質の黒褐色土がみられる。覆土は全体に薄い。

床　第VI層を浅く掘り込んでつくられている。南から北へわずかに傾斜し，北壁側では多量の礫が露出している。凹凸があり，全体に焼土粒や炭化物が散在し，軟質である。

壁　南壁の高さは12 cmで，立ち上がりはゆるやかな傾斜である。東・西壁は若干の立ち上がりが見られるが，北壁は認められない。

炉跡　床面の南東寄りに，0.6 m×0.6 mの広がりをもつ焼土がある。深さ約10 cmの掘り込みをもつ地床炉である。壁，壙底は火熱を受けて明褐色化し，非常に堅くなっている。

付属ピット　柱穴状の小ピットが15個検出された。このうちHP－14，15は床面にあり，深さは約18 cmで直立している。覆土は，HP－14が炭化物・焼土粒が混入する暗褐色土で，HP－15は黄色土粒・炭化物が混入する黒褐色土である。HP－1～7は浅い皿状で，東－北－西の壁際にある。それぞれの間隔はほぼ60 cm～110 cmである。覆土は暗褐色土，あるいは暗灰色土で黄色土粒やUs－bが混入している。HP－8～13は南側壁外70 cm～90 cmのところにあり，全件に浅いが，住居側に傾いている。覆土はUs－bが少量混入するボロボロした暗褐色土である。

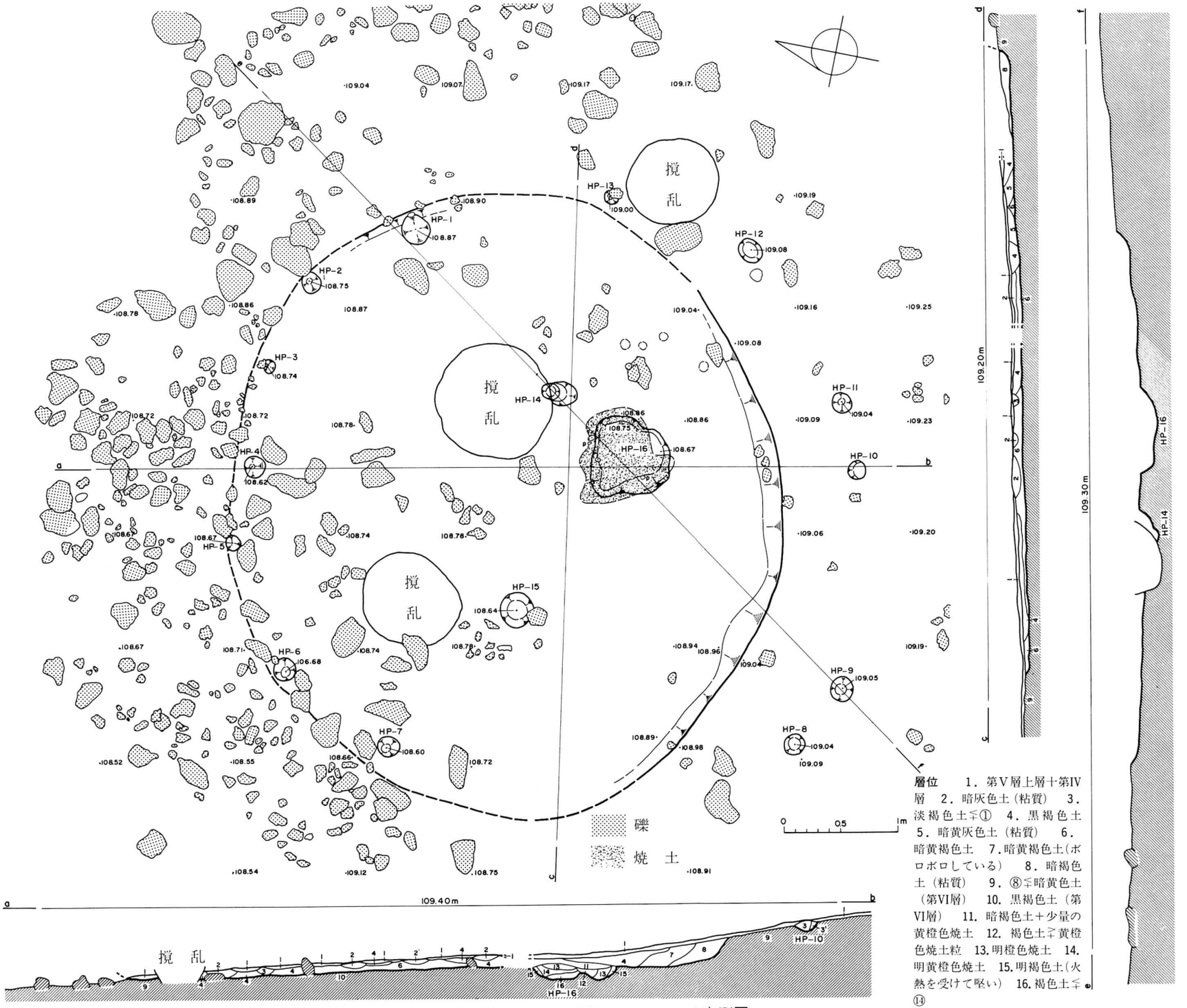
遺物出土状況　遺物出土総数は433点である。その内訳は土器などが409点，石器などが24点である。覆土で取り上げたのは土器片一点で，ほかは床面，焼土中で取り上げたものである。

遺物は北東側の床面より多く出土している。石器は石鏃，石槍，つまみ付きナイフ，石斧片，石核などが出土しており，また土偶片や耳栓も出土している。これら床面出土の遺物は，住居使用時の状態を示すものではなく，住居廃棄後余り時間を経ない間に入り込んだものと考えられる。ただ焼土中から出土した土器片は，焼土の下層中からの出土であり，炉使用期間中に入り込んだものであろう。

遺物　1は推定口径16.0 cmの小型の深鉢である。口唇は平坦で，わずかに肥厚している。地文は斜行縄文で，口縁下に内側から突瘤文が巡っている。2は低い高台状の底部をもつ深鉢である。底部径は約8.0 cmである。斜行縄文が施されており，斜めの沈線文が見られる。3は低い高台状の底部をもつ小型の深鉢で，底部径は約5.0 cmである。無文である。4は口径17.0 cm，器高18.0 cm，底部径4.4 cm，の小型の深鉢である。水平口縁で斜行縄文を地文とする。口縁部から胴部上半には半円状，縦方向に沈線文を配し，胴部下半上部と底部付近には沈線文が数条横環する。浅い揚げ底である。5は推定口径約27.6 cm，連続する小波状口縁の深鉢である。胴部は「く」状に屈曲する。斜行縄文を地文とし，口縁下，胴部中ほどにそれぞれ二条の沈線文を巡らし，口縁下には内側からの突瘤文がある。6と12は同一個体である。6は口唇に小さな突起をもち，口縁断面は肥厚する。口縁部には縄の端部による押圧痕が二条巡ぐる。12は底部付近の胴部片で横方向に棒状工具による押し引き痕がある。7，8，9は口縁部片で地文は斜行縄文である。7は突瘤文，8は刺突文，9は沈線文を配し，刺突文がある。10，11は胴部片で斜行縄文を地文とする。13，14は底部片で，13は浅い揚げ底，14は一部に斜行縄文がみられる。6，7，8，9，12，14は床面出土，他は床面と周辺第Ⅴ層出土の土器片が接合している。すべてⅣ群c類である。15は黒曜石製の有茎石鏃で，尖頭部が欠損した後に火熱を受けている。16は珪質頁岩製の有茎ナイフである。茎の下方を打点にした剥片を利用し，薄くなった刃部先端に細かい剥離がみられる。バルブに茎を造りだしているため付け根に厚みが残っている。17～19は黒曜石のRフレイクである。17は火熱を受けている。18は二辺に細かい剥離がみられる。19は円礫の原石面が残っている。20は珪質頁岩の石核である。一部に風化した面を残しているが，上と横からの打面転移のおこなわれた残核である。21は泥岩製の石斧刃部破片である。現存部は研磨されている。22～25は土製品で，22は直径約3 cm，厚さ約1.7 cmの耳栓である。表裏が凹み，中央の貫通孔周囲に同心円が，その外に渦状に配された刻線文と刺突文とによって装飾されている。24，25は土偶の一部と思われる。胎土，焼成が違うので各々別な個体であろう。25は縦横斜めに沈線が施されている。これらの石器，土製品は床面出土である。

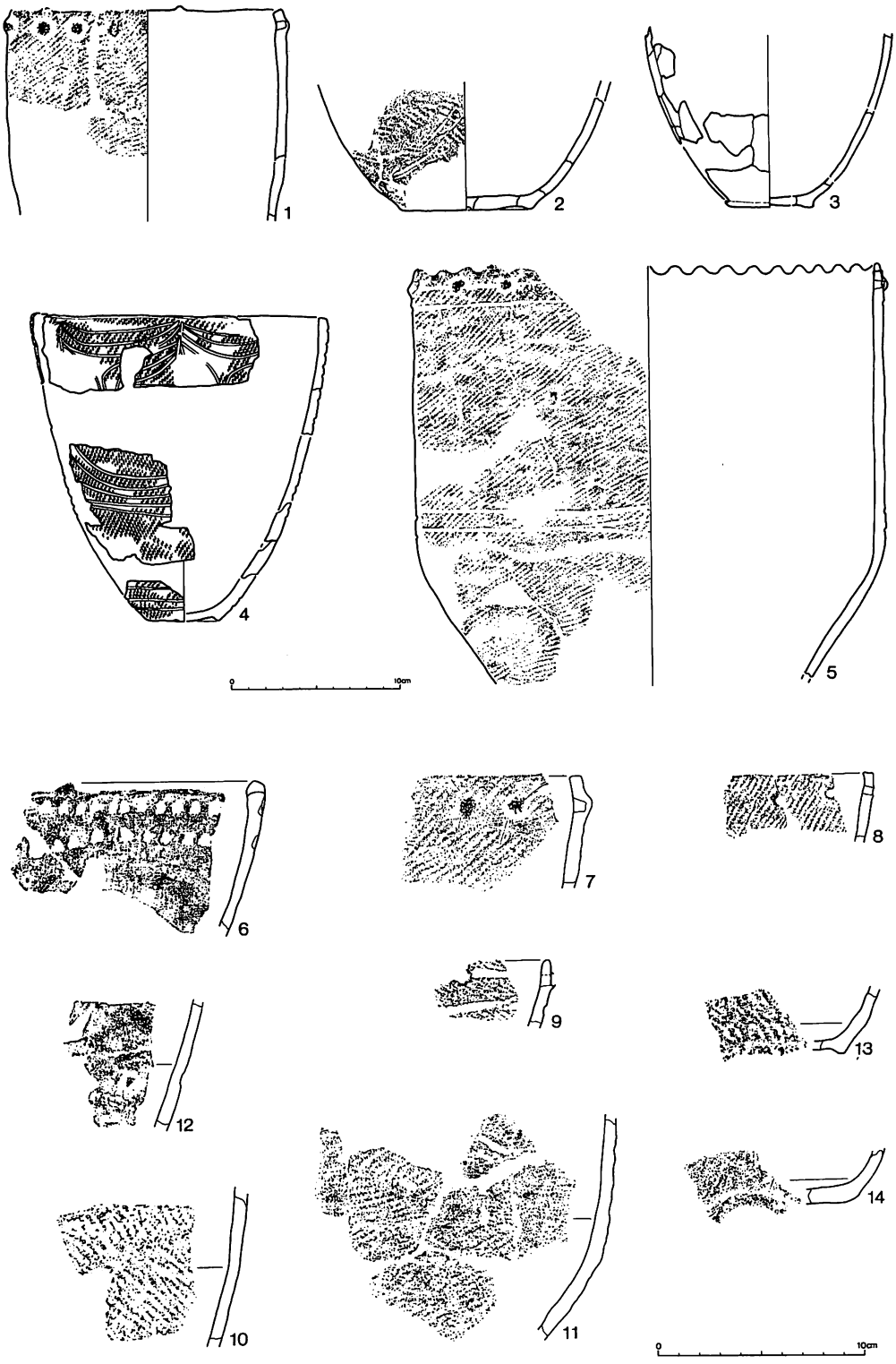
時期　掘り込み面は第Ⅴ層下層中か第Ⅵ層上面と考えられる。床面出土土器の大半がⅣ群c類に比定されるものである。また周辺から出土する土器片も同時期に比定されるもので，本住居跡は縄文時代後期末葉のものと考えられる。

本住居跡では柱穴状小ピットが床面より2個，壁際に7個，壁外に6個検出された。床面検出のＨＰ－14，15は直立し，やや深く，主柱穴と思われる。他の13個の小ピットは全体に浅く，

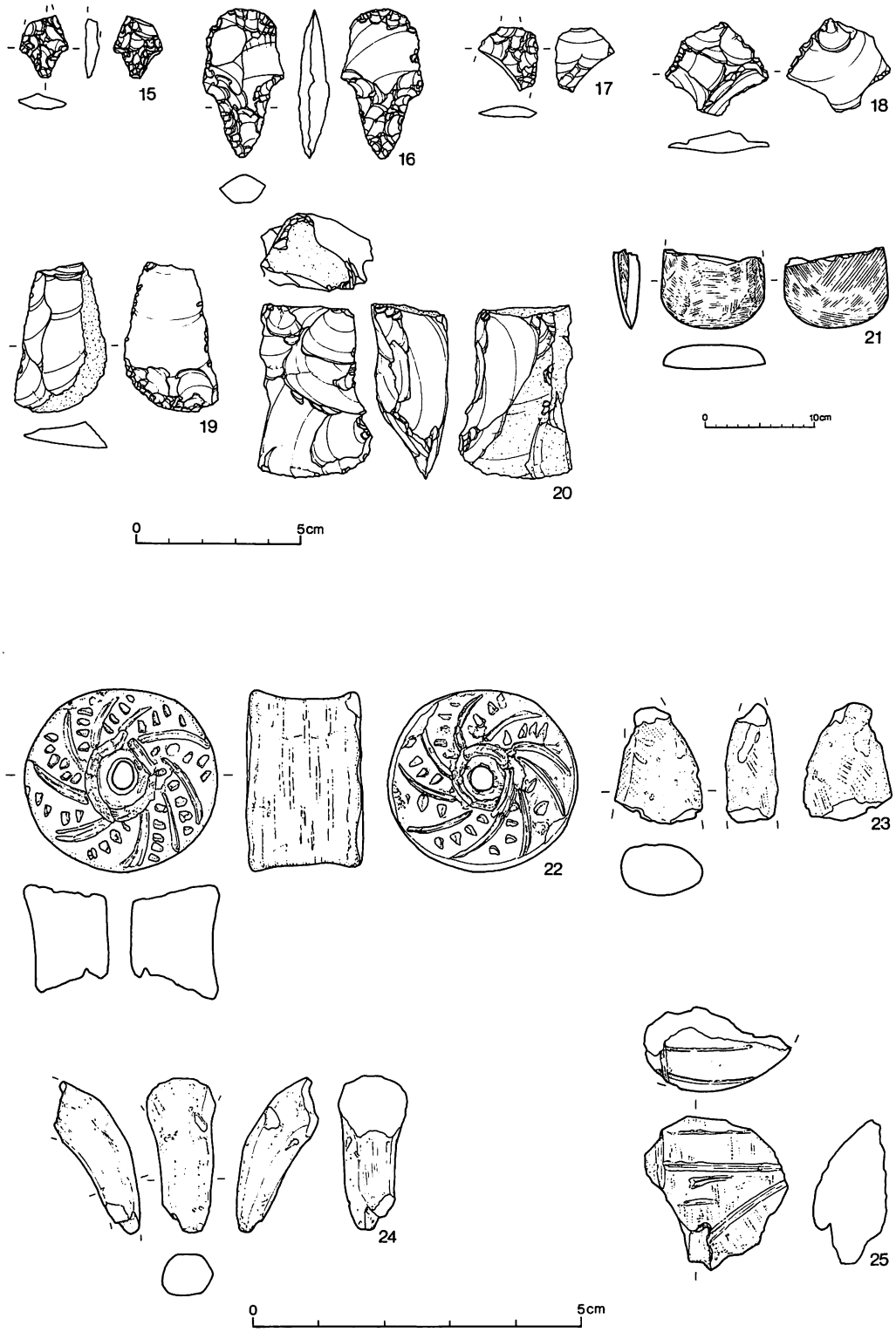


層位　1．第V層上層十第IV層　2．暗灰色土（粘質）　3．淡褐色土≦①　4．黒褐色土　5．暗黄灰色土（粘質）　6．暗黄褐色土　7．暗黄褐色土（ボロボロしている）　8．暗褐色土（粘質）　9．⑧≦暗黄色土（第VI層）　10．黒褐色土（第VI層）　11．暗褐色土＋少量の黄橙色焼土　12．褐色土≦黄橙色焼土粒　13．明橙色焼土　14．明黄橙色焼土　15．明褐色土（火熱を受けて堅い）　16．褐色土≦⑭

図V－6　H－I実測図



図Ⅴ－7　H－Ⅰ出土遺物(土器)



図Ⅴ－8　Ｈ－Ⅰ出土遺物(石器、土製品)

壁外のものはわずかに住居側に傾いている。小ピットの状態や配置関係などから，二本の主柱（ＨＰ－14，15）に棟木を架け，それに斜め材を立て掛ける上屋が想定される。

Ｈ－２

位置　Ｊ－89－ｃ　Ｊ－90－ｂ　標高108.70ｍ～108.80ｍのほぼ平坦地に位置している。

規模　(4.80ｍ)×（4.80ｍ）　深さ（最大）約0.2ｍ

平面形　ほぼ円形か？

床面積　推定15.42ｍ²

確認・調査　Ｊ－89－ｃの包含層調査中，第Ｖ層を10cmほど掘り下げたところで焼土（ＨＦ－１）を検出する。またＨＦ－１北側にある攪乱構の南面断面で落ち込みを確認する。このためＪ－89－ｃ，Ｊ－90－ｂの第Ｖ層を掘り下げ，遺構検出を行なう。第VI層上面を精査し，ほぼ円形状の輪郭を確認する。東側は調程区域外のため，全体の輪郭は不明である。第Ｖ層中に混在する多量の礫を除去し，焼土粒と炭化物のまじる暗褐色土を10cmほど掘り下げたところで，北西側（ＨＦ－２）と中央部東寄りに焼土を検出した。

覆土　覆土は全体に薄い。北側は焼土粒と炭化物が混入する粘質の暗褐色土が10cmほど堆積し，南側にも同質の土が薄く認められた。

床　第VI層を掘り込んでつくられている。ほぼ水平であるが，南側が若干高い。全件に大きな礫が露出し，凹凸がある。床面上には炭化物が多量に散布している。

壁　壁の高さは，北壁が約15cm，西壁が約9 cm，南壁が約11cmである。立ち上がりはゆるやかな傾斜である。

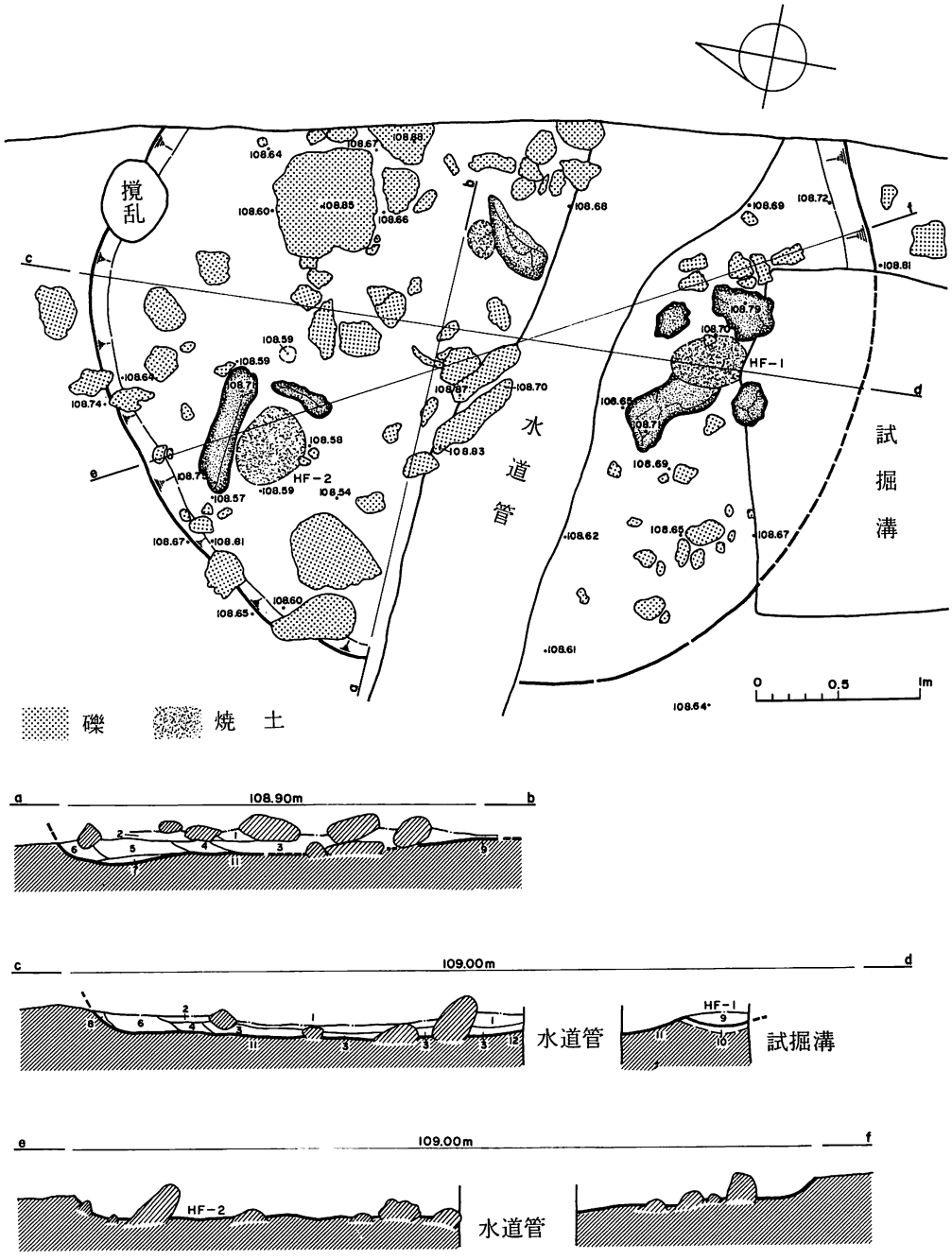
炉跡　床面の北西寄り（ＨＦ－２）と南側（ＨＦ－１）に地床炉が検出された。ＨＦ－１は0.46ｍ×0.28ｍの広がりをもつ焼土で，10cmほどの掘り込みがある。壁，壙底は火熱を受けて明橙色化し，堅くなっている。ＨＦ－２は0.5ｍ×0.28ｍの広がりをもつ焼土で，明橙色焼土が10cmほどの厚さで認められた。明確な掘り込みはみられない。ＨＦ－１，ＨＦ－２ともに焼土の周囲に自然礫が焼土を囲むように見られ，炉戸として利用していたことも考えられる。

付属ピット　柱穴状小ピットは検出されなかった。

遺物出土状況　出土遺物総数は45点である。土器片のみで，このうち床面，焼土中からの出土は18点である。これらはすべてＨＦ－２周辺とその直上から出土しており，住居廃棄後の短時間のうちに流れ込んだものと推定される。

遺物　１は口唇に小突起をもつ口縁部片である。斜行縄文を地文とし，横走する沈線文，突瘤文が施されている。２，３，５は斜行縄文を地文とする胴部片である。３には沈線文が見られ５は薄手のものである。４は縄の端部による押圧痕がある。５，６が床面出土，２，３は覆土からの出土である。１，４は覆土出土の破片と周辺の第Ｖ層下層出土の土器片が接合したものである。これらはすべてIV群ｃ類である。

時期　掘り込み面は第VI層上面である。床面，焼土中出土の土器はIV群ｃ類に比定されるもの

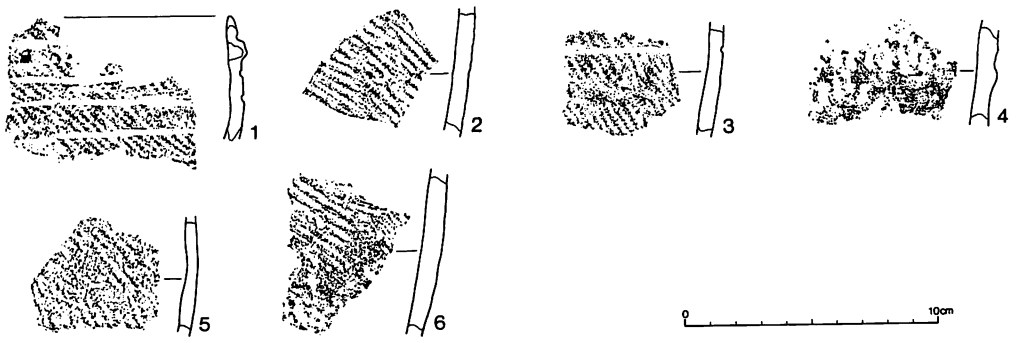


図Ⅴ－9　H－2実測図

である。また周辺から出土の土器も同時期のものであり，本住居跡は縄文時代後期末葉のものと考えられる。

本住居跡で目を引くのは，床面に大きな礫が多く露出していることである。腰をかけるにはそれなりの利用価値はあるとはいえ，身体を横たえることは不可能に近い状態を示している。柱穴状小ピットが検出されなかったこととも考え合わせると，ごくごく短時間の生活の場であったのかも知れない。

層位　1．暗褐色土（第V層下層，ボロボロしている）　2．暗黄褐色土　3．暗褐色土＋焼土粒　4．暗褐色土≧少量の焼土粒　5．②＋少量の焼土粒＋少量の炭化物　6．黄褐色土　7．褐色土（ボソボソし，焼土粒と炭化物が少量混入する）　8．暗褐色土≧暗黄色土（軟質）　9．明橙色焼土（ややボロボロしている）　10．明橙色土（火熱を受けて赤化し，堅い）　11．黒褐色土（第VI層，粘質）　12．暗黄色焼土＋⑪



図V－10　H－2出土遺物(土器)

H－3

位置　O－87－c・d　O－88－a・d　沢地形と緩傾斜地に挟まれた平坦地に位置している。標高はほぼ105.50 mである。

規模　(約7.0 m)×(約5.0 m)　深さ（最大）約0.14 m

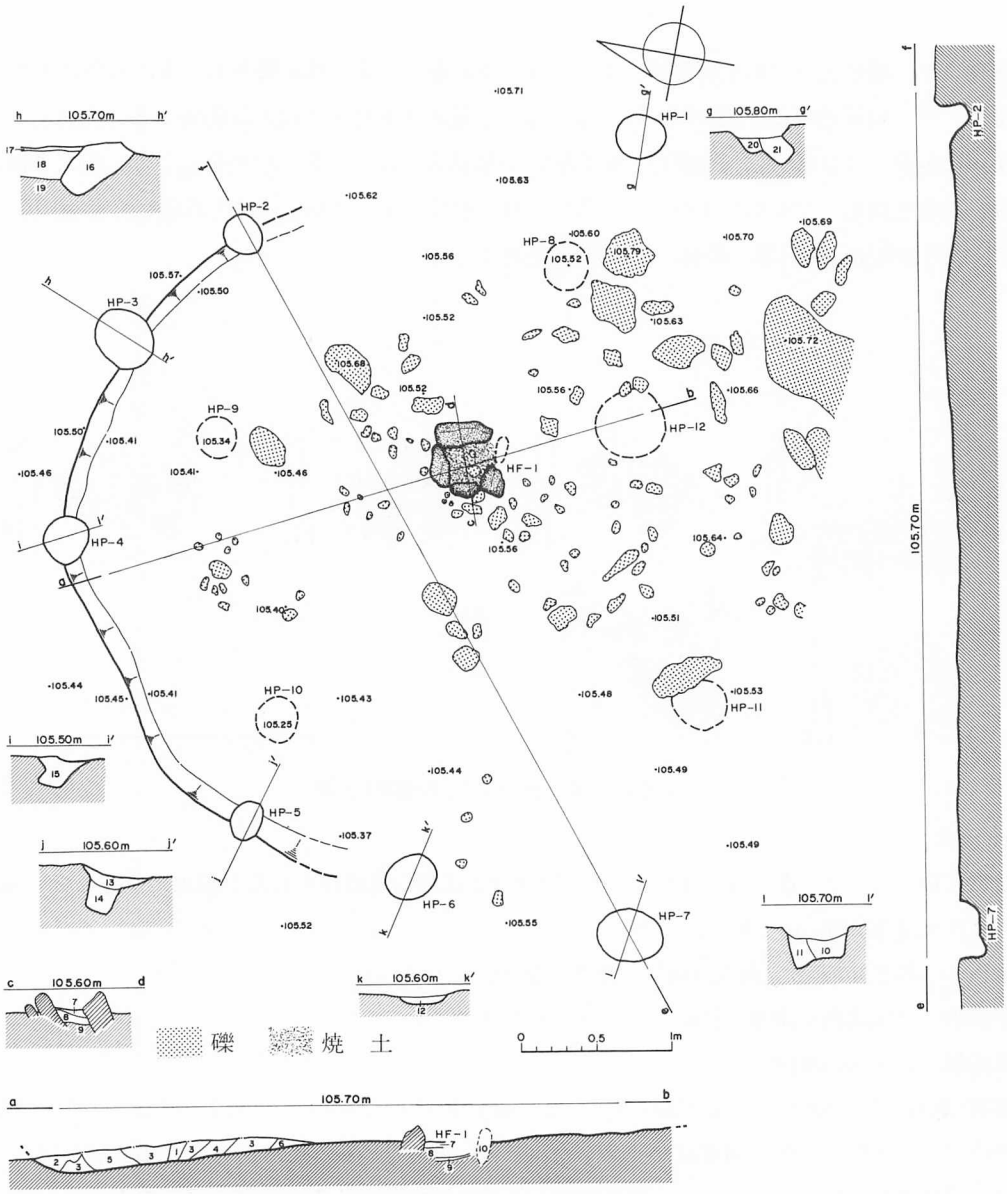
平面形　ほぼ北西－南東を長軸とする長円形か？

床面積　推定23.00 m²

確認・調査　O－88－aの包含層調査中，第V層を10 cm～15 cmほど掘り下げたところ，多量の礫の間に3個の角礫に囲まれた焼土を検出する。このためO－87－c・dの第V層を掘り下げ，遺構検出を行なう。第VI層上面を精査し，半円状の落ち込みの輪郭を確認する。O－88－a・bの南側は水道管埋設の際掘削を受け輪郭などは不明である。焼土検出面を床面として，北壁の立ち上がりを確認しつつ調査を行なう。

覆土　覆土は暗茶褐色土＋暗黄色土のボロボロした土を主体に，全体に混じり合った汚れた土が薄く堆積している。

床　第VI層を掘り込んでつくられている。床面上には炭化物が少量散布しており，東側には小



図V－11　H－3実測図

範囲に焼土粒のまとまりがみられた。南から北へ若干傾斜している。礫が露出し，凹凸がある。

壁　北壁の高さは約14 cmで，立ち上がりはゆるやかな傾斜である。他の壁は不明である。

炉跡　床面中央部やや北寄りに石組み炉が検出された。4個の炉石をもち，約0.5 m×0.5 mのほぼ正方形状である。南側の炉石は抜き取られていた。東，北側の炉石は周辺に見られる角礫をそのまま用い，西側の炉石は丸味のある礫を割ったものが用いられている。炉石に囲まれた0.42 m×0.30 mの範囲には10 cmほどの厚さに暗橙色焼土が堆積し，その上には炭化物を多量に混入した暗褐色土が2 cm～3 cmほど堆積していた。石組みは全体に小振りであるが，ていねいにつくられている。

付属ピット　柱穴状小ピットは12個検出された。ＨＰ－２～５は壁にあり，内側に傾いている。ＨＰ－１，６，７は内側に傾き，ＨＰ－２～５の延長上に位置するものと考えられる。またＨＰ－８～12は床面にあり，浅い皿状のものである。

遺物出土状況　床面，焼土，覆土から遺物は出土していない。

時期　掘り込み面は不明である。周辺の第Ｖ層からはＶ群Ｃ－１類に比定される土器が多く出土していることなどから，本住居跡は縄文時代晩期末葉のものと考えられる。

本住居跡は石組み炉がていねいにつくられているが，住居の掘り込みは全体に浅く，また床面には多量の礫が露出しているなどアンバランスな感じを受ける。また床面で検出された柱穴状小ピットも8 cm～18 cmと非常に浅いものである。一時的な生活の場であろうか。全体像は不明であるが，柱穴状小ピットの位置関係，間隔などから5本柱に斜め材を立て掛けるような上屋が想定される。

層位　1．暗茶灰色土　2．暗茶褐色土≦灰色土　3．暗茶褐色土＋暗黄色土　4．黒茶色土　5．暗茶褐色土＋少量の暗黄色土　6．暗褐色土　7．⑮＋炭化物　8．暗橙色焼土　9．褐色土（第VI層）　10．暗褐色土（粘質）　11．黒色土＋黄色土　12．淡褐色地（粘質）　13．黒色土（軟質）　14．⑨＋黄色土　15．暗褐色土（ボロボロしている）　16．暗茶褐色土（やや粘質）　17．褐色土（焼土粒を混入）　18．⑨＋灰色土　19．暗黄色粘質土　20．暗褐色土　21．褐色土（軟質，黄色土混入）

Ｈ－４

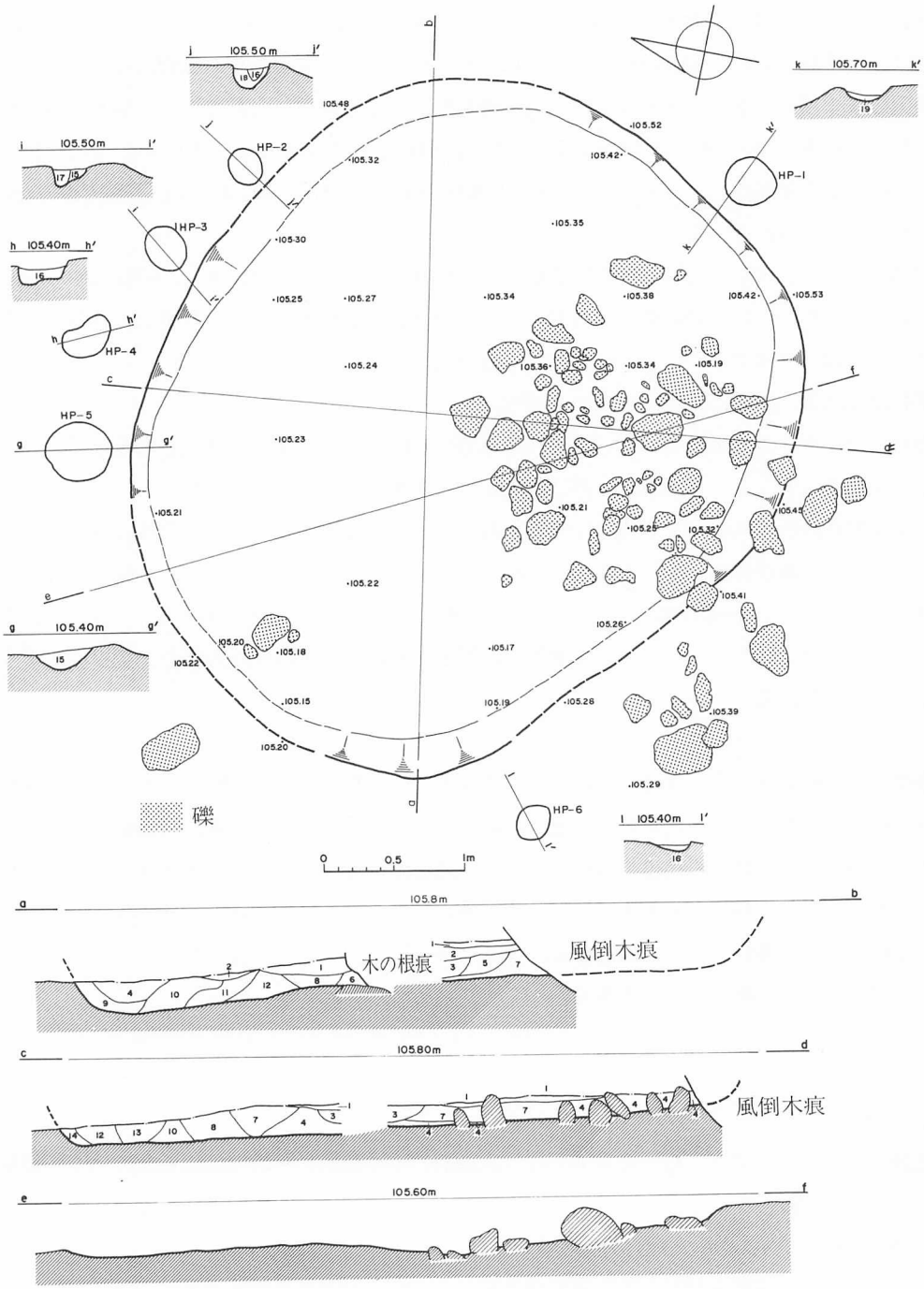
位置　Ｎ－87－ｂ・ｃ　Ｏ－87－ａ・ｄ　沢地形のすぐ南側の平坦地に位置している。標高は105.50 mである。

規模　4.87 m×4.14 m　深さ（最大）0.22 m

平面形　北西－南東を長軸とする隅丸長方形

床面積　14.25 m²

確認・調査　Ｎ－87－ｂ・ｃ，Ｏ－87－ａ・ｄの包含層調査中，第IV層（Us－ｂ層）を除去し



図Ⅴ－12　H－4実測図

た時点で，5.0 m×4.0 m ほどの長円形状の浅い凹みが見られた。この凹みの第V層中で遺物が多数出土したことから，遺構検出を行ないつつ掘り下げる。その結果，第VI層上面付近でほぼ長方形状の落ち込みの輪郭が確認された。床面，壁などを確認しつつ遺構調査を行なう。周辺に風倒木痕がいくつかあり，北，西壁の立ち上がりは部分的に確認することができたが，他はあまり明確ではない。

覆土　第VI層の褐色土と暗黄色土の混じり合った汚れた土が 20 cm ほど堆積している。軟質で礫が多量に混入している。

床　第VI層を掘り込んでつくられている。ほぼ平坦で，堅い。南側は多量の礫が露出し，若干高くなっている。

壁　東・南壁は風倒木痕のため不明確である。西壁は第VI層中にある黄色火山灰を切ってつくられている。壁の高さは約 20 cm で，立ち上がりは急傾斜である。北壁の高さは 14 cm ほどで，立ち上がりはゆるやかな傾斜である。

炉跡　焼土は検出されていない。

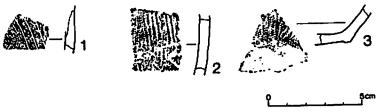
付属ピット　柱穴状小ピットは壁外 20 cm～40 cm のところに 6 個検出された。全体に浅いが，ほぼ住居側に傾いている。覆土は粘質の黒褐色土である。

遺物出土状況　遺物出土総数は 45 点である。これらはすべて土器片で，覆土中から出土したものである。

遺物　1 は薄手の胴部破片で，浅く細い沈線文が弧状に施されている。2 は胴部破片で縦走縄文が施されている。3 は浅い上げ底の底部片で，底部まで縦走縄文が施されている。

時期　掘り込み面は第V層中である。覆土中，覆土直上の第V層および周辺出土の土器はV群C－1類に比定されるものであることから，本住居跡は縄文時代晩期末葉のものと考えられる。

全体に風倒木痕の影響を受けており，輪郭なども不明確である。焼土も検出されていないことなどから，単なる凹地であった可能性もある。ただ周辺から遺物が多量に出土しており，柱穴状小ピットも検出されていることから住居跡状遺構として事実記載する。今後このような類例の検出をまって検討することとしたい。



図V－13　H－4 出土遺物(土器)

層位　1．褐色土（ボロボロしている）　2．褐色土≦暗黄色土　3．暗茶褐色土≦暗黄色土　4．黄褐色土≧暗黄色土　5．黒茶色土≧暗黄色土　6．淡褐色土≧暗黄色土　7．茶褐色土≦暗黄色土　8．暗褐色土＋暗黄色土　9．淡茶褐色土≦暗黄色土（ブロック状）　10．淡茶褐色土≧暗黄色土　11．淡褐色土＋暗黄色土　12．暗褐色土≦多量の暗黄色土　13．褐色土＋少量の黄色土(粘質)　14．淡褐色土≧少量の黄色土　15．淡灰褐色土＋暗黄色土　16．黒色土＋暗黄色土　17．褐色土＋暗黄色土　18．淡灰褐色土≦暗黄色土＋灰色土　19．黒色土

H－5[1]

位置　J－85－c　J－86－b　K－85－d　K－86－a　沢地形に挟まれたやや高くなったところに位置している。標高は107.00 m～107.40 mである。

規模　(4.80 m)×(3.30 m)(推定)　深さ(最大)0.14 m

平面形　北西－南東を長軸とする隅丸長方形か？

床面積　推定11.65 m²

確認・調査　K－85－dの包含層調査中，白頭山火山灰下の暗褐色土(粘質)を10 cm～15 cmほど掘り下げたところ，第VI層中の砂質土上面で土器が一括出土する。またこの一括出土土器の北側の同一砂質土上で焼土を検出し，火熱を受け赤色化した砂質土を2ヵ所確認する。このためJ－85－c，J－86－bの白頭山火山灰を除去し，暗褐色土(粘質)上面で遺構検出を行う。この結果，現道によって削平された部分以外(J－86－b，K－86－a)で隅丸長方形状の落ち込みを確認することができた。しかしながら大半は現道により削平を受けているため，全体の輪郭は不明確である。

覆土　覆土は全体に薄い。淡褐色土(粘質)＋少量の暗黄色土＋炭化物の混じり合った汚れた土が薄く堆積している。

床　第VI層を浅く掘り込んでつくられている。床面は第VI層の暗褐灰色細砂層上面である。ほぼ平担で堅い。

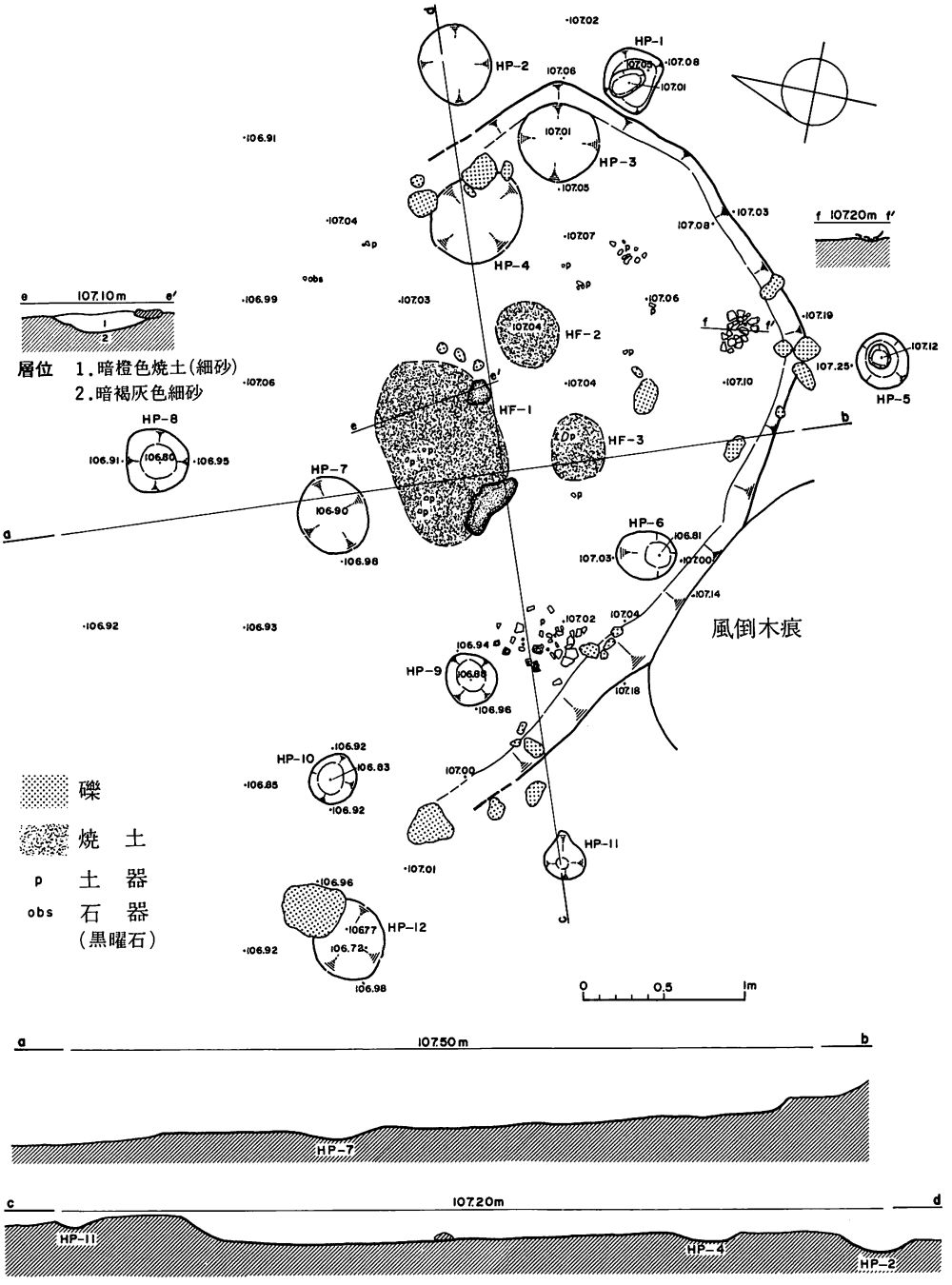
壁　東，南壁の一部が確認されているだけである。壁の高さは10 cm～14 cmで，立ち上がりはゆるやかな傾斜である。

炉跡　床面はほぼ中央部に地床炉が検出された。0.78 m×0.72 mの円形状の範囲に褐色土(粘質)＋焼土粒の土が2 cm～3 cmほど堆積している。その下は1.14 m×0.72 mの範囲で火熱を受け赤色化した砂質土が見られた。この焼土を囲むように数個の礫が認められた。石組み炉の可能性も考えられる。この焼土の南東側に火熱を受けて赤橙色化した径40 cmほどの広がりを2ヵ所検出する。

付属ピット　柱穴状小ピットは11個検出された。壁際に6個，壁外に5個である。このうちHP－6は深さ約13 cmで直立している。他は浅い皿状のものである。覆土は淡褐色土(砂質)のものと暗褐色土(粘質)のものとがある。

遺物出土状況　遺物出土総数は166点である。その内訳は土器が155点，石器などが11点である。このうち床面，焼土中として取り上げたのは土器が88点で，石器などが8点である。遺物は床面上に散らばった状態で出土している。南東コーナー壁際からは，内面を上に向けた状態の土器が一括出土している。これは住居廃棄時に投棄されたものであろうか。

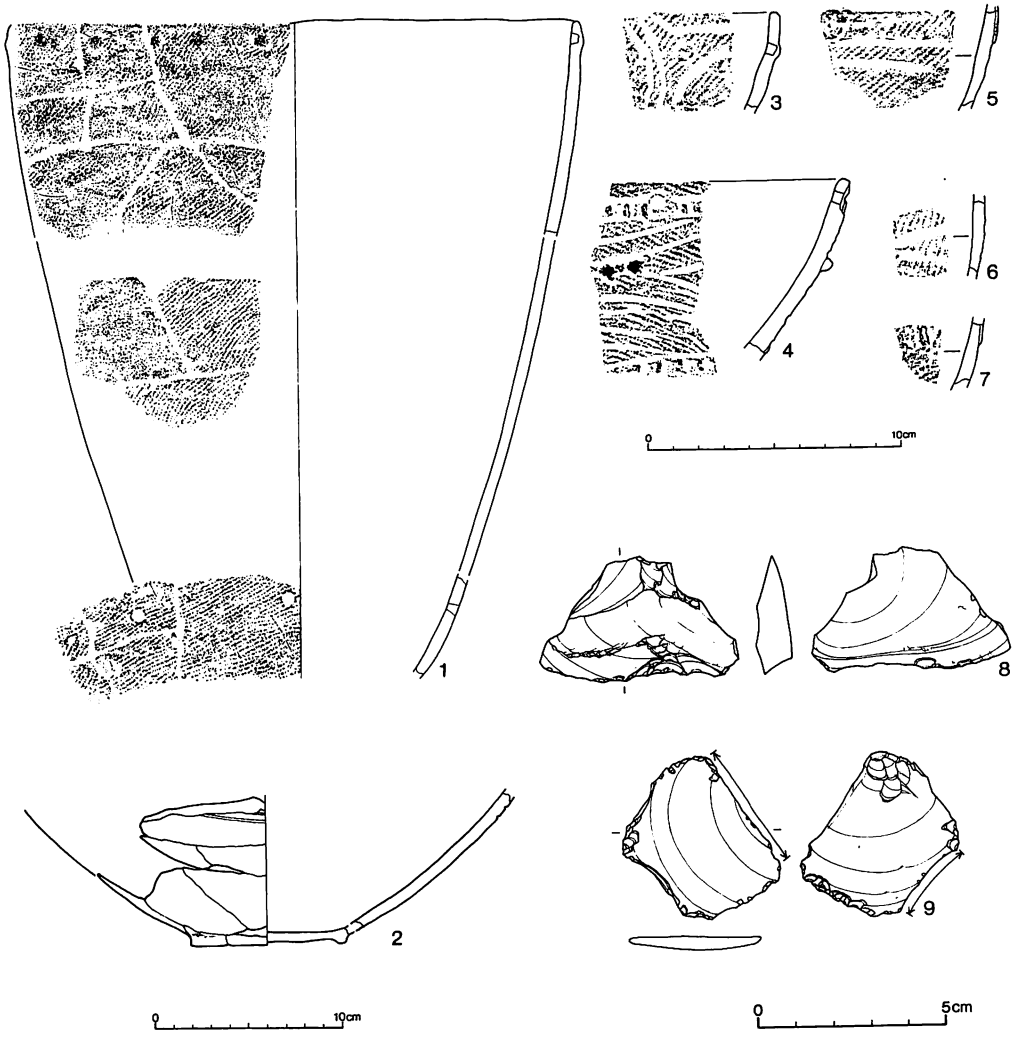
遺物　1は口縁がわずかに波状を呈する深鉢である。推定口径30 cm。斜行縄文を地文とし，口縁下に内側からの突瘤文が巡る。胴部下半部には焼成前に開けられたと思われる刺突文が見られる。2と4は同一個体である。低い貼り付け高台のある鉢である。底部径8.0 cm～8.50 cm。胴部上半部には斜行縄文を施文する。沈線文を配し，口縁下には突瘤文，爪形文，胴部中ほど


HP-1
HP-2
HP-3
HP-4
HP-5
HP-6
HP-7
HP-8
HP-9
HP-10
HP-11
HP-12
HF-1
HF-2
HF-3
風倒木痕
層位　1.暗橙色焼土(細砂)
2.暗褐灰色細砂
礫
焼　土
p　土　器
obs　石　器
(黒曜石)
0　0.5　1m
107.50m
107.20m

図V－14　H－5実測図

には爪形文が巡っている。また貼瘤文が2個見られる。胴部下半は無文である。3は斜行縄文を地文とし，沈線文，突瘤文が施された口縁部破片である。5，6，7は胴部破片でともに斜行縄文を地文とする。5は沈線文，同心円状の貼瘤文，6は沈線文，7は爪形文が施されている。1は覆土出土の土器片と周辺第V層出土の土器片が接合している。2，4は床面出土の一括出土土器，3は床面出土，5，6は焼土からの出土，6は覆土出土である。8，9はUフレイクである。8は剥片の下辺を使用している。9は下辺と一側辺を使用している。

時期　掘り込み面は明瞭でないが，白頭山火山灰直下と考えられる。床面，焼土中出土の土器は第IV群c類に比定されるものである。また周辺からも同時期に比定されるものが多数出土していることから，本住居跡は縄文時代後期末葉から晩期初頭のものと考えられる。



図V－15　H－5出土遺物(土器・石器)

柱穴状小ピットは浅く，特に床面で検出されたものはしっかり掘り込まれた状態のものではない。また小ピットの位置関係からＨＰ－７を主柱とし，これに斜め材を立て掛ける簡単な上屋が想定される。これらからみて，一時的な生活の場として使用されたものであろう。

（和泉田　毅）

Ｈ－６

位置　Ｋ－85－ｂ・ｃ　現稀府川と旧河川に挟まれた微高地に位置する。標高は106.52ｍ～106.80ｍである。

規模　3.20ｍ（最大4.76ｍ）×3.20ｍ　深さ0.50ｍ

平面形　東南東に張り出しを有する隅丸方形

床面積　7.84ｍ²

確認・調査　Ｋ－85－ｂ・ｃの第Ｖ層包含層調査時，細長い張り出しを有する隅丸方形に黒灰褐色土の落ち込みを確認。４分割して掘り下げた。

覆土　竪穴の東側床面に薄く堆積している暗灰褐色土が，張り出し部分では中位まで堆積している。覆土の中位に黄褐色砂質土があり，また覆土に含まれる中～大礫は周囲に少ないことなど，河の氾濫による流れ込みで張り出し部分から急速に埋まったものと推定される。

床　床面は第VI層を掘り込み黄褐色砂質土上面である。ほぼ平担だが南西コーナーに付属ピット（1.20ｍ×0.74ｍ　深さ0.25ｍ）が掘り込まれている。このピットの覆土から約20点の角礫と１点の土器を検出した。

壁　南と西側の壁は中・小礫を多く含む褐色土，北側はやや砂質の暗褐色土まで掘り込まれ，急傾斜で立ち上がる。張り出し部分は外側が高く緩い傾斜がある。

炉跡　検出されなかった。

付属ピット　南西コーナーの付属ピットの他には柱穴状小ピットが９個検出された。竪穴の南壁際と北西コーナーに各１個あり，共に浅い皿状のものである。竪穴の周囲にみられる柱穴状小ピットはコーナーの外に各１個と北側の壁外に１個，張り出し部コーナーの外に各１個検出した。竪穴周囲の５個は浅いが，やや中央に傾いている。他の２個は浅い皿状である。

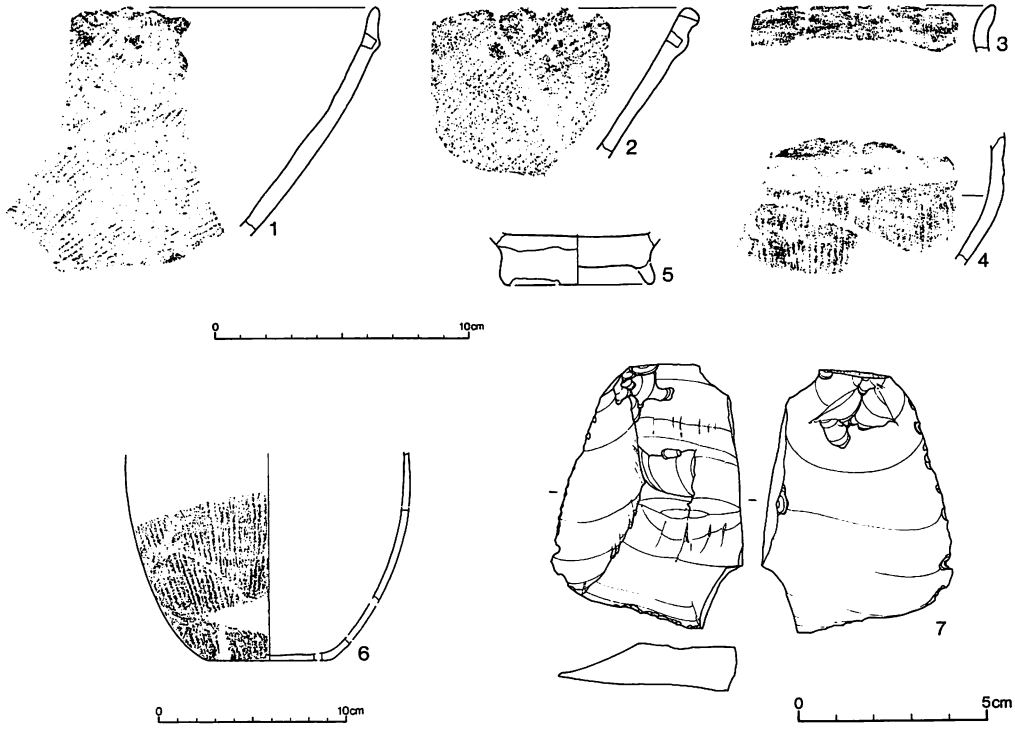
遺物出土状況　南西コーナーの付属ピット覆土から土器片１点，同上部の床面と同レベルに土器が一括して28点とその周囲北側の床面に２点，南東壁際に１点の土器が出土している。北側壁際の覆土から19点の土器が一括出土，他に覆土からは土器67点，Ｕフレイク１点，フレイク・チップ２点が出土した。

遺物　１は連続する小波状口縁，２は波状口縁の鉢である。ともに斜行縄文を地文とし，口縁下に内側からの突瘤文が巡る。３は無文の口縁部片である。４は「＜」状に屈曲する胴部片である。上半部にはヘラ状工具による押し引き痕が二条巡り，下半部は縦走縄文が施されている。５は径約6.5cmの貼り付け高台である。端部は張り出している。６は薄手で小型の深鉢である。現存最大径15.0cm，現存器高10.9cm，底部径6.5cm。器面全体に縦走縄文が施されている。平底である。６は床面出土，他は覆土出土である。３，４と６はＶ群ｃ－１類，他はIV

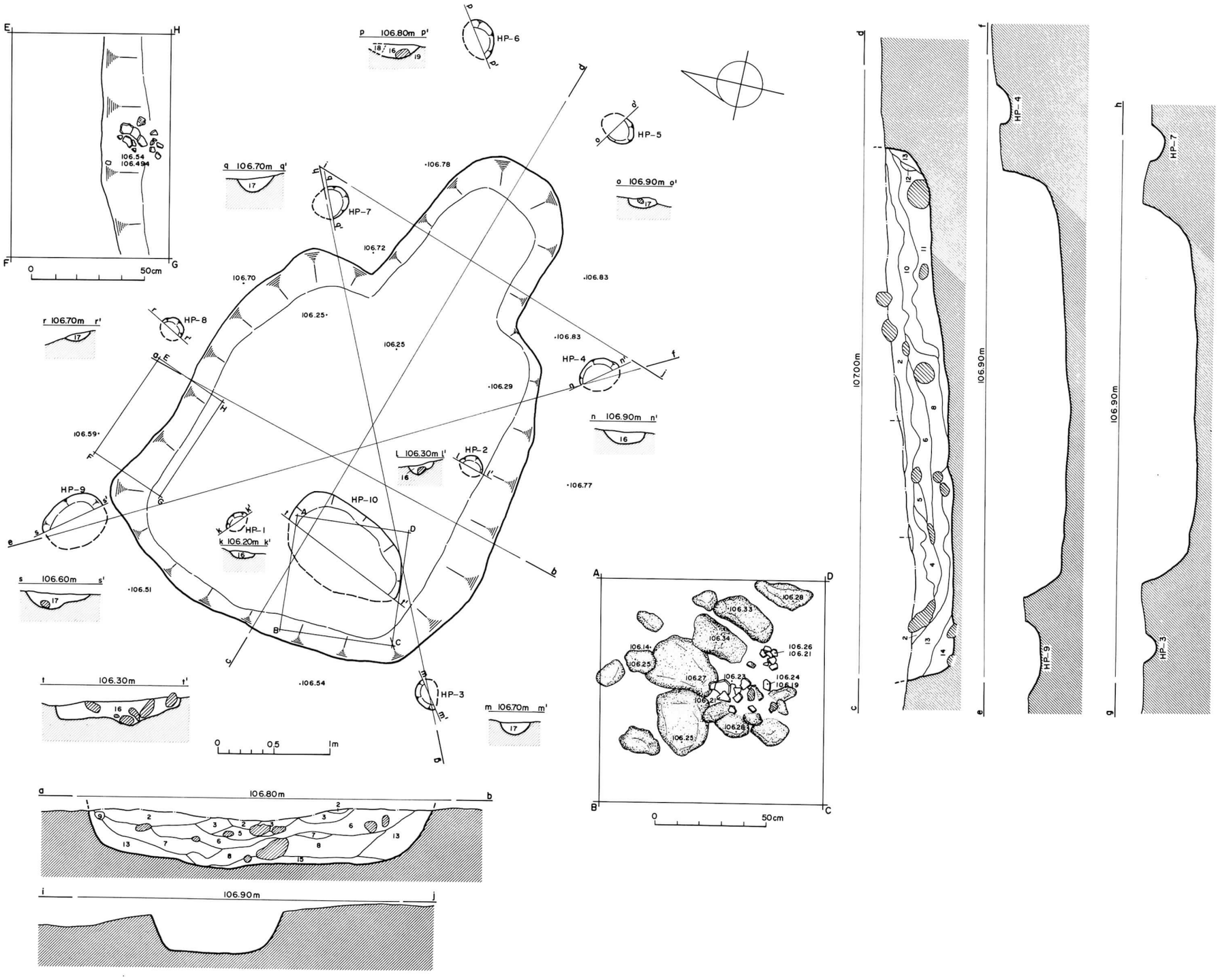
群c類である。7はUフレイクである。縦長剥片を用い，その下辺と一側辺に浅く細かな剥離調整がみられる。（谷島　由貴）

時期　床面出土の土器，住居跡の形態的な面から見ると本住居跡は縄文時代晩期のものと考えられる。

層位　1．灰黄褐色土　2．黒灰褐色土　3．褐色土　4．黄褐色砂質土　5．黒茶色土　6．黄褐色土　7．暗黄褐色土　8．暗褐色土　9．木の根痕　10．灰黄色土　11．暗灰褐色土　12．灰黄褐色土　13．暗灰黄褐色土　14．暗灰褐色土　15．明黄褐色土　16．暗茶褐色土　17．黒褐色土　18．攪乱　19．褐色砂質土



図Ⅴ－16　H－6出土遺物（土器・石器）


HP-1
HP-2
HP-3
HP-4
HP-5
HP-6
HP-7
HP-8
HP-9
HP-10
p 106.80m p'
q 106.70m q'
o 106.90m o'
r 106.70m r'
n 106.90m n'
l 106.30m l'
k 106.20m k'
s 106.60m s'
t 106.30m t'
m 106.70m m'
a 106.80m b
i 106.90m j
107.00m
106.90m
0 50cm
0 0.5 1m

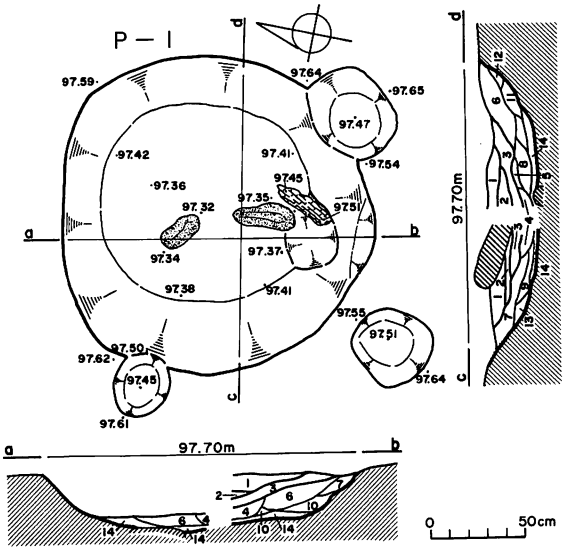
図Ⅴ－17　H－6実測図

(2) 土 壙

P－1

層位　1．Us-b≒③　2．Us-b≒③　3．黒褐色土　4．暗茶灰色土　5．④≒⑥　6．黄色粘土　7．明茶黄色土　8．⑥≒⑨　9．⑩≒④　10．茶灰色土　11．⑫≒⑨＋少量の⑭　12．暗橙色土　13．⑨＋⑭　14．炭化物

L－65－c，M－65－d。標高97.60 mの平担地に位置する。平面形は一辺約1.6 mの隅丸方形で，深さは約20 cmである。壙底から10 cm程上には炭化物を覆うように黄色粘土が厚く堆積する。壙底，壁は火熱を受け，堅く赤橙色化している。南壁際で生焼けの棒状木片が検出されており，炭焼き跡と考えられる。第IV層を切って掘り込まれており，開拓期以降のものであろう。

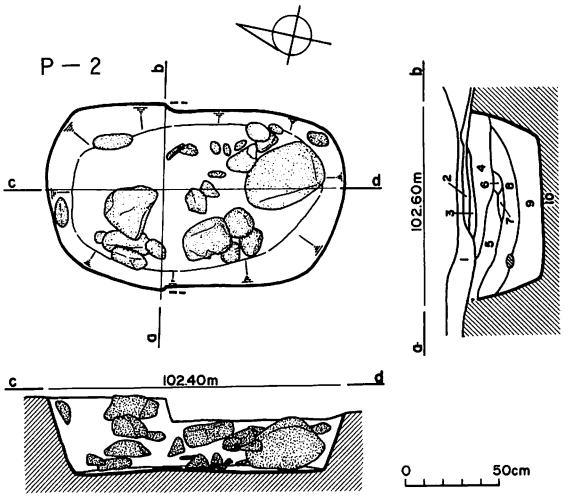


図V－18　P－1実測図

P－2

層位　1．第I層　2．Us-b（第IV層）　3．黒褐色土（第V層）　4．暗茶褐色土（粘質，少量の炭化物を含む）　5．茶褐色土（微少の炭化物を含む）　6．褐色土(微少の炭化物を含む)　7．暗茶褐色土(少量の⑥が混入)　8．暗褐色土(炭化物を多量に含む)　9．暗黄褐色土（少量の炭化物を含む）　10．第VI層

N－75－d，N－76－aに位置し，第V層直下で確認された。平面形は楕円形で，確認面での規模は1.76×0.99 m，深さは0.40 mを測る。壙底面は，第VI層中に掘り込まれ平担である。壁は，南西側が一部緩いほかは，比較的急な立ち上がりをする。出土遺物は，覆土内から大小の礫が25点ほど検出されたのみである。時期，性格は不明。

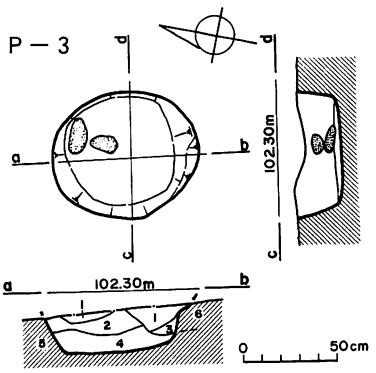


図V－19　P－2実測図

P－3

層位　1．暗茶褐色土（粘質）　2．暗黄褐色土（①＋幌別黄橙色火山灰）　3．黒褐色土（黒色土＋微少の幌別黄橙色火山灰）　4．茶褐色土　5．茶褐色土　6．第VI層

O－76－dのV層中で確認され，幌別黄橙色火山灰を切った円形の土壙である。確認面での規模は，0.78×0.67 m，深さ0.25 mを測る。床面は第VI層中に作られ，粘質で堅く締まっている。壁は，北東－南西壁が垂直に近く，北



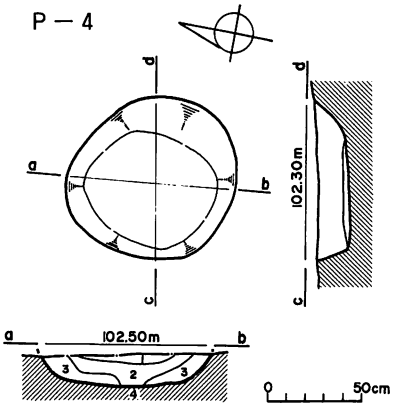
図V－20　P－3実測図

西－南東壁が若干傾斜する。遺物は，床面近くから礫が2点出土したのみである。時期，性格は不明。

P－4

層位　1．暗茶褐色土（粘質，微少の炭化物を含む）　2．黒褐色土（炭化層）　3．茶褐色土（微少の炭化物を含む）　4．第VI層

N－77－cの第VI層中で確認した。床面は平担で堅いが，南側の一部が攪乱を受けている。壁の立ち上がりは，南西壁以外傾斜が緩い。遺物は出土していない。時期，性格は不明。

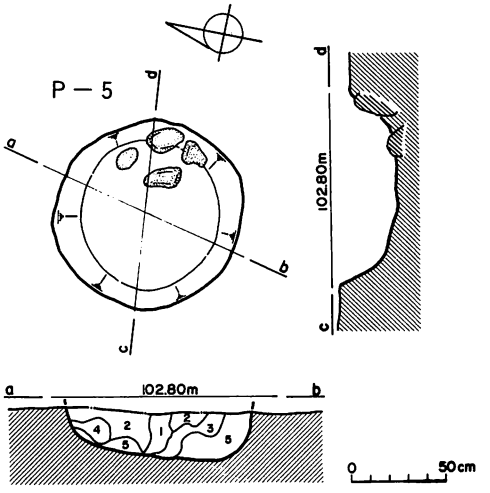


図V－21　P－4実測図

P－5

層位　1．明黄褐色土　2．黄褐色土　3．暗黄褐色土　4．暗灰褐色土　5．灰褐色土

N－77－c，標高102.77 m～102.70 mの平担地に位置する。平面形は1.0 m×0.98 mの円形である。断面形は壙底の南側に低く傾斜し，壁は急傾斜で立ち上がる鍋底状を呈する。壙底の東側から壁にかけて礫が4点出土し，掘り込みはそこで止まっている。検出面は第VI層中で，掘り込み面は第VI層上面から中にかけてと推定される。壙底は第VII層上面に達する。壙底から検出面までの最大深は約30 cmである。覆土は第VI層中の明黄褐色土が中央部で縦位にあり，その南側に明黄褐色土と褐色土が混ざり汚れたような粒状の土が斜め方向にみられ，埋め戻されたと考えられる。遺物は検出していないが，周囲から出土している遺物及び層位から縄文時代中期又は後期と推定される。

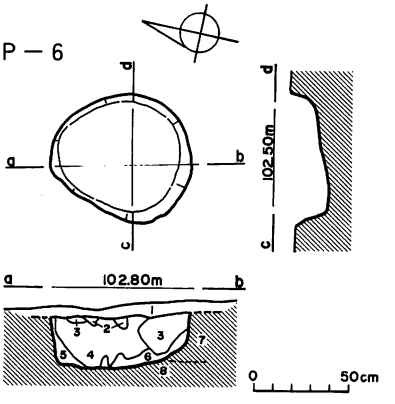


図V－22　P－5実測図

P－6

層位　1．第VI層　2．暗褐色土　3．灰褐色土　4．黒褐色土　5．暗灰褐色土　6．灰黄褐色土　7．褐色土（第VI層）　8．茶褐色土（第VII層）

M－76－c，標高102.53 m～102.48 mの平担地に位置する。平面形は0.76 m×0.69 mのやや不整な円形。断面形は壙底の西側にやや低く傾斜し，壁は垂直に立ち上がり鍋底状を呈する。掘り込み面は第VI層上面にある。壙底は第VII層を7 cm程掘り込み，壙口からの深さは約30 cmである。覆土は黒褐色土と第VI層の褐色土が混ざりやや粘質である。遺物は検出していないが周囲からIV群b類土器が，その下位からIII群土器が出土しているこ



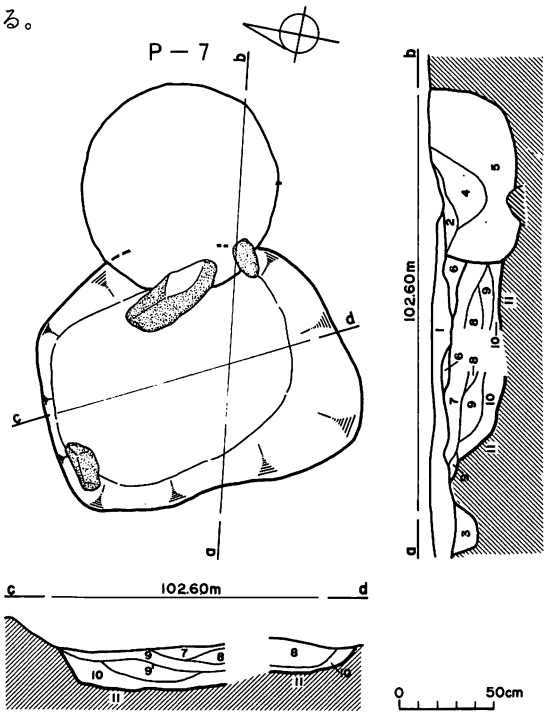
図V－33　P－6実測図

となどから，時期は縄文時代後期と推定される。

P－7

層位　1．第Ⅰ層　2．①＋Us-b＋⑪　3．①≧⑪　4．①＋ごく少量の⑪　5．⑪≧少量のUs-b＋少量の①＋少量の炭化物　6．Us-b　7．淡褐色土＋微量の黄色土粒＋少量の炭化物　8．⑪≦淡褐色土　9．⑪＋淡褐色土＋少量の炭化物　10．⑪≧淡褐色土　11．黄色土（第VI層）

N－75－d。標高102.40 mのほぼ平担地に位置する。平面形は1.6 m×1.3 mの隅丸長方形で，深さ（最大）は約28 cmである。耕作土を除去して検出する。覆土は黄色土＋淡褐色土で，炭化物を多く混入する層と少量の部分とがある。遺物は出土していない。掘り込み面は第V層中と思われる。時期，性格などは不明であり，風倒木痕の可能性も考えられる。

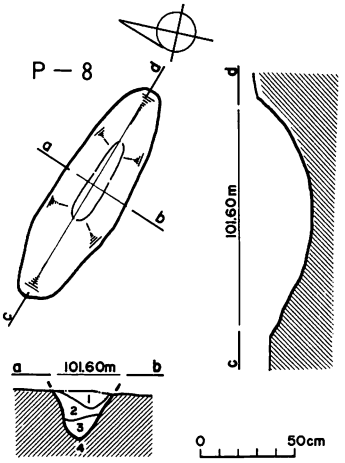


図V－24　P－7実測図

P－8

層位　1．褐色土（炭化物まじり）　2．灰黄色土≧①　3．①≧灰黄色土（粘質）

O－75－b。標高101.23 m～101.32 mのほぼ平担地に位置する。平面形は1.30 m×0.37 mの溝状のものである。長軸方向の断面は浅い皿状である。短軸方向の中央部分の壁は急傾斜で立ち上がり，壁高は約25 cmである。検出面は第IV層上面で，掘り込み面は不明である。覆土は灰黄色土＋褐色土で，全体にボソボソしているが，下層はやや粘質である。壙底，壁はしっかりしている。Tピットの可能性も考えられたがはっきりしなかった。時期，性格などは不明である。（和泉田毅・谷島由貴・森岡健治）



図V－25　P－8実測図

(3)　**集石遺構**（図V－26）

層位　1．褐色土（砂質2～6 cmの小礫と20 cm前後の礫を多量に含む）　2．褐色土（砂質，礫を若干混入）　3．黒色土（砂質）　4．青灰色土（砂質）　5．灰褐色土（砂質）　6．褐色土（若干砂を含む）　7．暗褐色土（砂，礫を含む）

本遺構は，土壙などの構造をともなわないが，調査区内のいたるところで出土する単体の礫とは出土状況が異なり，人為的に配された礫の集合として判断されたものである。

確認された地区はＪ－85－ａ・ｂ区で，VI層の調査中に大型の礫（１～22）が立った状態で検出され，さらにその下面から小礫が密集して出土した。当初，石組炉，あるいはストーンサークルの可能性も考えられたが，特定することはできず，集石遺構とした。平面形は，北側に大型の不規則な礫が散乱しているため明確ではないが，小礫のあり方から長楕円形と推察される。規模は，長軸が約４ m，短軸が最大2.8ｍで，並行して立っている大型礫の間は1.2ｍを測る。１～22のうち，13～16は若干浮いた状態で検出されていることより，本来はこれらも並行して配されていたものと考えられる。また，礫の形状，大きさは不揃いであるが，破片は少なく，重なりも見られない。小礫の大きさは，２～５ cmのものが多く，堆積の厚さも第１層の上面にわずかに確認されただけである。集石の下面には，砂質の褐色土（第１・２層）と黒色土（第３層）が集石と同様の平面形で確認されたが，浅い皿状の落ち込みとなっており，土壙としては認定できなかった。また，集石下の第１～６層は，北側を流れる稀府川の氾濫による砂層で，基本層序の第VI層であることが判明した。出土遺物は，集石下の北西付近から縄文晩期の土器片が出土しているが，本遺構にともなうものかどうかは不明である。（森岡　健治）

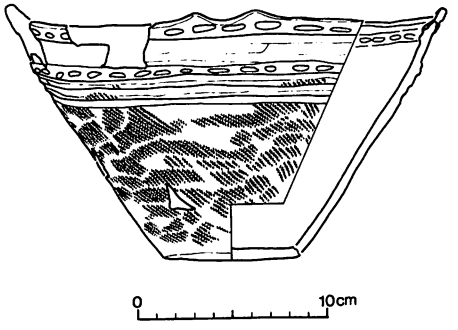
図Ｖ－27は，集石遺構の北西付近に散在していた約30片の土器片から復元されたＶ群ｃ－１類土器で，口縁から体部のほぼ半周，底部ではほぼ全周が現存している。肩部が幾分張り出すが，全体的にはほぼ直状に大きく開く鉢形を呈する。底面はやや丸味を帯び，周縁部が少し浮く。口縁には２頂一対の突起が配され，口縁直下と頸部無文帯下の肩部には短刻線が加えられている。その下には幅広の平行沈線文が３条みられる。口縁内側をめぐる沈線は突起下では三角状に入り組み，その下の張り出し部には短刻線が加えられている。（高橋　和樹）

(4) 焼土

焼土は調査区のほぼ全域から検出され，全部で128ヵ所を数えた（図Ｖ－29）。近接する数個の焼土を一つの番号の下にまとめたケースもあるが，個々の規模などは，一覧表に分割して明記した（表Ｖ－３～８）。なかには人為的な所産ではない焼土ブロックが含まれている可能性もあるが，はっきりと分離することはできなかった。

層位的にみるならば，Ｖ層中の白頭山－苫小牧火山灰（B－Tm）の直上に見出されたものが１ヵ所（F－113），B－Tm火山灰の直下が10ヵ所（Ｆ－18など）あり，B－Tmとの直接的な関係がつかめない地区では，IV層Us-b火山灰直下のＶ層上位に検出された例が６ヵ所（F－６など），Ｖ層中の下位のものが12ヵ所（Ｆ－２など）あった。これらは縄文時代晩期後半から続縄文期，擦文期にかけて残された焼土と考えられる。F－113やＶ層上位の焼土のなかには，擦文期以降，中・近世に属するものがあるかも知れない。VI層中の上位に発見された焼土は，63ヵ所（F－１など）と全体の半数近くを占めるが，これらは縄文後期から晩期前半頃までの所産と思われる。さらに，VI層中の中位に残された36ヵ所（F－３など）の焼土は，それ以前の縄文早期から中期にかけてのものと推定される。

図V－26　集石遺構実測図



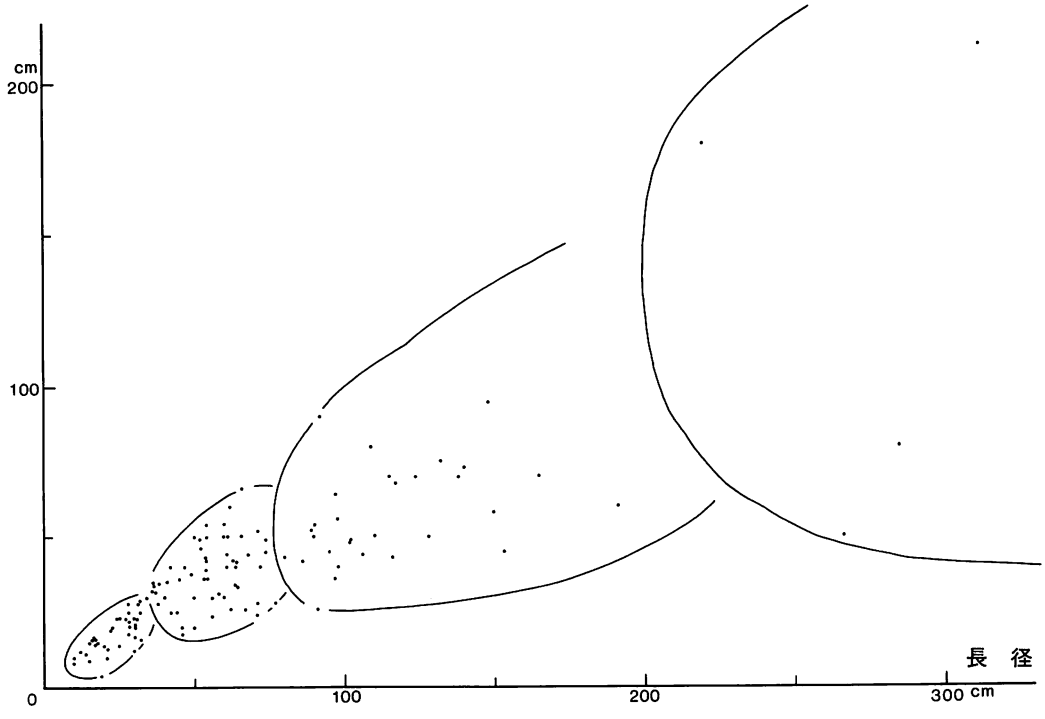
図V－27　集石遺構出土遺物(土器)

土器の共伴によって時代を決定できる焼土は，F－2（Ｖc－1），F－23（Ｖc－2），F－45および隣接の石組炉（Ｖc－1）などである。F－45と降接する石組炉とは，同時存在の一体の施設と思われる。また，ほぼ共伴関係を認められる例は，F－15（Ｖc－1），F－20（Ｖc－1），F－26（Ⅳc），F－41（Ⅳc），F－111（Ⅵc），F－124（Ｖc－1）などである。縄文晩期の土器を伴う類例が比較的多いといえようか。

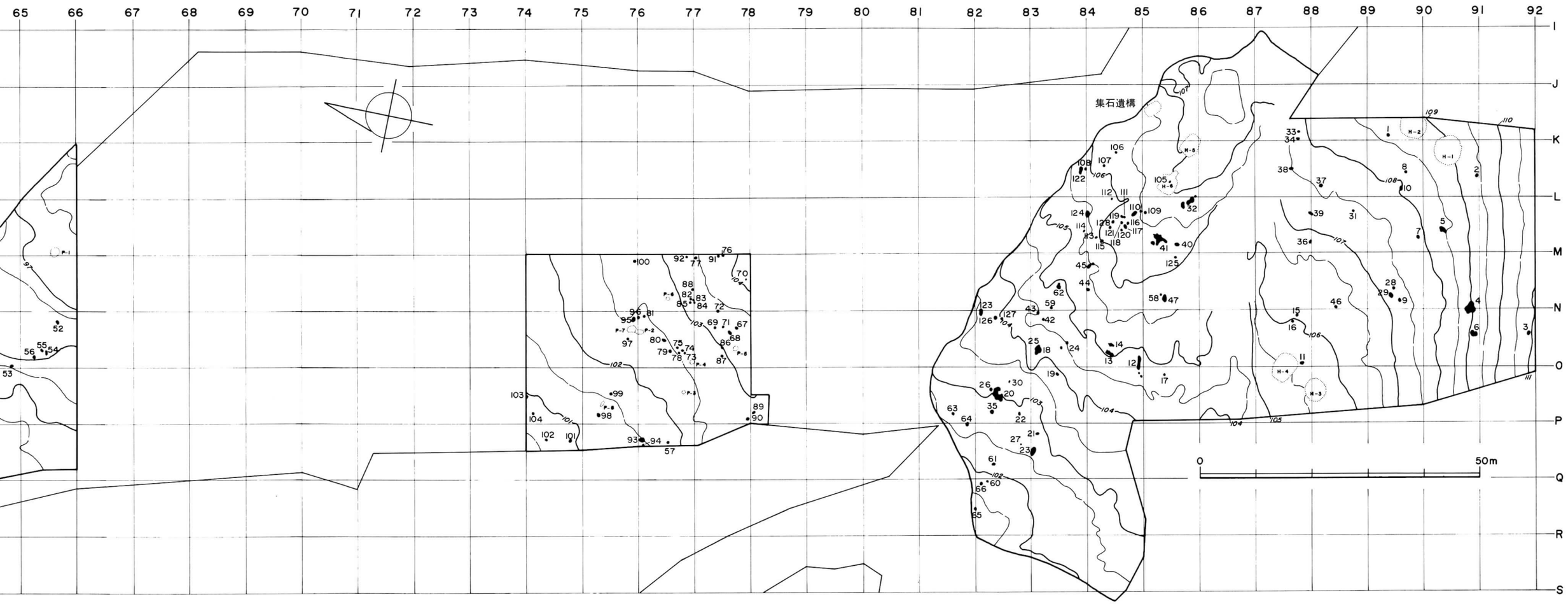
焼土の上面観は円形や長円形のものが多いが，不整形を呈するものも多く，一様ではない。F－4などのように明確な掘り込みを有する例は少なく，F－45隣接の石組炉やF－17, 64など配石がみられるものも，わざわざ炉石を運んできて囲ったというのではなく，地表に露出する自然礫の配列を最大限に利用したものである。焼土の近傍に小ピットが検出された例もあるが，両者が共存していたという保証はない。

規模的には長径が10 cm程のごく小規模なものから，F－41(B)のように長径が3 mを超える大きなものまである。F－41は後の耕作もあって3ヵ所に分断されているが，本来的には一続きであった可能性があり，その場合には極めて大規模な焼土が存在したことになる。図Ｖ－28に示すように，長径を指標に，焼土の規模をいくつかの段階に分けて考えてみると，長径が35 cm未満の小規模な例が全体の24.1%, 35 cmから90 cm未満の中程度のものが48.6%, 90 cm以上2 mまでのやや大規模なものが24.2%，2 mを超える特に大規模な例が3.1%程であった。

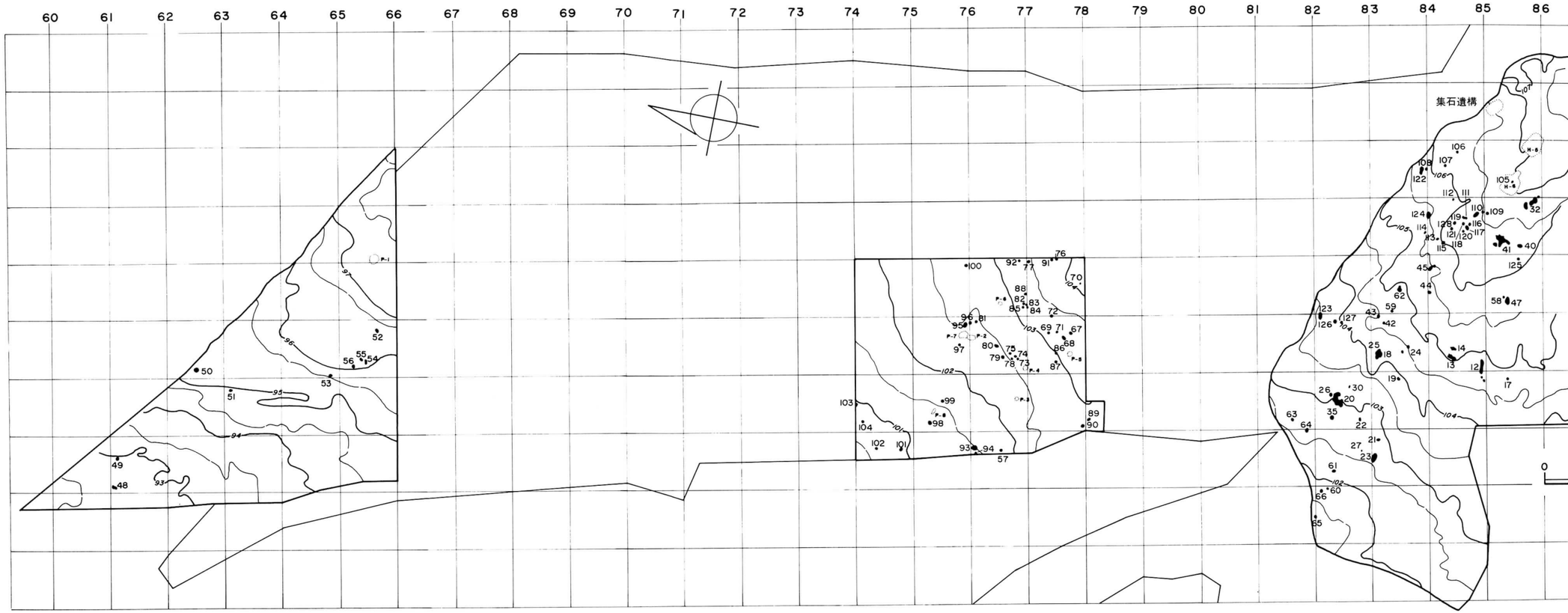
F－41, 47, 109, 111, 117などは，焼土中に焼骨片を点在させており，多量の骨片を含有し，



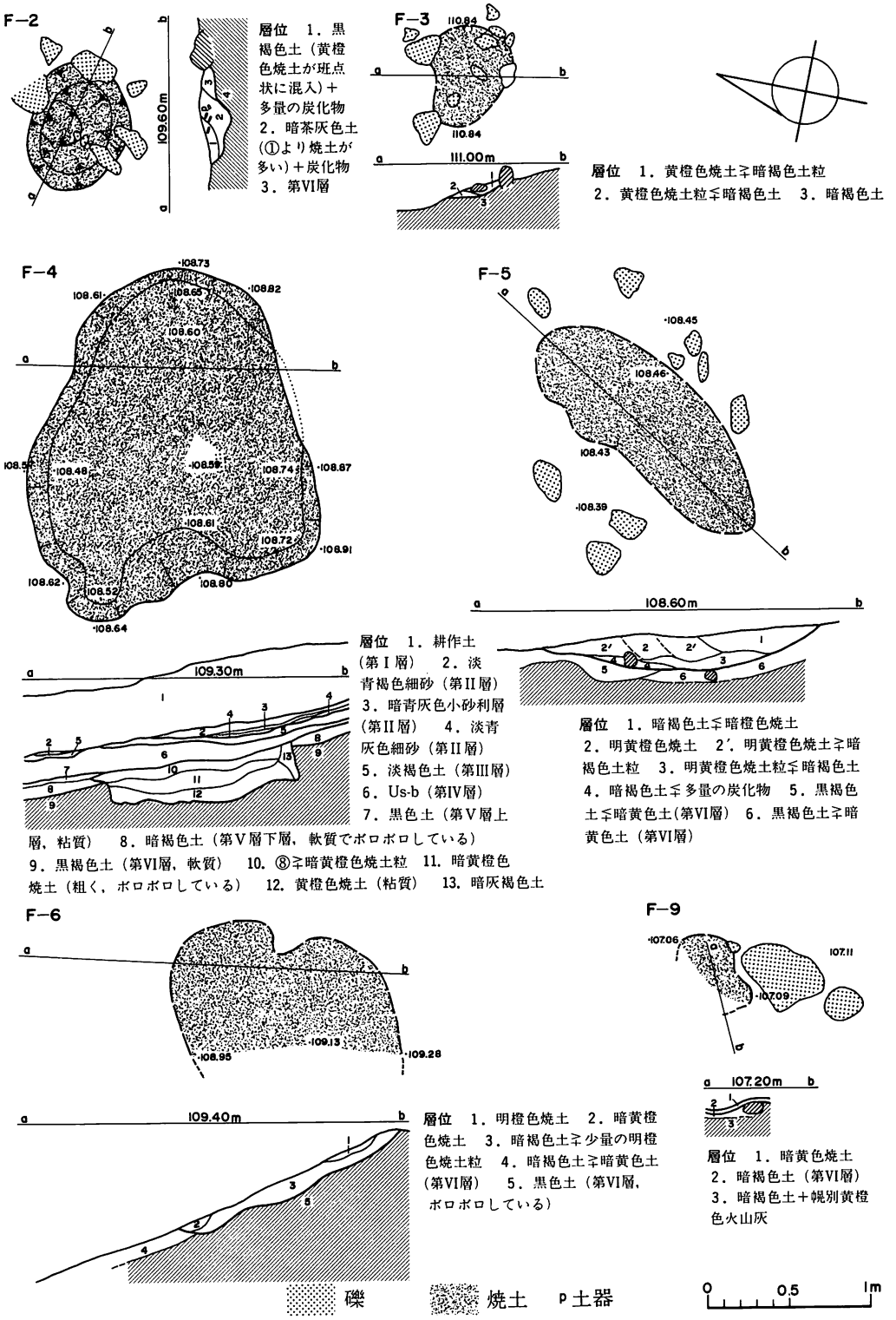
図Ｖ－28　焼土の規模



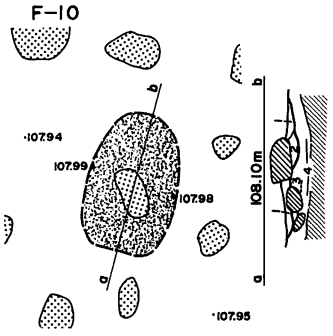
図Ⅴ－29　焼土位置図



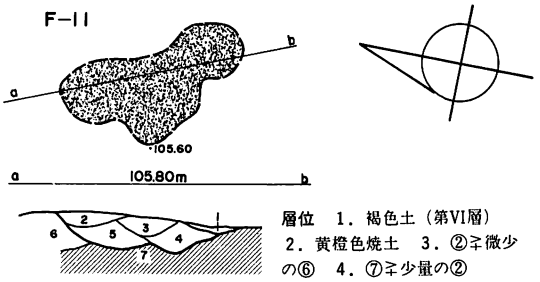
図Ⅴ－29　焼土位置図


F−2
109.60m
層位　1．黒褐色土（黄橙色焼土が斑点状に混入）＋多量の炭化物
2．暗茶灰色土（①より焼土が多い）＋炭化物
3．第VI層
F−3
110.84
111.00m
層位　1．黄橙色焼土≷暗褐色土粒
2．黄橙色焼土粒≶暗褐色土　3．暗褐色土
F−4
108.73
108.61
108.82
108.63
108.60
108.50
108.48
108.59
108.74
108.87
108.61
108.72
108.91
108.62
108.52
108.80
108.64
109.30m
層位　1．耕作土（第Ⅰ層）　2．淡青褐色細砂（第II層）
3．暗青灰色小砂利層（第II層）　4．淡青灰色細砂（第II層）
5．淡褐色土（第III層）
6．Us-b（第IV層）
7．黒色土（第V層上層，粘質）　8．暗褐色土（第V層下層，軟質でボロボロしている）
9．黒褐色土（第VI層，軟質）　10．⑧≷暗黄橙色焼土粒　11．暗黄橙色焼土（粗く，ボロボロしている）　12．黄橙色焼土（粘質）　13．暗灰褐色土
F−5
108.45
108.46
108.43
108.39
108.60m
層位　1．暗褐色土≶暗橙色焼土
2．明黄橙色焼土　2′．明黄橙色焼土≷暗褐色土粒　3．明黄橙色焼土粒≶暗褐色土
4．暗褐色土≶多量の炭化物　5．黒褐色土≶暗黄色土（第VI層）　6．黒褐色土≷暗黄色土（第VI層）
F−6
108.95
109.13
109.28
109.40m
層位　1．明橙色焼土　2．暗黄橙色焼土　3．暗褐色土≷少量の明橙色焼土粒　4．暗褐色土≷暗黄色土（第VI層）　5．黒色土（第VI層，ボロボロしている）
F−9
107.06
107.11
107.09
107.20m
層位　1．暗黄色焼土
2．暗褐色土（第VI層）
3．暗褐色土＋幌別黄橙色火山灰
礫
焼土　P土器
0　0.5　1m

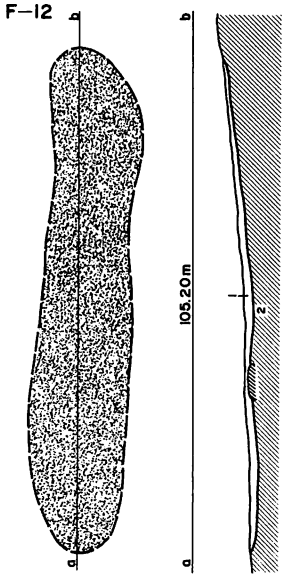
図V−30　焼土実測図(1)



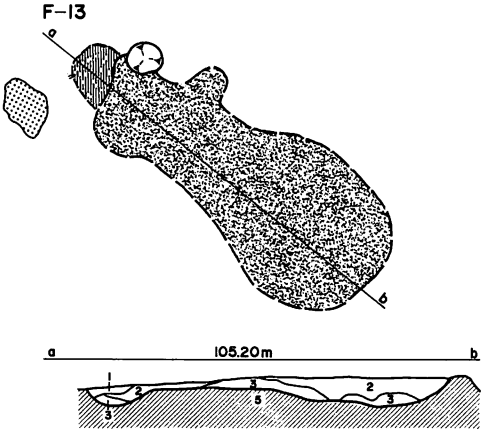
層位　1．暗黄色焼土　2．①≦③　3．暗褐色土（第VI層）
4．黒色土（第VI層）



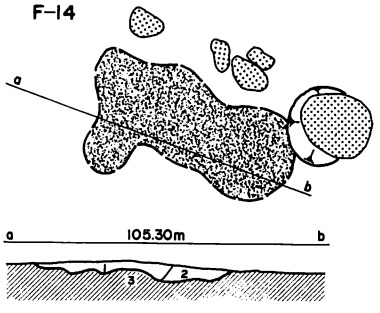
層位　1．褐色土（第VI層）
2．黄橙色焼土　3．②≧微少の⑥　4．⑦≧少量の②
5．⑥≧少量の①　6．暗褐色土（第VI層，粘質）
7．灰褐色土（第VI層）



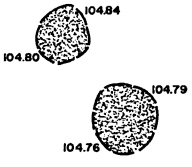
層位　1．赤褐色焼土　2．第VI層（砂質）

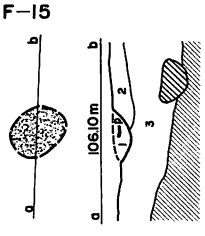


層位　1．黒色土（炭化物）　2．赤褐色焼土　3．淡赤褐色土
5．第VI層（砂質）

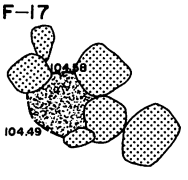


層位　1．黒色土（炭化物）　2．赤褐色焼土　3．淡赤褐色土





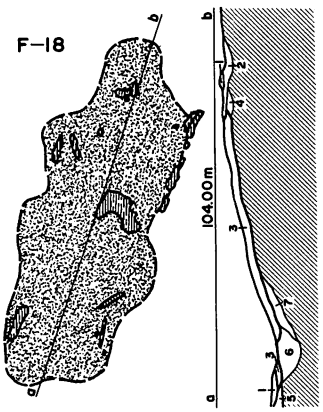
層位　1．暗橙色焼土≧暗褐色土
2．暗褐色土（第VI層）
3．暗褐色土≧暗黄色土



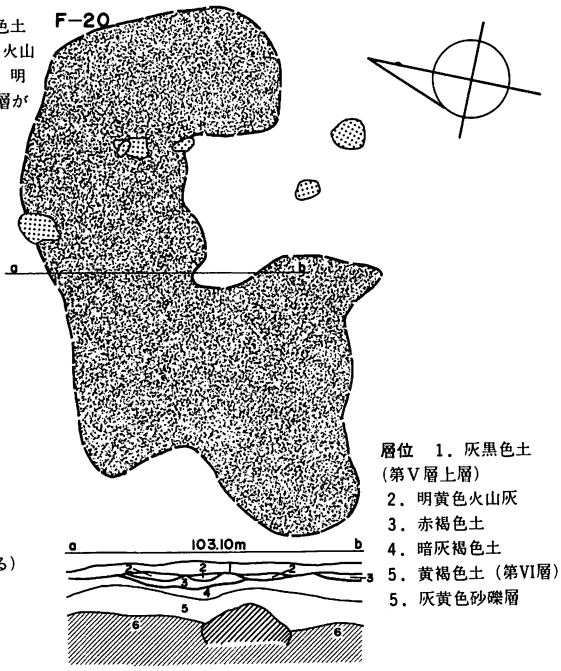
礫　焼土　炭化物　p 土器

0　0.5　1m

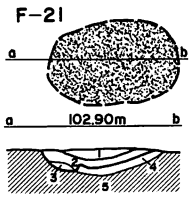
図V－31　焼土実測図(2)



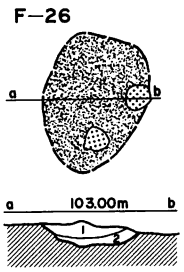
層位　1．黒褐色土（斑点状に白頭山火山灰を混入）　2．明橙色焼土（第VI層が火熱を受ける）　3．橙褐色焼土（炭化物混入）　4．暗橙褐色土（第VI層が火熱を受ける）　5．暗褐色土（第V層下層）　6．黒褐色土　7．暗黄褐色土（砂質土）



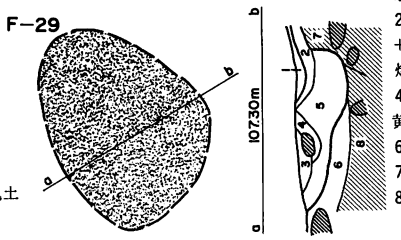
層位　1．灰黒色土（第V層上層）　2．明黄色火山灰　3．赤褐色土　4．暗灰褐色土　5．黄褐色土（第VI層）　5．灰黄色砂礫層



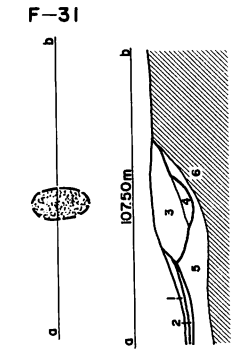
層位　1．暗褐色土（第V層）　2．橙褐色焼土（炭化物混入）　3．暗橙色土（若干火熱を受ける）　4．暗黄褐色土　5．黄褐色土（第VI層，砂質）



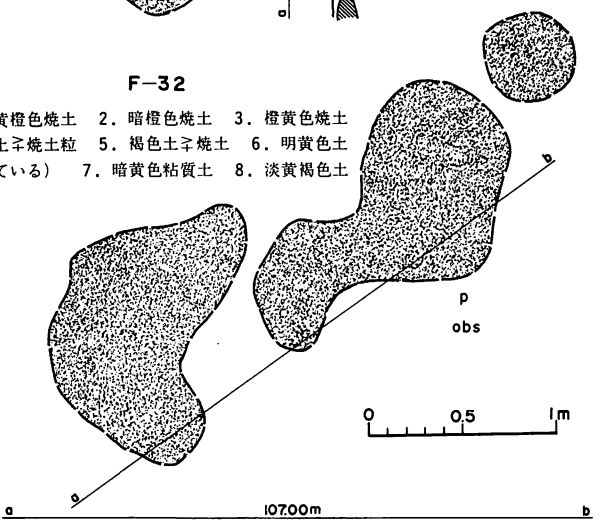
層位　1．赤褐色土　2．赤黄色土



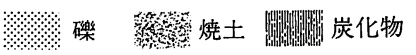
層位　1．第V層上層　2．第V層下層＋炭化物＋焼土粒　3．明黄橙色焼土（ボロボロしている）　4．暗橙色焼土　5．淡黄橙色焼土（固い）　6．暗褐色土（第VI層）　7．⑥≧⑤　8．黒色土（第VI層，粘質）



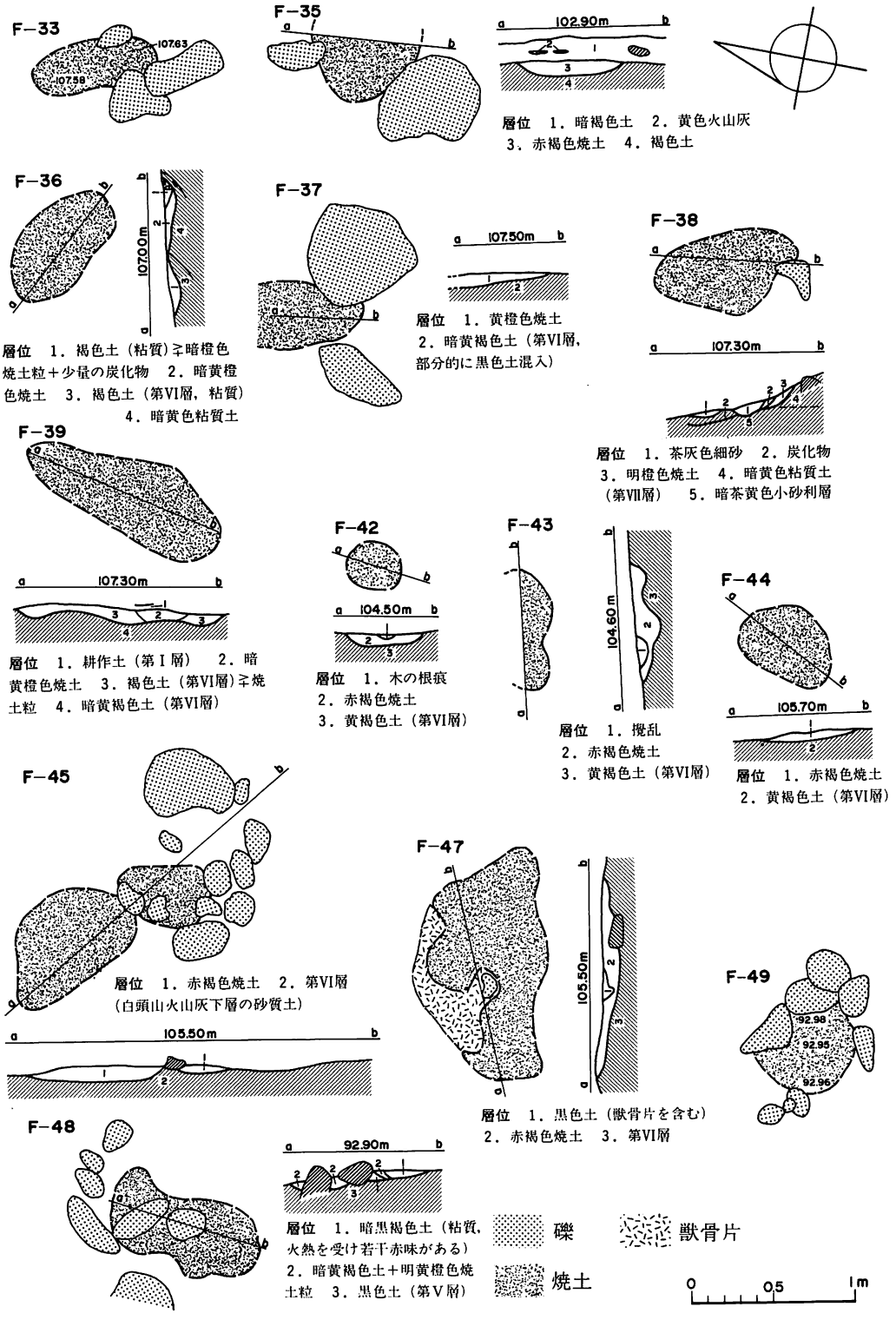
層位　1．第V層上層　2．炭化物　3．明褐色土（粘質）≧少量の焼土粒　4．黄橙色焼土　5．暗褐色土（第VI層）　6．黒褐色土（第VI層）



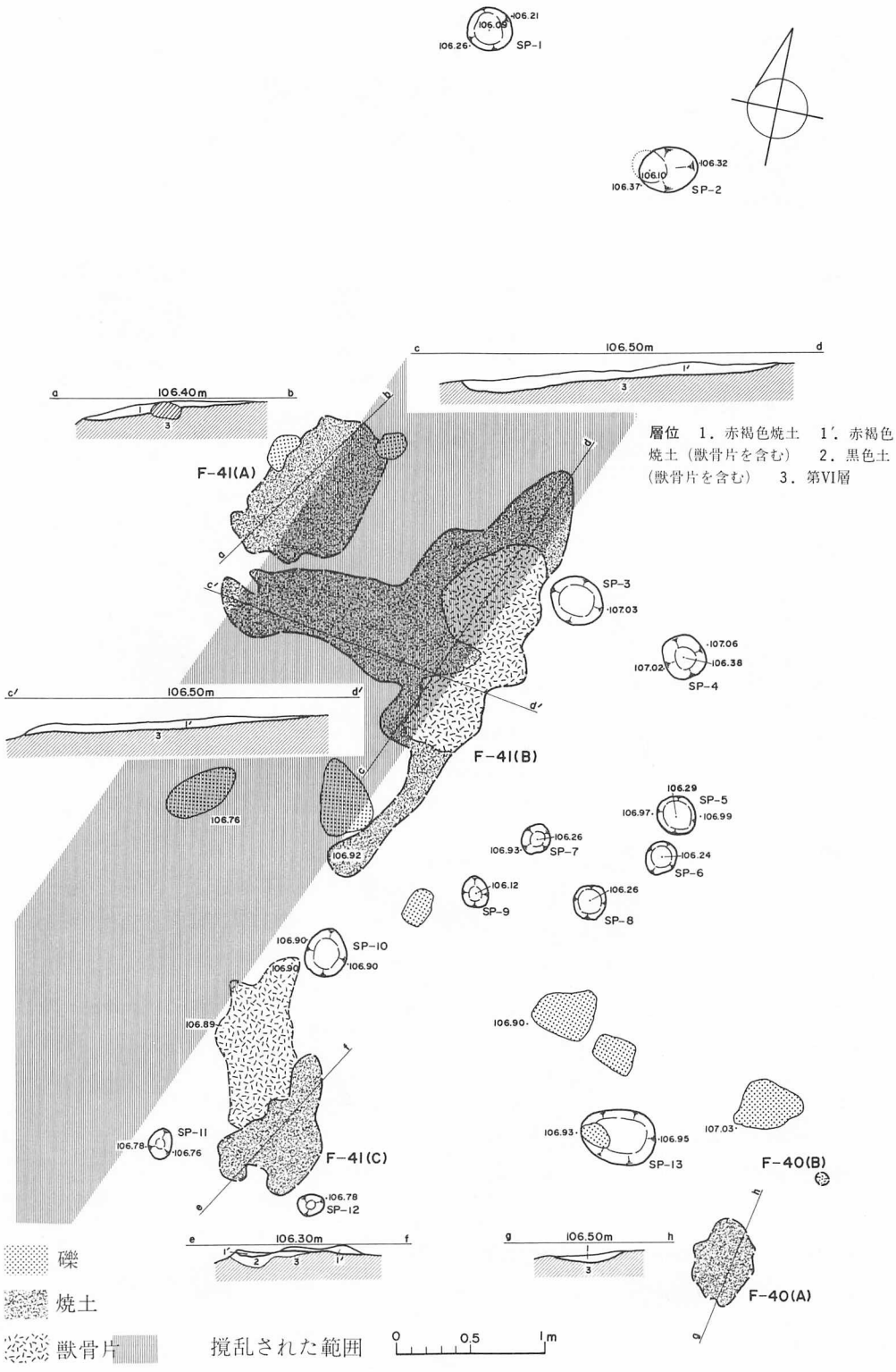
層位　1．明黄橙色焼土　2．暗橙色焼土　3．橙黄色焼土　4．暗灰黄色土≧焼土粒　5．褐色土≧焼土　6．明黄色土（火熱を受けている）　7．暗黄色粘質土　8．淡黄褐色土（第VI層）



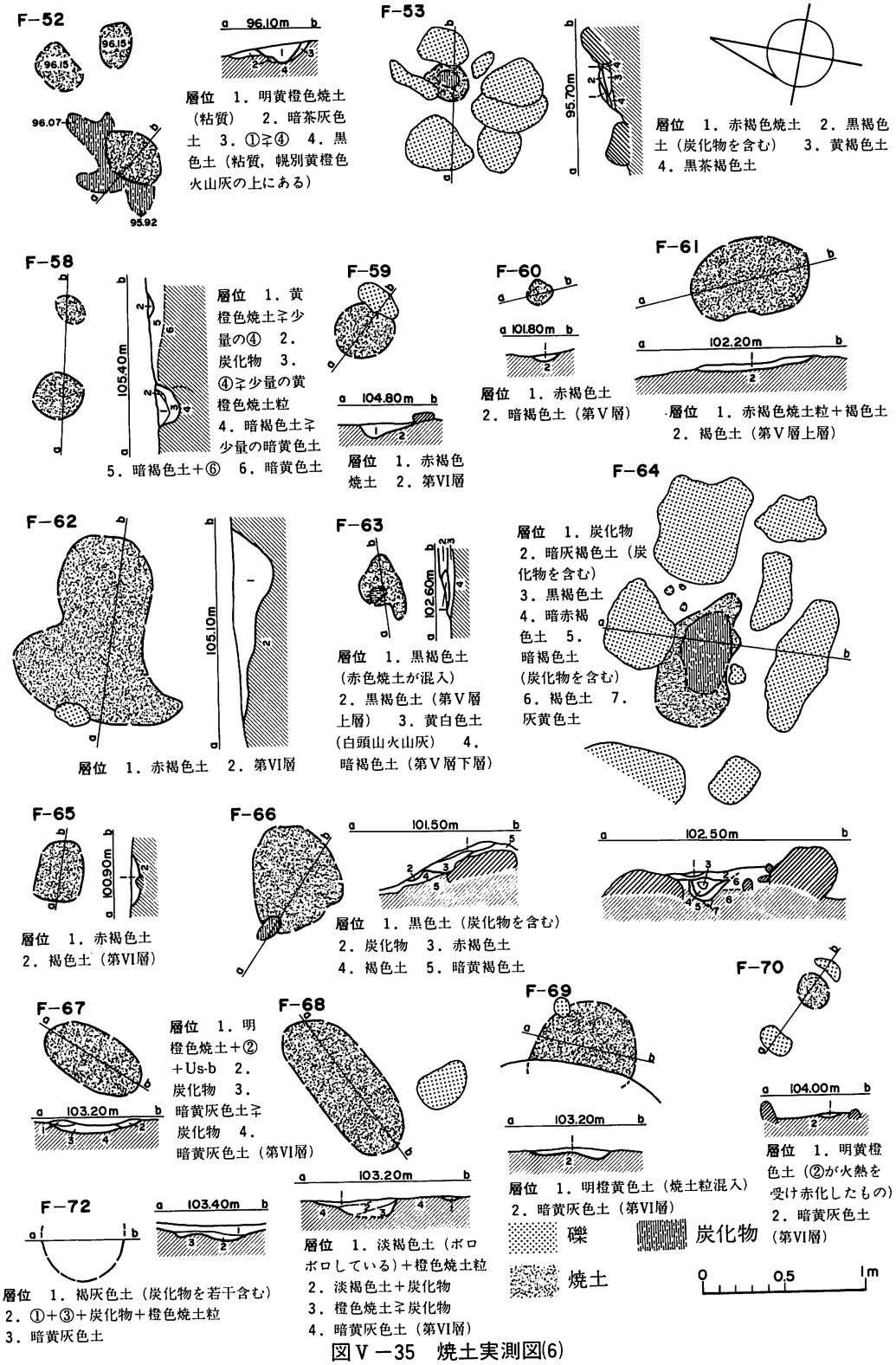
図V−32　焼土実測図(3)


F−33
107.63
107.58
F−35
a
b
a 102.90m b
層位 1．暗褐色土 2．黄色火山灰
3．赤褐色焼土 4．褐色土
F−36
107.00m
層位 1．褐色土（粘質）≧暗橙色焼土粒＋少量の炭化物 2．暗黄橙色焼土 3．褐色土（第VI層，粘質）
4．暗黄色粘質土
F−37
a 107.50m b
層位 1．黄橙色焼土
2．暗黄褐色土（第VI層，部分的に黒色土混入）
F−38
a 107.30m b
層位 1．茶灰色細砂 2．炭化物
3．明橙色焼土 4．暗黄色粘質土（第VII層） 5．暗茶黄色小砂利層
F−39
a 107.30m b
層位 1．耕作土（第Ⅰ層） 2．暗黄橙色焼土 3．褐色土（第VI層）≧焼土粒 4．暗黄褐色土（第VI層）
F−42
a 104.50m b
層位 1．木の根痕
2．赤褐色焼土
3．黄褐色土（第VI層）
F−43
104.60m
層位 1．攪乱
2．赤褐色焼土
3．黄褐色土（第VI層）
F−44
a 105.70m b
層位 1．赤褐色焼土
2．黄褐色土（第VI層）
F−45
層位 1．赤褐色焼土 2．第VI層（白頭山火山灰下層の砂質土）
a 105.50m b
F−47
105.50m
層位 1．黒色土（獣骨片を含む）
2．赤褐色焼土 3．第VI層
F−49
92.98
92.95
92.96
F−48
a 92.90m b
層位 1．暗黒褐色土（粘質，火熱を受け若干赤味がある）
2．暗黄褐色土＋明黄橙色焼土粒 3．黒色土（第Ⅴ層）
礫
獣骨片
焼土
0 0.5 1m

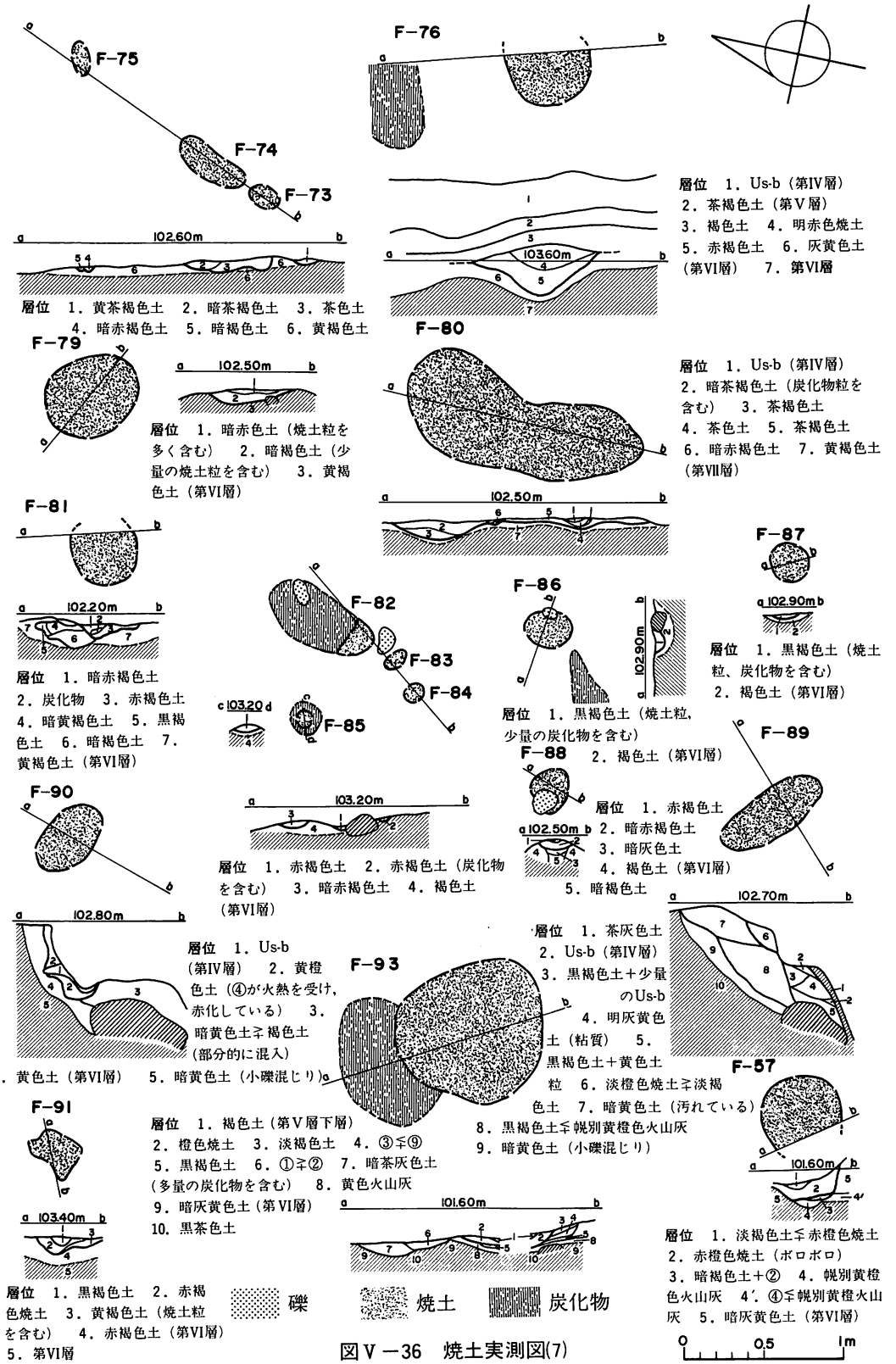
図Ⅴ−33 焼土実測図(4)


106.21
106.09
106.26
SP-1
106.32
106.10
106.37
SP-2
c　106.50m　d
a　106.40m　b
層位　1．赤褐色焼土　1′．赤褐色焼土（獣骨片を含む）　2．黒色土（獣骨片を含む）　3．第VI層
F-41(A)
SP-3
107.03
107.06
107.02
106.38
SP-4
c′　106.50m　d′
F-41(B)
106.76
106.29
SP-5
106.97
106.99
106.26
106.93
SP-7
106.24
SP-6
106.92
106.12
SP-9
106.26
SP-8
106.90
SP-10
106.90
106.90
106.89
106.93
106.95
SP-13
107.03
F-40(B)
106.78
SP-11
106.76
F-41(C)
106.78
SP-12
e　106.30m　f
g　106.50m　h
F-40(A)
礫
焼土
獣骨片
撹乱された範囲
0　0.5　1m

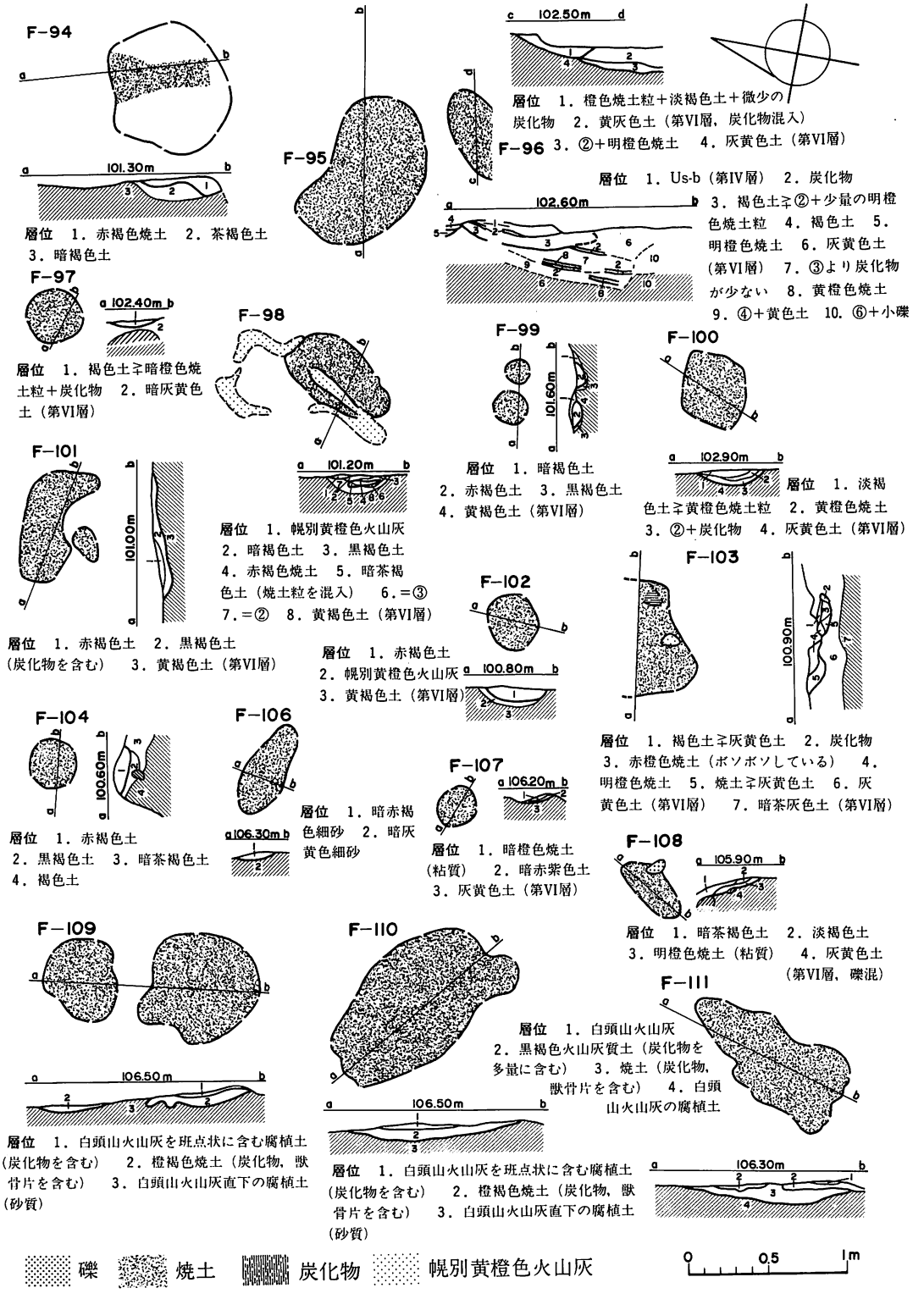
図V－34　焼土実測図(5)


F-52
96.15
96.15
96.07
95.92
a 96.10m b
層位 1．明黄橙色焼土（粘質） 2．暗茶灰色土 3．①≧④ 4．黒色土（粘質，幌別黄橙色火山灰の上にある）
F-53
95.70m
層位 1．赤褐色焼土 2．黒褐色土（炭化物を含む） 3．黄褐色土 4．黒茶褐色土
F-58
105.40m
層位 1．黄橙色焼土≧少量の④ 2．炭化物 3．④≧少量の黄橙色焼土粒 4．暗褐色土≧少量の暗黄色土 5．暗褐色土＋⑥ 6．暗黄色土
F-59
a 104.80m b
層位 1．赤褐色焼土 2．第VI層
F-60
a 101.80m b
層位 1．赤褐色土 2．暗褐色土（第V層）
F-61
a 102.20m b
層位 1．赤褐色焼土粒＋褐色土 2．褐色土（第V層上層）
F-62
105.10m
層位 1．赤褐色土 2．第VI層
F-63
102.60m
層位 1．黒褐色土（赤色焼土が混入） 2．黒褐色土（第V層上層） 3．黄白色土（白頭山火山灰） 4．暗褐色土（第V層下層）
F-64
層位 1．炭化物 2．暗灰褐色土（炭化物を含む） 3．黒褐色土 4．暗赤褐色土 5．暗褐色土（炭化物を含む） 6．褐色土 7．灰黄色土
F-65
100.90m
層位 1．赤褐色土 2．褐色土（第VI層）
F-66
a 101.50m b
a 102.50m b
層位 1．黒色土（炭化物を含む） 2．炭化物 3．赤褐色土 4．褐色土 5．暗黄褐色土
F-67
a 103.20m b
層位 1．明橙色焼土＋②＋Us-b 2．炭化物 3．暗黄灰色土≧炭化物 4．暗黄灰色土（第VI層）
F-68
a 103.20m b
層位 1．淡褐色土（ボロボロしている）＋橙色焼土粒 2．淡褐色土＋炭化物 3．橙色焼土≧炭化物 4．暗黄灰色土（第VI層）
F-69
a 103.20m b
層位 1．明橙黄色土（焼土粒混入） 2．暗黄灰色土（第VI層）
F-70
a 104.00m b
層位 1．明黄橙色土（②が火熱を受け赤化したもの） 2．暗黄灰色土（第VI層）
F-72
a 103.40m b
層位 1．褐灰色土（炭化物を若干含む） 2．①＋③＋炭化物＋橙色焼土粒 3．暗黄灰色土
礫
炭化物
焼土
0 0.5 1m

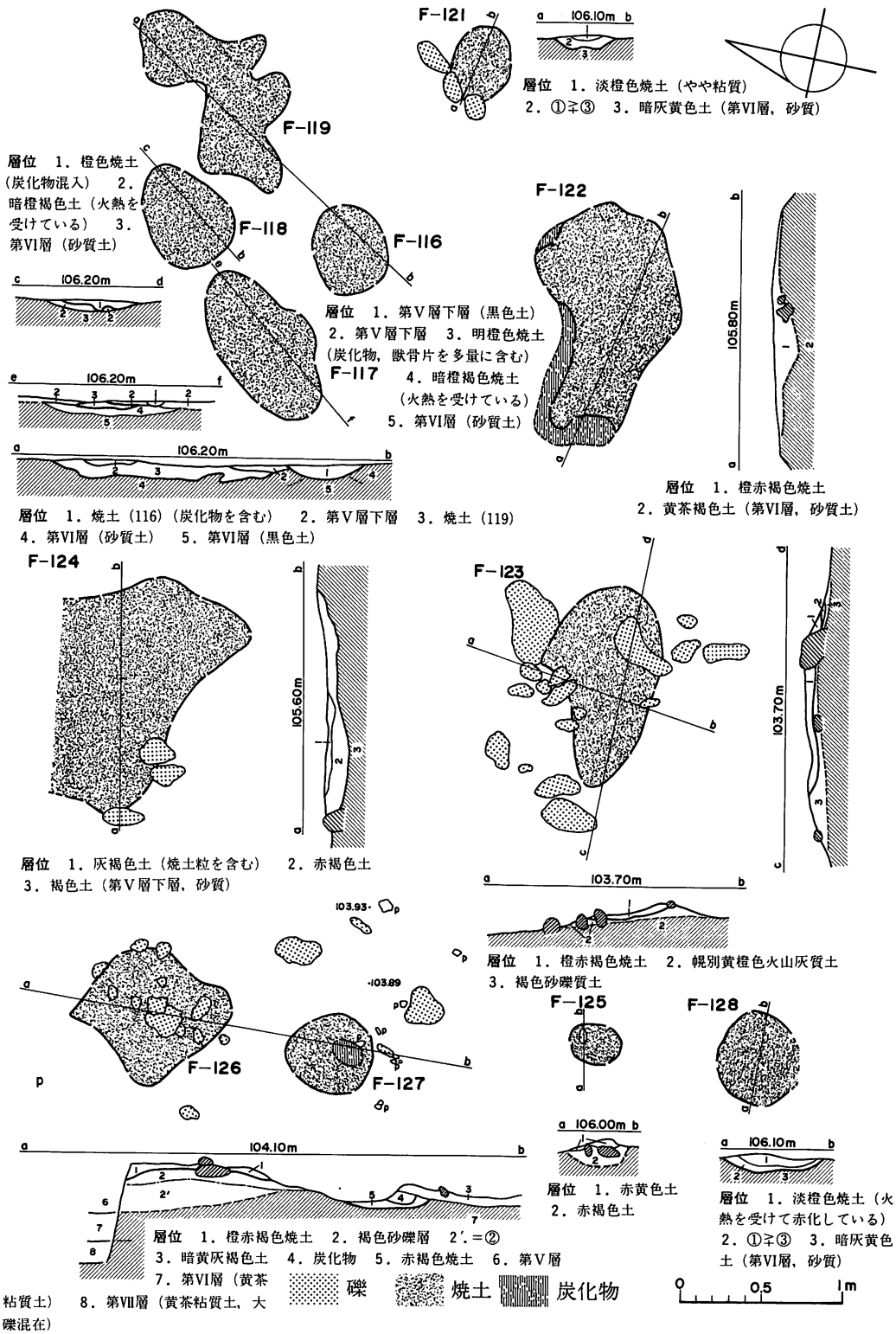
図V－35 焼土実測図(6)


F-75
F-74
F-73
F-76
102.60m
層位　1．黄茶褐色土　2．暗茶褐色土　3．茶色土
4．暗赤褐色土　5．暗褐色土　6．黄褐色土
層位　1．Us-b（第IV層）
2．茶褐色土（第V層）
3．褐色土　4．明赤色焼土
5．赤褐色土　6．灰黄色土
（第VI層）　7．第VI層
103.60m
F-79
102.50m
層位　1．暗赤色土（焼土粒を多く含む）　2．暗褐色土（少量の焼土粒を含む）　3．黄褐色土（第VI層）
F-80
層位　1．Us-b（第IV層）
2．暗茶褐色土（炭化物粒を含む）　3．茶褐色土
4．茶色土　5．茶褐色土
6．暗赤褐色土　7．黄褐色土
（第VII層）
F-81
102.20m
層位　1．暗赤褐色土
2．炭化物　3．赤褐色土
4．暗黄褐色土　5．黒褐色土　6．暗褐色土　7．黄褐色土（第VI層）
F-82
F-83
F-84
F-85
103.20d
F-86
102.90m
層位　1．黒褐色土（焼土粒、少量の炭化物を含む）
2．褐色土（第VI層）
F-87
102.90m
層位　1．黒褐色土（焼土粒、炭化物を含む）
2．褐色土（第VI層）
F-88
102.50m
層位　1．赤褐色土
2．暗赤褐色土
3．暗灰色土
4．褐色土（第VI層）
5．暗褐色土
F-89
F-90
103.20m
層位　1．赤褐色土　2．赤褐色土（炭化物を含む）　3．暗赤褐色土　4．褐色土（第VI層）
102.80m
層位　1．Us-b（第IV層）　2．黄橙色土（④が火熱を受け，赤化している）　3．暗黄色土≲褐色土（部分的に混入）
4．黄色土（第VI層）　5．暗黄色土（小礫混じり）
F-93
層位　1．茶灰色土
2．Us-b（第IV層）
3．黒褐色土＋少量のUs-b
4．明灰黄色土（粘質）　5．黒褐色土＋黄色土粒　6．淡橙色焼土≲淡褐色土　7．暗黄色土（汚れている）
8．黒褐色土≲幌別黄橙色火山灰
9．暗黄色土（小礫混じり）
102.70m
F-57
101.60m
層位　1．淡褐色土≲赤橙色焼土
2．赤橙色焼土（ボロボロ）
3．暗褐色土＋②　4．幌別黄橙色火山灰　4′．④≲幌別黄橙火山灰　5．暗灰黄色土（第VI層）
F-91
103.40m
層位　1．黒褐色土　2．赤褐色焼土　3．黄褐色土（焼土粒を含む）　4．赤褐色土（第VI層）
5．第VI層
101.60m
礫
焼土
炭化物
0　0.5　1m

図V－36　焼土実測図(7)


F-94
a 101.30m b
層位 1．赤褐色焼土 2．茶褐色土 3．暗褐色土
F-95
c 102.50m d
層位 1．橙色焼土粒＋淡褐色土＋微少の炭化物 2．黄灰色土（第VI層，炭化物混入）
F-96
層位 1．Us-b（第IV層） 2．炭化物 3．褐色土≧②＋少量の明橙色焼土粒 4．褐色土 5．明橙色焼土 6．灰黄色土（第VI層） 7．③より炭化物が少ない 8．黄橙色焼土 9．④＋黄色土 10．⑥＋小礫
a 102.60m b
F-97
a 102.40m b
層位 1．褐色土≧暗橙色焼土粒＋炭化物 2．暗灰黄色土（第VI層）
F-98
a 101.20m b
層位 1．幌別黄橙色火山灰 2．暗褐色土 3．黒褐色土 4．赤褐色焼土 5．暗茶褐色土（焼土粒を混入） 6．＝③ 7．＝② 8．黄褐色土（第VI層）
F-99
101.60m
層位 1．暗褐色土 2．赤褐色土 3．黒褐色土 4．黄褐色土（第VI層）
F-100
a 102.90m b
層位 1．淡褐色土≧黄橙色焼土粒 2．黄橙色焼土 3．②＋炭化物 4．灰黄色土（第VI層）
F-101
101.00m
層位 1．赤褐色土 2．黒褐色土（炭化物を含む） 3．黄褐色土（第VI層）
F-102
a 100.80m b
層位 1．赤褐色土 2．幌別黄橙色火山灰 3．黄褐色土（第VI層）
F-103
100.90m
層位 1．褐色土≧灰黄色土 2．炭化物 3．赤橙色焼土（ボソボソしている） 4．明橙色焼土 5．焼土≧灰黄色土 6．灰黄色土（第VI層） 7．暗茶灰色土（第VI層）
F-104
a 100.60m b
層位 1．赤褐色土 2．黒褐色土 3．暗茶褐色土 4．褐色土
F-106
a 106.30m b
層位 1．暗赤褐色細砂 2．暗灰黄色細砂
F-107
a 106.20m b
層位 1．暗橙色焼土（粘質） 2．暗赤紫色土 3．灰黄色土（第VI層）
F-108
a 105.90m b
層位 1．暗茶褐色土 2．淡褐色土 3．明橙色焼土（粘質） 4．灰黄色土（第VI層，礫混）
F-109
a 106.50m b
層位 1．白頭山火山灰を斑点状に含む腐植土（炭化物を含む） 2．橙褐色焼土（炭化物，獣骨片を含む） 3．白頭山火山灰直下の腐植土（砂質）
F-110
a 106.50m b
層位 1．白頭山火山灰を斑点状に含む腐植土（炭化物を含む） 2．橙褐色焼土（炭化物，獣骨片を含む） 3．白頭山火山灰直下の腐植土（砂質）
F-111
層位 1．白頭山火山灰 2．黒褐色火山灰質土（炭化物を多量に含む） 3．焼土（炭化物，獣骨片を含む） 4．白頭山火山灰の腐植土
a 106.30m b
礫
焼土
炭化物
幌別黄橙色火山灰
0 0.5 1m

図V－37 焼土実測図(8)


F-121
a 106.10m b
層位　1．淡橙色焼土（やや粘質）
2．①≒③　3．暗灰黄色土（第VI層，砂質）
F-119
層位　1．橙色焼土（炭化物混入）　2．暗橙褐色土（火熱を受けている）　3．第VI層（砂質土）
F-118
F-116
c 106.20m d
e 106.20m f
F-117
層位　1．第V層下層（黒色土）
2．第V層下層　3．明橙色焼土（炭化物，獣骨片を多量に含む）
4．暗橙褐色焼土（火熱を受けている）
5．第VI層（砂質土）
a 106.20m b
層位　1．焼土（116）（炭化物を含む）　2．第V層下層　3．焼土（119）
4．第VI層（砂質土）　5．第VI層（黒色土）
F-122
105.80m
層位　1．橙赤褐色焼土
2．黄茶褐色土（第VI層，砂質土）
F-124
105.60m
層位　1．灰褐色土（焼土粒を含む）　2．赤褐色土
3．褐色土（第V層下層，砂質）
F-123
103.70m
a 103.70m b
層位　1．橙赤褐色焼土　2．幌別黄橙色火山灰質土
3．褐色砂礫質土
103.93
103.89
F-126
F-127
a 104.10m b
層位　1．橙赤褐色焼土　2．褐色砂礫層　2′．=②
3．暗黄灰褐色土　4．炭化物　5．赤褐色焼土　6．第V層
7．第VI層（黄茶粘質土）　8．第VII層（黄茶粘質土，大礫混在）
F-125
a 106.00m b
層位　1．赤黄色土
2．赤褐色土
F-128
a 106.10m b
層位　1．淡橙色焼土（火熱を受けて赤化している）
2．①≒③　3．暗灰黄色土（第VI層，砂質）
礫
焼土
炭化物
0　0.5　1m

図V－38　焼土実測図(9)

焼土の上面が白色を呈する部分も認められた。持ち帰った焼土を選別し計量したところ，F－41 (B) では重量比で焼土中の 15.2%，同 (c) では 13%，F－47 では 12.9%の焼骨が含まれていた。選別済の F－41，47，111 の骨片については，早稲田大学金子浩昌先生に一通りみていただいた。細かく砕けた破片ばかりで（図版Ⅴ－20－2・3），動物の種や部位を同定することは困難であったが，焼骨の多くがやや厚みのある管状骨の破片であることから，エゾシカなどの陸獣骨を主体とすることが推測された。選別作業の段階からかなり注意深く探したが，魚類に属する骨片の検出は，全くなかった。

また，多くの焼土中には炭化物が含まれており，種子などの存在が予想された。そこで，可能な限り焼土サンプルを採取し，第Ⅲ章に説明した水洗選別法によって，炭化種子の抽出に努めた。第一次選別を終了した試料については，北海道古植物研究会に種子の同定を委託した。その結果については，第Ⅵ章を参照されたい。

土器や石器，石片などの遺物は，28ヵ所の焼土から検出されている。その代表例について，以下に説明する。

図Ⅴ－40－1は，F－41 に混入のⅢ群土器の破片で，摩耗のため不明瞭だが，地文は結束第一種のある単節の斜行縄文である。2も F－11 に混入のⅢ群土器で，横走縄文が施されている。

図Ⅴ－40－3～12は，Ⅳ群 c 類に属する土器である。3・4は，F－10 に見出された突瘤文をもつもの。5・6は，F－41 に伴出した土器で，5は口唇上にも縄文が施され，6の沈線文間には，突瘤文が配されている。7は石組炉に混入した口縁片で，損耗が進んでいる。8～10は，F－26 に伴出した土器片で，撚りの異なる原体を利用した羽状縄文のほか，沈線文や，貼瘤がみられる。11は F－1出土の破片で，現存部には 4 本の平行沈線文が認められる。12は，F－47 に混入の口頸部片で，無文帯の下に，細めの平行沈線文が加えらている。

焼土に伴出したⅤ群 c－1類土器には，図Ⅴ－39－1～6のように，復元が可能な個体がみられた。4・5は，F－45 および隣接の石組炉に見出された土器で，共伴したものと判断される。4はやや小型の広口壺で，短くくびれた頸部には，平行沈線文と列点文とがみられる。5は胴部が丸くふくらむ鉢形土器で，頸部には 2 本の沈線文がめぐり，口縁内側にも沈線が 1 条施文されている。地文はともに，単節 RL 縄文で，頸部文様帯の下を縦走している。

2は，F－15 出土の鉢形土器で，肩部に張り出しがみられる。口縁直下に 1 条，頸部無文帯を挟んだ肩部に 3 条の平行沈線文がめぐり，それぞれ B 状突起が貼付されている。

1は，F－124 付近検出の破片から想定復元した，やや大形の深鉢形土器の上半部で，肩部が張り出し，口縁には突起の一部が残されている。口縁直下から肩部まで，8段の幅広の沈線文が重ねられ，肩部の上位にはA状突起が，中位には縦に鋭い刻みを加えた B 状突起が配されている。

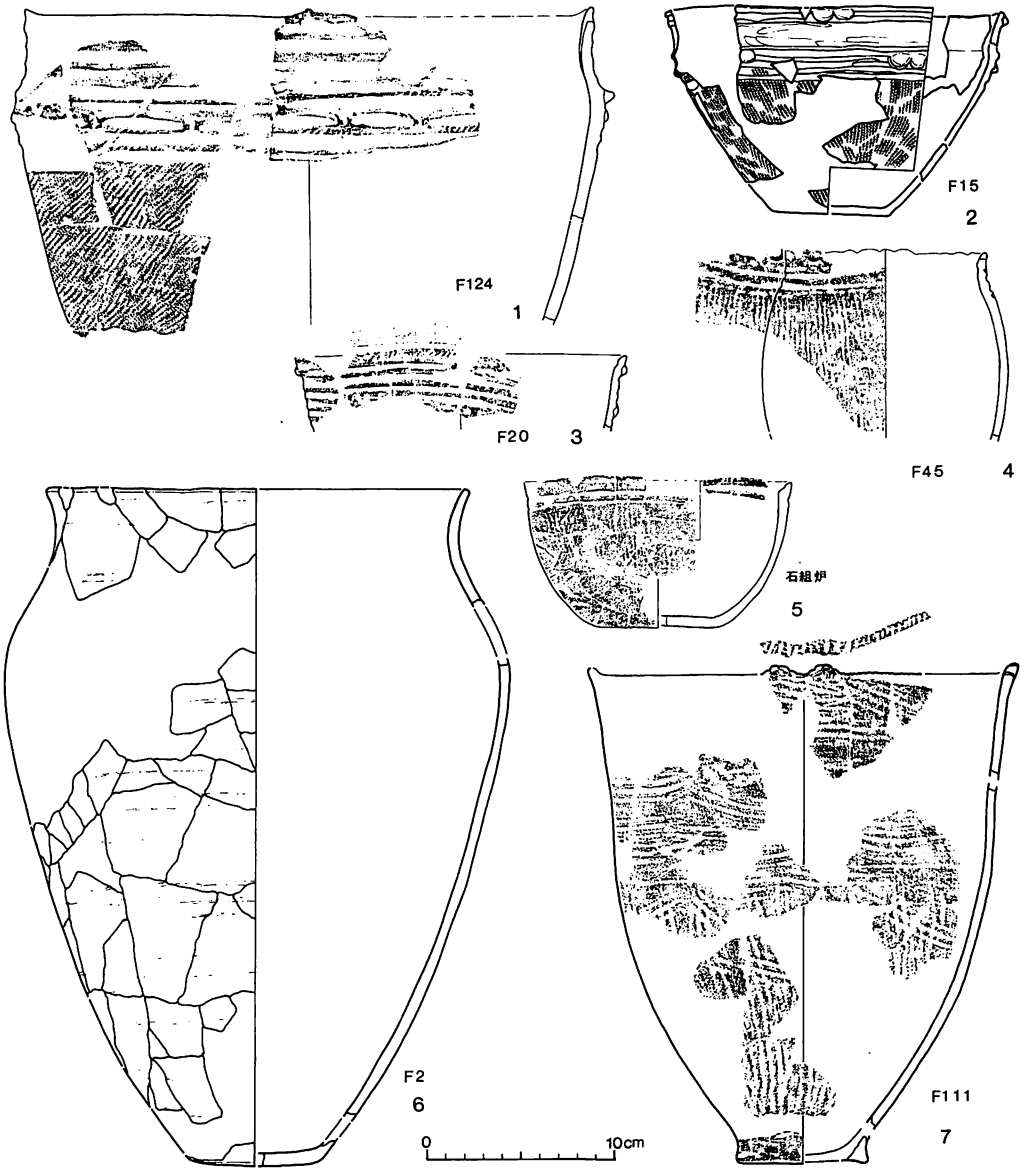
図Ⅴ－39－3および図Ⅴ－40－14・15は，F－20 に伴出した同一個体の土器で，口頸部には殆ど屈曲がみられない。地文に重ねて，口縁部に 7 条，頸部下半に 3 条の平行沈線文が施され，口縁内側にも沈線が 1 条みられる。口縁部文様帯には，上下に B 状突起が配されている。図Ⅴ－

40－13は，同じくF－20に見出された口縁片で，口唇には指頭幅のほぼ垂直の押圧が加えられ，地文の斜行縄文は，無節の原体によっている。13は，V群c－2類に含まれよう。

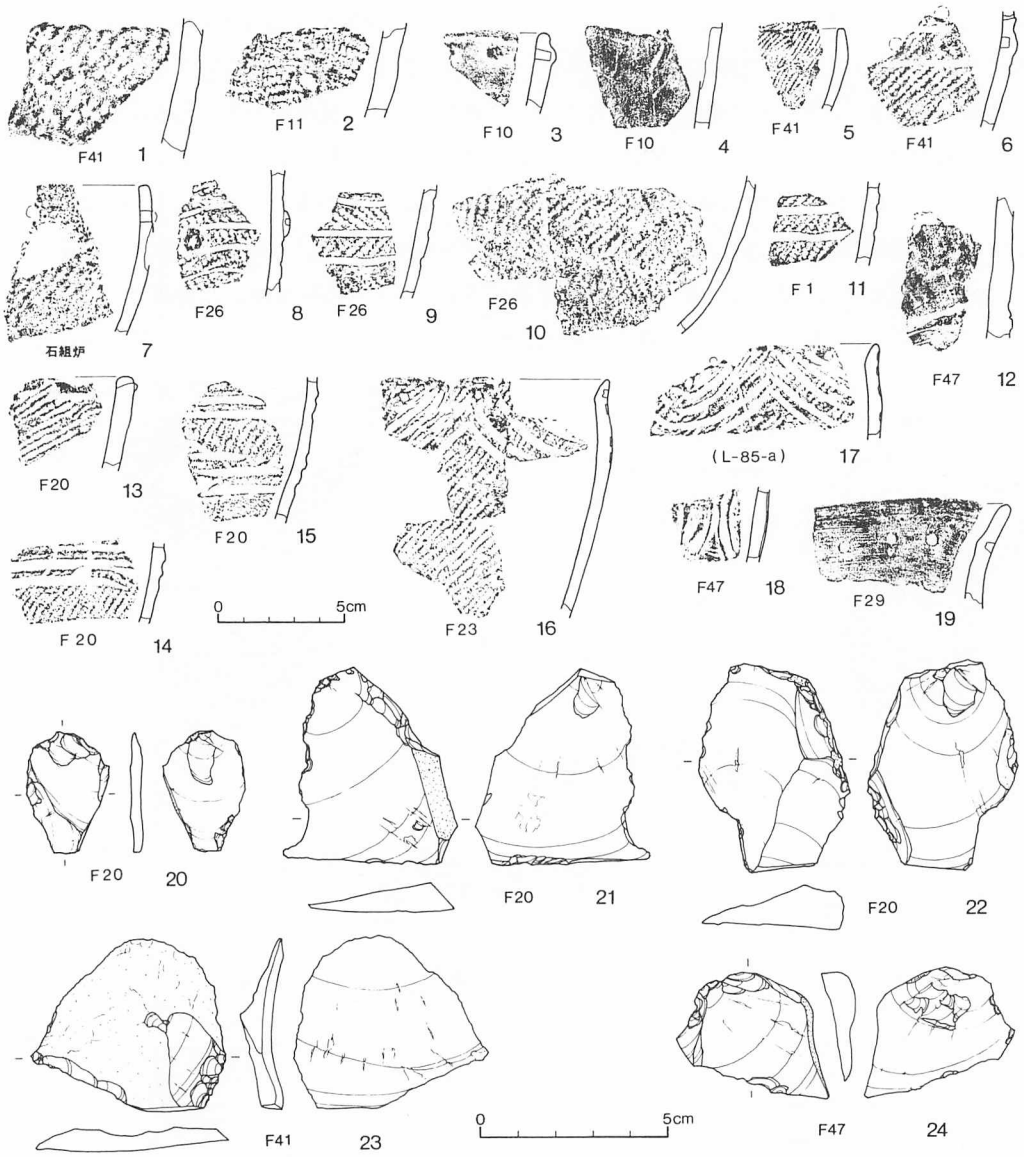
図V－39－6は，F－2に伴出したやや大型の深鉢形土器で，肩部が大きく張り出し，底部はやや丸底的につくられている。文様はなく，器面には，横位の調整痕がみられる。

図V－40－16は，F－23に見出されたV群c－2類土器。肩部が幾分ふくらんで，口縁が小さく外反する深鉢形を呈する。地文に重ねて，小さめの円形刺突文と，幅広の沈線による連弧文とが展開されている。17は，16と同一個体と指定されるが，約50m離れた地点の出土品。

図V－39－7は，F－111伴出のVI群c類土器で，上げ底状につくられた底の一部が現存して



図V－39　焼土出土遺物(1)



図Ⅴ－40　焼土出土遺物(2)

いる。体上半では横走し，下半では縦走し，中間部では山形状に施された。O段多条の単節RL原体による縄文がみられる。図Ⅴ－40－18は，F－47検出の微隆起線文があるⅥ群c類片。

図Ⅴ－40－19は，F－29に見出された，Ⅶ群a類土器の口縁片。口縁がゆるやかに外反し，口唇部は丸い。器面には横位の調整痕と，現存3個の円形刺突文がみられる。(高橋　和樹)

図Ⅴ－40－20～22は，F－20出土のUフレイク。20は剥片の一側辺に使用痕がみられる。21はノッチ状の使用痕が一側辺にみられる。22は剥片の一側辺を使用している。23はF－41出土のスクレイパー。剥片の下辺以外は片面に細かい剥離がみられる。F－47出土の24は，剥片の下辺に使用痕がみられるUフレイク。(谷島　由貴)

表V－3　稀府川遺跡焼土一覧（1）

焼土番号	位置	層位	規模 長径×短径cm	規模 最大厚cm	構造	出土遺物・水洗選別による検出物 炭化材	土器	石器・石片	焼骨片	炭化種子	挿図・備考
F-1	J-89-b	Ⅵ上	60 × 54	3			Ⅳc:3			アブラナ科，不明種	図V－40－11
2	K-90-c	Ⅴ下	47 × 40	19			Ⅴc-1:51			アブラナ科，不明種	図V－30，V－39－6
3	N-91-d	Ⅵ中	63 × 42	6						アブラナ科	図V－30
4	M-90-c，N-90-d	Ⅴ下	220 ×180	26	掘り込みあり					アブラナ科	図V－30
5	L-90-b	Ⅵ上	150 × 58	22							図V－30
6	N-90-c・d	Ⅴ上	(130)×(68)	(12)						アブラナ科	図V－30
7	L-89-d	Ⅵ上	54 × 54	6						アブラナ科	
8	K-89-c	Ⅵ中	17 × 16	3							
9	M-89-c	Ⅵ上	53 × 36	2						アブラナ科	図V－30
10	K-89-c	Ⅵ上	74 × 49	7			Ⅳc:3，Ⅶa:2			アブラナ科	図V－31，V－40－3・4
11	N-87-c	Ⅵ上	95 × 45	17			Ⅲ:1	フレイク:2		アブラナ科	図V－31，V－40－2
12	N-84-c，O-84-d	Ⅵ上	266 × 50	5							図V－31
		〃	31 × 28		小ピットあり						
		〃	38 × 34								
13	N-84-b	Ⅵ上	191 × 60	15	小ピットあり		Ⅳc:8			アブラナ科	図V－31
14	N-84-b	Ⅴ上	116 × 43	9	小ピットあり		Ⅳc:10			アブラナ科，不明種	図V－31
15	N-87-d	Ⅴ下	31 × 23	10			Ⅳc:1，Ⅴc-1:47				図V－31，V－39－2
16	N-87-d	Ⅵ中	28 × 25	2							
17	O-85-a	Ⅵ上	36 × 32	20	石が囲む					アブラナ科	図V－31
18	N-83-b	Tm直下	193 × 57	4		焼土直上に炭化材				アブラナ科	図V－32
19	O-83-a・d	Ⅵ中	56 × 24	2						アブラナ科	
		〃	29 × 4	1							
20	O-82-a～d	Tm直下	285 × 80	35			Ⅳc:35，Ⅴc-1:32 Ⅶa:1			アブラナ科	図V-32，V-39-3，V-40-13～15，20～22
21	P-83-a	Tm直下	68 × 44	7	浅い掘り込みあり			U.R.:2，フレイク:9		アブラナ科	図V－32
22	O-82-c	Ⅵ上	58 × 31	3		直上に炭化材				アブラナ科	

表Ⅴ－4　稀府川遺跡焼土一覧（2）

焼土番号	位置	層位	規模 長径×短径cm	規模 最大厚cm	構造	出土遺物・水洗選別による検出物 炭化材	土器	石器・石片	焼骨片	炭化種子	挿図・備考
F-23	P-83-a・b	Ⅴ 下	(160)×(74)				Ⅳc:2, Ⅴc-2:23			アブラナ科，不明種	図Ⅴ－40－16・17
24	N-83-c	Ⅵ 上	54 × 39	5		直上に炭化材				アブラナ科	
		〃	50 × 20	5							
		〃	18 × 15	5							
25	N-83-b	Ⅴ 下	97 × 64	3							
26	O-82-a	Ⅵ 上	71 × 52	20			Ⅳc:30	フレイク：3			図Ⅴ－32, Ⅴ－40－8～10
27	P-82-d	〃	14 × 11								
28	M-89-b	Ⅵ 上	50 × 50	3						アブラナ科，カヤツリグサ科	
29	M-89-b	Ⅵ 上	109 × 80	28			Ⅶa:1			アブラナ科	図Ⅴ－32 Ⅴ－40－8～10
30	O-82-d	Ⅵ 上	30 × 12	2		直上に炭化材				アブラナ科	
31	L-88-d	Ⅵ 上	30 × 17	5						アブラナ科	図Ⅴ－32
32	K-85-c, L-85-d	Ⅵ 上	52 × 49	8							
		〃	165 × 70	8				フレイク：1		アカザ科	図Ⅴ－32
		〃	138 × 70	8							
33	J-87-c	Ⅵ 中	77 × 28	3						アブラナ科	図Ⅴ－33
34	J-87-c, K-87-d	Ⅵ 中	64 × 34	5							
		〃	32 × 16	5							
35	O-82-c	Ⅵ 上	(40)× 65	9			Ⅳ:1			アブラナ科，不明種	図Ⅴ－33
36	L-87-c, L-88-b	Ⅵ 上	80 × 43	7			不明:5			アブラナ科，アカザ科	図Ⅴ－33
37	K-88-b	Ⅵ 上	(53)× 41	8						アブラナ科	図Ⅴ－33
38	K-87-c・d	Tm直下	89 × 52	5						アブラナ科，ヤマブドウ種子	図Ⅴ－33
39	L-87-d, L-88-a	Ⅵ 上	128 × 50	9	西側にフレイク・チップの集中地あり					アブラナ科，不明種	図Ⅴ－33
40	L-85-c・d	Ⅵ 上	61 × 40	6	小ピットあり		Ⅳc:3	フレイク：2		アブラナ科，タデ科	図Ⅴ－34
		〃	(B) 10 × 8	6							
41	L-85-b・c	Ⅵ 上	(A) 115 × 70	7					獣骨の含有多い	アカザ科，アブラナ科	図Ⅴ－34

表V－5　稀府川遺跡焼土一覧（3）

焼土番号	位置	層位	規模 長径×短径cm	規模 最大厚cm	構造	出土遺物・水洗選別による検出物 炭化材	土器	石器・石片	焼骨片	炭化種子	挿図・備考
F-41	L-85-b・c	Ⅵ 上	(B) 312 ×212	8	小ピットあり		Ⅲ:1, Ⅳc:42, Ⅶa:2	U.R.:1, フレイク:23	獣骨15.2%	カヤツリグサ科, タデ科	図V－34
		〃	(C) 102 × 48	6					獣骨13%		V-40-1・5・6・23
42	N-83-a	Ⅵ 上	34 × 30	7						アブラナ科, マメ科	図V－33
43	N-83-a	Tm直下	73 ×(20)	15	掘り込みあり(？)					ヤマブドウ種子, タデ科	図V－33
44	M-84-b	Ⅵ 上	61 × 44	5						アカザ科, カヤツリグサ科	図V－33
45	M-84-a	Tm直下	90 × 55	11	石組炉に隣接		Vc-1:18			タデ科, アカザ科, 不明種	図V－33 V－39－4
		〃	(石組炉) 54 × 36	5	石組炉		Ⅳc:3, Vc-1:84			アブラナ科	図V－33 V－39－5
46	M-88-b	Ⅴ 下	(58)× 20	3							
47	M-85-b	Tm直下	140 × 73	10			Ⅲ:1, Ⅳc:2, Ⅳc:1	U.R.:1, フレイク:3	獣骨12.9%	ヤマブドウ種子, アブラナ科	図V－33 V－40－12・18・24
48	P-61-b	Ⅵ 中	97 × 36	7							図V－33
49	P-61-a	Ⅵ 中	60 × 50	3							図V－33
50	N-62-c	Ⅵ 上	90 × 50	2		直上に炭化材	不明：1			アブラナ科	
51	O-63-a	Ⅵ 中	91 × 26	3							
52	N-65-d	Ⅵ 中	40 × 30	12							
		〃	30 × 21	12							図V－35
		〃	28 × 20	12							
53	N-64-c	Ⅵ 中	28 × 22	2							図V－35
54	N-65-b	Ⅵ 中	67 × 26	3							
55	N-65-b	Ⅵ 中	44 × 25	3							
56	N-65-b	Ⅵ 中	(62)×(48)	(3)							
57	P-76-d	Ⅵ 上	(40)× 50	10	掘り込みあり(？)						旧F－92
58	M-85-b	Ⅵ 中	28 × 28	7						アブラナ科	図V－35
59	M-83-b	Ⅵ 中	36 × 35	9						アブラナ科	図V－35
60	Q-82-a	Ⅴ 上	15 × 15	4							図V－35
61	P-82-b	Ⅴ 上	74 × 45	4							図V－35

表Ⅴ－6　稀府川遺跡焼土一覧（4）

焼土番号	位置	層位	規模		構造	出土遺物・水洗選別による検出物					挿図・備考
			長径×短径cm	最大厚cm		炭化材	土器	石器・石片	焼骨片	炭化種子	
F-62	M-83-b・c	Ⅵ 中	110 × 50	24						アブラナ科	図Ⅴ－35
63	O-81-c	Ⅴ 上	42 × 25	4							図Ⅴ－35
64	O-81-c,P-81-d	Ⅴ 下	86 × 42	10	石が囲む					アブラナ科	図Ⅴ－35
65	Q-81-c,Q-82-b	Ⅵ 上	38 × 28	5							図Ⅴ－35
66	Q-82-a	Ⅵ 上	62 × 60	8							図Ⅴ－35
67	N-77-d	Ⅵ 中	64 × 34	3							図Ⅴ－35
68	N-77-d	Ⅵ 上	98 × 40	11							図Ⅴ－35
69	N-77-a	Ⅵ 上	(40)× 61	6						アカザ科，不明種	図Ⅴ－35
70	M-77-c	Ⅵ 上	22 × 19	2							図Ⅴ－35
71	N-77-a・d	Ⅵ 中	16 × 16	3							
72	M-77-b,N-77-a	Ⅵ 上	(26)× 50	3							図Ⅴ－35
73	N-76-c	Ⅵ 中	20 × 14	2							図Ⅴ－36
74	N-76-c	Ⅵ 中	46 × 18	6							図Ⅴ－36
75	N-76-c	Ⅵ 中	21 × 10	3							図Ⅴ－36
76	L-77-b・c M-77-a・d	Ⅵ 上	(32)× 53	16							図Ⅴ－36
77	M-76-d,M-77-a	Ⅵ 上	41 × 35	3							
78	N-76-c	Ⅵ 上	30 × 21	5							
79	N-76-c	Ⅵ 上	61 × 50	9							図Ⅴ－36
80	N-76-a～c	Ⅵ 上	153 × 45	12							図Ⅴ－36
81	N-76-a	Ⅵ 上	(32)× 42	5							図Ⅴ－36
82	M-76-c	Ⅵ 上	25 × 14	2							図Ⅴ－36
83	M-76-c	Ⅵ 上	15 × 9	2							図Ⅴ－36
84	M-76-c	Ⅵ 上	12 × 12	4							図Ⅴ－36
85	M-76-c	Ⅵ 上	10 × 10	6							図Ⅴ－36
86	N-77-b・c	Ⅵ 上	30 × 23	6							図Ⅴ－36

表V－7　稀府川遺跡焼土一覧（5）

焼土番号	位置	層位	規模 長径×短径cm	規模 最大厚cm	構造	出土遺物・水洗選別による検出物 炭化材	土器	石器・石片	焼骨片	炭化種子	挿図・備考
F-87	N-77-b・c	Ⅵ 上	25 × 23	2							図V－36
88	M-76-c	Ⅵ 上	24 × 23	4							図V－36
89	O-78-b	Ⅵ 上	71 × 28	10							図V－36
90	O-77-c	Ⅵ 上	50 × 30	8			不明：2				図V－36
91	M-77-a	Ⅵ 上	28 × 18	6							図V－36
92	M-76-d	Ⅵ 上	50 ×(30)	7							図V－36
93	P-76-a	Ⅵ 上	92 × 90	3	掘り込みあり					アブラナ科，イネ科	図V－36
94	P-76-a	Ⅵ 上	60 × 30	12							図V－37
95	N-75-d	Ⅵ 中	98 × 56	8							図V－37
96	N-75-d,N-76-a	Ⅵ 中	(40)× 32	6							図V－37
97	N-75-c・d	Ⅵ 中	36 × 34	4							図V－37
98	O-75-b	Ⅵ 上	72 × 40	3							図V－37
99	O-75-d	Ⅵ 上	16 × 16	6							図V－37
		〃	22 × 20	6							
100	M-75-d	Ⅵ 中	42 × 40	9	掘り込みあり						図V－37
101	P-74-d	Ⅵ 上	71 × 24	7							図V－37
		〃	21 × 13	7							
102	P-74-a	Ⅵ 中	36 × 32	9							図V－37
103	O-74-b	Ⅵ 中	(70)×(40)	6							図V－37
104	O-74-b	Ⅵ 中	32 × 29	9							
105	K-85-b	Ⅴ 下	64 × 40	6							図V－37
106	K-84-d	Ⅵ 中	62 × 26	4							図V－37
107	K-84-a	Ⅵ 中	27 × 23	2							図V－37
108	K-83-c・d	Ⅵ 中	46 × 20	2							図V－37
109	L-84-d,L-85-a	Tm直下	66 × 66	7					獣骨少量含む		図V－37

表Ⅴ－8　稀府川遺跡焼土一覧（6）

焼土番号	位置	層位	規模 長径×短径cm	規模 最大厚cm	構造	出土遺物・水洗選別による検出物 炭化材	土器	石器・石片	焼骨材	炭化種子	挿図・備考
F-109	L-84-d,L-85-a	Tm直下	52 × 47	4							図Ⅴ－37
110	L-84-d	Tm直下	117 × 68	8			Ⅵc：2		獣骨少量含む		図Ⅴ－37
111	L-84-d	Tm直下	106 × 44	12			Ⅵc：28		獣骨 0.2g	アブラナ科	図Ⅴ－37，Ⅴ－39－7
112	L-84-d	Ⅵ 上	54 × 43								
113	L-84-b	Tm直上	56 × 30								
114	L-83-c	Ⅴ 上	49 × 38								
115	L-84-b	Ⅵ 上	64 × 42	－							
116	L-84-d	Ⅴ 下	54 × 42	8							図Ⅴ－38
117	L-84-c・d	Ⅵ 上	102 × 49	8			Ⅳc：3		獣骨多量に含む		図Ⅴ－38
118	L-84-d	Ⅵ 上	66 × 50	8			Ⅳc：4				図Ⅴ－38
119	L-84-d	Ⅵ 上	132 × 75	9			Ⅳc：5				図Ⅴ－38
120	L-84-c		17 × 14								
121	L-84-b	Ⅵ 中	45 × 36	8							図Ⅴ－38
122	K-83-d	Ⅵ 中	148 × 95	15							図Ⅴ－38
123	M-82-b,N-82-a	Ⅴ 下	124 × 70	7							図Ⅴ－38
124	L-83-d,L-84-a	Ⅴ 下	148 ×(91)	14			Ⅴc-1：9				図Ⅴ－38，Ⅴ－39－1
125	M-85-d	Ⅵ 中	32 × 25	17							図Ⅴ－38
126	N-82-a	Ⅴ 下	(98)× 84	10							図Ⅴ－38
127	N-82-a・d	Ⅵ 上	54 × 50	5			Ⅴc-1：2				図Ⅴ－38
128	L-84-a	Ⅵ 中	58 ×(44)	11							図Ⅴ－38

3　包含層出土の遺物

(1)　土器（図V－41～56）

土器は全体の95%を占めている。I群からVII群までがほぼ切れ目なく出土しており，分布は時期によって異なっている。分布についてはV章－2に記述する。分類別の出土頻度はI群0.41%，II群0.05%，III群6.93%，IV群58.93%，V群26.39%，VI群2.5%，VII群3.66%である。

I群（図V－41－1～9）　94点のうち，a類は36点，b類は58点である。

a類（1～5）　貝殻腹縁圧痕文，押引文，沈線文などが施された波状口縁の尖底土器（1・2・4），平縁で平底をなすと思われる条痕文土器(3)，無文土器(5)がある。胎土に含まれる鉱物の粒径は3→1・2・4→5と細粒砂から粗粒砂大へと大きくなる傾向がある。

1は胴上半が「く」の字に大きくくびれる。文様は口縁下およびくびれ部に貝殻腹縁圧痕文（以下，本類に限り「圧痕文」という）が1条ずつ横環し，その間および胴部には圧痕文と沈線，円形刺突文が組み合わされている。2は口縁に縦位の圧痕文がめぐり，下部には貝殻押引文が施されている。1・2の口縁内面には圧痕文がめぐる。3は口縁部が若干内湾し，条痕は内外面に認められる。5は体部に縦方向の削り，内面に植物によるとみられる条痕が認められる。

b類（6～9）　すべて東釧路III式に相当する。胎土に中粒砂大の石英を非常に多く含む点がa類とは異なる特徴で，9の胎土には海綿骨針をわずかに含んでいる。

これらには撚りがゆるく，太いRの撚糸圧痕文（6－a・b・c），短縄文と絡条体圧痕文(7)，縄端圧痕文(8)，短縄文と撚糸圧痕文(9)が施され，9の底部は大きく張り出す。

II群（図V－41－10）　無節の羽状縄文が施された1個体分の胴部破片12点だけである。胎土には繊維を含まず，焼成も良く，内面は丁寧に研磨されている。

III群（図V－41・42－11～40）　1,554点出土し，大安在B式（38・39）およびこれに供伴するとみられる在地系の土器群（11～37），後続するノダップII式に相当するもの（40）に分けられ，90%以上は在地系の土器群が占めている。

38－a・bは口縁に山形の小突起があり，口縁部はわずかに外反する。LRの斜行縄文を地文とし，貼付帯間および突起下には沈線，貼付帯上には棒状工具による刺突文が施されている。39は口縁部にRLの縄線文が3条，口唇上に刺突文がめぐる。39には海綿骨針が含まれている。

在地系の土器群の器形には口縁部の外反が強く，胴部も大きく膨らむもの（23・25～27・29・30・34・36）と11・12のように円筒形に近似するものがある。

11・12および口縁部破片（16～30）は沈線（11・16），刺突文（17～19），貼付帯（20.21），縄線文（22），撚糸文（23），縄文だけ（24～30）が施されたものに細分できる。沈線には半截竹管状工具（16），刺突文には棒状工具（17・19）や竹管状工具（12・18・24）が用いられている。貼付帯上には棒状工具による刺突文（12・20），縄の圧痕（21）が施されている。24～30には口唇上に刺突文（24），縄の回転圧痕（25～27）が施されたものもある。地文は大半がLRの

斜行縄文で，他にRLの斜行縄文（16・20・29），LRを横走ぎみに施したもの（27），Lの撚糸文（23）がある。

11は粗雑な作りで，表面がかなり剝落している。胴上半部には2条1組と思われるラフな沈線が施されている。19の刺突文は非常に浅い。12は突起下と思われる部分に2条の貼付帯が垂下し，胴部のくびれ部には2条の貼付帯がめぐる。縦の貼付帯間には3条の刺突文が胴部貼付帯まで施されている。21－a・bの貼付帯上には地文と同じLRの原体を押圧している。23は口唇上にも撚糸文が付され，突起下に貼付帯が垂下する痕跡が認められる。

32～36には貼付帯と沈線，刺突文が組み合わされたもの（31）や指で押さえたボタン状の貼付文（32），貼付帯（33），刺突文（34・35），沈線（36－a・b）が施されたものがある。地文にはLR（35・36），RL（32）の斜行縄文のほか，結束羽状縄文（31），LRの結節斜行縄文（33），太さが異なる2本のLR原体を多方向に転がしたもの（34）がある。

13～15，37の底部の張り出しは顕著ではない。37の地文はLRの結束第2種である。

40は結束羽状縄文を地文とし，断面三角形の貼付帯上には地文と同じ縄を押圧している。

Ⅳ群(図Ⅴ－42～48－41～144)　12,592点のうち，a類は205点，b類は864点，c類は11,523点である。c類は最も多く出土しており，土器総数の54%に達している。

a類（41～43）　余市式（42）および手稲砂山式（41・43）に相当するものがある。

42は無文で，口縁部に折り返しによる隆起帯がめぐる。内面は比較的丁寧に磨かれている。

41・43－a・bは沈線文が描かれたもので，41は渦巻文，平行沈線，短刻線を組み合わせて文様を構成している。地文は41がLRの横走ぎみの斜行縄文，43－a・bは前段のRの撚りが強く，Lの撚りがゆるいLRで，胴上半部には横位に，下半部には斜位に施されている。胎土にはともに植物繊維を含んでいる。内面の調整は41が比較的丁寧であるのに対し，43は粗雑である。

b類（44～52）　手稲式（44・46～49・51・52），ホッケマ式（45・50）に相当するものがある。

44・46～49・51・52は磨消帯および内面が丁寧に磨かれるのが特徴である。44は波状口縁，47～49－a・bは平縁である。48には小突起が付く可能性がある。44・48は平行沈線を短刻線で区切る典型的な手稲式の文様構成である。46・47は胎土，焼成，色調が近似しており，同一個体の可能性がある。地文は48を除きLRの斜行縄文である。

45は小突起が付され，口縁に刻み列がめぐる。胴上半部に磨消帯があり，刻み列と磨消帯の間にはLRの斜行縄文が施されている。50は口縁に羽状縄文が施され，磨消帯とは沈線で区切られている。磨消帯および内面の磨きは若干雑である。

c類（53～149）　堂林式，三ッ谷式に相当するものに細分される。

堂林式に相当するもの　深鉢，鉢が大半で，わずかに浅鉢があるほかは，壺，注口はない。

深鉢・鉢（53～56・62・64・75～84・93・94・121～123－a・b・c・147・148）　口唇の断面が切り出し形で，口縁下に突瘤文をめぐらせるのを特徴とし，器形は54のように口縁部が外反

し，胴上部が膨らむかまたは55のように胴部の膨みがなく，口縁部がわずかに内湾する。

口縁の形態には平縁（54～56・66・78・93・94），ゆるやかな波状口縁（53・75～77 a・b・79 a・b～81），小波状口縁（82）がある。平縁に小突起が付されるものもある（54・55・78・93・94）。

文様構成は，a)．平行沈線の間に鋸歯文が連続して描かれる（64・121），b)．平行沈線や連続する短い弧線文などの曲線を組み合わせる（75～79－a・b・122），c)．平行沈線のみ（53～55・80～84・123－a・b・c），d)．縄文のみ（56・62・93・94）の4種に大別される。

a）～c）の文様帯は大半が口縁から胴上半にあるが，口縁部に限られるもの（55・83・84）もある。前者にはさらに，磨消帯をもつもの（75・77・78－a・b・53・54・80～82）ともたないもの（64・121・76・55・83・84）がある。磨消帯をもつものは胴部が膨らむ器形に多い。a）にはボタン状の貼瘤文が付されたものもある。（77～79）。

地文には，LRの斜行縄文（121・75・77～79－a・b・53・80－a・b・81・83・84），RLの斜行縄文（64・54・56・62），羽状縄文（76・55・82・123－a・b・c・93・94）がある。羽状縄文にはいずれも撚りの異なる原体が用いられている。

浅鉢（111～114・134～136）　LRの斜行縄文のみで，突瘤文が付されないものもある（111）。

三ッ谷式に相当するもの　器種は堂林式に比べ浅鉢，壺，注口の出現率が若干高くなる。

深鉢・鉢（57～61・85～92・149）　堂林式にみられた前者の器形はなく，全て後者の器形で，口縁部が大きく内湾するもの（61）もある。口唇の断面は切り出し形が少なくなり（91），角形や丸みを帯びるものが顕著に認められる。突瘤文は大半にめぐらされている。

口縁の形態には平縁（59・60・85～92），ゆるやかな波状口縁（57・58），小波状口縁（61）がある。平縁には小突起が付されるものもある（91・92）。

文様構成は，a)．平行沈線や弧線文などの曲線を組合せる（58・85～88・132），b)．平行沈線のみ（57・59・89・90），c)．爪形文（91），d)．刺突文（92），e)．縄文のみ（60・61）の5種がある。堂林式と異なる点は，沈線や曲線が非常に細くなり，三叉文風の文様を構成するもの（87）や沈線に貼瘤文，爪形文，刺突列が組合わされたもの（85～87）が顕著にみられる。

地文には，LRの斜行縄文（58・86～88・132・57・92），RLの斜行縄文（59・91・60・61），羽状縄文（89・90）がある。

浅鉢（115～118・137－a・b）　深鉢と同様，細い沈線，貼瘤文，刺突列が組み合わされたもの（115～117・137－a・b）と縄文だけのもの（118）がある。地文は前者がLRの斜行縄文，後者が羽状縄文である。116の口唇には2個1組の刺突文が施されている。

壺・注口（119－a・b・c・138～146）　119－a・b・cは注口で，棒状工具による押し引き文様の刺突文が施されている。138～146は磨消帯と細い線書きによる文様を主体に，ボタン状の貼瘤文，刺突列，磨消文を組合わせて文様帯を構成し，三叉文風の文様が描かれたものもある（140・142）。地文はLRの斜行縄文（119－a・140～144），RLの斜行縄文（145・146）である。

149は爪形文が2条めぐる底部破片で，地文はLRと思われる。

95～110は縄文地（95～107）または無文地（108・109）に突瘤文が施された深鉢の口縁部破片である。口唇の断面形は切り出し形に近いもの（95～101・109・110）と角形（102～108）である。口縁は平縁（96～105－a・b・109・110），小波状口縁（100・106・107）で，平縁には3個1組の山形突起が付されたものもある（99）。101は突瘤文が爪形文様につぶされている。地文はLRの斜行縄文（96～99・101～107），RLの斜行縄文（95・100）である。

65～71・147・148はLR（65・67～70・147・148），RL（66・71）の斜行縄文が施された深鉢の胴部および底部破片である。

63・72は壺と思われる無文土器で，器壁は薄く，内外面の調整は丁寧である。63は頸部のすぼまりが比較的大きく，なで肩である。

73・74は深鉢の底部に外からの焼成前穿孔がめぐる特殊なものである。73は割れ口を擦って再整形している。内外面にはともに炭化物や他の物質が付着した痕跡は認められない。同様の焼成前穿孔は図Ⅴ－15－5の胴下半部にも認められる。

120は壺または特殊な器形と考えたが，波状口縁をなす鉢形土器の可能性もある。口縁は丸みをもち，下部に細く鋭利な平行沈線がめぐる。口唇は折り返され，切り出し形を呈する。

Ⅴ群（図Ⅴ－48～52－150～231）　5,377点のうち，c－1類は5,045点，c－2類は519点である。c－1類はⅣ群c類についで多く，土器総数の23.9％を占める。

c－1類（150～221）　新道4遺跡Ⅴ群土器の2～4群（150～159・161～195・198～221），5・6群（160・196・197）に相当するものがある（北埋文　1988）。前者には桃内式に代表される条痕文が施されたものが含まれる（151・155・167・168・172・177・178・199・206・208・215・218・219）（名取ほか　1964）。

前者には深鉢・鉢，浅鉢，壺があり，深鉢，鉢が大半を占める。

深鉢（150～159・177～186・206～211）　器高が10 cm前後の小型（150～154）と15 cm以上のものがある。これらは，a）．文様帯が狭く，1～3条の平行沈線をめぐらせる（150～158・177～180・182・183），b）．文様帯がa）に比べ広い（184・185），c）．無文帯のみ（159・181・186）に分けられる。a）・b）はさらに，沈線が無文帯上に引かれるものと縄文地に引かれるものに細分できる。内訳は前者がa）11例（150・151・153～156・177～180・182），b）2例（184・185），後者がa）4例（152・157・158・183）である。154は沈線間に非常に細かい刺突文がめぐる。

口縁には山形の小突起や刻みが施されるものがある。前者はa）に5例（151・153・156・157・177），c）に1例（186），後者はa）に3例（154・155・157），b）に1例（184）みられる。突起は2個（151）または3個（153）を1組とするものもある。また，内面に沈線がめぐるものがa）に6例（156・157・178・179・182・183），b）に2例（184・185），c）に1例（186）ある。

条痕（151・155・177・178・206・208），縦走縄文（150・152・156～158・179・183・209～211），斜行縄文（159・186）を地文とするものと無文のもの（153・154）がある。条痕および縦走縄

文が施されるものは206･208～211の胴部破片を除き，すべてa)に属する。条痕は棒状工具で沈線様に施されるもの（151），幅広で浅く施文されたもの（155・177・206），鋭利な工具で細くはっきりと施文されたもの（178・208）がある。縦走縄文には縞縄文様に施文されるものもある（158・179・181・183）。186はRLの斜行縄文を施文後に幅の広い無文帯が形成されている。

鉢（161～164･187～193･212～216）　深鉢同様，3つに細分される。内訳はa)．10例（161･162・164・187～193），b)．2例（163・194），c)．1例（195）である。a)・b)の器形は文様帯下部がくの字に張り出す（163・187・194・212～214），文様帯が内傾する（161・162），口縁が外反し，文様帯下部が丸みをもつ（188・191・193），張り出しや丸みをもたない（164）などバラエティに富む。163は台付の可能性がある。a)・b)の沈線は164を除き，無文帯上に引かれている。口縁に刻みがめぐるものは2例（188・191）あり，a)に属す。211は191と同一個体で，底面に刺突文がめぐる。内面に沈線がめぐるものはa)に1例（187），b)に2例（163･194）ある。198は鉢または浅鉢のb)タイプに付される可能性がある。

地文は212･215が条痕，163がRLの斜行縄文のほかは，RLの縦走縄文である。190は縞縄文様に斜位に施文されている。192は無文である。

浅鉢（199～202）　文様構成は深鉢や鉢と同様で，幅の狭い無文帯上に沈線がめぐらされたもの（199～201）と無文のもの（202）がある。地文は199が条痕，200･201がRLの縦走縄文である。

壺（165～168・203～205・217～219）　165は短頸の広口壺で，166は口縁がわずかに肥厚した長頸の壺と思われる。他は頸部のくびれがゆるやかで，なで肩の器形である。地文は167･168･218・219が条痕，165が縞縄文様に施文したRLの縦走縄文である。

169・170～176・220は胴部下半および底部破片である。底部は171が丸みを帯び，172～175が平底，176が上げ底である。地文は条痕（172），RLの縦走縄文（169・170・173・175），LRの斜行縄文（176）である。171・173・221は無文である。

後者に属するものには深鉢（160），鉢（196・197）がある。

160は口縁部がわずかに内湾し，底部は丸みを帯びる。平行沈線を主体にA状突起を配した文様帯はLRの斜行縄文施文後に描かれており，文様帯の幅は前述の1群に比べかなり広い。

196・197は160と共通した文様構成や施文方法である。197のA状突起が配される沈線の上下には刺突文がめぐる，地文は196がLRの斜行縄文，197がRLの縦走縄文である。

c－2類（222～231）　深鉢，鉢，浅鉢，舟形と思われる器形がある。

深鉢（223～225・229・231）　223はLRの斜行縄文を地文とする小型の深鉢である。224は4ヵ所に突起が付された深鉢で，突起下に貼付帯が垂下する。口縁部および口唇内面には縄線文がめぐり，貼付帯上にも同じ原体を用いた撚糸圧痕文が施されている。底部は丸みをもち，底縁には刺突文で区画された無文帯がめぐる。縄線文下部にはLR，RLの原体を主に縦方向に回転させている。225は比較的幅広の沈線文が描かれている。地文はLRの斜行縄文で，口唇面

にも施されている。

鉢（227・228）　227・228はRLの斜行縄文のみが施されており，口唇内面には地文と同じ原体を用いた撚糸圧痕文が施されている。

浅鉢（230）　230は縄線文がめぐるもので，最下部の縄線文は波状に施文されている。地文はLRの縦走縄文である。

222・226・229は舟形の祖形かと思われる楕円形の器形をなし，突起下には貫通孔が施されている。222は口縁部と底部付近には刺突文で区画された無文帯があり，地文はRLの斜行縄文である。226・229の口縁部には幅広の沈線文が描かれており，226の口縁には刻みが，口唇内面にはLの撚糸文，229にはLRの斜行縄文が施されている。

VI群（図V－52－232～243）　569点のうち，b類は29点，c類は533点である。

b類（237～240）　初期の段階に位置付けられる237と後半期の238・239がある。地文にはいずれもRLの原体が用いられており，237は斜行縄文，238～240は縦走縄文である。237は内面に明瞭なくびれが認められる。口縁には刻みが施され，口縁部内外面に平行沈線がめぐる。238は口縁に刻み，その下部に平行沈線がめぐる。239は平行沈線下部に波状沈線が施されている。

c類（232～236・241～243）　いずれも後北C_1式に対比でき，口縁部から胴部の文様帯は隆起線を主体に構成される。三角列点文が施されたもの（232）や口唇上に刻みがめぐるもの（232・234）もある。232は胴部下半にも帯状文と縦走縄文を組み合わせて同様の文様を描いている。233の縄文はRLの斜行縄文である。234には底部付近にまで微隆起線が付されている。235は帯縄文と縦走縄文が組み合わされている。241は236と同一個体の口縁部破片である。

VII群（図V－53～56－244～273）878点のうち，a類は479点，b類は343点である。

a類（244～250・255～266・269～273）

微隆起線や条痕文，縄文が施されたグループ（244・255～257－a・b）と平行沈線や鋸歯文が描かれたグループおよび無文のもの（245～250・258～266・269～273）に大別できる。

244・255～257－a・bの口唇断面が角形のもの（255・257）と丸みをもつもの（256）があり，内外面の調整はいずれも撫でによる。255は波状口縁で，口縁部下半には横走縄文が施されている。256－a・bは条痕文が施されている。255・256は244・257に先行する可能性がある。

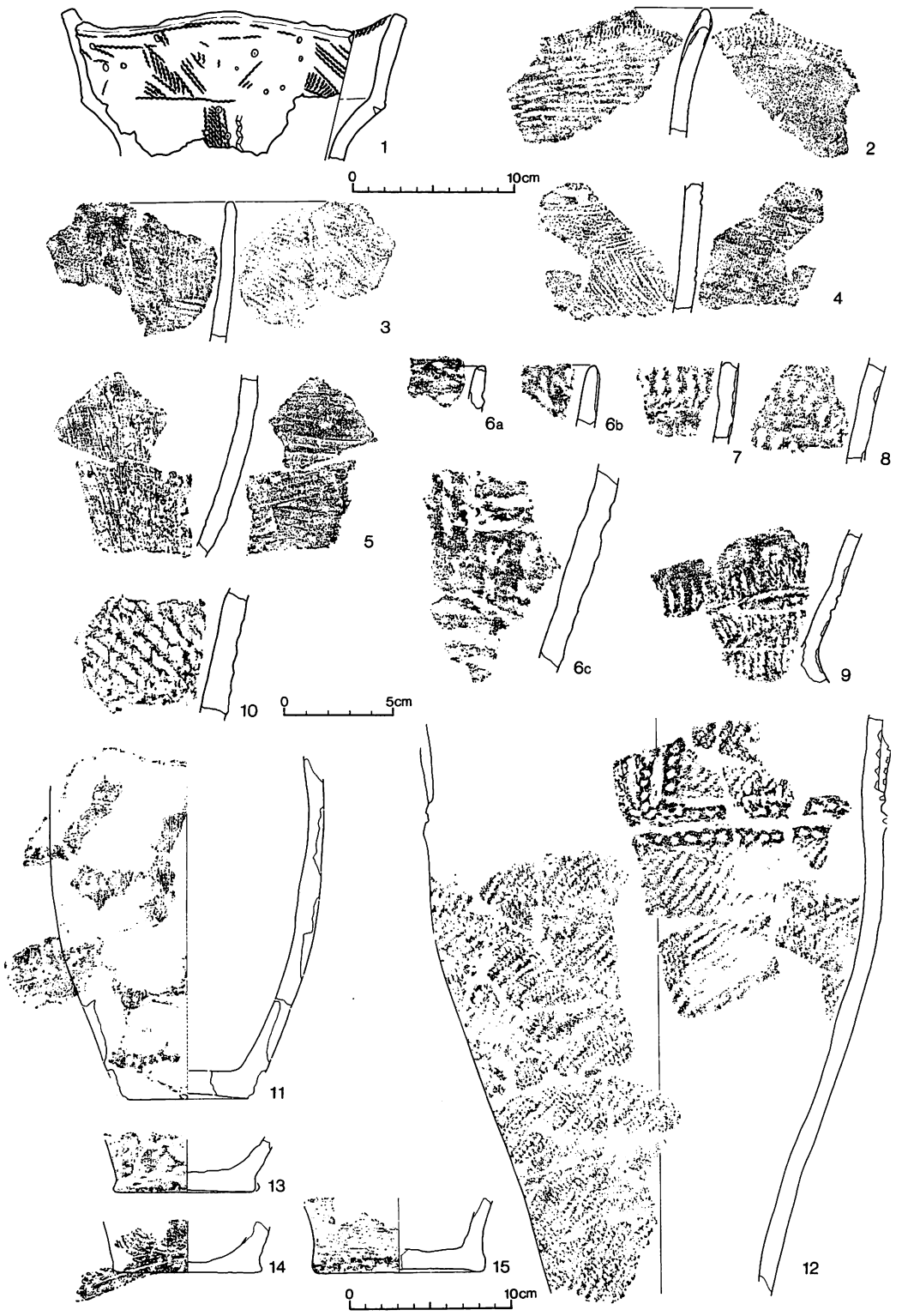
245～250・258～266・269～273の器種は坏，注口，片口，鉢，甕とバラエティに富む。

坏（245・258）　245は深めで，丸底に近い。器壁は厚く，口縁部はわずかに外反する。口唇の断面は丸い。体部や内面の調整は撫でによる。胎土には極粗粒砂を含む。

注口（246・261）　246は口唇の断面が角形で口唇上には刻みがめぐる。体部の調整は比較的雑な縦方向の削りである。

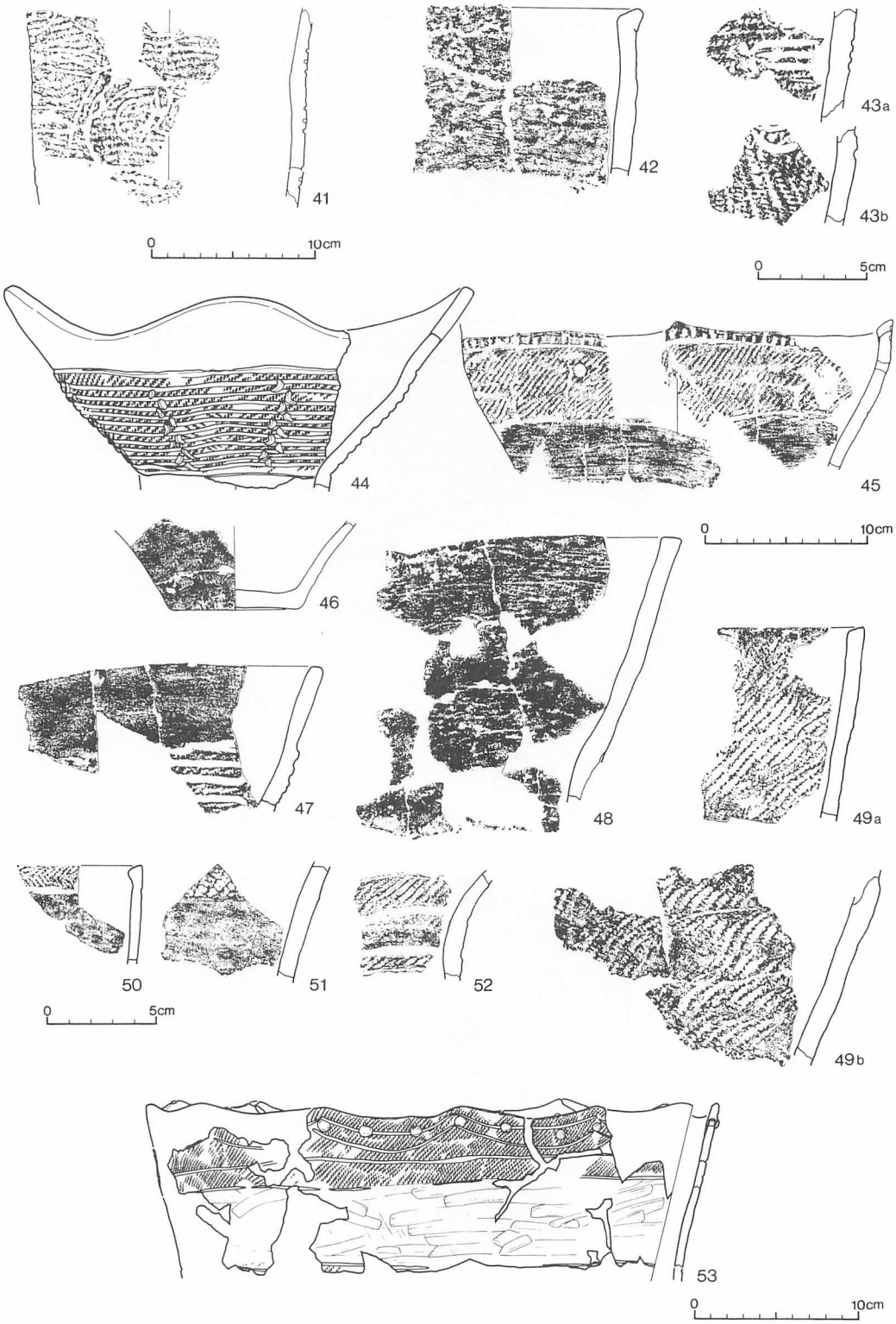
片口（247）　平行沈線がめぐるもので，底部は張り出す。口唇の断面は丸く，体部および内面の調整は撫でによる。

鉢（248・249・259・260）　口唇の断面は角形（249・259・260）と丸みをもつもの（248）

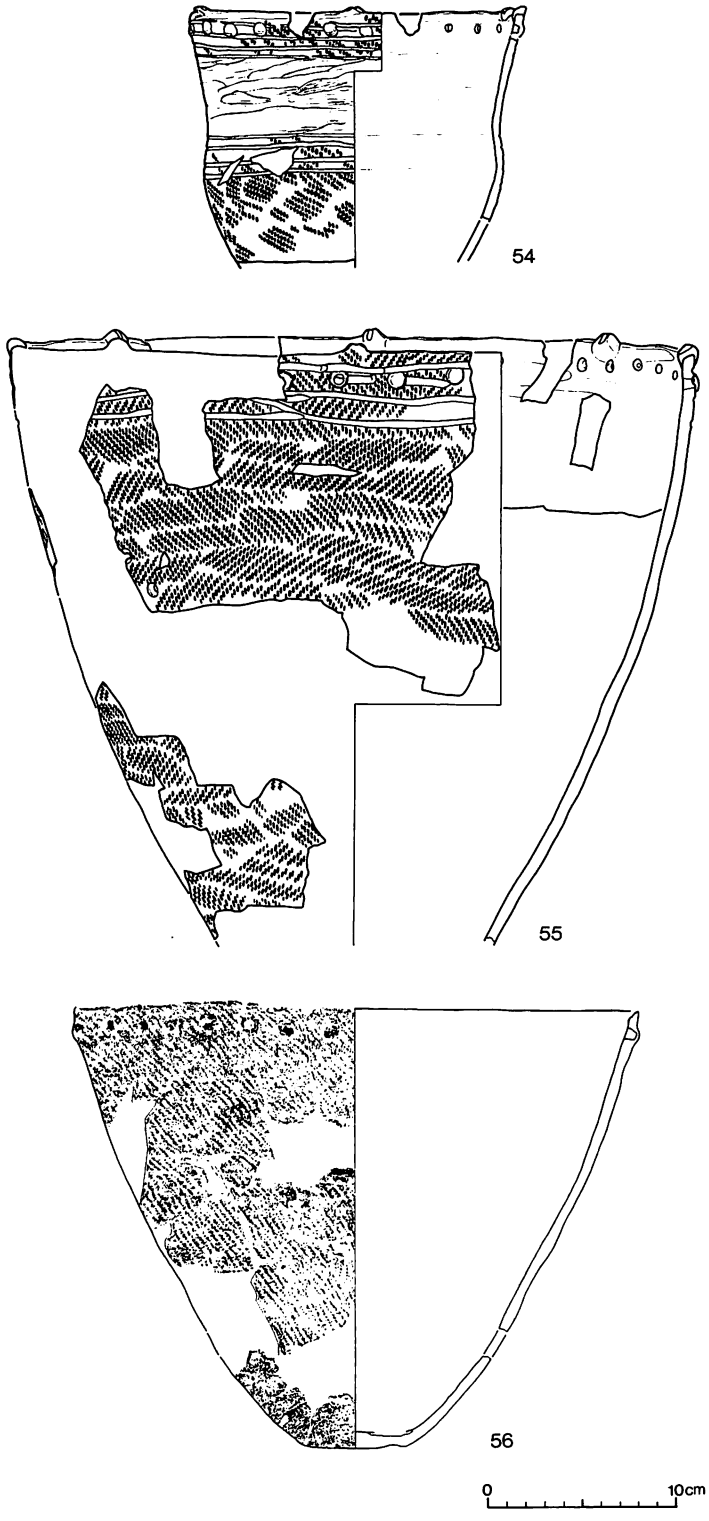


図Ⅴ－41　包含層出土の土器(1)－Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ群土器

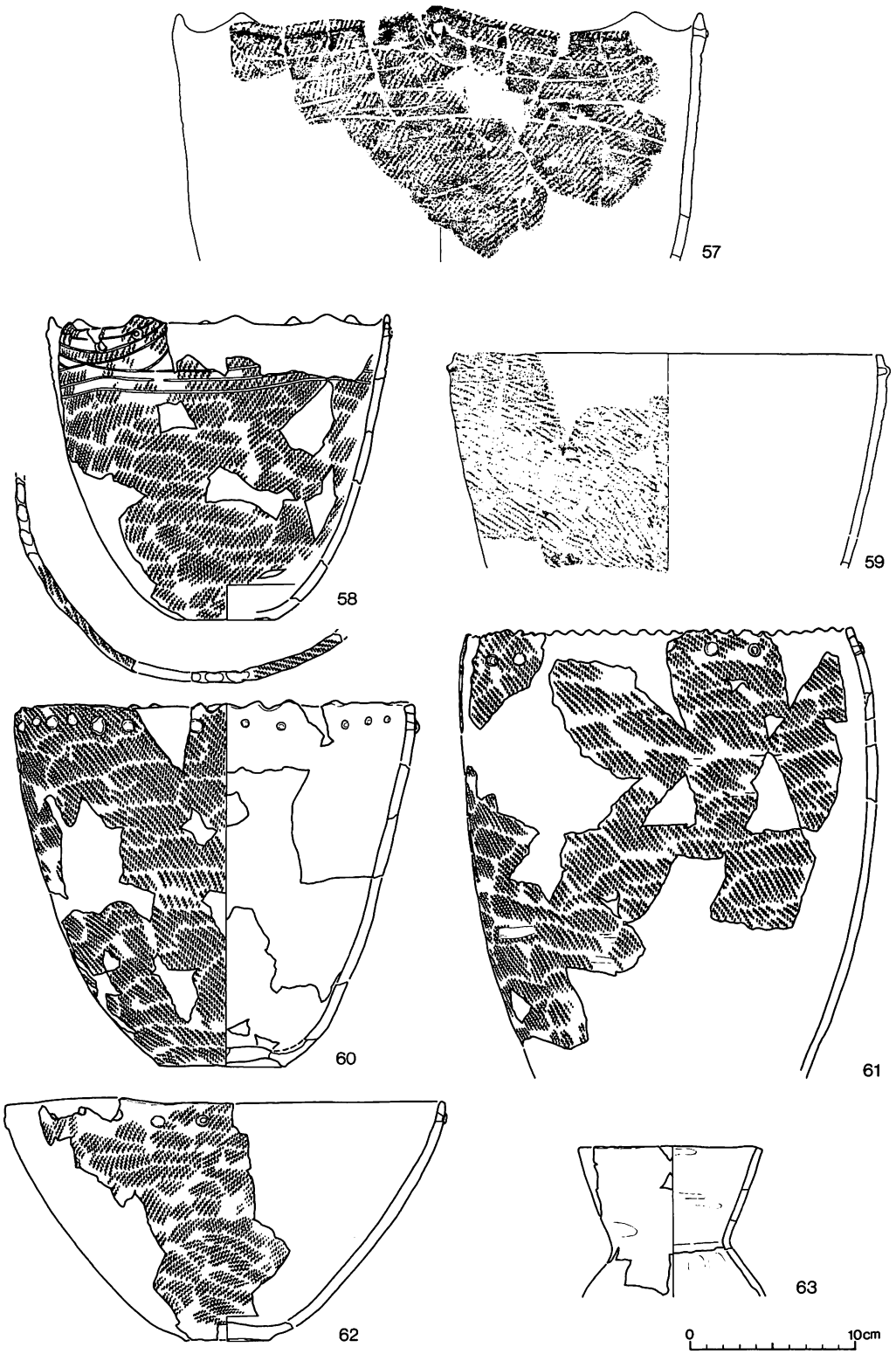
図Ⅴ－42　包含層出土の土器(2) －Ⅲ群土器



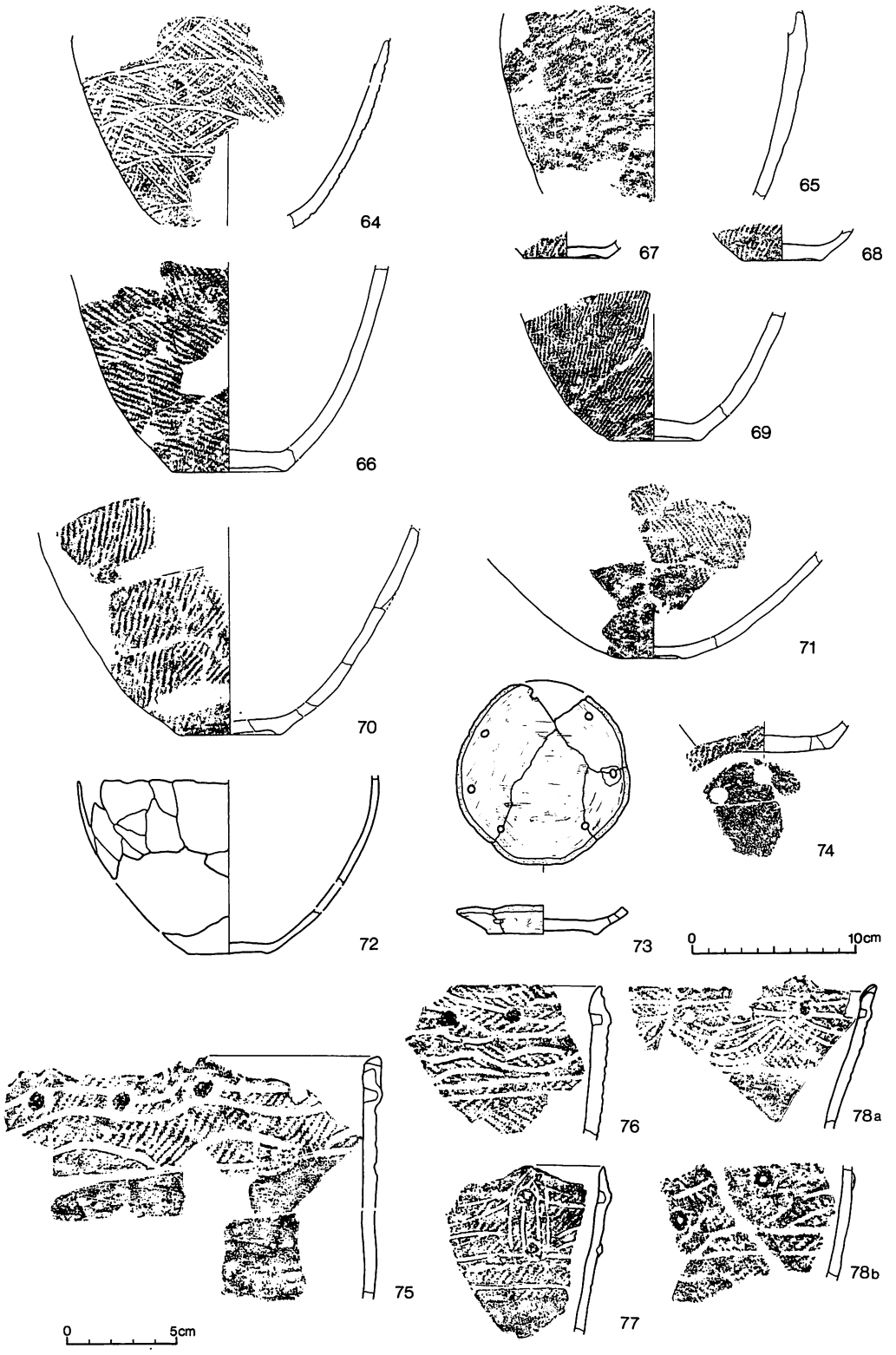
図Ⅴ－43　包含層出土の土器(3) －Ⅳ群土器



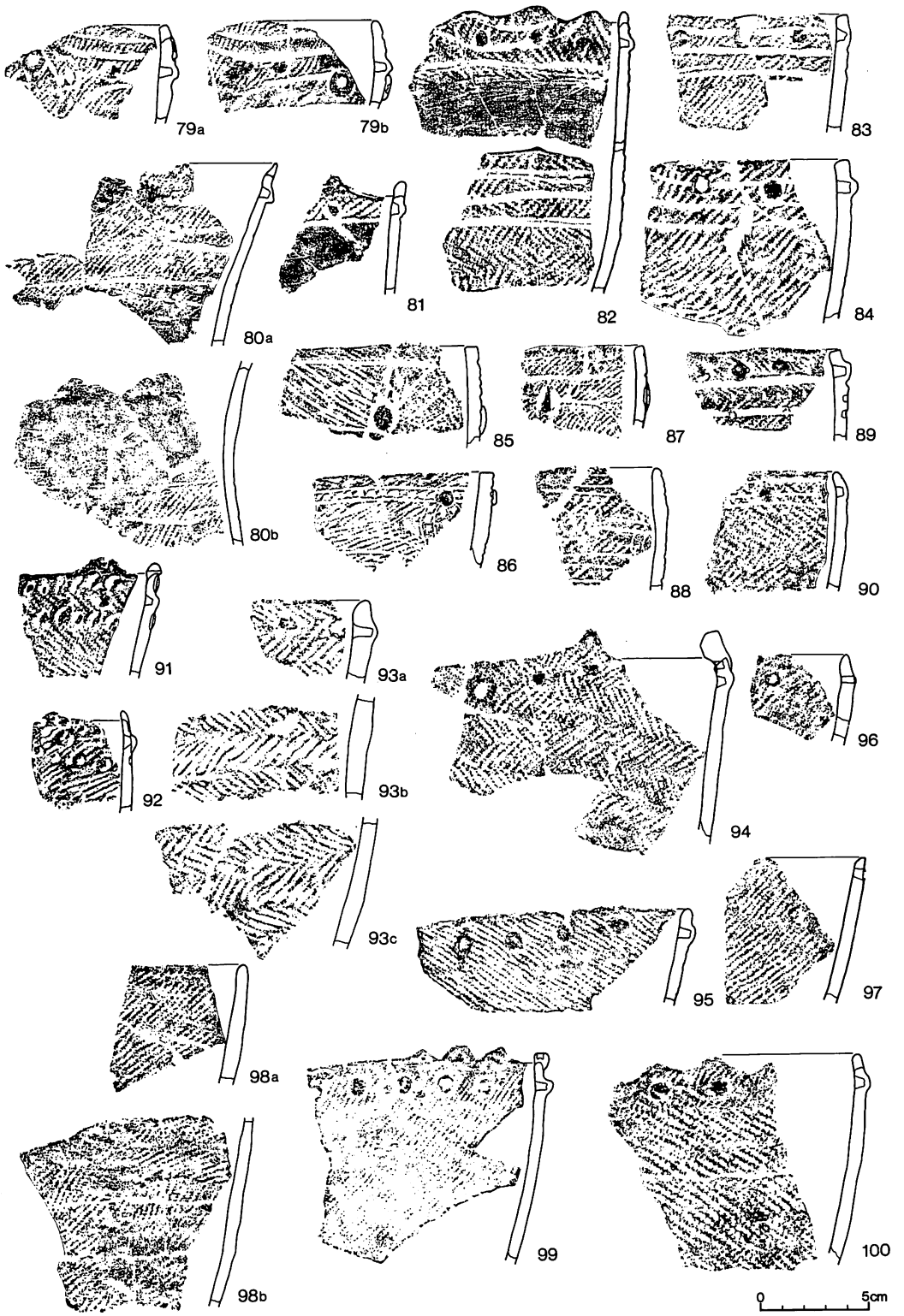
図Ⅴ－44　包含層出土の土器(4) －Ⅳ群 c 類土器



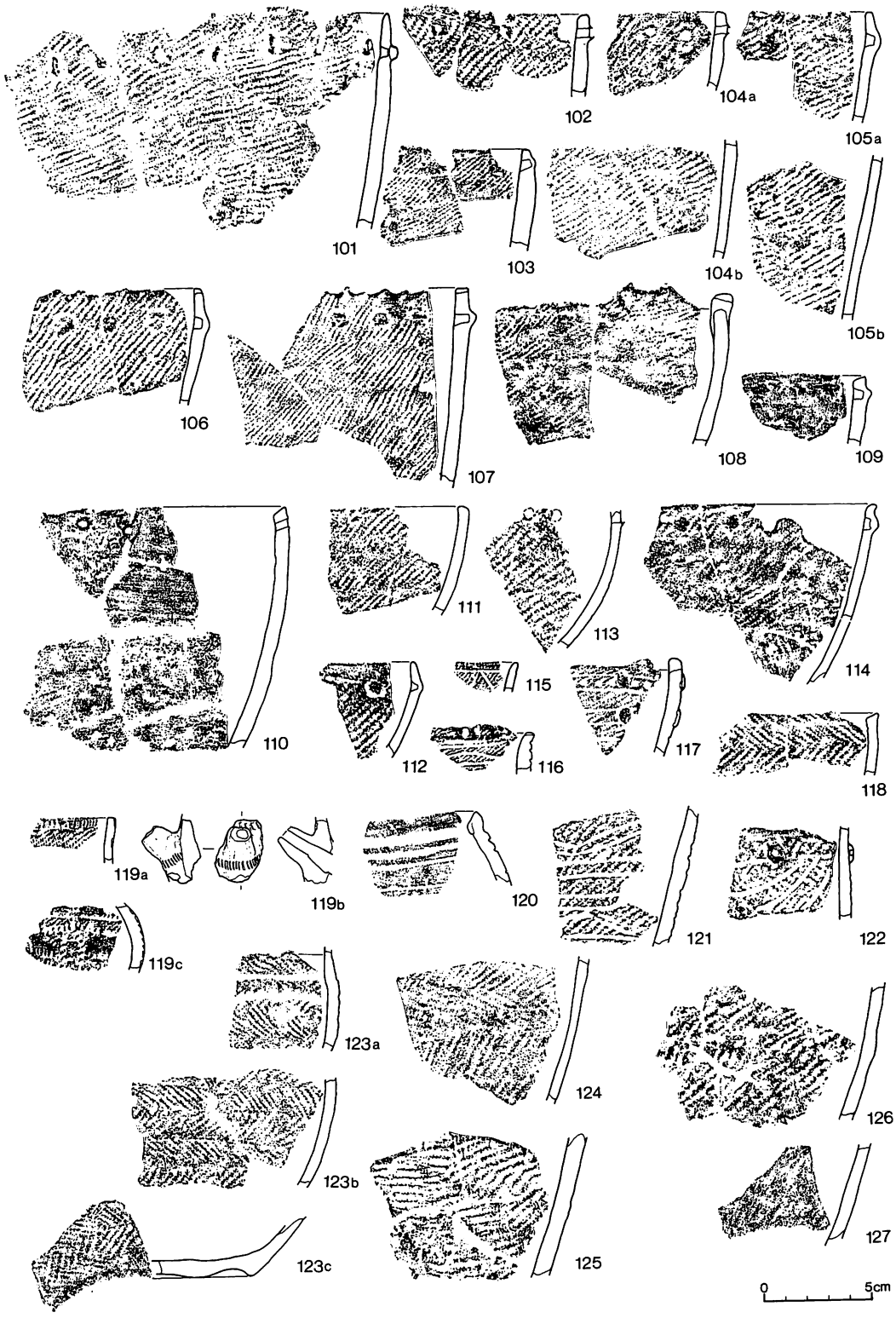
図V－45　包含層出土の土器(5) －Ⅳ群c類土器



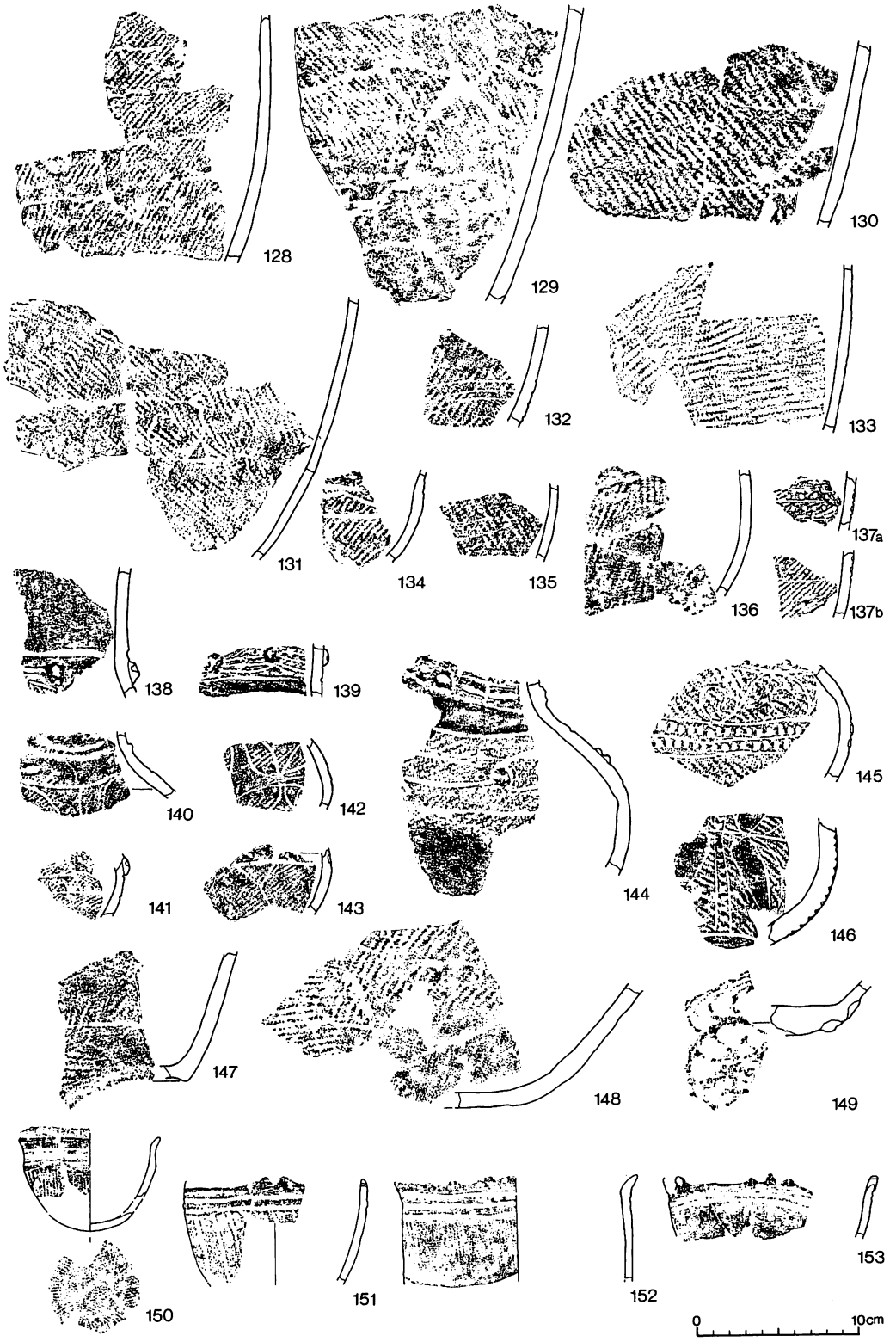
図Ⅴ－46　包含層出土の土器(6) －Ⅳ群 c 類土器



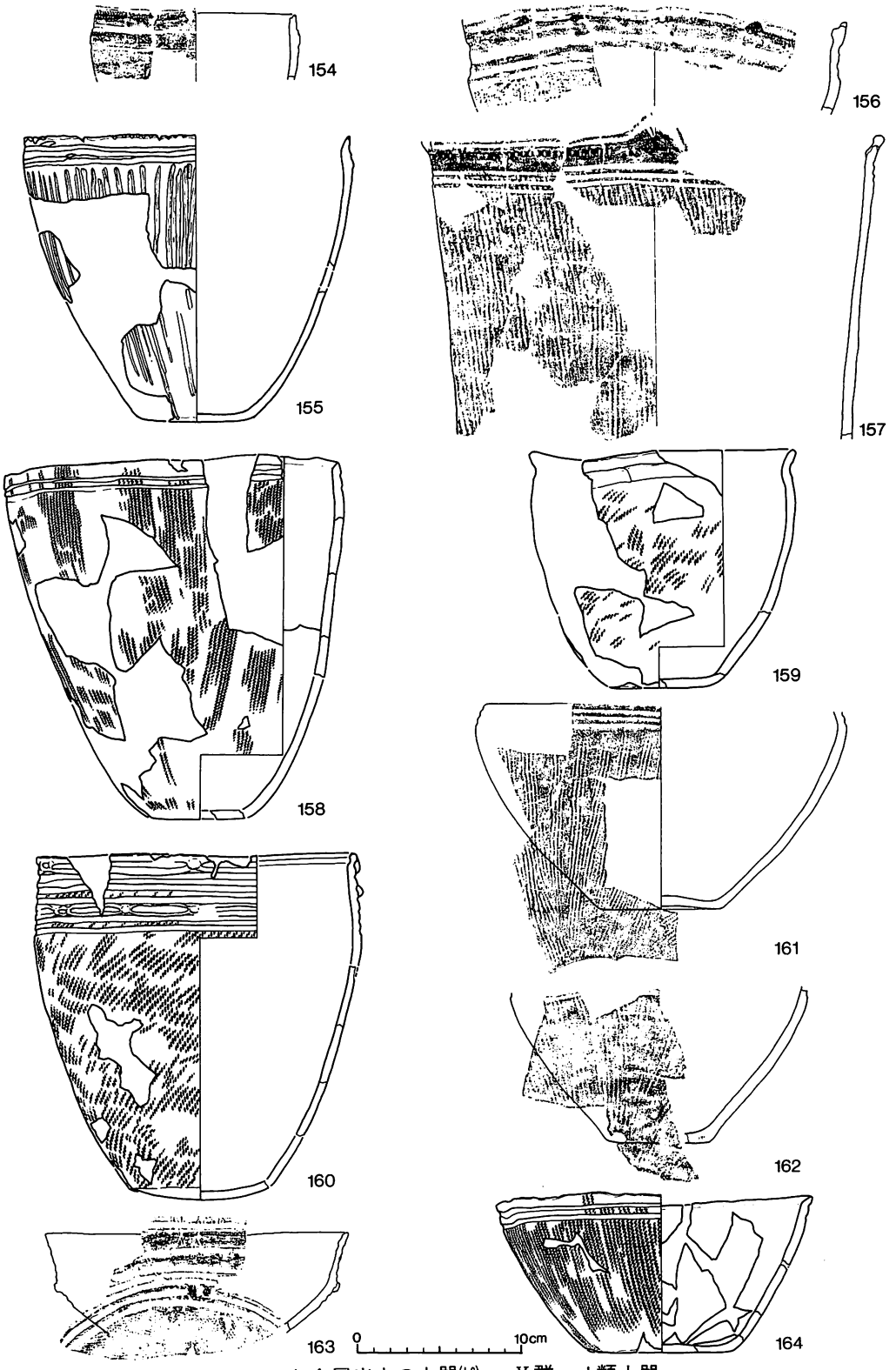
図Ⅴ－47　包含層出土の土器(7) －Ⅳ群ｃ類土器



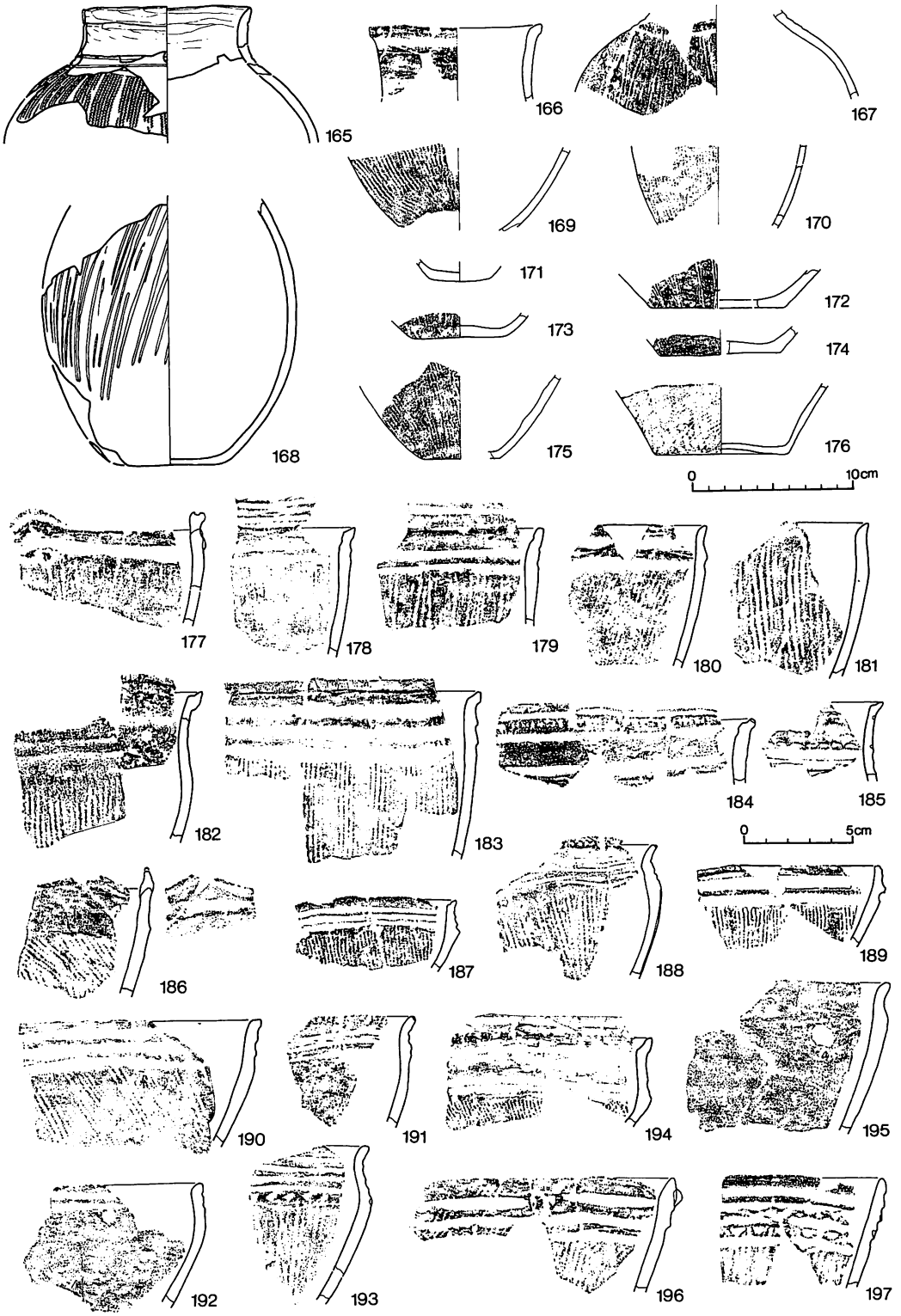
図Ⅴ－48　包含層出土の土器(8) －Ⅳ群ｃ類土器



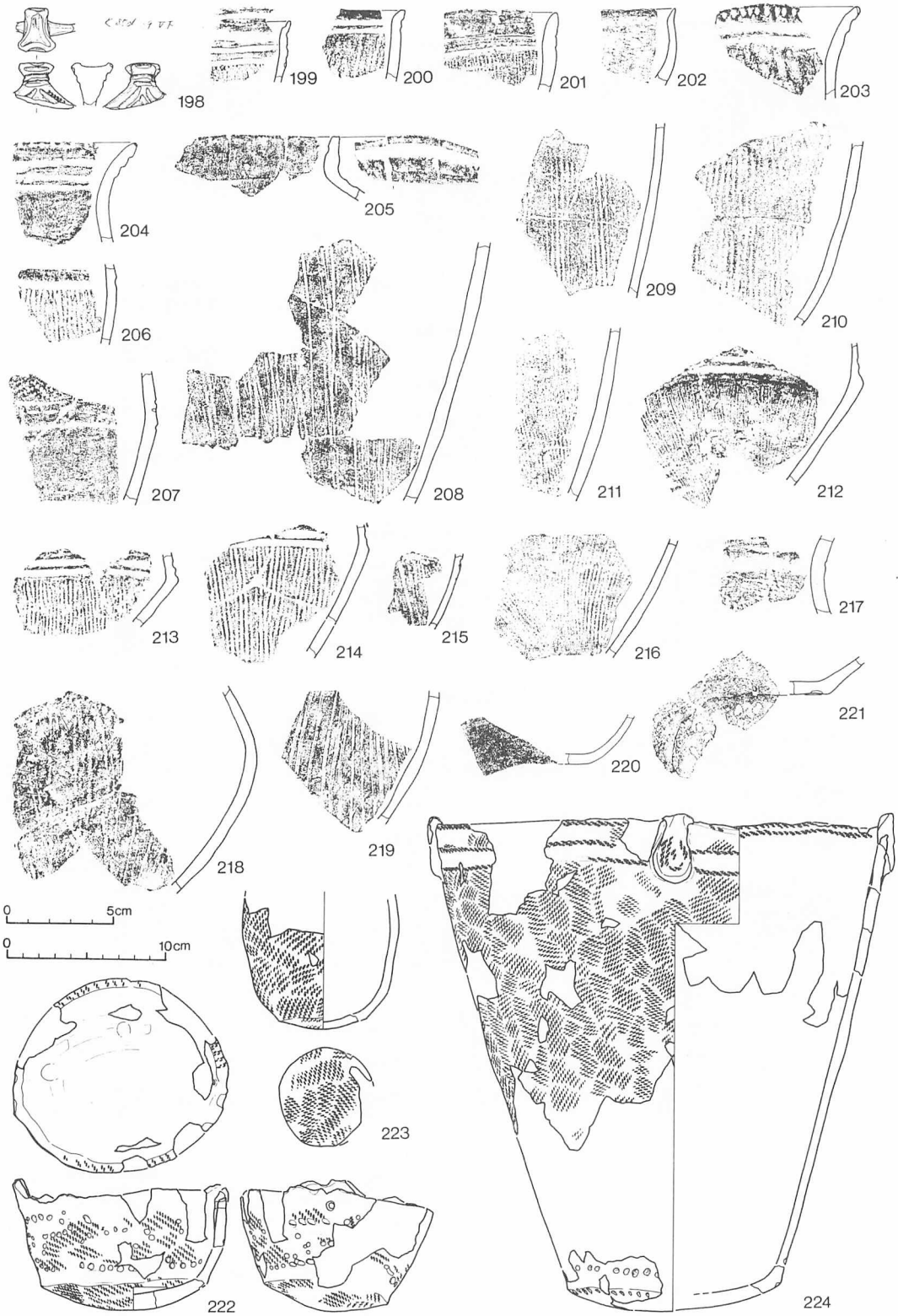
図Ⅴ－49　包含層出土の土器(9) －Ⅳ群 c 類・Ⅴ群 c-Ⅰ類土器



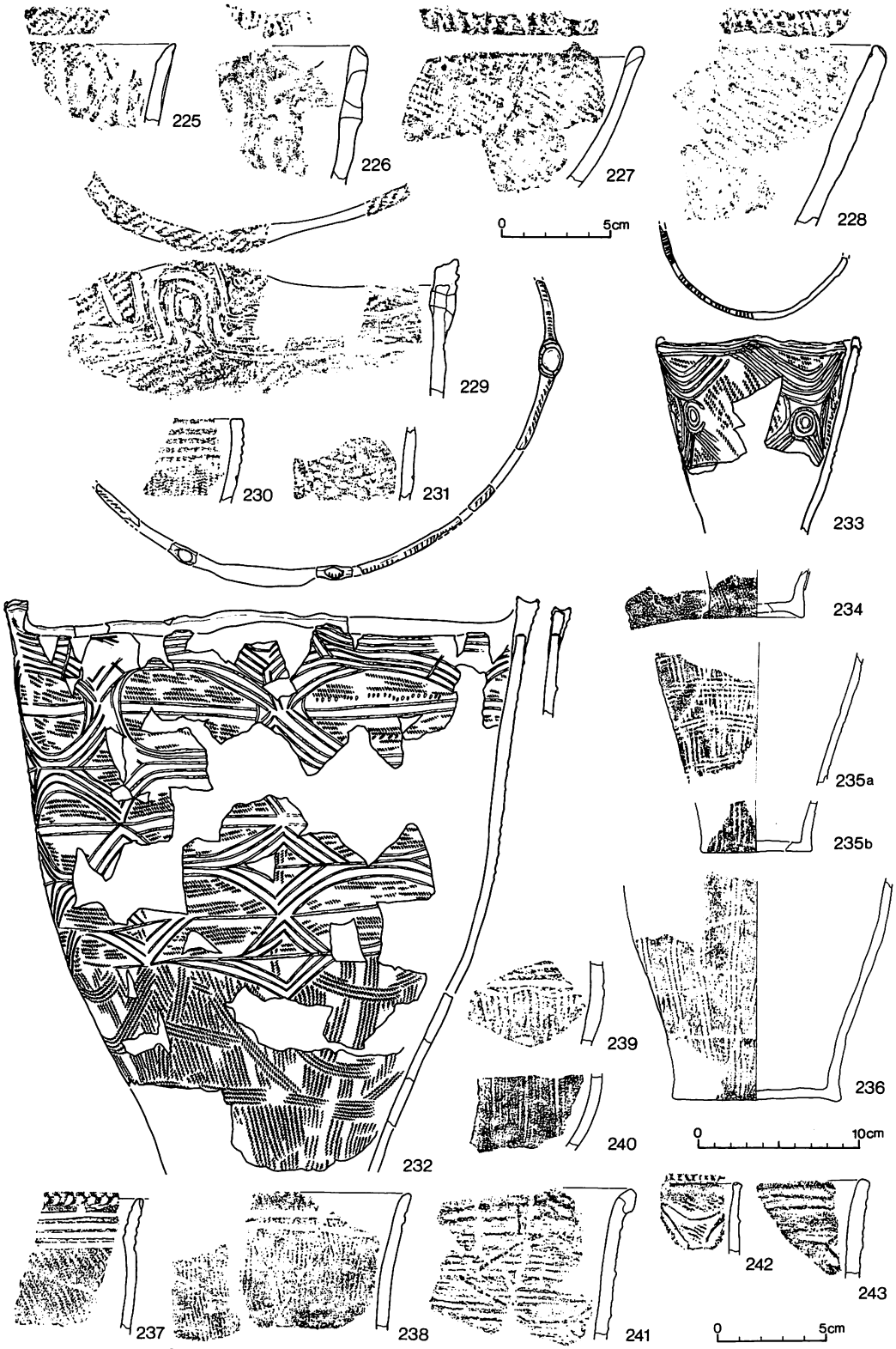
図Ⅴ－50　包含層出土の土器(10) －Ⅴ群 c-Ⅰ類土器



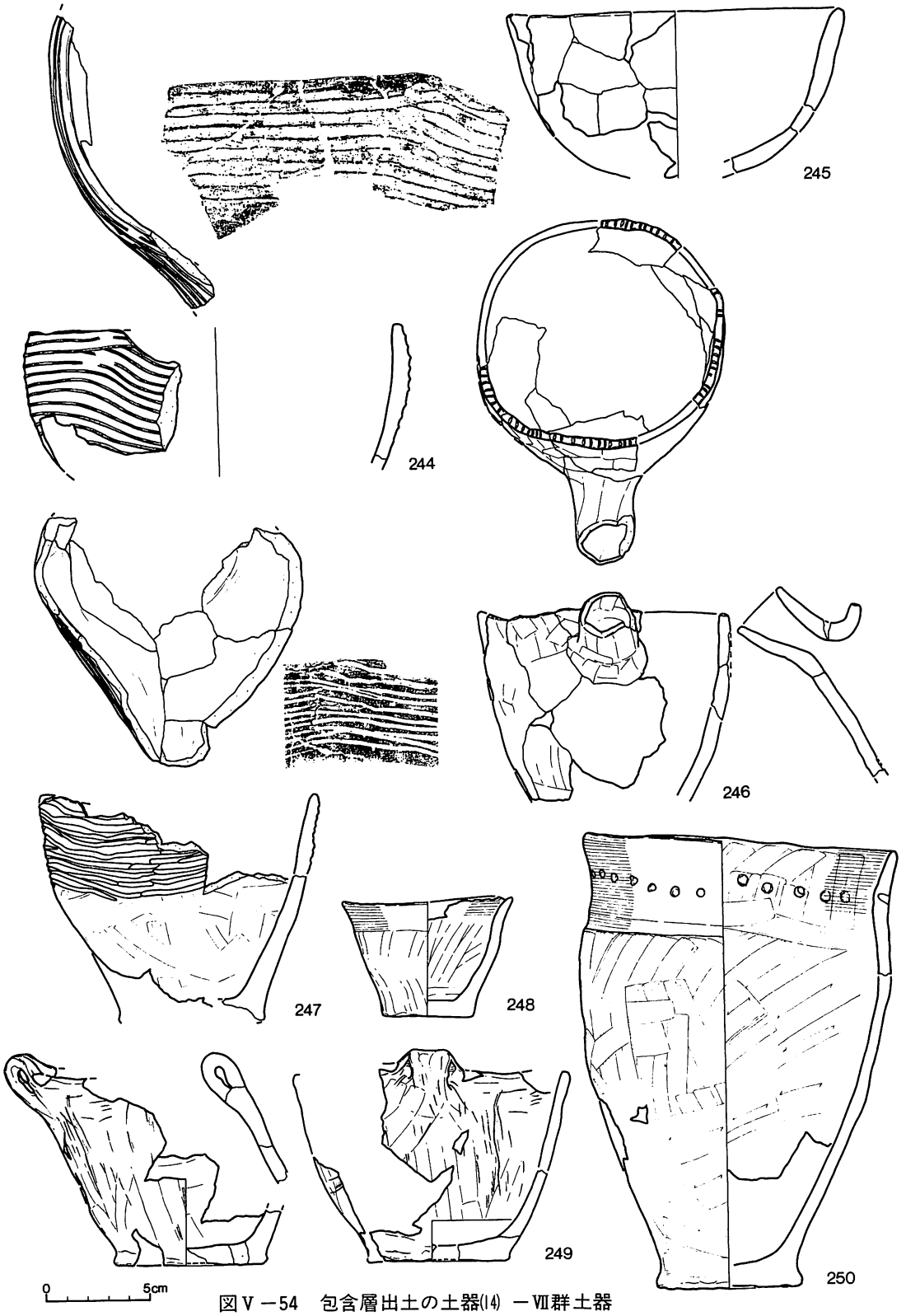
図Ⅴ－51　包含層出土の土器(11)　－Ⅴ群c-1類土器



図Ⅴ－52　包含層出土の土器(12)　－Ⅴ群c-1・c-2類土器

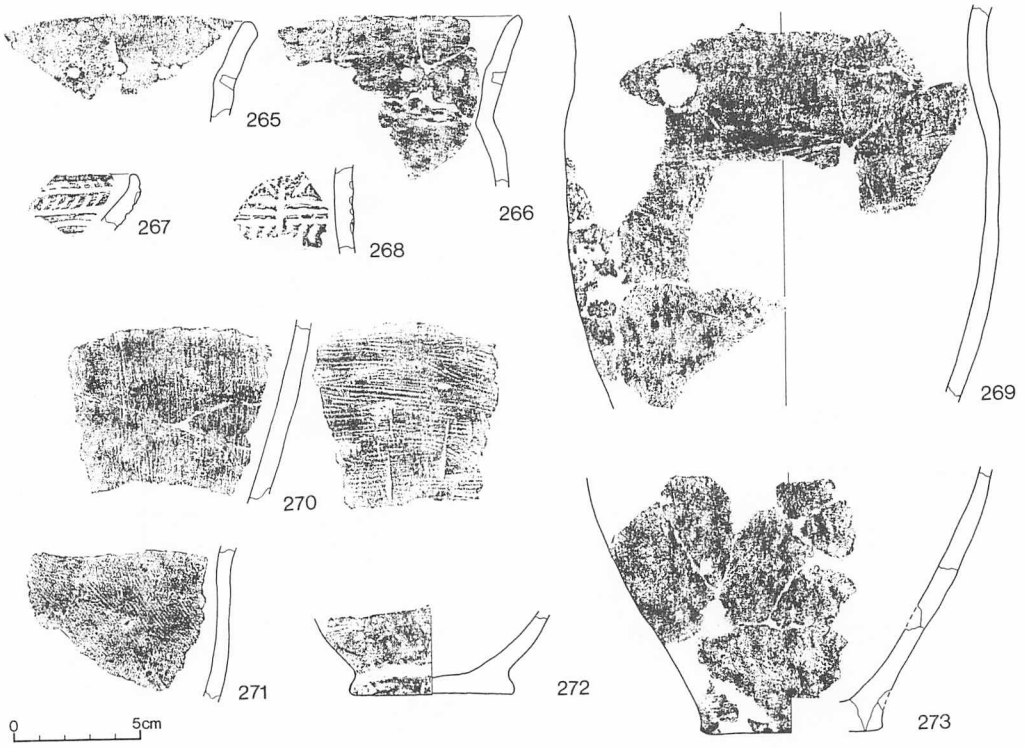


図Ⅴ－53　包含層出土の土器(13)　－Ⅴ群 c-2類・Ⅵ群土器



図Ⅴ－54　包含層出土の土器(14)　－Ⅶ群土器

図Ⅴ－55　包含層出土の土器(15) －Ⅶ群土器



図Ⅴ－56　包含層出土の土器(16) －Ⅶ群土器

があり，底部はいくぶん張り出す。248は口縁がわずかに外反する。口縁部内外面の調整は撫でによる。249は把手状の突起が付されている。体部の調整は縦方向の削りによる。

甕（250・262～266・269～273）　突瘤文のみのもの（250・265・266），鋸歯文が描かれたもの（262・269），平行沈線がめぐるもの（263・264）に細分される。口唇の断面は角形（263・264・266）と丸みをもつもの（250・262・265）がある。250は口縁部下半に整形による段状のくびれがあり，底部は張り出す。器面の調整は口縁部が横方向，胴部以下は縦位，斜位の撫でによる。

270～273は胴部および底部破片である。器面の調整は270・271が刷毛目，272・273が撫でによる。270・271はb類に属する可能性もある。272・273の底部は大きく張り出す。

・b類（251～254・267・268）　器種には坏，甕がある。

坏（251・252）　いずれも内黒で，ロクロ整形による。252の切離しは回転糸切りで，底部内面は放射状の削りによる調整が施されている。

甕（253・254・267・268）　平行沈線が多条めぐるもの（253・254）と刻文が描かれたもの（267・268）に細分できる。253は口縁部上半がほぼ直立する器形で，文様帯が非常に広く，口唇は平坦である。器面の調整は胴部が縦方向の，内面は横方向の削りによる。254は口縁部が大きく外反する器形で，平行沈線の下部に2条の刺突文がめぐる。口唇の断面は角形で，器内外面の調整は口縁部が横方向の撫で，それ以下は刷毛目による。（野中一宏）

(2) 石器等

石器の出土総点数は300点である。剥片・砕片は799点出土している。各々の石器については各器種ごとの項目で述べる。また図示したものは完形品及び破損程度の少ないものを掲載した。使用痕・加工痕のある剥片（以下，U.フレイク，R.フレイクと記載する），剥片・砕片等は接合したものを除いて図示していない。

石鏃（図V－57・58－1～74）

石鏃は95点出土した。現稀府川と旧河川に挟まれた微高地に多く，L－84区付近で特に多く出土している。柳葉形を呈するもの1点，三角形を呈するもの22点，木葉形・菱形等を呈するもの19点，有茎のもの40点，破損のため形態の不明なもの13点がある。

1は柳葉形を呈するもの。事前調査時に出土した柳葉形を呈する石鏃。尖頭部は欠損しているが，丁寧な調整が施されている。

2～20は三角形を呈するもの。2は底辺の長い二等辺三角形。火熱による剥落がみられる。3～11は狭長なもの。3は一側辺が折れている。4は2点が接合しているが，尖頭部は欠損している。5は左右非対称形で，内湾した側辺に微細な剥離がみられ石鏃以外の使用も考えられる。6～8は尖頭部欠損。8・9は一方の逆刺しが欠損している。11は2点が接合。12～16は正三角形に近いもの。12は加熱による剥落がみられる。14・16は尖頭部が欠損している。17～20は両側辺がややふくらむもの。18は2点が接合。19・20は狭長なもの。

21～29は木葉形を呈するもの。21・22は狭長なもの。24は基部欠損。25・26は菱形に近いものである。

30～34は菱形を呈するもの。30は尖頭部と基部が欠損。

35～38は五角形を呈するもの。刃部に比べ基部が長く1/3近くを占める。

39～74は有茎鏃。

39～42・59・73・74は茎部が明瞭で，刃部の幅が広いもの。39は尖頭部と茎部欠損。59は刃部に細かく浅い再調整の痕がみられ，一方の逆刺しを欠損している。73は浅く急角度な調整のため，両面に一次剥離面が残る。74は茎部の両端に張り出しがみられる。

43～50・55～57は茎部がやや不明瞭で，刃部の幅が広くやや丸味を持つもの。43・44・47・49は尖頭部に再調整の痕がみられる。45は尖頭部と茎部を欠損後，加熱を受けている。48は下方からの階段状剥離を利用し茎部を造りだしている。加熱を受けている。49は茎部欠損。50は尖頭部を欠損している。57は腹面の刃部左側辺に細かく浅い調整が施されている。

51～54は茎部がやや不明瞭で，狭長なもの。54は茎部欠損。

59～72は茎部が明瞭で狭長なもの。59は石材の空隙が一方の逆刺しから中央に及んでいる。61・62・66・67・68～70は茎部欠損。63・71・72は加熱を受けている。

石槍またはナイフ（図V－58－75～84）

石槍またはナイフは10点出土している。半数以上が現稀府川と旧河川に挟まれた微高地に出土している。有茎のものと，茎の作りが明瞭にみられないものに分けられる。

75～79は有茎のもの。75の腹面刃部は背面に比べ浅い剥離調整が行われている。76はやや菱形に近く，尖頭部を欠損している。77はバルブに茎部を作出している。尖頭部に急角度で浅い調整を施した片面加工のスクレイパー状石器である。78・79は茎部破片である。

80～84は茎の作りが明瞭にみられないもの。

80・81・84は木葉形のものである。80はバルブに基部を作出している。81は尖頭部と基部が欠損している。84は厚みが一側辺にやや偏っている。

82・83は五角形のもの。82の尖頭部両側辺は互いに片面からの剥離調整が行われ，基部の一側辺に縦の剥離がみられ粗雑な加工である。剥離の稜線が磨耗している。

石錐（図Ⅴ－59－85～95）

石錐は11点出土した。8点が現稀府川と旧河川に挟まれた微高地で出土している。

85は剥片の一端と側辺部に錐部を作り出したもの。

86～92は剥片の一端に錐部を作り出したもの。88・90は加熱を受けている。90の錐部は剥落している。92は147のスクレイパーと接合し，折り割った痕がみられる。

93は2点が接合しているが上半が欠損しており，つまみ部を有した可能性がある。

94・95はつまみ部を有するもの。95はつまみ部の両側辺に抉りがみられる。

ナイフ・スクレイパー類（図Ⅴ－59～63－96～149）

96～100はつまみ付ナイフで，6点出土している。現稀府川と旧河川に挟まれた微高地のL－83・84区とO－82区から4点出土している。

96は縦長剥片を利用し，片面全体に調整を施している。97は縦長剥片を用い，一側辺に調整を加えている。

98・99は剥片の形をほとんど変えず周辺部に調整を加えたもの。100は横長剥片の下辺に刃部調整がみられる。側辺に打面を残している。

スクレイパーは102点出土し，現稀府川と旧河川に挟まれた微高地に多く，K－84・85区・L－84・85区・O－82区付近で特に多く出土している。

101～111・148は円形または円形に近い掻器。全て黒曜石を素材にしている。106を除きL－84・85区付近にまとまって出土している。101は2点が接合しているが一部欠損している。大きく残ったほうの欠損部折れ面に再調整を加えている。148は刃部の再生が行われ，その部分にbが接合している。この一側辺に再調整がみられる。

112～115はエンドスクレイパー。112・113は拇指状のもの。115は縦長剥片の一側辺にも浅い調整がみられる。

116～118は横長剥片の一側辺に急角度の刃部調整がみられる掻器。

119～121は尖頭部をもつもの（convergent）である。122は下端が欠損しているが，同様なものと考えられる。

123～127・149は横長剥片の一側辺に浅くやや急角度の刃部調整がみられるもの。149は3点が接合している。周辺加工を施した後，同じ打面からbの剥離が行われている。Bは一側辺に

微細な調整がみられる。

128～131はノッチ状の調整がみられるもの。

132～138・147は縦長剥片を用い周辺加工を施したもの。147は周辺加工後，折り割られて92の石錐が作られている。

139～146は横長剥片を用い，周辺加工を施したもの。

楔形石器（図Ｖ－63－150）

150の1点が出土している。片面に原石面が残っている。

石核（図Ｖ－63－151～153）

石核は3点出土している。151・152は主に上から剥離されている。151はbの下端と接合し，間の1枚は抜けている。原石面が残っている。152は円礫の原石面が残っている。153は主に上下から剥離している。縦断面形は楔形をなし，原石面を残している。。

土製品（図Ｖ－64－154）

土製品は耳栓が1点と土偶の破片様の焼成粘土塊8点が出土している。154は環状を呈する耳栓の破片。厚さ19.5 cmで外湾し内面は磨かれている。推定直径5.6 cm，完形の重さは13 g前後であったと思われる。他に滑車状のものがＨ－1床面から出土している。

石製品（図Ｖ－64－155）

1点出土している。155は表面と側辺に半円柱状に抉られ擦痕がみられる。矢柄研磨に使用したものかと思われるが，即断は出来ない。

石斧（図Ｖ－64－156～164）

石斧は破片を含め11点出土した。全て泥岩を素材にしている。

156はのみ形を呈するもの。打ち欠きと研磨による成・整形が成されている。

157～163は打ち欠きと研磨による成・整形の石斧である。157は長さに比べ厚みがあり，折れた基部を利用して刃部を作出したものと推定される。158・159は基部破片。158の折れ面の角に擦痕が，側辺部と上端部に敲打痕がみられ，擦り石に転用したか，157の様に刃部を再生しようとしたものと推定される。160は刃部の一端が欠損している。161・162は刃こぼれがみられる。162は粒子の粗い泥岩を素材にしている。

164は刃部破片である。刃部と側辺に研磨がみられる。

擦石（図Ｖ－65－165）

擦石は165の1点が出土している。礫の上下両辺に擦り痕と1両端に打ち欠きがみられる。

敲石（図Ｖ－65－166～169）

たたき石は4点出土している。166は円礫に敲き痕がみられるもの。167は扁平礫の端部に敲き痕がみられるもの。表面は黒色のタール状物質が付着している。168・169は棒状礫の端部に敲き痕がみられるもの。

一括出土剥片（図Ｖ－66～70－170～184）

剥片等が一括してＬ－89－d区・Ｏ－82－a区の2ヵ所で出土した。共に石核は出土していな

い。また，調査範囲内にも同一母岩の石核は検出されていない。両者とも母岩の形状が推定出来る程接合していない。

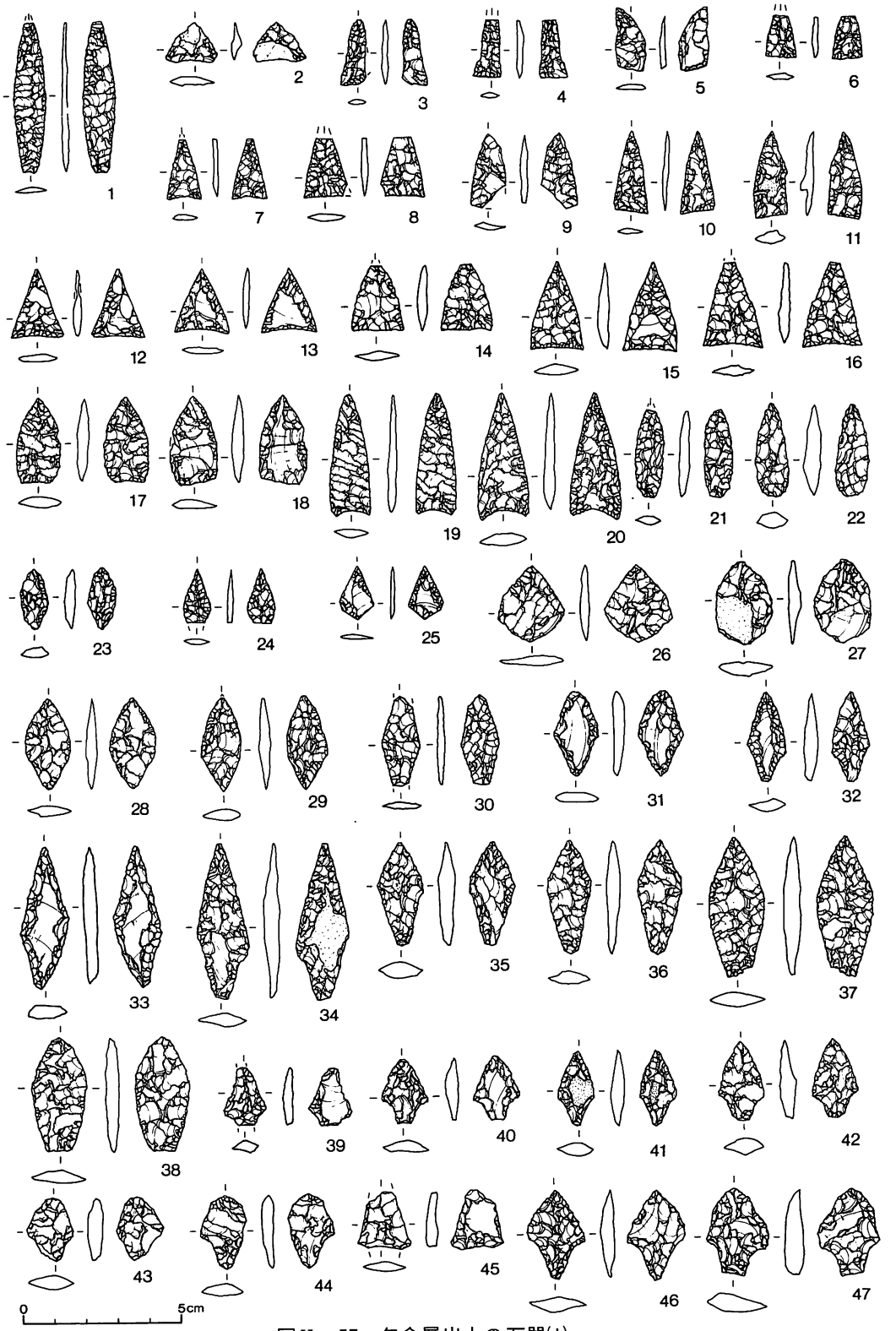
L−89−d区のものは標高107.5m程の緩傾斜面に位置する第VI層で検出した。厚さ約9cm，30×40cmの範囲に78点出土している。掘り込みはない。うち2点がU.フレイク，他は剥片である。灰褐色から暗茶褐色を呈する珪質頁岩で，同一の母岩を素材にしていると推定される。

170は5点が接合した。原石面に直交してA〜Cの打面があり連続して剥離されている。さらに打面調整してDが，同様にEが剥離されている。171は連続して剥離された2点が接合。Bの一側辺に深い樋状の調整がみられる。172は2点が接合し，その間に一枚が剥離されているが検出していない。Aの打面と平行に打面調整が行われ，間の一枚とBが連続して剥離されている。173は3点が接合し，Aの打面に平行した打面調整が行われBが剥離されている。同様に数枚が剥離された後に打面転移されCが剥離されている。174〜176は2点が接合したもの。各々，連続して剥離されている。

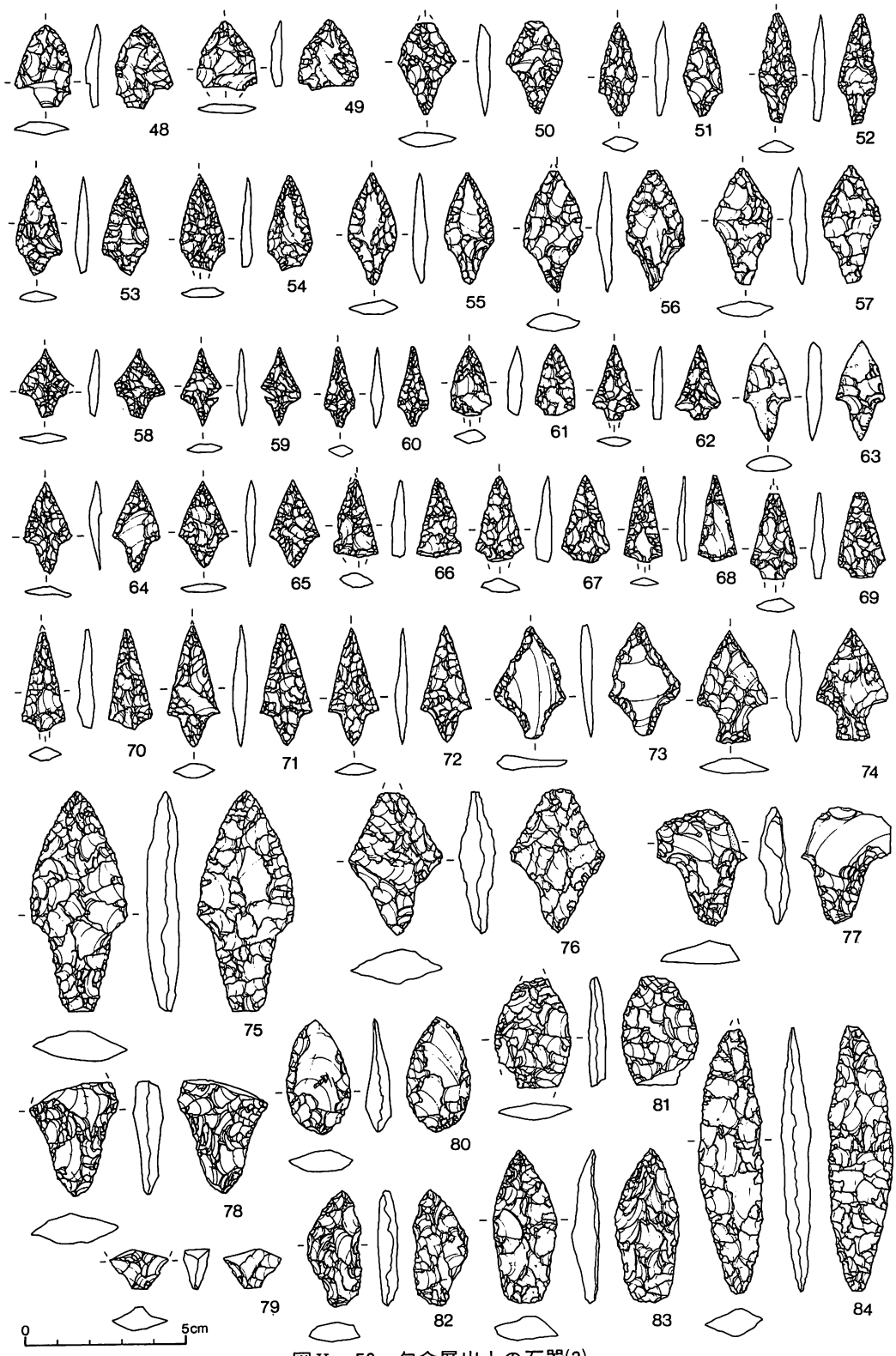
O−82−a区のものは現稀府川に面した標高103.3m程の平坦面に位置する第V層下で検出された。厚さ約6 cm，径15cmの範囲に27点と南に約20cm離れて1点出土している。掘り込みはない。うち3点がスクレイパー，2点がU.フレイク，他は剥片である。素材は珪質頁岩が多く，他にめのう・流紋岩が各1点ある。母岩は8ないし9個と推定される。前者とは違い周辺の剥片等と接合している。

177は連続して剥離された3点が接合している。暗緑色を呈する珪質頁岩で，一括して出土したものから2点，南南東に1.5m離れてCの剥片が出土している。Bはスクレイパーで両側辺に調整がみられる。同一母岩と推定されるものは他に4点出土している。178は珪酸分の多い黒褐色を呈する珪質頁岩で，連続して剥離されているものが2点が接合している。AはO−82−d区から出土した。同一母岩と推定されるものは他に5点出土している。179は周辺から出土したもので178と同一の母岩で3点が接合した。北に1 m離れて1点，南に50cmと1 m離れて各1点出土している。Aの打面に平行した打面調査が行われBが剥離されている。Bの腹面に熱によって剥落した1点が接合している。180は暗茶褐色を呈する珪質頁岩で連続剥離されたもの2点が接合している。Bは一側辺に調整のみられるスクレイパーで北西に70cm離れて出土している。同一母岩の剥片は，他に8点出土している。181は灰褐色を呈する珪質頁岩で連続して剥離されているものが2点接合した。Aは北に80cm離れて出土した。182・183は180と同じ母岩から半円形に調整されたスクレイパーで，北西に80cm離れた所から1点，1 m離れた所から1点出土した。184は灰緑色を呈するめのうで，177と同一母岩の可能性がある。下端に樋状の微細な調整がみられるU.フレイクである。

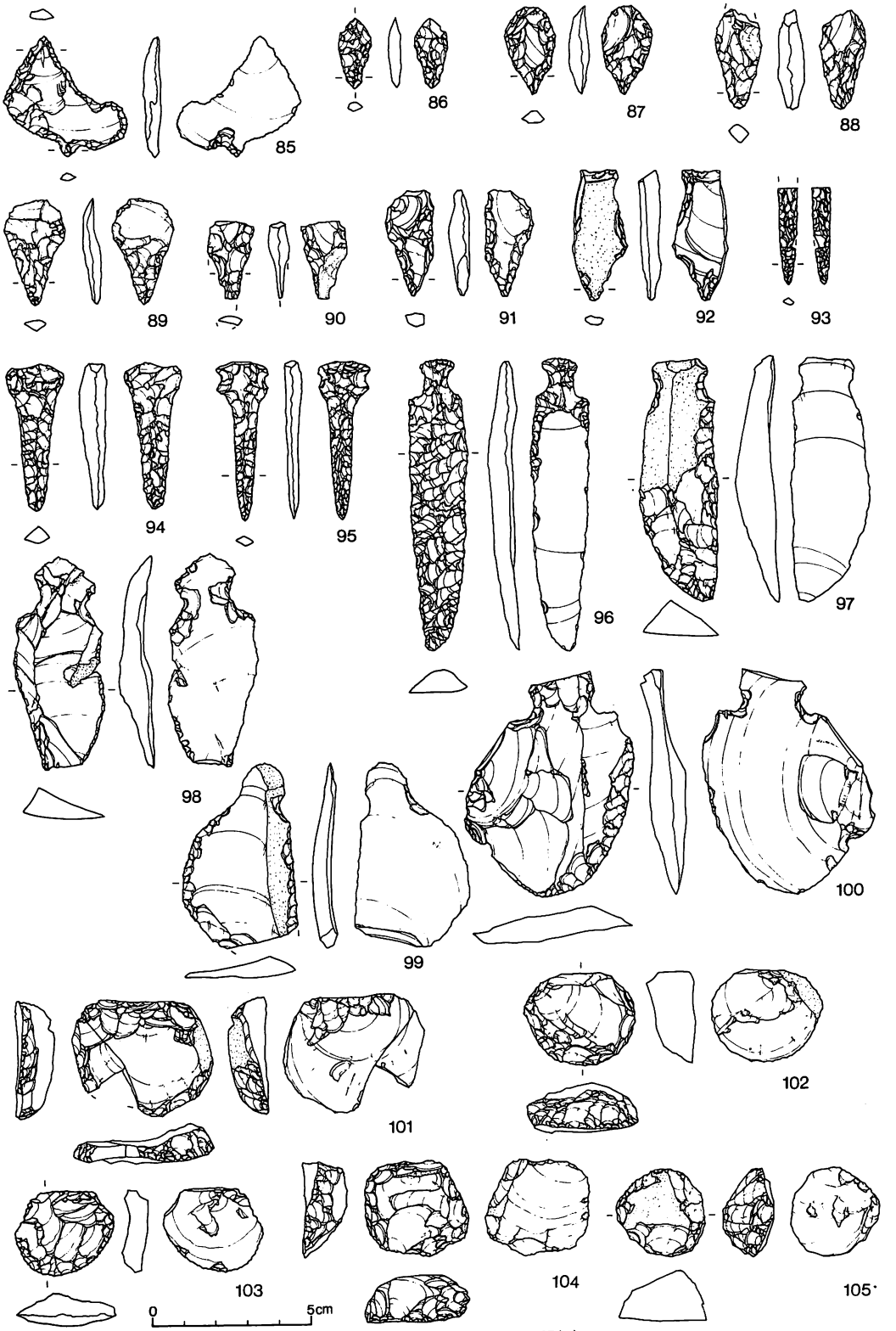
その他，図示していないものではU. フレイク，R. フレイクが56点，剥片・砕片は799点出土している。（谷島　由貴）



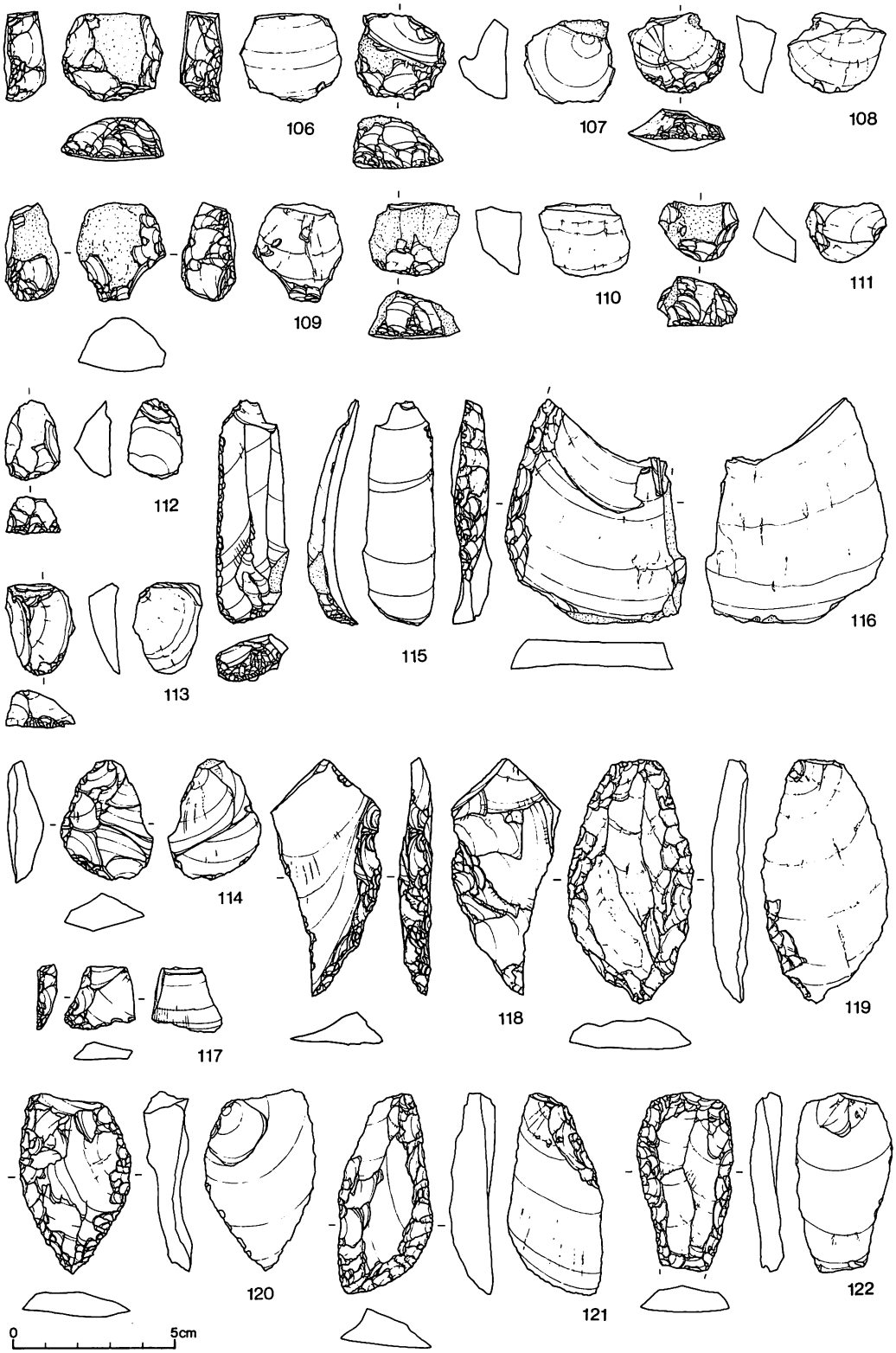
図Ⅴ－57　包含層出土の石器(1)



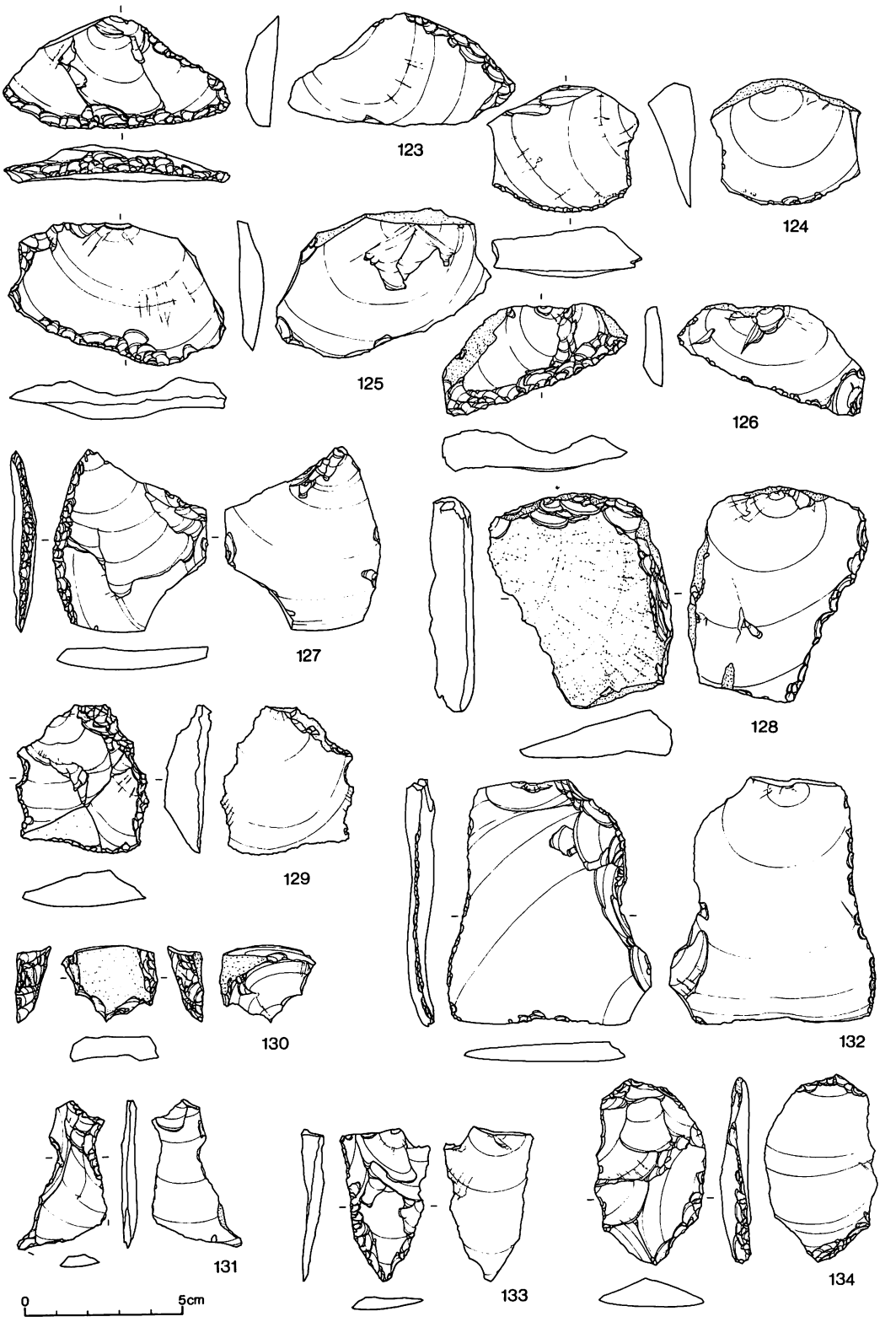
図Ⅴ－58　包含層出土の石器(2)



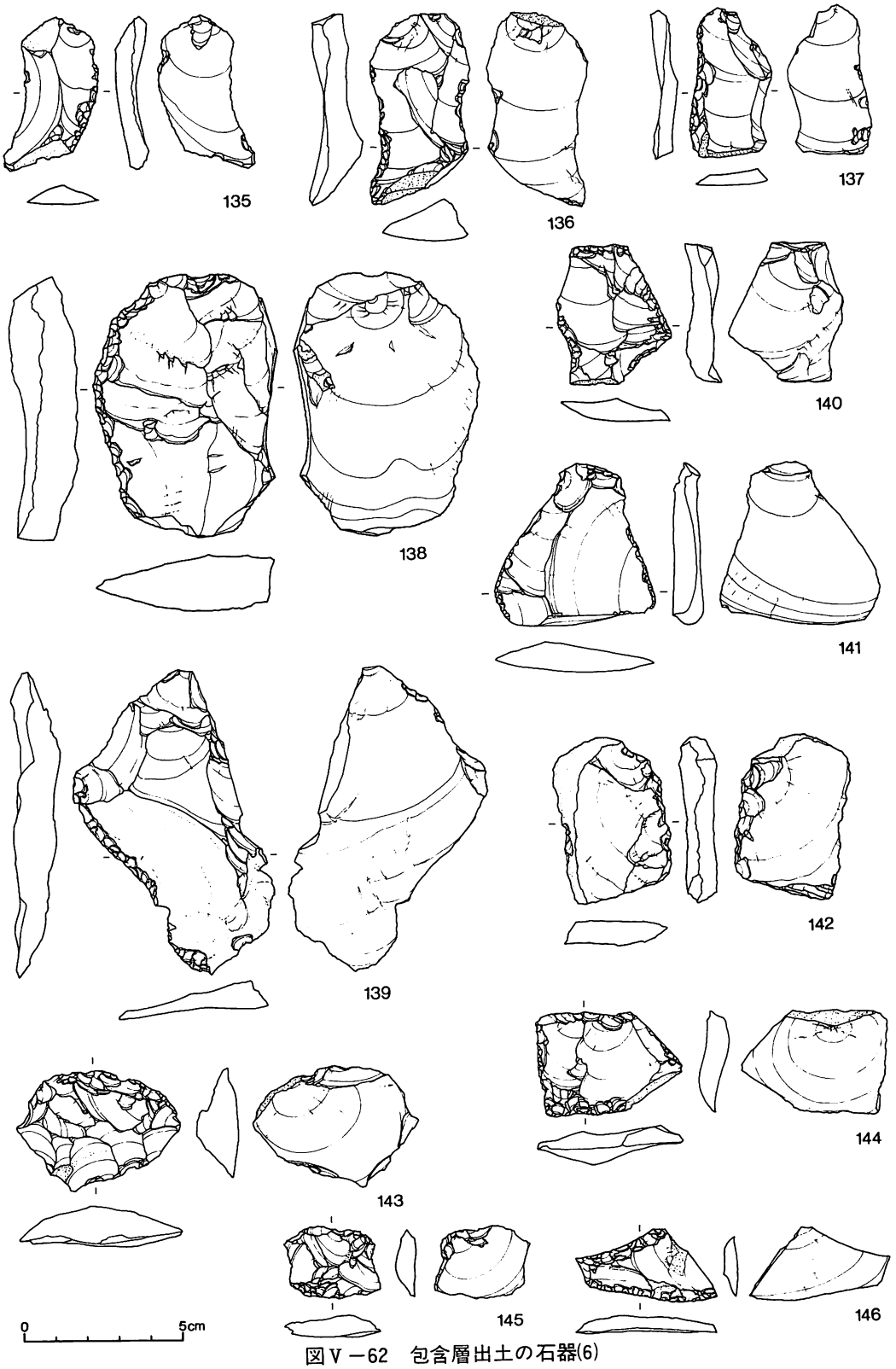
図Ⅴ－59　包含層出土の石器(3)



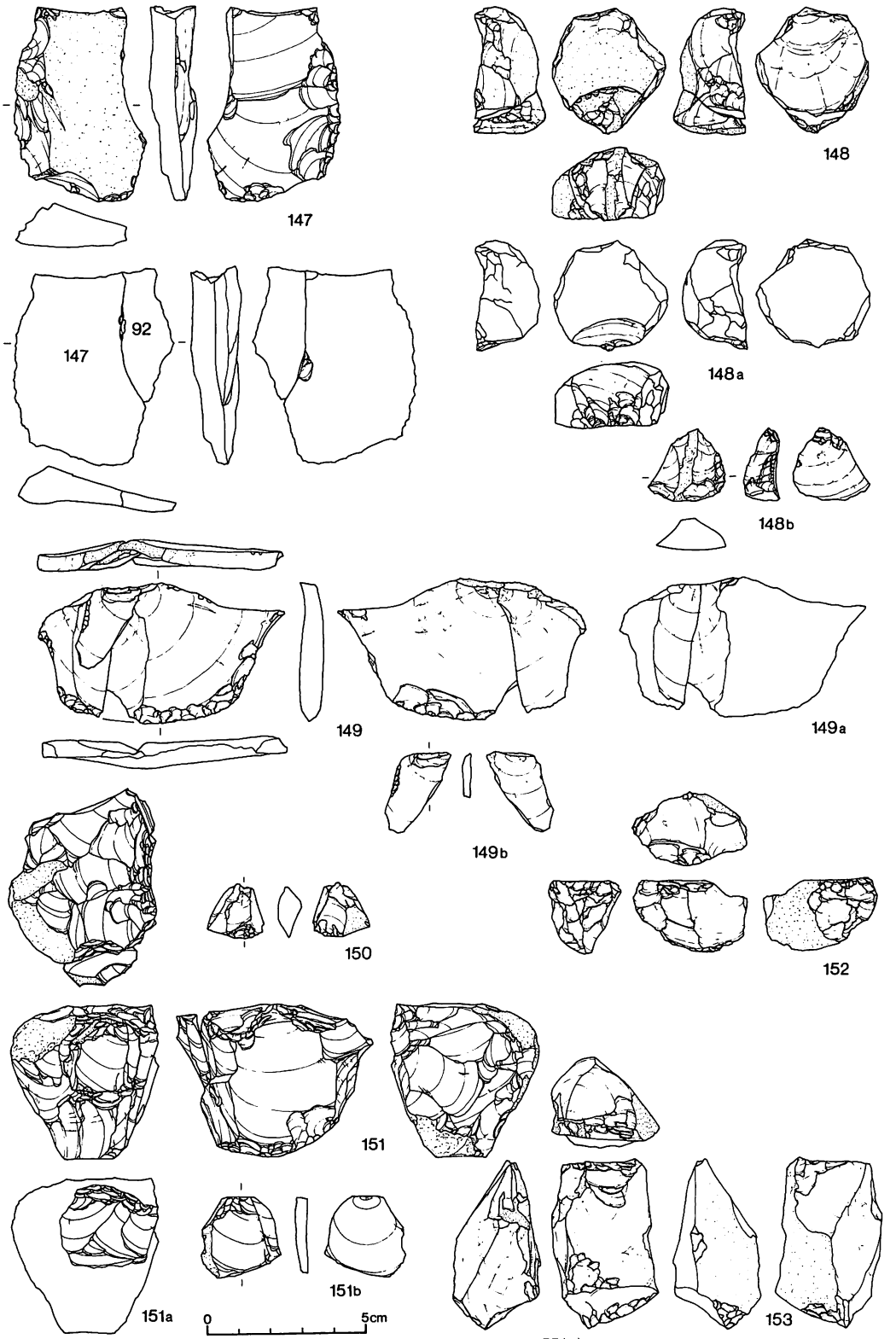
図Ⅴ－60　包含層出土の石器(4)



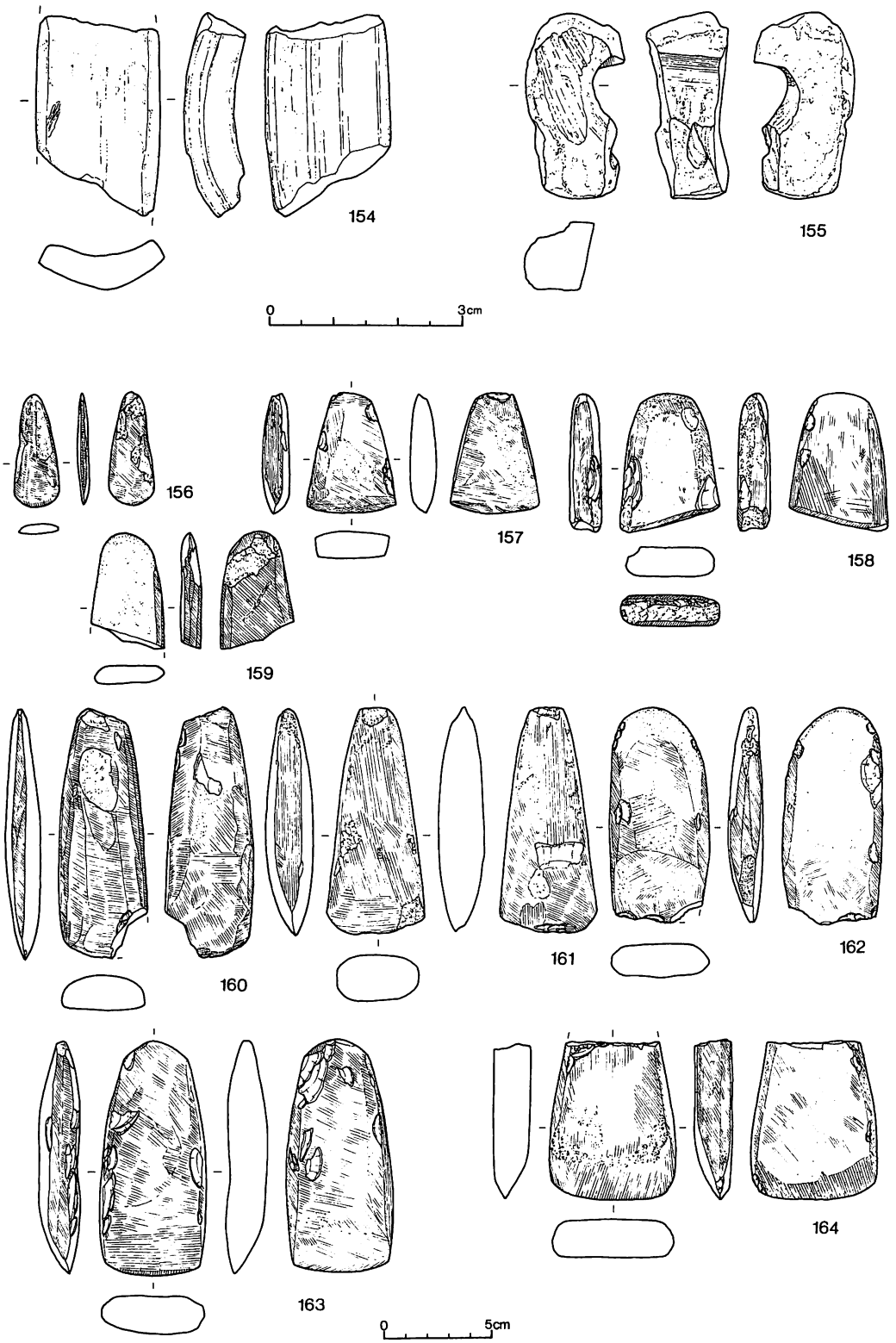
図Ⅴ－61　包含層出土の石器(5)



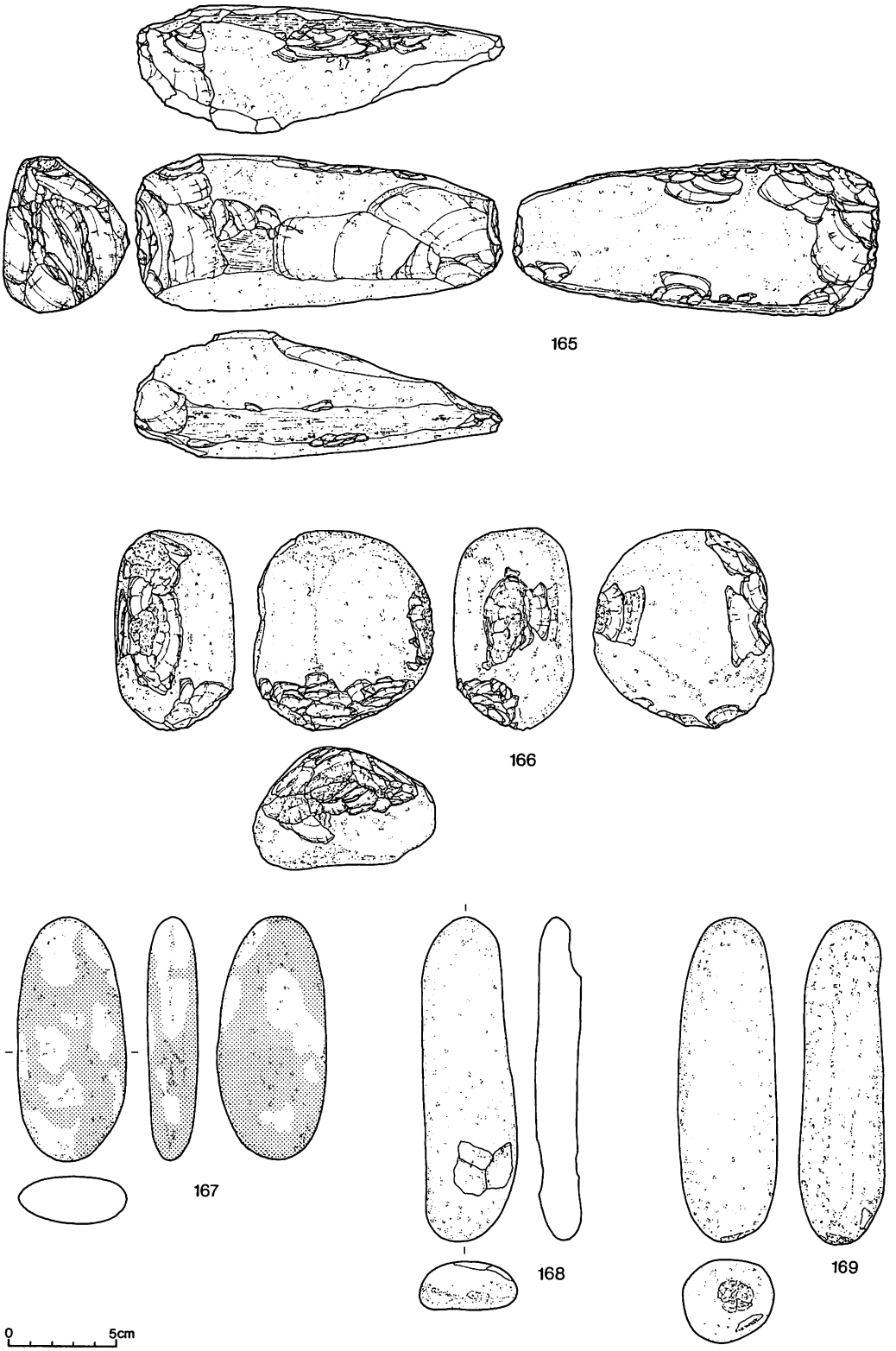
図Ⅴ－62　包含層出土の石器(6)



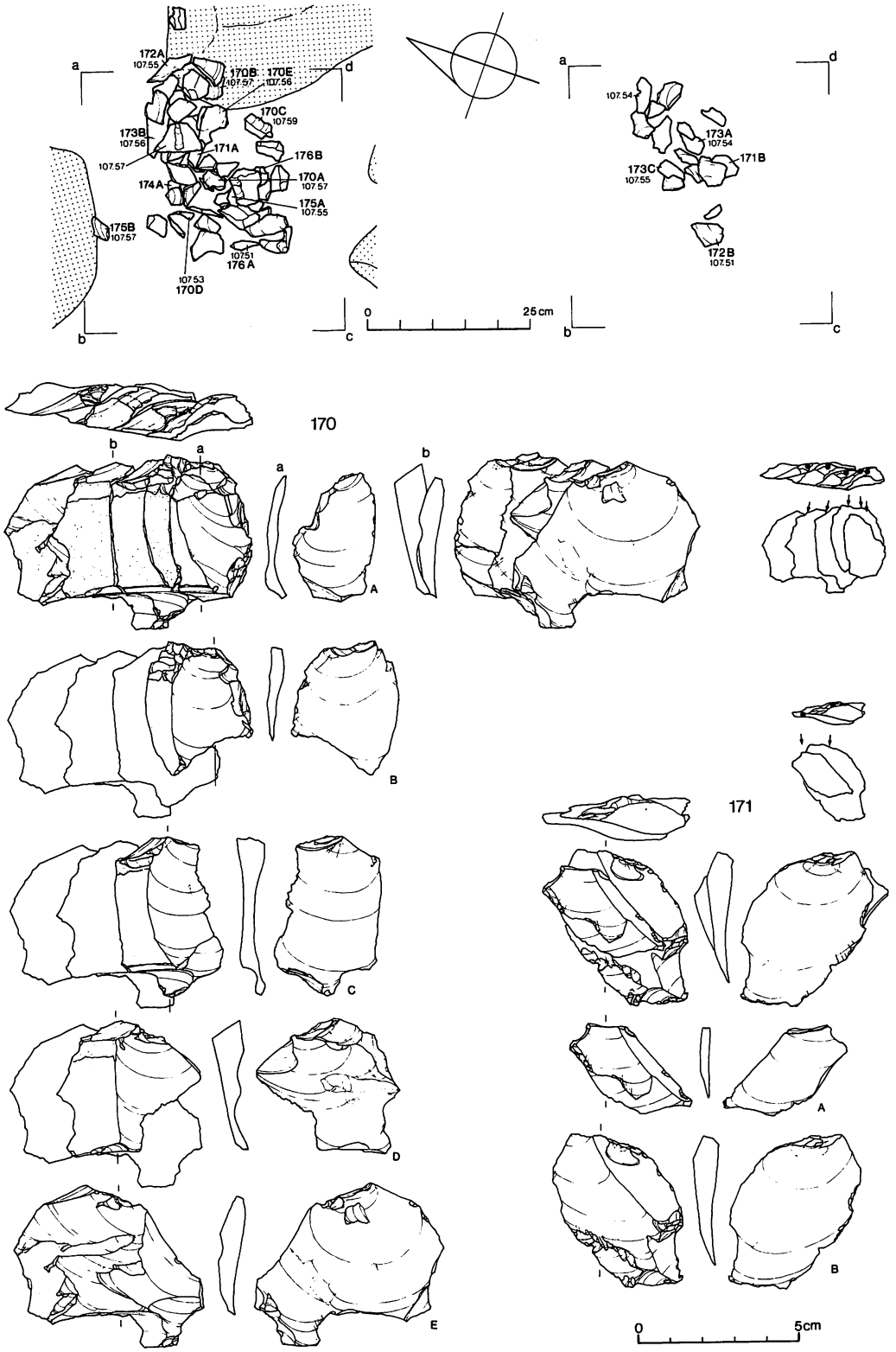
図Ⅴ－63　包含層出土の石器(7)



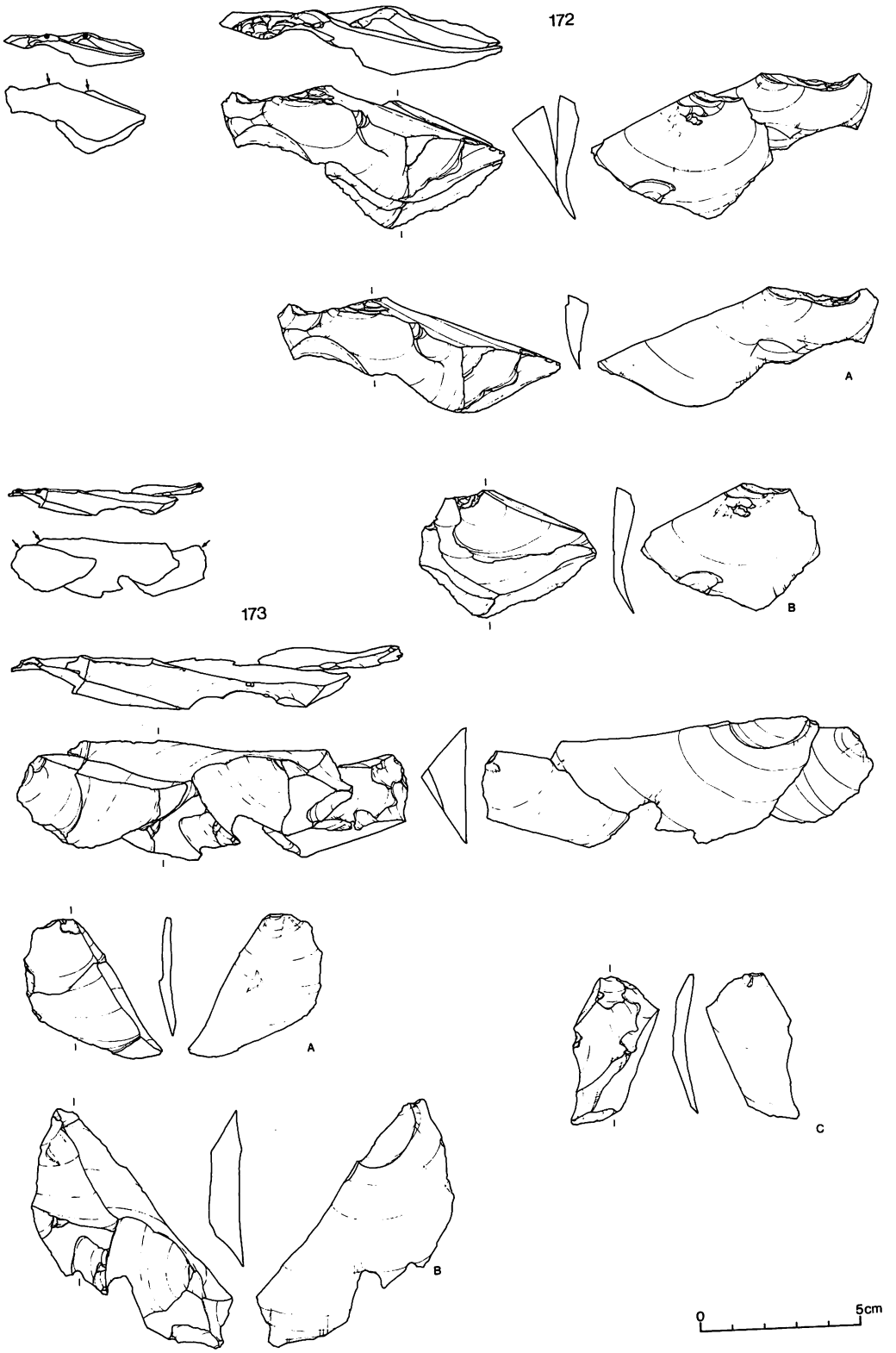
図Ⅴ－64　包含層出土の石器，土・石製品(8)



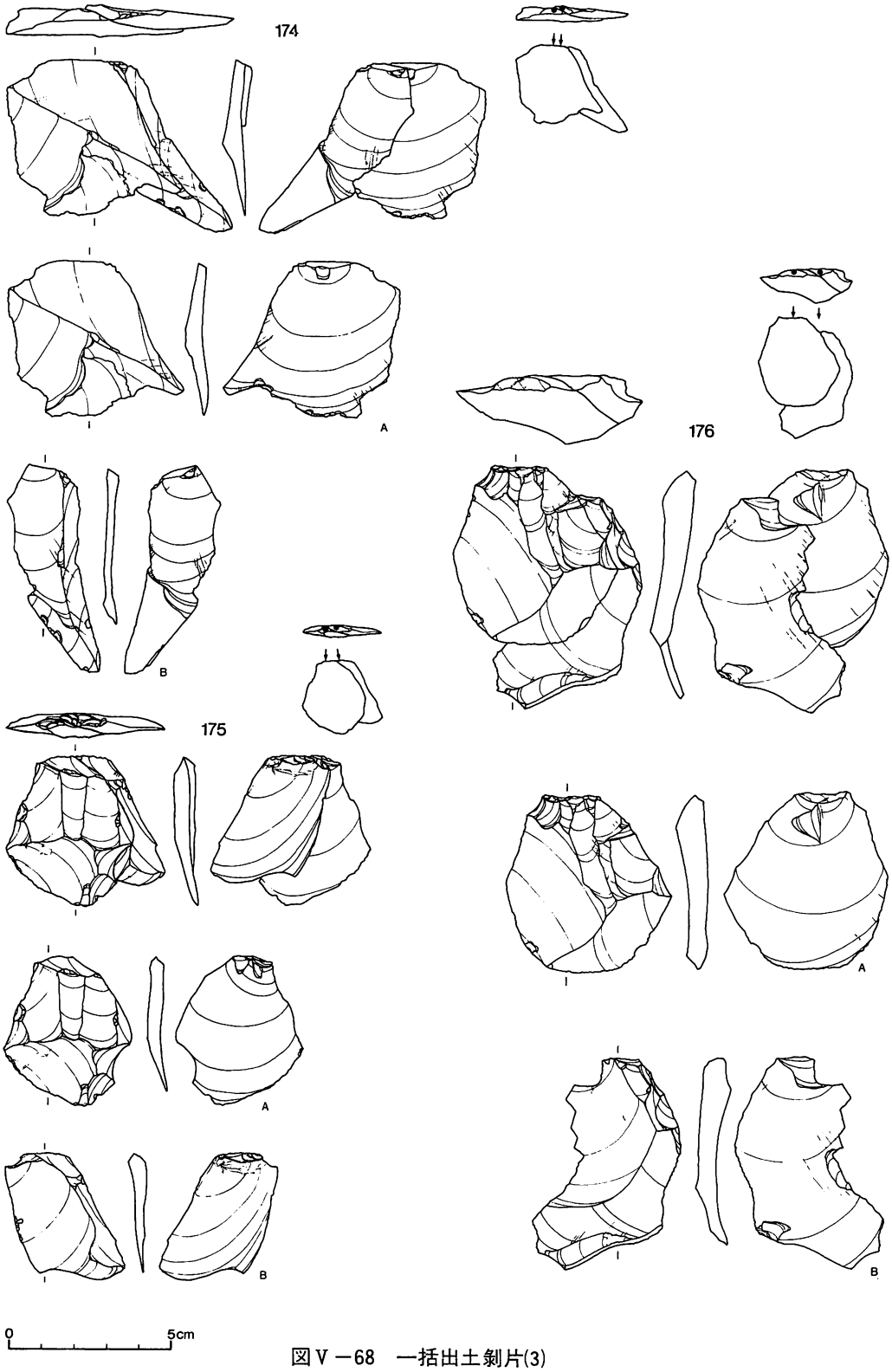
図Ⅴ－65　包含層出土の石器(9)



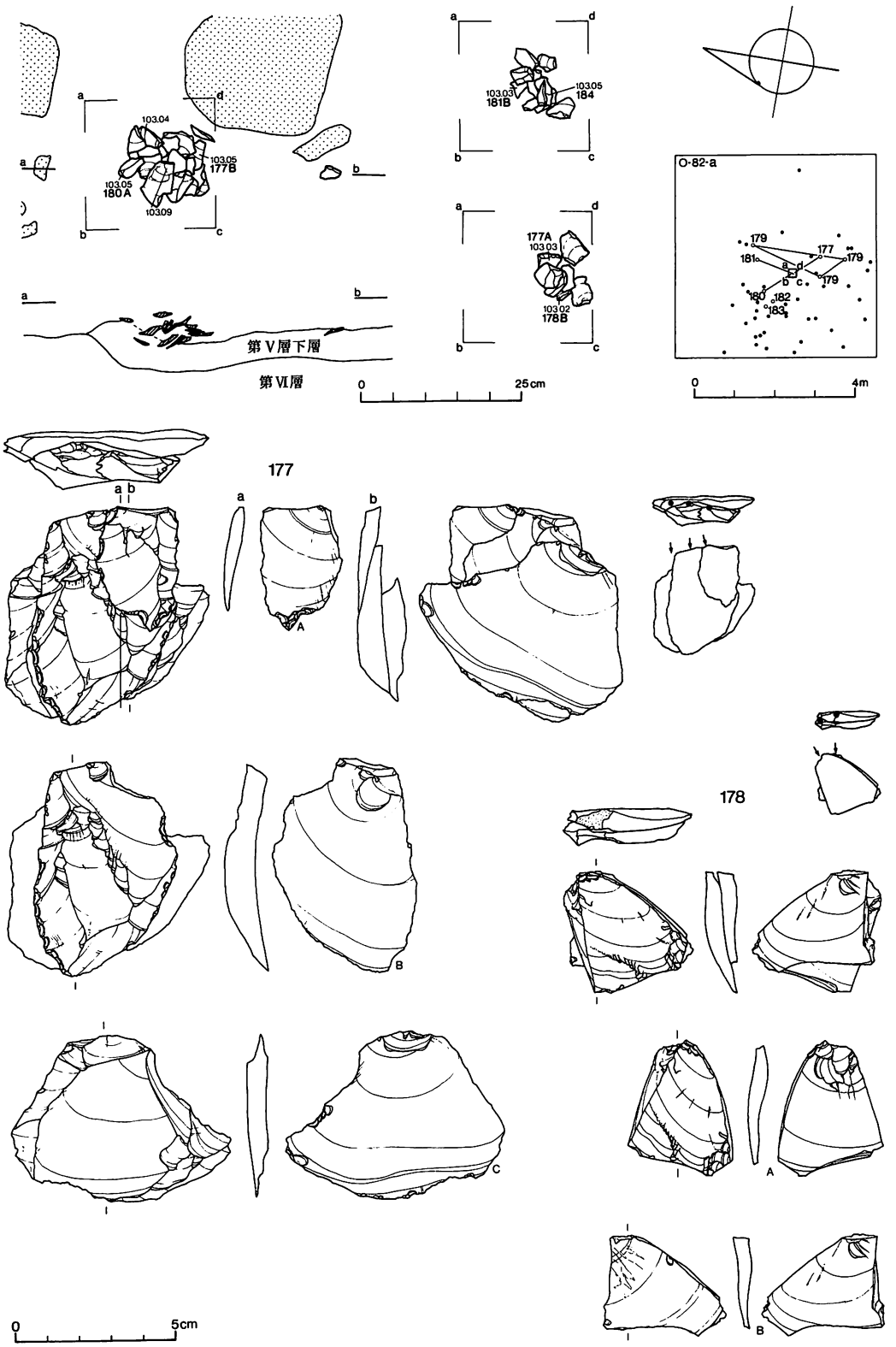
図Ⅴ－66　一括出土剝片(1)



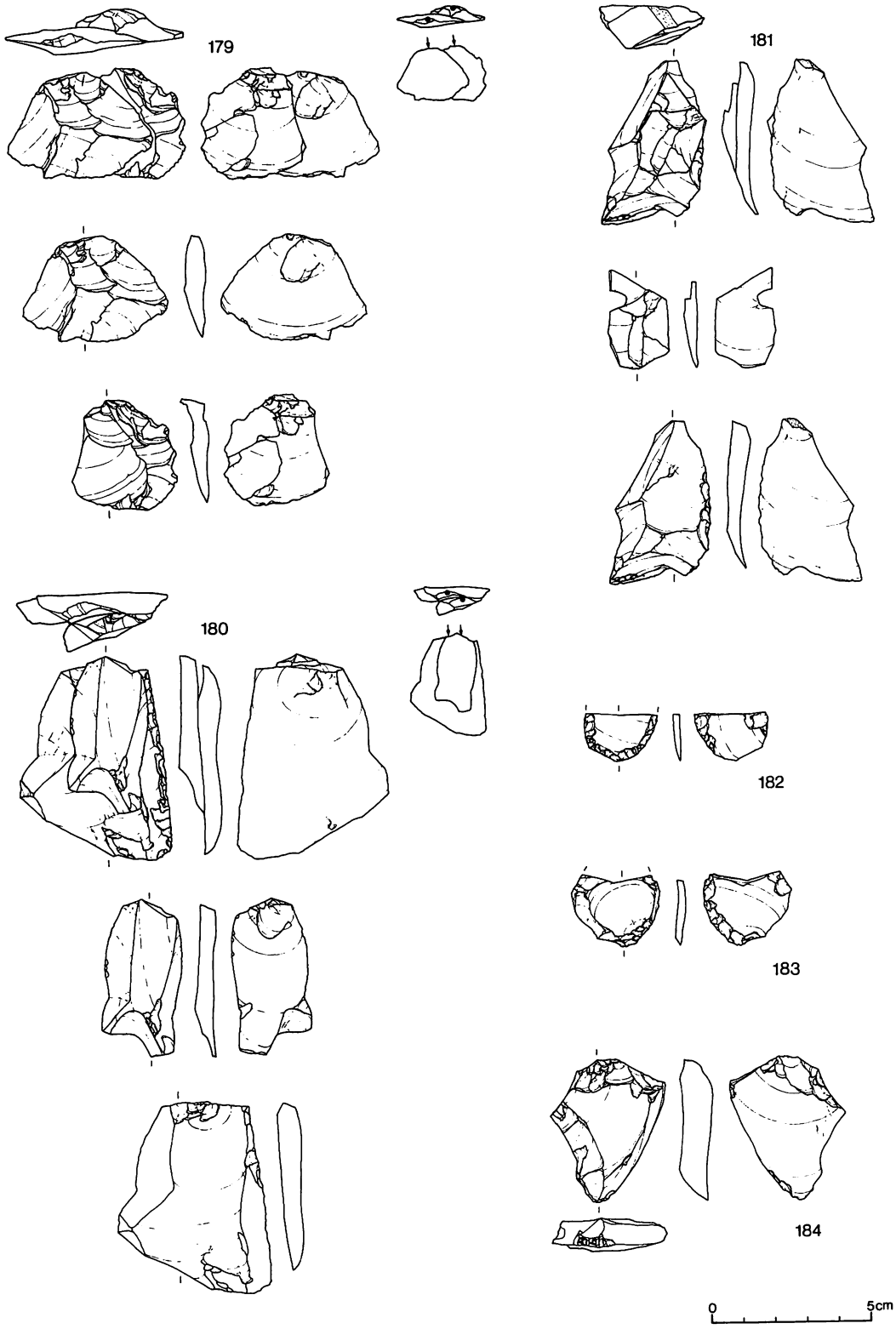
図V－67　一括出土剝片(2)



図Ⅴ－68　一括出土剝片(3)



図V－69　一括出土剝片(4)



図Ⅴ－70　一括出土剝片(5)

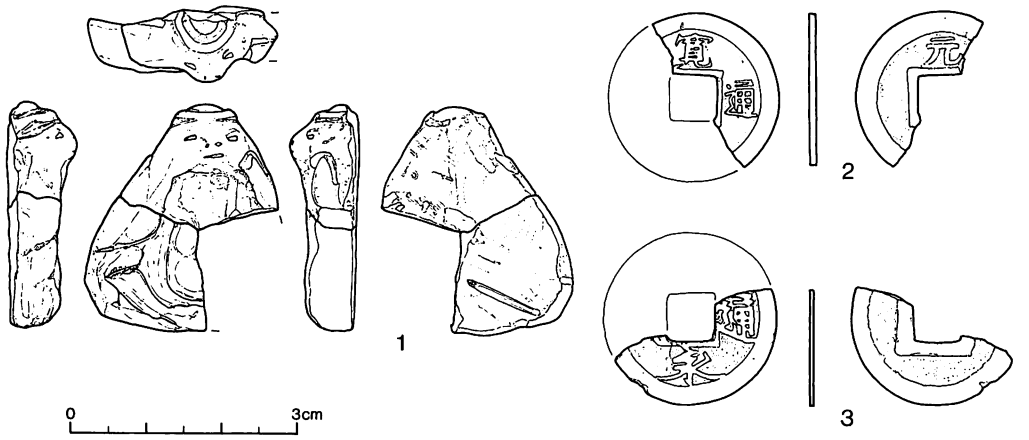
(3)　**その他**（図V－1～3）

図V－71－1は，〝土面子〟〝泥めんこ〟などと呼ばれるものの一種と思われる，橙褐色を呈した素焼きの土製品である。一辺が3.2 cm程の三角形で，最大厚0.9 cm，現存部の重さ4.0 g。型抜きされた図柄は恐らく河童で，胡坐をかいて瓢箪でも抱えているようなレリーフらしいが，⅓程が欠失しており，断定はできない。眼や鼻，口などは型おこしの後，先の鋭い工具によって描き加えられている。裏面には，指紋が残されている。

2・3は寛永通宝で，ともに方孔の対角線沿いに半分に割れている。2は「通」字がいわゆる「コ頭通」で，背に「元」字があるもの。推定直径22.6 mm，孔径6.0 mm，厚さ1.17 mm，現存重量1.1 g。元字銭は摂津高津新地で寛保元年（1741）に初鋳されている。3はやや肉太な筆致の文字がみられるもので，「永」字の初画の頭点が草書体となっている。推定直径22.8 mm，孔径6.0 mm，厚さ0.86 mm，現存重量1.0 g。

泥めんこの北海道での報告例は寿都町寿都3遺跡にあり，報告書には千葉県から数点の寛永通宝とともに出土したという類品も紹介されている（内山1979）。また，宮宏明氏の御教示によれば，余市町大川町遺跡でも，今年度の調査で，泥めんこが2個検出されたという。

寛永通宝の出土例は道内でもかなり多い。例えば上ノ国町勝山館跡（松崎ほか1981・1982・1983・1986）や松前町福山城跡（久保1986・1988・1989）、上磯町松前藩戸切地陣屋跡（北埋文1982・1984），白老町仙台藩陣屋跡（長沼編1982），伊達市有珠善光寺2遺跡（長谷川1986）など，史跡整備に伴う調査では必ずといっていいほど報告があり，勝山館館神八幡宮跡周辺部では特に出土量が多く，寛永通宝が鋳造年代別に集成されている（藤田1983）。また，旧街道筋の千歳市美々8遺跡（北埋文1982）や，アイヌ期の苫小牧市弁天貝塚（佐藤編1987・1988・1989）などでも少なからず発見されている。これらは貨幣として流通していた寛永通宝である。本遺跡の2例は，欠損品であり，恐らく泥めんこと同様に（金刺1974，市立市川歴史博物館1983，後藤1986），もっぱら〝意銭（ぜにうち）〟〝穴一（あないち）〟などと呼ばれる遊びの道具として利用されていたものと思われる。（高橋　和樹）



図V－71　泥めんこ・銅銭

表Ⅴ－9　掲載土器一覧

番号	発掘区・遺構番号	層　位	分類	器形	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	同一個体点数
1	M－77－c N－77－c・d O－78－a	Ⅵ上・Ⅵ	Ⅰa	深鉢	－ －	21.4 － －	－	9
13	O－85－d	Ⅵ－⑨′	Ⅲ	深鉢	－	－	8.9	6
14	O－85－c	Ⅵ－⑨′	Ⅲ	深鉢	－	－	9.2	8
15	K－89－b・L－87－c	Ⅰ・Ⅴ	Ⅲ	深鉢	－	－	10.7	9
44	M・N－77－c	Ⅵ上	Ⅳb	深鉢	－	29.0	－	12
45	O－76－c・P－76－d	Ⅴ・Ⅵ	Ⅳb	深鉢	－	26.3	－	55
46・47	M－77－a・b・c	Ⅰ・Ⅵ上・Ⅵ	Ⅳb	深鉢	－	－	6.0	13
53	N－82－c・d O－82－a・d O－82－c・P－83－d	Ⅴ・Ⅴ下	Ⅳc	深鉢	－	35.3	－	145
54	N－84－d O－83－d・c		Ⅳc	深鉢	－	12.9	－	35
55	O－82－a・b・c・d O－83－a・c	Ⅴ・Ⅵ・Ⅵ上	Ⅳc	深鉢	－	36.7	－	101
56	P－82－a	Ⅵ	Ⅳ	深鉢	23.3	29.8	5.8	61
57	L－85－a・d	Ⅴ下	Ⅳc	深鉢	32.1	－	－	167
58	N－83－b・c・d O－83－c・d O－84－a	Ⅴ・Ⅵ・Ⅵ上	Ⅳc	深鉢	18.4	20.7	6.0	36
59	K－89－c・L－88－a・b・c L－89－c・d L－90－d・M－89－a	Ⅴ・Ⅵ	Ⅳc	深鉢	－	26.1	－	26
60	K－88－b	Ⅵ	Ⅳc	深鉢	22.2	24.2	7.7	195
61	L－84－a・c・d L－85－a・b	Ⅴ上・Ⅴ下・Ⅵ	Ⅳc	深鉢	－	23.5	－	229
62	K－84－c L－84－b・c		Ⅳc	鉢	14.9	26.7	5.2	15
63	O－82－a・b・c		Ⅳc	壺	－	11.2	－	37
66	K－84－c・d K－85－a・c・d L－85－a・b	Ⅴ上・Ⅴ下	Ⅳc	深鉢	－	－	6.9	37
67・124	K－84－a・K－85－d L－84－b・c L－85－a・b	Ⅴ下・Ⅵ	Ⅳc	深鉢	－	－	5.2	55
68・106	J・K－85－d K－86－a・d	Ⅰ・Ⅴ・Ⅴ下・Ⅵ	Ⅳc	深鉢	－	－	4.9	157
69	J－85－c・K－84－d K－85－b・c・d L－84－d	Ⅵ下	Ⅳc	深鉢	－	－	5.3	40
70	J－89－b K－89－b・c・d L－89－d		Ⅳc	深鉢	－	－	6.2	17
71	K－83・84－c K－85－d・L－84－a・d L－85－b・M－85－a	Ⅰ・Ⅴ上・Ⅴ下・Ⅵ	Ⅳc	深鉢	－	－	4.8	42
72	K－83－c・d K－84－c N－82－a	Ⅰ・Ⅴ上・Ⅵ	Ⅳc	壺？	－	－	5.1	44
73	L－84－d・c	Ⅴ下	Ⅳc	深鉢	－	－	6.8	4
74	L－84－c	Ⅴ下	Ⅴc	深鉢	－	－	8.2	3
150	L－89－a	Ⅴ	Ⅴc－1	深鉢	6.2	8.9	2.0	12
151	M－83－d	Ⅴ下	Ⅴc－1	深鉢	－	11.2	－	8
152	M－83－b	Ⅵ	Ⅴc－1	深鉢	－	15.3	－	64
153	N－82－b・c・d N－83－a	Ⅴ	Ⅴc－1	深鉢	－	13.1	－	20
154	N－88－b	Ⅴ	Ⅴc－1	深鉢	－	12.1	－	28
155	M－87－b・c・d　N－86－d N－87－a・b・c d　M－88－c	Ⅴ・Ⅵ	Ⅴc－1	深鉢	17.2	19.8	7.1	45
156	M－87－b N－87－a・d	Ⅴ・Ⅵ	Ⅴc－1	深鉢	－	23.2	－	10
157	M－83－a・d	Ⅵ	Ⅴc－1	深鉢	－	28.2	－	245
158	M－83－d　M－84－a L－83－b・c L－84－a・b・c・d	Ⅴ下・Ⅵ	Ⅴc－1	深鉢	21.9	20.4	6.0	64

番号	発掘区・遺構番号	層　位	分類	器形	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	同一個体点数
159	P－84－b	VI－⑧	Vc－1	深鉢	14.4	16.3	6.0	35
160	P－82・83－d	V	Vc－1	深鉢	21.1	19.5	8.5	263
161	K－85－c M－87－c N－86－d N－87－a・d O－86－d O－87－a・c・d	V・V下・VI	Vc－1	鉢	12.3	21.9 －	7.2	27
162	M－87－b・c N－87－a O－86－d	V・VI	Vc－1	鉢	－	－	6.2	9
163	M－87－c N－87・89－d	V	Vc－1	鉢	－	18.3	－	14
164	M－82－d M－83－a・b	IV	Vc－1	鉢	9.9	19.4	8.5	48
165	N－87－d O－87－a	V	Vc－1	壺	－	10.4	－	25
166	L－88－b・c	V・IV	Vc－1	壺	－	10.8	－	10
168	M－82－c・d M－83－a・b・d	IV	Vc－1	壺	－	－	7.0	42
171	L－89－d	V	Vc－1	鉢	－	－	3.8	3
172	M－83－d	V下	Vc－1	鉢	－	－	8.2	2
173	M－88－b	V	Vc－1	鉢	－	－	5.4	1
174	M－89－c	V	Vc－1	鉢	－	－	7.3	2
175	M－83－d	V下	Vc－1	深鉢	－	－	4.3	2
176	L－84－a・b	I・VI	Vc－1	深鉢	－	－	8.3	5
222	M－82－c	V下	Vc－2	舟形	8.3	13.5	10.2	24
223	P－83－a	I	Vc－2	深鉢	－	－	5.5	25
224	P－82－d・P－83－a	V・VI	Vc－2	鉢	33.6	29.4	13.3	238
232	L－90－c	V	VIc	深鉢	－	33.2	－	392
233	L－88－a・b M－88－a・b O－87－b	V・VI・VI－2	VIc	深鉢	－	12.5	－	29
234	F－110 L－84－d	V下・焼土中	VIc	深鉢	－	－	6.0	
235・a・b	O－85－b P－84－a・b Q－84－a	V上・VI・VI－⑥	VIc	深鉢	－	－	6.9	15
236・241	L－88－b M－88－a	V	VIc	深鉢	－	－	10.2	63
244	F－41・L－85－b	焼土中	VIIa	片口	－	18.2	－	7
245	L－84－c・d L－85－a・b L－86－d	V上・V下・VI	VIIa	坏	8.0	16.2	－	33
246	O－87－d	VI	VIIa	注口	－	11.9	－	35
247	O－85－d	VI－⑥・⑨	VIIa	片口	10.9	13.3	6.7	9
248	M－83－d	V下	VIIa	鉢	5.8	8.2	4.3	4
249	L－84－c・d L－86－b	V下・VI	VIIa	片口	9.2	13.3	7.1	25
250	M－83－b・d N－83－d N－84－a	V下・VI	VIIa	甕	22.1	15.0	6.9	32
251	L－85・86－b	I・VI	VIIb	坏	－	15.6	－	16
252	N－82－c O－82－a・b	V・V上・V下・VI上	VIIb	坏	7.0	15.4	5.4	8
253	L－82－a O－82－a・b	V・V上・VI	VIIb	甕	－	18.5	－	24
254	K－84－c L－84－d L－87－c	V	VIIb	甕	－	26.9	－	224
272	L－84－c	V下	VIIa	甕	－	－	6.2	1
273	M－86－a		VIIa	甕	－	－	7.3	12

表V－10　掲載拓影土器一覧

番号	発掘区・遺構番号	層　位	分類	器形	同一個体点数
2	P-74-d	VI	Ia	深鉢	2
3	K-90-d	V	Ia	深鉢	2
4	O-75-d	VI上・VI	Ia	深鉢	2
5	M-83-c M-84-a K-84-c	I・V下・VI	Ia	深鉢	7

番号	発掘区・遺構番号	層　位	分類	器形	同一個体点数
6a·b·c	J-89·90-b·K-88-c K-89-c·d L-89-d	V·V上·V下·VI	Ⅰb	深鉢	13
7	J-89-b	V	Ⅰb	深鉢	1
8	J-89-d	V	Ⅰb	深鉢	1
9 10 11	K-89-a L-89-d 表採	Ⅰ·V·VI	Ⅰb	深鉢	19
10	L-83-d	VI	Ⅱ	深鉢	8
11	O-85-a·b·c N-84-b	VI-⑧·⑨′·⑩	Ⅲ	深鉢	34
12	K-85-b·c·d L-84-b L-85-a	Ⅰ·V上·VI·VI下	Ⅲ	深鉢	398
16	L-90-a M-90-a·d N-89-d N-90-a·d	V	Ⅲ	深鉢	14
17	N-77-a	VI	Ⅲ	深鉢	1
18	O-74-c	VI	Ⅲ	深鉢	1
19	N-85-d	VI	Ⅲ	深鉢	1
20	M-77-a	VI	Ⅲ	深鉢	1
21-a·b	M-76-d N-76-a	VI·VI上	Ⅲ	深鉢	2
22	M-77-c	VI	Ⅲ	深鉢	1
23-a·b·c	N-76-c N-77-b O-75-d	VI	Ⅲ	深鉢	7
24	N-76-d	VI	Ⅲ	深鉢	1
25	K-88-c L-87-d	V·VI	Ⅲ	深鉢	3
26	L-89-d	V	Ⅲ	深鉢	5
27	O-85-c	VI-⑨′	Ⅲ	深鉢	2
28	N-77-b	VI	Ⅲ	深鉢	1
29	O-77-a	VI	Ⅲ	深鉢	34
30-a·b	O-89-c·d O-90-a·b	Ⅰ·V	Ⅲ	深鉢	23
31	O-75-b	VI	Ⅲ	深鉢	1
32	N-89-a	V	Ⅲ	深鉢	1
33	L-83-d	VI	Ⅲ	深鉢	4
34	N-76-c	VI	Ⅲ	深鉢	1
35	N-76-a	VI上	Ⅲ	深鉢	1
36-a·b	N-75-d N-77-b N-78-a P-75-d	Ⅰ·VI·VI上	Ⅲ	深鉢	8
37	O-87-a·b	V·VI-②	Ⅲ	深鉢	2
36-a·b	M-89-a	V	Ⅲ	深鉢	2
39	P-84-b	VI-⑧	Ⅲ	深鉢	1
40	O-75-d	VI	Ⅲ	深鉢	1
41	O-84-c	VI	VIa	深鉢	12

番号	発掘区・遺構番号	層　位	分類	器形	同一個体点数
42	N-77-c	VIa	Ⅳa	深鉢	13
43	O-85-b·c·d	④·⑤·⑥·⑨′·VI	Ⅳa	深鉢	163
48	N-77-b·c·d	VI·VI上·VI下	Ⅳb	深鉢	205
49-a·b	N-77-c	VI	Ⅳb	深鉢	557
50	P-76-d	VI	Ⅳb	深鉢	2
51	O-77-c	VI中	Ⅳb	深鉢	
52	U-75-a	Ⅰ	Ⅳb	壺	1
64	M-77-d N-77·78-d	VI	Ⅳc	深鉢	10
65	K-89-c L-87-d	V·VI上	Ⅳc	深鉢	12
75	N-84-b O-83-a·b·c·d O-84-a·b P-83-a	Ⅰ·V·VI·VI上	Ⅳc	深鉢	39
76	N-84-b·c·d O-84-a·d	Ⅰ·V·VI	Ⅳc	深鉢	44
77	O-84-c	V	Ⅳc	深鉢	2
78-a·b	O-82-a·b·c·d	V·VI·VI上	Ⅳc	深鉢	43
79-a·b	J-85-b K-84·85-d L-84·86-c	V下	Ⅳc	深鉢	11
80-a·b	N-82-b·c·d O-81-d	V·V下·撹乱	Ⅳc	深鉢	51
81	O-82-b	V	Ⅳc	深鉢	3
82	O-82-a·d	V·VI	Ⅳc	深鉢	14
83	J-88-c K-88-a·c·d L-88-a	Ⅰ·V·VI	Ⅳc	深鉢	72
84	J-90-b L-88·89-d	V·VI	Ⅳc	深鉢	14
85	L-84-c	V下	Ⅳc	深鉢	
86	K-84-d	V下	Ⅳc	深鉢	2
87	K-89-c L-88-a·b·c L-89-c·d L-90-d M-89-a	V·VI	Ⅳc	鉢	26
88	M-74-c	Ⅰ	Ⅳc	深鉢	
89	N-84-b·c·d	Ⅰ·V	Ⅳc	深鉢	8
90	O-82-d O-83-a P-82-c	V·VI	Ⅳc	深鉢	40
91	K-84-c L-84-c	V上	Ⅳc	深鉢	
92	L-84-c	V下·VI	Ⅳc	深鉢	13
93-a·b·c	L-65-a	V	Ⅳc	深鉢	
94	N-84-d P-84-b	Ⅰ·VI上	Ⅳc	深鉢	10

番号	発掘区・遺構番号	層　位	分類	器形	同一個体点数
95	O-82-a·b·d	V·VI·VI上	IVc	深鉢	16
96	L-84-d	V下	IVc	深鉢	149
97	K-85-c·d L-86-a	V下	IVc	深鉢	5
98-a·b	N-82-c O-82-a·b·d	V·上·下·VI·VI上	IVc	深鉢	79
99	J-84-b·c K-84-a·b·c·d K-85-c·d L-86-a L-87-b		IVc	深鉢	40
100	L-84-c	V下	IVc	深鉢	2
101	J-85-c K-83-c K-85-c	I·VI	IVc	深鉢	60
102	N-82-c	V·V上	IVc	深鉢	32
103	J-89-c J-90-b K-89-b·c K-90-a L-89-a	V·V下·VI	IVc	深鉢	50
104-a·b	J·K-84-c K-85-c·d L-86-a·b·d	V上·V下·VI	IVc	深鉢	23
105-a·b	J-89-c J-90-b K-89-a·b K-89·91-d L-89-c L-87-d M-89-d	I·V·V下·VI	IVc	深鉢	15
107	L-85-b	VI	IVc	深鉢	3
108	J-90-b K-89-c K-90-a·d	V·VI	IVc	鉢	21
109	F-10 K-89-c·d	V·VI·焼土中	IVc	深鉢	17
110	J-89-c K-89-b·c L-89-a·d	V·V上·VI·VI上	IVc	深鉢	44
111	N-82-c	V	IVc	浅鉢	2
112	L-83-c	VI	IVc	浅鉢	1
113	L-84-b	VI	IVc	浅鉢	2
114	M-82-a	V下	IVc	鉢	14
115	J-85-c	VI	IVc	浅鉢	
116	N-84-b	I	IVc	浅鉢	1
117	K-84-c	V·VI	IVc	鉢	9
118	O-83-b P-84-a	I	IVc	浅鉢	2
119-a·b·c	J-89-b K-86-b L· M-89-a	V	IVc	注口	10
120	O-84-c	V	IVc		
121	N-76-c N-77-d	I·VI	IVc	深鉢	9
122	O-82-d	VI	IVc	深鉢	1
123-a·b·c	N-84-b·c O-84-a· d	V·VI	IVc	深鉢	9
125	J-K-89-c K-90-d	I·V	IVc	深鉢	11
126	J-89·90-b K-90-a	V	IVc	深鉢	23
127	P-84-b	VI上	IVc	深鉢	8
128	K-89-a·b·c	V·VI	IVc	深鉢	43
129	K-86-b	VI	IVc	深鉢	11
130	J-90-b K80-d K-90-a M-89-b	V·V上·V下	IVc	深鉢	27
131	L-84-c L-85-b·d	V下·VI	IVc	深鉢	36
132	M-74-c	I	IVc	深鉢	
133	N-82-c P-83-a	V·VI·VI上	IVc	深鉢	14
134	K-85-d	V下	IVc	浅鉢	
135	L-85-a	V下	IVc	深鉢	8
136	K-85-c·d	V下	IVc	鉢	28
137-a·b	K-89-a·b·c	V·VI·VI上	IVc	浅鉢	31
138	N-82-a·c	I·V下·VI上	IVc	壺	10
139	N-84-b	V	IVc	壺	1
140	L-84-d	V上	IVc	壺	
141	N-84-b	VI	IVc	壺	
142	L-84-a·c·d	V上·V下·VI	IVc	壺	9
143	K-85-d	V下	IVc	壺	
144	N-83-b N-84-b·d O-83-c O-84-a	I·V·VI	IVc	壺	12
145	M-84·85-d	V下·VI	IVc	壺	4
146	K-85-d L-85-a·b	I・V・VI	IVc	壺	15
147	J-89-b·c·d K-89-a·b·c	VI	IVc	深鉢	16
148	O-84-a	VI	IVc	深鉢	14
149	L-85-a	V上	IVc	深鉢	
167	M-83-a	VI	Vc-1	壺	4
169	L-89-a	V　Vc-1	Vc-1	深鉢	2
170	M-83-c	I	Vc-1	深鉢	10
177	M-83-a	VI	Vc-1	深鉢	2
178	N-87-a N-88-b O-87-a d·O-87	V·VI 撹乱	Vc-1	深鉢	43
179	L-88-c·d L-89-a	V·VI	Vc-1	深鉢	11

番号	発掘区・遺構番号	層　位	分類	器形	同一個体点数
180	M-87-c M-88-b M-89-c N-87-a	I·V·VI	Vc-1	深鉢	13
181	L-87-c L-88-a·b·c M-87-c O-87-d	V·VI	Vc-1	深鉢	49
182	M-83-b	VI	Vc-1	深鉢	30
183	L-88-a·c·d L-89-a·b M-89-a·b	V上·V·VI	Vc-1	深鉢	142
184	L-88-a	VI	Vc-1	深鉢	3
185	M-83-a·c·d	VI	Vc-1	深鉢	5
186	L-83-d	VI	Vc-1	深鉢	2
187	N -83-d	V	Vc-1	鉢	2
188	M-88-d	V	Vc-1	鉢	3
189	M-87-c N-87-a·d N-88-d	V	Vc-1	鉢	11
190	L-88-a·c·d	VI	Vc-1	鉢	20
191·221	L-88·89-bM-87-c M-88·89-b N-87-c·d N-88-a·b	V·VI	Vc-1	鉢	21
192	M-83-b N-83-d	V·VI	Vc-1	鉢	12
193	M-83-a·b·d	V下·VI	Vc-1	鉢	9
194	L-88-a·b·d L-89-a·c·d N-87-d	V·VI	Vc-1	鉢	22
195	L-83-c	V下·VI	Vc-1	鉢	3
196	N-82-a	VI	Vc-1	鉢	6
197	K-84-a	VI	Vc-1	鉢	7
198	K-85-d	V下	Vc-1	鉢？	1
199·215	M-88-b	V	Vc-1	浅鉢	12
200	N-84-a	V下	Vc-1	浅鉢	1
201	N-87-d	V	Vc-1	浅鉢	2
202	M· N-82-c M-83-a	VI	Vc-1	浅鉢	5
203	M-83-c	VI	Vc-1	壺	1
204	M-82-c	VI	Vc-1	壺	2
205	M-89-c	V	Vc-1	壺	3
206	O-87-a·d	V	Vc-1	深鉢	5
207	K-86-a	VI	Vc-1	深鉢	2
208	M-83-a	VI	Vc-1	深鉢	6
209	M-88-b N-87-a·d O-87-a	V	Vc-1	深鉢	47
210	L-83-b·c L-84·85-b	V下·VI·撹乱	Vc-1	深鉢	46
211	N-87-d	V·VI	Vc-1	深鉢	70
212	O-87-a	VI	Vc-1	鉢	2
213	M-83-b L-88-c L-89-a·b	V·VI	Vc-1	鉢	23
214	M-83-a·d	V上·V下·VI	Vc-1	鉢	13
216	M-82-d N-82-c	V下·　VI	Vc-1	鉢	10
217	M-82-d	VI	Vc-1	壺	3
218	M-83-d	VI	Vc-1	壺	3
219	M-83-d	VI	Vc-1	壺	1
220	M-82-c	V下	Vc-1	深鉢	8
225	K-85-b	V上	Vc-2	深鉢	
226	L-83-d	I	Vc-2	鉢	
227	K-85-c·d	V下	Vc-2	鉢	
228	K-85-d	V下	Vc-2	鉢	2
229	K-85-d	V下	Vc-2	舟形	10
230	J-86-a	I	Vc-2	浅鉢	
231	M-82-c	V下	Vc-2	深鉢	1
237	L-82-d	VI	VIb	鉢	2
238	N-83-a	V	VIb	深鉢	6
239	K-84-c	V上	VIb	深鉢	1
240	N-82-d	VI	VIb	深鉢	2
242	N-85-a	V	VIc	深鉢	
243	O-85-c	VI-⑥	VIc	深鉢	1
255	K-83-c	VI	VIIa	深鉢	2
256-a·b	L-85-a·b	I	VIIa	鉢	4
257-a·b	K-84-c·L-85-b	I	VIIa	甕	2
258	O-82-a	V·VI	VIIa	鉢	23
259	L-89-d	V	VIIa	坏	2
260	L-85-b	I	VIIa	鉢	13
261	L-84-d	V下	VIIa	注口	5
262	M-85-a·b·d	V	VIIa	甕	7
263	L-85-b	I	VIIa	甕	2
264	L-84-c	V下	VIIa	深鉢	
265	L-84-b	V下	VIIa	甕	3
266	L-84-d	V下	VIIa	甕	7
267	P-82-c	V	VIIb	甕	1
268	K-85-a	I	VIIb	甕	1
269	L-85-b N-85-d M-86-a	I·VI	VIIa	甕	47
270	L-84-c	V下	VIIa	甕	1
271	O-85-c	VI-②′	VIIa	甕	1

表V－11　掲載石器一覧

番号	出土位置	層位	器種名	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石質
1	L-99	Ⅵ	石　鏃	46.5	10.2	22.4	1.0	珪質頁岩
2	L-88-c	Ⅵ	石　鏃	12.1	16.2	3.4	0.4	珪質頁岩
3	N-86-b	Ⅴ	石　鏃	20.0	7.7	2.2	0.3	黒曜石
4	L-83-c・84-a	Ⅴ下	石　鏃	(18.0)	9.0	2.7	(0.4)	黒曜石
5	L-84-c	Ⅴ上	石　鏃	20.0	9.5	2.2	0.4	黒曜石
6	O-85-b	Ⅴ	石　鏃	(13.0)	9.3	2.0	(0.2)	黒曜石
7	L-88-b	Ⅴ	石　鏃	(19.0)	10.7	2.2	(0.4)	黒曜石
8	N-87-c	Ⅵ	石　鏃	(18.5)	13.0	(2.5)	(0.5)	黒曜石
9	L-84-d	Ⅴ下	石　鏃	23.4	(11.3)	2.5	(0.5)	黒曜石
10	L-84-c・d	Ⅴ下	石　鏃	25.7	10.3	2.1	0.4	黒曜石
11	K-86-b	Ⅰ	石　鏃	27.0	10.4	4.6	0.8	黒曜石
12	L-89-d	Ⅴ	石　鏃	21.3	16.3	2.4	(0.6)	珪質頁岩
13	M-77-c	Ⅵ	石　鏃	20.3	16.8	2.4	0.6	黒曜石
14	N-87-c	Ⅴ下	石　鏃	20.5	16.5	3.2	0.9	黒曜石
15	N-89-d	Ⅴ	石　鏃	27.4	16.6	3.5	1.2	珪質頁岩
16	O-63-a	Ⅵ	石　鏃	(26.7)	18.8	3.8	(1.2)	黒曜石
17	O-74-a	Ⅰ	石　鏃	26.6	13.8	4.0	1.4	黒曜石
18	L-84-d	Ⅴ下	石　鏃	27.5	14.7	3.6	(1.4)	黒曜石
19	M-92-a		石　鏃	38.1	12.7	2.9	1.4	珪質頁岩
20	P-75-d	Ⅰ	石　鏃	38.8	16.0	4.0	2.0	黒曜石
21	N-89-c	Ⅰ	石　鏃	27.3	8.8	3.5	0.8	黒曜石
22	L-84-d	Ⅵ	石　鏃	29.0	10.7	5.8	1.4	凝灰岩
23	M-85-a		石　鏃	18.7	8.6	3.7	0.6	黒曜石
24	N-90-d	Ⅴ	石　鏃	(17.0)	8.4	1.8	(0.2)	黒曜石
25	O-75-c	Ⅵ	石　鏃	16.4	10.4	1.6	0.2	珪質頁岩
26	O-85-d	Ⅵ	石　鏃	23.3	20.6	3.5	1.4	珪質頁岩
27	O-82-b	Ⅴ	石　鏃	25.8	27.7	4.5	1.7	黒曜石
28	L-85-b	Ⅰ	石　鏃	28.5	14.3	4.0	1.2	珪質頁岩
29	L-84-a	Ⅵ	石　鏃	28.8	12.4	4.0	1.1	黒曜石
30	O-83-a	攪乱	石　鏃	(27.9)	12.0	2.4	(0.7)	黒曜石
31	L-84-c	Ⅴ下	石　鏃	26.2	13.6	3.8	1.4	珪質頁岩
32	O-82-a	Ⅴ	石　鏃	27.5	11.5	4.5	0.9	黒曜石
33	N-84-c	Ⅰ	石　鏃	44.0	15.3	4.3	2.8	珪質頁岩
34	P-74-a	Ⅵ	石　鏃	48.1	15.6	5.0	2.4	黒曜石
35	N-76-c	Ⅵ	石　鏃	32.0	14.3	5.6	1.7	黒曜石
36	L-85-b	Ⅰ	石　鏃	35.2	13.5	4.4	1.6	黒曜石
37	L-85-b	Ⅵ	石　鏃	43.0	27.1	5.3	3.1	黒曜石
38	N-90-c	Ⅴ	石　鏃	35.8	17.1	4.4	2.6	黒曜石
39	L-64-c	Ⅴ	石　鏃	(18.0)	13.2	3.9	(0.7)	珪質頁岩
40	K-89-b	Ⅵ	石　鏃	20.0	14.5	4.5	1.1	珪質頁岩
41	L-89-d	Ⅴ	石　鏃	23.5	11.8	4.5	0.9	珪質頁岩
42	K-85-d	Ⅴ下	石　鏃	24.5	14.0	5.5	0.8	珪質頁岩
43	K-84-c	Ⅰ	石　鏃	19.2	14.3	5.3	1.1	黒曜石
44	L-84-d	Ⅴ下	石　鏃	22.4	14.2	4.0	1.0	黒曜石
45	L-84-d	Ⅴ下	石　鏃	(18.2)	16.4	3.7	(0.9)	黒曜石
46	表採	Ⅰ	石　鏃	27.8	17.5	4.8	1.5	黒曜石
47	N-83-d	Ⅴ	石　鏃	28.0	19.3	6.0	2.4	黒曜石
48	L-84-d	Ⅴ下	石　鏃	25.5	27.2	4.4	1.4	黒曜石
49	L-85-a	Ⅵ	石　鏃	(20.7)	18.4	3.4	(1.3)	黒曜石
50	N-90-c	Ⅴ	石　鏃	(28.5)	17.7	4.2	(1.6)	黒曜石

番号	出土位置	層位	器種名	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石質
51	K-90-b	Ⅰ	石　鏃	29.0	11.8	4.7	1.2	黒曜石
52	O-78-b	Ⅵ	石　鏃	33.9	11.6	3.8	1.1	黒曜石
53	M-82-d	Ⅵ	石　鏃	30.5	14.3	4.0	1.2	黒曜石
54	L-82-d	Ⅵ	石　鏃	29.0	13.5	3.5	1.2	黒曜石
55	K-88-c	Ⅴ	石　鏃	34.2	15.3	4.8	1.8	めのう
56	K-88-b	Ⅵ	石　鏃	37.4	17.5	5.2	2.4	黒曜石
57	M-83-b	Ⅵ	石　鏃	35.8	18.0	5.5	2.4	黒曜石
58	L-85-b	Ⅵ	石　鏃	21.0	(15.4)	3.3	(0.6)	黒曜石
59	N-82-b	Ⅴ下	石　鏃	23.7	12.7	3.1	0.4	黒曜石
60	O-82-a	Ⅴ	石　鏃	24.5	9.3	3.8	0.5	黒曜石
61	L-84-c	Ⅴ下	石　鏃	(21.2)	12.2	4.7	(1.0)	黒曜石
62	O-87-d		石　鏃	(22.8)	14.3	3.0	(0.7)	黒曜石
63	O-82-b	Ⅵ上	石　鏃	30.2	14.4	4.7	1.2	黒曜石
64	O-82-a	Ⅵ	石　鏃	28.0	14.5	4.0	1.0	珪質頁岩
65	L-84-d	Ⅴ下	石　鏃	26.6	15.3	3.0	0.8	黒曜石
66	K-84-b	Ⅰ	石　鏃	(23.9)	13.8	4.6	(1.1)	黒曜石
67	K-89-b	Ⅴ	石　鏃	(26.7)	14.8	5.0	(1.3)	黒曜石
68	L-84-b	Ⅵ	石　鏃	(25.2)	11.6	2.7	(0.6)	珪質頁岩
69	O-82-a	Ⅵ	石　鏃	(26.5)	14.0	4.5	(1.3)	珪質頁岩
70	L-84-a	Ⅴ下	石　鏃	(30.5)	13.2	5.3	(1.0)	珪質頁岩
71	L-89-d	Ⅵ	石　鏃	37.0	16.2	4.5	1.6	黒曜石
72	K-89-c	Ⅵ	石　鏃	35.7	15.7	4.0	1.2	黒曜石
73	O-82-d	Ⅴ	石　鏃	34.0	22.0	4.5	2.6	珪質頁岩
74	N-89-a	Ⅴ	石　鏃	34.5	21.7	5.2	2.3	黒曜石
75	M-83-d	Ⅵ	石槍又はナイフ	(44.0)	29.6	9.5	14.9	黒曜石
76	P-64-d	Ⅵ	石槍又はナイフ	(44.0)	28.5	11.0	(7.5)	黒曜石
77	K-89-a	Ⅴ	石槍又はナイフ	35.0	27.5	8.0	5.7	珪質頁岩
78	P-82-d	Ⅴ	石槍又はナイフ	(34.9)	27.2	9.2	(5.8)	黒曜石
79	K-85-d	Ⅴ下	石槍又はナイフ	(11.5)	(18.0)	(9.1)	(1.2)	珪質頁岩
80	L-84-c	Ⅵ	石槍又はナイフ	35.5	19.5	7.6	4.6	珪質頁岩
81	P-62-c	Ⅴ	石槍又はナイフ	(33.8)	23.2	5.3	(4.1)	黒曜石
82	P-81-c	Ⅴ	石槍又はナイフ	35.7	16.7	6.3	3.7	黒曜石
83	M-74-c	Ⅵ上	石槍又はナイフ	47.3	19.3	9.0	6.4	黒曜石
84	O-82-c	Ⅴ	石槍又はナイフ	82.2	20.0	9.0	11.7	珪質頁岩
85	J-89-b	Ⅰ	石　錐	37.6	38.9	5.5	4.8	黒曜石
86	O-82-d	Ⅴ	石　錐	21.4	9.9	4.4	0.8	珪質頁岩
87	K-85-b	Ⅴ下	石　錐	26.6	15.6	5.4	2.1	珪質頁岩
88	L-84-c	Ⅵ	石　錐	30.7	14.0	8.5	3.2	黒曜石
89	O-77-b	Ⅵ	石　錐	32.4	19.5	4.5	2.1	珪質頁岩
90	L-85-a	Ⅴ下	石　錐	(24.3)	14.0	6.5	(1.6)	珪質頁岩
91	L-65-b	Ⅵ	石　錐	32.5	15.0	6.4	3.0	珪質頁岩
92	O-82-d	Ⅴ	石　錐	40.3	17.4	7.0	4.8	珪質頁岩
93	O-82-a	Ⅵ	石　錐	(29.6)	6.6	5.0	(0.7)	黒曜石
94	K-85-c	Ⅴ上	石　錐	45.0	17.5	8.4	4.7	珪質頁岩
95	K-85-d	Ⅴ下	石　錐	49.3	16.2	5.4	2.5	珪質頁岩
96	N-77-b	Ⅵ	つまみ付ナイフ	90.1	18.3	7.5	12.1	珪質頁岩
97	O-87-b	Ⅵ	つまみ付ナイフ	75.2	25.0	9.8	17.1	珪質頁岩
98	O-82-b	Ⅵ上	つまみ付ナイフ	65.0	28.0	9.3	13.2	珪質頁岩
99	L-84-c	Ⅴ下	つまみ付ナイフ	(56.7)	35.6	5.8	(11.1)	珪質頁岩
100	L-83-d		つまみ付ナイフ	69.0	52.7	8.6	31.6	珪質頁岩

番号	出土位置	層位	器種名	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石質
101	L-84-c・85-b	I	スクレイパー	35.8	43.4	8.6	(12.8)	黒曜石
102	L-84-c	V下	スクレイパー	29.0	34.4	14.6	15.6	黒曜石
103	L-86-a	I	スクレイパー	26.6	31.0	10.2	7.2	黒曜石
104	L-84-c	V下	スクレイパー	30.3	32.5	14.5	14.2	黒曜石
105	L-85-b	I	スクレイパー	27.8	27.8	15.2	10.0	黒曜石
106	P-84-b	VI上	スクレイパー	26.6	30.7	12.2	12.5	黒曜石
107	L-84-d	V下	スクレイパー	26.0	27.5	15.8	10.4	黒曜石
108	L-85-a	風倒木	スクレイパー	24.5	29.6	13.0	6.7	黒曜石
109	L-85-b	I	スクレイパー	30.0	27.3	16.2	12.6	黒曜石
110	K-84-b	I	スクレイパー	22.2	28.0	14.5	9.0	黒曜石
111	L-84-c	V下	スクレイパー	18.3	24.3	15.0	4.7	黒曜石
112	M-86-a		スクレイパー	24.6	11.8	16.5	4.3	黒曜石
113	K-85-a	I	スクレイパー	27.4	21.0	9.8	4.5	黒曜石
114	L-84-c	V下	スクレイパー	36.5	28.0	11.0	8.2	黒曜石
115	O-75-d	VI	スクレイパー	68.0	21.7	6.3	9.3	珪質頁岩
116	L-84-a	VI	スクレイパー	67.5	56.0	9.0	38.5	珪質頁岩
117	K-85-b	I	スクレイパー	19.5	21.5	5.9	2.3	黒曜石
118	L-89-d	VI	スクレイパー	71.9	33.8	10.9	16.7	珪質頁岩
119	K-85-b	V上	スクレイパー	73.5	39.0	10.8	27.0	流紋岩
120	K-89-c	VI上	スクレイパー	55.0	34.0	11.3	15.5	珪質頁岩
121	L-84-d	V下	スクレイパー	61.3	28.5	12.5	19.4	珪質頁岩
122	L-84-d	V下	スクレイパー	(54.8)	29.5	8.7	(15.2)	珪質頁岩
123	K-89-c	VI	スクレイパー	35.0	71.8	11.0	23.5	珪質頁岩
124	L-85-b	V下	スクレイパー	39.0	46.3	12.9	20.3	珪質頁岩
125	L-85-b	I	スクレイパー	45.5	67.7	7.5	28.6	珪質頁岩
126	K-83-d	VI	スクレイパー	35.5	58.0	8.0	13.8	黒曜石
127	K-85-c	V下	スクレイパー	57.2	49.0	7.6	17.9	黒曜石
128	N-83-a	V	スクレイパー	67.5	57.0	14.0	55.8	珪質頁岩
129	M-85-a		スクレイパー	46.8	42.6	12.3	21.8	珪質頁岩
130	K-84-b	V	スクレイパー	24.0	30.0	10.7	6.2	黒曜石
131	L-90-b	V	スクレイパー	(46.5)	28.0	4.8	(4.8)	珪質頁岩
132	Q-82-b	V	スクレイパー	78.0	64.4	9.0	42.1	珪質頁岩
133	J-90-c	V	スクレイパー	48.2	28.4	7.0	5.2	珪質頁岩
134	N-84-b	I	スクレイパー	58.2	34.0	9.0	15.4	珪質頁岩
135	L-88-b	VI	スクレイパー	47.5	30.0	10.0	7.7	黒曜石
136	L-85-b	I	スクレイパー	61.0	30.0	12.7	11.8	珪質頁岩
137	J-86-a	I	スクレイパー	46.0	25.5	5.9	6.8	珪質頁岩
138	M-87-b	V	スクレイパー	81.1	57.6	19.8	101.0	珪質頁岩
139	K-89-c	VI上	スクレイパー	94.5	62.5	13.5	44.2	珪質頁岩
140	O-82-d	V	スクレイパー	43.0	36.0	11.0	12.8	珪質頁岩
141	J-90-b	V	スクレイパー	50.0	49.5	10.0	21.0	珪質頁岩
142	M-85-a		スクレイパー	51.2	36.2	11.8	20.3	流紋岩
143	K-89-b	V	スクレイパー	37.5	51.0	13.0	20.4	珪質頁岩
144	K-84-b	I	スクレイパー	32.5	44.8	8.0	9.6	珪質頁岩
145	K-89-b	V	スクレイパー	22.5	29.5	7.4	4.1	黒曜石
146	P-82-a	VI上	スクレイパー	45.4	22.8	4.5	4.1	珪質頁岩
147	O-82-d	V	スクレイパー	59.5	41.0	14.5	28.8	珪質頁岩
148	L-85-b	I	スクレイパー	33.3	34.9	17.0	23.6	黒曜石
148b	L-86-b	V	スクレイパー	22.3	23.2	9.7	3.8	黒曜石
149	L-84-c	V下	スクレイパー	43.2	76.4	7.0	25.0	珪質頁岩
149b	L-84-d	V下	U・フレイク	24.5	20.3	3.0	1.6	珪質頁岩

番号	出土位置	層位	器種名	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石質
150	K-85-c	V下	楔形石器	16.8	17.4	9.3	2.2	黒曜石
151	L-85-b	I	石　核	46.3	45.0	54.5	125.7	珪質頁岩
151b	L-84-d	V下	フレイク	25.5	25.2	4.9	3.6	珪質頁岩
1522	L-84-c	V下	石　核	22.0	35.5	22.4	15.2	黒曜石
153	表採		石　核	52.8	33.4	28.0	45.6	珪質頁岩
154	K-84-d	V下	耳栓	(30.5)	6.0	19.5	(4.0)	
155	N-88-b	V	石製品	28.3	15.0	12.5	4.3	泥岩
156	N-88-d	V	石　斧	51.5	21.0	5.5	8.5	泥岩
157	M-84-d	V	石　斧	54.4	41.0	12.7	44.4	泥岩
158	L-84-c	V下	石　斧	62.0	46.5	14.0	74.2	泥岩
159	M-89-b	V	石　斧	(53.0)	(34.0)	(9.3)	(27.1)	泥岩
160	O-87-c	V	石　斧	111.0	40.0	16.0	115.7	泥岩
161	K-89-b	V	石　斧	103.5	45.0	22.0	146.8	泥岩
162	L-84-b	V下	石　斧	98.6	45.0	16.6	128.3	泥岩
163	O-64-a	VI上	石　斧	107.7	48.5	19.0	170.0	泥岩
164	M-83-b	VI	石　斧	(73.0)	57.0	18.0	(152.7)	泥岩
165	L-85-b	V下	すり石	168.0	72.0	58.0	778.0	安山岩
166	L-85-b	VI	たたき石	90.0	82.0	54.0	501.9	珪岩
167	L-85-b	V下	たたき石	112.0	50.0	23.8	208.3	安山岩
168	L-84-c	V下	たたき石	149.7	42.7	21.0	214.9	安山岩
169	L-85-b	I	たたき石	148.8	45.5	38.5	395.4	安山岩
170	L-89-d	VI	接合資料	53.4	75.3	15.3	44.3	珪質頁岩
171	L-89-d	VI	接合資料	50.0	44.6	10.7	14.5	珪質頁岩
172	L-89-d	VI	接合資料	39.0	86.0	21.0	25.9	珪質頁岩
173	L-89-d	VI	接合資料	35.0	120.0	19.5	36.2	珪質頁岩
174	L-89-d	VI	接合資料	62.0	71.0	7.0	16.8	珪質頁岩
175	L-89-d	VI	接合資料	45.4	49.0	7.9	13.0	珪質頁岩
176	L-89-d	VI	接合資料	74.0	58.0	17.4	44.3	珪質頁岩
177	O-82-a	V	接合資料	67.5	67.5	15.7	59.2	珪質頁岩
178	O-82-a・d	V	接合資料	37.4	37.5	9.0	13.6	珪質頁岩
179	O-82-a	V	接合資料	34.5	55.5	11.5	16.1	珪質頁岩
180	O-82-a	V	接合資料	61.0	46.7	17.6	32.0	珪質頁岩
181	O-82-a	V	接合資料	48.0	31.0	11.5	13.6	珪質頁岩
182	O-82-a	V	スクレイパー	14.5	22.5	2.6	1.0	珪質頁岩
183	O-82-a	V	スクレイパー	22.0	27.2	3.4	2.2	珪質頁岩
184	O 82-a	V	U・フレイク	45.0	35.5	10.0	16.7	めのう

表V－12　その他一覧

番号	出土位置	器種名	層位	点数	推定直径(mm)		厚さ(mm)		重さ(g)
1	J-88-b	寛永通宝	I	1	22.6		1 17		1.1
2	K-90-a	寛永通宝	I	1	22.8		0.86		1.0

番号	出土位置	器種名	層位	点数	垂線長(mm)	底辺長(mm)	厚さ(mm)	最大厚(mm)	重さ(g)
3	K-88-b・d	泥面子	I	1	30.5	21.9	6.6	9.5	4.0

4　まとめ

(1)　遺構

調査の結果，稀府川遺跡からは，縄文後期末葉の竪穴住居跡が3軒（H－1・2・5），晩期末葉の竪穴住居跡が3軒（H－3・4・6）検出された。後期末葉の場合も，晩期末葉の例も，調査区内では，旧河川の左岸に2軒，右岸に1軒と，同一のパターンで存在していた。この事実から，両者の段階では，一定程度の居住と，周辺の空間を含めた，かなり類型化した土地利用があったものと推定される。しかしながら，稀府川遺跡に定住的な集落があったとは考え難い。

H－1・2などは，丘陵斜面からの土台流に覆われていたし，その他の竪穴住居も，旧河川の氾濫が及ぶ位置につくられており，融雪期や降水量の多い季節には，危検が予測される地点に立地していた。H－4・6には炉がなく，H－2・3などの床面には礫の露出が多く，起居に支障があったのではないかと疑われるほどであった。また，個々に報告があるように，柱穴の配列などからは，比較的簡易な上屋の造作が想定されている。このように構造的には，全般に，恒久性に欠ける要素が認められた。さらに，周辺の包含層の遺物を考え合わせても，特に石器の器種組成には，石皿や擦石などが極端に少ないという偏りを指摘できる。これらのことから，稀府川遺跡の竪穴住居跡は，常住を目的としたものではなく，狩猟や採集など，季節的な活動の拠点として利用された可能性が強いと判断された。

土壙については，その性格を明確に把握できた例はない。P－1は近代の所産で，自家用の炭を焼く，簡単で小規模な，一種の伏焼き用の施設と考えているが，確証はない。P－2～8は，先史時代の所産だが，時期や構築目的を特定できた例はない。

集石遺構については，礫群のうち，どこまでが人為的に配置されたものなのか，必ずしも明瞭ではない。つくられた時代についても確実なことは分らないが，付近からV群c－1類土器が得られているので，縄文晩期後半以降の可能性が強いと推定される。どのような性格を有するものなのか，伊達市南有珠7遺跡に見出された，続縄文期から擦文期の所産らしい8カ所の集石（峰山編 1984）や，木古内町札苅遺跡の縄文晩期の2例の集石址（野村編 1974），或は七飯町聖山遺跡 Loc.8 に検出された，続縄文期と推定された集石址（吉崎ほか 1979）などと，関連する遺構であるのか否か，現状では判断できない。

焼土は128カ所を数え，各時期のものが混在している。伴出する土器によって時代をほぼ決定できた例は，縄文後期末葉，晩期後半のものが主体で，特に晩期にその好例がみられる。それらは竪穴住居跡と同様に，季節的な営みの結果残されたものと推定されるが，どのような活動があったのか，具体的には明らかにできなかった。焼土中には炭化種子が含まれているが，クルミの殻など，大型の堅果類の破片は少ない。また，焼骨片を含む焼土も若干みられたが，獣骨ばかりで，魚骨がなかったのは意外であった。

稀府川遺跡は，縄文時代早期から擦文時代に至るまで，連綿と営まれているが，稀府川の流路の変移につれて，各時期の遺構，遺物の主要な分布域にも変化がみられる。この流路と拠点

の変遷については，次年度の調査結果をまって，まとめてみたい。(高橋　和樹)

(2) **土器**

今年度の調査で得られた土器の出土頻度は1 m²あたり2.5点と決して高くはないものの，遺物総数に対する割合は95%にも達している(図V－72)。しかも，これらは縄文早期中葉から擦文期を通じて出土しており，その分布も時期および型式差によって異なっている。このことは石器類の出土頻度の極端に低いこととともに，本遺跡の性格を知る上での重要な手掛かりといえる。以下，これらの時期および型式差による分布についてまとめてみたい。なお，稀府川左岸部については便宜的に，旧河川跡の左岸をA地区，右岸をB地区とする。

I群（図V－72）　a類のうち，1・2・4が稀府川右岸に限られているに対し，3はA地区，5はB地区と稀府川左岸に分布している。前者は物見台系の土器とみなされるものであり，器形や文様構成から，1は函館市中野B遺跡III群土器（千代ほか1977），2・4は虎杖浜3遺跡I群a－2類の尖底土器に対比されるものとみられる(北埋文1983)。後者は平底土器とみなされるものであり，道央，道東部の土器に系譜が求められると考えられる。しかしながら，断片的な資料しかなく，現状では編年的位置付けを特定しえない。b類は東釧路III式相当に限られており，分布も稀府川左岸，特にK・L－89・90区付近に集中している。

本群は出土量が少ないながらも，貝殻文系土器の段階には右岸を拠点とし，次第に左岸へと移行していく可能性が指摘できるのではないだろうか。

III群(図V－73)　本群は他の時期とは異なり，現稀府川の両岸に広範な分布域を形成している。これらには前述のとおり，道南の大安在B式に相当するもの，これらと共伴するとみなされる在地系の土器群，後続するノダップII式に相当するものがある。これらの位置付けについては牛舎川右岸遺跡の報告で，詳細にまとめられている（VI章3，4）のでここでは割愛し，分布についてのみ記す。大安在B式に相当するもののうち，38はA地区，39はB地区から出土している。

在地系の土器群は沈線，刺突文，貼付帯，縄線文，撚糸文，縄文のみに細分したが，分布が偏る傾向は認められない。ノダップII式に相当するもの（40）は右岸から出土している。

IV群　a類のうち余市式は稀府川右岸に，手稲砂山式はB地区の旧河川跡の縁付近に集中する（図V－72)。後者はいずれも沈線で文様が描かれたもので，41には涌元式に特徴的な渦巻文が描かれている。

b類は手稲式，ホッケマ式ともに稀府川右岸に集中している。しかしながら，その分布は手稲式がM・N－77区付近，ホッケマ式がO－76区付近と若干異なっている(図V－72)。

c類は土器総数の55%ほどを占めている。堂林式，三ッ谷式に相当するものに細分でき，稀府川左岸を主体に，水田部分の調査区を含めた右岸にも広がっている（図V－74･75)。左岸部にはさらに，H－1・2があるA地区の東側（a地区)，H－5があるB地区の東側（b地区)，B地区のNライン以西（c地区）の3ヶ所に集中する地点が認められる。これらの分布域では堂林式，三ッ谷式としたものの構成比や堂林式が異なる傾向が認められ，時間的な変遷をたど

ることができそうである。掲載した資料のうち，細分できたものについての内訳は次のとおりである。

地　区	右　岸		左　岸		
	水田部分	稀府川寄り	a 地区	b 地区	c 地区
堂　林　式	1	2	10	4	13
三　ッ　谷	0	3	4	16	8

このうち，93の羽状縄文はホッケマ式に施文されるものに近似し，64･121には船泊上層式や手稲式に系譜が求められると思われる鋸歯文が連続して描かれていることから，堂林式の中でも古く位置付けられる可能性があり，これらは前段階の手稲式，ホッケマ式から連続するものとして捉えることができよう。左岸ではｃ地区で堂林式の個体数が多いものの，三ッ谷式の個体数も増加している。また，ｂ地区のＨ－５からは御殿山式ともみなされるものも出土している（図Ｖ－15－２・４）。これらのことから推察すれば，右岸→ａ地区→ｃ地区→ｂ地区といった拠点の移動が窺われる。さらに，三ッ谷式の段階ではわずかながら右岸にも活動の場を求めているといえる。また，Ｖ－３章では細分していない無文または縄文地に突瘤文が付された土器群について分布をみると，次のようになる。

地区		a　地　区	b　地　区	c　地　区
口縁の形態	口唇の断面形			
平　縁	切り出し形	3	0	1
	角・丸形	3	4	3
小波状	切り出し形	2	0	0
	角・丸形	2	6	0

以上のことから，口縁が小波状をなし，口唇の断面が角形または丸形を呈するものがｂ地区に10個体あり，口唇が切り出し形をなすものはａ，ｃ地区に限られるといった結果が得られる。このことを地区による堂林式と三ッ谷式の構成比と比較すれば，前者は三ッ谷式に，後者は堂林式に対比できる可能性が高いことを示しているといえる。

Ｖ群　ｃ－１類は大洞C_2式からＡ式に相当するもので，前述のとおり，新道４遺跡Ｖ群の２～４群と５・６群に細分でき，前者には桃内式に相当するものが含まれる。前者は稀府川左岸に限られており，旧河川の両岸に濃密に分布している。一方，後者は量的にも少なく，Ｂ地区にのみ分布している。桃内式に対比できる条痕文土器はＢ地区を主体に，旧河川の両岸にみられる。新道４遺跡での細分は函館市高丘町遺跡出土資料を含む札苅Ⅱ群の一部から聖山Ⅰ式→同Ⅱ式→湯の里６遺跡→尾白内Ⅰ群に相当するものへの変遷が考えられている。これらの器形や文様構成の変化をたどるとおおよそ次のようになる。器形では，２群の深鉢，鉢に明瞭にみられる文様帯下部のくびれが，丸みを帯びるようになり，やがてなくなる傾向が窺える。文様構成では，口縁部の文様帯が非常に狭く，平行沈線が数条めぐるだけのものから次第に文様帯

が広くなっていくことが指摘できる。また，文様帯に描かれる平行沈線やA状，B状突起は無文帯上に施されるものから地文施文後に施されるようになり，地文は縦走縄文から斜行縄文へと変わっていく(北埋文 1988)。こうした器形や文様構成の変化は本遺跡出土のものにもあてはまることからみても同様の変遷が考えられる。条痕文が施されたグループは桃内遺跡では貝殻が用いられているとされているが，本遺跡では棒状工具などが用いられており，貝殻によるとわかるものはみられない。

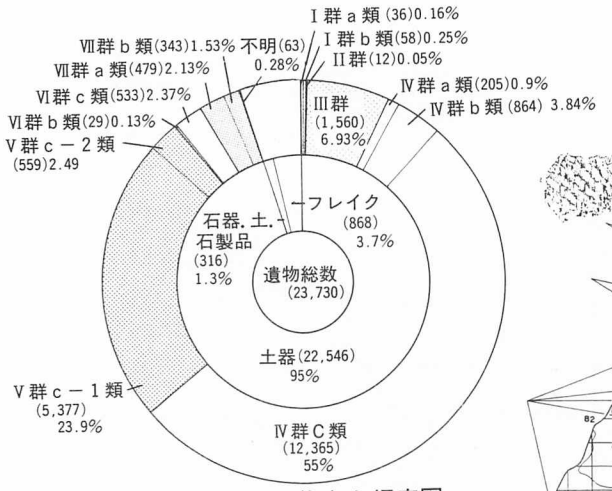
c－2類はいずれもB地区に分布している。舟形の粗形かと思われる器形のものが出土していることや器面に描かれる沈線の幅が比較的広い点などから推察すれば，千歳市ママチ遺跡(北埋文 1987)，同駒里遺跡（大場ほか 1979）のII黒層出土の一群などに対比できる。また，c－1類のB地区の分布域とほぼ重なることから，これらと共伴するものもみなすことができよう。

VI群　b類は量的には非常に少ないものの，アヨロ1類bおよび3類に対比できるものがあり(高橋ほか 1980)，いずれもB地区の現河川寄りの狭い範囲にのみ分布している。c類のうち包含層から出土したものはいずれも後北c_1式に対比できるもので，A地区およびB地区の旧河川寄りに分布している。個体別ではそれぞれがほぼまとまった状態で出土している。また，F－111およびその周辺から出土したもの（図V－39－7）は口縁から胴上半に横走縄文のみが施されたものである。後北c_1式の段階にはこうした隆起線のない土器が伴うことは指摘されており（大沼 1982)，本遺跡には他の型式のものが全く認められないことからもほぼ同時期とみて大過ないものと思われる。

VII群　a類は稀府川左岸に限られ，大半はB地区に分布している。これらはV層中に認められるB－Tm層下位から出土しており，微隆起線を特徴とするグループと鋸歯文，平行沈線に特徴付けられるものおよび無文のグループに細分できる。後者はさらに，口唇の断面が丸いものと角形のものに細分される可能性がある。これらの位置付けは田才氏の編年によれば，前者はII類，後者は擦文期の最初頭に位置付けられるIV類に対比できる（田才 1983)。　特に，後者に属する 245・248～250・269・273 はB地区の比較的狭い範囲に，まとまった状態で出土しており，共伴関係を示すものとして捉えられると思われる。なお，後者のグループにはいわゆる「北大式土器」の範疇に属さないものも含まれているが，これらについても便宜的に本類とした。

b類の分布はa類同様，B地区を主体にしているが，量的にも少なく，散漫な傾向を示している。これらはB－Tm層上位から出土しており，明らかにa類より新しいことが指摘できる。このうち，ロクロ使用の 252 と平行沈線がめぐる 253 は近接した地区にまとまっており，共伴するものとして捉えることができると思われる。

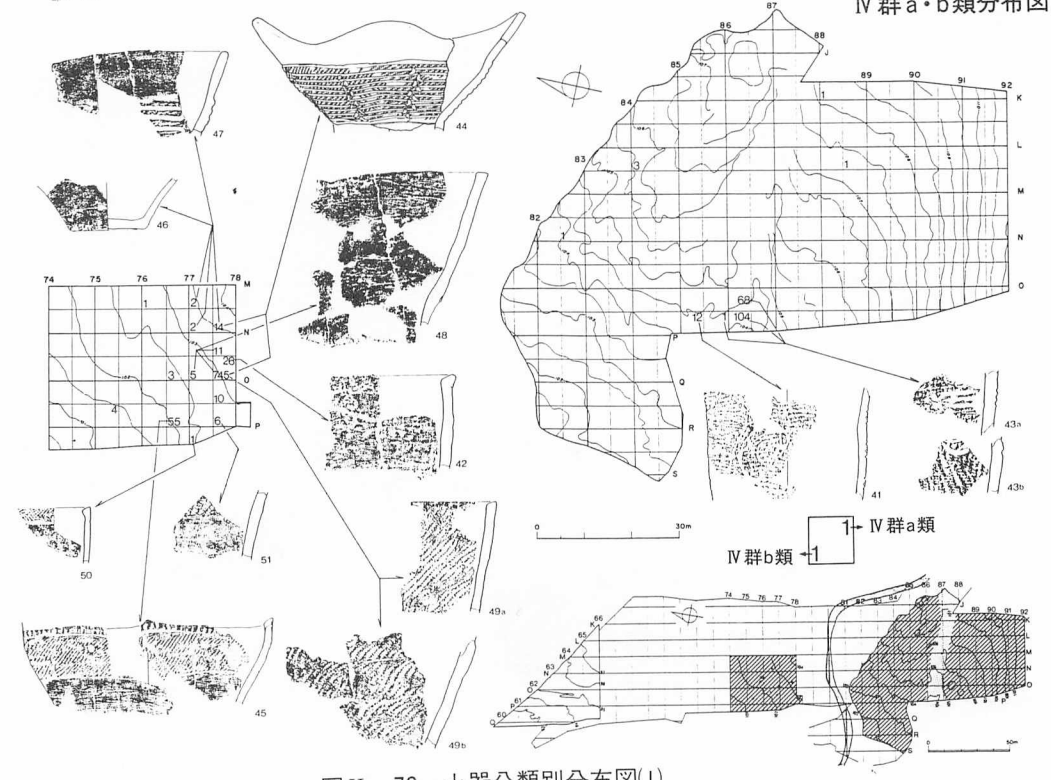
以上，簡単に各群の分布と編年的位置付けを試みた。分布からは大きく，稀府川が幾度も流路を変えていく中で，右岸から左岸，左岸から右岸へと生活の拠点が移動していることが窺える。しかしながら，本稿ではこれらの時間的変遷について充分に吟味したとはいえず，多くの課題を残している。また，IV群c類，VII群a類は時代の過渡期として重要な位置を占めており，これらについては来年度の報告で詳細にまとめてみたい。(野中　一宏)



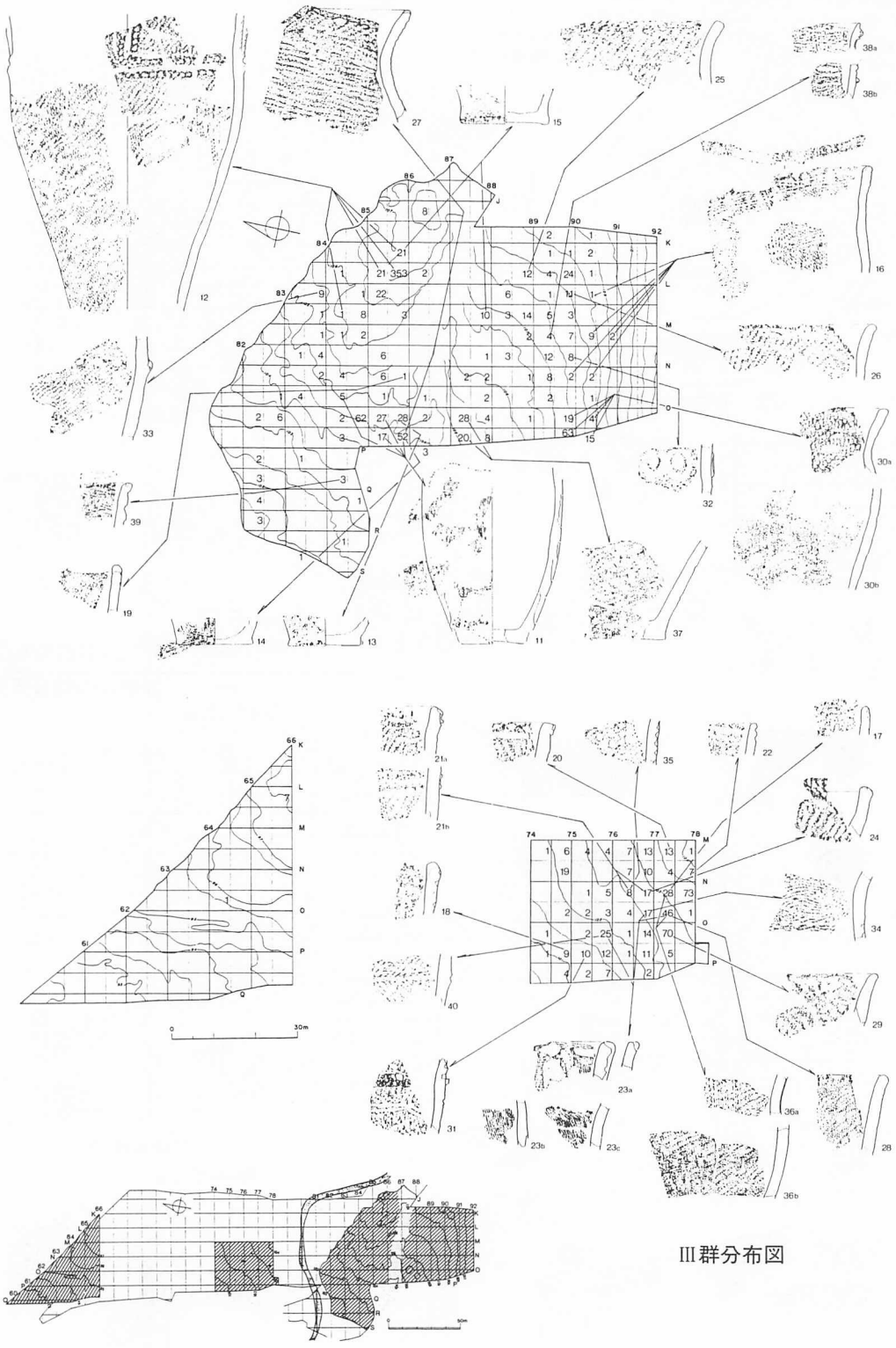
図Ⅴ－72　遺物出土頻度図

Ⅰ・Ⅱ群分布図

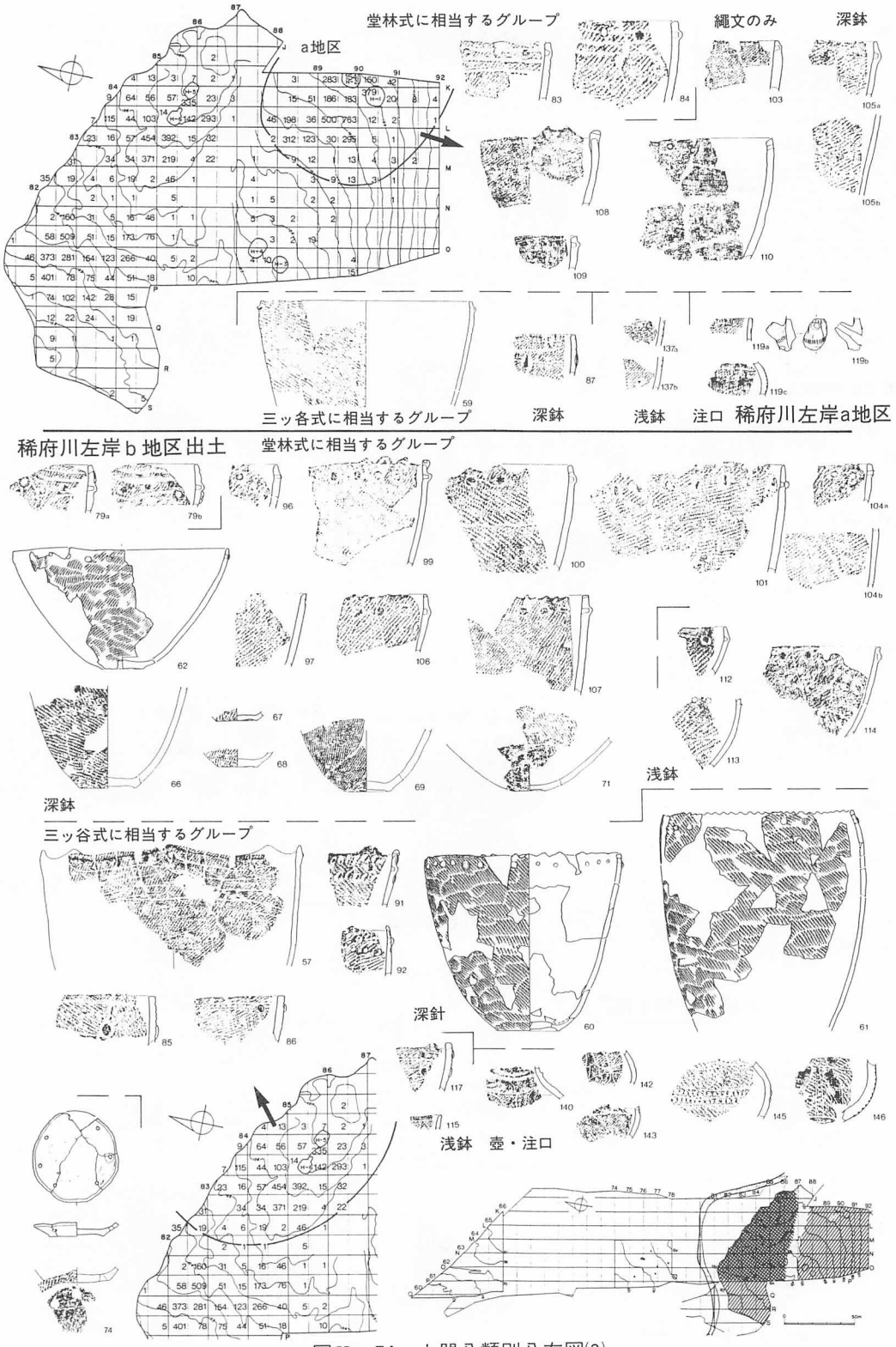
Ⅳ群ａ・ｂ類分布図



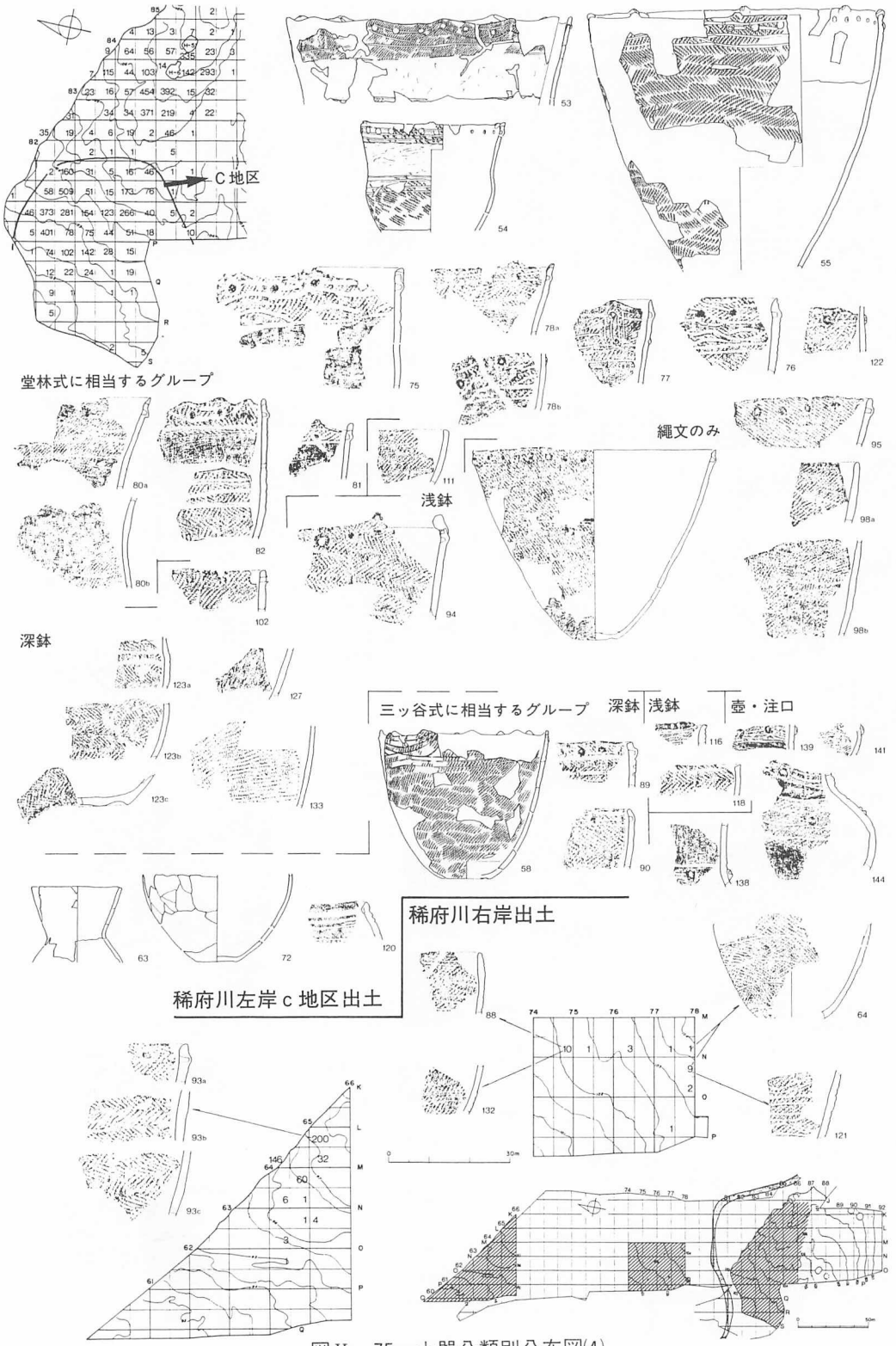
図Ⅴ－72　土器分類別分布図(Ⅰ)



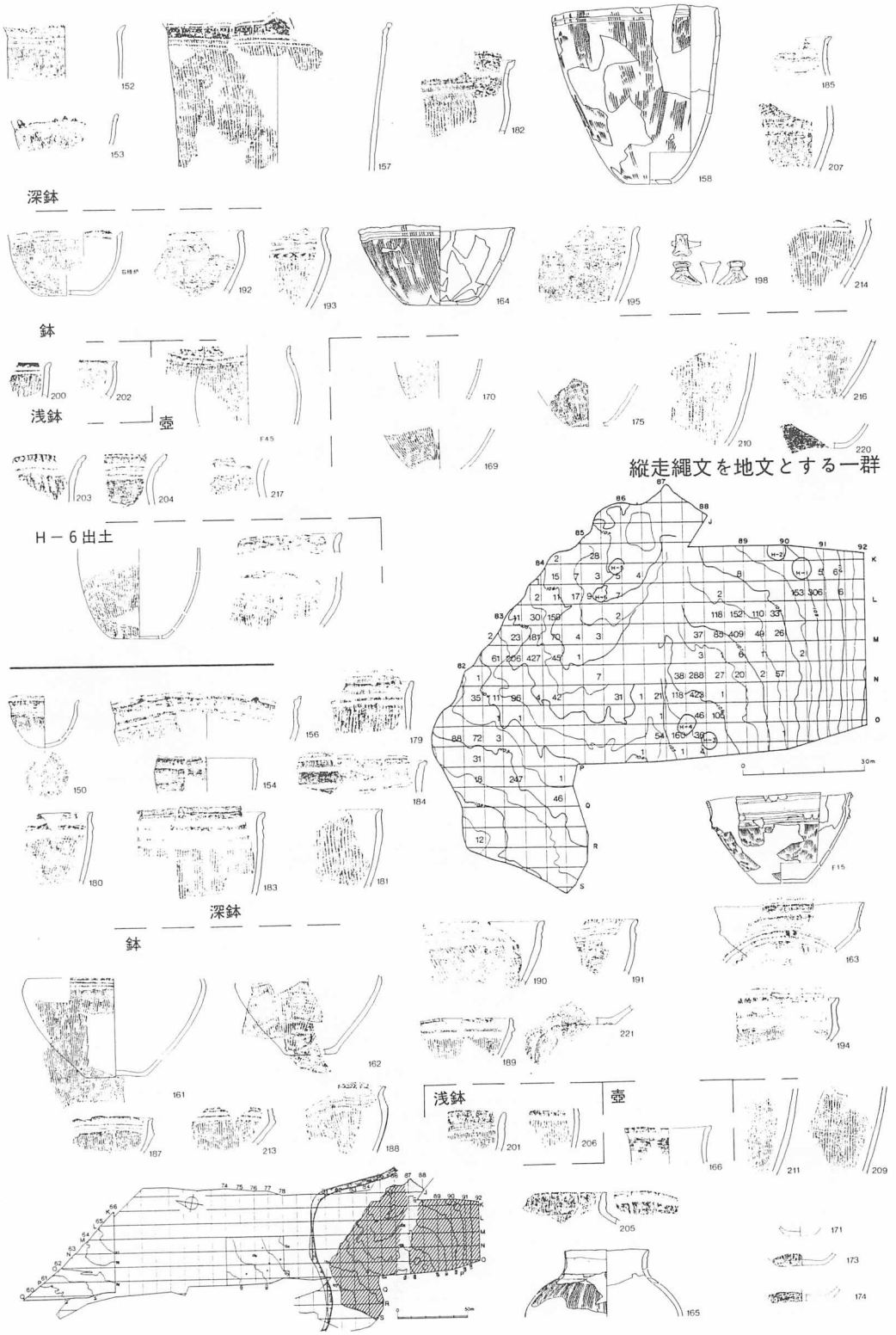
図Ⅴ－73　土器分類別分布図(2)



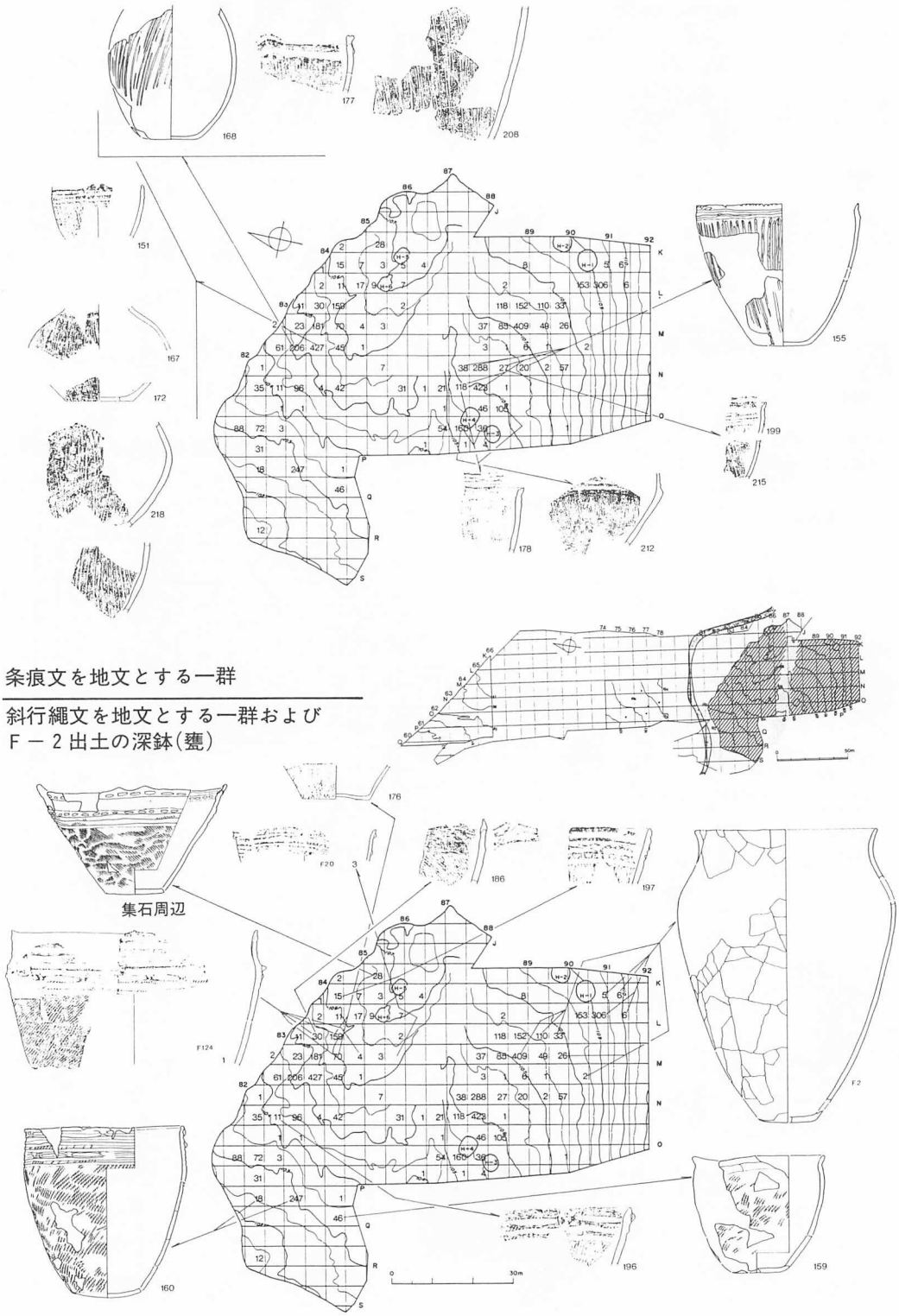
図Ｖ－74　土器分類別分布図(3)



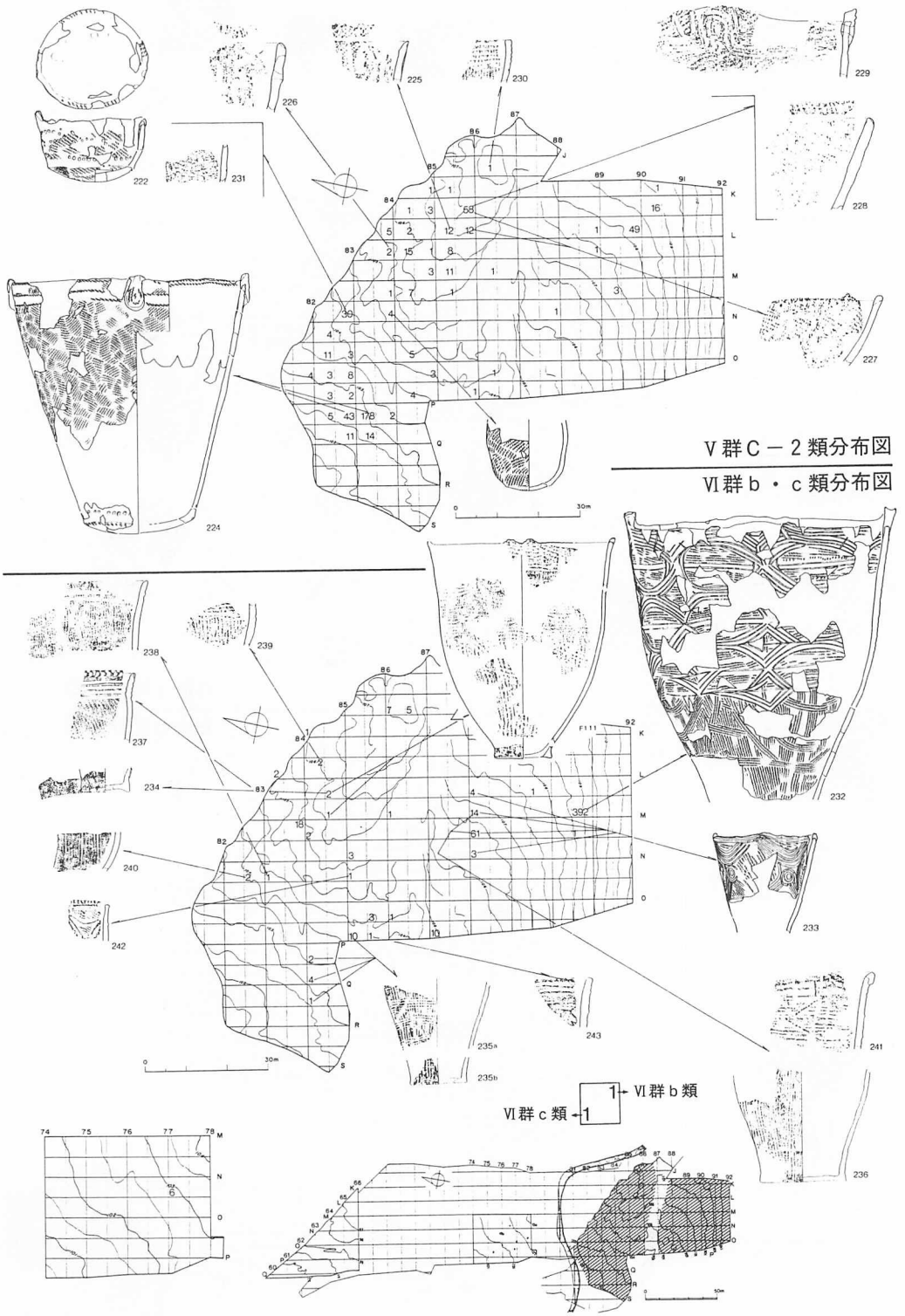
図Ⅴ－75　土器分類別分布図(4)



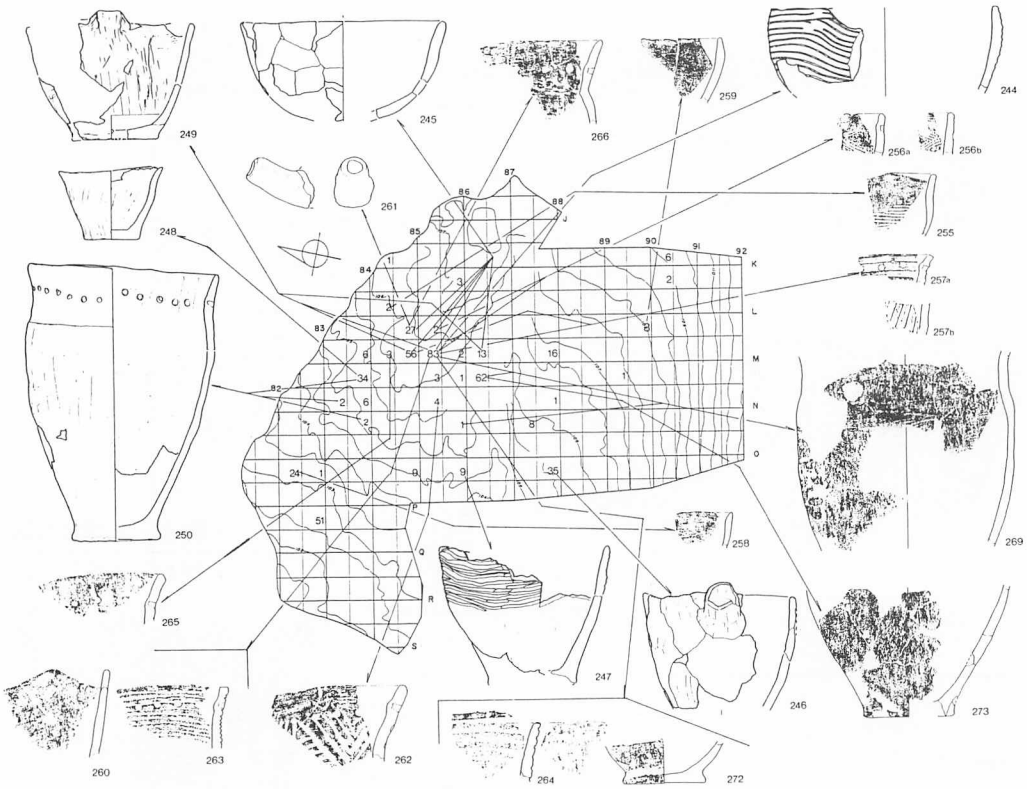
図Ⅴ－76　土器分類別分布図(5)－Ⅴ群Ｃ－Ⅰ類



図Ⅴ－77　土器分類別分布図(6)－Ⅴ群C－Ⅰ類

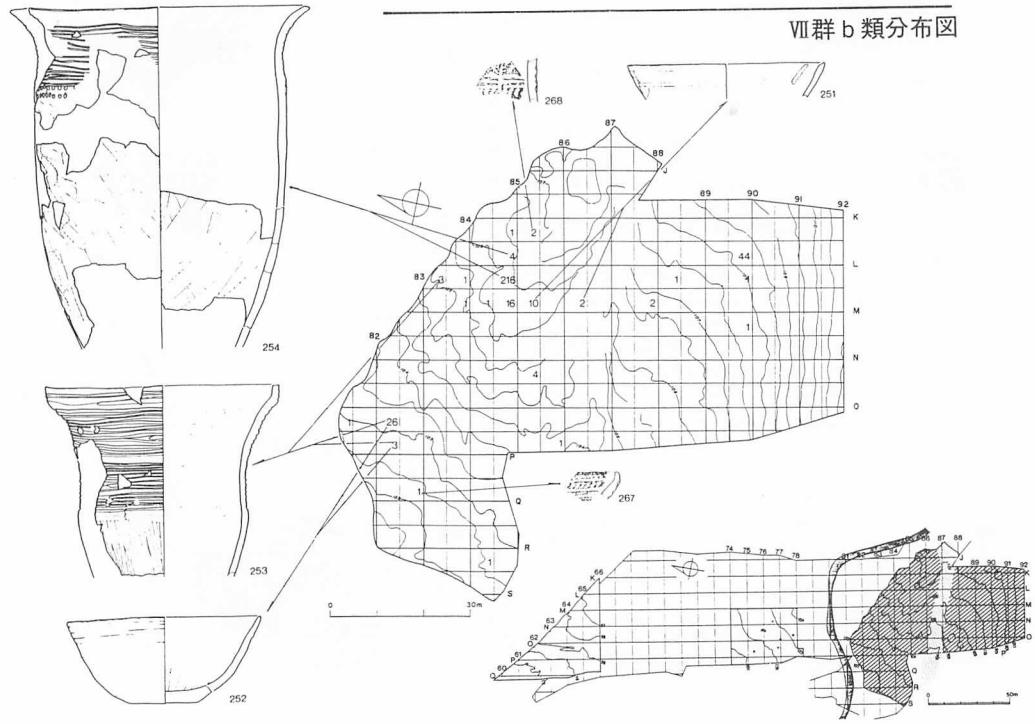


図Ⅴ－78　土器分類別分布図(7)



Ⅶ群 a 類分布図

Ⅶ群 b 類分布図



図Ⅴ－79　土器分類別分布図(8)

(3)　石器・土製品

石器の分布は稀府川の左岸に多い。その中でも現稀府川と旧河道に挟まれた微高地に，特に多く分布している。第V章3節で取り上げた石器のうち図V－81は現稀府川右岸出土のもので，10mメッシュ毎の出土位置を表している。同様に図V－82は左岸の出土分布である。

図V－80は石鏃・石槍及びナイフの形態を三角図に表したものである。長さ/幅・刃/幅・重量の各要素を百分率に置き換えてプロットしている。三角形を呈する石鏃は長さ/幅・刃/幅が挟長差を表す同一の要素で重量との比較になる。また，ここで用いた三要素では，茎の明瞭でないものと有茎の石鏃は分離されず，挟長で軽いものが図の下方に位置することになる。石槍及びナイフは重量が大きな要素となり図の上方に位置する。

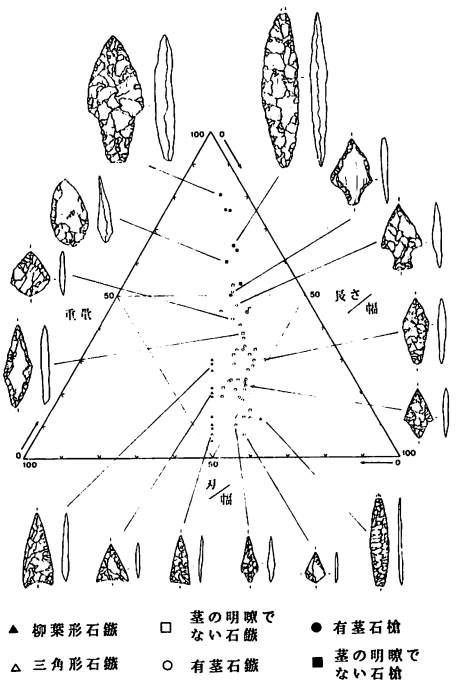
稀府川遺跡に持ち込まれた剥片石器と剥片の素材は黒曜石と珪質頁岩が大半を占める。数量では黒曜石が多いが，珪質頁岩を素材にしたものは個々の重量があり大きいといえる。

石鏃では黒曜石が多く，石錐は主に珪質頁岩を素材にする等，使い分けがなされている。掻器・削器なども用途により同様と思われる。この事は黒曜石を素材にした図V－59・63－101～111・148の円形又は円形に近い掻器で顕著にみられる。

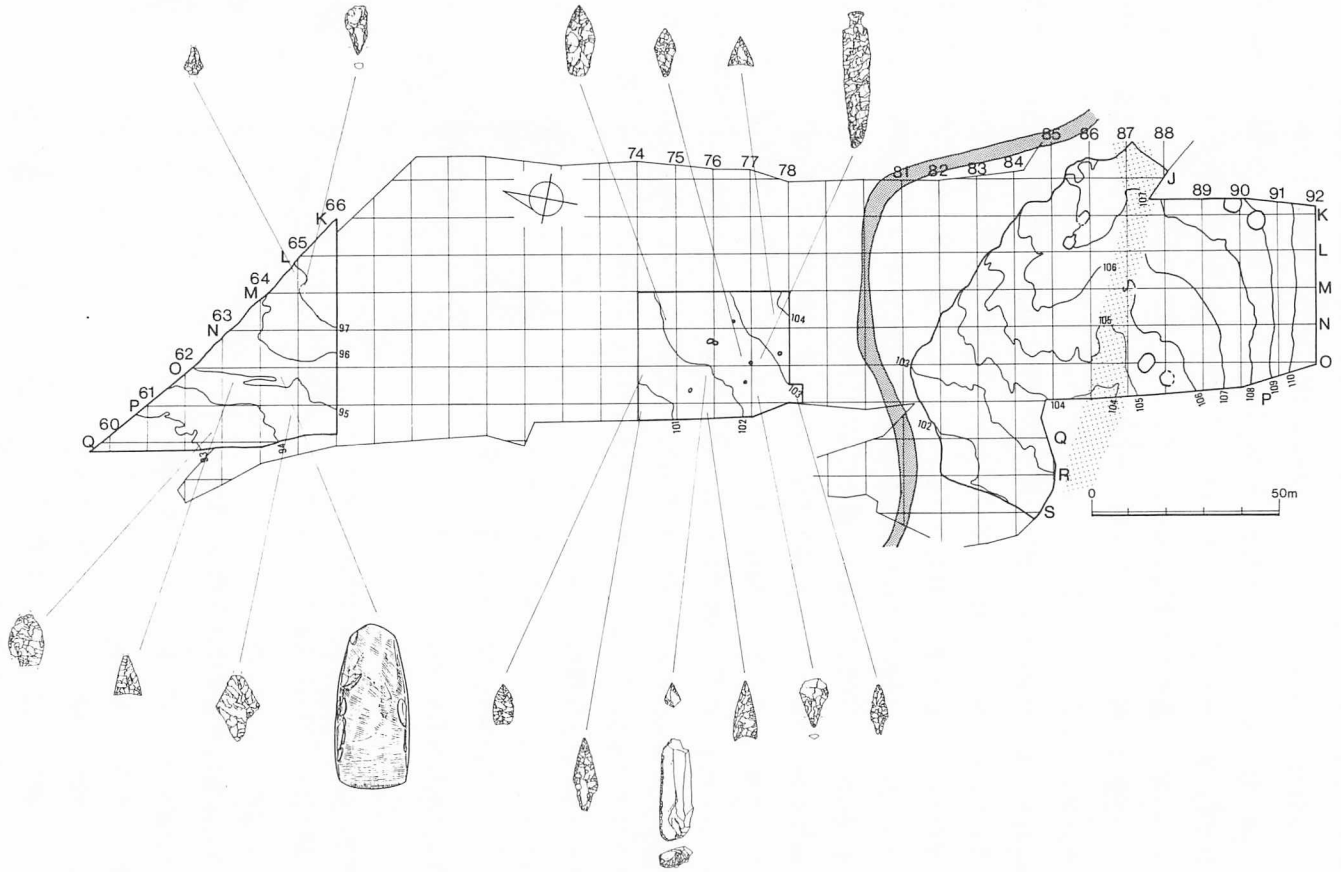
剥片に比べ砕片が極く少ないことや石核が少ないなど石器の製作が僅かしか行われなかったことを示していると推定され，製品で持ち込まれたか又は荒割された剥片で持ち込まれたと思われる。2箇所から検出された一括出土剥片は，出土層位などから縄文後期末から晩期のものと推定されるが，一方は同一母岩のものと推定され，出土点数も78点で使用痕・加工痕のみられるものは2点だけである。他方は8～9個の母岩を素材にしていることや，出土点数が27点と少なく，スクレイパー・使用痕・加工痕のみられるものが5点あり，周辺のものとも接合している等の違いがみられる。この事や，検出された層位，周辺の出土遺物などから前者が後者より古いと推定される。

石核が検出されないことや加工具が周辺にないことなどから，剥片にして持ち込まれ何らかの理由でここに置き去られたものであろう。

図V－83の遺跡別石器構成比は各遺跡の営まれた時期に違いがあり単純には比較できないが，遺跡の性格を表す大まかな指標になると思われる。ここで明らかなように稀府川遺跡に於いては石鏃とスクレイパーが多く，礫石器は極く僅かで1割に満たない。有珠善光寺2遺跡IIの貝層では石鏃の割合が多く比較できないが，他に示した遺跡は礫石器の割合が多くなる傾向がみられる。また，擦石・敲石・石

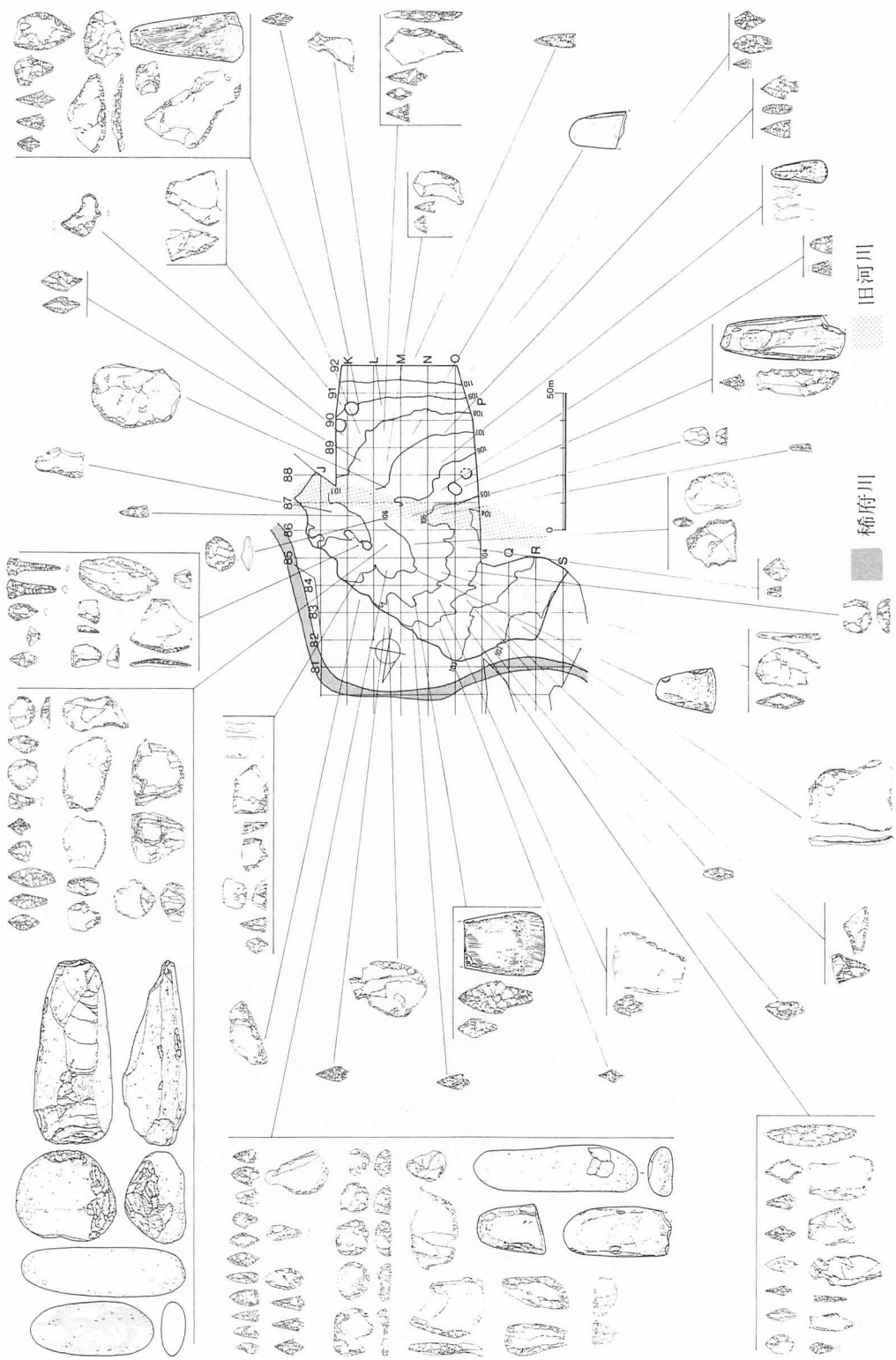


図V－80　石鏃・石槍およびナイフの三角図



稀府川　　旧河川

図Ⅴ－81　石器分布図(1)



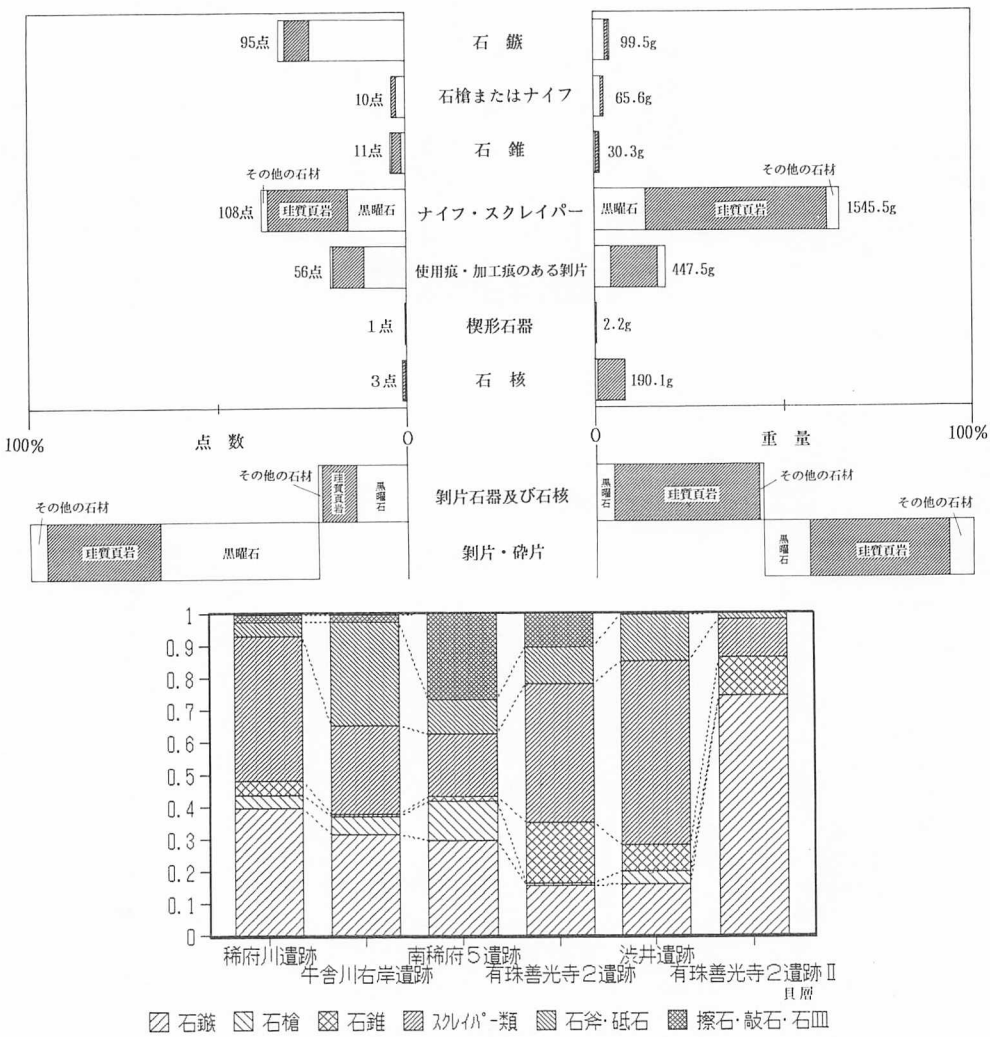
図V－82　石器分布図(2)

皿・台石などは南稀府5遺跡・有珠善光寺2遺跡で多い。

しかし，稀府川遺跡では，日常的に用いる大型の礫石器は出土していない。また，石斧も他の遺跡に比べて少なく11点が出土しただけであり，砥石は検出されなかった。

検判された2点の耳栓は滑車状と環状を呈する違いがある。1点はH－1の床面(図V－8－22)から出土し，ここからⅣ群c類土器が検出されている。K－84－d（図V－64－154）出土のものも同一層位のⅣ群c類土器と一緒に取り上げている。本遺跡出土の耳栓はⅣ群c類土器に伴うと考えられる。同時期と考えられる耳栓が出土している遺跡は，有珠善光寺2遺跡（長谷川1986）や有珠善光寺2遺跡Ⅱ（大場編1989），美々4遺跡（道教委1977・北埋文1980・1983）等がある。

直接，狩猟に係わる石鏃・スクレイパーが多く，礫石器の少ないことは稀府川遺跡が狩猟・採集の季節的なキャンプサイトであったことを裏付けていると思われる。（谷島　由貴）



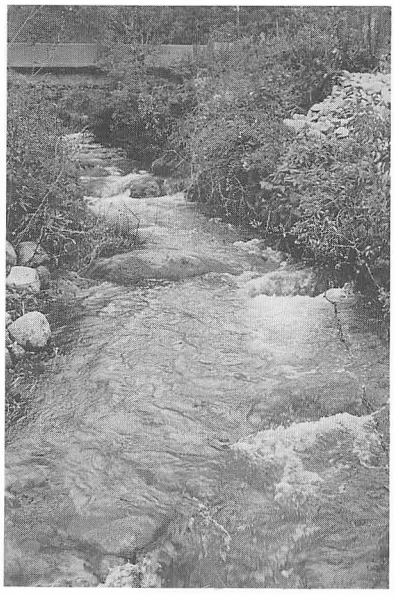
図Ⅵ－83　構成比

写真図版

図版Ｖ－１　遺跡全景……235
図版Ｖ－２　調査風景(1)……236
図版Ｖ－３　調査風景(2)……237
図版Ｖ－４　調査風景(3)……238
図版Ｖ－５　調査風景(4)……239
図版Ｖ－６　遺物出土状況(1)……240
図版Ｖ－７　遺物出土状況(2)……241
　　表土の遺物……241
図版Ｖ－８　Ｈ－１……242
図版Ｖ－９　Ｈ－１出土の遺物……243
図版Ｖ－10　Ｈ－２・３……244
図版Ｖ－11　Ｈ－４・５……245
図版Ｖ－12　Ｈ－６……246
図版Ｖ－13　Ｈ－２～６出土の遺物…247
図版Ｖ－14　Ｐ－１～３……248
図版Ｖ－15　Ｐ－４～８……249
図版Ｖ－16　集石遺構(1)……250
図版Ｖ－17　集石遺構(2)……251
図版Ｖ－18　焼土(1)……252
図版Ｖ－19　焼土(2)……253
図版Ｖ－20　土壌水洗風景……254
　　焼土出土の骨片　……254
図版Ｖ－21　焼土出土の遺物……255
図版Ｖ－22　包含層出土の土器(1)……256
図版Ｖ－23　包含層出土の土器(2)……257
図版Ｖ－24　包含層出土の土器(3)……258
図版Ｖ－25　包含層出土の土器(4)……259
図版Ｖ－26　包含層出土の土器(5)……260
図版Ｖ－27　包含層出土の土器片(1)……261
図版Ｖ－28　包含層出土の土器片(2)……262
図版Ｖ－29　包含層出土の土器片(3)……263
図版Ｖ－30　包含層出土の土器片(4)……264
図版Ｖ－31　包含層出土の土器片(5)……265
図版Ｖ－32　包含層出土の石器(1)……266
図版Ｖ－33　包含層出土の石器(2)……267
図版Ｖ－34　包含層出土の石器(3)……268
図版Ｖ－35　包含層出土の石器(4)……269
図版Ｖ－36　包含層出土の石器(5)……270
図版Ｖ－37　一括出土のフレイク(1)……271
図版Ｖ－38　一括出土のフレイク(2)……272

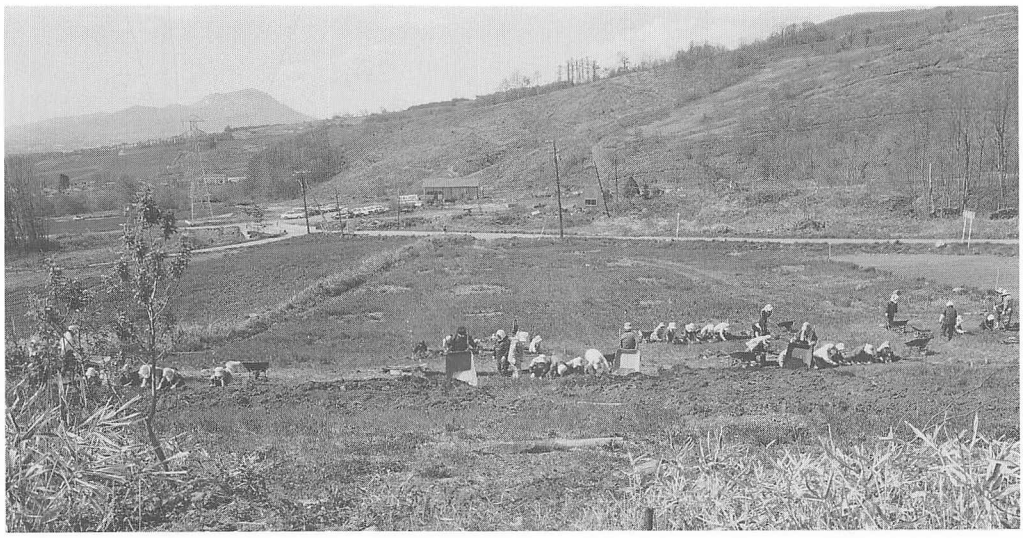
1　遺跡全景（完掘　北西から）

2　遺跡全景（調査開始　北西から）



3　稀府川（南西から）

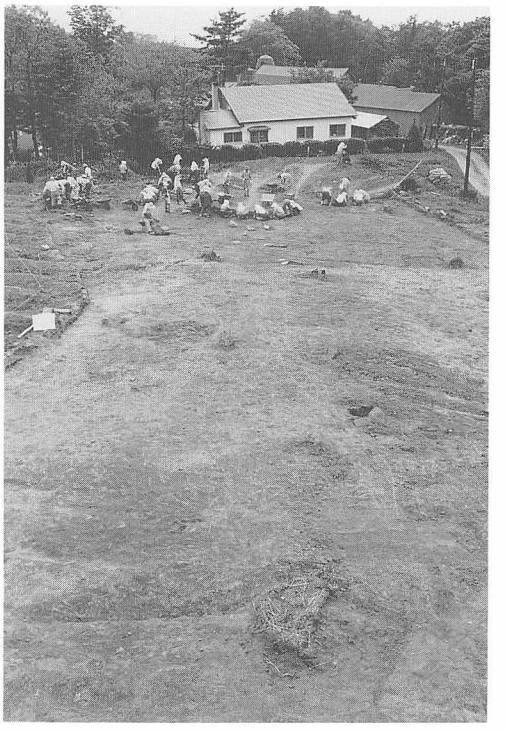
図版Ⅴ－2



1　調査風景（東から）

2　調査風景（北から）

1　調査風景（Us-b 除去前　北から）



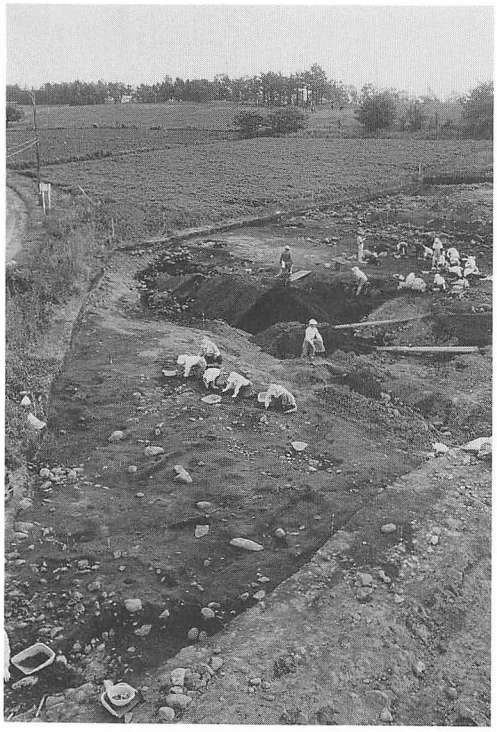
2　調査風景（Us-b 除去前　北東から）

3　調査風景（北から）

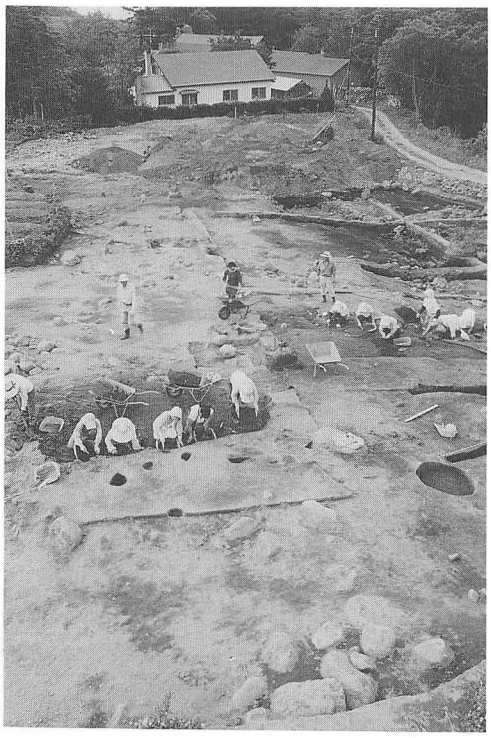
図版Ⅴ－4

1　調査風景（重機による表土除去　東から）

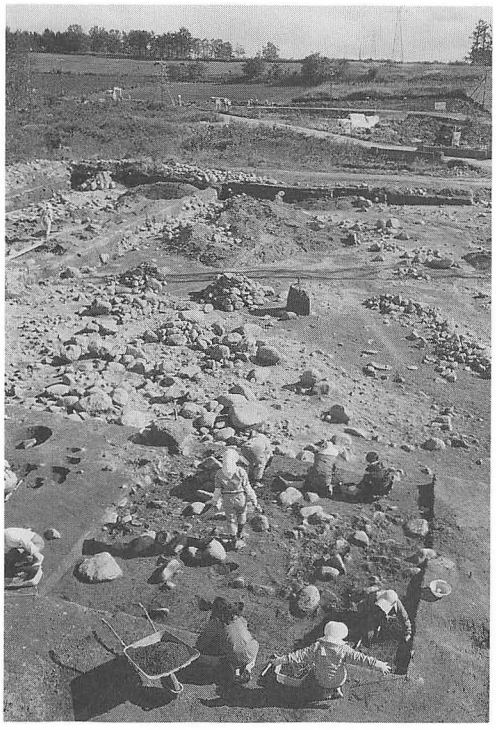
2　調査風景（東から）



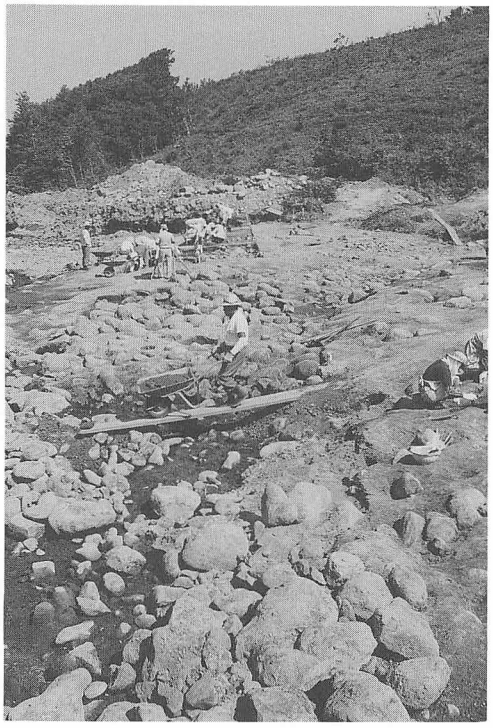
1　調査風景（北西から）



2　調査風景（北東から）

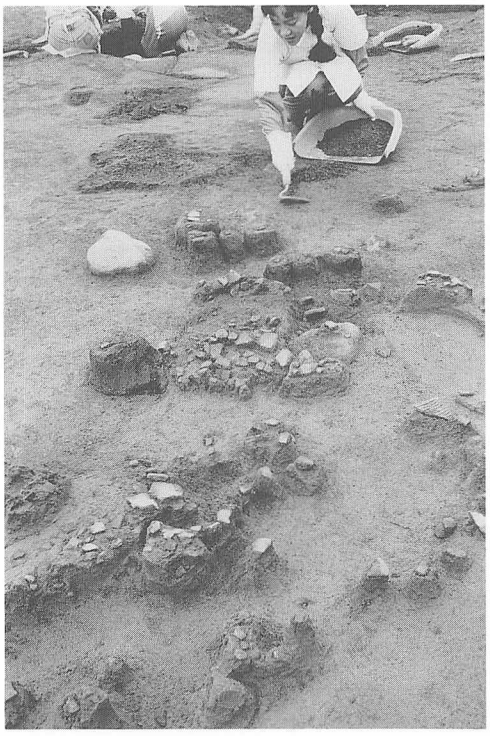


3　調査風景（北西から）

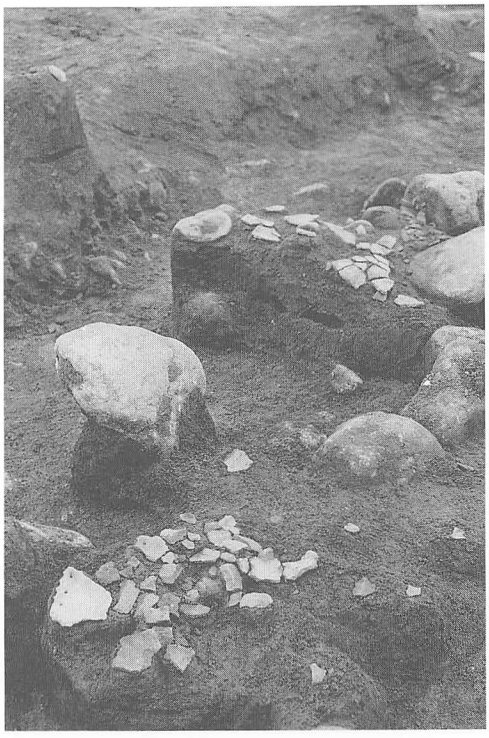


4　調査風景（南東から）

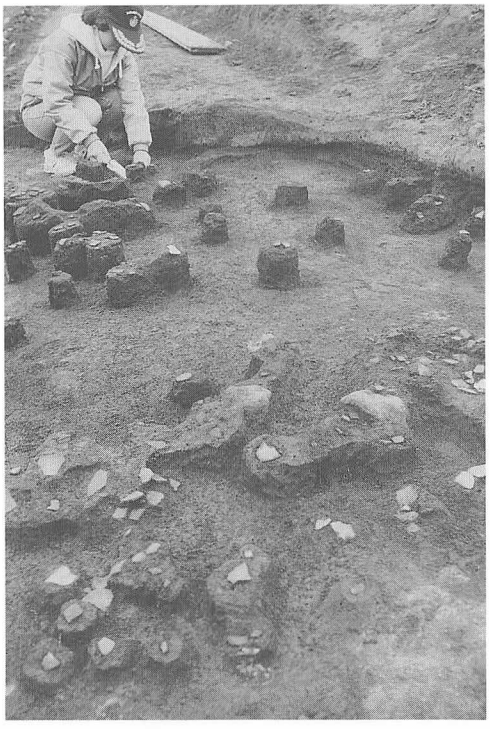
図版Ⅴ－6



1　遺物出土状況（東から）



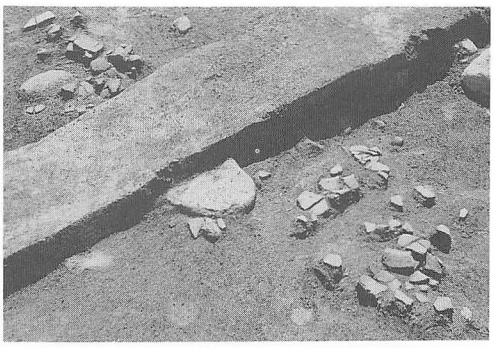
2　遺物出土状況（南西から）



3　遺物出土状況（南から）

4　遺物出土状況（西から）

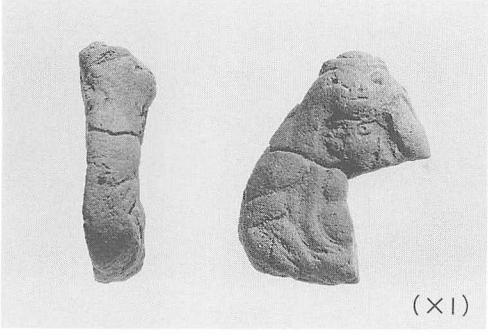
1　遺物出土状況（東から）



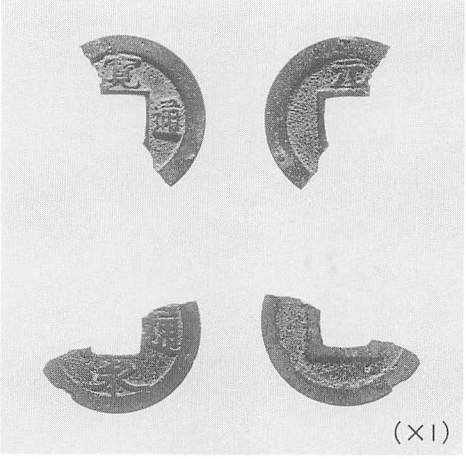
2　遺物出土状況（南西から）

3　遺物出土状況（東から）

4　遺物出土状況（西から）



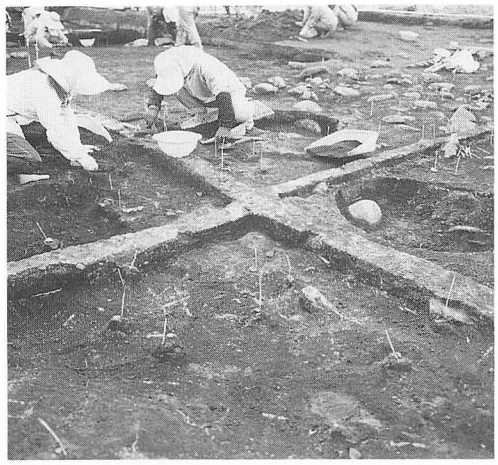
5　泥めんこ



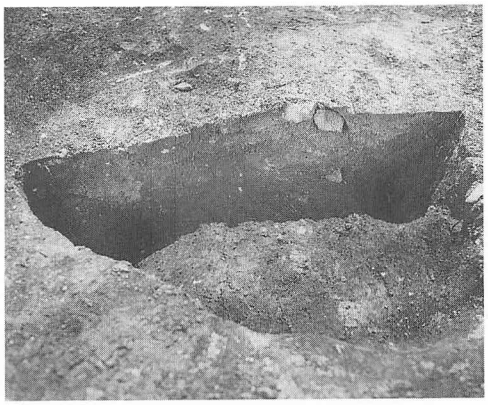
6　寛永通宝

図版Ⅴ－8

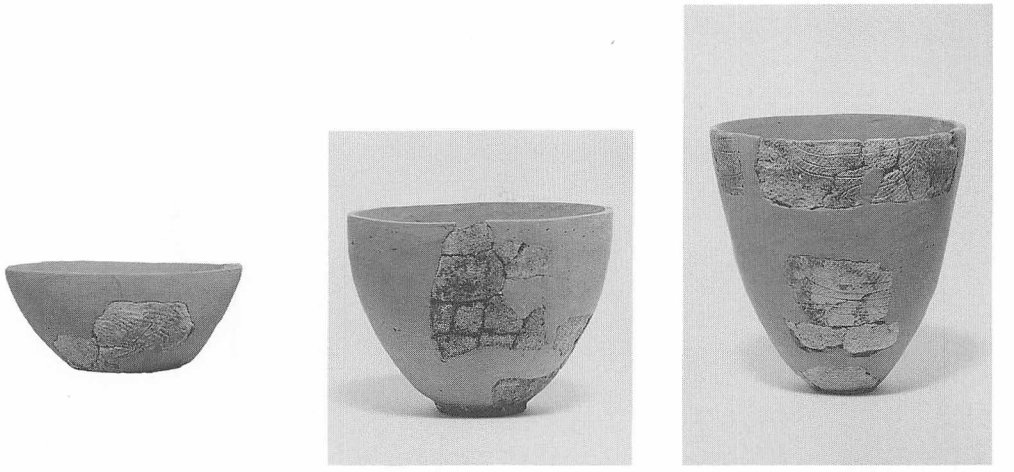
1　H－Ⅰ遺物出土状況（西から）



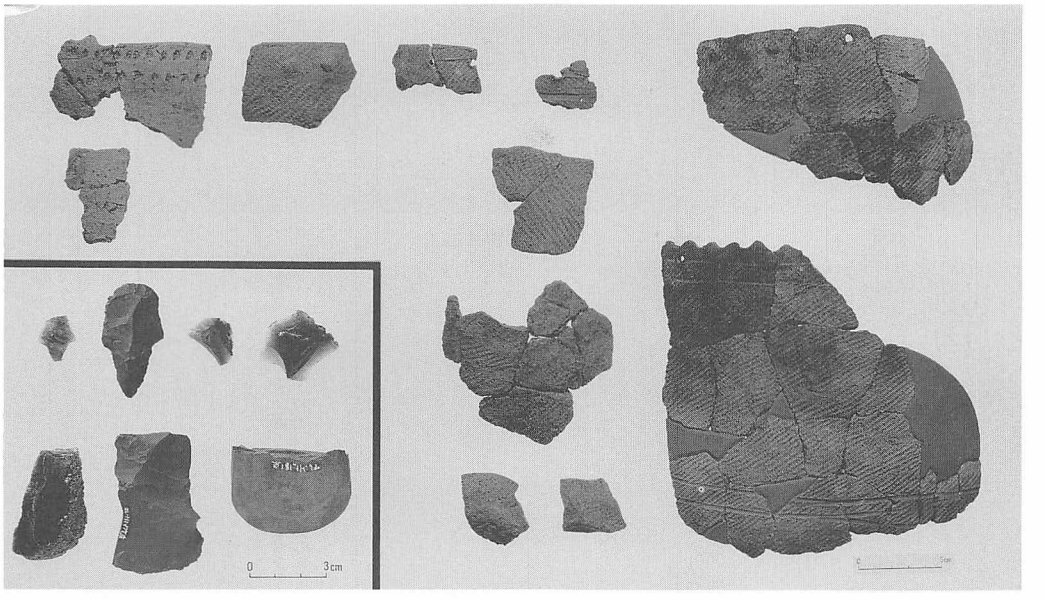
2　H－Ⅰ調査風景（東から）



3　H－Ⅰ炉跡セクション

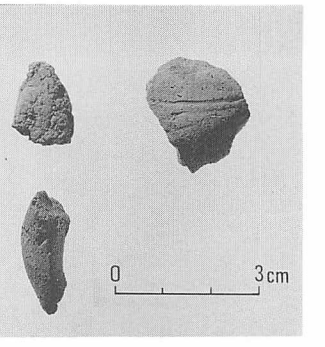


1　H－Ⅰ出土の土器（Ⅳ群c類）



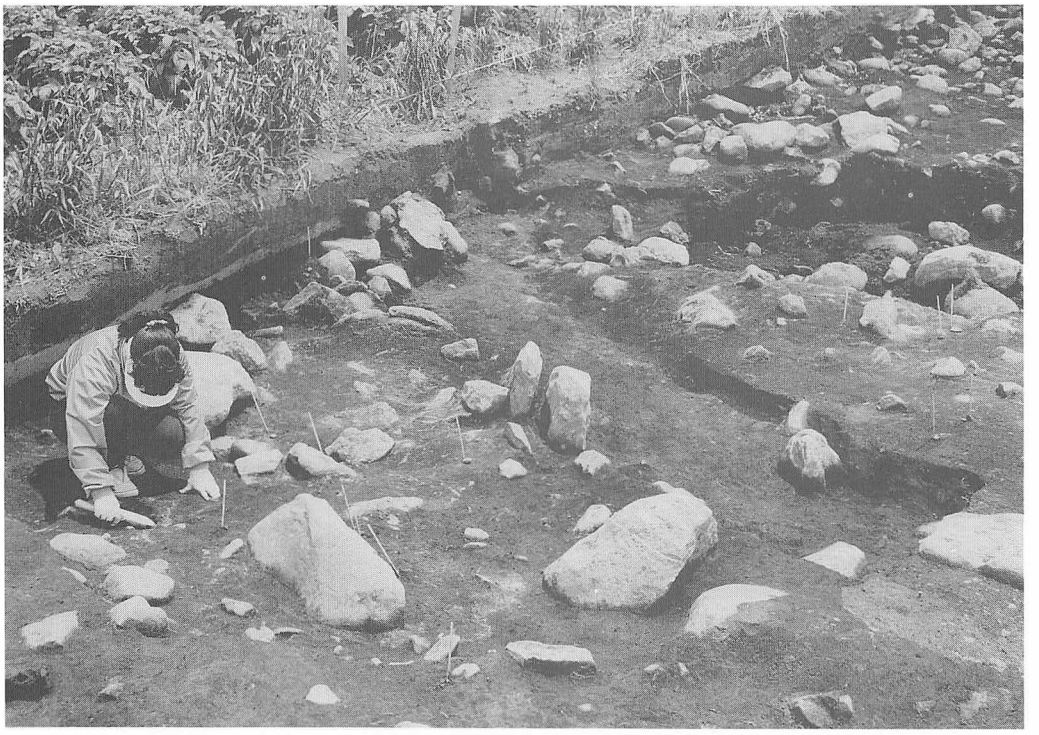
2　H－Ⅰ出土の土器片・石器

3　H－Ⅰ出土の耳栓

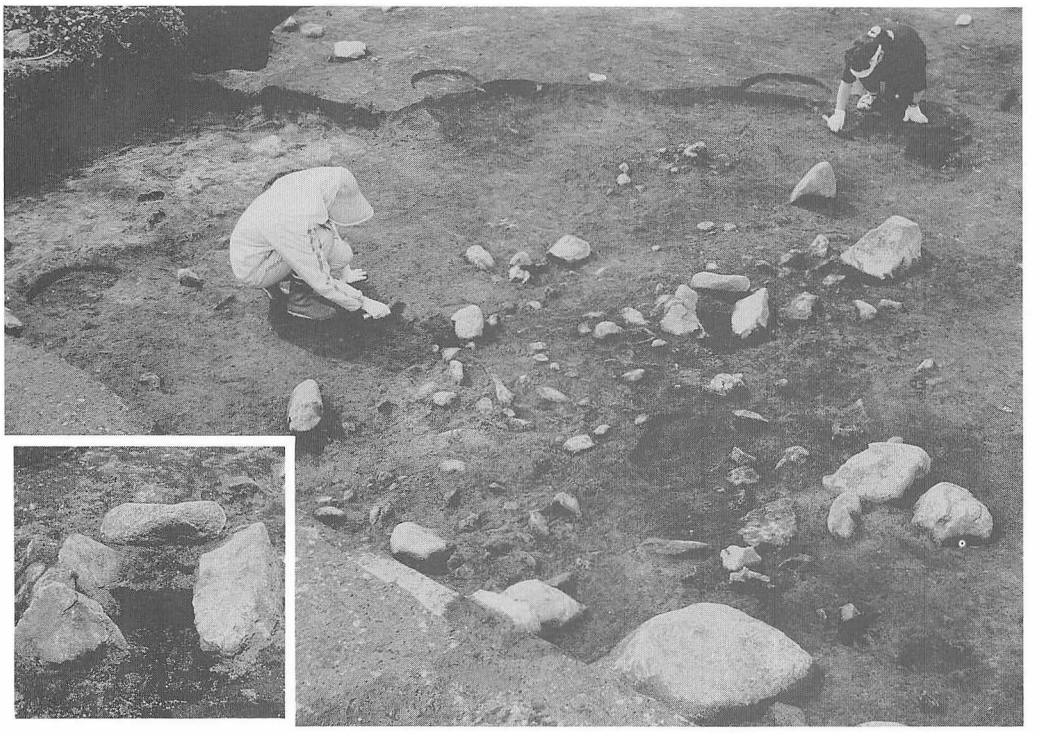


4　H－Ⅰ出土の土製品

図版Ⅴ－10



1　H－2完掘（西から）



2　H－3完掘と石組炉（東から）

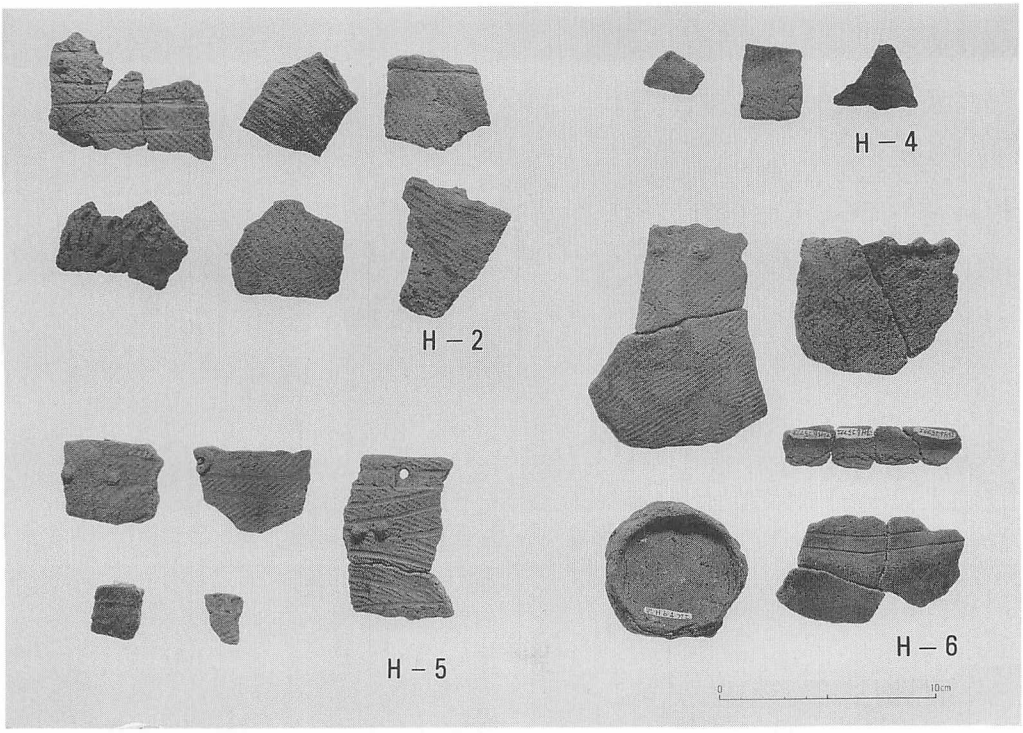
1　H－4完掘（北西から）

2　H－5完掘（北西から）

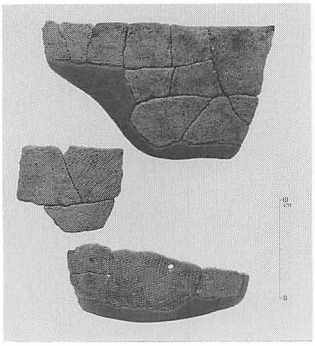
1　H－6完掘（西から）

2　H－6セクション（西から）

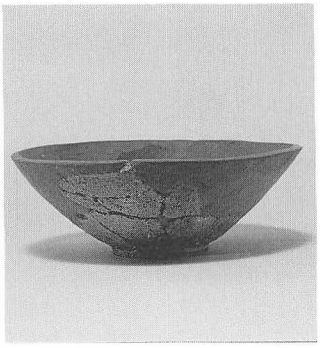
3　H－6遺物出土状況（南東から）



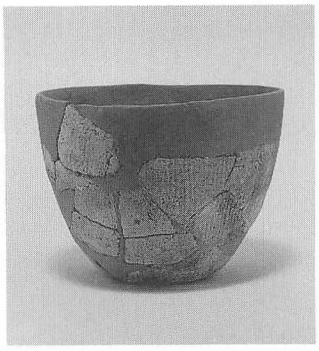
1　H－2～6出土の土器片



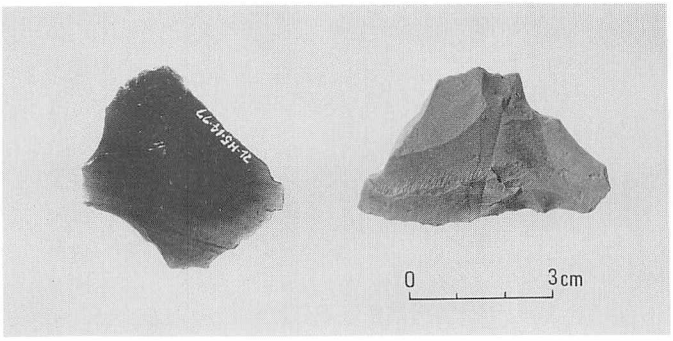
2　H－5出土の土器片



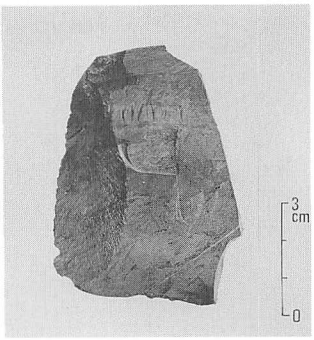
3　H－5出土の土器



4　H－6出土の土器

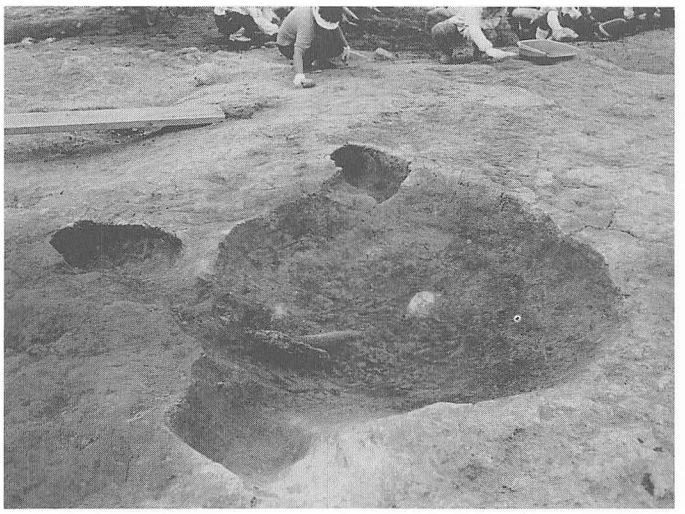


5　H－5出土のUフレイク



6　H－6出土のUフレイク

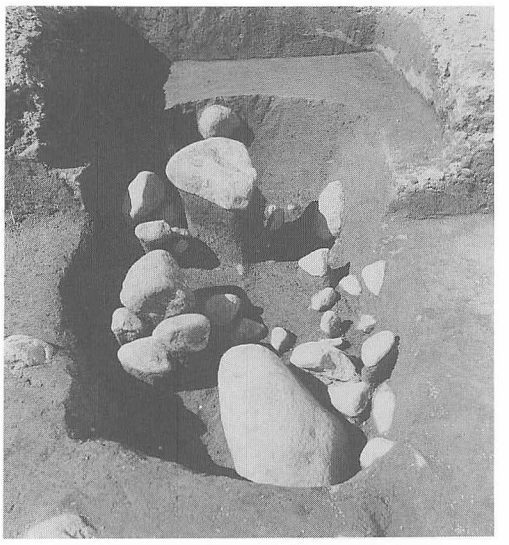
図版Ⅴ－14



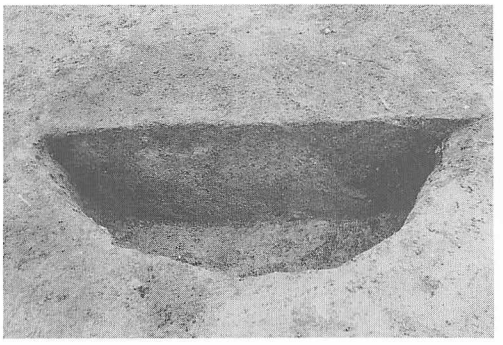
1　P－1完掘（北東から）

2　P－1遺物出土状況（北から）

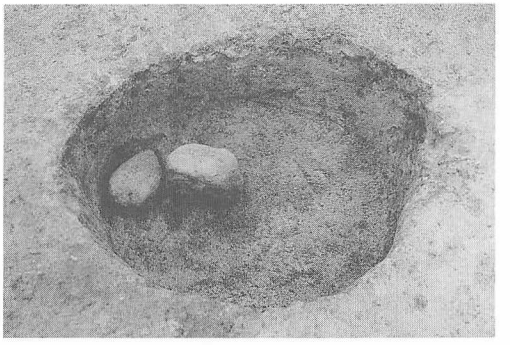
3　P－2確認（南東から）



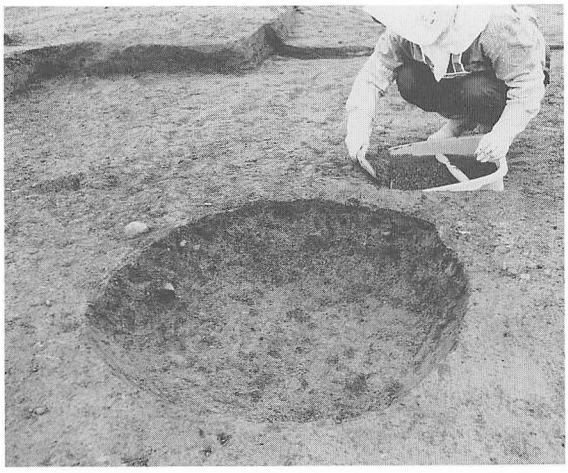
4　P－2完掘（南東から）



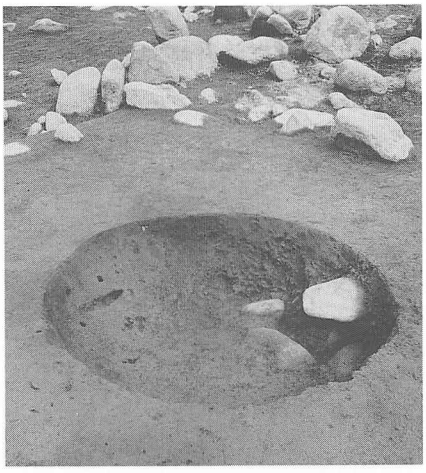
5　P－3セクション（南西から）



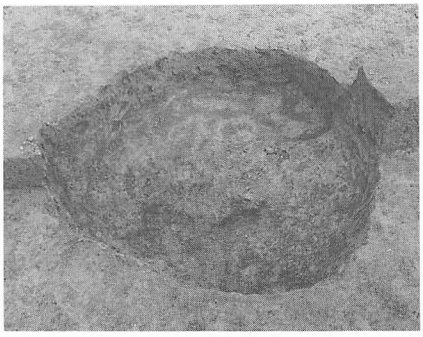
6　P－3完掘（南西から）



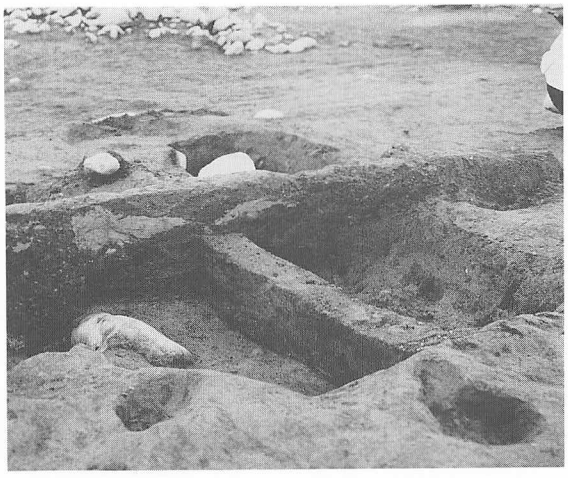
1　P－4完掘（南西から）



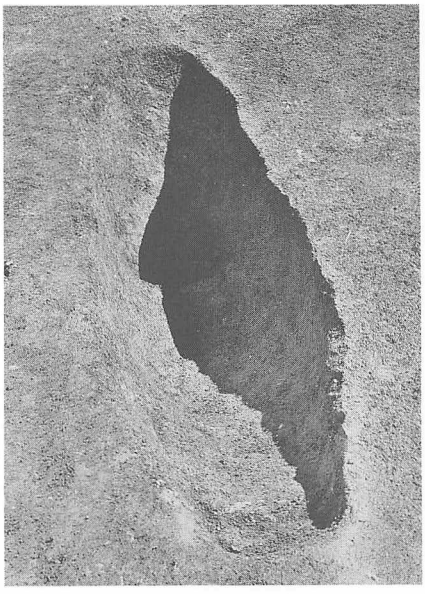
2　P－5完掘（南から）



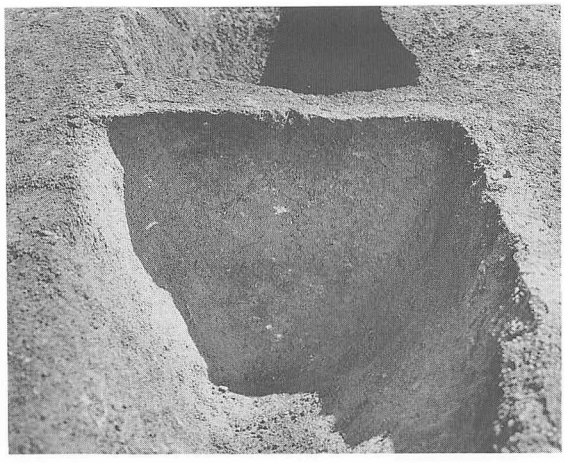
3　P－6完掘（南東から）



4　P－7セクション（北から）



5　P－8完掘（西から）



6　P－8セクション（西から）

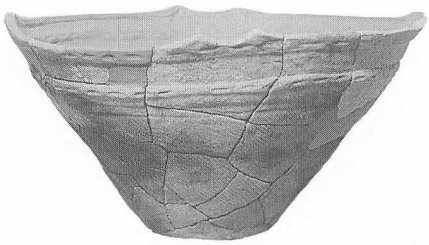
図版Ⅴ－16

1　集石遺構確認（東から）

2　集石遺構の土層確認（東から）

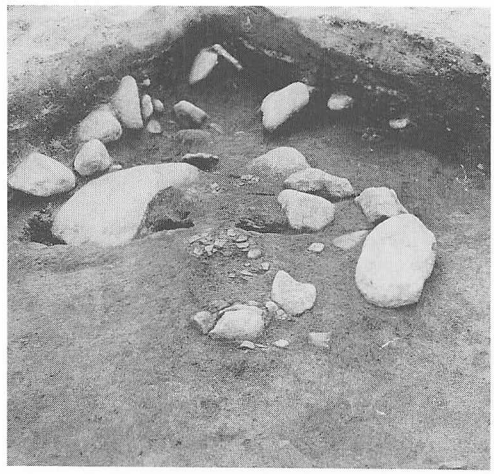
1　集石遺構セクション（東から）

2　集石遺構下面の遺物出土状況（西から）

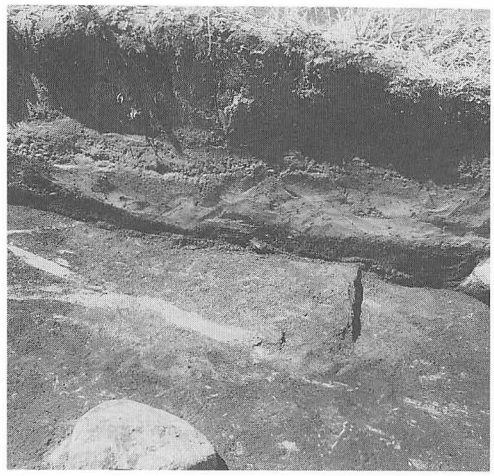


3　集石遺構下面出土の土器（Ⅴ群ｃ－1類）

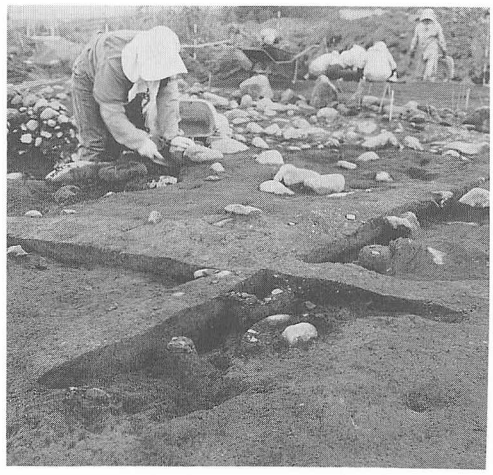
図版Ⅴ－18



1　石組炉・Ｆ－45（西から）

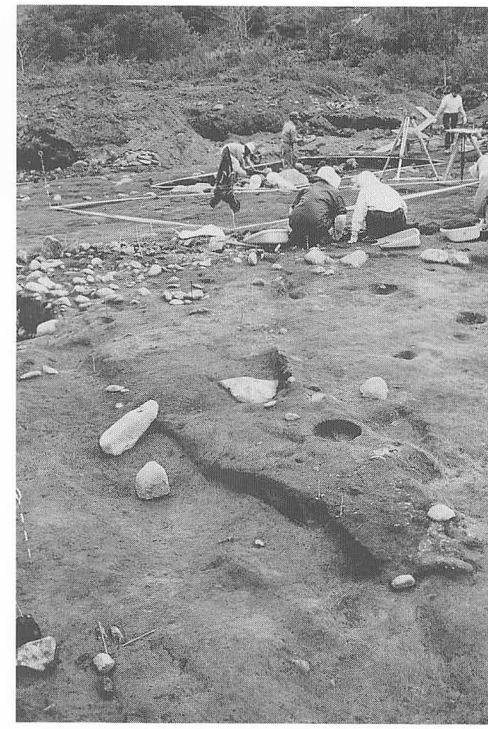


2　Ｆ－4（北から）

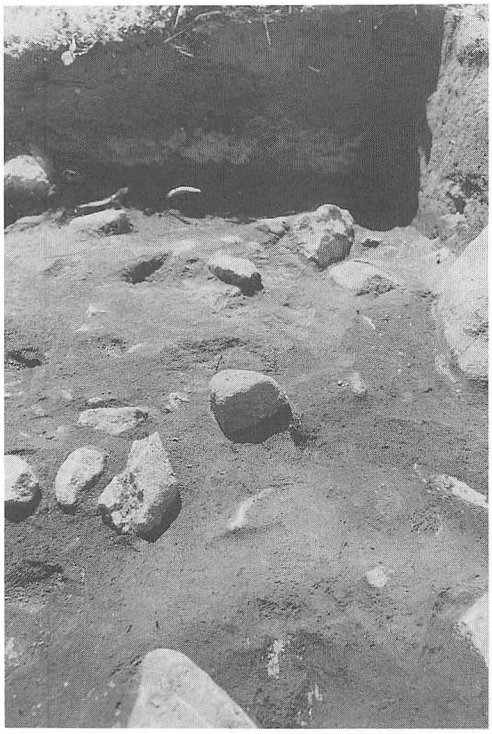


3　Ｆ－41遺物出土状況（東から）

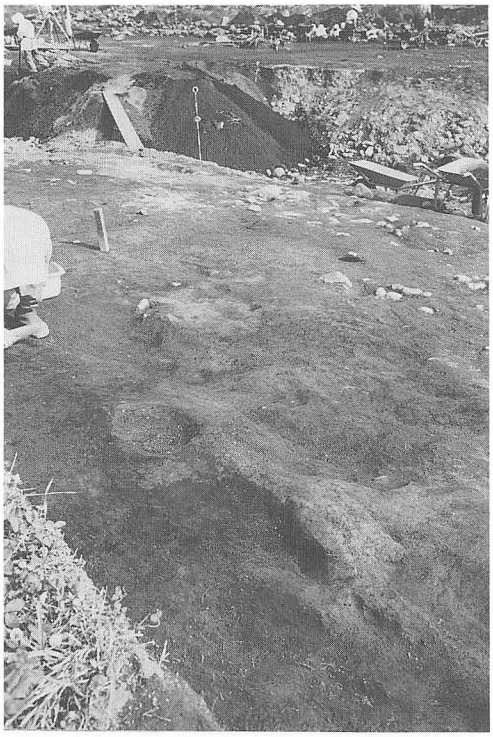
4　Ｆ－47（南西から）



5　Ｆ－41（南から）

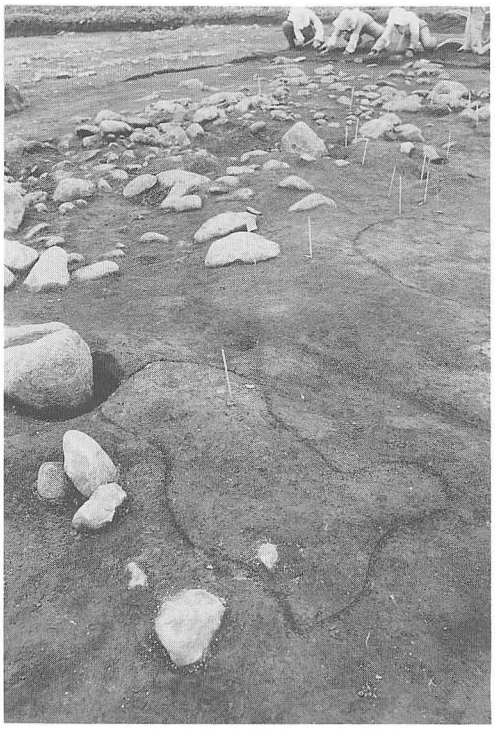


1　F－3（北西から）



2　F－32（西から）

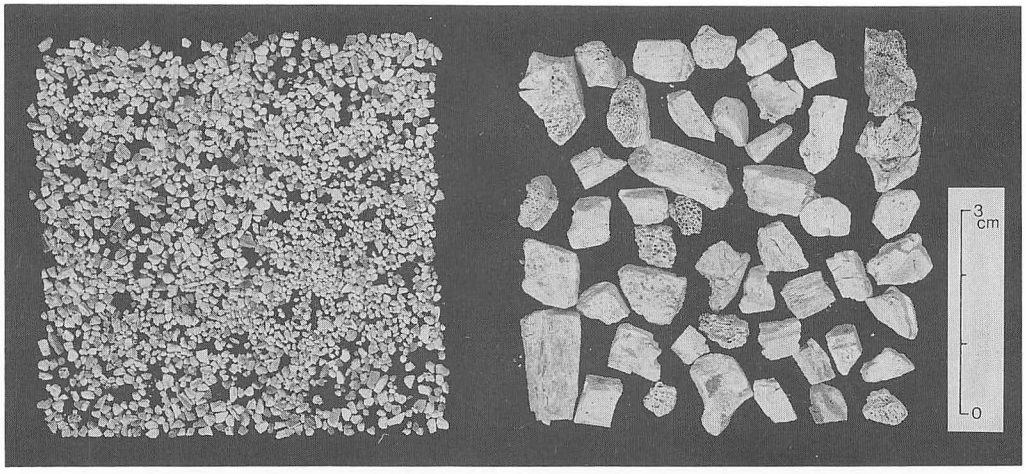
3　F－12（北東から）



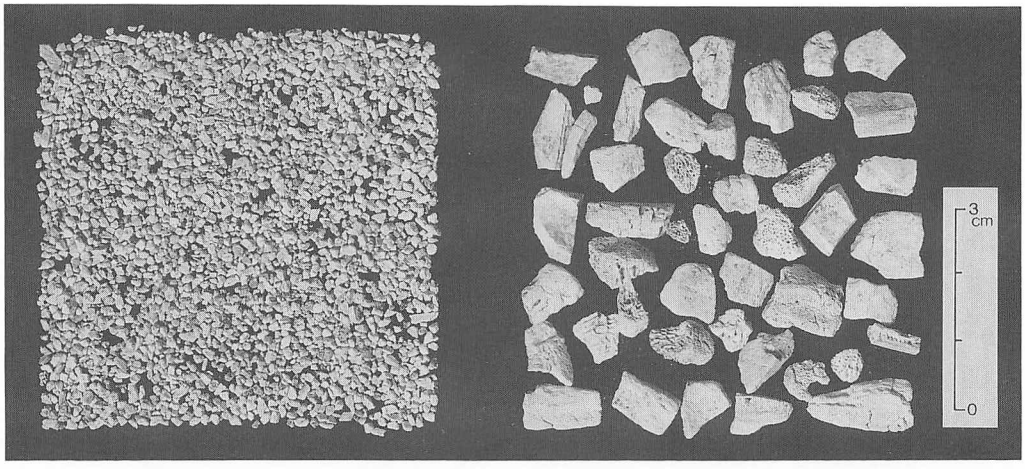
4　F－14（北から）

図版Ⅴ－20

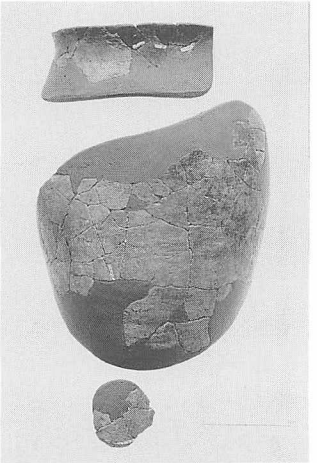
1　土壌水洗風景



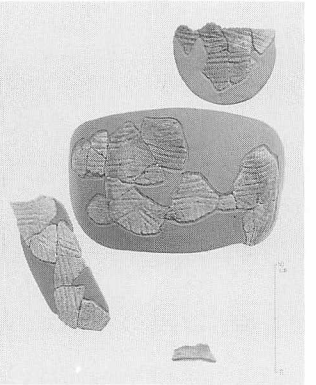
2　F－41出土の焼骨（左：0.5㎜メッシュ　右：1.41㎜メッシュ）



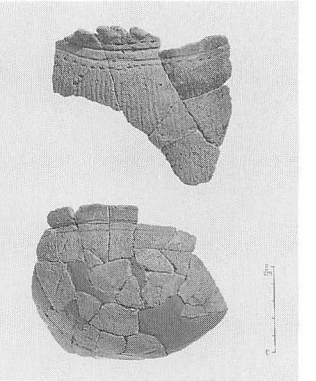
3　F－47出土の焼骨（左：0.5㎜メッシュ　右：1.41㎜メッシュ）



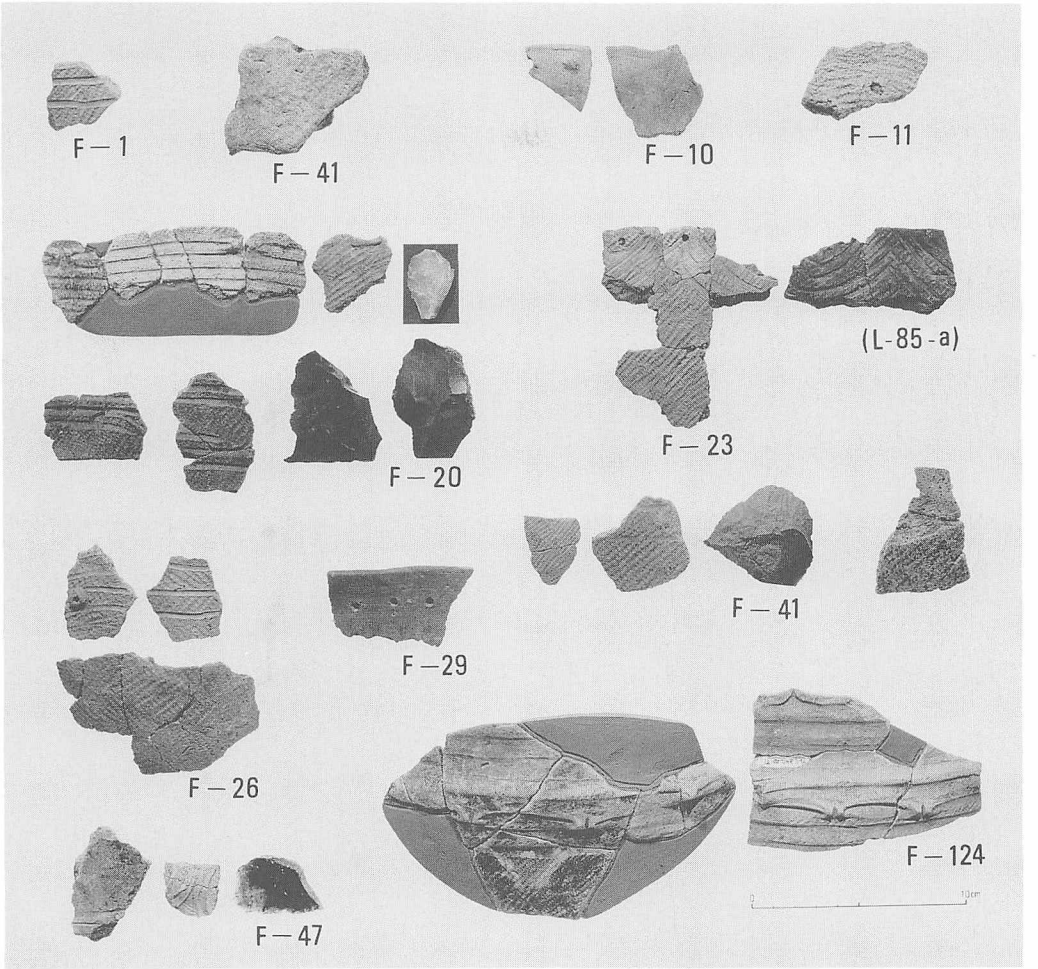
1　F－2出土の土器



2　F－111出土の土器

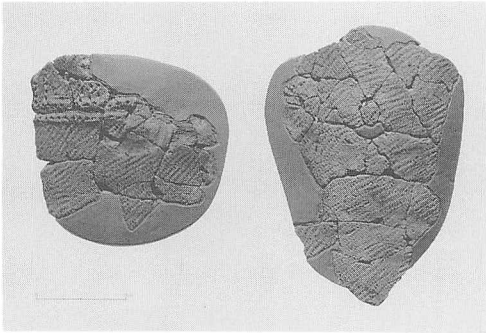


3　石組炉・F－45出土の土器



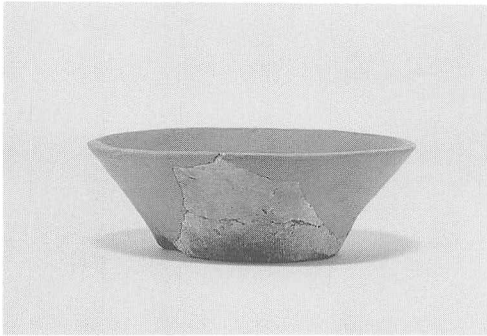
4　焼土出土の遺物

図版Ⅴ－22

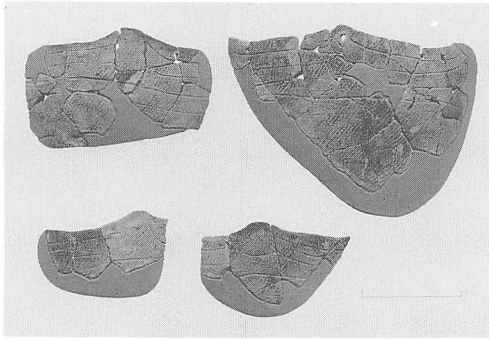


1　Ⅲ群土器

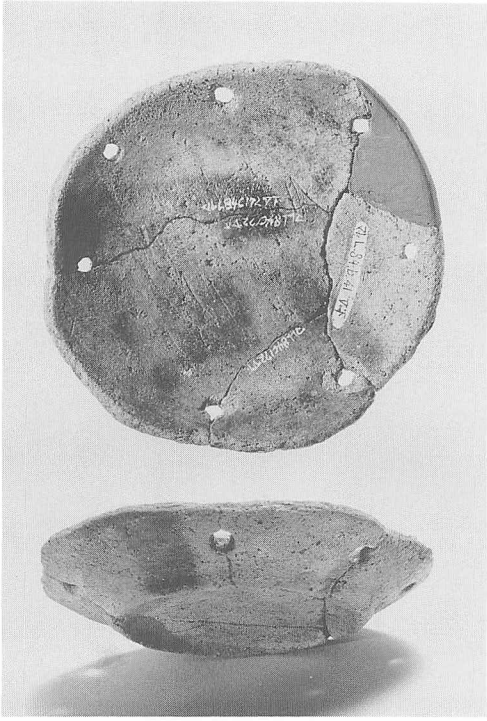
2　Ⅳ群ｂ類土器



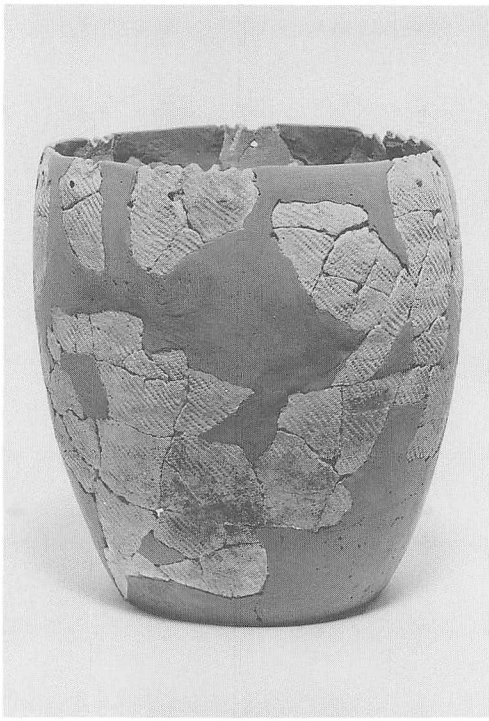
3　Ⅳ群ｂ類土器



4　Ⅳ群ｃ類土器

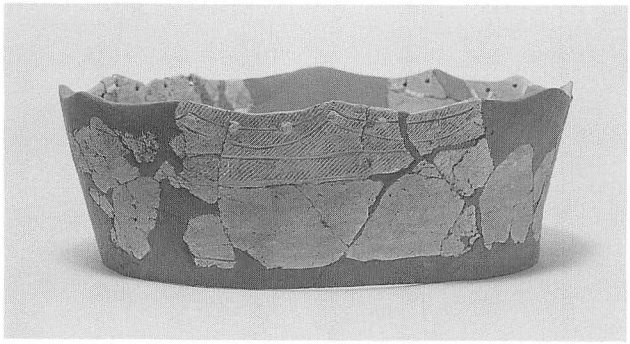


5　Ⅳ群ｃ類土器

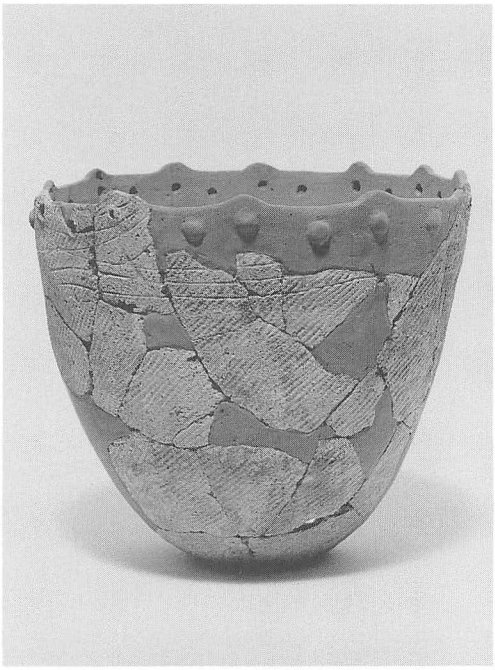


6　Ⅳ群ｃ類土器

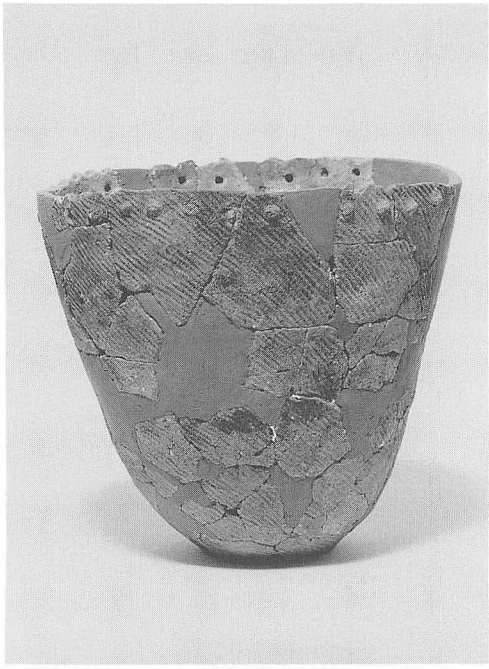
1　Ⅳ群ｃ類土器



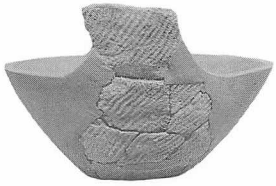
2　Ⅳ群ｃ類土器



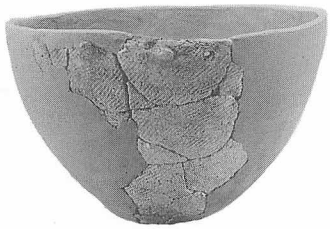
3　Ⅳ群ｃ類土器



4　Ⅳ群ｃ類土器



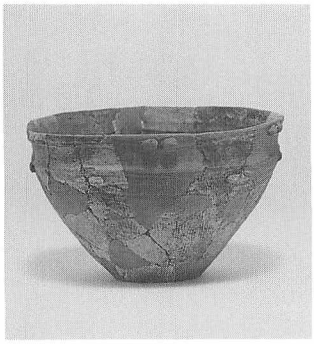
5　Ⅳ群ｃ類土器



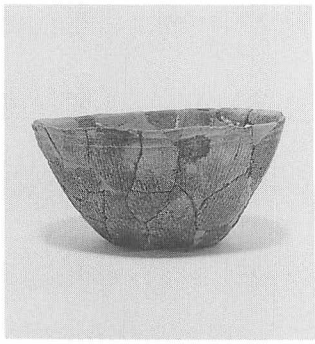
6　Ⅳ群ｃ類土器

7　Ⅳ群ｃ類土器

図版Ⅴ－24



1　Ⅴ群ｃ－Ⅰ類土器

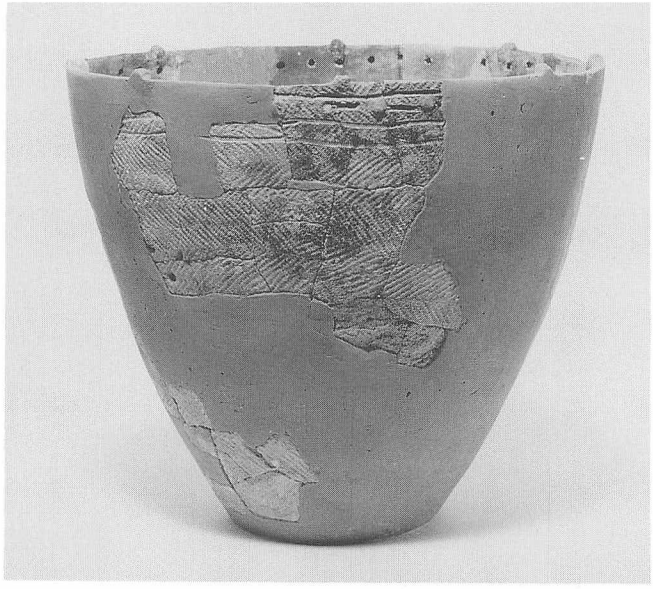


2　Ⅴ群ｃ－Ⅰ類土器

3　Ⅴ群ｃ－Ⅰ類土器

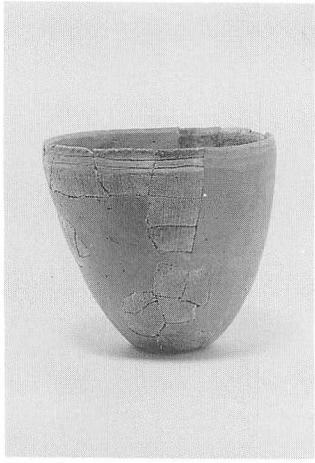
4　Ⅴ群ｃ－Ⅰ類土器

5　Ⅴ群ｃ－２類土器



6　Ⅳ群ｃ類土器

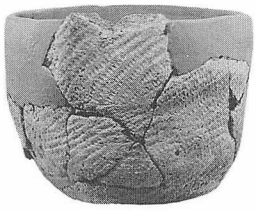
7　Ⅴ群ｃ－Ⅰ類土器



8　Ⅴ群ｃ－Ⅰ類土器

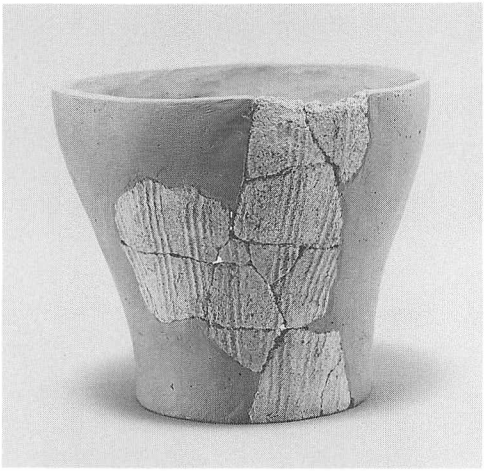
9　Ⅴ群ｃ－Ⅰ類土器

1　Ⅴ群ｃ－１類土器

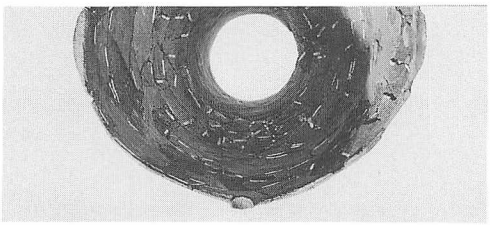


2　Ⅴ群ｃ－２類土器

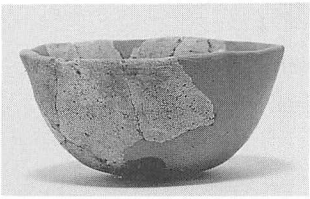
3　Ⅵ群ｃ類土器



4　Ⅵ群ｃ類土器



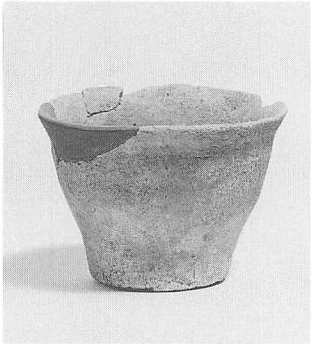
5　Ⅵ群ｃ類土器



6　Ⅶ群ａ類土器

7　Ⅶ群ａ類土器

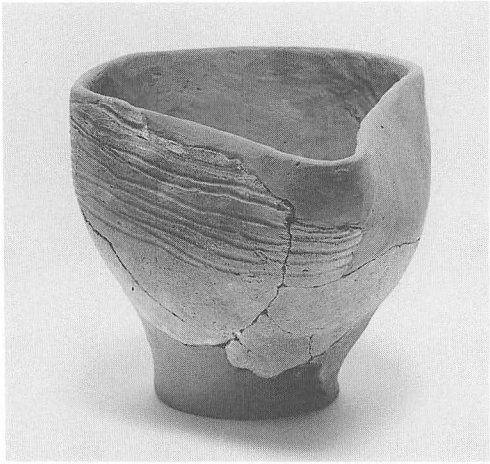
8　Ⅶ群ａ類土器



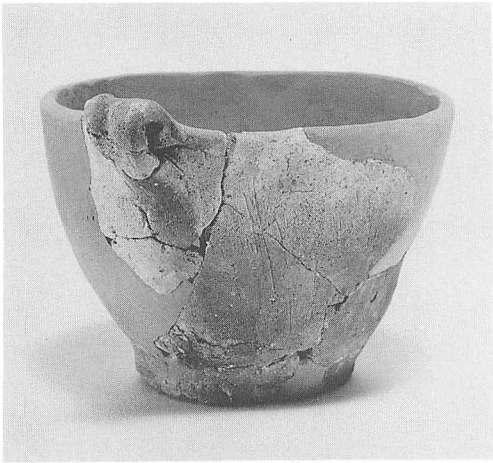
9　Ⅶ群ａ類土器

図版Ⅴ－26

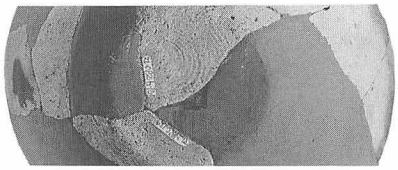
1　Ⅶ群 a 類土器



2　Ⅶ群 a 類土器



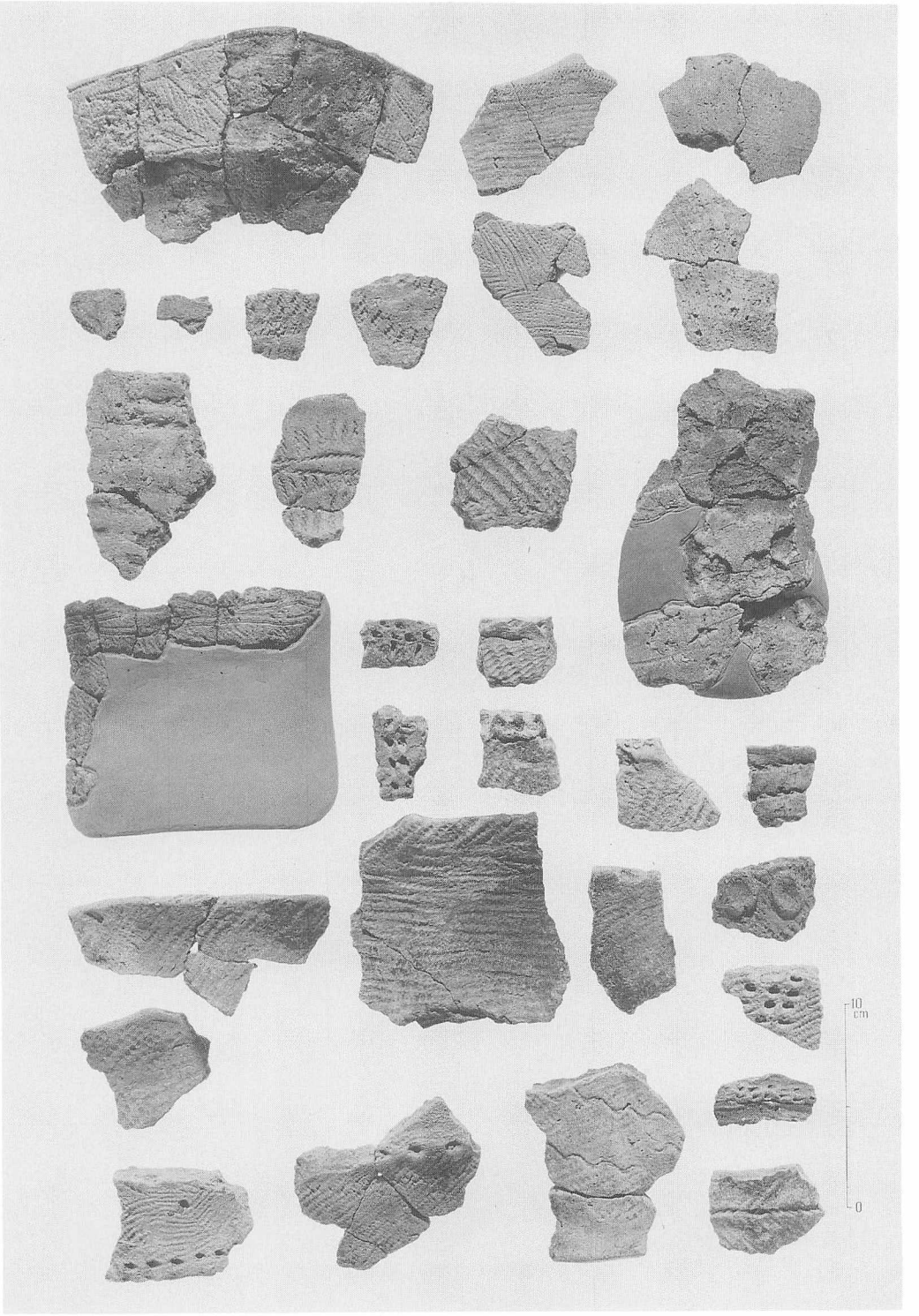
3　Ⅶ群 a 類土器



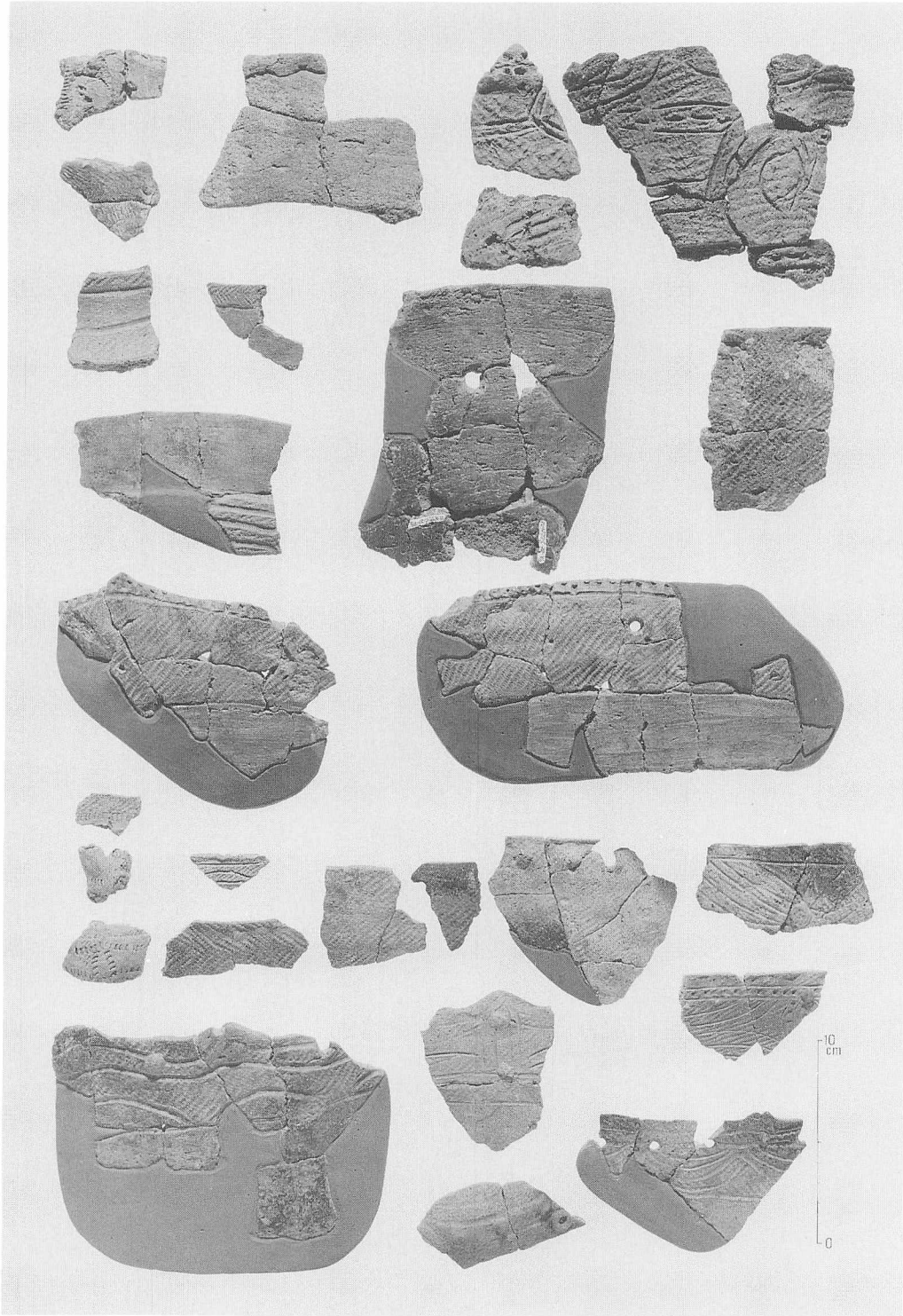
4　Ⅶ群 b 類土器

5　Ⅶ群 b 類土器

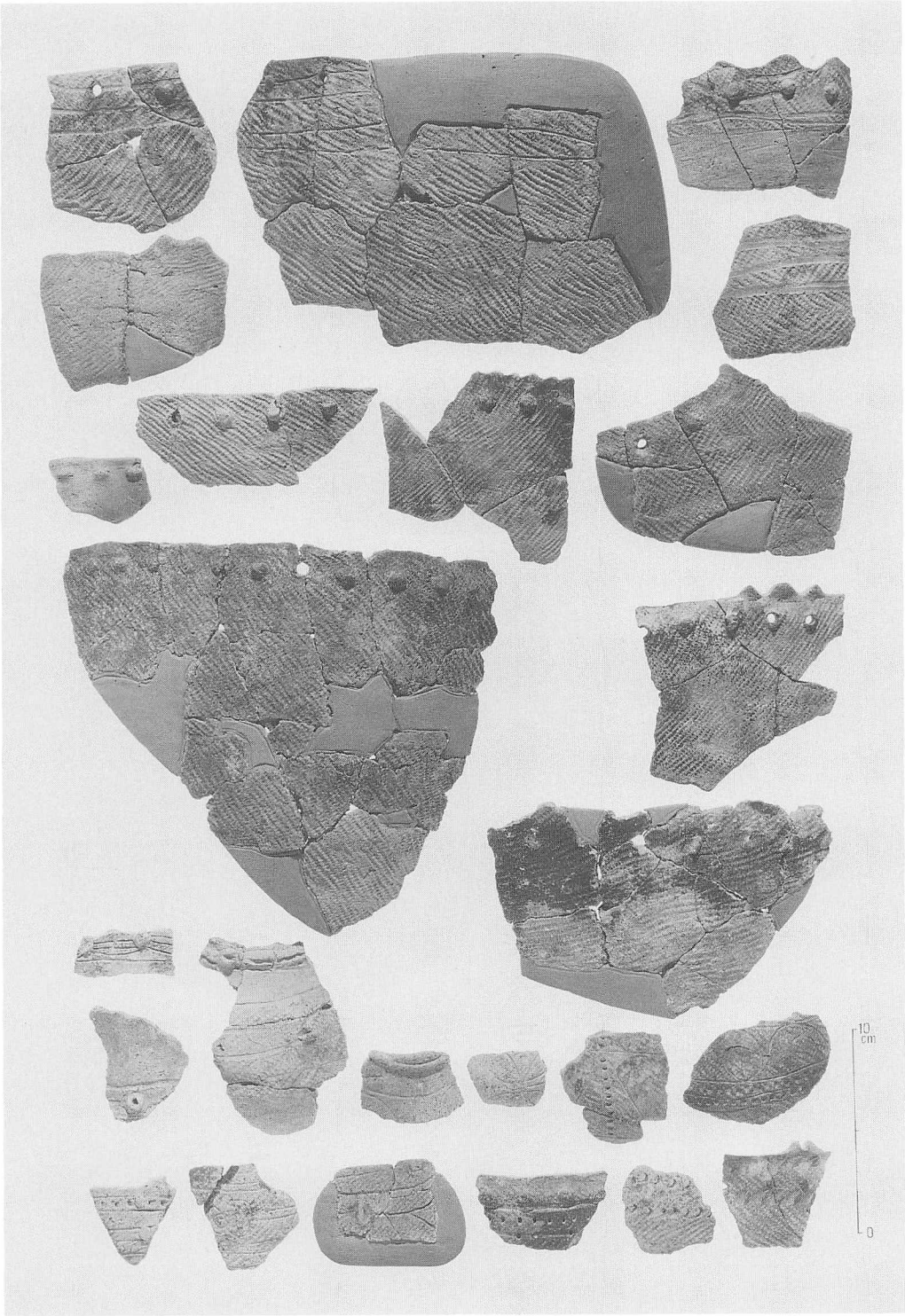
6　Ⅶ群 b 類土器



Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ群土器片

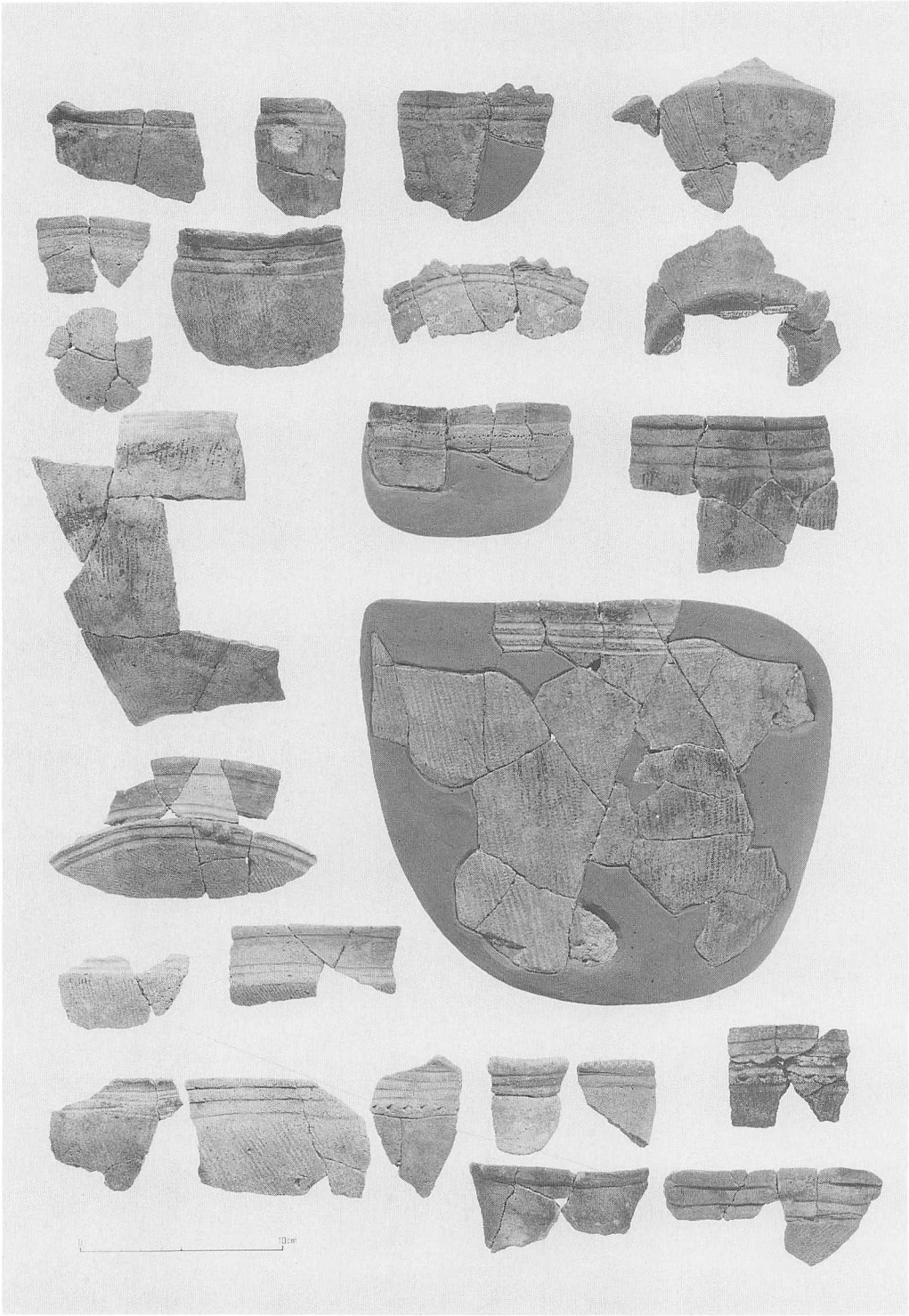


Ⅲ・Ⅳ群土器片

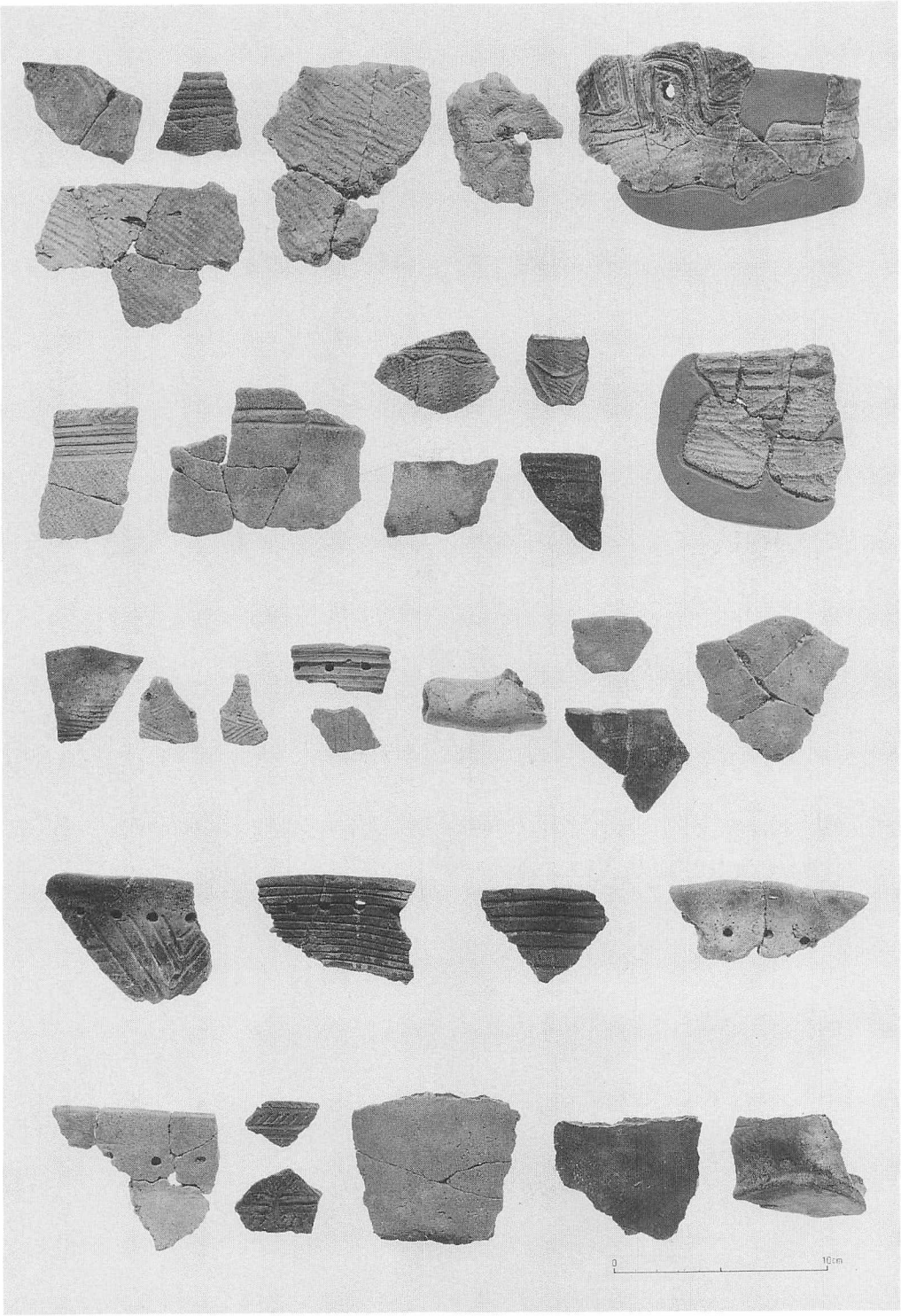


Ⅳ群土器片

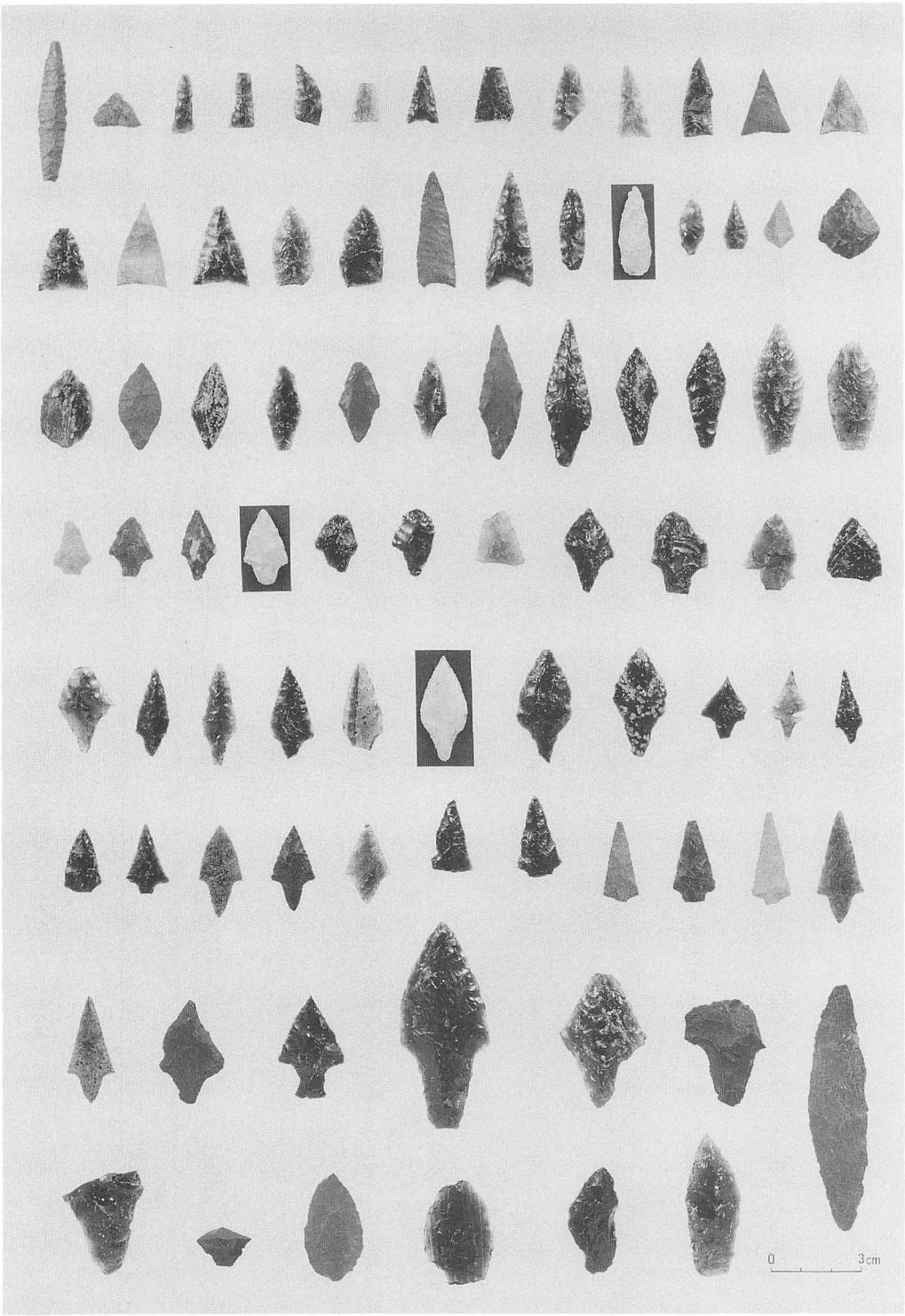
図版Ⅴ－30



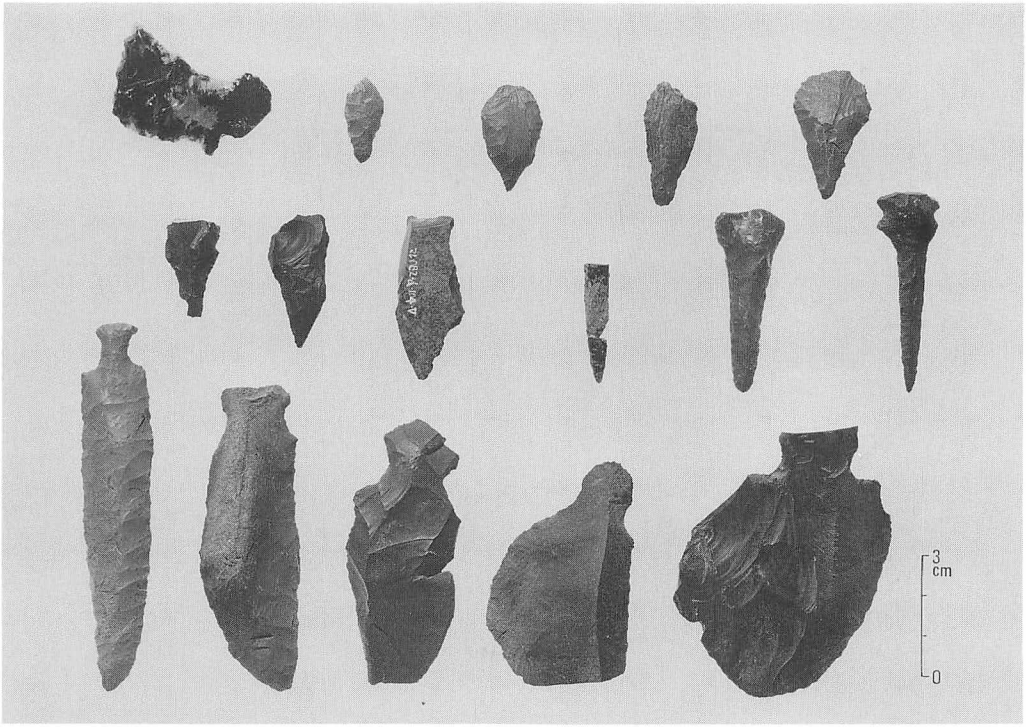
Ⅴ群土器片



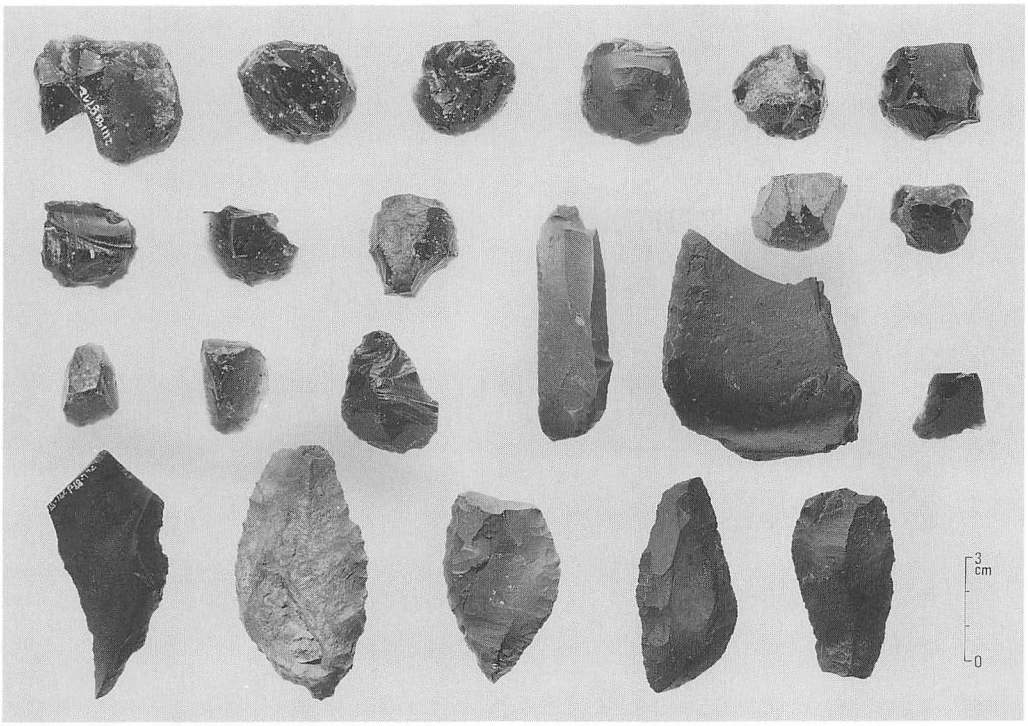
Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ群土器片



石器（石鏃・石槍）

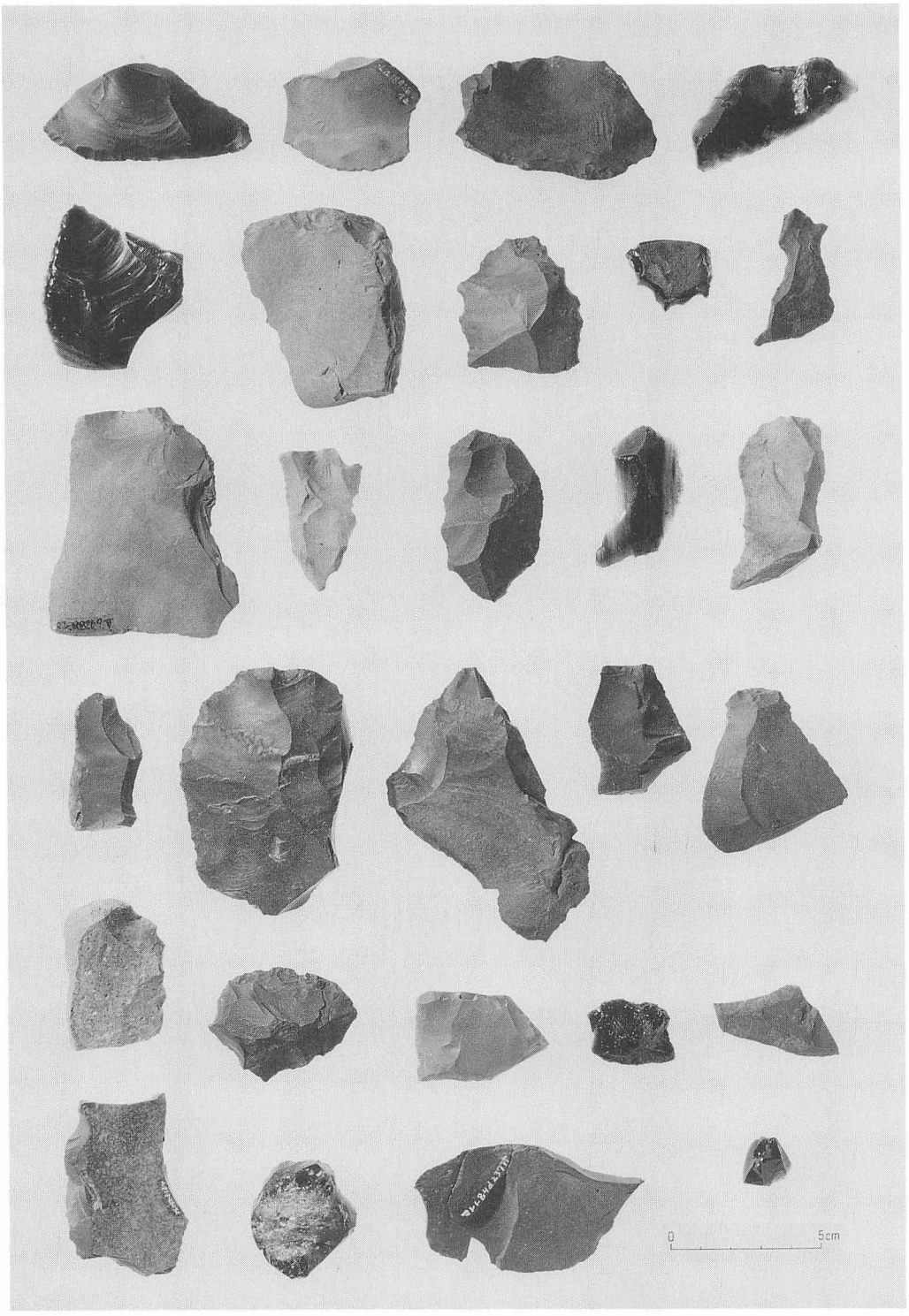


1　石器（石錐・つまみ付ナイフ）

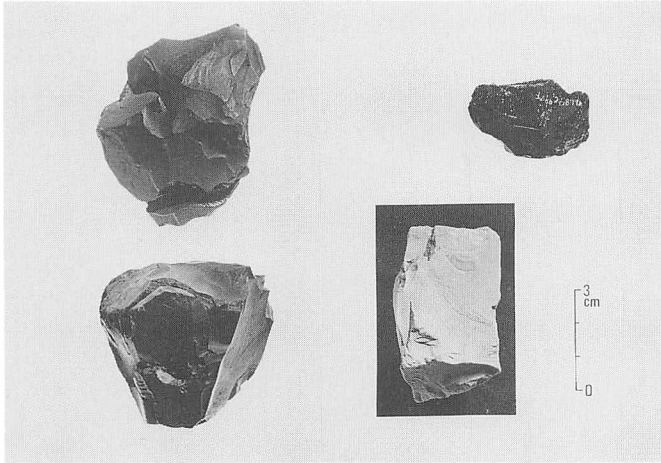


2　石器（ナイフ・スクレイパー類）

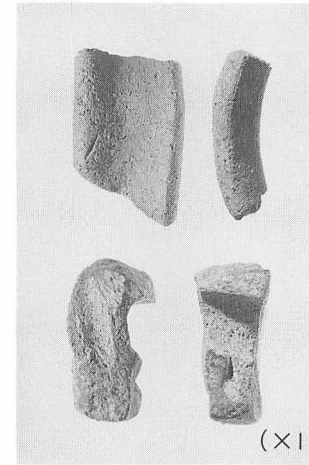
図版Ⅴ－34



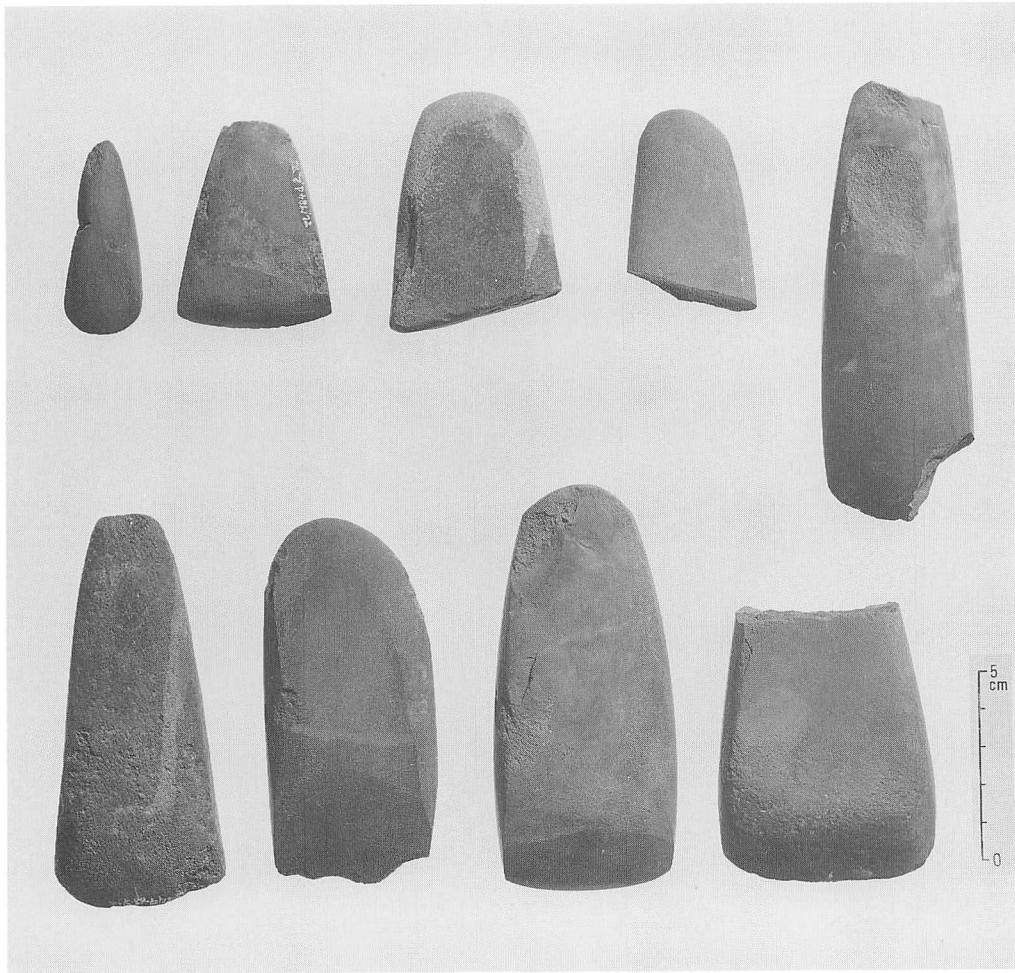
石器（ナイフ・スクレイパー類・楔形石器）



1　石核

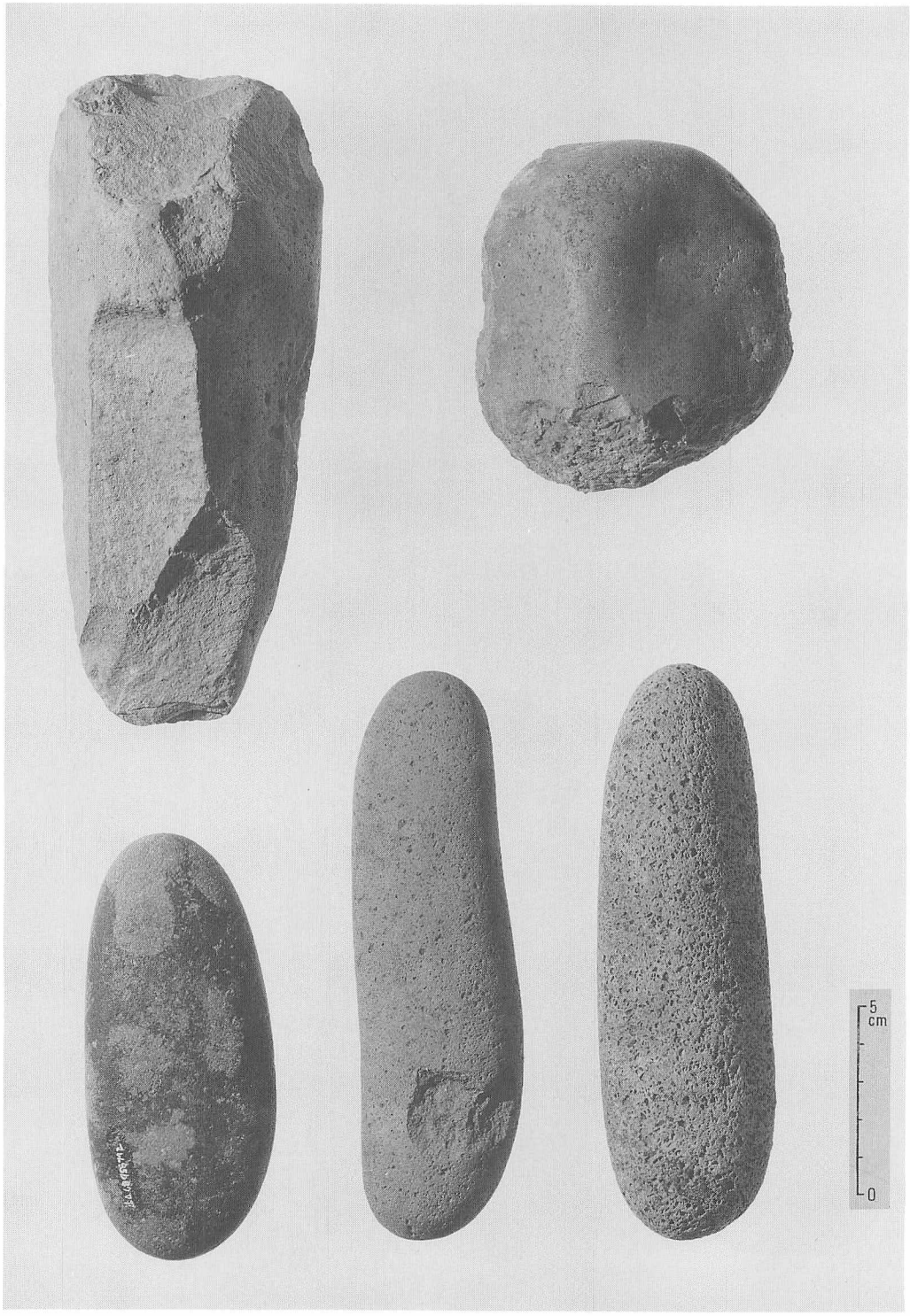


2　土・石製品

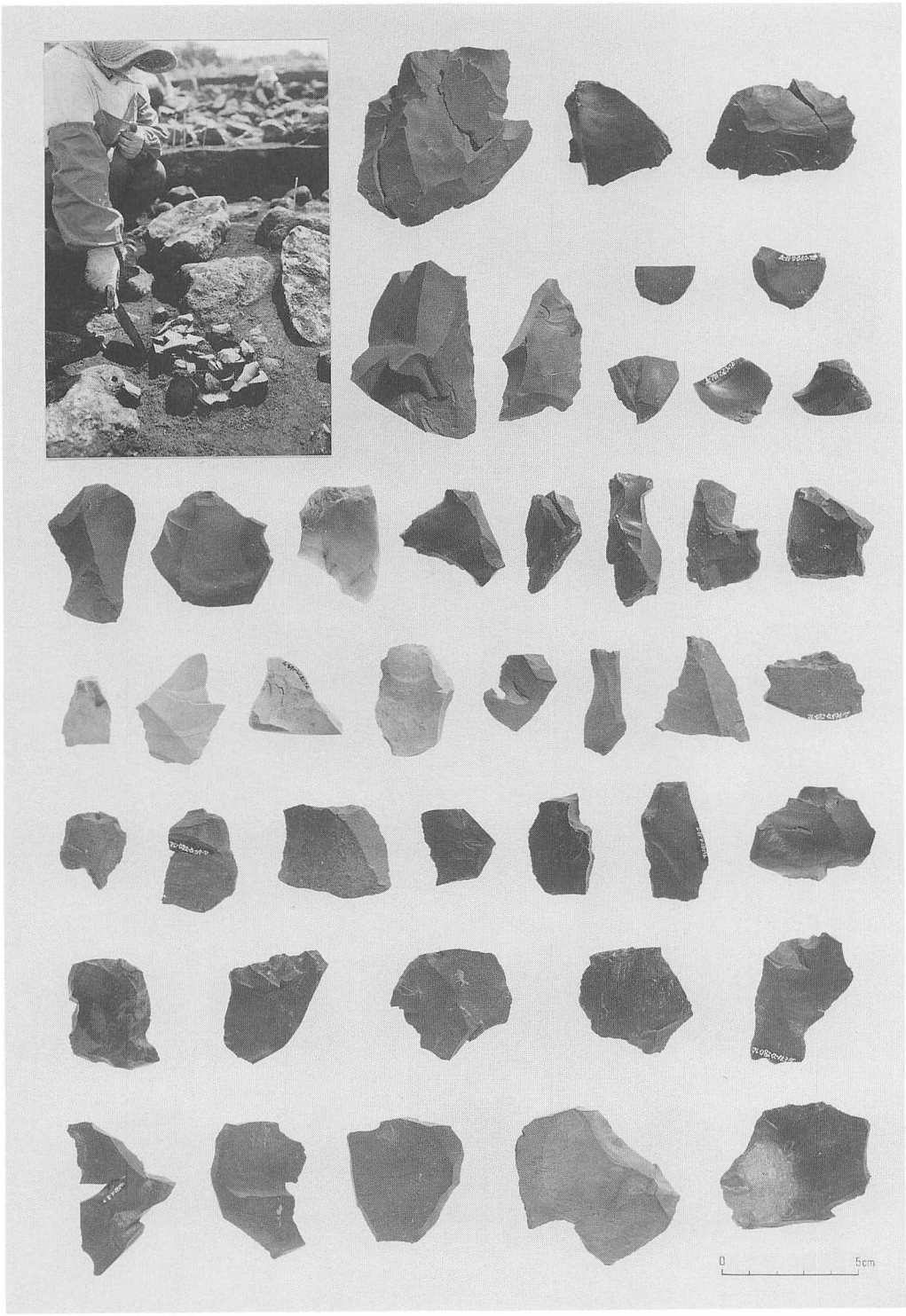


3　石器（石斧）

図版Ⅴ－36

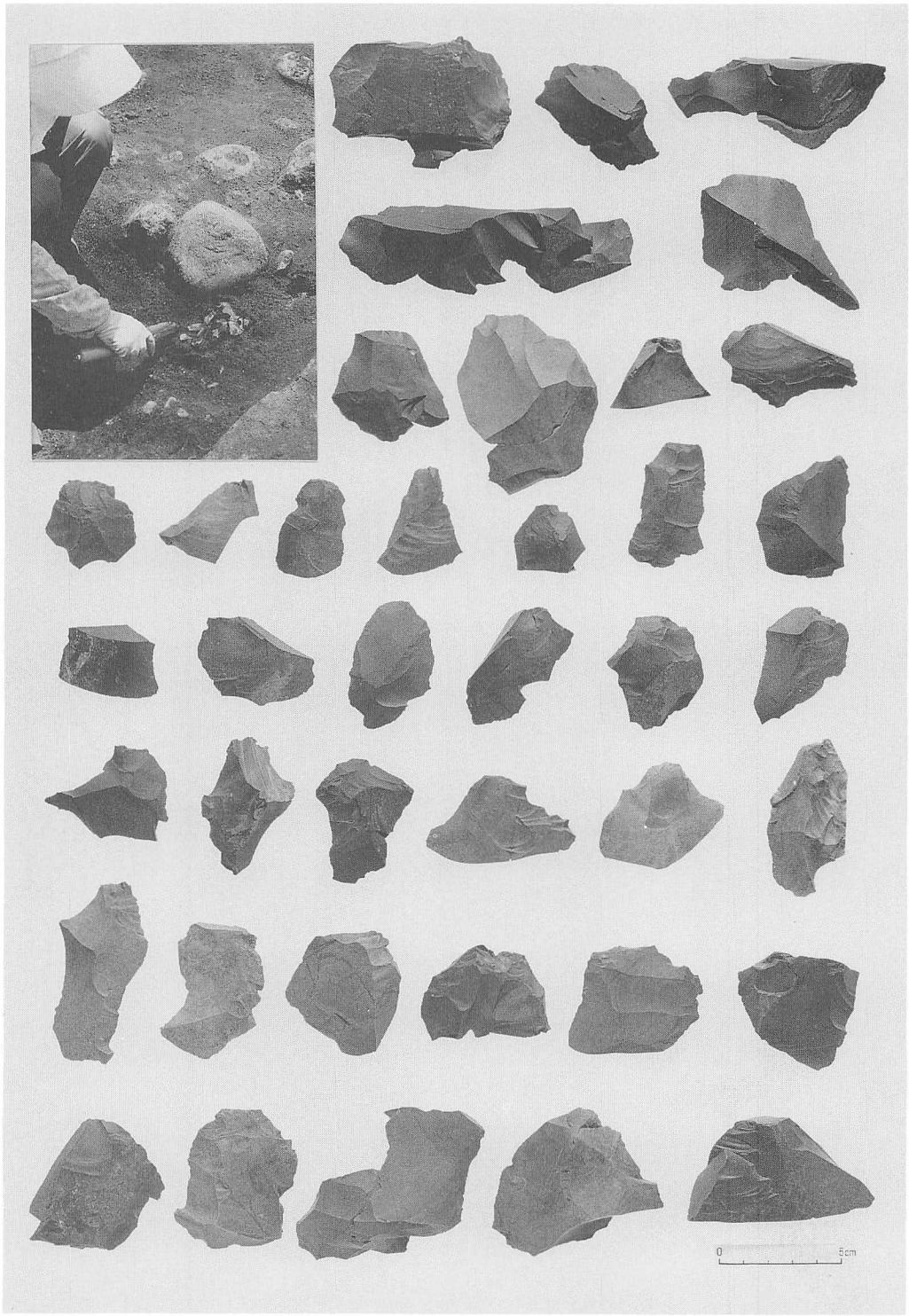


石器（擦石・敲石）



一括出土剝片（Ｌ－89－ｄ　南西から）

図版Ⅴ－38



一括出土剝片（０－82－ａ　南西から）

VI　自然科学的分析

1　植物遺体の概況

北海道古植物研究会
代表　星野　フサ

(1)　稀府川遺跡

多くの試料のなかにアブラナ科種子と思われる黒色球状の細粒種子が多産するほかは草本類ではアカザ科，タデ科，カヤツリグサ科，イネ科などの種子が若干出土する。

そのほか木本類ではキハダ，ヤマブドウ，ミズキなどがわずかに含まれている。

アブラナ科種子と思われる遺体は粒径がいずれも不ぞろいで小さいものばかりであり，栽培種とは考えられない。しかし，出土状態からみるならば，この時代の人間生活と何らかの関連があったことが予想される。

なお，この種については今後の精査が必要である。

(2)　牛舎川右岸遺跡

アブラナ科種子と思われる遺体が若干出土している。

表VI－1　稀布川遺跡出土種子同定結果　(1)

遺構・発掘区	採集土壌	選別節目	同定結果	遺構・発掘地	採集土壌	選別節目	同定結果
L87－d	フレイク・チップ集中土	0.424 mm	アブラナ科種子 不明種 1	F－6	焼土	0.425 mm	アブラナ科種子
〃	〃	1.41	カヤツリグサ科種子	〃	〃	1.41	植物片細片
H－1，炉	焼土	0.425	アブラナ科種子 アカザ科種子	F－7	焼土	0.425	アブラナ科種子
〃	〃	1.41	アブラナ科種子	〃	〃	1.41	植物片細片
H－2，F－1	焼土	0.425	イネ科種子 アブラナ科種子	F－9	焼土	0.425	アブラナ科種子
〃	〃	1.41	アブラナ科種子	〃	〃	1.41	植物片細片
H－3，炉	焼土	0.425	同　上	F－10	焼土	0.425	アブラナ科種子
〃	〃	1.41	キハダ種子 ヤマブドウ種子	〃	〃	1.41	同　上
P－1	炭化物を含む土壌	0.425	植物片細片	F－11	焼土	0.425	アブラナ科種子
〃	〃	1.41	同　上	〃	〃	1.41	植物片細片
F－1	焼土	0.425	アブラナ科種子 不明種 1	F－12	焼土	0.425	植物片細片
〃	〃	1.41	植物片細片	〃	〃	1.41	同　上
F－2	焼土	0.425	アブラナ科種子	F－13	焼土	0.425	アブラナ科種子
〃	〃	1.41	不明種 1	〃	〃	1.41	植物片細片
F－3	焼土	0.425	アブラナ科種子	F－14	焼土	0.425	アブラナ科種子
〃	〃	1.41	同　上	〃	〃	1.41	不明種 1
F－4	焼土	0.425	アブラナ科種子	F－17	焼土	0.425	アブラナ科種子
〃	〃	1.41	同　上	〃	〃	1.41	同　上
F－4′	焼土	0.425	植物片細片	F－18	焼土	0.425	アブラナ科種子
〃	〃	1.41	同　上	〃	〃	1.41	植物片細片
F－5	焼土	0.425	植物片細片	F－19	焼土	0.425	アブラナ科種子
〃	〃	1.41	同　上	〃	〃	1.41	植物片細片

表Ⅵ－2　稀府川遺跡出土種子同定結果 (2)

遺構・発掘区	採集土壌	選別節目	同定結果	遺構・発掘区	採集土壌	選別節目	同定結果
F－20	焼土	0.425 mm	アブラナ科種子	F－41－A	焼土	1.41 mm	植物片細片
〃	〃	1.41	植物片細片	F－41－B	焼土	0.255	アブラナ科種子 タデ科種子
F－21	焼土	0.425	アブラナ科種子	〃	〃	1.41	植物片細片
〃	〃	1.41	植物片細片	F－41－C	焼土	0.425	不明種 1
F－22	焼土	0.425	アブラナ科種子	〃	〃	1.41	植物片線片
〃	〃	1.41	植物片細片	F－42	焼土	0.425	アブラナ科種子
F－23	焼土	0.425	アブラナ科種子 不明種 1	〃	〃	1.41	マメ科種子(クサフジ？)
〃	〃	1.41	アブラナ科種子	F－43	焼土	0.425	植物片細片
F－24	焼土	0.425	アブラナ科種子	〃	〃	1.41	ヤマブドウ種子 タデ科種子
〃	〃	1.41	樹皮片細片	F－44	焼土	0.425	アカザ科種子 カヤツリグサ科種子
F－24(北側)	焼土	0.425	アブラナ科種子	〃	〃	1.41	植物片細片
〃	〃	1.41	不明種 1	F－45	焼土	0.425	タデ科種子 アカザ科種子，不明種 1
F－26	焼土	0.425	植物片細片	〃	〃	1.41	炭化木片細片
〃	〃	1.41	同　上	石組炉	焼土	0.425	アブラナ科種子
F－28	焼土	0.425	アブラナ科種子 カヤツリグサ科種子	〃	〃	1.41	同　上
〃	〃	1.41	植物片細片	F－47	焼土	0.425	不明種 1，アブラナ科種子
F－29	焼土	0.425	アブラナ科種子	〃	〃	1.41	ヤマブドウ種子
〃	〃	1.41	植物片細片	F－50	焼土	0.425	アブラナ科種子
F－30	焼土	0.425	アブラナ科種子	〃	〃	1.41	炭化木片細片
〃	〃	1.41	植物片細片	F－58	焼土	0.425	アブラナ科種子
F－31	焼土	0.425	アブラナ科種子	〃	〃	1.41	植物片細片
〃	〃	1.41	植物片細片	F－59	焼土	0.425	アブラナ科種子
F－32	焼土	0.425	アカザ科種子	〃	〃	1.41	植物片細片
〃	〃	1.41	植物片細片	F－62	焼土	0.425	アブラナ科種子
F－33	焼土	0.425	アブラナ科種子	〃	〃	1.41	植物片細片
〃	〃	1.41	植物片細片	F－64	焼土	0.425	アブラナ科種子
F－35	焼土	0.425	アブラナ科種子 不明種 1	〃	〃	1.41	炭化木片(針葉樹林多し)
〃	〃	1.41	植物片細片	F－65	焼土	0.425	アブラナ科種子 アカザ科種子，カヤツリグサ科種子
F－36	焼土	0.425	アブラナ科種子 アカザ科種子	〃	〃	1.41	ミズキ種子，本木類の芽 不明種 1
〃	〃	1.41	植物片細片	F－69	焼土	0.425	アカザ科種子
F－37	焼土	0.425	アブラナ科種子	〃	〃	1.41	不明種 1
〃	〃	1.41	同　上	F－93	焼土	0.425	アブラナ科種子 イネ科種子
F－38	焼土	0.425	アブラナ科種子 不明種 1	〃	〃	1.41	植物片細片
〃	〃	1.41	ヤマブドウ種子 1	F－111	焼土	0.425	アブラナ科種子
F－39	焼土	0.425	アブラナ科種子	〃	〃	1.41	植物片細片
〃	〃	1.41	不明種 1	N65－b	炭化物Ⅰ	0.425	アカザ科種子，カヤツリグサ科種子 アブラナ科種子
F－40	焼土	0.425	アブラナ科種子 タデ科種子	〃	〃	1.41	ミズキ種子 不明種 1
〃	〃	1.41	植物片細片	L－90－c	一括土器横 炭化物サンプル	0.425	アブラナ科種子
F－41	焼土	0.425	アカザ科種子 アブラナ科種子	〃	〃	1.41	植物片細片
〃	〃	1.41	カヤツリグサ科種子	P83－b	炭化物サンプル	0.425	炭化木片細片
F－41－A	焼土	0.425	アブラナ科種子	〃	〃	1.41	同　上

表Ⅵ－3　牛舎川右岸遺跡出土種子同定結果

遺構・発掘区	採集土壌	選別節目	同定結果	遺構・発掘区	採集土壌	選別節目	同定結果
H－1	床面土壌①	0.425 mm	アブラナ科種子 不明種 1	H－1	床面土壌②	0.425 mm	アブラナ科種子 不明種 1
〃	〃	1.41	同　上	〃	〃	1.41	同　上

2　液体シンチレーション炭素年代測定結果

京郎産業大学理学部
山田　　治

測定番号	遺跡名	出土地点・遺構		層位	試料	測定結果 (y.B.P)
KSU-1970	牛舎川右岸遺跡	H-36-c	C-1	Us-b_2 火山灰直下	木炭	380±35
KSU-1971	牛舎川右岸遺跡	R-43-c	21	VI層上部	木炭	530±30
KSU-1972	稀府川遺跡	N-90-c・d	F-6	V層上部	木炭	1,050±15
KSU-1973	稀府川遺跡	N-84-b	F-14	V層上部	木炭	730±40
KSU-1974	稀府川遺跡	O-85-a	F-17	VI層上部	木炭	1,010±30
KSU-1975	稀府川遺跡	K-87-c・d	F-38	B-Tm 火山灰直下	木炭	700±30

3　牛舎川右岸遺跡・稀府川遺跡の火山灰

(1)　はじめに

両遺跡で認められる火山灰について，主に鉱物組成上の特徴を記載する。火山灰の産状や種類は両遺跡に共通であるので，ここでは牛舎川右岸遺跡を例にして述べる。火山ガラスの屈折率と高砂川左岸地区の火山灰については次年度に報告する。

(2)　試料と試料の処理方法

火山灰試料の採取位置を図VI－３－１に示す。AはUs－IV a，Bは幌別黄橙色火山灰，CはB－Tm（火山灰の対比については後述）の保存の良い断面である。

採取試料は次の手順で処理し検鏡した。水洗→６％H_2O_2・10％HCl処理→水洗→乾燥→篩分け→粒径1/4—1/8 mm（R－43－c灰白色火山灰については1/8－1/16 mm）についてプレパラート作成（封入剤カナダバルサム）→偏光顕微鏡下で200粒以上検鏡→軽石・スコリア等も含めて各鉱物の粒数％を求める。

火山ガラスについては形態分類を行い，各型（仮称）の量比を粒数％で求めた。形態は以下のように分類した。

B型：漿果状・軽石様。

F型：気泡・泡壁が繊維状に細長く平行に伸びているもの。

L－C型：気泡が破砕し，泡壁がridgeをなして曲線状に走るもの。

M型：気泡と泡壁がつくる模様が網目状をなすもの。L－C型より気泡は小さい。

N型：針状の条線模様があるもの。

P型：薄い平板状。

UT：未分類。上記の型に属さないもの。

(3)　結果

火山灰の鉱物組成を図VI－３－２に示す。各火山灰の特徴は以下の通りである。

A　（グリッドS－30－d）

1層：作土層。灰色・青灰色の岩片を多量に含む黒褐色シルト質腐植土。層界平坦画然。層厚36 cm。

2層：砂質降下火山灰・降下火山岩片・降下軽石の互層で，少なくとも六枚のフォールユニットから成る。

２－１：粒径0.5 cm±の灰色・青灰色の岩片層。上部は耕作により剝平されている。層厚3 cm±。

２－２：灰色（５Y４／１）極細粒砂質火山灰層。砂質大の白色軽石の薄層（層厚0.5 cm）を挾む。上半がより細粒（シルト質）である。層厚4 cm。

２－３：粒径0.2—0.5 cmの白色軽石層。軽石は，斑晶として長石を比較的多く含み重鉱物

は少ない。軽石の発泡度は良くない。層厚2 cm。

2－4：灰色（5Y4／1）極細粒砂質火山灰層。2－3の基底から3 cm下位に，層厚0.1－0.2 cmの白色砂質軽石薄層を挾む。本ユニット基底から上方1.5 cmの間はより細粒(極細粒砂－シルト質）で，黄灰色（2.5Y4／1）を呈する。本ユニット全層厚5.5 cm。

2－5：粒径0.1－0.5 cmの灰色岩片層。発泡の良くない白色軽石をまれに含む。層厚2－3 cm。

2－6：暗灰黄色（2.5Y4／1）　細粒砂質火山灰層。概して下半部が粗粒。層厚2 cm。

2－1から2－6までの各基底の層界は平坦画然である。各ユニットとも，単粒結晶は主に斜長石から成る。重鉱物は少ない。火山ガラスは比乾的少なく，主にB型・N型から成る。軽石とスコリアが多く含まれる。

3層：褐色（7.5YR4／3）　シルト層。レンズ状に産出する。火山灰起源？。層界平坦明瞭。最大層厚6cm。主に斜長石と火山ガラスから成る。火山ガラスは気泡径の小さな塊状M型である。

4層：黒褐色（5YR3／1）粘土質シルト質腐植土層。5層の土壌化層と考えられる。炭化植物片を含む。層界平坦－波状明瞭。層厚3.5 cm。斜長石と軽石が多い。

5層：にぶい黄褐色（10YR5／3）火山灰層。上部はシルト質，下部は極細粒砂質。層界波状明瞭。層厚3－4 cm。上部は気泡の小さな塊状M型火山ガラスが多い。下部は重鉱物が比較的多い。

6層：黒褐色（5YR3／1）シルト質粘土質腐植土。レンズ状に産出する。火山灰起源？。層界平坦明瞭。層厚4 cm。斜長石と重鉱物が多い。

7層：黒色(5YR1.7／1)粘土質腐植土。レンズ状に産出する。層界平坦判然。層厚7 cm。

8層（扇状地堆積物）の土壌化層？。鉱物組成は6層とほぼ一致する。

B（グリッドR－43－c）

6層：明黄褐色（10YR6／8）シルト質降下火山灰。扇状地堆積物の凹地に腐植土を介して堆積している。しまりがある。層界平坦画然。層厚20 cm。上部は主に火山ガラスと斜長石，中・下部は主に斜長石から成る。火山ガラスは扁平なM型がほとんどである。

C（グリッドR－44－b）

灰白色火山灰：図示していないが，R－44の杭の下方で3層中に斑状を産出するシルト質降下火山灰。層界平坦画然。層厚0.5 cm。主に斜長石から成り，火山ガラスはM型が多い。

6層：明黄褐色（2.5Y6／6，湿）・淡黄色（2.5Y8／4，乾）シルト質降下火山灰。層界平坦画然。層厚2 cm±。すべて火山ガラスから成り，L－C型が多い。粒径1/8 mm＞ではアルカリ長石を含む。

(4)　火山灰の対比

両遺跡の火山灰を鉱物組成や分布から，以下のように既知の火山灰に対比した。グリッドS－30－dの2層は有珠山IVa火山灰(Us－IVa，A．D．1822)，グリッドS－30－dの5層，グ

リッドR－43－cの2層，及びグリッドR－44－bの2層は有珠山b_2火山灰(Us－b_2，A．D．1663。以上，火山灰名は横山ほか，1973による。）である。

グリッドR－44－bの3層中の灰白色火山灰は，渡島半島部で現地表に近い層準に産出する灰白色の火山灰(例えば，木古内町札苅遺跡のSt－a，知内町湯の里3遺跡のYn－b，同建川2・新道4遺跡のSm－a，上磯町矢不来2遺跡のYf－a，函館市石川1・桔梗2遺跡の上位の完新世火山灰等。北海道埋蔵文化財センター，1986 a・b・1988 a・b）に対比される。

グリッドR－44－bの6層は，町田ほか（1981）・町田ほか（1984）の白頭山－苫小牧火山灰（B－Tm）に対比される。

グリッドR－43－cの6層は，登別市幌別周辺で認められた縄文時代早期の住居跡を覆う火山灰（北海道埋蔵文化財センター，1983・1985・1987 c）に対比される。既述したように，この火山灰は縄文時代の鍵層として重要であるので，「幌別黄橙色火山灰」と仮称しておく（III－2・IV－4参照)。

この他に，Us－IVaの上位に腐植土を介して有珠山IIIa火山灰(Us－IIIa，A．D 1853)が認められることがある。

従来，有珠山周辺では，Us－b_2直下の腐植土層中に斑状に産出する火山灰が駒ヶ岳起源のKo－eとされてきた(横山ほか，1973等)。しかし，この層準には前述の灰白色火山灰とB－Tmの二種が認められるので，これらとKo－eとの関係が再検討されねばならない。

以上の火山灰層序を模式的に示すと図III－3の通りである。　　（花岡　正光）

引用参考文献

北海道火山灰命名委員会（1982)：北海道の火山灰．23 pp.

北海道埋蔵文化財センター（1983)：川上B遺跡．303 pp.

北海道埋蔵文化財センター（1985)：登別市川上B遺跡．109 pp.

北海道埋蔵文化財センター（1986 a)：木古内町札苅遺跡．128 pp.

北海道埋蔵文化財センター（1986 b)：知内町湯の里3遺跡．54 pp.

北海道埋蔵文化財センター（1987 a)：木古内町建川2・新道4遺跡．614 pp.

北海道埋蔵文化財センター（1987 b)：上磯町矢不来2遺跡．91 pp.

北海道埋蔵文化財センター（1987 c)：登別市亀田公園遺跡．67 pp.

北海道埋蔵文化財センター（1988 a)：函館市石川1遺跡．320 pp.

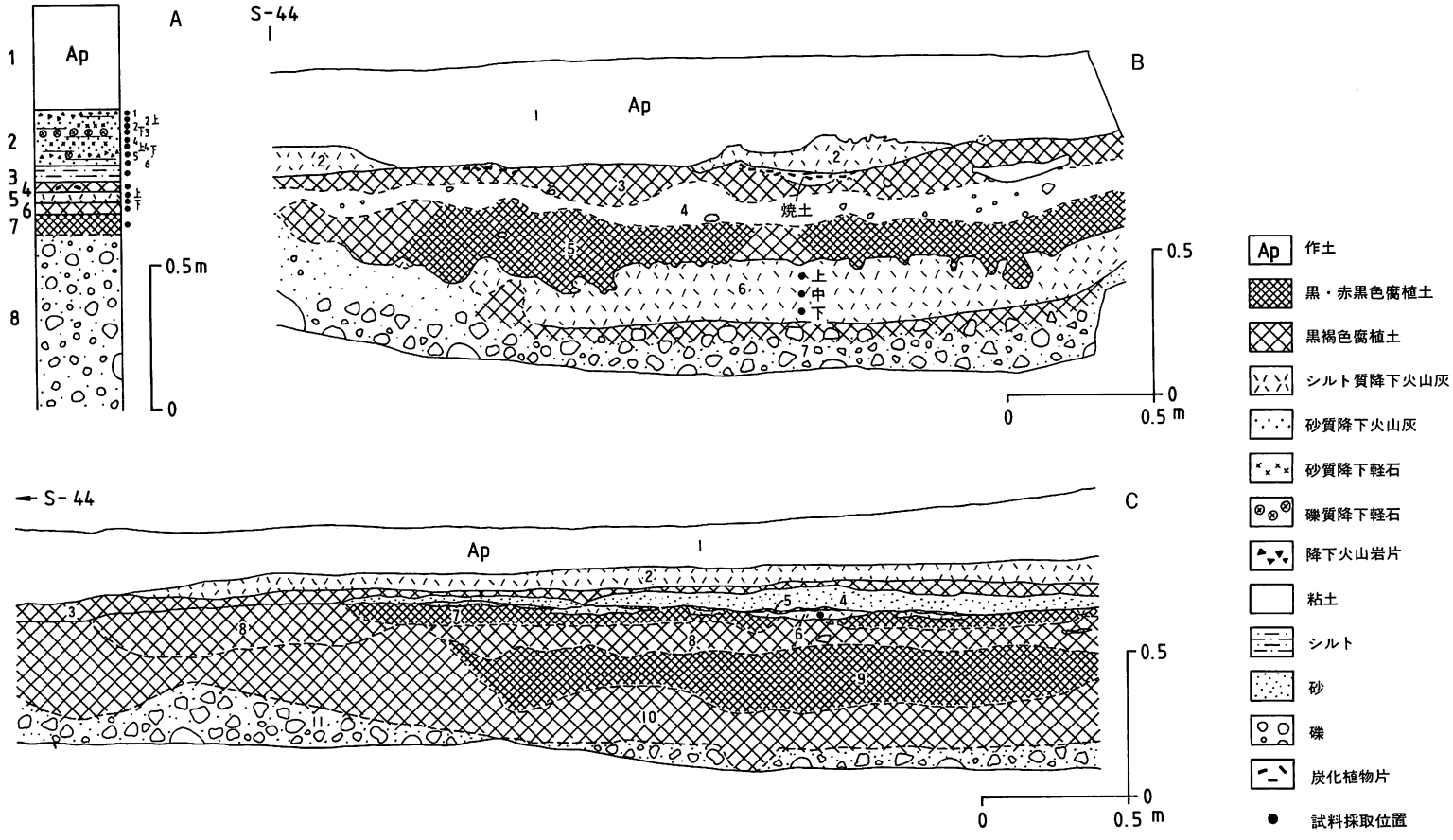
北海道埋蔵文化財センター（1988 b)：函館市桔梗2遺跡．252 pp.

春日井　昭（1983)：土層断面に見られる火山灰層の特性．北海道文化財保護協会編「南稀府5遺跡」，74 pp.：pp．59－60.

町田　洋・新井房夫・森脇　広（1981)：日本海を渡ってきたテフラ。科学，Vol．51，pp．562－569.

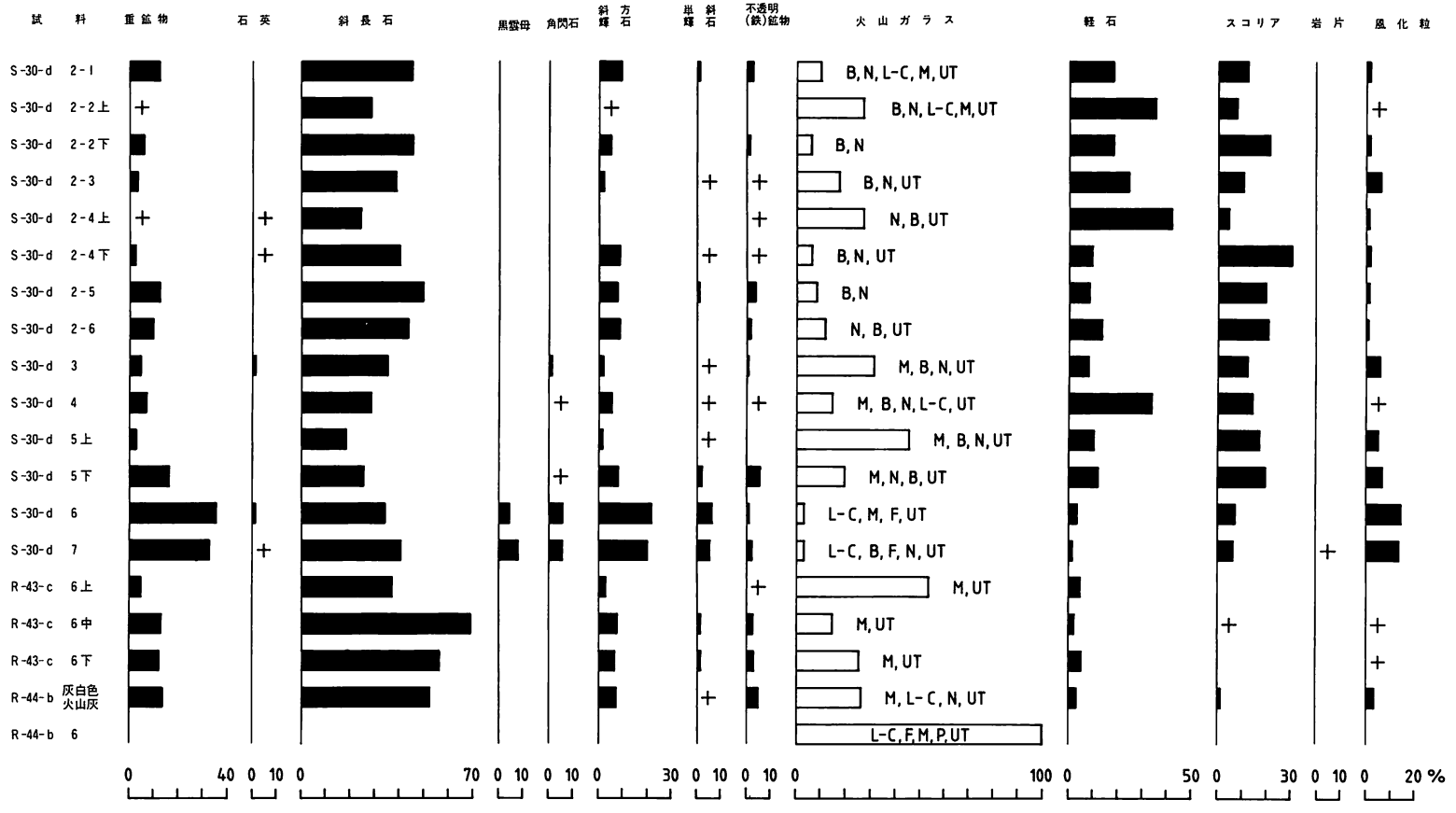
町田　洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫（1984)：テフラと日本考古学—考古学研究と関係するテフラのカタログ—．古文化財編集委員会編「古文化財の自然科学的研究」，984 pp.，同朋舎：pp．865－928.

横山　泉・勝井義雄・大場与志男・江原幸雄（1973)：有珠山—火山地質・噴火史・活動の現況および防災対策—．254 pp．北海道防災会議.



図Ⅵ－1　牛舎川右岸遺跡の火山灰断面と試料採取位置

A：グリッドS－30－d　　B：グリッドR－43－c　　C：グリッドR－44－b



図Ⅵ－2　火山灰の鉱物組成

引用参考文献

石橋次男・宮宏明他　1983　『猿別C遺跡の考古学的調査』墓別町教育委員会
石橋孝夫・清水雅男・藤田　登・田才雅彦　1979『SHIBISHIUSU II』　石狩町教育委員会
宇部則保　1989　「青森県における7・8世紀の土師器ー馬淵川流域を中心として」　『北海道考古学』第25輯
上野秀一　1978　「石狩海岸砂丘地帯の遺跡群について」『北海道考古学』第14輯
上屋真一・藤田光一　1989『カリンバ2遺跡ー第I地点における調査』　恵庭市教育委員会
内山真澄　1979　「寿都3遺跡」『寿都町文化財調査報告書I』　寿都町教育委員会
内山真澄　1985　「朱太川右岸6遺跡」『寿都町文化財調査報告書III』　寿郡町教育委員会
内山真澄編　1985　『渋井遺跡発掘調査報告書』　泊村教育委員会
大谷敏三・西連寺健・田村俊之　1981　『末広遺跡における考古学的調査（上）』千歳市文化財調査報告書VII
大谷敏三・田村俊之　1982　『末広遺跡における考古学的調査（下）』千歳市文化財調査報告書VIII
大島直行　1984　「北海道の貝塚の調査」『考古学ジャーナル』No.231
大島直行・瀬川拓郎　1982　「千歳6遺跡」『札内台地の縄文時代集落址』　登別市教育委員会
大島直行・百々幸雄他　1986　『入江貝塚』虻田教育委員会
大島直行・百々幸雄他　1986『北黄金貝塚』　伊達市教育委員会
大島直行・百々幸雄編　1987　『高砂貝塚』　札幌医科大学解剖学第二講座
大沼忠春　1981　「北海道中央部における縄文時代中期から後期初頭の編年について」
『考古学雑誌』第66巻第4号
大沼忠春・千葉英一・田才雅彦　1983　『南稀府5遺跡』北海道文化財保護協会
大場靖友編　1989　『有珠善光寺2遺跡II』　伊達市教育委員会
小笠原忠久　1985　『臼尻B遺跡　V』　南茅部町教育委員会
小笠原忠久　1986　『臼尻B遺跡　VI』　南茅部町教育委員会
小笠原忠久　1987　『臼尻B遺跡　VII』　南茅部町教育委員会
小笠原忠久　1988　『臼尻B遺跡　VIII』　南茅部町教育委員会
金子浩昌　1986　「北海道における縄文時代貝塚の形成と動物相」『北海道考古学』第22輯
金刺伸吾　1974　「どろめんこの話」『どるめん』3　JICC出版局
久保　泰　1986　『史跡福山城　III』　松前町教育委員会
久保　泰　1988　『史跡福山城　V』松前町教育委員会
久保　泰　1989　『史跡跡福山城　VI』松前町教育委員会
久保　泰・石本省三他　1985　『札前』　松前町教育委員会
久保　泰　1989　『札前II』　松前町教育委員会
後藤和民　1986　「江戸ゴミと泥めんこ」『日本民俗文化大系』14技術と民俗（下巻）
小浜基次・峰山巌・藤本英夫　1963　『有珠善光寺遺跡」『北海道の文化』特集号
小柳正夫・佐藤和利　1977　『紋別市オンネナイ第2地点遺跡』紋別市教育委員会
佐藤一夫他　1987　『苫小牧東部工業地帯の遺跡群II』　苫小牧市教育委員会
佐藤一夫編　1987　『弁天貝塚I』　苫小牧市教育委員会
佐藤一夫編　1988　『弁天貝塚II』　苫小牧市教育委員会
佐藤一夫編　1989　『弁天貝塚III』　苫小牧市教育委員会
佐藤忠雄　1984　『駒場遺跡』　音更町教育委員会
市立市川歴史博物館編　1983　資料集『泥メンコ』
芹沢長介編　1979　『峠下聖山遺跡』七飯町教育委員会
高橋正勝他　1971　『柏木川』北海道文化財保護協会
高橋正勝他　1980　『アヨロ』　白老町教育委員会
高橋正勝他　1982　『萩ヶ岡遺跡』　江別市教育委員会
伊達高等学校郷土研究部　1952『にいやま』（単）
伊達市市民部保健衛生課　1989　『伊達市の環境』　伊達市
田村俊之編　1985　『末広遺跡における考古学的調査（続）』千歳市文化財調査報告書XI
田原良信・前田正憲　1982　『高丘町遺跡発掘調査報告書』　函館市教育委員会

椿坂恭代　1989　『フローテーションの方法』　PROJECT SEEDS NEWS No.1
長沼　孝編　1982　『史跡白老仙台藩陣屋跡Ⅰ』　白老町教育委員会
名取武光・峰山　巌　1953　「貝殻文様のある円筒形土器」『歴史家』2
名取武光・峰山　巌　1954　『伊達町北黄金遺跡の発掘報告』（単）
名取武光・峰山　巌　1957　「若生貝塚発掘報告」『北方文化研究報告』第12輯
名取武光・峰山　巌　1958　「入江貝塚」『北方文化研究報告』第13輯
名取武光・峰山　巌　1963　「茶呑場遺跡」『北方文化研究報告』第18輯
根本直樹　1985　「火山灰を視点とする擦文式土器編年の一試案」『北海道考古学』第21輯
野村　崇編　1974　『札苅遺跡』　木古内町教育委員会
長谷川　徹　1986　『有珠善光寺2遺跡』　伊達市教育委員会
福田茂生　1983　「縄文海進後の海退に伴う古有珠湾の変遷について」『伊達の風土』2伊達郷土史研究会
藤田　登　1983　「古銭」『史跡上ノ国勝山館Ⅳ』　上ノ国町教育委員会
藤田　登編　1985　『御幸町』　森町教育委員会
北海道教育委員会　1977　「美々4遺跡」『美沢川流域の遺跡群Ⅰ』
北海道地下資源調査所　1970　『伊達町の地質』伊達町
北海道埋蔵文化財センター編　1981　『社台1遺跡・虎杖浜4遺跡・千歳4遺跡・富岸遺跡』北埋調報第1集
北海道埋蔵文化財センター編　1981　「美々4遺跡」『美沢川流域の遺跡群Ⅳ』北埋調報第3集
北海道埋蔵文化財センター編　1982　「美々8遺跡」『美沢川流域の遺跡群Ⅴ』北埋調報第7集
北海道埋蔵文化財センター編　1982　『虎杖浜3遺跡』　北埋調報第11集
北海道埋蔵文化財センター編　1982　『千歳5遺跡』　北埋調報第12集
北海道埋蔵文化財センター編　1982　『史跡松前藩戸切地陣屋跡』　上磯町教育委員会
北海道埋蔵文化財センター編　1983　『川上B遺跡』　北埋調報第13集
北海道埋蔵文化財センター編　1984　「美々4遺跡」『美沢川流域の遺跡群Ⅶ』北埋調報第14集
北海道埋蔵文化財センター編　1984　『登別市千歳5遺跡』　北埋調報第21集
北海道埋蔵文化財センター編　1984　『史跡松前藩戸切地陣屋跡』　上磯町教育委員会
北海道埋蔵文化財センター編　1985　『中浜E遺跡』　北埋調報第22集
北海道埋蔵文化財センター編　1986　『札苅遺跡』　北埋調報第34集
北海道埋蔵文化財センター編　1986　「美沢10遺跡」『ペンケナイ川流域の遺跡群Ⅰ』北埋調報第35集
北海道埋蔵文化財センター編　1987　『ママチ遺跡Ⅲ』北埋調報第36集
北海道埋蔵文化財センター編　1987　「美沢11遺跡」『ペンケナイ川流域の遺跡群Ⅱ』北埋調報第44集
北海道埋蔵文化財センター編　1988　『木古内町新道4遺跡』　北埋調報第52集
北海道埋蔵文化財センター編　1990　『谷藤川右岸遺跡』　北埋調報第64集
松崎水穂他　1981　『史跡上ノ国勝山館Ⅱ』　上ノ国町教育委員会
松崎水穂他　1982　『史跡上ノ国勝山館Ⅲ』　上ノ国町教育委員会
松崎水穂他　1983　『史跡上ノ国勝山館Ⅳ』　上ノ国町教育委員会
松崎水穂他　1986　『史跡上ノ国勝山館Ⅶ』　上ノ国町教育委員会
松下　亘他　1974　『西股』　北海道第四紀学会
松谷純一　1989　『中島松5遺跡A地点』　恵庭市教育委員会
町田　洋・新井房夫他　1984　「テフラと日本考古学」『古文化財の自然科学的研究』
三橋公平編　1983　『南有珠6遺跡』　札幌医科大学解剖学第二講座
峰山　巌　1972　「第一編　先史時代」『新稿　伊達町史』
峰山　巌・大島直行　1979　『伊達市の遺跡』　伊達市教育委員会
峰山　巌編　1984　『伊達市南有珠7遺跡発掘調査報告書』　伊達市教育委会
宮　宏明編　1989　『沢町遺跡』　余市町教育委員会
村山正郎・上村不二雄　1955　五万分の一地質図幅説明書『西紋鼈』　北海道開発庁
山田悟郎編　1976　『札苅』　北海道開拓記念館
吉崎昌一・直井孝一・松岡達郎　1979　『聖山』　七飯町教育委員会
渡辺　茂編　1972　『新稿　伊達町史』　三一書房
渡辺　茂　1973　『伊達小史』　北海道出版企画センター

財団法人　北海道埋蔵文化財センター調査報告書　第61集

伊達市　牛舎川右岸遺跡・稀府川遺跡

――北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書――

平成２年３月31日　発行

編集・発行　財団法人北海道埋蔵文化財センター
〒064 札幌市中央区南26条西11丁目
ＴＥＬ（011）561－3131

印　　刷　高速印刷センター
〒006 札幌市手稲区曙2条5丁目2-48
ＴＥＬ（011）683－2231